

大阪市内埋蔵文化財包蔵地  
発掘調査報告書  
(2010)

2012.3

大阪市教育委員会  
(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

## 例　　言

1. 本報告書は平成 22 年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所が各原因者より委託をうけて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所 南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

## 目次

### 北区

本庄東遺跡 B 地点発掘調査 (HH10-1) 報告書	1
中之島蔵屋敷跡発掘調査 (NX10-2) 報告書	11
扇町遺跡発掘調査 (OG10-1) 報告書	29
天神橋遺跡発掘調査 (TJ10-1) 報告書	37
天満本願寺跡発掘調査 (TN10-1) 報告書	47
天満本願寺跡発掘調査 (TN10-2) 報告書	53

### 都島区

友渕遺跡発掘調査 (TV10-1) 報告書	67
-----------------------	----

### 福島区

福島蔵屋敷跡 B 地点発掘調査 (FK10-2) 報告書	73
------------------------------	----

### 中央区

馬喰町遺跡発掘調査 (BR10-1) 報告書	83
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW10-1) 報告書	95
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW10-5) 報告書	117
難波宮跡発掘調査 (NW10-6) 報告書	125
南船場二丁目所在遺跡 B 地点発掘調査 (OJ10-1) 報告書	137
大坂城下町跡発掘調査 (OJ10-2) 報告書	145
大坂城下町跡発掘調査 (OJ10-3) 報告書	155
大坂城跡発掘調査 (OS10-1) 報告書	163
大坂城跡発掘調査 (OS10-5) 報告書	177
大坂城跡発掘調査 (OS10-6) 報告書	187
大坂城跡発掘調査 (OS10-7) 報告書	197
大坂城跡発掘調査 (OS10-8) 報告書	203
大坂城跡発掘調査 (OS10-9) 報告書	211
大坂城跡発掘調査 (OS10-10) 報告書	249
大坂城跡発掘調査 (OS10-11) 報告書	259
大坂城跡発掘調査 (OS10-12) 報告書	265
大坂城跡発掘調査 (OS10-13) 報告書	275

### 西区

土佐堀一丁目所在遺跡発掘調査 (TL10-1) 報告書	283
-----------------------------	-----

### 天王寺区

難波京朱雀大路跡発掘調査 (NS10-1) 報告書	291
伶人町遺跡発掘調査 (RJ10-1) 報告書	297
上本町遺跡発掘調査 (UH10-2) 報告書	305
上本町遺跡発掘調査 (UH10-3) 報告書	311

淀川区	
西中島遺跡 C 地点発掘調査 (WN10-1) 報告書	319
東淀川区	
柴島遺跡 B 地点発掘調査 (KN10-1) 報告書	325
東中島遺跡発掘調査 (NJ10-1) 報告書	335
三宝寺跡伝承地 (SP10-1) 報告書	345
三宝寺跡伝承地 (SP10-2) 報告書	353
旭区	
太子橋遺跡発掘調査 (TH10-1) 報告書	365
鶴見区	
放出東遺跡発掘調査 (HA10-1) 報告書	369
阿倍野区	
阿倍野筋北遺跡 B 地点発掘調査 (AS10-3) 報告書	375
王子町四丁目所在遺跡 (OZ10-1) 報告書	381
天王寺町南遺跡発掘調査 (TG10-1) 報告書	399
住吉区	
南住吉遺跡発掘調査 (MN10-2) 報告書	405
平野区	
加美南遺跡発掘調査 (KM10-1) 報告書	411

北区本庄東二丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(HH10-1)報告書

調査個所 大阪市北区本庄東2丁目3-3  
調査面積 400m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年7月16日～8月11日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

## 1) 調査に至る経緯と経過

本庄東遺跡は新淀川左岸に位置し、上町台地から北へ延びる長柄砂州上に形成されたと考えられている遺跡である。1910(明治43)年完成の新淀川の開削は、当地より下流では旧中津川流域を拡幅するかたちで行われたが、当地周辺は中津川の旧左岸に位置するとみられる。本庄東遺跡はこれまでの調査で、弥生時代から近世に至る遺構・遺物が検出されている。HH97-1次調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の土壙4基、溝1条[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]が、HH01-2次調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭の溝と包含層[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]が見つかった(図1)。また当調査地の北方100m付近には古墳時代中期の家形埴輪が出土した長柄古墳が推定され、その周囲の鶴塚・高塚・小寺塚・大塚などの古墳とともに、古墳群を形成していたとみられている[新修大阪市史編纂委員会1988]。

本調査地は本庄東遺跡に東接する地点に当り、大阪市教育委員会が平成21年8月28日に試掘調査を行ったところ、現地表面下約1.25～1.40mの深さで中世の遺物包含層と遺構面を確認したことから、新発見の遺跡(本庄東遺跡B地点)として本調査を行うこととなった(図2)。市教委と事業者との協議結果を受けて、東西約34.0m、南北11.0～13.0mの調査範囲を設定し、事業者側が現地表面下1.25mまで機械掘削した後、人力により遺構検出を行ながら地層を掘削した。

なお、本報告書では水準値はTP値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと示した。また平面図は、図1が座標北を基準とし、以外は磁北を基準として作成した。

## 2) 調査の結果



図1 調査位置図

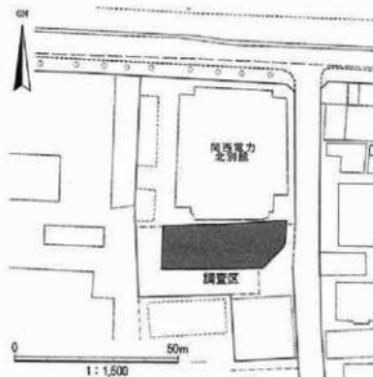


図2 調査区位置図

現石	レンガ基礎撮影 近代土層	第1層
		第2層
		第3層
		第4層 SK47・49・53・54, SE63 小穴群
		第5層

図3 地層と遺構の関係図

### i)層序(図3・4)

第0層：層厚30cm以上の紡績工場撤去後の現代盛土層である。

第1層：層厚10cmの暗オリーブ褐(2.5Y5/3)～黒(10YR2/1)色シルト質粗粒砂の現代作土層である。

第2層：層厚20cmの明褐色(7.5YR7/2)粗粒砂質細粒砂で、レンガなどの近代遺物を含む。上面でレンガ基礎撮影など近代遺構を検出した。白磁製の酒瓶の栓24が出土した。

第3a層：層厚20～30cmのにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒混り粗粒砂質細粒砂の盛土層で、土師器皿20・灯火具21・焰烙22・肥前陶器鉢23が見つかった。

第3b層：中央部にのみ分布する、層厚10～30cmのにぶい黄色(2.5Y6/3)中粒砂質シルトの盛土層で、本層および第3a層からは19世紀前半以前の遺物を含む。肥前磁器丸碗17、京焼風肥前陶器碗18・19、產地不明磁器水滴25が出土した。

第4層：層厚60cmのにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂層で、上部ほど砂の粒子は細かい。土師器の小片を含む。

第5層：層厚30cm以上の黄褐色(10YR5/6)細粒質粗粒砂で遺物を含まない。

### ii)遺構と遺物

#### a. 近世の遺構と遺物(図5～7)

第3層下面および第4層上面で検出した。井戸SE63、鋤溝SD01～12、小穴群、土壙SK47・49・53・54などがある。SK47・49が17世紀末～18世紀前半、54が18世紀後半の遺構である以外は、19世紀前半の遺構と見られる。

SE63 直径1.5m、深さ0.8mの井戸で、褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトを埋土とし、井戸瓦、瀬戸美濃焼磁器、関西系陶器が出土した。19世紀前半の井戸である。

SD01～07・12 東西方向の鋤溝で、ほぼ正方位である。幅0.1～0.2m、深さ0.1mで、第3a層ないしは第3b層を埋土とする。

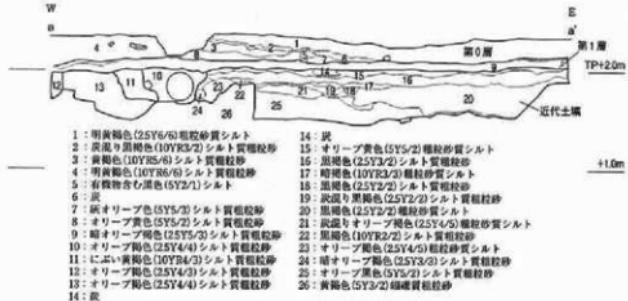
SD08～11 南北方向の鋤溝で、SD09～11は北で20度ほど西に振る。幅10～20cm、深さ0.1mを測る。SD09から肥前磁器丸碗1と縁狹陶器火入れ6が検出された。1はコンニャク印判の五弁花を配し、見込み内に「大明年製」の字款をもつ。6は関西系陶器と見られ、糸切り底に突起状の足を3方に付けたと思われる。SD10から土師器皿4と焰烙12が見つかった。12は難波洋三氏編年[難波1992]のD類である。

SK47 直径0.3m、深さ0.3mの円形の土壤で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂質シルトを埋土とする。肥前磁器仏飯器3、丹波焼播鉢8が出土した。17世紀末の廃棄土壤である。

SK49 直径0.5m、深さ0.1mの円形土壤で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトを埋土とする。肥前磁器丸碗2、肥前陶器鉢9、焰烙10・11が出土した。2は高台内に「大明年製」の字款があり、9は三島手である。10は難波編年のD類a1、11はD類に相当する。18世紀前半の廃棄土壤である。

SK53 SK54を切る不整形の椭円形を呈する土壤で、長径1.5m、短径0.5m、深さ0.2mを測り、褐

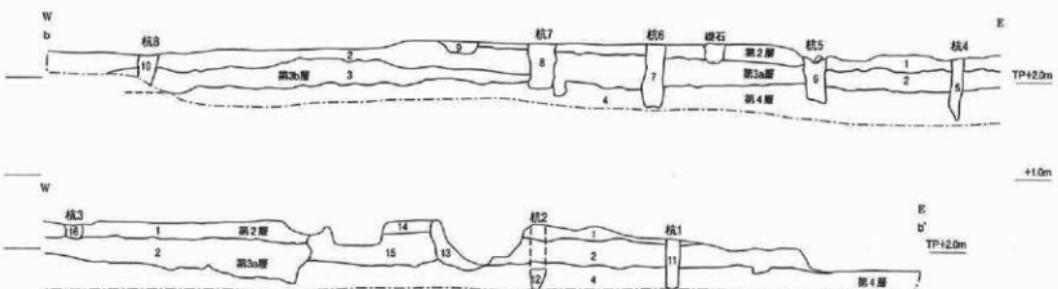
### 近代土壤断面



第0層



南壁断面(写真図版2下)



南側側溝の北壁断面



図4 地層断面図

0 2m  
1:50

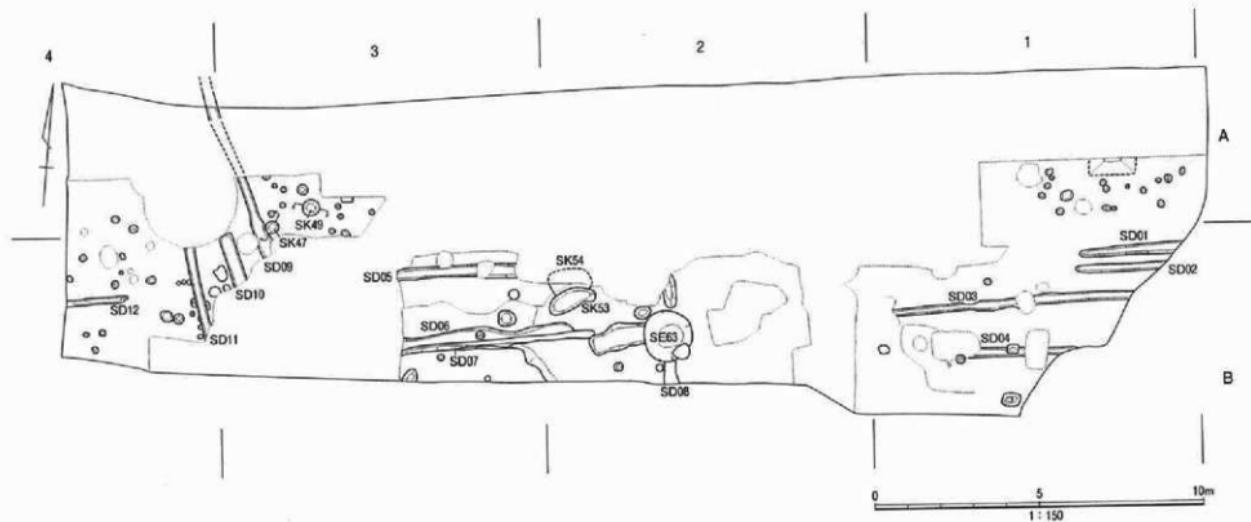


図5 第4層上面および第3層下面平面図

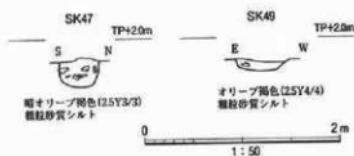


図6 造構断面図

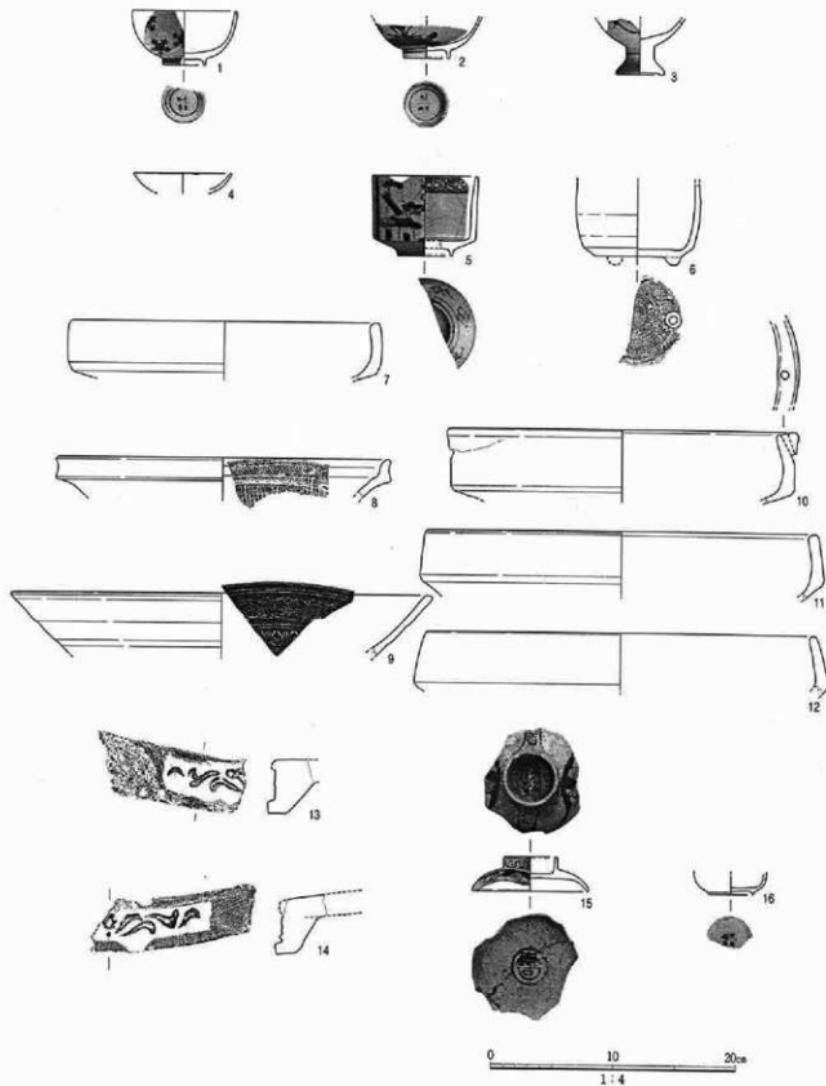


図7 遺構出土遺物実測図(1)  
SD09(1・6)、SK49(2・9・10・11)、SK47(3・8)、SD10(4・12)、SK54(5・7)、  
瓦器(13・14)、近代土壙(15)、レンガ基礎埋形(16)



写真1 近代土壌(a-a')

色(10YR4/4)粗粒砂質シルトを埋土とする。瀬戸美濃焼磁器を検出し、19世紀前半のものと見られる。

SK54 長径1.5m、短径1.0m、深さ0.2mの楕円形を呈する土壌で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂質シルトを埋土とし、肥前磁器筒形碗5、焰塔7が見つかった。7はD類である。18世紀後半の土壌である。

b. 近代の遺構(図7・8、写真1)

いずれも第2層上面で検出した。

瓦窯 長さ1.4m以上、幅1.0m、深さ0.3mの廃棄土壌で、軒桟瓦13・14が出土した。一点珠三葉の中心飾で、左右に唐草を3転させるが、外側の唐草は子葉状を呈する。

近代土壌 直径5.0m、深さ0.5mの土壌で、黒褐色(2.5Y2/2)粗粒砂質シルトなどを埋土とする。埋土が黒いのは廃油が原因である。窯地不明磁器蓋15が出土した。内外面の文字風の文様は「壽」字をデフォルメしたものと思われる。ツマミ内に「□□□製」の文字がある。

レンガ基礎・紡績工場の基礎である。掘形から窯地不明磁器小杯16が見つかった。高台内に「光陶園製」とある。

c. 各層出土の遺物(図9)

第3b層 肥前磁器丸碗17は外面に草花文を、京焼風肥前陶器碗18は見込みに文様と、高台内に「小松吉」の刻印、19は見込み内に文様と、高台内に「清水」の刻印をもつ。窯地不明磁器水滴25は、酒樽を表し、色絵で「銘酒」の額縁を描く。

第3a層 土師器皿20・灯火具21、焰塔22、肥前陶器鉢23の内、21は底面に糸切り痕を見せ、22はD類、23は三島手である。

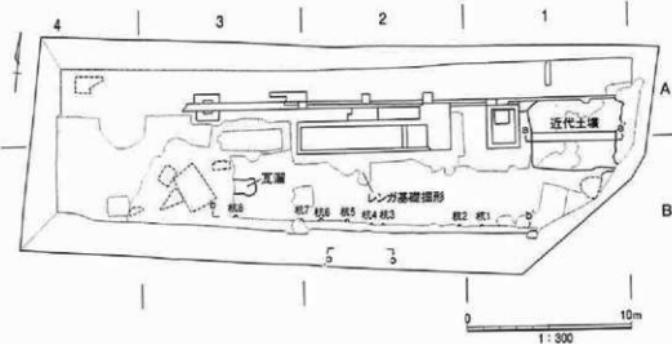


図8 第2層上面平面図

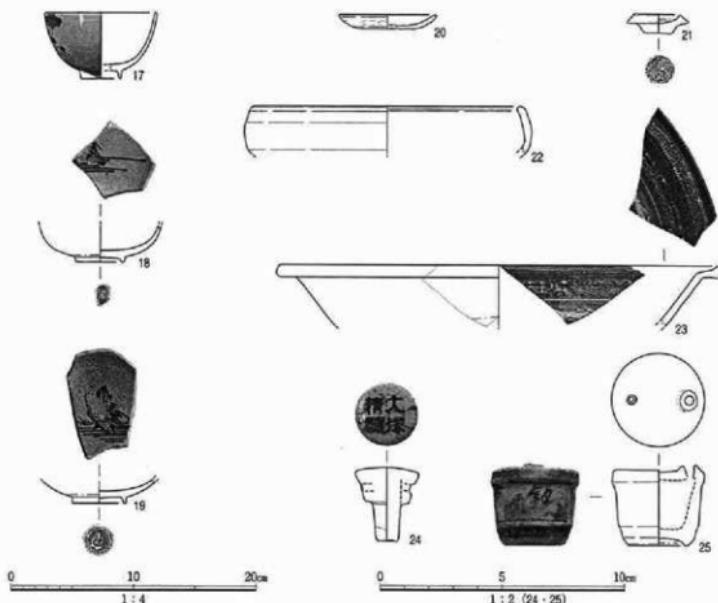


図9 各層出土遺物実測図(2)  
第3b層(17~19・25)、第3a層(20~23)、第2層(24)

第2層 白磁製の酒瓶の栓24は、栓の基部が直径1.2cmと小さいことから、五合瓶のような小瓶に使われたと見られ、頂部に「大塚精酒」と吳須で書き、桐材と思われる栓部を白磁の凹部に挿入し、金属製の女釘を貫通させて留めている。

### 3)まとめ

新淀川左岸の当調査地で、17世紀末～18世紀前半の廃棄土壌と、19世紀と思われる鶴溝を検出した。

当地は江戸時代に大坂市中と豊島郡を結ぶ横閘街道の東方に位置し、中津川(現、新淀川)を渡る「横閘渡し」の南東に当る。17世紀末～18世紀前半の廃棄土壌は、渡し場周辺の賦わいを伝える遺構の可能性がある。

その後、19世紀には鶴溝から見て、耕作地に変化したと思われる。東西方向の鶴溝は正方位に近いのに対して、南北方向の鶴溝は北でやや西に振る方位を見せることは、一筆ごとの耕作地の形状に影響されたものと思われる。

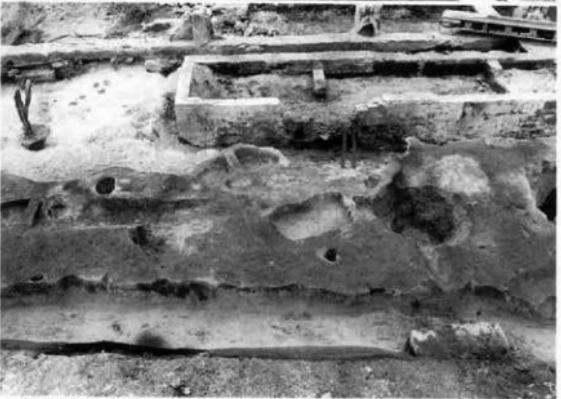
### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「小倉商事(株)による建設工事に伴う確認調査(HH97-1)」:『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.19-27
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「本庄東遺跡発掘調査(HH01-2)報告書」:『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.3-7
- 新修大阪市史編纂委員会1988、「新修大阪市史」第1卷
- 難波洋三1992、「徳川氏大阪城期の炮塔」:大阪市文化財協会編「難波宮址の研究」第九 pp.373-400

調査地全景  
(南東から)



2・3区(南から)



4区(南から)





近代遺構  
(東から)



近代遺構  
(西から)



南壁断面

北区中之島三丁目における建設工事に伴う  
中之島蔵屋敷跡発掘調査(NX10-2)報告書

調査個所 大阪市北区中之島3丁目1  
調査面積 168m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年6月1日～6月14日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

## 1) 調査に至る経緯と経過

北区中之島界隈は、江戸時代には諸藩の大坂蔵屋敷が建ち並んでいた。調査地は鳥取藩32万石の蔵屋敷跡に当り(図1)、過去のNX99-1次調査などで大きな成果を上げている。また西には広島藩・久留米藩が、東には福岡藩が蔵屋敷を置いていた。建設工事に先立って、大阪市教育委員会が試掘調査を行った結果、蔵屋敷の遺構面が良好に遺存していたことから、本調査を実施した。調査は事業者側がGL-1.5mまで床掘りするのを待って開始した。当初南北12m×東西14mの面積が設定されたが、東側は旧建物の地下施設掘形に当り、西半は搅乱土にケミカル・コンクリートを混入して土壤改良されていたので、まず周囲に試掘溝を掘り、搅乱が1.0m以深まで及んでいる西半は試掘溝調査のみに止め東半で調査を実施した(図2)。調査は全て人力掘削によって行った。鳥取藩「大坂御屋敷図」(鳥取県立博物館所蔵、18世紀、年次不明、図3)に調査区をはじめむと、不淨御門の南側の屋敷建物に調査区東半がかかる可能性があった。

本報告書では、図1は座標北を基準に、それ以外の挿図は磁北を基準に作成した。水準値はTP値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mと示した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図4・5)

第0層：近現代の盛土層である。

第1層：層厚15~40cmの灰色(5Y4/1)シルト質粗粒砂の整地層である。瀬戸美濃焼磁器染付蓋25が出土した。19世紀中葉の造成と考えられる。

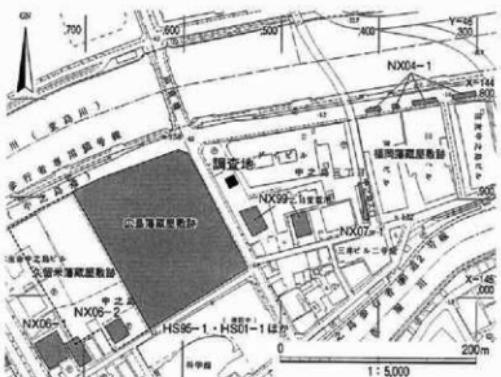


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

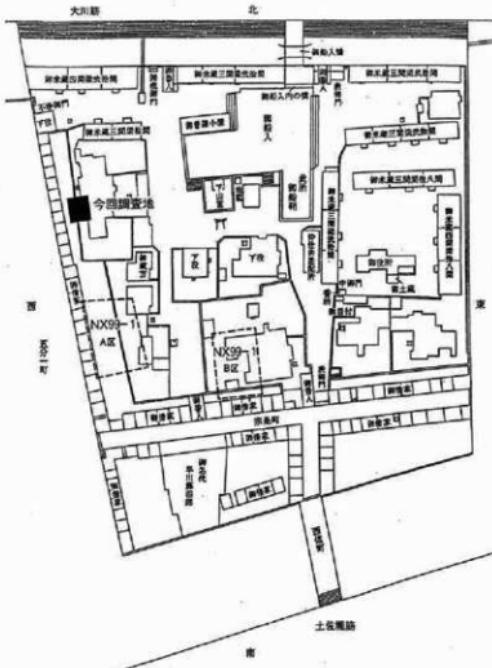


図3 鳥取藩大坂藏屋敷図

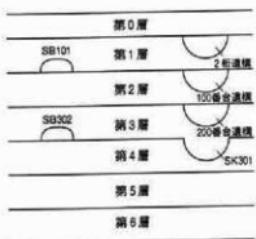


図4 地層と遺構の関係図

能性がある。

SB302 南部で検出した3個の礫石は、天端が西からTP-1.08m、TP-1.08m、TP-1.07mとは  
前面が無い。其々間は1.3mである。第4層上面に礫石建物があったことは確実である。

### 第3層上面清標(図7・8)

SR204 直径0.3m、深さ0.15mの小穴で、オリーブ褐色砂質シルトを埋土とする。

第2層：層厚10~35cmの黄灰色(2.5Y4/1)粗粒沙質シルトの整地層である。肥前磁器焼付皿6、難波洋三氏編年[難波1992]のD類の焰烙7が出土した。18世紀中葉の造成と考えられる。

第3層：層厚20~40cmの黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂の整地層で、調査区北半の大土壌SK301は本層で埋められる。肥前陶器折縁皿2、肥前磁器小杯3、軒丸瓦4、軒平瓦5が出土した。17世紀後半の造成の可能性がある。

第4層：層厚80~90cmのオリーブ黒色(5Y2/2)粗粒砂の整地層で、軟質施釉陶器の合子1が見つかった。

第5層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫質粗粒砂の自然堆積層である。

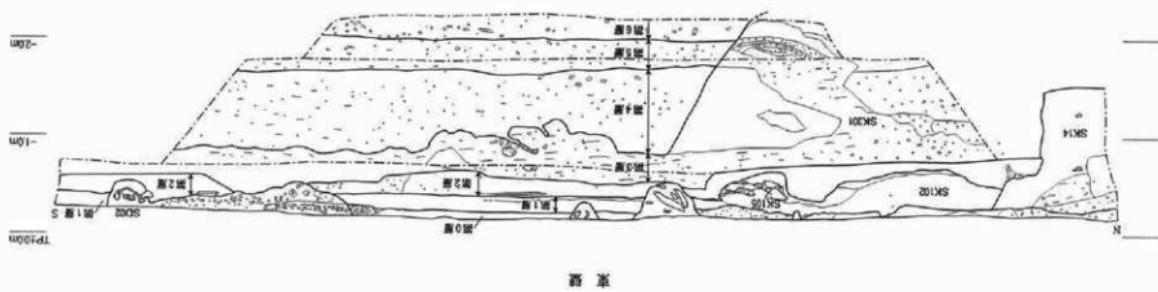
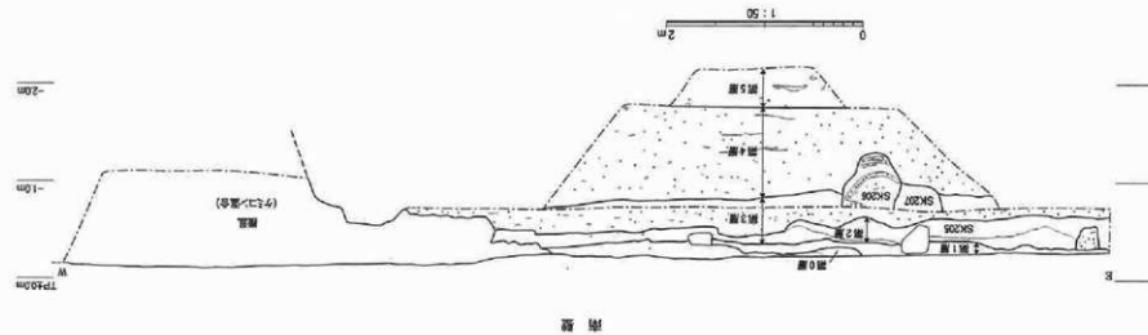
第6層：にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒～中粒砂の自然堆積層である。

## ii) 遺構と遺物(図6~18)

#### 第4層上面遺構(図6)

SK301 調査区北半に位置する大土塊で、一辺は5m以上、深さは1.7m以上あり、下部はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粗粒砂、上部は褐色(10YR4/4)のシルト偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂など、第3層の整地土で埋没する。最下部にシルト質粗粒砂のラミナが見えることから、流路の一部であった可

图 5 水深·海底地层剖面图



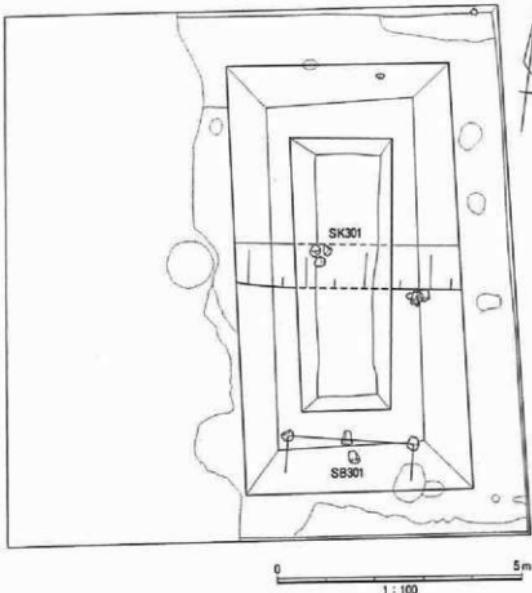


図6 第4層上面造構平面図

- SP208 直径0.1m、深さ0.1mの小穴で、オリーブ褐色砂質シルトを埋土とする。
- SP209 長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.15mの小穴である。
- SK203 長径4.6m、短径2.0m以上、深さ1.0mのオリーブ褐色砂質シルトを埋土とする土壙である。
- SK205 南端で検出された長さ5.0m、深さ0.3mの土壙で、第2層土で埋まる。
- SK206 長径0.8m、短径0.6m、深さ0.6mの黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質シルトを埋土とする土壙で、SK207に切られる。
- SK207 直径0.4m、深さ0.3mの灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質粗粒砂を埋土とする土壙である。
- SK210 長径0.5m、短径0.3m、深さ0.2mの土壙で、オリーブ褐色砂質シルトを埋土とする。
- SK211 長径0.5m、短径0.3m、深さ0.2mの土壙で、オリーブ褐色砂質シルトを埋土とする。
- SK212 長径0.6m、短径0.4m、深さ0.3mの土壙で、オリーブ褐色砂質シルトを埋土とする。
- SK214 直径0.3m、深さ0.15mのにおい黄褐色細礫質粗粒砂を埋土とする小穴である。
- これら小穴や小土壙は枕跡の可能性がある。
- 第2層上面造構(図8・9・11・13)
- SB101 南端で検出された礎石建物で、芯々間は2.2mを測る。
- 竈C 南に開口する直径0.9mの円形の竈で、壁は平瓦の破片と粘土を交互に積んで築いている。床面は焼けで0.2mの深さまで赤褐色に変色している。

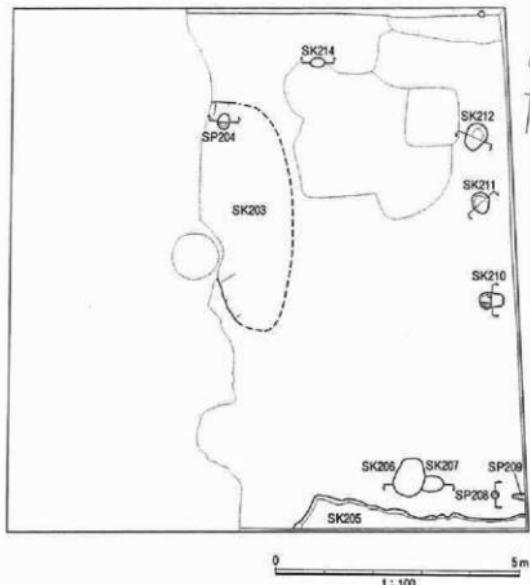


図7 第3層上面遺構平面図

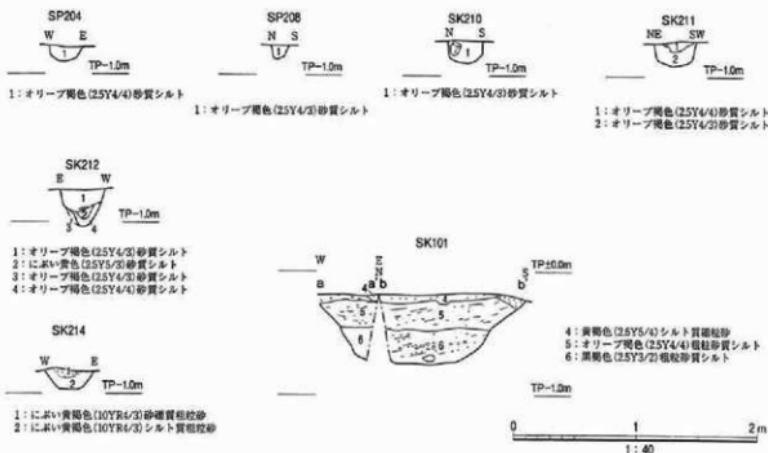


図8 遺構断面図

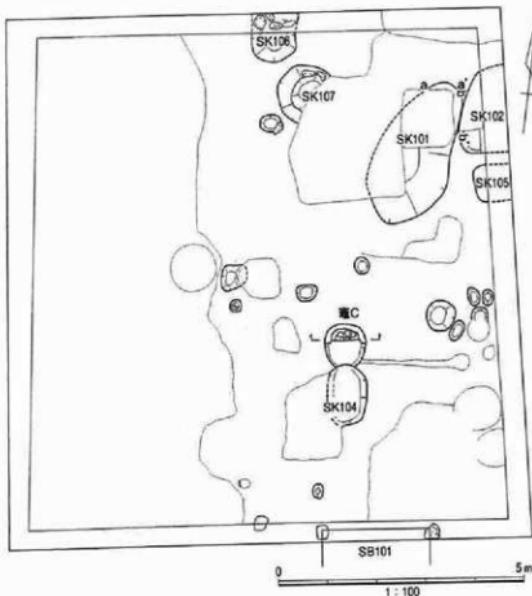


図9 第2層上面遺構平面図

SK104 長径1.3m、短径0.8m、深さ0.25mの平面が梢円形を呈する土壙で炭・灰が詰まっていたことから、窓Cの焚き口と考えられる

SK101 SK01に切られた南北3.0m、東西1.5m、深さ0.6mの平面が梢円形を呈するゴミ穴で、関西系陶器醤油差し14、同蓋20、同土瓶21、関西系磁器徳利15、オランダ・マーストリヒト製の徳利16、清朝青花鉢17、同散蓮華19、銅製スプーン18が出土した。19世紀後半の土壙である。

SK102 直径1.8m、深さ0.3mの第1層の整地土で埋まる土壙で、土師器皿8~12、肥前磁器染付鉢13が見つかった。

SK105 長さ2.0m以上、幅0.7m、深さ0.3mの割石を埋めた土壙で、第1層の整地土で埋まる。

SK106 北端の直径0.8m、深さ0.2mの多数の石を埋めた土壙で、軒平瓦22を検出した。

SK107 直径1.2m、深さ0.5mの土壙を掘り、甃を据えた埋甃遺構である。

第1層上面遺構(図10・11)

窓A 南西に向って開口する窓で、窓壁の土台として刻印をもたない煉瓦をコ字形に並べている。窓き口に羽目瓦44を使っている。44は端部に2個の釘穴をもつことから、塀などに使ったものを転用したことは間違いない。

窓B 西に向開口する窓で、やはり窓壁の土台に煉瓦を、窓床に羽目瓦を使っている。

SK07 窓A・Bの窓き口前の作業場で、窓A・Bとともに埋められる。ワイン瓶などのガラス瓶の

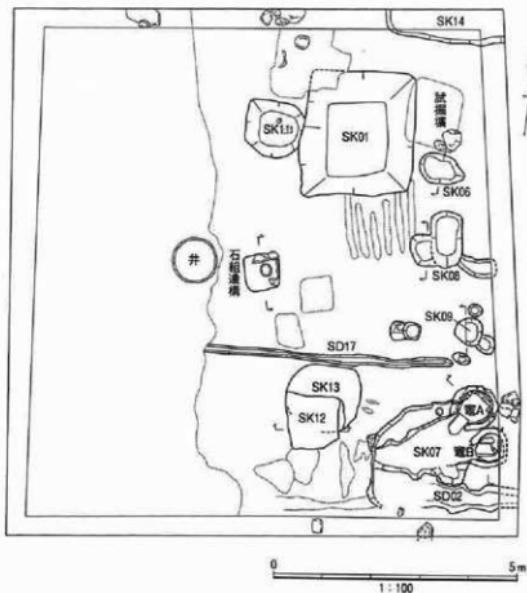


図10 第1層上面遺構平面図

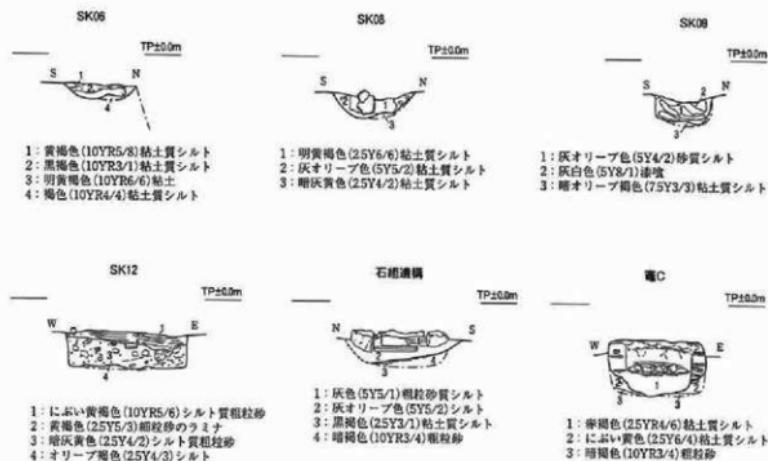


図11 遺構断面図

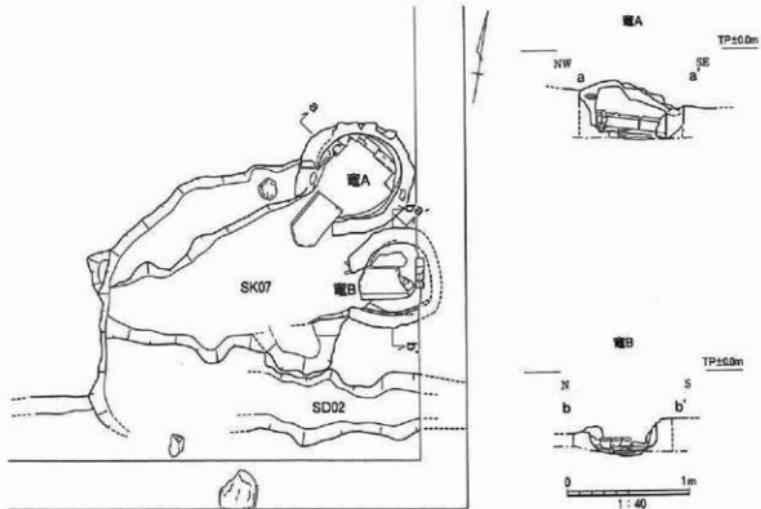


図12 SK07平面断面図

破片や数個体にのぼる43のような焼酎瓶のほか、瀬戸美濃焼磁器染付小碗26・27・29、同染付碗32(大原15号窯[瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター-2007])、同白磁皿33、肥前焼器染付碗28、同火入31、清朝青花小杯30、同大皿42、関西系陶器土鍋蓋34、同鍋35、同土瓶38、同土瓶39・40、オランダ・マーストリヒト製の徳利36、「丹波橋」裏面に「宇治伊」銘をもつ鉄釉徳利37、表面を刺突で施し、見込みに墨書きをもつ土師器杯41、焼酎瓶43が出土した。オランダ製徳利36、清朝青花大皿42など優品が見られるのが特徴である。碗32を製造した大原15号窯は明治初期から同20年までの操業である。本土焼埋土はSD02に切られる。

**石組造構** 一辺1.0m、深さ0.2mの土壙に灰オリーブ色シルトを詰め、一辺0.5mの方形の空間を作るよう間に知石を向い合せに2列並べ、東側を奥にして羽目瓦を立て、床面にも羽目瓦を敷いている。床面には厚さ0.1mの灰色粗粒砂質シルトが堆積していた。羽目瓦を用いることから、竈A・Bと同時期のものと考えられる。

**SD02** SK07の埋土を切る、幅0.4mの掘形をもつ土管を用いた東西溝で、近代に廃棄されている。

**SD17** 幅0.2m、長さ5.2m以上の東西溝である。

**SK01** 南北2.5m、東西2.2m、深さ1.0mの廃棄土壙で、煉瓦・碍子・ガラス瓶などを埋めていた。刻印をもつ煉瓦(図16、表1)や、煉瓦にモルタルを塗り、花柄タイルを5枚配した建築部材45や、神戸屋パンの円形琺瑯びき看板46が出土した。煉瓦は目地に漆喰など粘土質土を用いる明治期の様相を示し、45の花柄タイルはチューブライニング・タイル(輪郭線を盛り上げ、釉薬が混ざらないよう工夫したもの)で、大正末期から昭和初期の生産と考えられる(註1)ことから、本土壙は大正14(1925)年に竣工する大阪ビルディング本館建設時に廃材整理のため、掘られた可能性がある。看板46は表裏

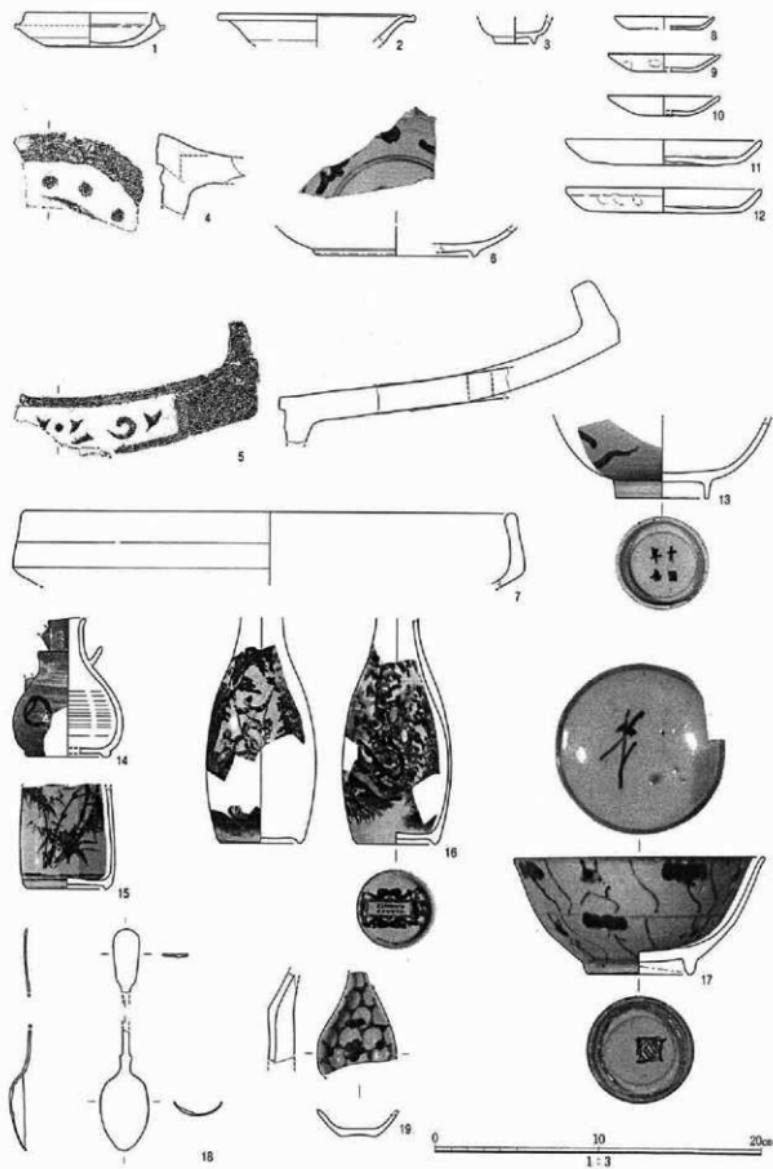


图13 出土遗物实测图(1)

第4层(1)、第3层(2~5)、第2层(6~7)、SK102(8~13)、SK101(14~19)

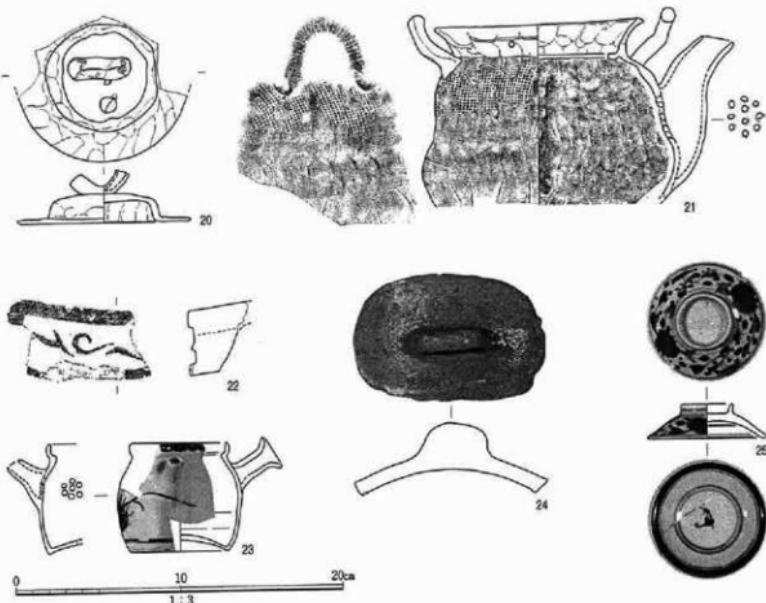


図14 出土遺物実測図(2)

SK101(20・21)、SK106(22)、SK09(23・24)、第1層(25)

に「KOBEYA 神戸パン BAKERY」と同じ文字があり、現在、「神戸屋」のものである。同社の社史によると大正7(1918)年、北方数百mの出入橋で「神戸屋合資会社」として操業を始めたということである。近辺のオフィス街である中之島に、神戸屋が店舗をもっていた可能性は考えられよう。刻印煉瓦の多くは、広端面の表裏に刻印するが、煉1は大阪興業株式会社の「OとY」を組み合わせた商標で、煉2は岸和田煉瓦株式会社の「十字架」である。

SK06 長径1.0m、短径0.7m、深さ0.15mの土壤で、粘土質土が詰まっている。

SK08 く字形を呈する幅0.6m、深さ0.2mの土壤で、中央に明黄褐色粘土質シルトが詰まっている。

SK09 直径0.5m、深さ0.2mのぼば垂直に掘り込まれ、漆喰などが充填されている。関西系磁器急須23と焜炉掻き出し口の蓋24が見つかった。

SK11 直径1.2m、深さ0.15mの土壤で、炭を含む灰色(5Y5/1)中粒砂を埋土とする。

SK12 一辺1.0m、深さ0.3mの平面が方形を呈する土壤で、垂直に掘り込まれ、埋土下部は人為的に埋められるが、上部にラミナが観察され、上部は水漬きであった可能性がある。

SK13 直径1.5m、深さ0.2mの土壤で、灰色(5Y5/1)シルトを埋土とし、SK12に切られる。

SK14 東北隅で検出した、東西2.5m以上、南北1.3m以上、深さ1.3mの土壤で、オリーブ黒色(5Y3/2)中粒砂質シルトなどを埋土とする。

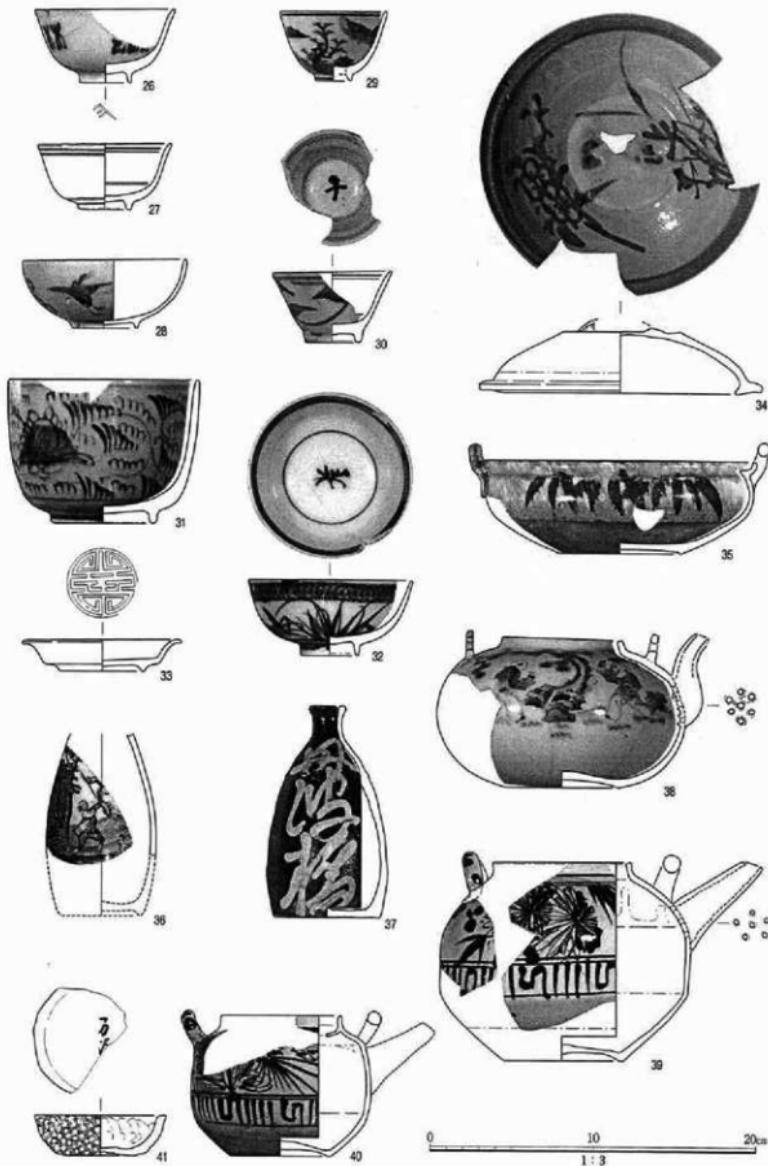
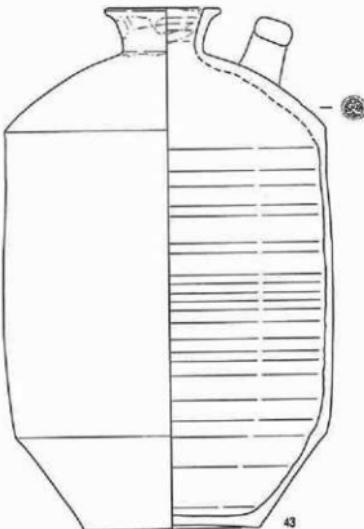


図15 出土遺物実測図(3)

SK07と陝A・B(26~41)



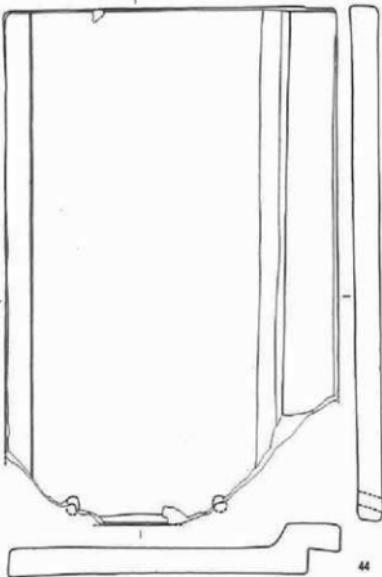
42



43



0 10 20cm  
1:4



44

図16 出土遺物実測図(4)

SK07と竈A・B (42~44)

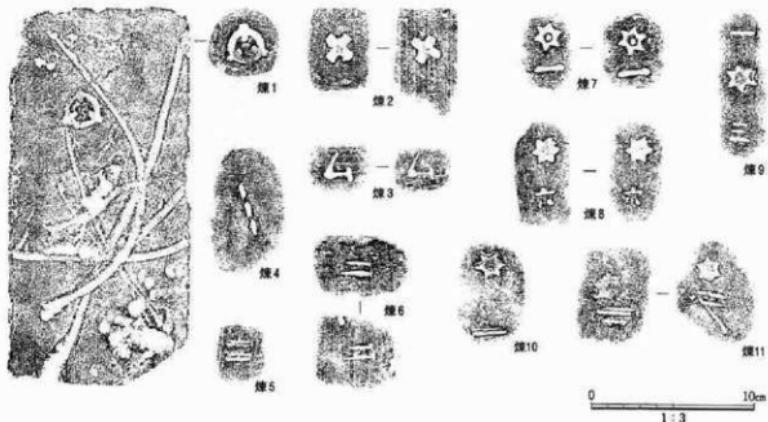


図17 SK01出土煉瓦の刻印

表1 SK01出土煉瓦の刻印

	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
煉1	23.3	11.1	6.0	大阪窯業株式会社製
煉2	23.0	11.0	6.1	岸和田焼瓦株式会社製
煉3	22.9	11.1	5.9	「ム」か?
煉4	—	11.6	5.0	
煉5	—	11.2	6.0	
煉6	22.5	10.7	5.7	裏面とも縁邊際に刻印
煉7	23.4	11.3	6.1	六稜星に一
煉8	22.6	11.2	5.8	六稜星に六
煉9	23.1	11.3	6.3	六稜星に一と三、裏面も同じ刻印
煉10	22.5	10.9	6.0	六稜星に一
煉11	23.4	11.2	5.8	六稜星に二
煉12	22.7	11.1	6.0	「— —」の刻印
煉13	—	10.5	5.2	「— —」の刻印
煉14	—	11.1	6.1	煉6と同じ刻印

### iii) 各面の年代と特徴的な遺物について

南側のNX99-1次調査では、蔵敷の初現期を17世紀前半とした。第4層上面がそれに当る可能性もあるが、遺物が少なかったので断定は避けたい。第3層は肥前陶器折縁皿2や糸切り細工の肥前磁器小杯3や、復元珠文数12個の軒丸瓦4、右側に水返しの縫接が付く軒平瓦5が出土し、17世紀代に収まるものと考えられる。第3層上面では杭跡と思われる小穴や小土壙が多く検出された。第2層の肥前磁器染付皿6には砂目痕など古い特徴が見られるが、焙烙は難波編年[難波1992]のD類で18世紀前半のものであろう。18世紀中葉頃の造成と考えたい。第1層は瀬戸美濃焼磁器染付蓋25が出土し、19世紀中葉の幕末期の造成の可能性がある。当地ではこの第1層上・下面で遺構が集中し、SK101とSK07で、オランダ・マーストリヒト製の同じ絵柄の徳利16・36が出土した。

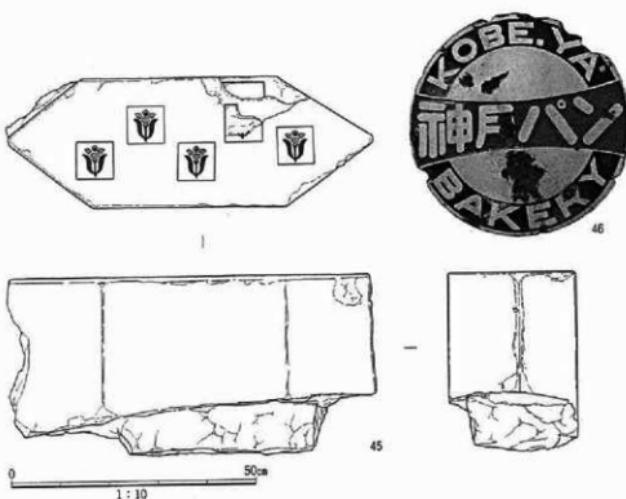


図18 SK01出土建築部材および神戸屋パン看板

この徳利はマーストリヒトのペトゥルス・レグゥー窯(PRはその略称)製で、「FISHINGSPORTS (フィッシング・スポーツ)」というパターンで、1850~70年の製作である。オランダ的な魚の静物画と、反対面はプランコのあるロココ的な風俗画で、イギリス製のデザインの銅原版をペトゥルス・レグゥー窯が購入し、「オランダ焼徳利」として、マーストリヒトでプリントウェア(銅版転写絵付け)の陶器を作成したものである(註2)。徳利の形状は日本のものなので、日本からの注文品の可能性が高い。製作時期が1850~70年に限られるから、オランダ船で長崎に、安政・万延・文久・元治年間(1854~1864年)に輸入されたものであろう。

今回、第2層上面のSK01でオランダ・マーストリヒト製徳利16が見つかり、同じ面には竈Cがあり、第1層上面の竈A・Bとは至近距離であることから、第1層の造成は同じ蔵屋敷時代の部分的な改変とも考えられる。しかし一方、第1層上面の石組構造や竈A・Bでは羽目瓦の転用が見られ、蔵屋敷の塀や門などを解体して、転用材が多く発生していた状況が読み取れなくもない。

竈Cと竈A・Bの構造の決定的な違いは、後者の煉瓦使用にある。大坂での煉瓦製造はかなり早く、「近来年代記」(註3)によると、明治3(1870)年に御城場鴻町で製造を開始している。堺藩置県(明治4年)の前年である。鳥取藩蔵屋敷がいつまで機能していたかの追及は今後の課題であるが、明治に入ってしばらくは、以前と同様に運営されていた可能性も考えられる。第2層上面の竈C・SK01と、第1層上面の竈A・B・SK07は、オランダ・マーストリヒト製徳利という共通する遺物をもち、SK07にはその他にも舶來の優品が見られ、蔵屋敷でなくとも単なる町屋ではない御屋敷と思われる。今後、当地の明治初期における変遷を考える材料となろう。

### 3)まとめ

今回の調査は部分的とはいえ、鳥取藩蔵屋敷の実態を明らかにすることができた。特に幕末から明治初期に該当する竈A・Bとその作業場であるSK07からの出土遺物は優品が見られるなど多形な内容である。蔵屋敷廃絶時期や明治初期の当地の変遷の探求は、これから課題となろう。

### 註

- 1)大阪歴史博物館 酒井一光氏のご教示による。
- 2)神戸市立博物館 岡泰正氏のご教示による。
- 3)『近来年代記』[大阪市資料調査会1980]によると、明治3(1870)年8月頃より御城塙鴻町南方で早くも煉瓦を焼いている。「異国渡りのト石の如き瓦を赤く焼いて、土蔵等築立に相成なり」と記されているから、大阪市中への煉瓦の普及はすこぶる早かった可能性がある。

### 参考文献

大阪市資料調査会1980、『近来年代記』上

難波洋三1992、「徳川氏大阪城期の炮塔」：大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第九

瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2007、「難波出土の“近代陶磁”－瀬戸・美濃窯の近代1－」

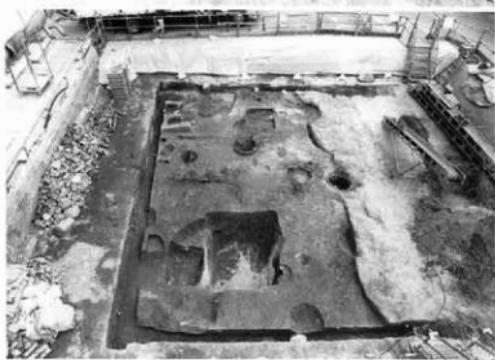
調査最終面  
(東から)



SK206・207  
(東から)



第2層上面  
(東から)



第1層上面(東から)



竈とSK07(北から)



石組造構(西から)



北区扇町二丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(OG10-1)報告書

調査個所 大阪市北区扇町2丁目75  
調査面積 224m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年5月6日～5月17日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、大庭重信

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、淀川によって形成された三角州上に立地し、北側には中崎町遺跡、北西側には茶屋町遺跡、南西側には安曇寺跡推定地がそれぞれ隣接している(図1)。茶屋町遺跡(CH08-1 次調査)で行った花粉・珪藻分析、放射性炭素年代測定や、貝化石の産状などから、紀元前後の頃の周辺一帯は淀川河口付近の干潟前線の潮下帶であり、その後に淀川の氾濫によって土砂が供給され、古墳時代には陸化していたことが判明した[大阪市文化財協会2009]。一帯が陸化した後の地層からは、古墳時代中期の遺物が出土しており、この頃から人間活動が推定されるが、開発が本格化する考古学的証拠は中世前半であり、今回調査地の南西約400mの安曇寺跡推定地(AZ05-1 次調査)では、13世紀代の遺構・遺物が多く検出されている[大阪市文化財協会2006]。

当該地で大阪市教育委員会が試掘調査を行った結果、地表下約1.5mで中世に相当する地層が確認された。この結果を受け、敷地内西北部の南北28m、東西8mの範囲で調査を実施した(図2)。調査は、約1.5mまでの地層を重機で除去した後、人力による掘り下げを行い、遺構の検出作業を進めた。調査区の南半および北東部は近現代の擾乱が深く及んでおり、平面調査は調査区西北部に限定して行った。

本報告で用いた水準値はTP値(東京湾平均水面値)で、図中ではTPと省略した。また、図1は真北を、図2は座標北、図6は磁北を基準にしている。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

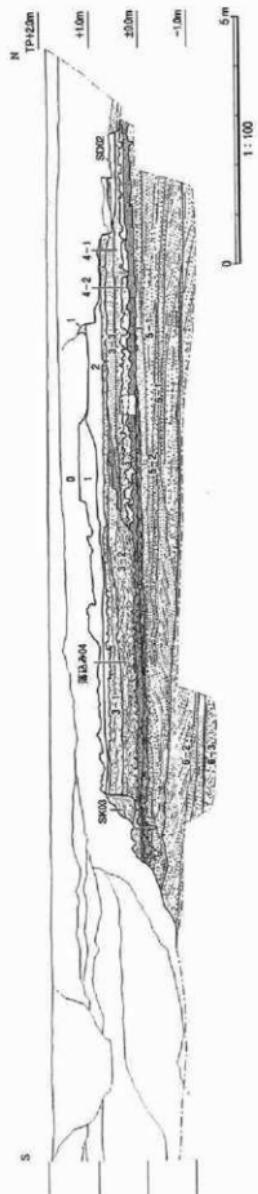
現地表下3.4mまでの地層を第0～6層に区分し、第3層以下の地層をさらに細分した(図3・4)。



図1 調査位置図



図2 調査区位置図



各層の層相の特徴は以下のとおりである。

第0層：近・現代の建物基礎埋土および盛土層である。層厚は調査区北半で60cm、南半で250cm以上あった。

第1層：19世紀以降の盛土層で、にじむ黄色粗粒砂～礫からなる。調査区西壁でのみ確認し、層厚は最大で30cmであった。

第2層：18・19世紀代の盛土層で、暗オリーブ褐色シルト質中粒～粗粒砂からなり、炭粒を多く含む。調査区西壁でのみ確認し、層厚は60cmであった。本層上面から掘り込まれたと考えられる遺構として、18・19世紀代の遺物を含むSK01・03を検出した。

第3層：中世後半の水成層およびこれを母材とした作土層および古土壤で、第3-1層～第3-3層の3セットが確認できる。

第3-1層は、下半が暗オリーブ褐色シルト質細粒～中粒砂、上半が暗灰黄色シルト質中粒～粗粒砂からなる。下半にはラミナ構造が一部残り、上半ほど耕作による搅拌が進んでいる。上半には炭酸第一鉄のノジュールが多く認められ、本層が排水不良な水田作土であったことを窺わせる。落込み04内で厚く、層厚は最大で30cmであった。

第3-2層は、下半が灰オリーブ色細粒～粗粒砂、上半が黒褐色粗粒砂～礫混りシルト質細粒砂からなる。下半はラミナ構造が残るが、踏込みによる乱れが顕著であり、上半は耕作による搅拌が進んでいる。落込み04内にのみ分布し、層厚は最大で30cmであった。14世紀代の常滑焼大甕1が出土した(図5)。

第3-3層は、下半がオリーブ褐色細粒～粗粒砂からなる水成層で、上方細粒化する。上半は暗オリーブ褐色細粒砂からなる古土壤で、落込み04の肩部でのみ確認した。層厚は最大で20cmであった。

第4層：中世前半の作土層で、第4-1層と第4-2層に細分した。

第4-1層は、オリーブ褐色中粒～粗粒砂からなる作土層で、下面是踏込みによる凹凸が顕著である。層厚は10cmであった。第4-2層は、オリーブ黑色礫混りシルト質細粒

～中粒砂からなる作土層で、層厚は10cmあった。第4～1層からは管状土錐2が、第4～2層からは12世紀後半の瓦器碗3・4が出土した(図5)。

第5層：当地域の陸化に伴い形成された湿地性堆積層および古土壤で、第5～1層と第5～2層に細分した。

第5～1層は有機質に富む黒色泥炭混りシルト質細～中粒砂からなる古土壤で、層厚は10cmあった。本層からは古墳時代中・後期と考えられる須恵器壺・土師器の小片および軽石が出土した。第5～2層は有機質に富むオリーブ色シルト質中粒砂からなり、

灰色中粒～粗粒砂、有機質シルトの薄層を挟む湿地性堆積層である。地形的に低い南半に分

布し、層厚は10cmあった。第5～1層と第5～2層の境界では、灰色中粒～粗粒砂で充填される浅い凹みが多数確認され、平面では凹み同士に重複がなく、アメーバ状に分布する(図版)。第5～2層が分布しない北半でも第5～1層の下面が同様の凹凸をなすことから、この凹み群は地震の影響で生じた荷重痕であろう。

第6層：当地域が陸化する以前に堆積した河成層で、第6～1層～第6～3層に細分した。

第6～1層は灰オリーブ色中粒砂～礫からなり、層厚は40～100cmあり、北側で厚い。本層内から弥生時代中期後半の壺もしくは壺の底部5が出土した(図5)。

第6～2層は灰黄色粗粒砂～礫からなり、層厚は80cmあった。ブラナー型の斜交層理が発達し、古流向は南から北方向である。

第6～3層はにぼい黄褐色粗粒砂～礫からなり、礫は直径1cm以上の亜角礫が目立つ。層厚は20cmまで確認した。

## ii) 遺構

### a. 第4～2層下面遺構(図6右)

調査区北東隅で、北でやや西に振る2本の溝SD05・06を検出した。方向は第3～3層上面の遺構と同じであり、同様に当地の地割に規制されたものであろう。現代の擾乱により上半が削平されいたが、SD05は一部削平を免れて遺存する箇所があり、幅0.4m、深さ0.2mをはかる。第6～1層の砂

地層と遺構	地層の年代
0	近・現代
1	近世
2 SK01	(18・19世紀)
3-1 ·03	中世後半 (14世紀)
落込み04 3-2 3-3 SD02	中世前半 (12世紀)
4-1	古墳時代
4-2 SD05	?
5-1 ·06	弥生時代
5-2	
6-1	
6-2	
6-3	

図4 地層と遺構の関係図

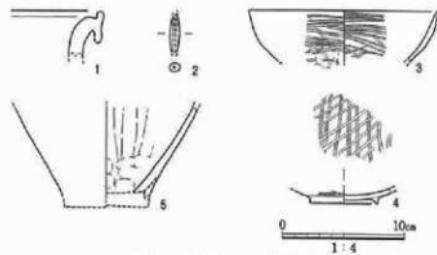


図5 地層出土遺物実測図

第3～2層(1)、第4～1層(2)、第4～2層(3・4)、  
第6～1層(5)

第2層上面および第3-3層上面遺構

第4-2層下面遺構

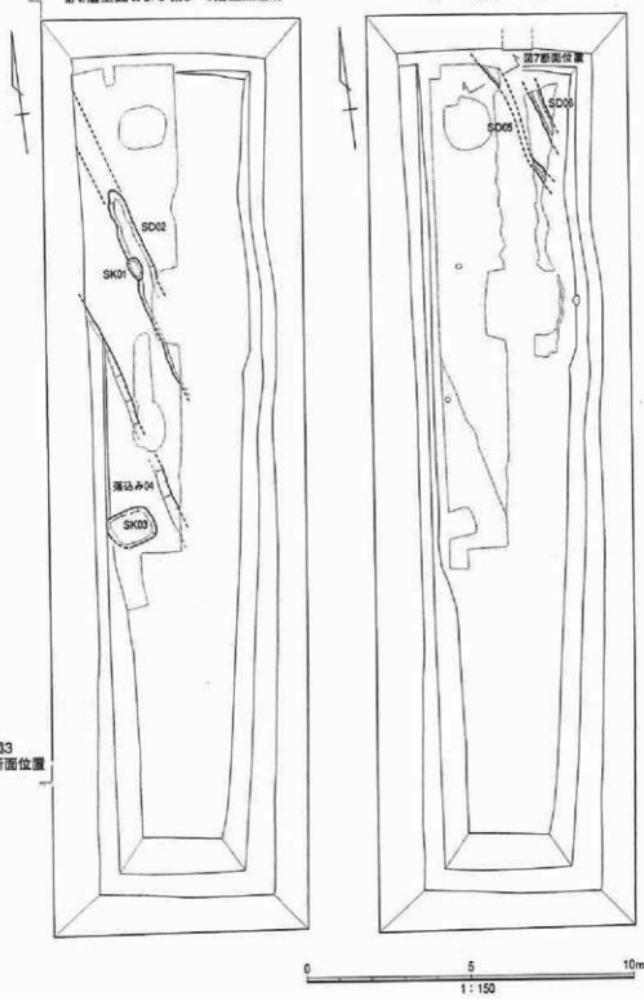


図6 施工2層上面および第3-3層上面遺構平面図(左)、第4-2層下面遺構平面図(右)

層を掘削していたため、溝の下半は細粒～中粒砂層の崩落により短期間で埋り(図7-2～4層)、上半に黒褐色シルト質中粒砂層が堆積していた(同1層)。遺物は出土していない。

b. 第3-3層上面遺構(図6左)

北でやや西に振る方向の溝SD02、およびこれと平行する落込み04を検出した。

SD02は幅0.6m、深さ0.2mをはかる。埋土上半にはシルト～細粒砂が互層で堆積しており、水が流れた跡が確認できることから、水路と考えられる。土師器・備前焼擂鉢の細片が出土した。

落込み04はSD02の西側2.0mで、西側へ一段低くなるものである。東肩はSD02と平行して直線的であり、落込み内には水成層と作土層が反復して堆積していた(第3-1・3-2層)。上述したように、第3-1層は水田作土層と考えられることから、落込み04は西側に低くなる傾斜地に段差を設けて造成された水田の痕跡の可能性がある。SD02はこの水田に伴う水路であろう。

第3-3層上面で検出したSD02および落込み04東肩の北でやや西に振る方向は、前述した第4-2層下面のSD05・06と一致し、また北側の安曇寺跡推定地のAZ05-1次調査で検出された13世紀代の溝群の方向とも一致しており[大阪市文化財協会2006]、調査地周辺の中世の地割に規制されたと考えられる。

#### c. 第2層上面遺構 (図6左)

第2層は調査区西壁付近にのみ遺存しており、本層に伴う遺構は、第4層まで掘り下げて確認したSK01・03の2基の土壙である。

SK01はゴミ穴と考えられる直径0.3mの円形土壙である。19世紀前半代の陶磁器類が出土した。

SK03は長軸1.4m、短軸1.1mの方形土壙で、深さは0.6mあった。18世紀中葉の陶磁器類が出土した。

### 3)まとめ

調査の結果、当地が陸化する過程、および陸化後の人間活動と土地利用の変遷を把握することができた。出土遺物から、12世紀には当地が耕地化され、少なくとも14世紀まで継続していたと考えられる。この時期の遺構はいずれも北でやや西に振る方向であり、AZ05-1次調査で指摘された一帯の中世の地割に規制されていたと考えられる。



図7 SD05断面図

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告2005」：「安曇寺跡推定地発掘調査(AZ05-1)報告書」

大阪市文化財協会2009、「北区茶屋町における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(CH08-1)報告書」

西壁地層断面  
(北東から)



第3-3層上面  
道橋棱出状況  
(北から)



第5-2層上面  
の荷重痕  
(北東から)



北区天満四丁目における建設工事に伴う  
天神橋遺跡発掘調査(TJ10-1)報告書

調査個所 大阪市北区天満4丁目37-1ほか  
調査面積 60m<sup>2</sup>  
調査期間 平成23年3月11日～3月18日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、市川創

## 1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は天神橋遺跡の東部に位置し、西側には大阪天溝宮が鎮座する(図1)。天神橋遺跡は、古代には東大寺新羅江莊あるいは安曇江莊、中世では渡辺津といった、文献史学からその存在が想定される拠点的施設の推定地、あるいは近隣地域である。豊臣期には城下町として整備され、また近世には大阪天溝宮の門前町として発展した。こうした脈わいは、例年行われる天神祭などによってその一端を窺うことができる。各時代における当遺跡の重要性については、これまで文献史学の成果から評価されることが多かったが、TJ00-2次調査[大阪市文化財協会2002]をはじめとする発掘調査成果の蓄積を経て、考古学的手法によってもある程度の評価が可能となっている。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下約2.2mにおいて古代～近世の遺物包含層および造構面の存在を確認したため、発掘調査を実施することになった(図2)。

調査は3月11日より開始し、重機によって後述する第6層まで掘削を行った。その過程で造構を検出したため、必要最低限の記録を行った。その後、第6層以下の掘削はすべて人力によって行い、造構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。現場での作業については、3月18日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告書で使用した方位は、座標北を基準にした。座標についてはGPS測量により求めた。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP±○mと表記する。



図1 調査地位置図

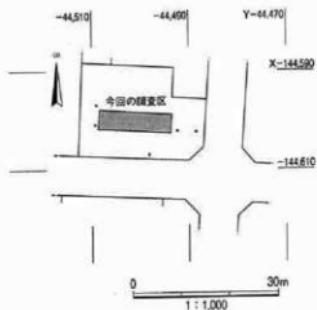


図2 調査区配置図

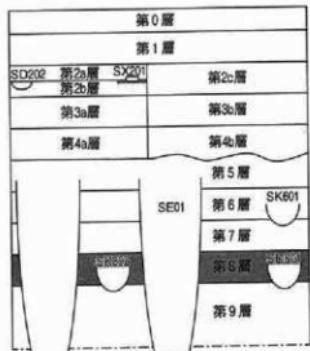


図3 層序と遺構の関係図

## 2)調査の結果

### i)層序(図3・4)

現地表から地表下410cmまでの地層について、第0～9層に区分した。

第0層：現代の盛土層である。層厚は最大84cmである。

第1層：近代以降の盛土層である。層厚は最大で124cmである。

第2層：徳川後期の盛土層である。第2a～2c層に細分した。このうち第2a・2b層は調査区の西半、第2c層は東半に分布する。第2a層はにぶい黄褐色を呈するシルト質砂からなり、焼土を含む。層厚は24cmであった。第2b層は黒褐色を呈するシルト質砂からなり、炭・焼土を多く含んでいた。層厚は40cmであった。第2c層はオリーブ褐色を呈するシルト質砂からなり、炭を含む。

第3層：18世紀の盛土層である。調査区の西半に分布する第3a層、東半に分布する第3b層に細分した。第3a層はにぶい黄褐色を呈するシルト質砂からなり、炭を含む。層厚は16cmである。第3b層は褐色を呈する二次的な焼土層であり、焼土・炭・焼瓦などを多く含む中粒～粗粒砂からなる。層厚は10cmであった。

第4層：18世紀の盛土層である。調査区の西半に分布する第4a層、東半に分布する第4b層に細分した。第4a層はにぶい黄褐色を呈するシルト質砂からなり、炭を含んでいた。層厚は35cmであった。第4b層はオリーブ褐色を

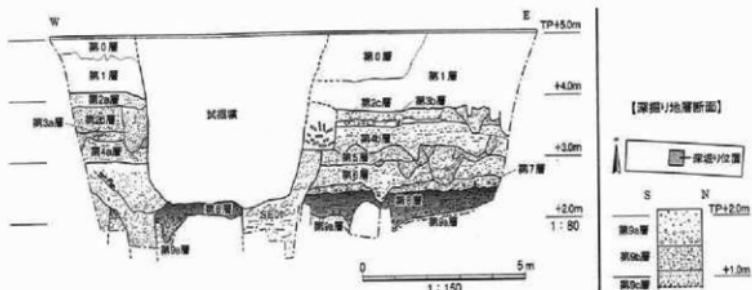


図4 調査区北壁および深掘り地層断面図

呈し、中粒～粗粒砂とシルト質砂とが互層状に堆積する。層厚は最大で62cmであった。本層の上面は赤く焼結しており、火災による被災面である。

第5層：17世紀の盛土層であり、調査区の東半に分布した。褐色を呈するシルト質細粒～中粒砂からなり、炭を含んでいた。層厚は最大で34cmであり、上面では凹凸を断面で確認したが、その性格を確定するには至らなかった。なお、第5～7層については、西半にも相当する地層が存在した可能性が高いが、篠川期の遺構によって破壊され確認できなかった。

第6層：調査区東半に分布する盛土である。オーリーブ褐色を呈するシルト質細粒砂からなり、炭を含む。層厚は最大で40cmであった。本層に伴う遺構として、豊臣期の土壙SK601を検出した。

第7層：調査区の東半に分布する。黒褐色を呈するシルト質中粒～粗粒砂からなり、細礫および第8層の偽礫を含んでいた。層厚は20cmである。分級は悪く、上・下層とも層界は明瞭である。このため作土層である可能性を考えたが、確定できなかった。本層からは中世後期までの遺物が出土した。

第8層：調査区の全域に分布する古土壤である。暗オーリーブ褐色を呈するシルト質中粒～粗粒砂からなり、層厚は36cmであった。12世紀までの遺物が出土した。また本層に伴う遺構として、SD801・SK802～806を検出した。

第9層：調査区の全域に分布する河成層であり、層厚は1.3m以上あった(写真1)。黄褐色を呈し、上位から第9a～9c層に細分した。このうち第9a層は砂礫からなり、ラミナは不明瞭だが、級化構造が認められた。第9b層ではフォアセッタ・ラミナが認められ、古流向を北→南に復元できる。第9c層は細粒砂～中礫からなり、級化構造が認められた。本層から遺物は出土しなかった。

## ii) 遺構と遺物

### a. 古代

第8層の層内において、SD801およびSK802～806を検出した(図5)。

SD801 東西に延びる溝であり、長さ7.8m以上、幅1.1m以上の規模がある。検出範囲が狭く厳密な検討はできないが、方位は西で若干南へ振っている。検出面からの深さは0.4mであった。埋土はシルト質の中粒～粗粒砂であり、細礫を含む(図6)。当遺構からは、土師器・須恵器・黒色土器が出土した(図7)。このうち、1は須恵器杯Bの蓋、2は口縁端部が肥厚する須恵器の鉢である。胎土や形状からみて、篠窯の西長尾5・6号窯段階の製品であろう[石井清司1995]。3は產地不詳の須恵器鉢である。口縁端部は玉縁状に肥厚し、内面はロクロナデが顯著である。4は黒色土器A類の碗である。高台は貼付け面で剥離している。

SK802 調査区の東端で検出した土壙である。楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.7mの規模がある。検出面からの深さは0.5mである。埋土は第9層の偽礫を含むシルト質中粒～粗粒砂が下部にあり、細礫を含む中粒～粗粒砂で埋まる(図6)。遺物は土師器・須恵器・製塩土器が出土した。

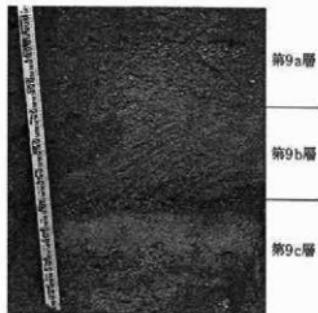


写真1 深掘り地層断面(東から)

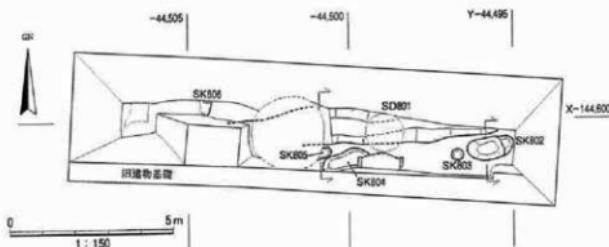


図5 古代の遺構平面図

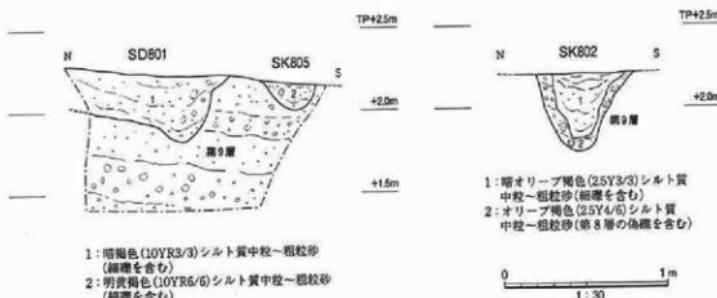


図6 SD801・SK802・805断面図

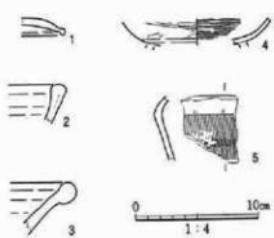


図7 SD801・SK804出土物実測図  
SD801(1~4), SK804(5)

SK803 直径0.3mを測る円形の土壙で、検出面からの深さは0.1mであった。遺物は出土しなかった。

SK804 調査区中央部の南壁際で検出した土壙である。東西は1.5m、南北は0.4m以上の規模である。検出面からの深さは0.1mであった。当遺構からは土師器・須恵器・平瓦が出土した。このうち、5は土師器窯の頭部である(図7)。外面体部の調整は縦方向のハケメ、内面はナデおよびヘラケズリで調整している。また、二次的に被熱している。なお、図示できなかったが、平瓦は凹面に布目を有する。

SK805 調査区の中央部で検出した土壙である。東西0.5m以上、南北0.3mの規模で、検出面からの深さは0.1mであり、埋土は細縫を含むシルト質中粒～粗粒砂である(図6)。遺物は出土しなかった。

SK707 調査区の西部で検出した土壙である。東西0.3m以上、南北0.4m以上の規模がある。遺物は出土しなかった。

以上、第8層に係わる遺構からは、猿島産の須恵器2を下限として8世紀～11世紀前半の資料が出士している。

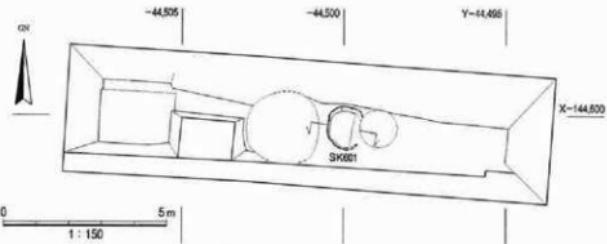


図8 豊臣期の遺構平面図

### b. 豊臣期

重機掘削中に、第6層の層内でSK601を検出した(図8)。本来は第6層の上面に属する遺構であろう。SK601は、直徑1.3m、検出面からの深さ0.3mを測る円形の土壙である。埋土は下部に第8層の偽礎を含むシルト質中粒～粗粒砂があり、炭を含むシルト質中粒～粗粒砂で埋まる(図9)。当遺構からは土器・須恵器・瓦器・中国産磁器・瓦が出土し、このうち青花皿6・7を図示した(図9)。このうち6の口縁は若干内湾し、高台端部は露胎で砂が付着する。また、高台内にはカンナケズリの痕跡が観察できる。7の口縁は外反し、高台端面は露胎である。遺物の量は少ないが、出土遺物の特徴および上・下層との対比から、豊臣期の遺構と考えられる。

### c. 德川期

重機掘削中にSX201・SD202およびSE01・02を検出した。このうちSE01・02は、帰属する層準が明確ではない。

SX201 調査区の西部において、第2b層の上面で検出した。北端はより新しい時期の土壙によって破壊されていたが、粘土質シルトが南北に細長く敷かれ、その上に一辺0.2mほどの石が3個置かれていた。第5層以上では当遺構の位置を境にして盛土や遺構の分布状況が異なっており、当遺構は柵など敷地境の構造物を構成した可能性が高い。なお現代でも、当遺構の延長線上が敷地境となっている。

SD202 南北に延びる溝であり、調査区の西端において第2b層の上面で検出した。長さは1.9m以上、幅は0.4m以上あり、検出面からの深さは0.1mであった。遺物は出土し

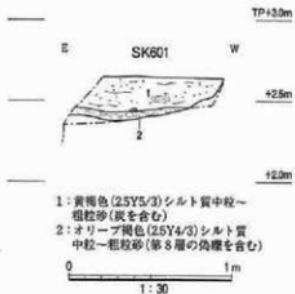


図9 SK601断面図および出土遺物実測図

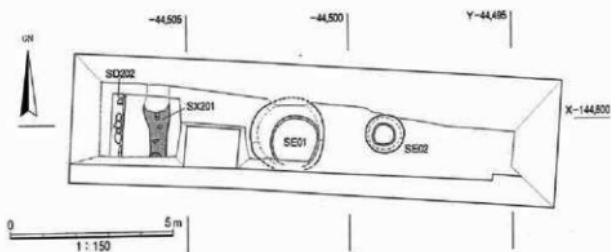


図10 德川期の遺構平面図

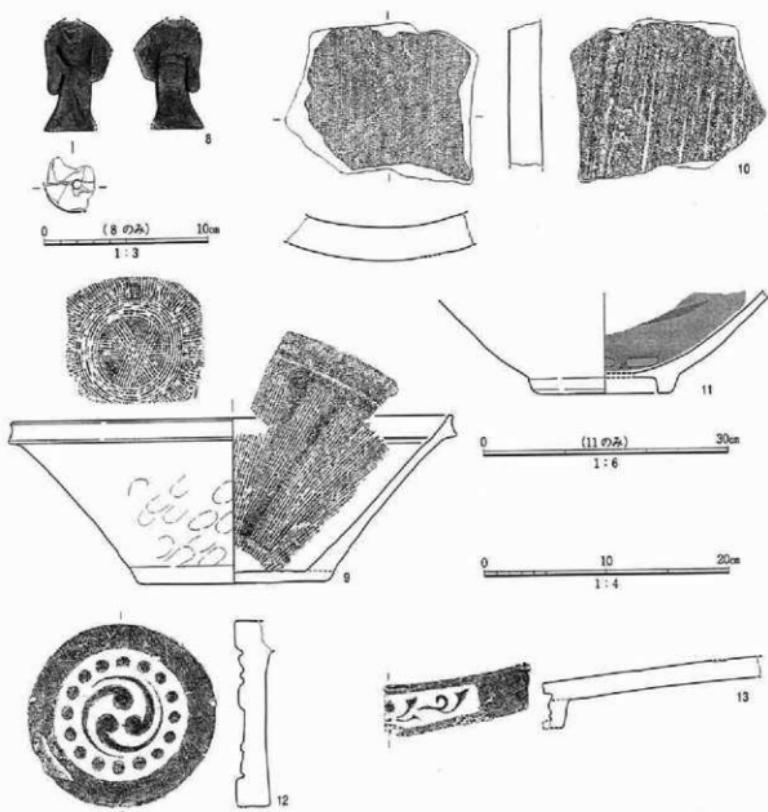


図11 SE01・SE02出土遺物実測図  
SE01井戸側内(8・9)、SE01捲形内(10)、SE02(11~13)

なかつた。

SE01 調査区の中央部で検出した井戸である。掘形の直径は2.3mで、検出面からの深さは2.0m以上ある。井戸側は瓦によって組まれ、直径は0.6mであった。

当遺構の井戸側内部からは、土師質土器・瓦質土器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦など、18世紀を中心とする遺物が出土した。掘形の埋土には、肥前磁器など徳川期の遺物のほか、土師器・黒色土器・瓦質土器・瓦など古代～中世の遺物も含まれた。図11には、このうち土製品8・丹波焼擂鉢9、平瓦10を図示した。8・9は井戸側内から、10は掘形から出土した資料である。8は女性立像で、型合わせによって作られ、表面にはキラ(雲母)が顕著に認められる。底部には直径6mmの穴が開けられている。9は底部内面に重ね焼き痕、底部外面には下駄状の窓道具痕跡を有する。擂目は8本を単位とする櫛状の工具で施されている。また、内面下半では使用による擂目の磨滅が顕著である。年代は17世紀後半であろう。平瓦10は凹面に粗い布目痕、凸面に繩目タタキ痕を有する。また、凹面は二次的に被熱している。本来は古代に属する資料である。

SE02 調査区の東半で検出した井戸である。掘形の直径は1.1mで、検出面からの深さは0.5m以上ある。井戸側は瓦によって組まれ、直径は0.7mであった。当遺構からは、肥前陶器のほか瓦、焼土が出土し、このうち肥前陶器11・軒丸瓦12・軒平瓦13を図示した(図11)。11は肥前陶器の大鉢であり、白化粧の上に鉄絵・銅線釉で文様を描くいわゆる二彩手である。底部内面には6箇所に砂目を残す。軒丸瓦12は左巻きの三つ巴文の周囲に16個の珠文が巡る。軒平瓦13の瓦当文様はいわゆる橘文と唐草文が組み合う、定型化した意匠である。12・13はともに二次的に被熱して赤く変色しており、近隣で火災があったことを推測させる。

#### d. 各層出土遺物(図12)

第8層出土遺物では、須恵器14・綠釉陶器15・土師器16・錢貨23を図示した。このうち14は杯B蓋である。15は蛇の目高台で、焼成は軟質であり、底面への施釉は部分である。9世紀中頃に平安京近郊窯で焼成された資料であろう。土師器皿16は12世紀前半頃の資料であろう。23は和同開珎で、直径25.5mm、厚さ1.8mmを測る。「開」の門構えが開く、いわゆる新和同である。これらをはじめ、第8層出土遺物の年代観は8～12世紀の間に収まる。

第7層からは土師器17が出土した。いわゆるへそ皿で、15世紀の資料である。

第5層出土資料では、肥前磁器18および金属製品24を図示した。このうち18は内野山系の碗であり、高台端部を除く全面に銅線釉を施す。17世紀後半の資料である。24はおろし金である。羽子板状を呈し、柄の先端には孔が穿たれる。断面形状は「H」字状を呈し、すりおろした食品がこぼれないよう工夫されている。おろし目は両面につけられており、粗い面と細かい面が区別されている。他にもう1個体が同じ位置で出土した。

第3～4層出土資料では、肥前磁器19・焼塩壺20・石製品21を図示した。19は染付碗で、形態・意匠から18世紀前半の資料であろう。20は内面に布目がかすかに残り、外面に「泉州麻生」の刻印を有する。18世紀前半に属する資料である。21は多孔質な火山碎屑物で、いわゆる軽石である。たわし状の形態に成形されている。

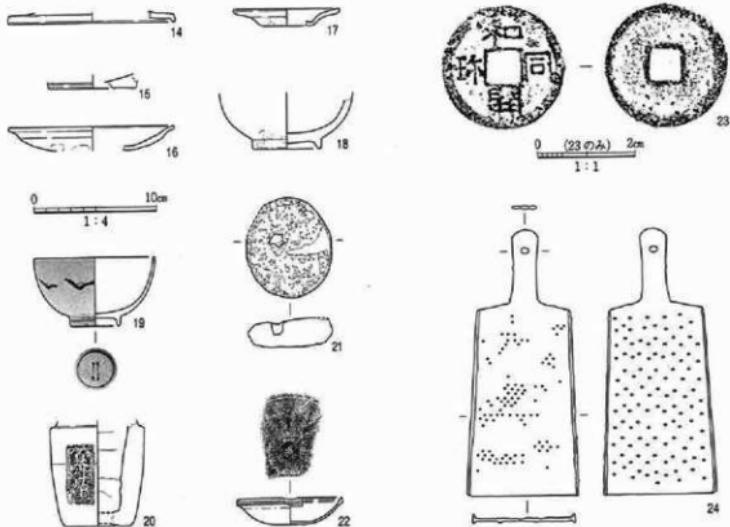


図12 各層出土遺物実測図

第8層(14~16・23)、第7層(17)、第5層(18・24)、第3~4層(19~21)、第2~3層(22)

第2~3層からは、鳥の解彫りとされる備前焼22などが出土している。

### 3)まとめ

今回の調査では、古代に遡る遺構群のほか、中世の地層、また豊臣~徳川期の遺構・遺物を検出したほか、第9層の堆積環境についても情報を得ることができた。

このうち第9層の古流向については、少なくとも第9b層の段階では北→南であることがわかった。調査区北方で行った同心町遺跡B地点調査における成果[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004]とともに、天満砂堆が淀川によって形成されたデルタ地形であるとの知見を裏付けるものである。

また古代の遺構・遺物については、今回の調査地のほか、HX99-1次・TJ00-2次・TJ01-1次・TJ08-1次・TJ08-2次で検出されており(図1)、当地一帯に古代の遺跡が存在することは確実である。またこれらの遺物の中には、和同開珎や瓦といった、寺院・官衙の存在を推定させる遺物が含まれることは注目できる。当地一帯の歴史を明らかにする上で、今後の調査成果の蓄積が望まれる。

### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004、「同心町遺跡B地点発掘調査(DC02-3)報告書」:「平成14年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.3~11  
 大阪市文化財協会2002、「TJ00-2次調査」:「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告」-1999~2000年度-、pp.181~190  
 石井清司1995、「旗瘞須恵器」:中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社、pp.298~314

第8層の遺構全景  
(東から)



調査区北壁地層断面  
(南西から)



SD801断面  
(西から)



北区天満一丁目(滝川小学校内)における建設工事に伴う  
天満本願寺跡発掘調査(TN10-1)報告書

調査個所 大阪市北区天満1丁目5  
調査面積 約21m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年11月8日～11月10日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、豊臣秀吉による大阪城下町「天満」の建設の出発点となった天満本願寺跡の推定地に当たる(図1)。天満本願寺跡の推定地には二説あり、大阪市の埋蔵文化財包蔵地は現在の造幣局の敷地を中心に考えられている。滝川小学校は、造幣局に次いで大きな塊として残された区画で、遺構の残存が期待できる有力な場所である。また同小学校は、元和2(1616)年に造られた川崎東照宮の跡地と言われる。

調査は小学校のエレベーター設置に伴う。エレベーターピット部分で、周囲の配管を避けたところに南北6.3m、東西3.3mのトレンチを設定し、調査を進めた(図2)。調査区が狭いため平面調査は第4層までが限界で、それ以下は一部のみを掘削して豊臣期の地層を確認し、調査を終えた。

本報告ではGPS測量を行って得た世界測地系座標を使用し、方位は座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

厚さ120~150cmの近現代の地層下を第1~6層とした。

第1層：浅黄色(2.5Y7/3)細粒砂の盛土層で、層厚は35cmである。

第2層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトなどからなる整地層で、最大層厚33cmである。本層上面は18世紀以後の生活面と推定され、SK202などの遺構があった。

第3層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒砂層で、層厚は60cmである。焼土が混じり、瓦な



表 土	
第1層	SK202
第2層	SK301
第3層	SK301
第4層	
第5層	
第6層	

図3 地層と遺構の関係図

第6層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂からなる盛土層で、層厚は20cm以上である。中国製青花皿1から豊臣期の地層の可能性が高い。第6層上面はTP+1.25mである。

どの遺物を多く含む。大きな遺構の埋土かもしれない。本層上面でSK301を検出した。

第4層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂からなる盛土層で、最大層厚40cmである。

第5層：黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は45cmである。肥前磁器青磁皿2(図5)が出土し、17世紀中葉の地層と推定される。

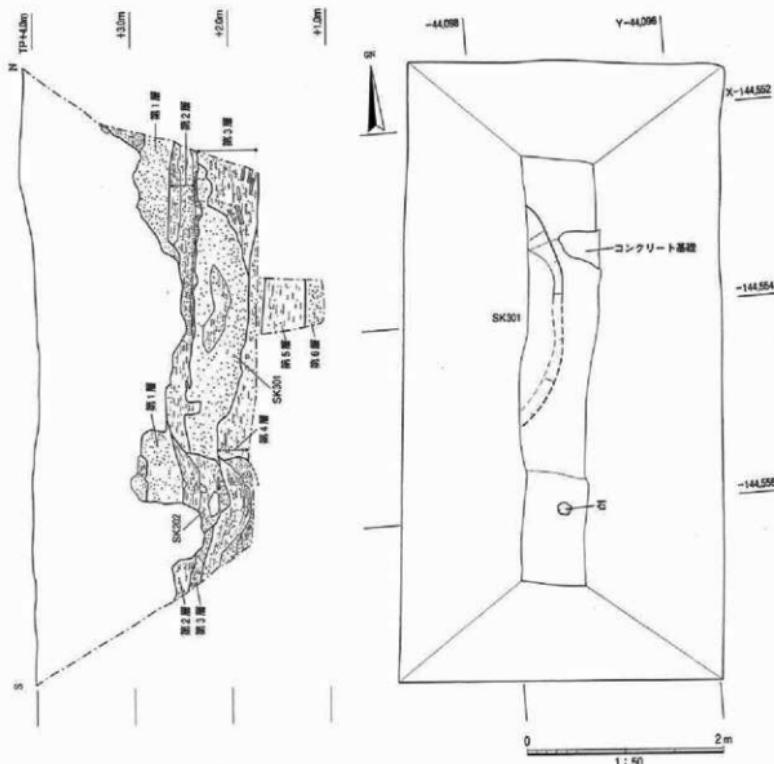


図4 西壁地層断面図および遺構平面図

## ii) 遺構と遺物(図4・5)

周辺調査における豊臣期の地層の上面標高は、東南東約250mのTN93-3次調査地西端でTP+2.25m〔大阪市文化財協会1995〕、その北のTN06-1次調査地でTP+1.85m〔大阪市文化財協会2008〕、調査地から南へ約100mのTW96-1次調査地でTP+2.2mとなっている〔大阪市教育委員会ほか2000〕。第6層上面の高さはこれらに比べて明らかに低く、豊臣期の大きな遺構などの中に入っている可能性がある。

第6層出土の中国製青花皿1は、底部内面を蛇目釉剥ぎしている。中央部に欠損した直径1.8cmの突起が付くが、重ね焼きの痕跡とも見えず、何かよくわからない。第5層出土の肥前磁器青磁皿2も、底部内面を蛇目釉剥ぎしている。

調査区が狭小なため遺構はよく把握できていない。第3層上面には、南北2.2m以上の、砂で埋まったSK301があった。また、10cm強の石が据わっていた。その上位の第2層上面にはSK202があり、南北約1m、深さ0.5mであった。以上の遺構の時期は18世紀以後である。

## 3)まとめ

本調査の成果は、第6層と第5層の出土遺物と地層の観察から、整合的に豊臣期の地層を確認できたことであり、今後の瀬川小学校やその周辺の調査に役立つ。

## 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「学校法人播磨学園による建設工事に伴う確認調査(TW98-1)」：平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書、pp.25-30  
大阪市文化財協会1995、「天満本願寺跡発掘調査報告」I  
大阪市文化財協会2008、「天満本願寺跡発掘調査報告」VI

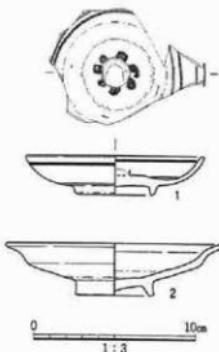
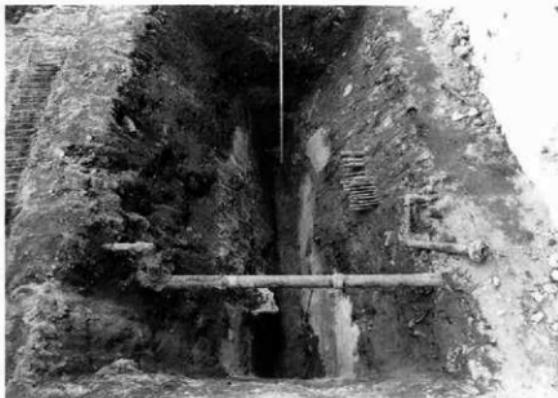
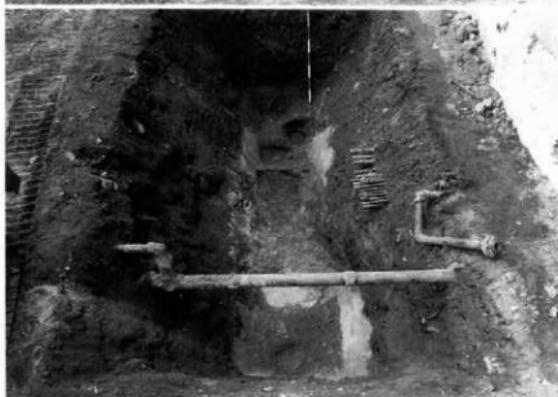


図5 出土遺物実測図  
第6層(1)、第5層(2)

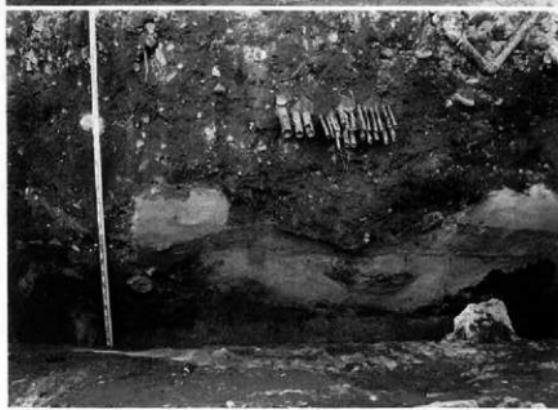
第4層掘削後全景  
(北から)



第2層上面全景  
(北から)



西壁地層断面



北区天満一丁目における建設工事に伴う  
天満本願寺跡発掘調査(TN10-2)報告書

調査個所 大阪市北区天満1丁目49-1  
調査面積 36m<sup>2</sup>  
調査期間 平成23年2月21日～25日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、赤松佳奈

### 1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は大川の右岸に位置し、天満本願寺の有力な推定地である天満本願寺跡内にある。天正13(1585)年に羽柴秀吉が泉州貝塚に移っていた本願寺に対して天満の地に寺地を与えたことで建造された天満本願寺は、天正19(1591)年に京都に移転するまでの間、天満の地にあり城下町の発展に寄与した。本願寺移転後も天満堀川が開削されるなど市街地の整備は続けられていたが、慶長19(1614)年大坂冬ノ陣の折に、籠城を決めた豊臣方によって町は船場とともに焼き払われた。徳川期には、絵図によると、北側に川崎東照宮や与力・同心町が置かれ、本調査地を含む南西側には町屋が並がっていたと考えられる。

周辺では造幣局内で9次の調査が行われており、豊臣期から現代に至る市街地の変遷を伝える資料が得られている。特にTN93-3・93-5次調査では、冬ノ陣の焼土層や大川に面した石垣のある豊臣～徳川期の屋敷など天満の変遷を考える上で重要な遺構が確認された。また本遺跡内の南側に位置するTN04-1次調査では、豊臣期から徳川期にかけての遺構・遺物のほか、古墳時代の建物跡や平安～室町時代の柱列などが確認された。本調査地に近いTW98-1次調査では須恵器平瓶が出土している。こうした成果から、豊臣期以前にも人の活動があったことがわかっている。

本調査に先立って行われた試掘調査では現地表下約2.1mの深さで豊臣期～徳川期の遺物包含層および遺構面が確認された。当該地は、豊臣期から徳川期にかけて継続的な土地開発が営まれてきた地域であり、遺構の年代や分布状況を確認し、天満地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的として調査を実施した。

本体工事に伴う土留め工事および杭工事が先行して完了し、現地表下1.9mまで工事予定地内のはば全域が掘削された段階で調査を開始した。調査区は、残土置場を考慮して、敷地内東寄りに南北3m、



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

東西10mを設定した(図2)。2011年2月21日より発掘調査を開始し、以下を人力で掘削した。途中、遺構の拡がりを確認するために調査区の東西幅を12mまで拡張し、最終的な面積は36m<sup>2</sup>となった。適宜、遺構検出、実測・写真撮影などの記録作業を行なながら調査を進め、2月25日に現地でのすべての調査を完了した。

なお本報告で付した遺構番号は、中世以前を300番台、豊臣期の遺物のみを含む遺構を200番台、徳川期の遺構を100番台、調査開始時に検出した19世紀代の遺構を000番台で示す。

また、本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP+○mと表記する。方位は座標北を基準とした。

## 2) 調査の結果

### i) 層序

現地表下1.9m~3.9m(TP+1.9m~-0.1m)で確認した地層について以下に述べる。

第1層：徳川期の整地層で3層に細分された。第1a層は、極細粒砂の偽礫を含む黄灰色細粒～中粒砂の整地層である。上面はすでに本体工事にともなって削剥されていたため本来の層厚はわからないが、確認できた層厚は5~40cmである。調査区の東半にのみ遺存していたが、西壁に本層由来の偽礫がみられることや、北東ほど厚くなっていることから、本来は調査区の全面に拡がっていたと考えられる。本層からは17世紀後半の遺物が出土しているほか、焼土や19世紀代の遺物を含む土壌、井戸SE002などを検出した。第1b層は、焼土・炭を含むぶい黄色シルト質粗粒砂の整地層で、層厚は10~20cmである。上面で17世紀中頃～後半の遺物を含む土壌SK103・108などや溝、礎石建物SB109を確認した。層中からは、高台無釉の肥前磁器碗44のほか、細片のため図化しえないが肥前陶器の溝縁皿、高台無釉の肥前磁器皿、疊付に離れ砂のついた肥前磁器碗などが出土しており、地層の時期は17世紀中頃である。第1c層は、焼土・炭の細片を含む灰黄褐色シルト質粗粒砂の整地層で、層厚10~20cmである。上面で17世紀中頃の遺物を含む土壌SK110などと溝を検出した。第1c層出土遺物には瀬戸美濃焼灰釉折縁皿37・黄瀬戸向付38など豊臣期の遺物が目立つが、層内に焼土や炭を含むことと上下の地層の年代観から考えると、本層は徳川期に入つてからの大坂ノ陣の片付けに伴う整地層と考えられ、細片ではあるが肥前磁器や肥前陶器鉄絵皿が出土していることから、地層の時期は17世紀の前半と考える。

第2層：河成層とその上部に形成された古土壤からなる。第2a層は黄褐色中粒砂～中疊からなる古土壤で下限は漸移的であった。層厚は約30cmである。上面で中世の掘立柱建物SB303・土壌SK301・

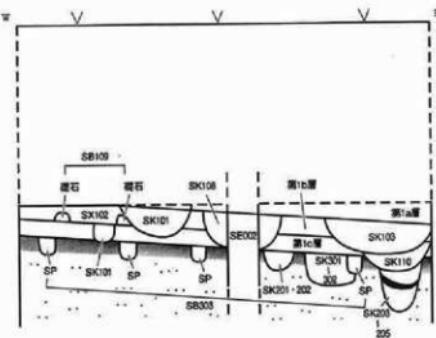


図3 地層と遺構の関係図

302、豊臣期の遺物を含む土壌SK201～205などを検出した。第2b層は浅い黄色の中粒砂～中疊からなる河成層である。一部でラミナを確認した。層厚は1.3m以上である。

#### ii) 遺構と遺物

##### a. 豊臣期以前の遺構と遺物

周辺の調査地では古代の地層・遺構が確認されているが、本調査地では古代に遡る地層・遺構は確認できなかった。ただし中・近世の遺構埋土中から、古代の須恵器杯底部と考えられる破片や、内面に同心円文当具痕のある須恵器壺の細片が出土している。

古土壤である第2a層上面で、掘立柱建物、土壌を検出した。建物の柱穴からは、須恵器杯2、土師器鉢、瓦、鉄釘などが出土したがいずれも細片であり、詳細な時期は不明である。ただし第2a層からは14世紀代のものと考えられる土師器皿1が出土しており、かつ豊臣期に遡る遺物を含まないことから、14世紀代を遡らない中世のものと考えておく。土壌は遺物から豊臣期の遺構である。

SK301：調査区北側で検出した土壌で、両脇を上位層の遺構に、中央部をSP310に切られているため平面形は不明である。北壁で確認できる東西幅は約1.3m、深さは0.6mであった。埋土はシルト含む灰黄褐色中粒～粗粒砂で、詳細な時期は不明だが、内面がナデ調整された須恵器壺の細片が出土した。

SK302：調査区の西北端で検出した土壌で幅1.6m、深さ0.6m以上である。埋土は黄褐色粗粒～極粗粒砂からなり2～4cm大の疊を含む。遺物は出土しなかったが、遺構埋土からSK301と同時期の遺構と考えられる。

SB303：調査区の中央で検出した掘立柱建物である。東西5間、南北1間を調査地内で検出した。調査区が狭小であり、北側が上位層の遺構で擾乱されているため、建物の規模はわからない。SP310から少なくとも北方向へは拡がると考えられる。SP308・309にも上

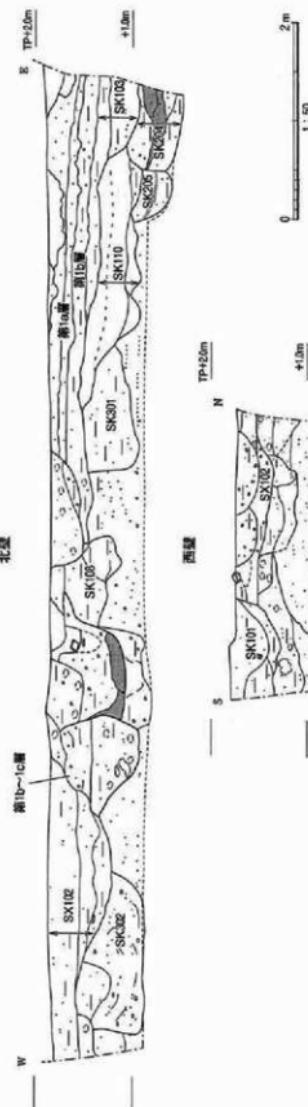


図4 北・西壁地層断面図

位層の遺構で搅乱されているため柱穴の存否は不明だが、両柱穴間の距離は2間分あり、中間に柱穴があった可能性が高い。柱穴の直径は0.3~0.5m柱痕跡は0.2mであった。1間の距離は1.2~1.3mである。埋土はオリーブ褐色のシルト質粗粒砂で深さは0.4~0.6mであった。SP304から土師器鉢の細片、SP305から平瓦、鉄釘のほか須恵器杯2が出土している。

SK201・202：調査区の東南端で検出した土壠で、SK202がSK201を切っている。南半は調査区外に延びている。SK201は東西2.8m以上、南北0.7m以上で検出面からの深さは0.3mであった。瀬戸美濃焼灰釉皿3が出土している。SK202は東西0.9m、南北0.5m以上、埋土はオリーブ褐色のシルト質粗

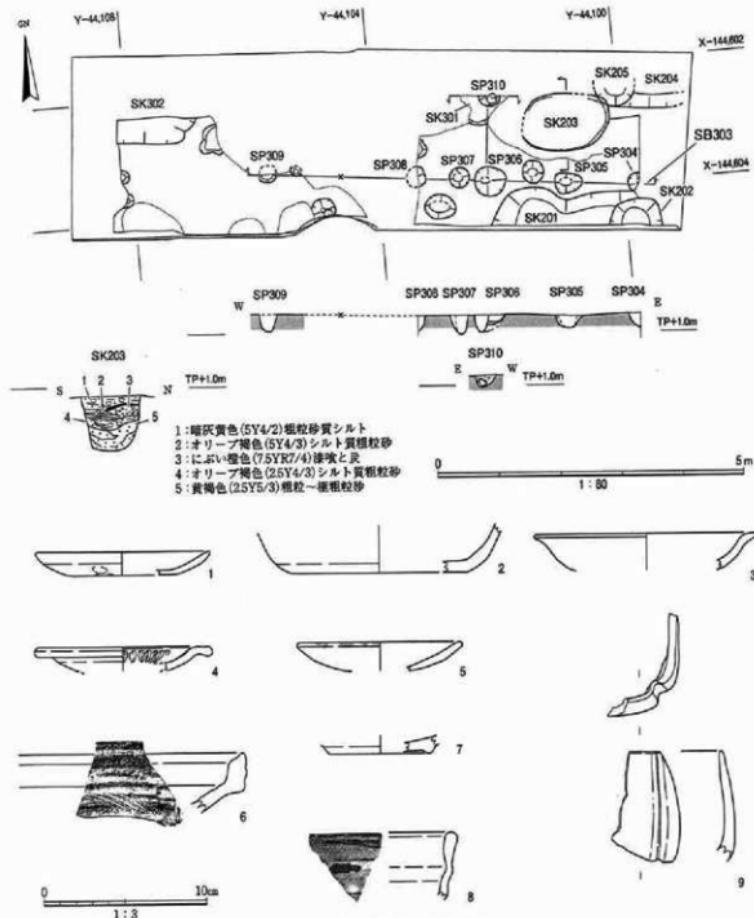


図5 量臣期以前の遺構と遺物

第2a層(1)、SP305(2)、SK201(3)、SK202(4)、SK203(5~8)、SK404(9)

粒砂からなり、深さは約0.2mであった。瀬戸美濃焼灰釉折縁ソギ皿4のほか、細片のため図化しえなかつたが瀬戸美濃焼天目碗が出土している。出土遺物から、これらの遺構は豊臣前期に遡る可能性がある。埋土は第2a層に類似する。

SK203：調査区の北東端で検出した土壤で、その上部をSK204、SK109に切られている。遺存していた遺構の東西幅は1.6m、南北幅は1.1mで、埋土は大きく2層に分かれる。下部は第2b層由来の黄褐色粗粒～極粗粒砂からなり層厚は約30cmあるが、加工時形成層と考える。上部は炭、焼土塊を含むシルト質粗粒砂～粗粒砂質シルトで約20cm大の炭の偽礫や、焼けた漆喰と考えられる偽礫を含んでいる。土師器皿5、備前焼擂鉢6、瀬戸美濃焼志野皿底部7、肥前陶器(唐津焼)向付8など豊臣後期の遺物が出土した。

SK204・205：断面の観察によるとSK205がSK204を切っている。平面では遺構が重複していることを認識できず一括で掘削した。SK205は東西0.5m以上の土壤で、埋土はSK204を掘り返した偽礫で構成されている。中位には層厚約5cmの炭層が堆積していた。SK204は東西0.8m以上、南北0.7m以上、深さ0.6mの土壤である。埋土は大きく3層に分かれる。最下部はシルト質粗粒砂からなり、加工時形成層である。下部は黒色粗粒砂質シルトからなり多量の炭を含んでいる。層厚は10～20cmである。上部はシルト質粗粒砂からなる。瀬戸美濃焼志野向付9のほか、図化していないが焼締陶器の擂鉢が出土している。

SK203～205は埋土中に炭・焼土塊などを多量に含んでいた。出土した遺物は少量であるが、徳川期のものを含まず、埋土は徳川期の最初の整地層(第1c層)とは異なっている。埋土、出土遺物の年代観から大坂冬ノ陣直後の片付けに伴って掘られた土壤であり、徳川期の整地がなされる前に掘られた遺構である可能性が高いことから、豊臣期に含めて記述した。

#### b. 徳川期の遺構と遺物

整地層である第1a・b・c層の各層上面で、土壤、溝、礎石などを検出した。

##### 第1c層上面検出遺構

いずれも上面の遺構によって削られており、遺存状態は不良であった。

SK110：東西2.6m、南北1.1m以上、深さ0.6m以上の土壤で埋土は黄褐色シルト質粗粒砂からなる。上位からSK111が掘り込まれており、上半はSK103に壊されている。また、SK203～205を切っている。上下の遺構と可能な限り識別して掘削したが、確実な掘り分けはできていない。青花皿10、肥前陶器小杯11・皿12・13・碗14、肥前磁器碗15、備前焼擂鉢16、信楽焼擂鉢17、丹波焼擂鉢18のほか、瀬戸美濃焼黄瀬戸鉢19、巴文軒丸瓦20などの遺物や貝・骨などの食器残渣が出土した。

SK111：SK109が埋められた後に掘られた土壤で、SK103に上位を切られている。東西0.8m南北0.4m以上、遺存していた深さは約0.2mであった。

SD112：幅約0.9mの東西溝で、東西約3.6mを検出した。深さは0.1m程度しか残っておらず、遺物は出土しなかった。

瓦踏まり：第3層上面から層中にかけて、南北約1.0m、東西約0.3mの範囲から巴文軒丸瓦、丸瓦、平瓦が出土した。

#### 第1b層上面検出の遺構

SB109：調査区の西端で礎石を検出したため、一部調査区を拡張してその続きを確認した。確認した礎石は東西1間、南北1間で南北間は2間分の距離がある。柱の当たりには約30cm大の礎を置き、裏込めに10~20cm大の礎を使用していた。裏込めの礎のみ遺存しているものもあり礎石の遺存状態は良くない。遺物は出土していないが、17世紀中頃の遺物を含む整地層の上面に形成されており、17世紀後半の遺物を含んだ整地層に覆われている。

SK103：調査区の東端で検出した土壌である。東西3.2m以上、南北2m以上あって2段掘りになっている。中心部の深さは約0.4mであった。埋土はおもに黄褐色シルト質粗粒砂からなり最下部には加工時形成層と考えられるシルト質粗粒砂が堆積していた。SK110を切っており、細片のため図化しえなかつたが、土師器皿、肥前陶器碗、肥前磁器碗、備前焼擂鉢、丹波焼擂鉢、瓦など17世紀後半の遺物や貝などの食物残滓が出土している。

SD106：幅0.3m、長さ1.7mの東西方向の溝である。深さは0.4mで、埋土は黒褐色シルト質粗粒砂からなる。遺物は出土しなかった。

SK108：調査区の中央で検出した東西3.3m、南北1.6m以上、深さ0.5mの土壌である。中央を19世紀から近代にかけての井戸に擾乱されている。埋土は3層に分かれ、上部は灰色シルト質粗粒砂、東肩付近には灰オリーブ色シルト質中粒~粗粒砂、下部には暗灰黄色シルト質中粒~粗粒砂が堆積していた。土師器皿21、瀬戸美濃焼天目碗22、肥前磁器碗23、備前焼水屋甕24、均整唐草文軒平瓦25、寛永通宝の差錢など17世紀後半の遺物や貝・骨などの食物残滓が出土している。

SK101：調査区の西端で検出した土壌である。幅約1.0m、深さは0.5mあり、炭を含む暗オリーブ色中粒砂質シルトで埋まっていた。本遺構はSX102の上面に形成されている。肥前陶器碗26、肥前磁器杯27、肥前磁器小杯28、備前焼擂鉢29・30などの17世紀中頃～後半の遺物が出土している。27は無文の磁器で高台疊付に砂目がついており、ごく初期の肥前磁器であると考えられる。

SX102：調査区の西半にのみ分布していた整地層で、壁面では土壌の形状をしている。最上部がSB201の礎石を覆っていたことから、SB201が廃絶した後に、片付けのためのゴミ穴を掘りながら整地した一連の堆積層と考えている。土師器皿31、黄瀬戸向付32、肥前磁器碗33、備前焼甕34・大平鉢35、丹波焼大平鉢36など、17世紀中頃～後半の遺物が含まれていた。

#### 第1a層上面遺構

第1a層の上面で19世紀代の遺物と焼土を含む土壌、井戸などを検出した。ただし、本調査区内の第1a層は、調査開始時には上面が任意の高さまで掘削されていたため、遺構の掘り込み面や本来の法量はわからない。おもな遺構のみ概述する。

SE001：直径約1.2m、深さ1.2mの井戸で、黄褐色シルト質粗粒砂で埋まっていた。井戸側は確認できなかったが、埋土内に井戸瓦を含んでいたため、井戸瓦で組まれた井戸側が存在していた可能性がある。廃棄時の埋土から19世紀代の遺物が出土している。

SE002：掘形の直径1.5m、井戸側直径0.9m、深さは検出面から1.3mまで確認したが完掘していない。井戸側は長26cm、幅25cm、厚み5cmの井戸瓦を10枚使用し円形を呈していた。井戸側内は黒色粗粒

砂質シルトで埋められており、陶製の碍子を含むことから近・現代まで使用されていたと考えられる。掘形は、灰オリーブ色シルト質粗粒砂からなり19世紀代の遺物を含んでいた。SE001・SE002は隣接しており、SE001の埋土と、SE002の掘形から出土した遺物の時期が近似していることから、SE001を廃棄した後、SE002を掘り直した可能性がある。

#### c. 各層出土の遺物

##### 第1c層出土遺物

瀬戸美濃焼灰釉折縁皿37・黄瀬戸向付38・志野蓋39、肥前陶器火入40が出土している。40は底部外面が二次的に削られて磨滅している。高台の痕跡が確認できるため、底部を加工して使用していたと考えられる。第1c層からはこのほかにも細片のため図化しえなかつたが、唐津焼鉄絵皿、肥前磁器、瓦などが出土した。豊臣後期に適りうる遺物を多く含むが、肥前磁器を含むことから、前述のとおり地層の時期は17世紀前半～中頃と考えられる。

##### 第1b層出土の遺物

瀬戸美濃焼灰釉折縁皿41・志野向付42、肥前陶器碗43、肥前磁器碗44が出土している。44は、高台無釉である。ほかに細片のため図化しえなかつたが、肥前陶器溝縁皿、高台無釉の肥前磁器皿、高台全面施釉で置付に離れ砂が付着している肥前磁器碗と多量の瓦が出土している。

##### 第1a層出土の遺物

焼締陶器(伊賀焼?)水差45・46、瀬戸美濃焼天目碗47・筒型碗48、肥前陶器小壺49・鉄絵鉢50、肥前磁器碗51・52・皿53の他、硯54、瓦などが出土した。45・46は同一個体の可能性がある。49は底部糸切り不調整である。内面を施釉しており、茶入の可能性がある。

### 3)まとめ

今回の調査では、中世～近世の遺構を確認することができた。以下に時期別にまとめてみたい。

#### 豊臣期以前

厚い河成層の上部に形成された古土壤の上面で、中世の掘立柱建物や豊臣前期の土壤を確認した。中世の段階には、本調査地にも人が生活可能な環境が整っているが、少なくとも豊臣前期までは本調査地周辺には大規模な造成がなかったことが推測される。また、焼土や多量の炭と豊臣後期の遺物を含む土壤SK203～205が検出されたことから、調査地内では豊臣後期の地層が確認できなかつたものの、大坂冬ノ陣による火災の影響を受けていた可能性が高い。

#### 徳川期

徳川期の遺構は、整地層の上面に形成されていた。古土壤を覆う第1c層中には、肥前陶器や肥前磁器の細片とともに、瀬戸美濃焼灰釉折縁皿・黄瀬戸向付といった豊臣期の遺物が含まれており、焼土や炭の細片を多量に含んでいることから、大坂ノ陣後の最初の復興に伴う整地層と考えられる。肥前陶磁器から考えられる地層の時期は17世紀前半で、その頃には本調査地周辺において、徳川氏による復興がはじまつたのではないだろうか。また、炭・焼土の細片を含み、豊臣期の遺物を層中に含む特徴は第1b層にも共通する。第1b層は17世紀中頃の遺物を含む整地層で、上面では遺存状態は良くない

ものの礎石建物が確認できた。この建物は、17世紀後半の遺物を含む、SK101、SX102に壊されており、その後建物配置が踏襲された形跡がないことを考えると、17世紀段階の町はまだ安定していなかつたのかもしれない。

以上のように、限られた調査面積ではあったが、天溝地域の歴史的変遷を知るうえでの手がかりが得られた。天溝本願寺跡内の調査のうち、TN93-3・95-3・06-1次調査などの大川沿いの調査地や、南西に位置するTN04-1次調査では豊臣期の整地層が確認されている。今回の調査では古土壙の上面で豊臣期の遺構や中世の遺構を確認した。大川から離れた天溝本願寺跡の西部は調査例が少なく、今後周辺の調査が進展すれば、豊臣期における天溝地域の開発や、それ以前の遺構の分布が明らかになるものと期待される。

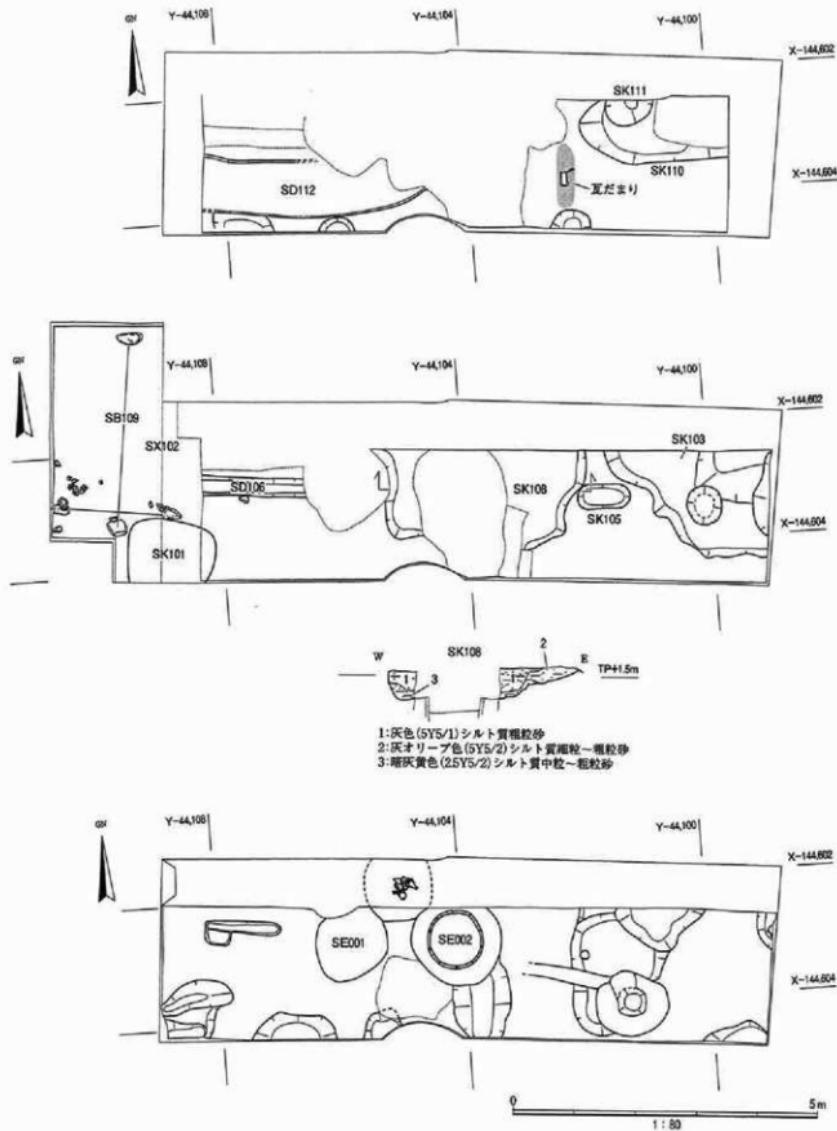


図6 德川期の遺構平面・断面図

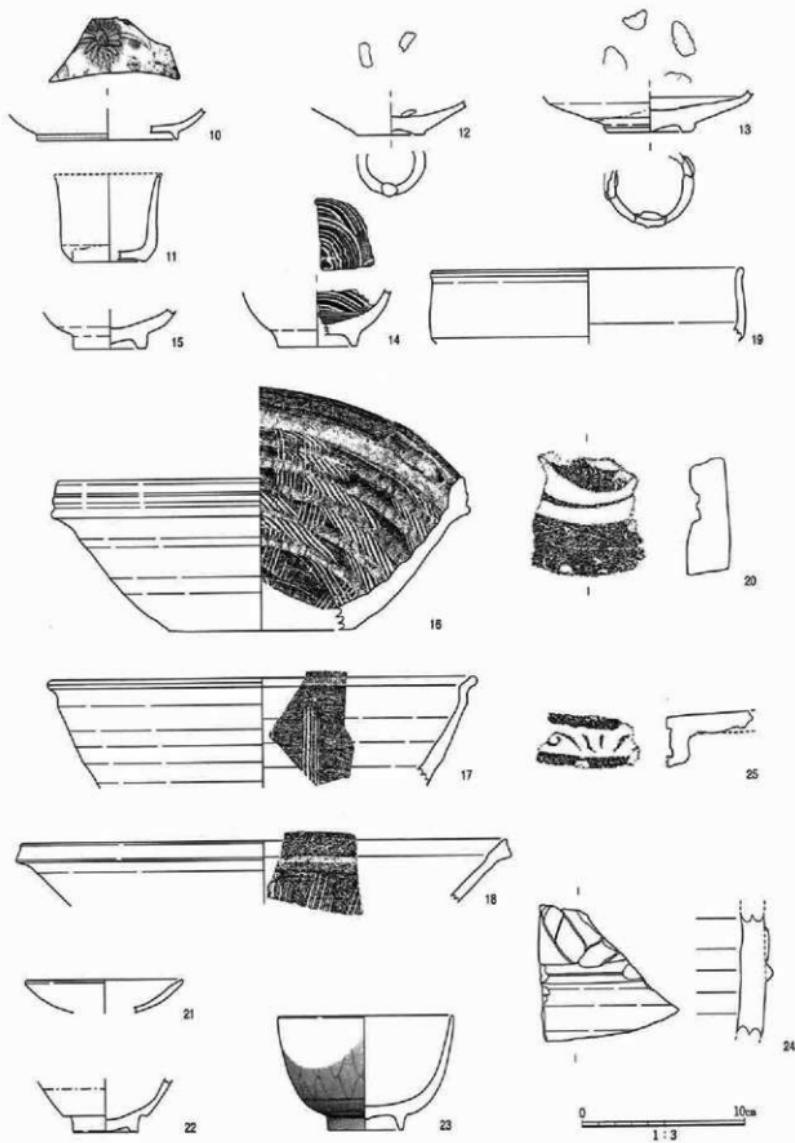


図7 德川期の遺構出土遺物実測図  
SK110(10~20)、SK108(21~25)

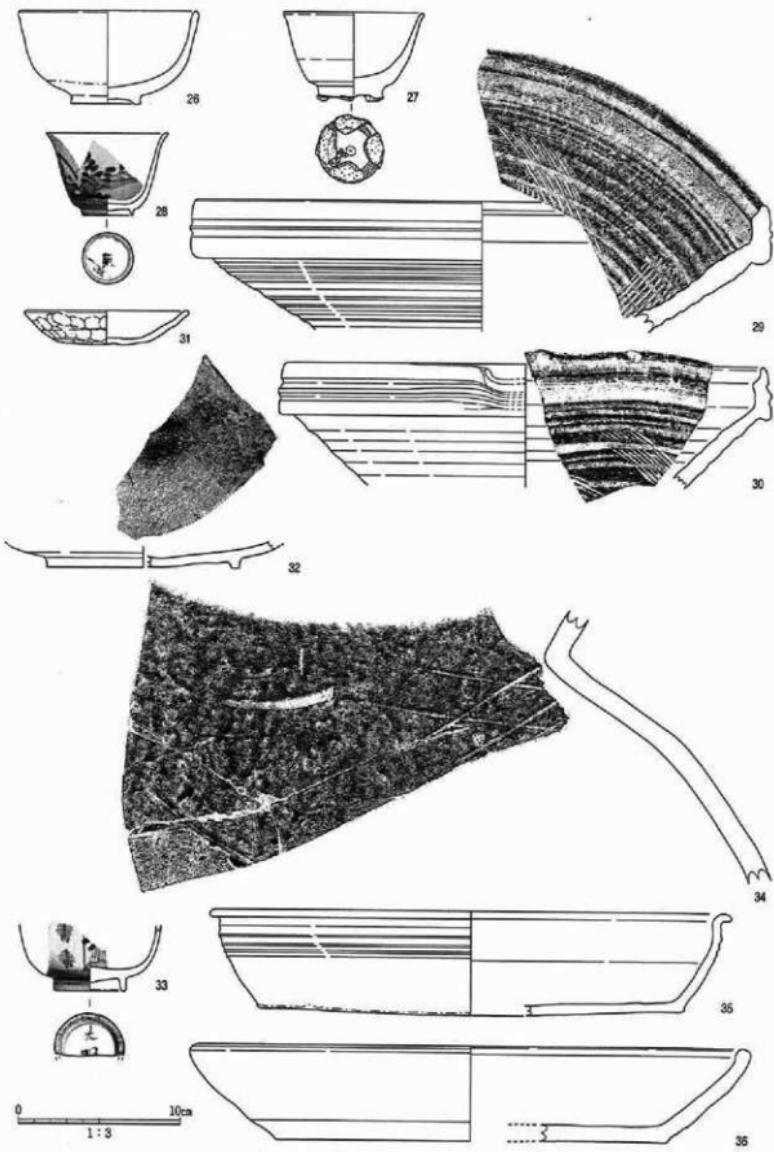


図8 德川期の遣構出土遺物実測図  
SK101(26~30)、SX102(31~36)

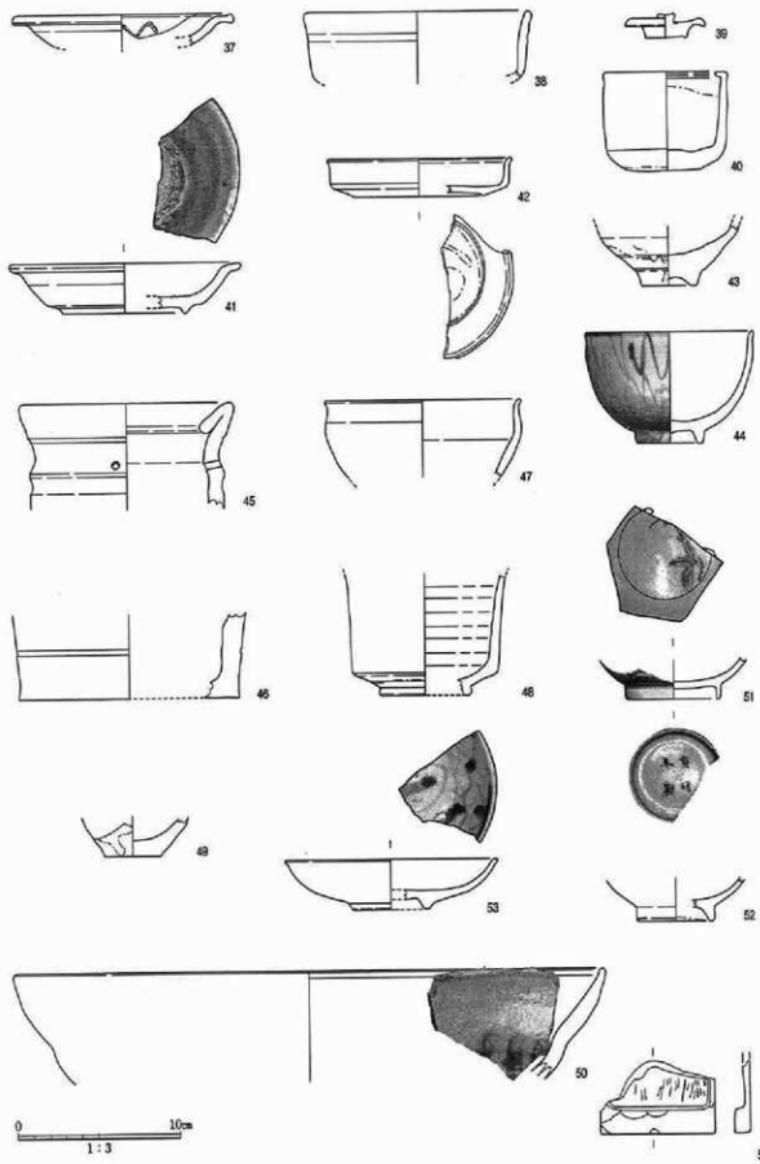


圖 9 各層出土遺物實測圖  
第1c層(37~40)、第1b層(41~44)、第1a層(45~54)

北壁(南西から)



豐臣期以前の遺構  
(東から)



徳川期の遺構  
(北東から)



都島区友渕町一丁目における建設工事に伴う  
発掘調査(TV10-1)報告書

調査個所 大阪市都島区友渕町1丁目8-5  
調査面積 100m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年6月14日～6月23日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、京嶋覚

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は淀川の氾濫原に位置する。西側の北区には銅鐸が出土したと伝えられる長柄西遺跡や家形埴輪が出土した長柄古墳跡などがあり、東には弥生時代中期の集落遺跡として有名な旭区森小路遺跡があるなど、今回の調査地付近は弥生時代の遺跡が形成された淀川氾濫原の微高地に挟まれた低地帯だったと推定される(図1)。

奈良時代福墓と推定される『住吉大社神代記』[田中卓1985]の「長柄船瀬本紀」に伝えられる古代の船泊まりである「長柄船瀬」の四至の西限が「朝潤」と記されており、中世には「舳淵庄」という莊園が置かれ、江戸時代にはさらに開発が進み幕府領になって友渕村と称したとされる[竹内理三編1983]。

調査区は敷地東部の17m×6mの範囲であり(図2)、現地表から1.5mまでを重機により掘削し、それ以下を人力により掘削を進め、記録作業を行なった。着手当初の豪雨により調査区が冠水する被害があったが、6月22日には記録作業を終え、翌23日に重機・仮設などの撤収作業を行って現場での作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均水面値)で、図中ではTPと省略した。

### 2) 調査の結果

#### i) 層序(図3・4)

第1層：暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂質シルト層で、コンクリート片が多く含まれる現代の盛土である。



図1 調査位置図

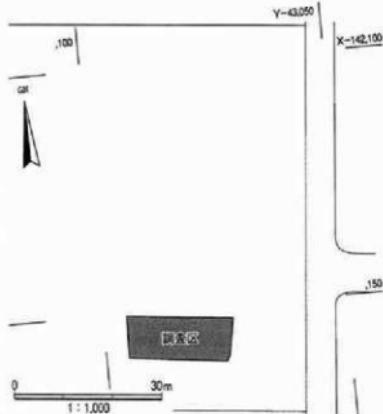


図2 調査区位置図

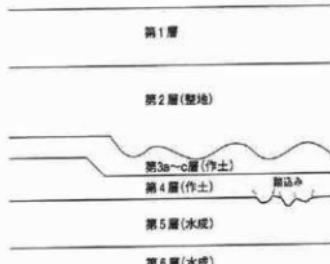


図3 地層と遺構の関係図

第2層：黒色(10Y2/1)シルト質細粒砂層で、粘土の偽蘿を含む整地層である。層厚は厚いところでは70~80cmある。近世の整地層で下位の歴を埋め立てている。

第3層：調査区東部の一級高くなつた範囲に分布する第3a・b層と西部に分布する第3c層に分かれ、いずれも作土層である。第3a層は暗オリーブ灰色(5GY3/1)細粒~中粒砂混り粘土質シルト層、第3b層は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒~粗粒砂質粘土層である。第3c層は黒色(2.5Y2/1)粘土層で、上面には炭化物の薄層が認められ、0.7m間隔で歴を立てられている。

第4層：オリーブ黒色(5Y3/1)中粒~粗粒砂質粘土からなる作土層である。

第5層：オリーブ黒色(5Y3/1)細粒~極細粒砂質シルト層で植物遺体を含む自然堆積層である。

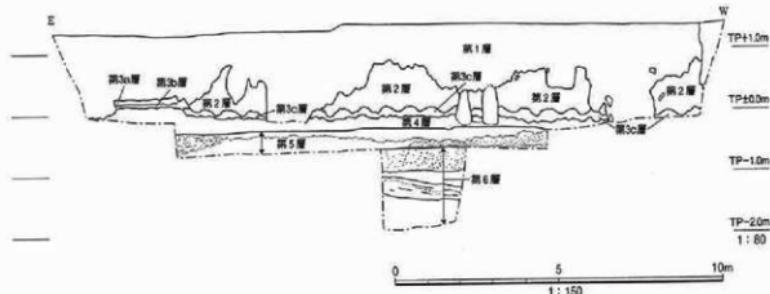


図4 南壁地層断面図

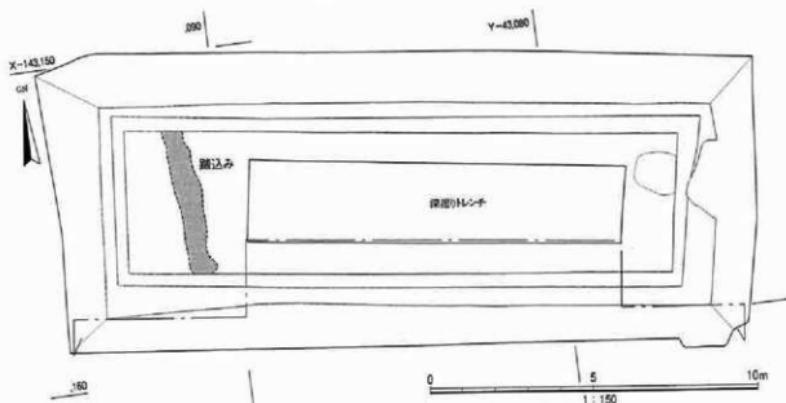


図5 遺構平面図

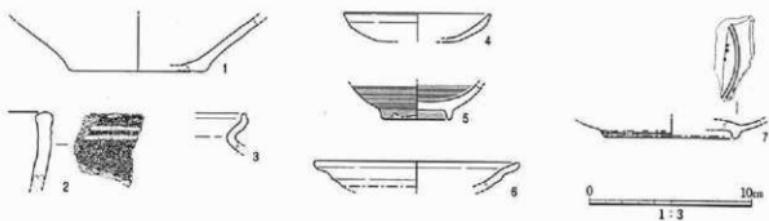


図6 第4層出土遺物実測図

第6層：極細粒～細粒砂とシルト～粘土質シルトが互層する自然堆積層で、上部はオリーブ黒色(5Y3/1)～黒色(7.5Y2/1)、下部は灰色(5Y4/1)を呈する。層厚1.5m以上で下限は未確認である。

#### ii) 遺構と遺物(図5・6)

第3c層上面で0.7m間隔に歛立てされた畠が確認されたが、重機により掘削したため、調査区南壁断面での確認にとどまり平面的な歛方向は確認できなかった。調査区東部も段状に高くなつて第3a・b層の作土があり、土地境界があったと推定されるが、その方向も不明である。

調査区西部の第5層上面の検出中に南北方向の踏込み列を検出した。上位の第4層が幅0.8mの直線的な範囲に踏み込まれたものであり、第4層下面遺構となる。この方向はほぼ正南北方向であり、第3層の畠遺構も同様の方向であると推察される。

遺物は西部の第4層から器表がかなり風化した弥生土器壺底部1・鉢口縁部2・甕口縁部3やサヌカイト片が出土したほか、少量ながら肥前陶器碗5・皿6、青花皿7、瓦質土器火入れ、土師器皿4などの土器・陶磁器や寛永通宝も出土したことから、第4層は17世紀後半頃まで下る作土である。弥生土器は鉢口縁部の凹線文や広い平底の底部は第IV様式の特徴を示している。

#### 3)まとめ

今回の調査で出土した遺構・遺物はともにごく少量であったが、この地点が17世紀代に耕作地として利用されるまでは、植物が繁茂する湿地帯であったことが明らかになり、河内湖の北西端に位置していたことが推察できた。また、少量ながら弥生土器片が出土している点を重視すれば、付近の砂堆上に当該期の集落が存在する可能性も示唆しており、弥生時代から中世にかけての当地域の景観復元に寄与する資料を提供できたといえる。

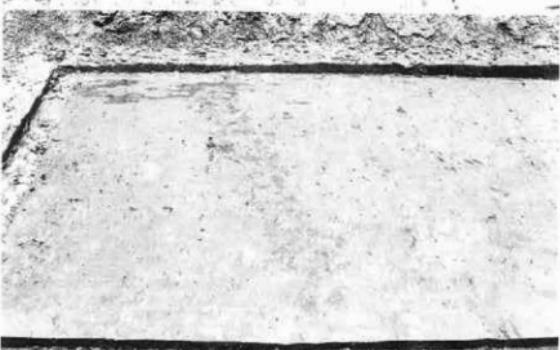
#### 引用・参考文献

- 田中卓1985、「住吉大社神代記の研究」田中卓著作集7、国書刊行会  
竹内理三編1983、「日本地名大辞典」27大阪府、角川書店

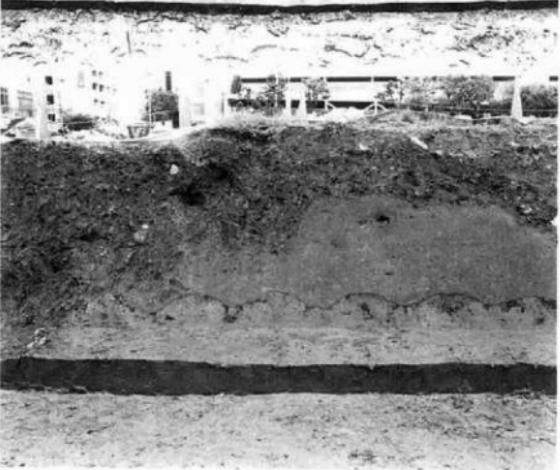
第5層上面全景  
(西から)



第5層上面踏込み



南壁断面  
第3c層上面の歯



福島区福島三丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(FK10-2)報告書

調査個所 大阪市福島区福島3丁目1  
調査面積 159m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年7月8日～7月21日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地の位置する福島3丁目付近は(図1)、17世紀中頃までは大川の中州であった。貞享元~4(1684~1687)年の河村瑞軒による淀川水系改修の際、観川と堂島川が浚渫され、この揚げ土をもって元禄元(1688)年、堂島新地が成立した。絵図から調査地点を見ると、元禄4(1691)年の「新撰増補大坂大絵図」では「船大工町」(東の南北道沿いの小区画は判読不能)とあり、享保末(1730年頃)の「摂津大坂図鑑綱目大成」では「船蔵」、その西に「船大工町」と記され、寛政年間(1749年頃)の「摂津大坂圖」では「西本願寺舟入」、その西は「舟大工小屋」とある。道を挟んだ北東は肥後人吉藩や豊後臼杵藩の蔵屋敷となっている。江戸時代の大坂は造船業が盛んで、ここも中心の一つであった。周辺は、大きくみると18世紀中頃の絵図の状態で幕末まで至ったようである。調査地の北西の道は観川の川跡に当り、大正年間に埋め立てられ道路となった。

発掘は大阪市教育委員会の試掘を受け、西本願寺の舟入や藏屋敷の施設を調査することを目的とした。敷地中央に幅6m、長さ25mの調査区を設定し、試掘結果から深くなると予測された北西側にトレンチ1を設けた(図2)。トレンチ1では地表から約4.4m(TP-約4.3m)まで掘削しても大正・昭和の遺物が出土し、観川の埋立てに伴うものと考えられた。平面的に調査したのは第3層途中から第



圖 1 河套地位置圖

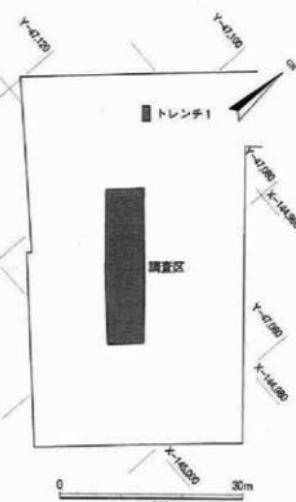


図2 調査区位置図

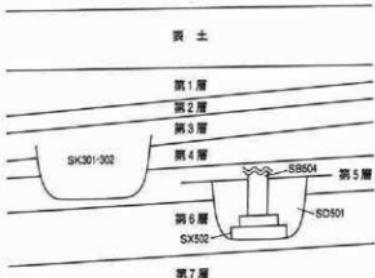


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現代の盛土を除いて第1～7層と呼ぶ。

第1層：灰白色(10YR8/2)中粒～粗粒砂層の盛土で、最大層厚65cmである。

第2層：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質極細粒砂の偽礫層で、最大層厚30cmである。

第3層以下は確実に江戸時代の地層である。第3～5層は特徴的な地層で、シルト～極細粒砂から成る薄い盛土を何枚も重ね、途中に木屑層を挟む(図版3枚目上)。第3・4・5層の境は、盛土の中で他より固い地層上面とした。何枚もの木屑層の挟在は、地下水位が高く軟弱な地盤での沈下対策・盛土強化と推定され、泥漬防止にも効果があることが梅雨期の作業で実感できた。

第3層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト偽礫混り極細粒砂層・木屑層などの薄層から成り、層厚は20～47cmである。層中にSK301・302の検出面がある。北西へ向け低くなり、上面は約20mで0.9mの高低差がある。第3層からは図6の12～15・17の各種の肥前磁器染付、16の瀬戸美濃焼磁器皿が出土し、下限が19世紀中頃と推定される。

第4層：暗オリーブ色(5Y4/3)シルト偽礫混り細粒砂層・木屑層などから成り、層厚は8～40cmである。上面の傾斜は第3層と同様である。第4層からは図6の9・10の肥前磁器染付碗が出土し、18世紀後半頃と推定される。

第5層：灰色(5Y4/1)極細粒砂質シルト層・木屑層などの薄層から成り、層厚は35～65cmである。層中にSB504、その基礎地盤に係るSD501の検出面がある。上面の傾斜は第3・4層に比し緩やかである。第5層からは図6の肥前磁器染付筒形碗1と備前焼鉢2が出土し、下限が18世紀後半と推定される。

第6層：灰オリーブ色(7.5Y5/2)極細粒砂・シルトの偽礫から成る盛土層で、層厚は70cmである。遺物は出土していない。堂島新地造成時の盛土、あるいは北西側の遺構面の存在から17世紀末から18世紀前半の地層の可能性がある。

第7層：灰色(7.5Y5/1)極粗粒砂の水成層で、層厚は30cm以上である。遺物は出土していない。

6層上面までで、それ以下は南東隅を深掘りし、堂島新地造成前の可能性のある水成層(第7層)を確認して終了した。

SB504の基礎に使用された舟材の主なものは持帰り、柱や礫板は現地に置いてきた。今回の調査は、湧水と大雨により他の調査ほど細かい遺構の調査はできていない。なお、報告で使用した方位は世界測地系の座標北を基準とし、標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

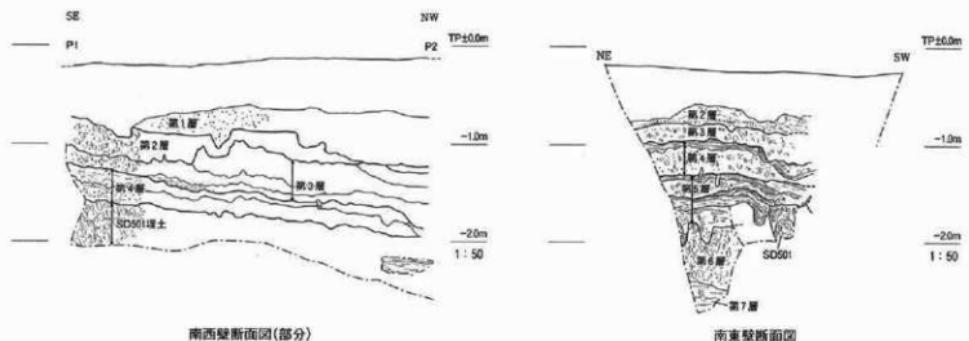
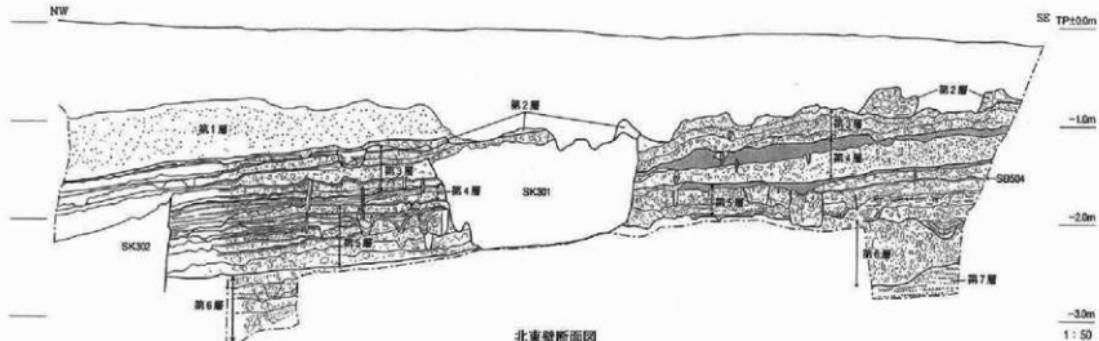


図4 地層断面図

0 5m  
1:100

## ii) 遺構と遺物

### a. 第5層の遺構と遺物(図5~7)

掘立柱建物SB504がある。SB504は桁行11.90m(6間)以上で、柱間1.98mである。平面図には柱材と抜穴が4個あるが、重機で掘下げる際に抜いてしまった柱材もある。南東より2~4本目も、舟材等を使用した基礎地業・礎板と位置が合うことから、本来柱が据わっていたと考えられる。柱の直径は約35cmである。

SB504の建て方は以下の通りである。

まず、第5層の途中から布掘SD501を掘る。SD501は幅1.1~1.2m(南西壁をわずかに越えたところに上端がある)、深さ0.4~0.9mで、北西側が深くなる。次に、SD501内に沈下防止のため舟の廃材などを敷く。これらは高さの調整のため何枚か重ねる(図版参照)。北西側の深いところには、板材に加えて柱材(図5のA群⑤・B群⑨)を横たえている。柱を据える場所には、さらに礎板を敷く場合もある。その上に柱を据え、布掘を埋め戻す。SB504のプランはよくわからないが、D群の南東で大きな敷き板が無くなっているSD501が屈曲すること、柱列の北東側の地層が比較的固いことから、図5右の可能性を示しておく。

舟材は、扁平な舟釘(図7の26~28)で横に板を繋ぎ、楔形の材で釘穴を埋める点に特徴がある。図7の20(C群⑩)は長さ5m以上あり、図版のA群⑥とD群⑪は原形をよく留めている。図7の23(B群⑨)・24(A群⑤)は建築部材でなく帆柱の可能性もあるかもしれない。これらの舟材は周辺の舟大工から入手したのであろう。礎石建物でないのは珍しいが、軟弱な地盤に対応するための手法の一つと考えられる。

SD501からは図6の3~8が出土した。3~5と7~8は肥前磁器染付で、筒形碗3・小瓶4・蓋5・皿7・粗製鉢8がある。4の出土位置はやや不確かである。6は関西系陶器の灯明受皿である。これらからSB504が建てられたのは18世紀後半と推定される。

SX503は横板を杭で止めた土留である。調査区内には多くの杭があり、盛土の際の土留用の杭も多数含まれていると考えられる。

またSK505は直径0.8~1.05m、深さ0.3mで底に板が残る。埋めた桶の可能性が高い。

### b. 第3層の遺構と遺物(図5・6)

大型の麻痺土壙SK301・302がある。SK301は長さ4.3m、幅1.2m以上で、深さ1.2mである。SK302は北側が壊されているが、それに匹敵する大きさと推定される。SK301・302の埋土にはスラグが多量に含まれる。SK302からは肥前磁器染付碗11、SK301からは関西系陶器皿18・肥前磁器染付皿19が出土した。これらから18世紀後葉~19世紀前葉の遺構と推定される。

## 3)まとめ

- ・ 設定した調査区至近に西本願寺の舟入はない。絵図と比べると、より北東の方が可能性が高いと考えられる。
- ・ SB504は西本願寺舟入に関係する倉のような建物の可能性がある。頑丈な作りから、舟大工関連の

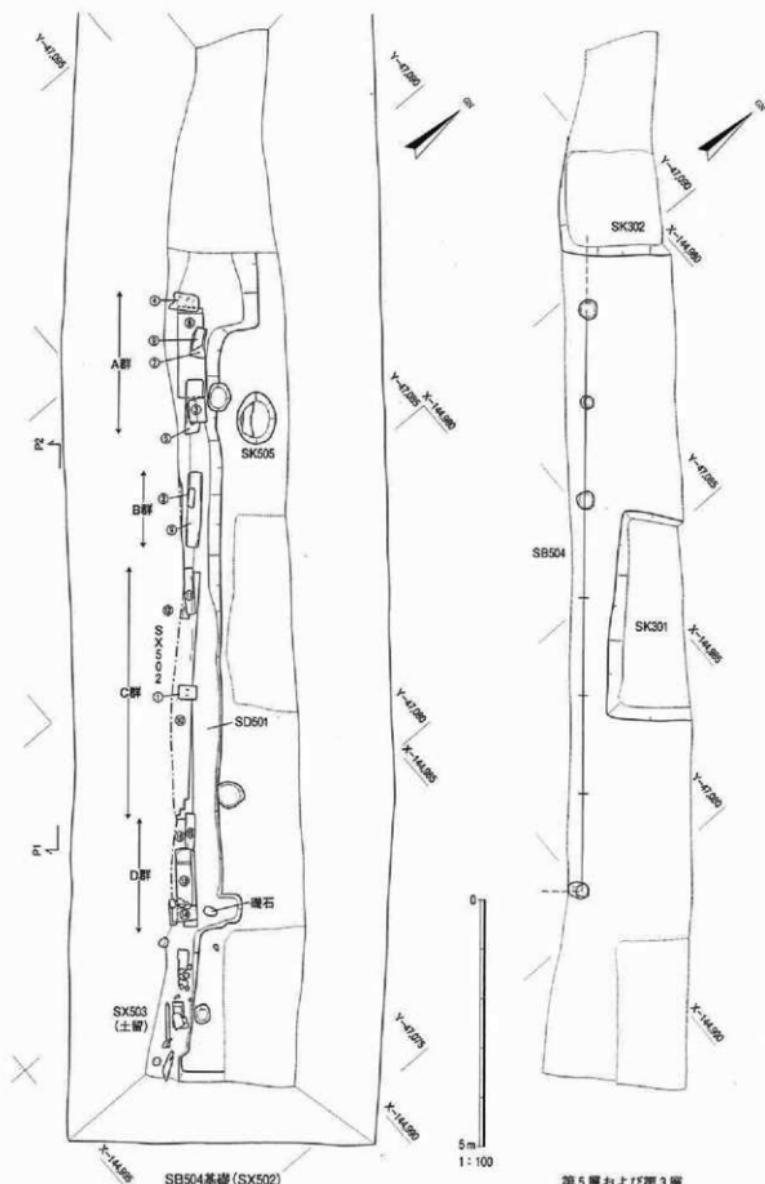


圖 5 疾構平面圖

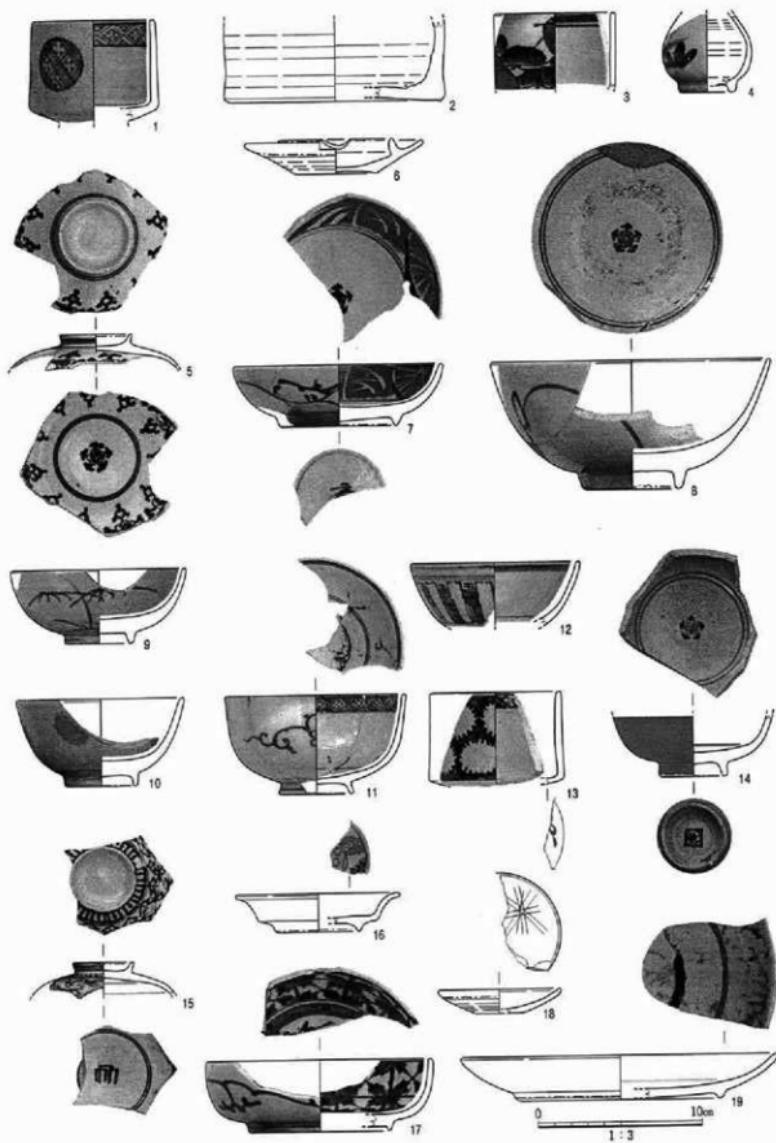


図6 出土遺物実測図(1)

第5層(1・2)、SD501(3～8)、第4層(9・10)、SK302(11)、第3層(12～17)、SK301(18・19)

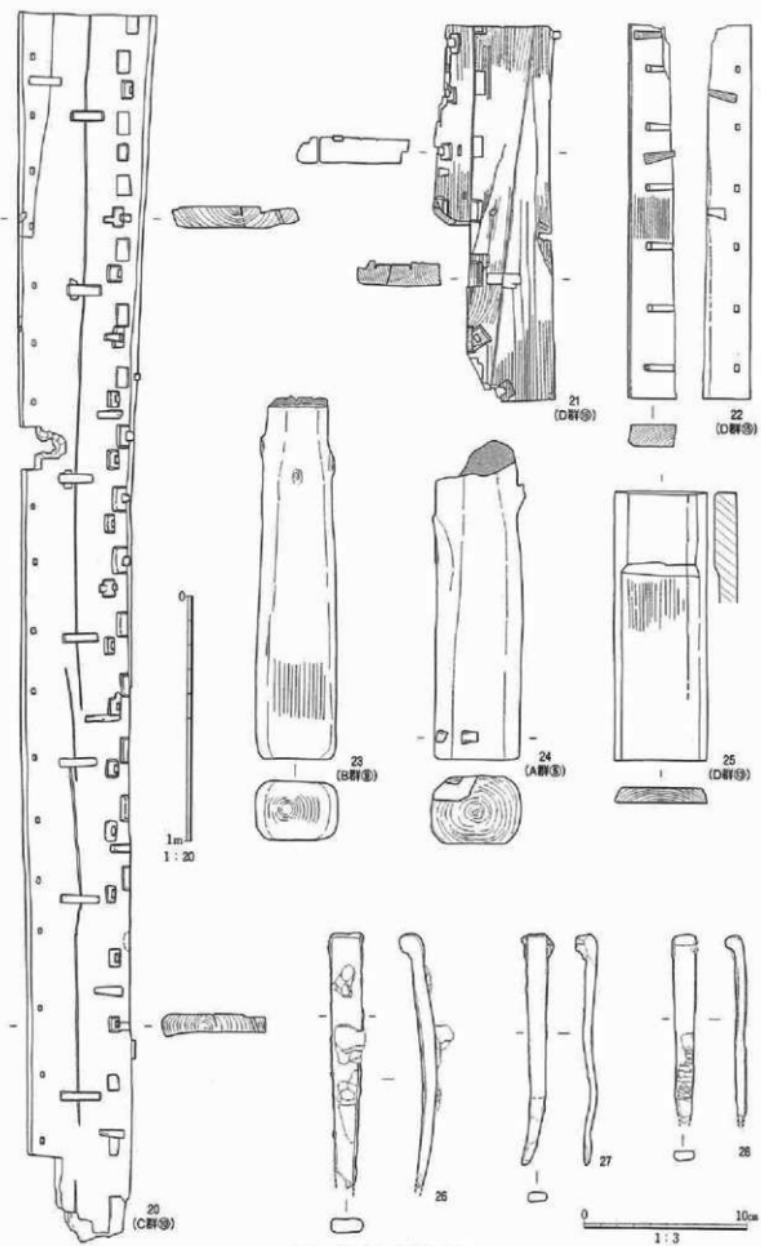


図7 出土遺物実測図(2)  
SX502(20~25)、SD501(26)、第3層(27・28)

建物より、藏屋敷関連の建物の可能性が高いと考えられる。

- ・敷地は堂島川側が高く、蜆川側が低い傾斜地になっている。木屑を混ぜた独特な盛土や、舟材を使用した地業を行っている。これらは堂島川と蜆川に挟まれた低地の今後の発掘調査に参考になる。
- ・大型和船の舟材は少なくなつており、貴重な実物資料が得られた。また、江戸時代の大坂の主要な産業である造船業に関して、発掘調査が有効になると予測される。



SX502部分(A群 北西から)



SX502(北西から)

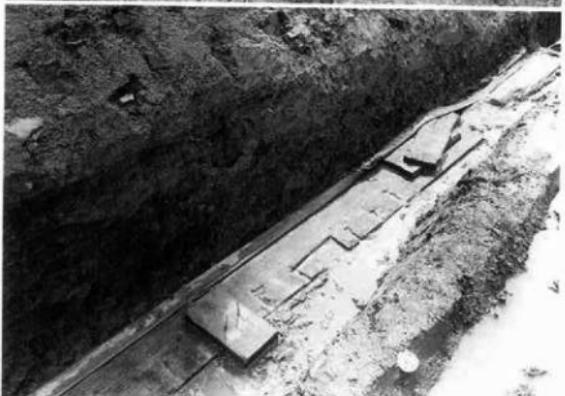


SX502(南東から)

SX502部分(D群  
東から)



SX502部分(C群  
東から)



SB504の柱  
(南西から)



北東壁断面  
(SK302より東南部分)



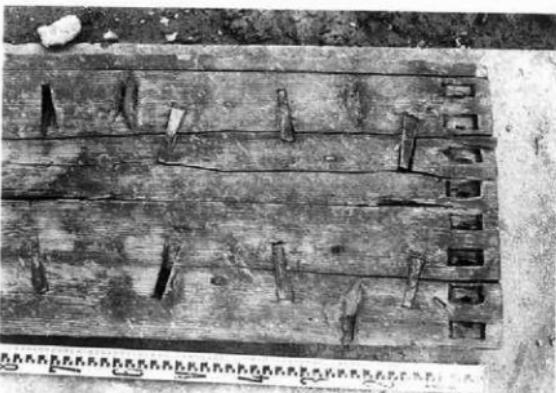
SX502の舟材



舟材 A群⑤



舟材 A 群⑧の細部



舟材 D 群Ⅱなど



舟材 D 群Ⅱの細部



中央区南久宝寺町一丁目における建設工事に伴う  
馬喰町遺跡発掘調査(BR10-1)報告書

調査個所 大阪市中央区南久宝寺1丁目7-4ほか  
調査面積 63m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年10月13日～10月19日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、清水和明

### 1) 調査に至る経緯と経過

馬喰町遺跡は堺筋と南久宝寺通・博労町通が交差する付近に位置し、かつて弥生時代の土器片とともに銅製の釣針が出土していることから、弥生時代の遺物散布地として知られている[堀田啓一 1979]。一方、大坂城下町跡の南辺に接していることから、近世城下町の開発に係る資料が含まれていることが推定されるが、付近で行われた従来の発掘調査は、北東200mのOJ91-24次調査地[大阪市文化財協会2004]、西200mのOJ08-5次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]などで件数は少ない。OJ91-24次調査地の所在地である久太郎町は、1598(慶長3)年の「大坂町中屋敷替」時における「光徳寺」の移転先であり、付近の開発が豊臣期に遡る可能性を示しているが、調査では18世紀前半～19世紀の建物や土壌が見つかっているほか、17世紀中頃に遡る遺物も混入しておらず、豊臣期の地層に調査が及ばず、遺構・遺物については不明である。一方、OJ08-5次調査地ではTP+1.8m付近の調査で、自然堆積による黄褐色細粒砂～中疊層をベースに豊臣後期に遡る土壌、敷地境の溝など多数の遺構を確認し、豊臣期船場の南限を考える上で重要な発見となった。

今回の調査地は、堺筋と南久宝寺通が交差する東南の敷地に当たる(図1)。2010年9月9日・16日に大阪市教育委員会が試掘調査を行った結果、敷地の多くで地下2.5～3mまで近現代の搅乱が確認され、東南部でのみ近世の遺物包含層が確認された。OJ08-5次調査地よりもさらに南に位置し、城下町跡の南限を考える重要な材料となることから、豊臣期の遺構・遺物の確認を主眼に、その地点を調査することとした(図2)。

調査は同年10月13日から開始した。第5層までを重機によって掘削し、それ以下については人力に

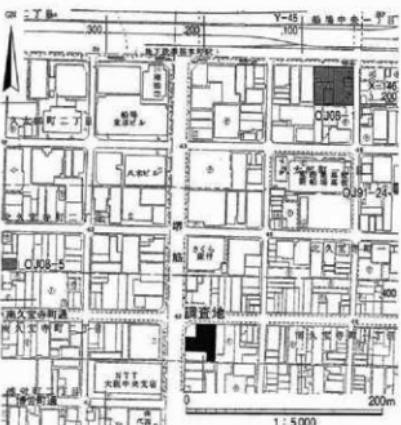


図1 調査位置図



図2 調査区配置図

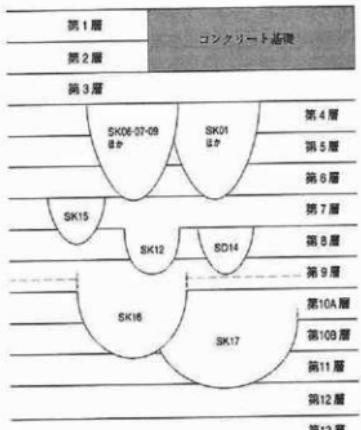


図3 地層と遺構の関係

本調査では、現地表下約3.0mまでの地層を第1～13層までに細分した。調査区北部では、旧建物の基礎工事に伴うと見られる東西方向の現代の大きな落込みがあり、第1・2層で埋積されている。その下位には近代とみられる第3層で埋まる東西の落込みがある。第3層基底面で検出される遺構群が、後述のとおり18世紀末頃であることから、第4層以下が近世の地層となり、第10A層までが当該期の遺物を包含する。第11層以下は自然堆積の砂・礫層であろう。以下に各層について記す。

第1層：礫を多く含む暗オリーブ色粗粒砂層で、層厚は30～100cmである。現代の整地層である。

第2層：礫を多く含む暗褐色粗粒砂層で、層厚は30～100cmである。現代の整地層である。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂層で、層厚は15cm以上となる。基底面で後述のSK09など18世紀末の遺構が検出されるため、それ以降の年代となる。

第4層：炭化物を多く含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト層で、層厚は5～10cmである。近世の整地層である。

第5層：黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂層で、層厚は10～20cmである。近世の整地層である。

第6層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層で、層厚は15～30cmである。近世の整地層である。

第7層：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂層で、層厚は5～30cmである。近世の整地層を母材に土壤化している。

第8層：焼土偽礫・炭を多く含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層で、層厚は5～20cm程度である。近世の整地層である。

第9層(上部)：細礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂層で、層厚は10～20cmである。近世の整地層を母材に土壤化している。

第9層(下部)：黄褐色シルトの偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、層厚は5～10cmである。近世の整地層を母材に土壤化している。

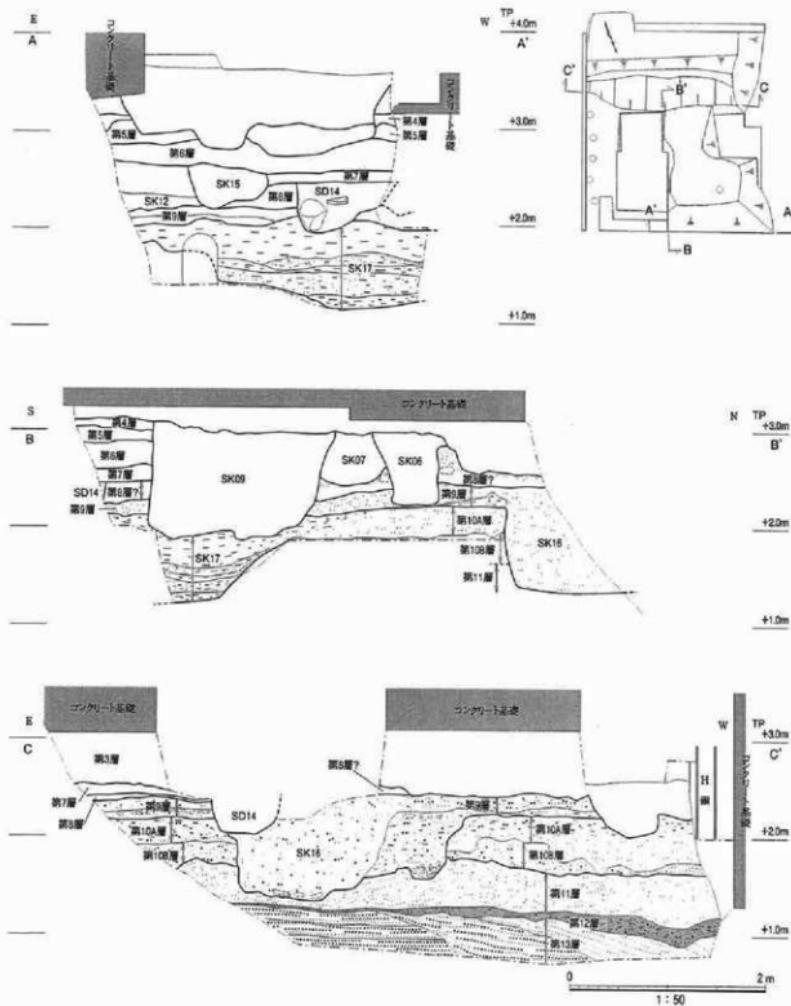
よって掘削を行った。途中、検出した遺構・遺物を記録するため、写真撮影や図面の作成を適宜行い、同月19日に現地における調査を終了した。

調査および本報告で使用した水準値はTP値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示した。方位は図1は座標北、それ以外は磁北を基準とした。

報告書は現地で記録した図面・写真の整理、遺物の洗浄・復元、実測を行い、これらをもとにパーソナルコンピュータを使用して作図・編集を進めながら原稿を執筆し、レイアウトを完成させた。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)



第3層:オリーブ褐色(25Y4/3)中粒砂  
第4層:含炭化物、黒褐色(25Y3/2)シルト  
第5層:黄褐色(25Y5/4)中粒砂  
第6層:オリーブ褐色(25Y4/3)シルト質中粒砂  
第7層:黄褐色(25Y5/4)シルト質細粒砂  
第8層:含媒土偽層:灰、暗灰黄色(25Y4/2)シルト質中粒砂

第9層(上部):含細礫、オリーブ褐色(25Y4/4)中粒砂  
第9層(下部):含シルト偽層:にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂  
第10A層:黒褐色(25Y3/2)細礫混りシルト質中粒砂  
第10B層:含炭化物、黄褐色(25Y5/4)細礫質中粒砂  
第11層:にぶい黄褐色(10YR6/4)中粒砂  
第12層:黒褐色(10YR3/1)細礫質粗粒砂  
第13層:灰黄色(25Y5/2)中粒砂～灰オリーブ色(5Y5/2)極粗粒砂～細礫

図4 調査区地層断面図

第10A層：黒褐色(2.5Y3/2)細礫混りシルト質中粒砂層で、層厚は30~60cmである。南部SK17の埋土ではシルト層に変化する。近世の整地層を母材に土壤化している。

第10B層：炭化物を含む黄褐色(2.5Y5/4)細礫質中粒砂層で、近世の整地層である。

第11層：にぶい黄橙色(10YR6/4)の均質な中粒砂層である。ラミナは確認できなかったが、本層以下はOJ08-5次調査地で確認された自然堆積層と同一層準とみられたが、遺物は出土していないため時代は不詳である。

第12層：黒褐色(10YR3/1)細礫質粗粒砂層で、暗色帯である。層厚は5~20cm。

第13層：灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂～灰オリーブ色(5Y6/2)極粗粒砂～細礫層で、層厚は60cm以上確認したが、基底は未確認である。図4-Cでは、東側は砂礫が水平に堆積しているが、西側は西への流れを示すラミナが明瞭である。

#### ii) 遺構と遺物

確認された遺構は、全て徳川期のものであるが、遺物には豊臣期に遡るものがある。以下におもなものを記述する。

##### a. 第10A層内・第9層内の遺構(図4~6)

最下位の第10A層内から掘削されたSK17は調査区の南端に位置する(図5)。図4に示した断面図のとおり、深さは0.8m程あり、シルト質細粒砂～細粒砂質シルトが徐々に堆積しながら埋まつていった



図5 第9層・第10A層下面遺構

ようである。埋土中からは豊臣後期から17世紀後葉に至る徳川前期までの土師器・陶磁器が出土した(図6)。1は土師器皿で、底部は指オサエである。3・4は瀬戸美濃焼天目碗、2は肥前陶器と思われる小碗、5は内野山系の肥前陶器碗である。3・4は豊臣後期に遡る資料だが、2・5は17世紀前半までに収まる徳川初期のものである。6・7は肥前磁器染付碗、9は肥前磁器青磁大皿で17世紀中～後葉のものである。10は備前焼鉢で左上がりの摺り目を施す豊臣期に遡るものである。これらのほか、SK17からは漆器碗や漆塗り箱、曲物などの木製品が出土している。遺構の時期は徳川期の17世紀後葉に降るが、豊臣期に遡る遺物が少なからず共存していることは注目される。ほかの同層準の遺構にはSK18がある。また、第10A層内から出土した遺物には中国製青花碗8がある。

SK16は第9層上部内の遺構で、深さ1.1m以上の土壌で、オリーブ褐色中粒砂で埋められている。ほぼ同じ位置で第9層下部内の遺構が存在していることが図4-Cの地層断面で確認できるが、コンクリート基礎の下に当たるため、それ以上の調査は行っていない。

b. 第7層上面・内および第8層上面の遺構(図4・7・8)

第7層および第8層に係って、複数層準で遺構を確認した。

SD14は第8層の上面で検出され、ほぼ南北に延びる幅0.7m、深さ0.4mの溝である。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂で、基底がやシルト質になるため帶水していた時期があったと考えられる。長さ10cmを超える大礫が多量に見つかり、溝の廃棄の際に捨てられたものとみられる。SD13はSD14北部のほぼ同位置にある南北溝である。SD14を切るが、長さ2m程が確認できるものの、埋土はSD14とよく

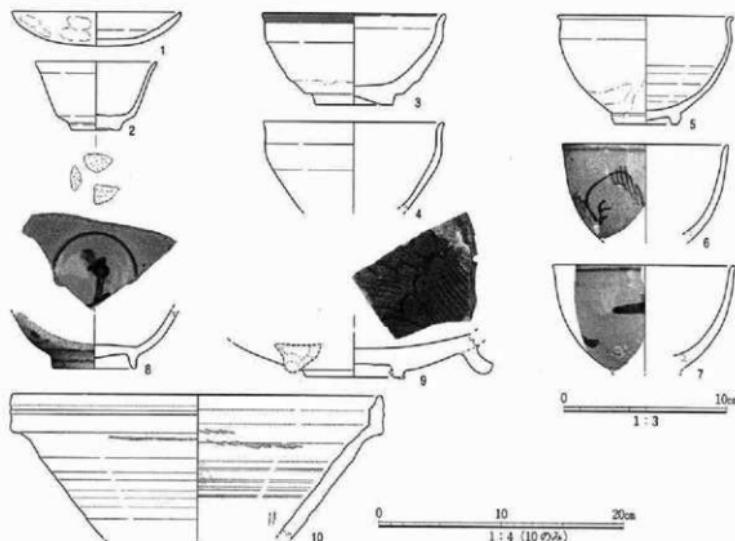


図6 SK17・第10A層出土遺物  
SK17(1～7・9・10)・第10A層(8)

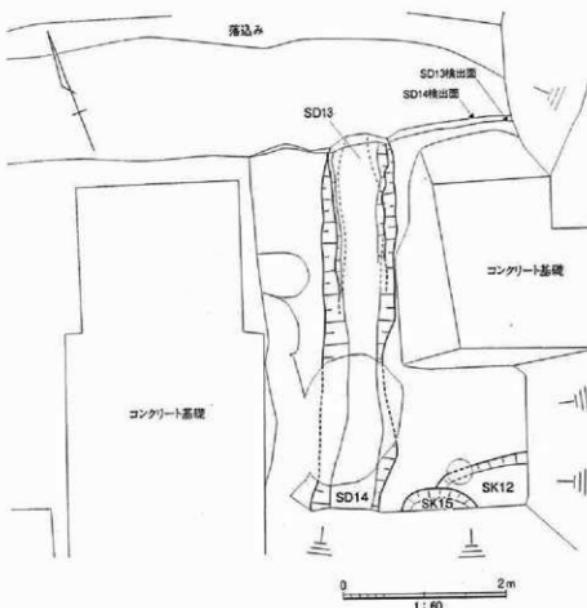


図7 第7層上面・内・第8層上面遺構

似ており、南への続きは不明瞭であった。

SK12は調査区東南の隅に位置する第7層内の遺構である。東・南側は調査区外に延びるため、遺構の規模は不明である。埋土は暗灰黄色シルト質細粒砂で、上部に焼土の偽礫を含むことから埋め戻されたものとみられる。出土遺物には軟質施釉陶器灯明受皿11、肥前磁器型押し合子蓋12、碗13などがあり、これらは18世紀前半のものであろう。

SK15は調査区南壁付近に位置する第7層上面の遺構である。南側が調査区外へ続くため、全体の規模は不明である。

以上の遺構は前述の遺構群に17世紀後葉の遺物が含まれるため、それ以降から18世紀前半ころまでの年代が考えられる。

#### c. 第3層以前の遺構(図4・9~11)

当初の機械掘削後に検出した遺構群で、18世紀前葉～末ごろの年代が考えられる。

見つかった遺構の多くは土壙で、SK01のように埋土に焼土偽礫・スラグを含むもの、SK07・09のように2次的に被熱して赤褐色化した瓦を

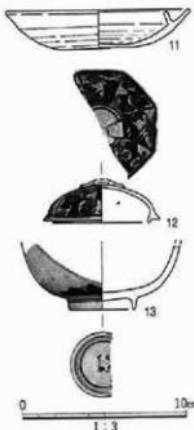


図8 SK12出土遺物

含む瓦の廃棄土壌などがある。ほかに、コンクリート基礎があつて地層のつながりが確認できないため、詳細な時期は不詳だが調査区の西端で西面して南北に延びる石段が見つかっている。西面する位置を南へ延長すると、ほぼ現在の敷地境に当たっており、上位をレンガによる建物基礎が覆っていることから、近代以前の敷地境に設けられたものとみられる。

SK01は長さ1.8mの梢円形となる土壌で、埋土に焼土偽礫やスラグを含んでいる。おもな出土遺物には、肥前磁器染付皿14・15・鉢16、産地不詳の擂鉢20、用途不詳の瓦26などがある。擂鉢20は片

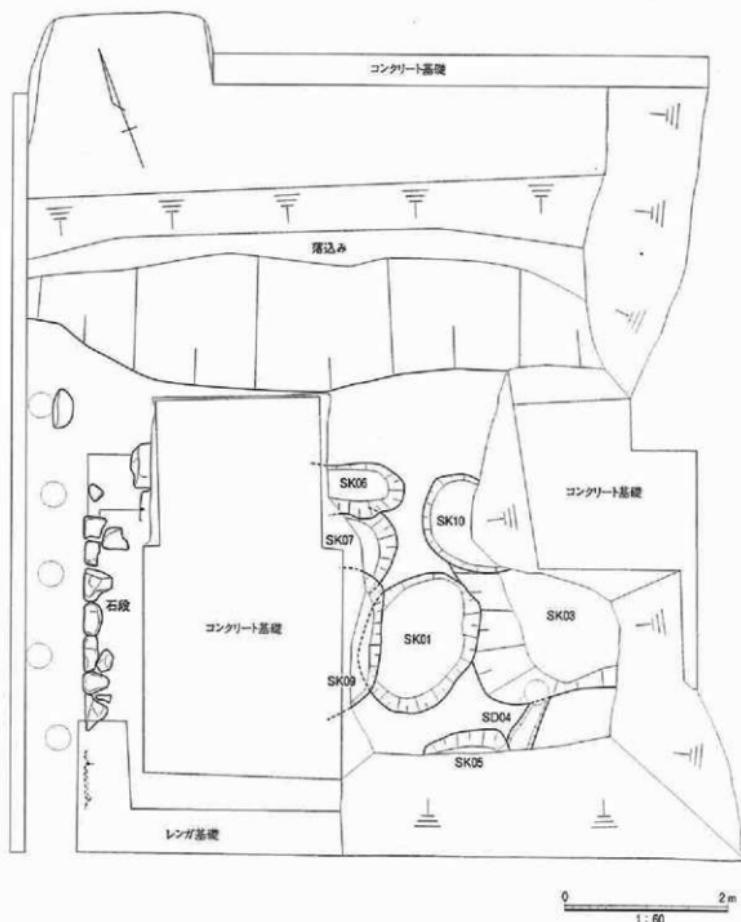


図9 第3層以前の遺構

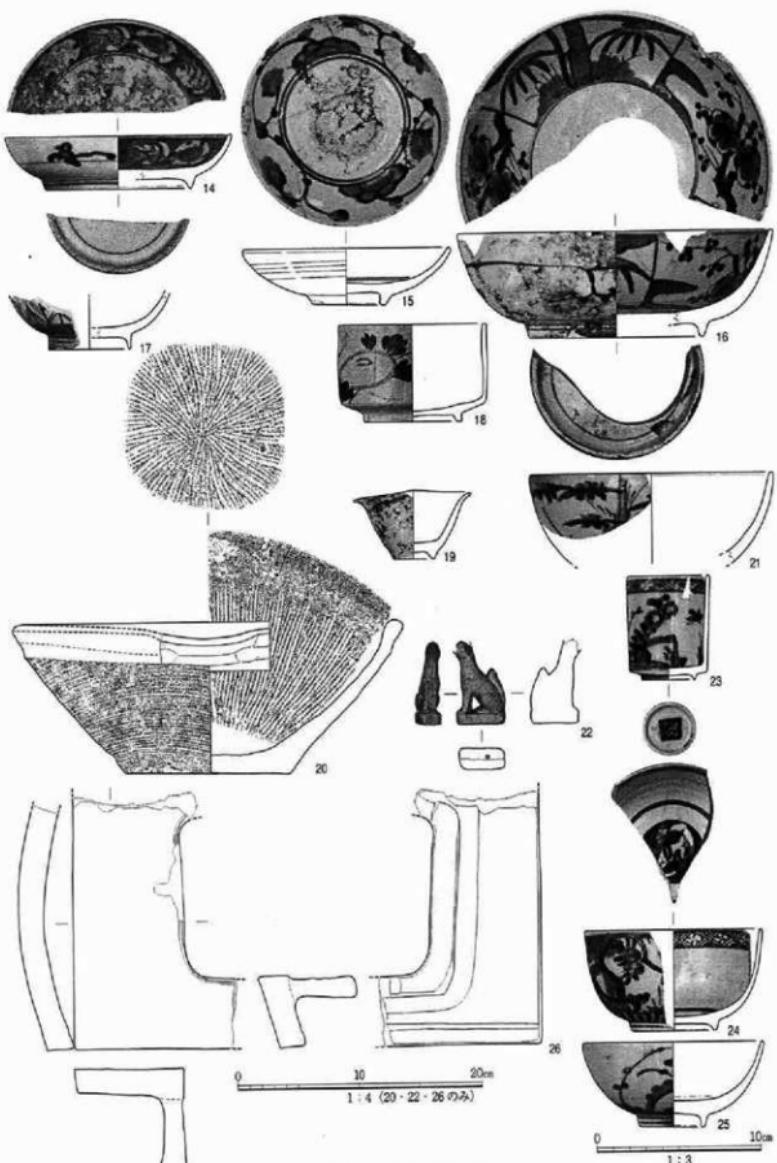


図10 第3層以前の遺構出土遺物①  
SK01(14~16・20・26)・SK03(17~19・21)・SK06(22~25)

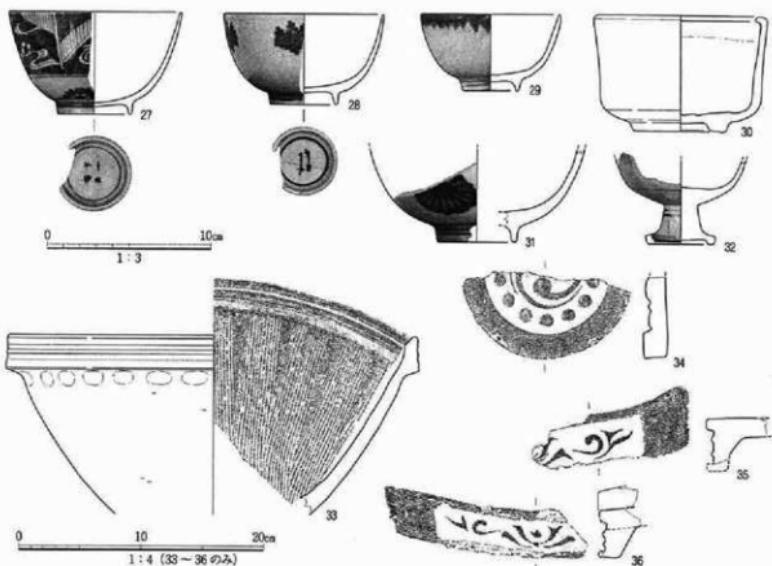


図11 第3層以前の遺構出土遺物②  
SK07(35・36)・SK09(34)・SK10(27~33)

口をもち、底部から直線状に開く体部に統き、口縁部に強いナデを施してやや外反させている。口縁部以外の内面は底面中心まで放射状の摺り目を全面に施し、また外面は水平のカキ目を全面に施している。胎土に長石を多量に含んでいる。市内では希少な例で、胎土や調整の特徴から北部九州、信楽、越前などに類例を求めるが、類似の資料を確認できていない。

SK03は調査区の東南隅にある土壤で、東側と北側が調査区外に延びるため、規模は不明である。埋土中に焼土偽礫や炭化物、スラグを含んでいる。肥前陶器の京焼風鉢18、肥前磁器小碗19・染付碗17・21などが出土している。18世紀前葉の資料である。

SK06は埋土中に炭化物を多量に含んでいる。肥前磁器染付小碗23、碗24・25、ミニチュア土製品22などが出土している。碗24など18世紀中～後葉に降る資料があるが、SK07を切る土壤であるため、遺構の時期は18世紀末以降である。

SK07は西側をコンクリート基礎で覆われているため全体は不明であるが、埋土の多くは炭化物や赤褐色化した瓦である。瓦には35・36のような18世紀代の大坂式唐草文軒平瓦がある。固化していないが、18世紀末に降る肥前磁器青磁染付碗が出土している。

SK09は長さ1.9m、深さ1.2mの土壤で、SK01・07を切る。SK07と同じく、埋土のほとんどが瓦で占められ、巴文軒丸瓦34などが出土している。SK07を切る土壤であるため、遺構の時期は18世紀末以降である。

SK10はSK03を切る遺構で、長さ0.8m程度である。肥前磁器染付碗27～29・31・仏飯器32・灰落

しましたは火入れ30、堀端鉢33などが出土している。33は前半以降とみられるほかは、いずれも18世紀前半の資料である。

### 3)まとめ

本調査地は豊臣期の大坂城下町跡で南限に想定されている場所付近に位置することから、豊臣期の遺構・遺物の検出が調査の主眼の一つであった。

その結果、確認できた遺構は、おおむね17世紀中～後葉、18世紀前～中葉、18世紀末以降の3時期にわたるもので、豊臣期のものは確認できなかった。しかし、最も古い第10A層に属する遺構からは豊臣期の遺物が少なからず併存していたため、本調査地の周囲に豊臣期に遡る遺構・遺物が存在していることが予想される。周辺の調査でも当該期の遺構が明らかになった例(OJ08-5次調査地)があり、また、城下町の形成初期とともに移転してきた「光徳寺」との関連も合わせると、南久宝寺通や博労町通一帯での積極的な調査が望まれる。

徳川期では、18世紀前～中葉の遺構に先行して、焼土偽礫を多量に含む整地層(第8層)が確認された。今回確認された範囲は非常に狭小であるため推論にとどまるが、1724(享保9)年の「妙知焼」との関連も注意しておくべきであろう。

また、18世紀末以降の遺構から、焼土・炭とともにスラグが出土していることから、周辺調査の進展によって、当該期における産業について新たな知見を得ることが期待される。

#### <引用・参考文献>

大阪市文化財協会2004、「大坂城下町跡」Ⅱ、pp.327-336

大阪市教育員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08-5)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」、pp.133-140

根田啓一1979、「失われた歴史を掘る」:「大阪の歴史」井上薰編 创元社 pp.37-104

調査区北部の地層断面  
(北西から)



第10A 層内の遺構  
(SK17)  
(北から)



第9層上部内の遺構  
(SK16)  
(南から)



第8層上面遺構  
(SD14)  
(南東から)



第3層基底面遺構  
(右からSK06・07・09)  
(北東から)



重機掘削後の  
遺構検出状況  
(南から)



難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW10-1)報告書

調査個所 大阪市中央区上町1丁目41  
調査面積 75m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年4月7日～4月18日  
調査主体 財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、市川創、大庭重信

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮跡の南部に位置している。地形としては、上町台地北端の平坦面から南東に降る斜面に位置している。この現在まで残る斜面は、かつてはより急峻な谷の北斜面であったことが発掘調査によって判明しており(図1)、調査区付近より東南東に延びる谷は「上町谷」と呼称されている[寺井誠2004]。

難波宮との位置関係においては、調査地北側で前期難波宮の宮城南門(「朱雀門」)が発見されており[大阪市文化財協会2004]、また調査地西側で実施された第49・52次調査において古代の柱穴が確認されているなど[難波宮址顕彰会1973]、宮殿南側における土地利用の様相解明が期待される地域であ

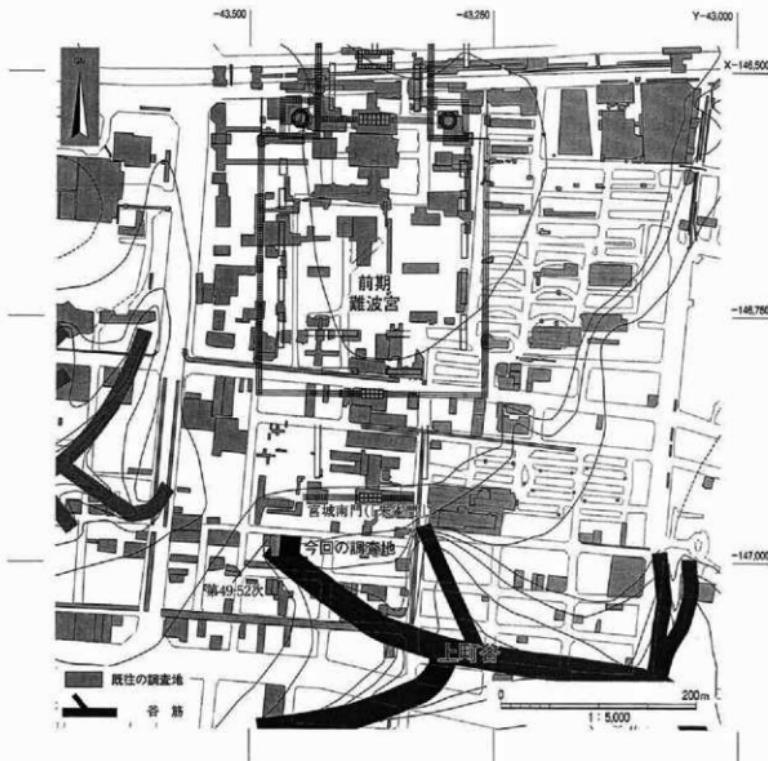


図1 調査地位置図(等高線および谷の復元は[寺井誠2004]による)

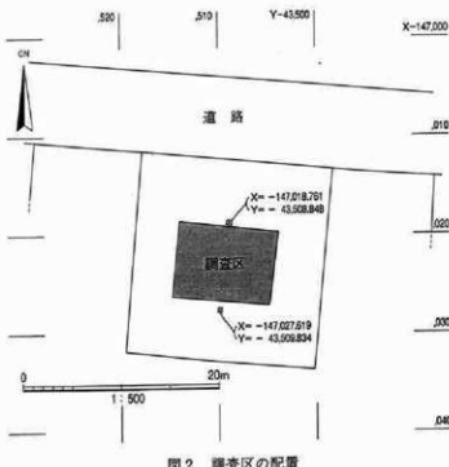


図2 調査区の配置

調査の手順は、まず着手前に事業者側で土留工事および現地表面から1.15mまで重機による掘削が行われたのち、2010年4月7日から調査を開始した。掘削は人力によって行い、遺構検出・掘り下げ・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。その過程で2基の初期須恵器窯が検出されたため、地層の剥取りなどを含む可能な限りの記録作業を行った。以上のような工程を経て、4月18日に機材類の撤収を含むすべての作業を完了した。

以下、本報告で使用する標高はTP値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示す。平面図はすべて座標北を基準として作図した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序

先述のように、調査着手時には現地表下1.15mまでの地層が除去されていた。そのため、以下ではこの深度以下で観察可能だった各層の特徴について述べる(図3・4)。

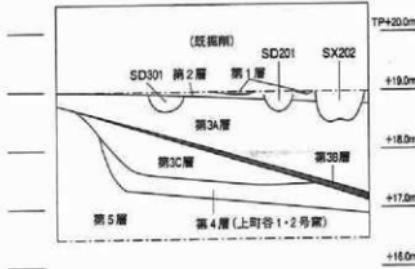


図3 地層断面模式図

る。また、周辺一帯には「法円坂倉庫群」をはじめとして難波宮造営に先立つ古墳時代の遺構群が展開しており[大阪市文化財協会1992]、後世に至っても豊臣期・徳川期における大坂城のあり方など、各時代における成果が注目されている。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下1.15m以下で奈良時代の遺構や豊臣期～徳川前期の遺構面を確認したため、東西10.0m、南北7.5mの範囲で発掘調査を実施することになった(図2)。

第1層：近世の盛土である。調査区南半でわずかに残存していた。層厚は最大で10cmである。

第2層：中世後期の盛土で、にぶい黄褐色(10YR4/3)を呈するシルト質中粒砂～細砂からなる。部分的に残存し、層厚は最大で7cmであった。本層からは須恵器・土師器・中国産青磁・瓦などが出土した。

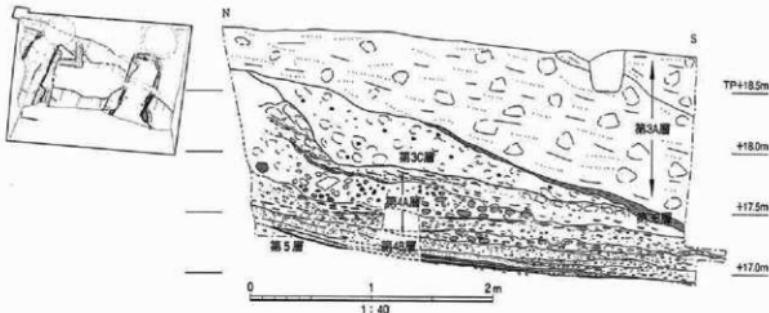


図4 地層断面図(上町谷1号窯部分)

第3層：古代の盛土・斜面堆積層などである。第3A～3C層に細分した。第3A層は8世紀の盛土層で、明褐色(7.5YR5/6)を呈する砂質シルトからなり、炭、および後述する第5層の偽縫が多く含む。最大層厚は140cm以上で南ほど厚く堆積しており、本層によって調査区はほぼ平坦に整地されていた。土師器・須恵器などのほか、瓦・凝灰岩など後期難波宮に係わる資料が出土した。第3B層は7～8世紀の自然堆積層で、褐色(10YR4/6)を呈する砂質シルトからなる。最大層厚は8cmで、第3C層によつて埋まり切らなかつた窪地に堆積していた。第3C層と厳密に区分して遺物を取上げることはできなかつたが、土師器・須恵器などが出土している。第3C層は7世紀の盛土で、灰褐色(7.5YR4/2)を呈する砂質シルトからなる。全体的に炭を多く含み、下部には第5層の偽縫を含んでいた。最大層厚は48cmであり、後述する上町谷1・2号窯が廃棄された後の窪地を埋め立てていた。本層からは図5に図示した須恵器杯H蓋1・身2・長頸壺蓋3、土師器高杯4などの土師器・須恵器のほか、初期須恵器や窓壁などが出土した。本層から出土した遺物は、口径10.0cmの1、受け部径11.2cmの2など難波Ⅲ中段階～新段階に位置づけられる資料を最新とする[佐藤隆2000]。したがつて、前期難波宮建設時、もしくはそれよりもやや遅れて、当地の整地が行われたことがわかる。

第4層：後述する上町谷1・2号窯に係わる地層である。窯跡の機能時の地層を第4B層、廃絶後の堆積層を第4A層とした。第4層の詳細については遺構の説明で述べる。

第5層：段丘構成層であり、調査区内で大きく南へ落ち込んでいた。上部は黄褐色(10YR5/6)を呈するシルト質細粒砂からなるが、下部は砂礫からなり、上方細粒化する傾向にあった。また、本層上面では乾裂痕や小断層が顕著に認められ、上位層には存在しない粘土質シルトで埋っていた。

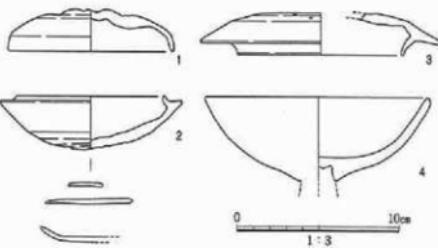


図5 第3C層出土遺物実測図

## ii) 遺構と遺物

### a. 古墳時代の遺構と遺物

第5層の上面において、初期須恵器2基を検出した(図6)。調査区は「上町谷」とされる谷筋に立地するため(図1)、以後はこの2基を上町谷1・2号窯と呼称する。なお、本報告における窯跡に関する用語については、「森内秀造・望月精司2010」にならうものとする(註1)。

上町谷1・2号窯は、上町谷へと落ちる斜面の肩部に築かれた東西2基の窯窓である。1号窯東端と2号窯西端の距離は4.6mであり、両窓とも長軸は等高線に対してほぼ直交する。窓跡は段丘構成層である第5層を掘り込んで築かれていた。当地一帯において、この第5層の最上部は大きな削平を受けていなければ一般的に細粒な堆積物で構成され、下部はほど粗粒となる。両窓の断面観察によれば窯窓のベースは粗粒砂～砂砾であり、また谷の斜面に立地するにも係わらず古土壤など窯窓に先行する地層が残されていなかったことから、窯窓に先立ち切り土による造成が行われた可能性がある。

煙道部は擾乱を受けており、燃焼部の大部分も調査区外であったため、両窓とも検出範囲は焼成部と燃焼部の一部であった。2基の間には浅い溝SD503が掘削されており、また調査区南部は第5層が急角度で落ち込んでいた。とともに、窓跡に付属する施設や造作であった可能性がある。

上町谷1号窯は、調査区西部で検出した窖窯である(図7)。後述する2号窯と同様の理由で、地下掘り抜き式から半地下天井架構式へと構造が改められたものと考えられる。床面および壁面の重複・

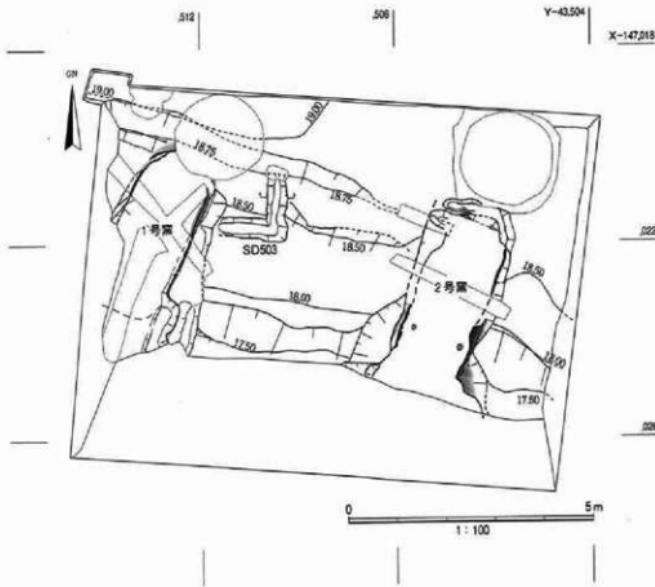


図6 第5層上面の造構

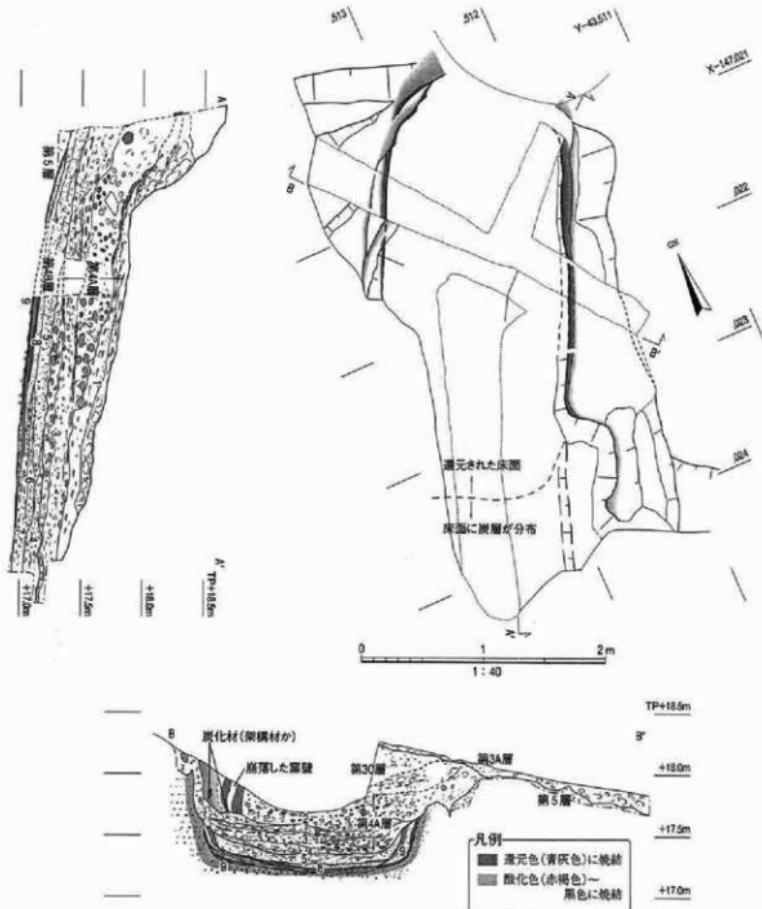


図7 上町谷1号窓実測図

切合の関係によって最低でも2回の改修が行われ、3次以上の操業が行われたことがわかるが、平面的に検出されたのは最終の第3次操業面のみである。

この第3次操業面では、焼成部はほぼ直線的に延び、燃焼部と考えられる部分でやや折がっていた。この直線的に延びる特徴的な平面形態は、窯窓から最終操業時まで大きな変更は加えられていない。第3次操業時における焼成部の規模は、長軸方向の水平距離で3.65m以上、同じく斜距離で3.70m以上を測る。焼成部の幅は1.30mで、断面形は凹状を呈し、側壁はやや外開き気味に立ち上がる。主軸断面についてみた場合、床面は若干反るが、平均傾斜角は8°であり普通としては比較的緩やかである。床面の状況は、焼成部が還元された貼床であるのに対し、燃焼部は偏燃化した炭が堆積する状況であった。第3次操業時に限らず燃焼部の堆積は複雑な状況を呈しており、窓出しの際などにこの部分を掘り下げ、操業時に再度整地していた可能性が高い。なお、床面上にはごくわずかな遺物しか残っていなかった。

次に断面図から、当窯の窯窓から埋没までの過程を復元する。まず窯窓された段階から、側壁には貼土が行われている(図7-⑨層)。いっぽう、床面は改修時に削除され本来の操業面を留めていないものの、段丘構成層である第5層をそのまま使用していた可能性がある(同⑨層)。その後、第1次補修の際に7cm(同⑧層)、第2次補修の際にも7cm(同⑤層)の貼土が行われ、床面が上昇するとともに窯体幅も減じている。燃焼部付近は焼結しておらず(同④層)、操業後に製品の取り出しなどのために掘り下げられた可能性が高い。廃絶後は、窓壁の崩落などによって埋まり(同①-③)、最終的には、7世紀中葉～後葉に行われた整地作業(第3C層)によって埋没する。

本窯の構築技術に関する情報はあまり多くないが、崩落した壁面中に炭化材が認められ(図8、B-断面)、天井の架構材であった可能性がある。また後述する2号窯とは異なり、窯体内には崩落した天井を認めることができなかつた。

上町谷2号窯は、調査区東部で検出した普通窯であり、後述する理由によって地下掘り抜き式から半地下天井架構式に改修されたものと考えられる(図8)。床面や壁面の状況から最低でも4回の改修が行われ、5次以上の操業が行われたことがわかる。このうち平面的に検出できたのは第4次操業面のみであり、また第5次操業面は空焚きの段階で天井が崩落していた。

第4次操業面は、1号窯と同様に直線的に延びる焼成部の平面プランをもち、燃焼部と想定される部分でやや折がっていた。平面プランは、窯窓当初から窓窓まで大きな変更は行われていない。第4次操業面における焼成部の規模は、長軸方向の水平距離で3.75m以上、同じく斜距離で3.80m以上を測る。焼成部の幅は最大で1.48mであり、1号窯よりも若干大型である。第4次操業時には、断面形状は凹状を呈している。主軸断面における床面形状は直線的で、平均傾斜角は約11°である。窯の各操業面を通じて、床面の傾斜角には大きな変更は加えられていない。床面の状況は、焼成部が還元された貼床であるのに対し、燃焼部は細片化した窓壁・炭を敷いていた。

断面図によって当窯の変遷を見る。まず窯窓段階では、床面・側壁とも貼土を行わず、第5層が露出する状態であった可能性が高い(図8-⑧層)。ただし、側壁の立上がり部には、補強のためか部分的に貼土が行われていた。この第1次操業時の断面は水平方向に長い橿円形を呈しており、断面形状

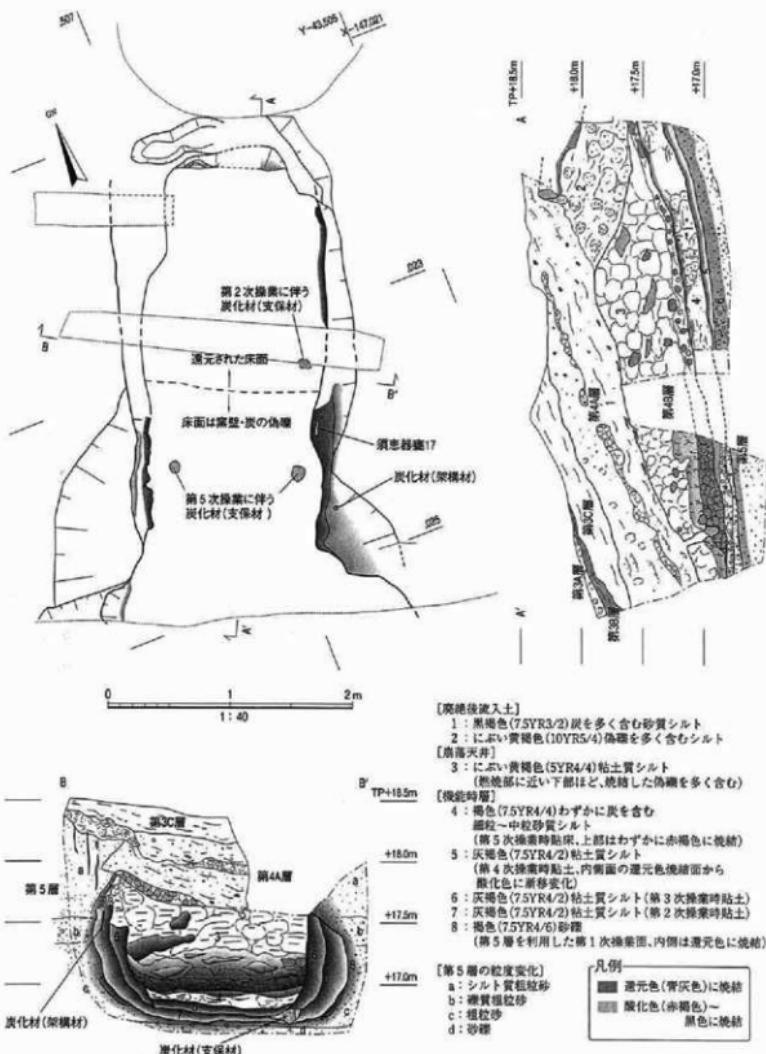


図8 上町谷2号窓実測図

や掘込みの深さから考えて、少なくとも窯の上半部は地下掘り抜き式の構造を探っていた可能性が高い[森内・望月2010]。その後、第2次操業時(同⑦層)、第3次操業時(同⑥層)には床面・側壁とともに貼土が行われ、第4次操業時には床面のみを貼り直していた(同⑤層)。また第2次の改修の際には、焼成に失敗した須恵器大甕(図11-17)を壁面に塗込み、構築材の一部として転用していた。その後、再度貼床(同④層)を行い焼成を試みるが、天井が崩落し(同③層)、廃絶に至ったようである。崩落した天井の貼り土は窯の上部ほど厚く堆積しており、最大で0.72mであった。なお、他の操業面が還元され青灰色を呈するのに対し、最終操業面となる④層の上面はわずかに赤褐色に変色する程度であり、また天井が崩落しているにも係らず窓内に遺物は残されていなかった。このため、最終操業時には窯体内を乾燥させる空焚きの際に天井が崩落したと考える。以上のような計4回の改修を経て、当窯では床面は0.25m上昇していた。

なお、最終操業時に崩落した天井は粘土質シルトからなる貼土であり、天井は確実に架構されたものである。したがって、当窯では窯窓当初の地下掘り抜き式から半地下天井架構式に改修された可能性が高い。改修に伴って窯の断面形状は楕円形から凹状に変化しているが、同様に断面形状を変化させながら地下掘り抜き式から半地下天井架構式への改修を行った例として、TK235号窯を挙げることができる[大阪府教育委員会1976]。当窯で改修が行われた要因としては、窯のベースとなる第5層が砂礫を主体としており、熱によって焼結しにくく地下掘り抜き式に適していなかった可能性を考えられる。

本窯の構築に係る痕跡としては、第4次操業面の焼成部で左右1対の炭化材を、また断面観察において第2次操業面で炭化材を検出した。いずれも垂直方向に打ち込まれており、また壁面に塗り込まれていないことから、焼成中に焼き切れることを前提とした天井貼土の支保材であったと考える。支保材の直径は10cmほどであった。また第2次操業に伴う貼壁中の2箇所で、架構材である可能性が高い炭化材を検出している。直径は3cm程度で、支保材よりも細い材を使用していた。

上町谷1・2号窯から出土した遺物は、図9～11に示した。両窯出土資料には明瞭な型式差を認めることができず、また窓体が陥没した後に流入した第4A層からも時期の下る資料は出土していない。そのため、以下では両窯の焼成面などに残された資料と第4A層出土資料を、窓跡に伴う資料として一括して報告する。各資料の出土位置・計測値などについては、表3を参照されたい。また、古代の盛土である第3C層、および窓跡上部に掘削されたSX203出土遺物のうち、資料の特徴などから窓に係わると考えられる資料を抽出し、図13に示している。

両窯から出土した資料には、須恵器・韓式系土器・土師器がある。このうち両窯で焼成されたものは前2者とみてよいだろう。土師器はいずれも細片であり、図示できるものはなかった。

須恵器の出土量は、接合作業後の破片数で105点、重量で8,884gであった。使用された胎土は大きく二分でき、直径2mm以下の長石を多く含み砂質なA類と、これよりもやや緻密なB類がある。このうち特にA類については、いわゆる陶邑産の製品に使用される緻密で粘土質な胎土とは肉眼観察でも明瞭な違いがある(写真1)。比率としては、出土資料全体でみればA類が破片数で約75%、重量で約80%と多く使用されている(表1)。帰属する窓跡が特定・推定できる資料では、1号窯でA類が22

点(61%)、B類が14点(39%)であるのに対し、2号窯ではA類が31点(89%)、B類が4点(11%)であり、1号窯でB類が多い傾向にある。なお、器形による明瞭な胎土の使い分けは認められなかった。

須恵器の器形には、高杯・杯などの杯類のほか、壺・器台・瓶・甕がある。比率についてみると、甕が破片数で79点(75%)、重量で7,904g (89%)と圧倒的に多く、他の初期須恵器生産窯と同様のあり方を示している(表2)。なお当然ながら、出土遺物は焼損したり二次的な降灰を受けた焼成失敗品がほとんどである。

以下では個別の資料について報告し、窯跡の年代的位置づけなどについては後述することとする。

**高杯** 高杯には、無蓋高杯5、および脚部6がある。5は内外面をナデ調整し、杯部に1条、脚部に2条の突帯を巡らせる。突帯の断面は三角形状で比較的鋭い。口縁端部内面は浅い沈線状に凹んでいる。脚部は上部を細く絞り込んでいる。また、脚部のスカシ孔は認められなかった。6は焼成不良で土師質を呈し、杯部との接合面で剥離している。底径・高さは5とはほぼ同様であるが、上部はあまり絞り込まれていない。

**壺** 口縁部7を図示した。灰白色を呈する瓦質の焼上がりで、外面に突帯と波状文を巡らせる。波状文は8条を1単位とする。調整は回転ナデである。他の器形も含め、今回出土した資料中に認められる文様は波状文のみである。器形を特定できないが、螺旋状沈線と思われる文様を施した体部片14も壺の可能性がある。外面のタタキ原体は格子目状だが、平行タタキを直交方向に施したものと思われる。

**器台** 高杯形器台9と、脚部10~12、筒形器台の可能性がある13を図示した。9は5段の突帯を巡らせ、その中に8条を1単位とする波状文を施している。最上部は内面が凹んでおり、口縁部近くでみるとわかる。調整は内・外とも回転ナデである。復元的に図示したが、歪みが著しく、本来の形状とは若干異なる可能性がある。脚部10~12はいずれも波状文を施し、スカシ孔を穿っている。スカシ孔の形状がわかる資料はないが、傾きなどから考えておそらくは長方形であろう。13は土師器質に焼成され、長方形のスカシ孔を4方に穿っている。外面は継方向のナデで調整し、内面には粘土組の

表1 胎土の組成

胎土 分類	1号窯			2号窯			その他			合計		
	数	%	重量	%	数	%	重量	%	数	%	重量	%
A類	22	61%	1082	58%	31	89%	4246	92%	25	74%	1796	76%
B類	14	39%	798	42%	4	11%	378	8%	9	26%	584	24%
合計	36	100%	1880	100%	35	100%	4624	100%	34	100%	2380	100%
									105	100%	8884	100%

\*「数」は破片数、「重量」の単位はグラムである。

表2 器種構成

器種	破片数		重量	
	数	%	グラム	%
高杯・杯類 (蓋含む)	3	3%	178	2%
壺類	4	4%	164	2%
器台	7	7%	351	4%
瓶	2	2%	80	1%
甕	79	75%	7904	89%
不明	10	10%	207	2%
総計	105	100%	8884	100%

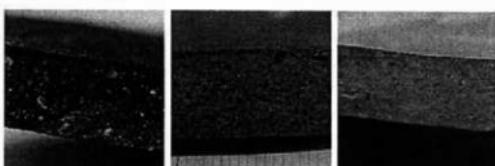


写真1 上町谷1・2号窯と南邑壺製品の胎土

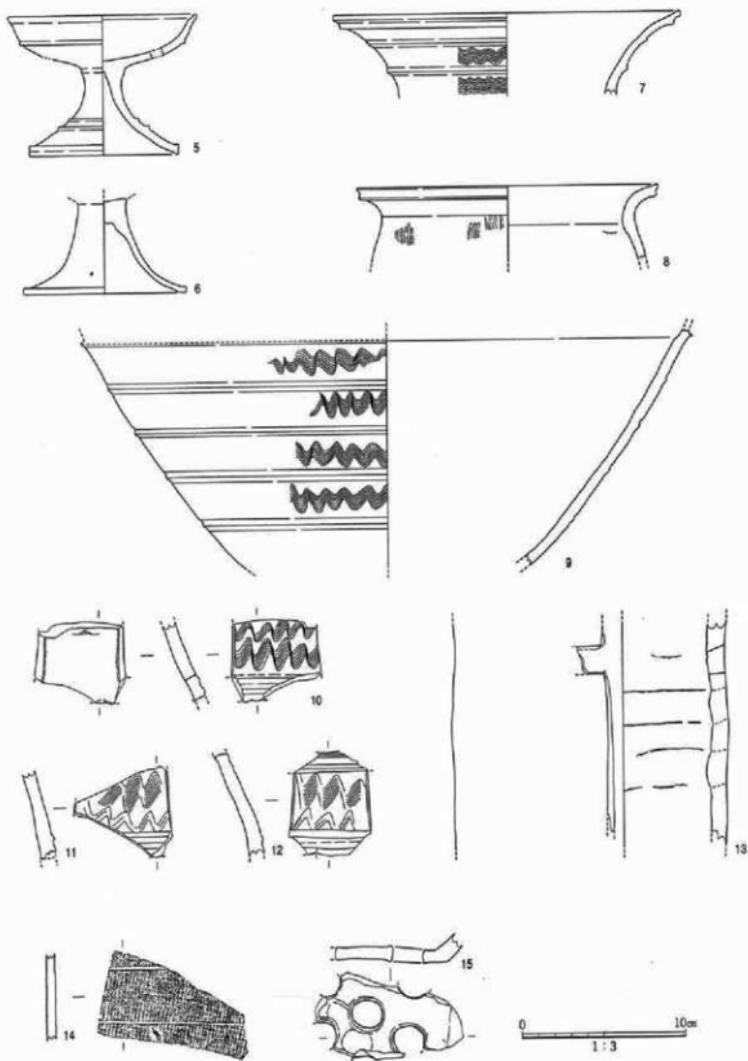


图9 墓葬出土遗物实测图(1)

痕跡が顕著に見られる。筒形器台の焼成不良品である可能性が高い。

瓶 底部15がある。15は底面をヘラケズリとユビオサエで整形し、それ以外の部分をナデで調整する。蒸気孔は小円孔を6個以上穿つ。

甕 口縁部16、頸部17、体部18、底部19のほか、甕と断定できないが口縁部8を図示した。16は口縁部端下方に突帯を付加する。先端部を欠損するが、端部は面をなす。17は補修材として2号窯の窯壁に練り込まれていた。外面はわずかに平行タタキの痕跡を留めるが、ほぼ完全にナデ消されている。内面も同様にナデ消されており、頸部と体部の接合痕を除いては、ごくわずかな凹凸が認められるのみである。本例に限らず、甕についてはほとんどの資料ではほぼ完全なスリケシが行われ、18のように成形痕を留める資料はわずかである。18は焼成中に剥離したものと思われる。外面には平行タタキ痕が認められる。19は底面付近の資料であり、内面が引擗れたようになっている。大阪府堺市のTG232号窯などで報告されている資料と類似しており[大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会1995]、底部の中心が残存していないが、シボリ技法によって底部が閉塞された可能性が高い。8は外面に平行タタキで整形し、内面をナデで仕上げる。口縁部は端面をわずかに凹ませており、27・28と共に通する形態である。また、内面には粘土紐の接合痕をわずかに留める。

また韓式系土器には、甕20、平底鉢23のほか、器種不明の体部21・22・24・25がある。甕の口縁部20は内面に粘土紐の接合痕を残す。胎土・焼成により韓式系土器と考えたが、形態からは土師器の

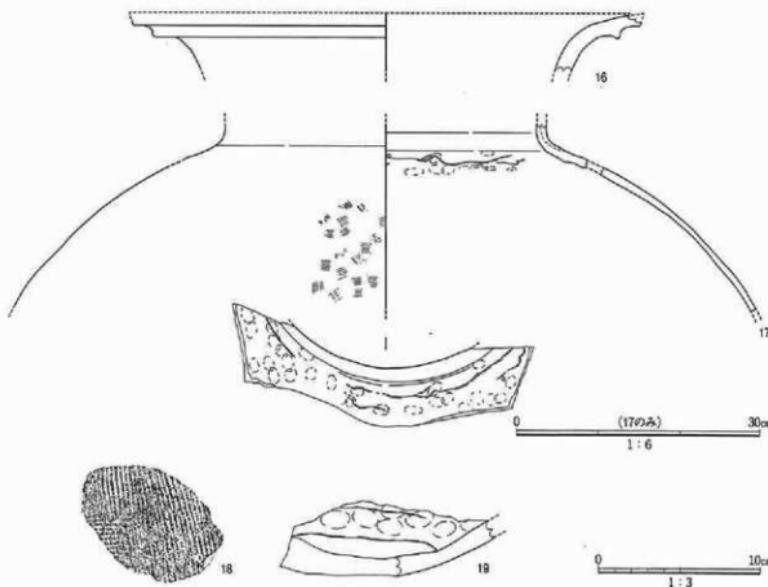


図10 窯跡出土遺物実測図(2)

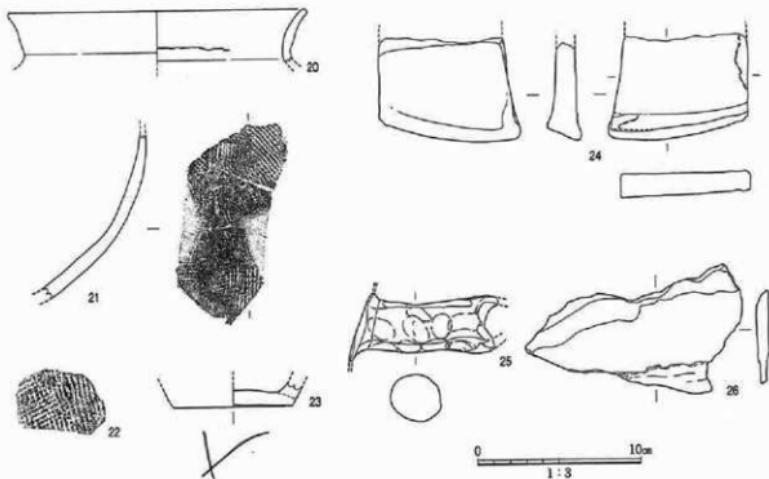


図11 窯跡出土遺物実測図(3)

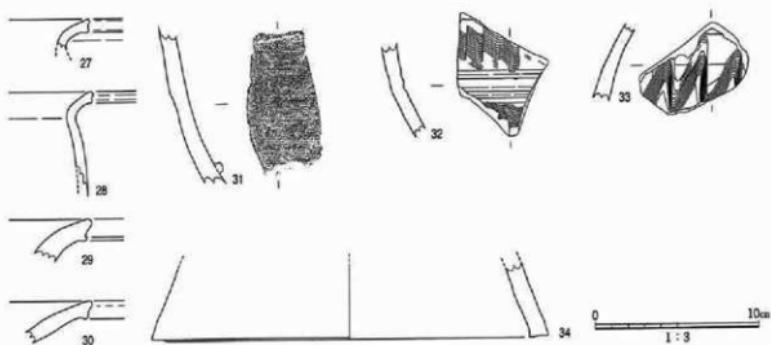


図12 窯跡上層出土遺物実測図

可能性もある。平底鉢の底部と考えられる23は、底面にヘラ記号「×」がある。剥離痕から、まず円盤状に底部を成形し、その上に粘土紐を積み上げたことがわかる。21・22は外面を平行タタキで整形する。このうち21は直交する方向にタタキを施しているため、一見すると格子目タタキ状である。著しく軟質の不明品24は3辺が残存しており、そのうち1辺が肥厚している。U字形土製品である可能性がある。把手状の25は赤褐色を呈し、一般的な韓式系土器の焼成に近似する。実測図左側は平坦な面から剥離した痕跡があり、右側は棒状の物体に接面していた可能性が高い。瓶などの把手のほか、窯道具である可能性もある。26は結晶片岩である。近隣には産出しない石材であり、須恵器生産に係わって搬入された可能性がある。なお、図示しなかったが他にも挙大の円盤が数個出土している。焼き台などと

して使用された可能性を考えたが、明瞭に被熱痕を有するものはなかった。

これらのほか、図12には、第3C層およびSX203から出土した資料のうち、本窯で生産された可能性が高い資料を示した。27~34はいずれも須恵器であり、このうち27・28は

壺と思われる口縁部、29・30は壺の口縁部である。壺の頭

部と思われる31は、外面にカキメを施している。32は器台であり、波状文を施す。33は器台あるいは壺である。波状文は浅く軽やかで、上下に大きく工具を動かす特徴的な文様である。34は台付壺などの脚部と考えられる。

SD503は、両窯の間に掘削された深い溝である。南北は1.3m以上の規模があり、西へはほぼ直角に曲って1.3m伸び、1号窯に接続する。幅は0.44m、検出面からの深さは0.08mであった。埋土は下部に第5層の偽窯を含む加工時形成層があり、炭を含むシルト質細粒砂で埋る(図13)。須恵器窯に伴って一般的に検出される溝とは窯体との付き方が異なっており、両窯との関係は明確ではない。第3・4層を除去した後に検出した遺構であるが、方位からみて難波宮に係わる遺構であった可能性も考えう

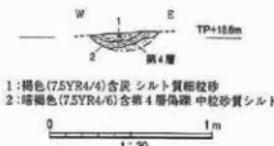


図13 SD503断面図

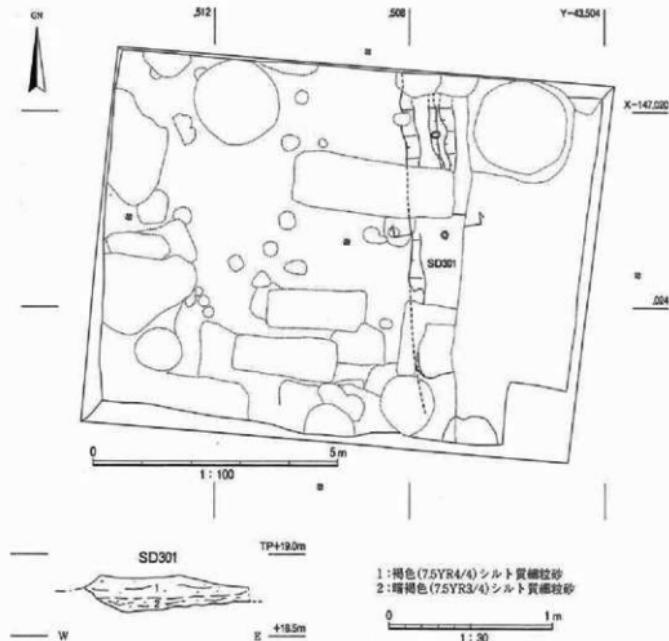


図14 第3層の遺構

る。遺物は出土しなかった。

#### b. 中世前期の遺構と遺物

第3層の上面において、溝SD301を検出した(図14)。

このうちSD301は南北に延び、長さ5.80m以上、幅1.00m以上の規模がある。検出面からの深さは0.24mであった。遺構の方向は北で約3°西へ振っており、真北とも、北で約8度東へ傾く敷地の方向とも一致しない。埋土は褐色(7.5YR4/4)を呈するシルト質細粒砂からなり、下部は若干粘土質で、やや暗色(7.5YR3/4)を呈していた。本遺構からは、瓦器のほか、古代以前に属する土師器・須恵器・瓦の各細片が出土している。

#### c. 中世後期～徳川初期の遺構と遺物

第2層の上面において、溝SD201および掘立柱建物SB202、堀状遺構SX203、および18世紀以降の遺構群を検出した(図15)。

このうちSD201は東西に延び、長さ6.20m、幅1.0mの規模がある。東側はSX203に切られ、検出面からの深さは最大で0.27mであった。遺構の方位は東で南へ約2°振っている。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3～4/4)を呈するシルト質細粒～中粒砂であり、下部は炭を含む若干粘土質であった。遺物は古代に属する土師器・須恵器のほか、瓦質土器・備前焼・瀬戸美濃焼陶器など中世後期までの土器類が出土した。

SB202は、SD201の南側にこれと平行して掘削された柱穴列である。構として復元できる可能性がある。

SX203は調査区の東端で検出した。北でわずかに東へ振って南北に延び、南北7.20m以上、東西2.45m以上の規模がある。底面の形状は凹凸が著しく複雑であったが、検出面からの深さは最大で0.57mであった。埋土は下部に褐色(10YR4/4)～暗褐色(7.5YR3/4)を呈し炭を含むシルト質中粒砂～小礫があり、上部は第3層の偽縛や炭を含むシルト質中粒砂～細縛で埋められていた。本遺構からは土師器・須恵器のほか、瓦質土器・肥前焼器・肥前磁器・中国産磁器・瓦などが出土し、このうち中国産の白磁35、青花36、肥前陶器碗37を同化した(図15)。細片ながら肥前磁器を含んでおり、埋没時期は徳川初期に求められる。

### 3) 上町谷1・2号窯について

今回の調査で検出した2基の初期須恵器窯について、その時期を検討する。まず遺物について、今回得られた資料は窯跡という遺構の性格からすればごくわずかであったが、甕の占める割合が多いこと、またその整形痕が丁寧にスリケシされていることなどから、初期須恵器の範疇で捉えられることは確実である[田辺昭三1981]。窯跡出土資料で確認できる初期須恵器型式については、各研究者によって若干の型式認識の相違はあるが、おおむねTG232(・231)型式→ON231型式(=TK73型式古段階)→TK73型式新段階→TK216型式→ON46段階(TK208型式前半段階)とする変遷過程[田中清美2002ほか]に異論はない。問題は、当窯で焼かれた製品がどの段階に位置付けられるかである。今回出土した資料の中では、

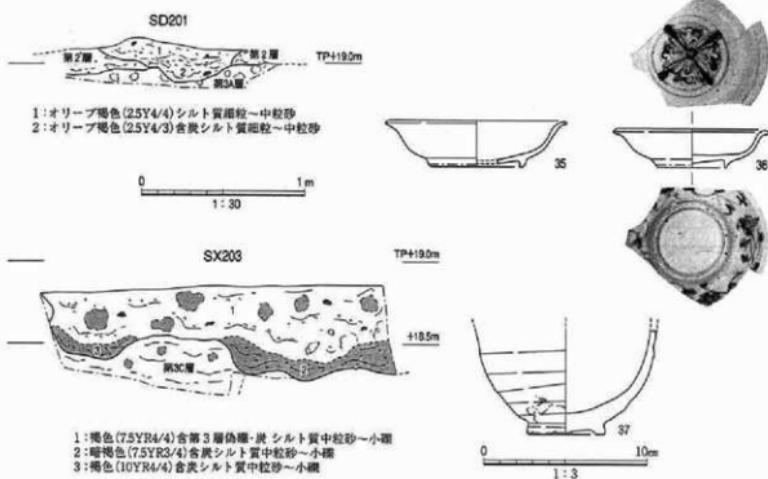
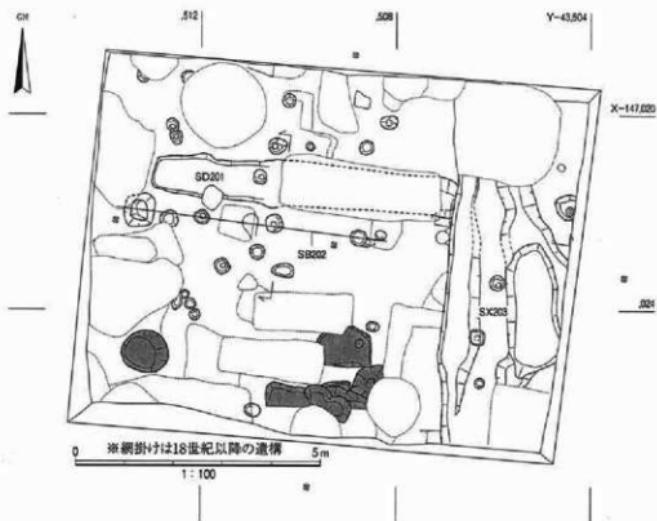


図15 第2層の遺構とSX203出土遺物

- ①壺の底部19が絞り目技法で成形された可能性があること  
 ②高杯の脚部に比較的締まっているもの5と開くものの6が併存すること  
 ③壺の口縁端部に明瞭な面を持たせる個体16があること  
 ④壺の外面にもスリケシを行なう資料が多いこと  
 ⑤文様が波状文のみで構成されていること

などが型式決定の基準となろう[植野浩三1995]。

このうち①については、ON231号窯以降の窯跡資料では認められない。②については、5はON231号窯以前で多い形態、6はTK73号窯以降で多い形態だが、離散的な属性ではない。ただし口縁部形態も含めるならば、5はTK216型式に下る可能性もある。③もTK73型式、あるいはTK216型式で顕著になる形態だが、それ以前の資料にも存在しており、やはり離散的な属性ではない。④はTK73号窯以降で減少する属性である。また資料数が限られていることから、鋸歯文や組紐文といつ

表3 初期須恵器窯の各部計測値([植野浩三1999]により作成し本窯の値を追加、単位:m)

窯跡名	時期	全長		焚口 焼成部 長さ	焚口幅	焼成部 幅	焼成部 角度	横断 面形	床枚数	煙出し 長さ	備考
		水平距離	斜距離								
出合窯跡	3.4C					1.2	10	四			
小狭1号窯	TG232					1.76		四			
小狭2号窯	TG232					1.5		四	有		
山隈1号窯	TG232					1.7		U	2		
居留敷窯	TG232	6	約6.8	約5.6	1	1.2	25	四	2	1.0	
奥ヶ谷窯	TG232					1.22	20	U	2		上部に排水溝柱穴有り
三郎池西岸窯	TG232	(5)				2.15	15	四	0		
吹田32号窯	TG232	(3.58)	(4.05)			1.48	20	四		1.2	
一須賀2号窯	TG232	9	約9.75	約8	1.3	2	20	四	数回	1.75	
隈・西小田No.10 2号窯	TK73					1.9	21	四			
隈・西小田No.10 3号窯	TK73					2	19	四			
TK73号窯	TK73	11.4	約11.8	約10.9	0.9	2.4	19	四	5		天井貼り壁10枚
TK85号窯	TK73	10.6	約11.6	約11.6	1.4	2.6	27	四	2~3		
TK87号窯	TK73	10.1	約11	約9.6	0.7	2.4	18	四	2		上部に排水溝
城山2号窯	ON46	7.5	約8	約8	0.9	1.3	30	四	2		
大蓮寺窯	ON46	(4)				1.65	8	四	0		
上町谷1号窯		(3.65)	(3.70)	不明	不明	1.30	6	四	3		壁面と併せ3次以上の操業
上町谷2号窯		(3.75)	(3.80)	不明	不明	1.48	11	四	4		壁面と併せ5次以上の操業

表4 初期須恵器窯の分類([植野浩三1999]により作成)

分類	窯体平面形	燃焼部・焼成部 規模	主軸立面形	焼成部後端部 形態	煙出し形態	該当窯跡
直線型	直線的、 寸胴	小、 長さ8m未満 幅2m未満	直線的傾斜	屈曲して立上がる	煙突形	居留敷窯跡、 奥ヶ谷窯跡、 吹田32号窯跡、 一須賀2号窯跡、 (三郎池西岸窯跡)
曲線型	曲線的、 焼成部膨らむ	大、 長さ10m以上 幅2.4~2.6m	曲線的傾斜	曲線で連なる	焼成部一体形	TK73、TK85、TK87号窯跡

た古相を呈する文様が存在しないこと(⑤)をもって新しく位置づけることにも無理がある。

次に窓跡の平面形態からみれば、燃焼部や煙出し部を欠くものの当窓は2基とも「直線型」に分類でき、TK73号窓に先行する形態である(表3・4)。

以上を総合するならば、当窓の時期はON231型式を含んだ広義のTK73型式を中心とするもので、一部の資料についてはTK216型式に下る可能性があると考えるのが妥当であろう。①の属性はこの型式比定よりも古相を呈するが、現段階では、窓跡ごとに存在した整形や形態の特徴の1つと捉えておく[田中2002]。いずれにせよ、周辺における調査の進展を待って再評価を行う必要がある。

なお、当窓におけるA類の胎土については、当調査区から南へ約460mの位置で行われた大坂城跡(OS99-16次)における第5c層出土の初期須恵器などに類例があり[大阪市文化財協会2002]、B類の胎土については北東約400mの位置で行われた難波宮跡(NW08-3次)出土資料に類例がある[大阪市文化財協会2010]。ただし、いずれも谷地形の中に投棄されたとみられる資料であり、今後既存の出土例の再検討なども含め当窓で生産された製品の供給先の特定を行っていく必要がある。

また、かつて後期難波宮大坂殿下層で窓状の遺構SX3381が検出され、ON46段階に属する須恵器甕が出土している[大阪市文化財協会1995]。この資料についてはともすれば等閑視されてきたが、今回の調査で上町台地北端部において初期須恵器生産が行われていたことが確実となった。遺構の性格などについて、今回検出した窓と継続的に生産された可能性も含めて再評価する必要がある。

古墳時代の上町台地北端部については、これまで法円坂倉庫群に代表される政治・経済の中心地として論じられることが多かった。しかしながら今回の発見により、当時最先端の手工業生産技術についても殖産が行われたことが明らかとなった。今後、こうした諸要素を有機的に併せ論じていく必要がある。

#### 4)まとめ

最後に、今回の調査成果を時代順にまとめておく。

- ・2基の初期須恵器窓、上町谷1・2号窓を検出した。両窓の操業時期はTK73型式を中心としつつ、TK216型式まで下る可能性がある資料を含む。上町台地北端部の開発史を考える上で重要な発見であるばかりでなく、全国的な視野で見た場合にも、古代窓業史や古墳時代史における考古学的研究の進展に資する成果である。
- ・7世紀には、前期難波宮造営時、あるいはそれよりも若干遅れて、整地が行われていた。ただし、谷地形を平坦化するには至っておらず、また整地層上面に遺構は認められなかった。
- ・8世紀には、後期難波宮造営に近接した時に再度整地が行われていた。この整地により調査地はほぼ平坦化されたが、整地層上面にはやはり遺構は認められなかった。ただし、第5層上面で検出したSD503は、7世紀あるいは8世紀に属する可能性がある。
- ・中世前期には溝SD301等が掘削された。遺構の方向は北で西へ約3°振れており、自然地形とも一致しない。
- ・中世後期では溝SD201、また徳川初期に埋る場状遺構SX203を検出した。SX203の性格は判然

としないが、南東で行われた調査(NW95-10次)において同時期の東西溝が検出されており[大阪市文化財協会2004]、関連する可能性がある。

(註)

1)今回の調査においては、発掘調査中に、あるいは遺物整理の過程で、以下の方々にご指導・ご教示を頂きました。記して感謝いたします。

井上主税・尾野善裕・植野浩三・木下亘・関川尚功・河承哲・平尾政幸・藤田憲司・難原学・水橋公恵・森内秀造・柳本照男(順不同、敬称略)

[引用・参考文献]

植野浩三1995、「最古の須恵器型式設定の手続き」:『文化財学報』第13集 奈良大学文学部文化財学科、pp.123-138

1999、「初期須恵器窯の構造的特徴」:『瓦衣千年 - 森都夫先生還暦記念論文集 -』 同論文集刊行会、pp.108-122

大阪市文化財協会1992、「難波宮址の研究」第九

1995、「難波宮址の研究」第十

2002、「大阪城跡」V

2004、「難波宮址の研究」第十二

2010、「難波宮址の研究」第十六

大阪府教育委員会1976、「陶邑」I

大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会1995、「陶邑・大庭寺遺跡」IV

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」:『難波宮址の研究』第十一 大阪市文化財協会、pp.253-265

田中清美2002、「須恵器定型化への過程」:『田辺昭三先生古稀記念論文集』 真陽社、pp.207-226

田辺昭三1981、「須恵器大成」 角川書店

寺井誠2004、「難波宮成立期における土地開発」:『難波宮址の研究』第十二 大阪市文化財協会、pp.161-170

難波宮址顕彰会1973、「難波宮跡研究調査年報」1973

森内秀造・望月精司2010、「須恵器窯の基本用語整理と構造分類」:窯跡研究会編『古代窯業の基礎研究 -須恵器窯の技術と系譜-』 真陽社、pp.13-80

表5 出土遺物観察表

指紋番号	種類	器形	部位	出土状況		法量(単位:cm)			整形・調整技法		胎土			焼成
				層位	遺構名	出土位置	口径	高さ	底径	外面	内面	色調	含有鉱物	
5	須恵器	無蓋高全形杯	全形	第4A層	2号窓	-	12.0	8.3	9.2	回転ナデ	回転ナデ	灰色(N5/1)	灰石(直径1mm以下)	A類 良好
6	須恵器	高杯	脚部	第4A層	2号窓 東西竪	-	(5.8)	9.8	不明	不明	回転ナデ	褐色(7.5YR7/6)	長石・石英・チャート(直径3mm以下)	A類 不良
7	須恵器	広口壺	口縁部	第4A層	2号窓	-	21.1	(5.05)	-	回転ナデ	回転ナデ	内:灰色(N6/)外:褐色(5PB7/1)	長石・石英・チャート(直径1mm以下)	B類 良好
8	須恵器	壺	口縁部	第4A層	-	-	18.2	(4.6)	-	平行タタキ 後ナデ	平行タタキ 後ナデ	灰色(N6/)～ 灰黄色(2.5Y7/2)	長石(直径2mm以下)	A類 不良
9	須恵器	高杯形器台	体部	天井崩落土	2号窓 南北竪 北半	-	(13.4)	-	回転ナデ	回転ナデ	外:褐色(N3/) 内:灰色(N6/) 断:暗青灰色(5RP4/1)	長石(直径2mm以下)	A類 良好	
10	須恵器	器台	脚部	第4A層	2号窓	-	-	(4.95)	-	カキメ状	回転ナデ	灰色(N4/)	長石・石英(直径1mm以下)	A類 良好
11	須恵器	器台	脚部	第4A層	2号窓 東西竪	-	(5.45)	-	不明	回転ナデ	内:褐色(5PB3/1) 外:オーブン黑色(5Y3/1)	長石・石英・チャート(直径3mm以下)	A類 良好	
12	須恵器	器台	脚部	天井崩落土	2号窓	-	-	(6.35)	-	不明	回転ナデ	内:灰色(N4/) 外:暗青黄色(2.5Y4/2)	長石・石英・チャート(直径1mm以下)	A類 良好
13	須恵器	筒形器合状製	脚部	第4A層	2号窓 上部のくぼみ	-	(16.0)	-	ナデ	ナデ	外:にぶい褐色(7.5YR7/4) 内:褐色(10YR8/4)	長石・石英・チャート(直径5mm以下)	A類 良好	
14	須恵器	瓶	体部	第4A層	1号窓	-	-	(5.40)	-	格子目タタキ	ナデ	内:灰黄色(2.5Y4/1) 外:灰色(N4/)	長石・石英・チャート(直径3mm以下)	A類 良好
15	須恵器	瓶	底部	第4A層	1号窓	-	-	(1.8)	-	底面:ヘラ ケズリ後エビオサエ 体部:ナデ	ナデ	黄灰色(2.5Y5/1)	長石・石英・チャート(直径2mm以下)	A類 良好
16	須恵器	甕	口縁部	第4A層	2号窓 南北竪 南部	-	(3.5)	-	ナデ	ナデ	外:灰色(N4/) 断:暗青灰色(5R4/1)	長石(直径2mm以下)	A類 良好	
17	須恵器	大甕	肩部	2～3次底盤	2号窓	-	-	(23.0)	-	平行タタキ 後スリケシ	スリケシ	灰～暗灰色(N4/～N3/)	長石(直径3mm以下)	A類 良好
18	須恵器	不明	体部	第4A層	1号窓	-	-	-	-	平行タタキ	不明	内:褐色(5PB4/1) 外:灰黄色(5YR4/2)	長石・石英・チャート(直径1mm以下)	A類 良好
19	須恵器	甕	底部	第4A層	-	-	-	(4.6)	-	ナデ	ユビオサエ・ナデ	暗灰色(N3/)	長石(直径1mm以下)	A類 良好
20	韓式系土器	甕	口縁部	第4A層	2号窓 東西竪	18.0	(3.3)	-	ナデ	ナデ	にぶい褐色(10YR7/4) ～ 灰色(5Y4/1)	長石(直径1mm以下)	A類 良好	
21	韓式系土器	甕小	体部	最終床面	2号窓 北西部	-	(10.3)	-	平行タタキ	ナデ	にぶい褐色(10YR5/3)	長石(直径2mm以下)	A類 良好	
22	韓式系土器	不明	体部	第4A層	1号窓 燐道付近	-	-	-	平行タタキ	不明	暗青灰色(5PB4/1)	長石・石英・チャート(直径1mm以下)	A類 良好	
23	韓式系平底鉢	か	底部	第4A層	2号窓 南北竪 南部	-	(1.5)	7.2	ナデ	ナデ	浅黄色(2.5Y7/4)	長石(直径2mm以下)	A類 良好	
24	韓式系土器	U字形土製品か	-	第4A層	2号窓 東西竪	-	(8.6)	-	不明	不明	灰白色(2.5Y8/2)	長石(直径2mm以下)	A類 不良	
25	韓式系土器	不明	把手	第4A層	2号窓	-	(9.1)	-	-	ユビオサエ 後ナデ	にぶい褐色(7.5YR5/3)	長石(直径2mm以下)	A類 良好	
26	結晶片岩	-	-	第4A層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
27	須恵器	壺	口縁部	第3C層 上部	SX401	-	(1.9)	-	回転ナデ	回転ナデ	灰色(N5/)	長石(直径1mm以下)	A類 良好	

規範 番号	種類	器形	部位	出土状況			法量(単位:cm)		整形・調整技法		胎土		焼成		
				層位	遺構名	出土位置	口径	高さ	底径	外面	内面	色調	含有鉱物		
28	須恵器	壺	口縁部	第3C層	-	西柱南半	-	(6.4)	-	ナデ	ナデ	内:褐色 (5YR6/6) ~ 灰色(N7) 外:にぶ い褐色 (7.5YR7/4) ~灰色(N6/7)	長石・石英(直 径1mm以下)	A類	やや 良
29	須恵器	壺	口縁部	第3C層	-	西柱南半	-	(2.60)	-	不明	ナデ	内:褐色 (7.5YR5/1) 外:紫褐色 (5P2/1)	長石・石英・ チャート (直徑1mm以下)	A類	良好
30	須恵器 (焼成 不良)	壺	口縁部	第3C層	-	-	-	(2.6)	-	不明	不明	浅黄色(2.5Y 8/4)	長石・石英・ チャート (直徑3mm以下)	A類	不良
31	須恵器	壺	体部	第3C層	-	西柱南半	-	(9.65)	-	カキメ	不明	内:灰色(5Y 4/1) 外:暗灰色 (N3/)	長石・石英・ チャート (直徑1mm以下)	A類	良好
32	須恵器	器台付	体部	第3C層	-	-	-	(5.8)	-	回転ナデ	回転ナデ	内:褐色 (10YR4/1) 外:暗灰色 (N3/)	長石・石英 (直徑1mm以下)	B類	良好
33	須恵器	器台付	体部	第3C層	-	-	-	(4.70)	-	回転ナデ	回転ナデ	内:灰色 (5Y4/1) 外:黃灰色 (2.5Y4/1)	長石・石英・ チャート (直徑1mm以下)	B類	良好
34	須恵器	台付壺	脚部	-	SK203	-	-	(4.6)	24.4	回転ナデ	回転ナデ	内:にぶ い赤褐色 (5YR5/3) 外:灰色(N5/)	長石(直徑1mm 以下)	A類	良好

調査区遠景  
(南東から)



地層の堆積状況  
(上町谷1号窓上部、  
北西から)



第3層上面の遺構  
(南東から)



第4層上面の遺構  
(上町谷1・2号窯、  
南東から)



1号窯全景  
(南西から)



1号窯断面および  
調査区西壁  
(北東から)



2号窯全景  
(南から)



2号窯断面(北西から)

難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW10-5)報告書

調査個所 大阪市中央区内久宝寺町2丁目36-25他3筆  
調査面積 30m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年8月31日～9月2日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、杉本厚典

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮跡の南西部に当り、調査地の北でNW83-33次調査、東でNW85-39・90-7次調査などをそれぞれ行っている。NW83-33次調査ではポーリング調査の成果をもとに現地表下8.0mの位置に地山を想定し、発掘調査によって現地表下3.5mまでが近世以降の地層であったことを確認している[大阪市文化財協会1984]。国立大阪病院の南側の道路沿いで行ったNW85-39次調査では、現地表下1.2~2.3mまで掘削し、上町筋との交差点付近の調査地点で幕末~明治時代頃の石垣を検出した。さらにNW85-39次調査地の南側で行われたNW90-7次調査では、古代以前の谷地形と前期難波宮造営時の整地層、豊臣期の溝などを明らかにした[大阪市文化財協会2004]。

これらの調査成果から、本調査地およびその近傍においてTP+6.0m付近に古代の地表面が存在し、地表近くに豊臣期・徳川期の遺構が分布することが予想された[寺井誠2004]。本調査地において大阪市教育委員会が平成22年6月7日に試掘調査を行った結果、GL-0.2~0.9mにかけて陶磁器類が出土したことから、本調査を実施した。

調査は平成22年8月31日に敷地のやや北側に東西7.0m、南北4.3mの調査区を設定して、重機による上掘りを行った。引き続いて平面調査に入り、人力で現地表下2.5mまで掘削して地層の記録を行った。そして9月2日に埋戻しを含む現地での作業を終了した。

本報告書で用いた水準値はTP値(東京湾平均水面値)で、図中ではTPとした。また、図1は座標北、図2・5は磁北を基準に作成した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3~5)

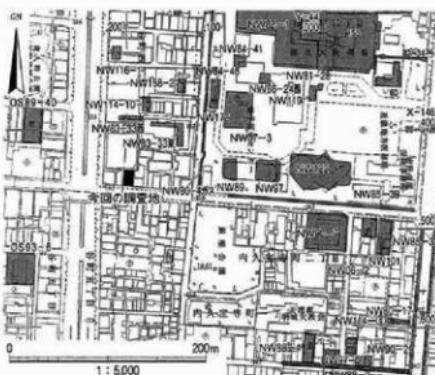


図1 調査位置図

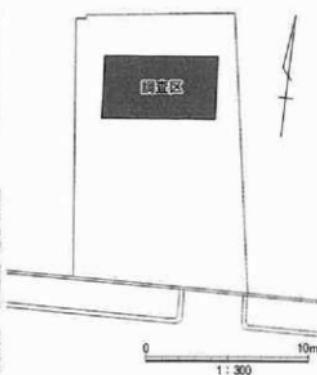


図2 調査区位置図

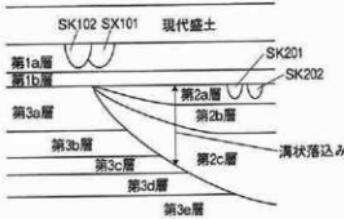


図3 地層と遺構の関係図

第1a層：黄褐色(10YR5/8)細礫質粗粒砂によって構成される層厚28~42cmの整地層であった。上面は近世から近・現代にかけての生活面であり、建物解体時のものとみられるバックホウのツメの痕跡が顕著であった。本層上面で18世紀頃の土壤を検出した。

第1b層：灰黄色(2.5Y7/2)礫質細粒砂によって構成される整地層であり、層厚10~24cmで、調査地東半部分に堆積していた。

第2a~c層は調査区東部で検出した溝状落込みの埋土であった。

第2a層：浅黄色(2.5Y7/4)シルト質粗粒砂によって構成される層厚10~24cmの整地層であり、溝状落込みの最上部に部分的に堆積していた。本層上面で土壤を検出した。

第2b層：2~3cmの大シルトの偽縛を含むにぶい黄橙色(10YR7/4)細粒砂によって構成されてお

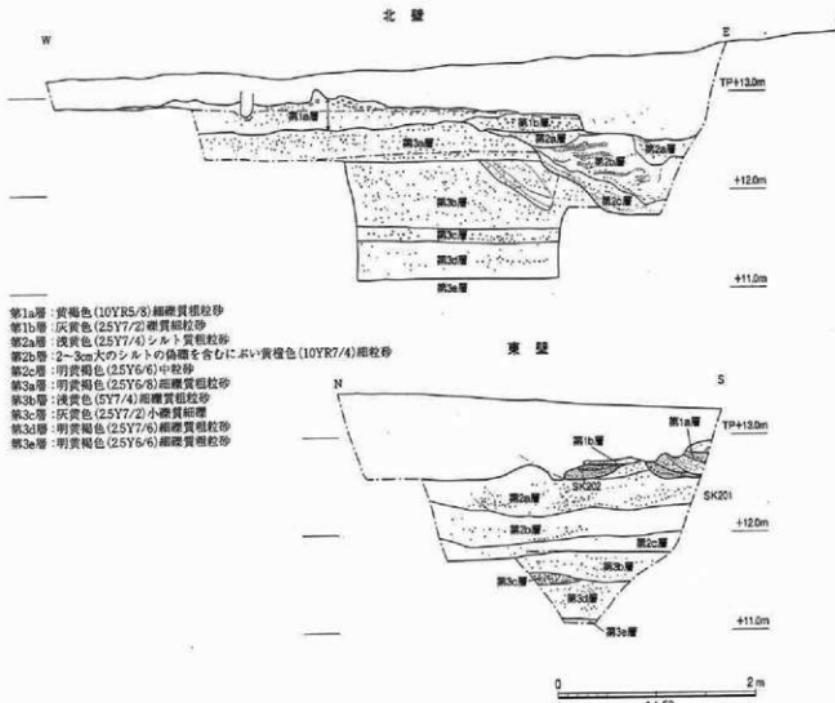


図4 北壁・東壁地層断面図

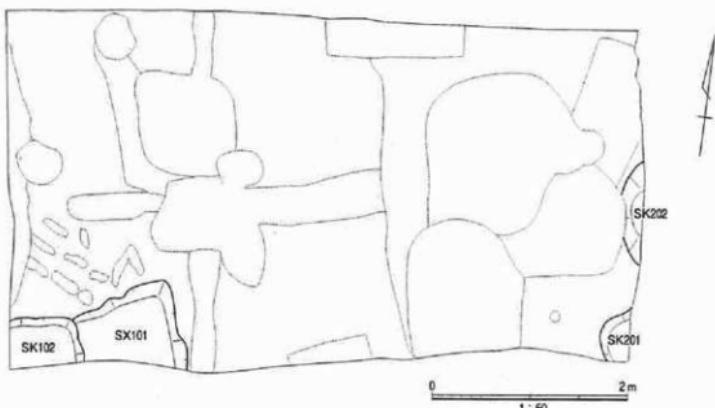
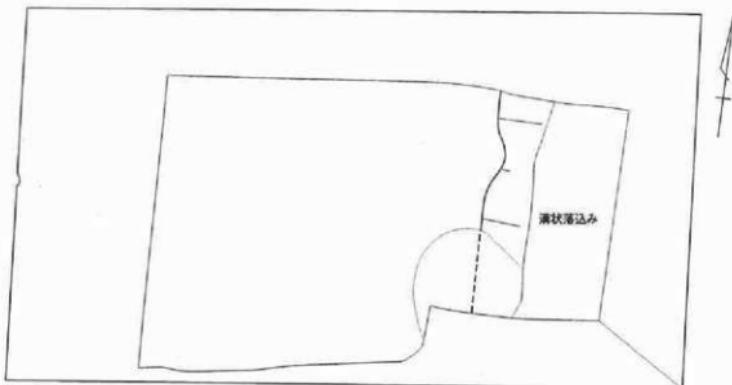


図5 遺構平面図(上：第3a層上面、下：第1a層・2a層上面)

り、最大層厚は73cmであった。

第2c層：明黄褐色(2.5Y6/6)中粒砂によって構成される。層厚5~20cmであった。

第3層は整地層であり、第3a~e層に細分された。

第3a層：明黄褐色(2.5Y6/8)細礫質粗粒砂で構成され、層厚28~42cmであった。本層上面で溝状落込みを検出した。

第3b層：浅黄色(5Y7/4)細礫質粗粒砂で構成され、層厚66~68cmであった。

第3c層：灰黄色(2.5Y7/2)礫質細疊層で構成され、層厚16cmであった。南に向けて層厚を減じ、南

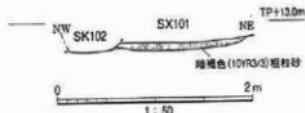


図6 遺構断面図

整付近で消滅していた。

第3d層：明黄褐色(2.5Y7/6)細礫質粗粒砂で構成され、層厚40cmであった。

第3e層：明黄褐色(2.5Y6/6)細礫質粗粒砂で構成されていた。本層の層厚は確認できなかったが、TP+11.0m以下まで続いていた。

#### ii) 遺構と遺物(図5～7)

##### 第1a層上面遺構

調査区の西南部でSX101・SK102を検出した。

SX101は東西1.16m以上、南北0.90m以上

の落込みで、深さ0.08mであった。埋土は焼土・炭を含む暗褐色(10YR3/3)粗粒砂で西側をSK102によって切られていた。

SK102は東西0.74m以上、南北0.52m以上の方形の土壤で、深さ0.09mであった。埋土中から土師器焰壺1が出土した。1は焰壺D類[難波洋三1992]に分類され口縁部内面にベンガラが帯状に付着し、外面にはキラ粉が顯著である。口縁部の形状から18世紀末から19世紀代のものである。

##### 第2a層上面遺構

調査区南東部の第2a層上面でSK201・202を検出した。

SK201は直径0.54m以上の円形の土壤で、埋土は褐色(7.5YR4/4)細粒砂であった。

SK202は直径1.00m以上の円形の土壤で、埋土は灰色(5Y6/1)細粒砂であった。

##### 第3a層上面遺構

調査区東半部で溝状落込みを検出した。幅1.66m以上で南北方向に延びており、深さは0.78～0.90mであった。上述の第2a～c層で埋っていた。遺物は出土しなかった。

### 3)まとめ

本調査において以下のことが明らかになった。

1. 近世後半期の生活面をTP+12.5～13.0mにおいて検出した。
2. その下位には整地層が1.5m以上にわたって堆積していた。整地層の上位には、南北方向の溝状落込みが設けられていたが、遺物は含まれておらず、時期を特定することはできなかった。

本調査地においてTP+11.0mまで掘り下げたものの、地山には到達しなかった。調査区の西側には「龍造寺谷」と呼称される古代の谷の存在が想定されており、調査地がその谷へと下る傾斜地であった可能性が高い。

### 引用文献

- 大阪市文化財協会1984、「住宅都市整備公団用地における難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW83-33)略報」
- 大阪市文化財協会2004、「NW90-7次および85-39次調査」：『難波宮址の研究』第十二、pp.119-149
- 寺井誠2004、「難波宮成立期における土地開発」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十二、pp.161-170
- 難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の砲塔」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.373-400

第1a～3e 層堆積状況  
(南東から)



第3a 層上面の遺構  
(南東から)



第1a・2a 層上面の遺構  
(北東から)



査が行われてきた。第1・2次調査およびNW02-13次調査のI区では、奈良時代の瓦の堆積層が良好に遺存しており、周辺に建物跡が存在していたことが想定されている。また、昨年度行われたNW09-2次調査では、瓦の堆積のほか、土壌状の高まりが検出され、周辺に凝灰岩が散乱していたため、凝灰岩の化粧石を持つ基壇であったと推測された。

今回の調査は、昨年度検出された「基壇」の南縁と、不明瞭であった西縁を確認するために、昨年度の調査区から約5m南に調査区を設定した。

調査は平成22年10月25日から開始

した。重機を用いて現代の地層を除去したのち、人力による掘削を行い、遺構検出とその記録を行った。調査成果は平成23年1月22日に現地公開を開催して公開した。その後、埋戻しを行い、1月28日までにすべての作業を終了した。なお、調査には大阪歴史博物館より伊藤純・宮本康治の参加があった。また、本報告書の作成についても宮本と協議の上で執筆した。

周辺の過去の調査との対比を行うために、本報告では旧来の日本測地系（国土平面直角座標第VI系）を用いた。水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）である。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序(図3・4)

調査地の層序は昨年度のNW09-2次調査地とはほぼ同じである。

第0層：近現代の整地層である。第2次世界大戦後の法円板住宅の基礎と、その下位の旧陸軍被服支廠造営時の基礎を検出した。

第1層：層厚15cmの作土層であり、炭を含むオリーブ褐色シルト質細粒砂で構成されていた。幕末頃から近現代までの遺物が出土した。上面で土壌SK101、下面において東西方向に延びる試間群を検出した。

第2層：層厚20cmの近世作土層であり、炭を含む褐色シルト質細粒砂で構成されていた。本層中からは18世紀後半頃までの遺物が出土した。また、上面には井戸SE201・小穴SP202が設けられていた。

第3層：層厚36cmの中世作土層であり、褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂で構成されていた。層中や遺構から瓦器の細片が出土した。本層上面において小穴SP310、浅い窪みSX311~313、溝SD314を確認した。また、本層中には部分的に層理面が認められ、その上面で小穴SP305、柱穴SP306~

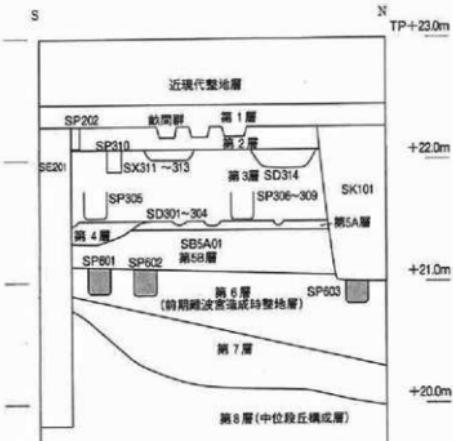


図3 地層と遺構の関係図

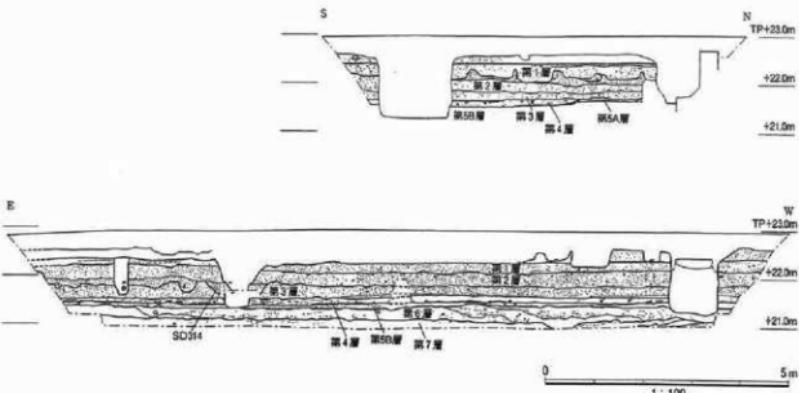


図4 西壁・南壁地層断面図

309を検出した。さらに本層下面では耕作溝SD301～304を検出した。

第4層：後期難波宮廃絶後に形成された地層である。層厚15cmの褐色(10YR4/4～4/6)粘土～シルト質細粒砂で構成されていた。本層は以下で述べる第5A・B層によって構成された土壇状造構周辺の低所部に堆積していた。後期難波宮期の重圓文軒丸瓦6や軒平瓦8、須恵器杯身4、杯蓋3などが出土した。

第5A層：調査区の西北部に分布していた層厚15cmの盛土層であり、褐色(7.5YR4/5)シルト質細粒砂によって構成されていた。中位段丘構成層に由来する3～8cm大の粘土偽礫を含んでおり、炭や焼土、円礫、凝灰岩の破片、瓦片などが含まれていた。また北半部では本層中に層厚5～10cmの粗粒砂からなる薄層が認められたが、版築は認められなかった。

第5B層：褐色(7.5YR4/4)シルト質細粒砂などからなる整地層で、層厚は5～20cmであった。3～5mm大の亜円礫が部分的に含まれており、東北部では層厚6～8cmのオリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂が第6層の上に盛られていた。調査区全面に分布していたが、土壇を構成する部分では層厚20cm、南半部分では5cmと差異が認められた。

これらの第5A・B層は、以上のような堆積状況から、昨年度の調査で後期難波宮に伴う建物基壇SB5A01としたものと同じ整地層とみられる。また、平瓦12や、拳大の円礫、凝灰岩の細片などが第5A・B層の南向斜面に接した状態で出土した。

第6層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂で構成される層厚40cmの整地層であった。層厚10～20cmを単位として整地していた。本層上面でSD601、柱穴SP601・602・603を検出した。また層中から須恵器高杯2が出土した。

第7層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒砂～粘土質シルトで構成される層厚70cmの整地層である。層中より須恵器杯蓋1や土師器細片が出土した。

第8層：TP+20.5mで検出した黄橙色(10YR7/8)シルト～砂礫層からなる中位段丘構成層である。

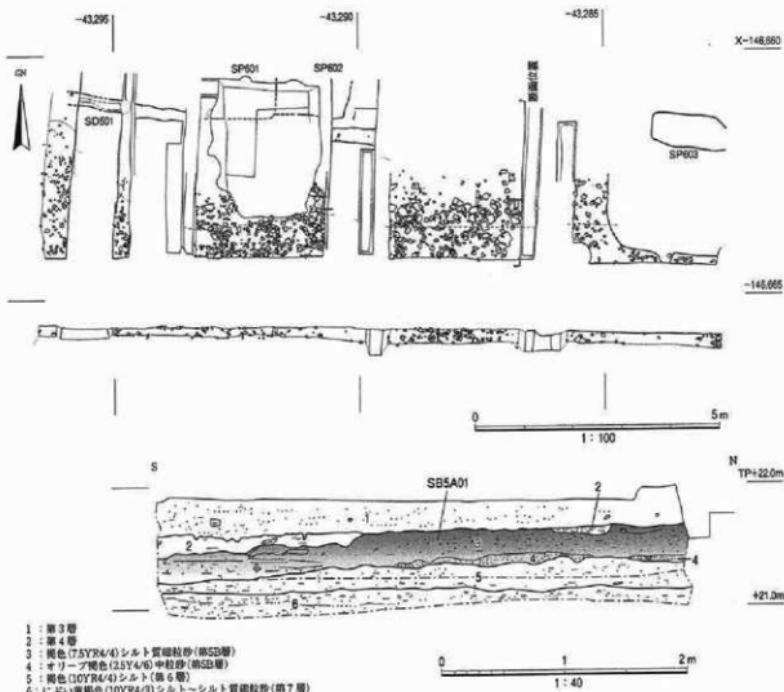


図5 第4層遺構平面図および南北地層断面図

昨年度のNW09-2次調査地では西部でTP+20.8m、東部ではTP+19.8mで確認されている。

## 2. 遺構と遺物

### a. 飛鳥時代の遺構(図5・6)

第6層上面で3個の柱穴SP601~603を検出した。

これらはいずれも第5B層で覆われておらず、前期難波宮の時期のものとみられる。

SP601: 一辺が1.63m以上、深さ1.09mの柱穴である。柱痕跡が認められず、炭の細片や焼土、拳大の偽礫などが含まれていたため、柱は抜き取られたものとみられる。

SP602: 0.66m以上、深さ0.56mで西側がSP601によって切られていた。抜き取り穴の埋土は炭・焼土を含む明褐色(7.5YR4/8)細粒砂であり、須恵器・



図6 SP601遺構断面図

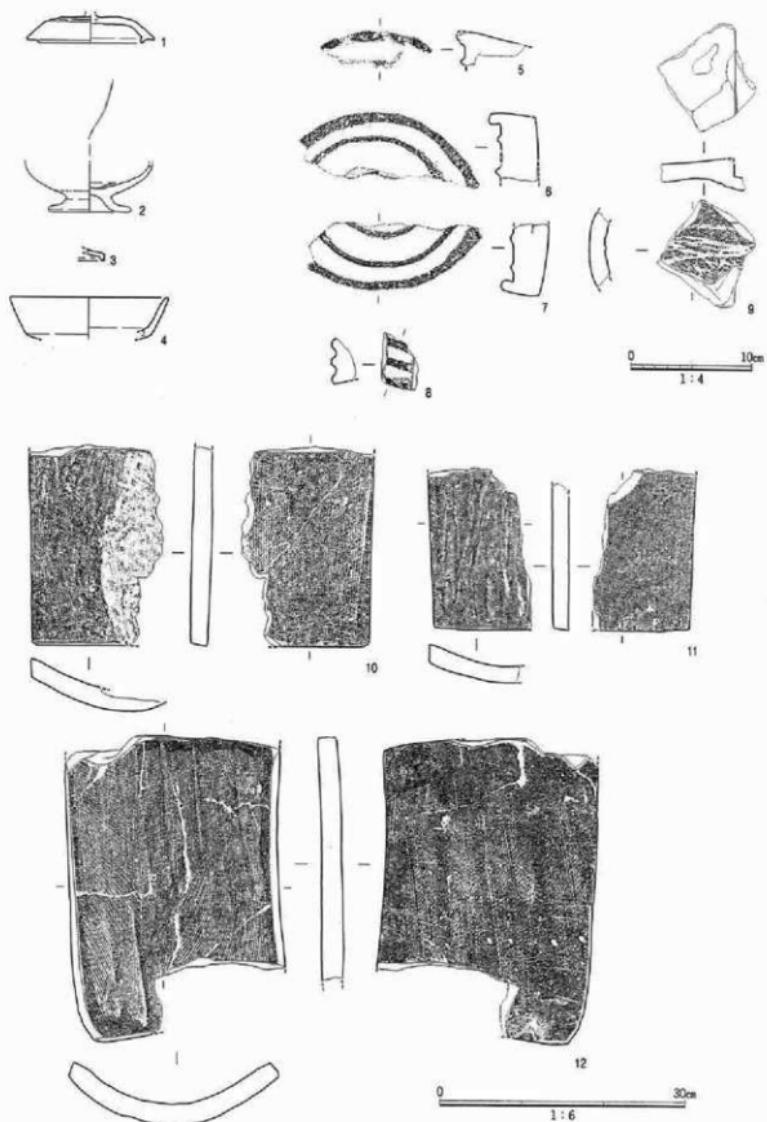


图7 出土遗物实测图

第7层(1)、第6层(2)、第4层(3·4·6·8·9~11)、进避资料(5·7)、SB5A01(12)

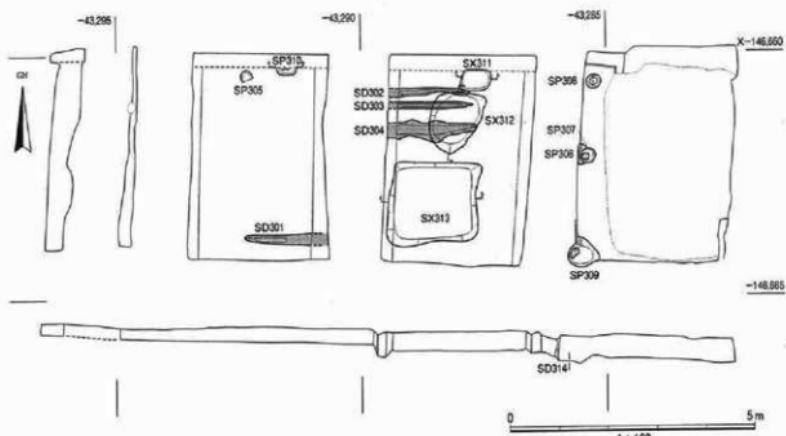


図8 第3層遺構平面図(トーンは第3層下面の遺構)

土師器の細片が含まれていた。また掘形の埋土は明褐色(7.5YR5/8)細粒砂を主体とし、扁平な粘土の偽膜が顕著であった。

SP603：調査区東側で検出した南北0.96m、東西1.53m以上の柱穴である。柱抜き取り穴が東へ延びていた。

これらの中でSP601はNW09-2次調査地のSP601・SP602と組む一連の南北方向の柱列と考えられる。

#### b. 奈良時代の遺構と遺物(図5・6)

調査区西半部の第6層上面でSD501、調査区北半部で土壇状遺構SB5A01を検出した。

SD501：幅0.26、深さ0.19mの東西方向に延びる溝である。正方位に延びてはおらず、約8°ばかり南に偏る。溝内には水成堆積層が認められず、上位の第5B層で被覆されていたことから、第5B層を整地する際に埋められたと判断される。

SB5A01：高さ0.24~0.26mの土壇状遺構で、おもに第5B層を成形して構築していた。南辺ラインが西側で大きく北へ入り込むが、南北3.5m以上、東西11.5m以上にわたってほぼ正方位に分布していた。上述した第5A層はこの土壇状遺構の北西部にのみ認められた。土壇状遺構の南向斜面には、瓦や拳大の亜円碟、凝灰岩の細片などが散乱しており、この上に堆積した第4層には後期難波宮の重圓文軒瓦および凝灰岩の破片が含まれていたことから、後期難波宮期の遺構と判断される。高所部は第3層によって削られており、礎石を据えた痕跡は認められなかった。また地覆石の抜き取り痕跡も確認できなかった。

第5層の上面に貼り付いていた遺物として平瓦12を図示した。硬質に焼成されており、凹面には糸切痕と布目痕、凸面にはタタキ痕がそれぞれ認められる。

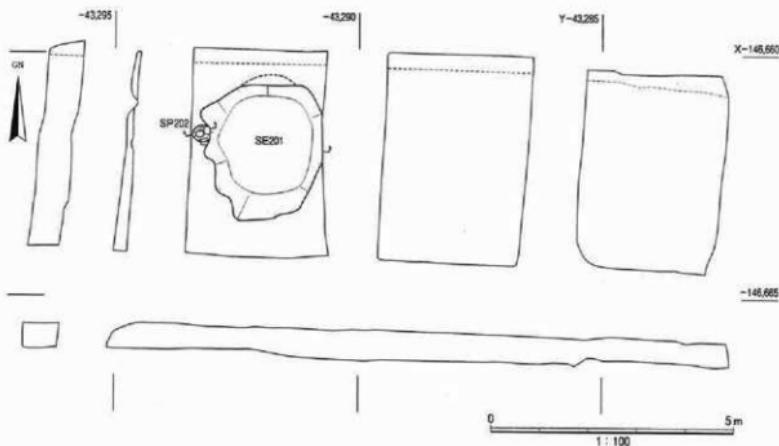


図9 第2層遺構平面図

c. 中世の遺構(図8・11)

第3層下面で東西方向に延びる耕作溝SD301~304を確認した。また第3層中で小穴SP305、柱穴SP306~309、上面で小穴SP310、浅い窪みSX311~313、溝SD314を検出した。

SD301~304: 幅0.1~0.4m、深さ0.05mの東西方向に延びる耕作溝であり、ほぼ正方位に設けられていた。埋土中より瓦器椀の細片が出土した。NW09-2次調査で指摘されているように、後期難波宮の地割りに影響されていた可能性がある。

SP305: 調査区北西部で検出した直径0.25mの小穴である。

SP306・307: いずれも直径0.3m、深さ0.16mであり、穴の中央に直径0.1mの柱痕跡が認められた。

SP307はSP308を切って設けられていた。

SP308: 直径0.46m、深さ0.2mの柱穴である。褐色細粒砂で埋まっており、柱痕跡は不明であった。

SP309: 直径0.8mに復元される深さ0.66mの柱穴で、底に直径0.16mの柱当りが認められた。埋土は上部が灰色黄褐色シルト質細粒砂、下部が黄褐色シルト質細粒砂であった。

調査区東部で検出したSP306~309は南北方向に直線状に並んでおり、いくつかが組み合うものとみられる。

SP310: 直径0.4m、深さ0.26mの小穴である。

SX311: 東西0.6m、南北0.4m、深さ0.10mの浅い落込みである。

SX312: 東西1.1m南北1.3m、深さ0.05mの不定形の落込みである。

SX313: 東西1.6m、南北1.8m、深さ0.1mの浅い落込みである。SX311~313はいずれも褐色シルト質細粒砂で埋まっていた。

SD314: 南北方向に延びる溝である。コンクリートの基礎によって破壊されていたため、南壁で輪郭を検出した。NW09-2次調査のSD303の続きの溝とみられる。

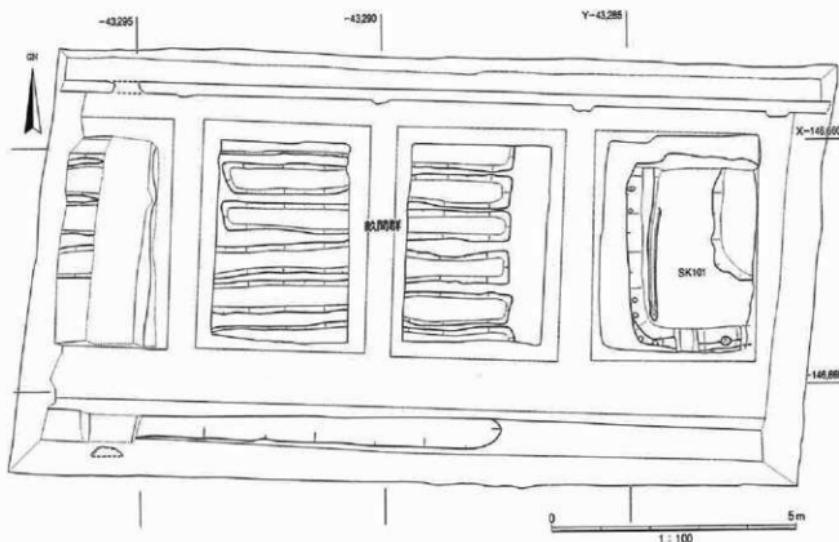


図10 第1層遺構平面図

d. 近世の遺構と遺物(図9～11)

第2層上面で井戸SE201・小穴SP202、第2層上面で畝間群、第1層上面で土壙SK101を検出した。

SE201：長径2.8m、短径2.5mの楕円形の井戸である。遺構の北側の壁に直径0.6mの円形の抉りが認められた。この抉りは井戸上部の構造物に関連するものか、井戸掘削時に設けられたものか不明であるが、井戸掘形の埋土が入っていたため、井戸構築時に掘削されたと判断される。

SP202：井戸西端部に接して設けられていた直径0.35m、深さ0.18mの柱穴である。井戸によって切られていた。

畝間群：幅0.6～0.7m、深さ0.15mの溝である。東西に平行して設けられており7条認められた。

SK101：調査区東部で検出した土壙である。埋土中から多数の陶磁器、骨・貝類が出土し、ゴミ穴として最終的に利用されていたが、遺構の壁には直径0.1mの小穴が0.3～0.4m間隔で並んでおり、底に溝が設けられていたことから、本来は穴藏などの構造物であったとみられる。

e. 各層出土の遺物(図7)

第7層から1、第6層から2、第4層から3・4・6・8・9～11が出土した。また遊離資料として5・7を図示した。

1は須恵器蓋である。摘み部分を欠く。口径が10.4cmと小型であり、難波Ⅲ中段階に属するとみられる。2は須恵器高杯である。内面は回転ナデの後に平行ナデを施し、ヘラ記号を刻入する。難波Ⅲ中段階のもので、7世紀中葉の時期とみられる。3は須恵器蓋である。細片であるが、端部は難波V中段階のように肥厚し丸みを帯びておらず、難波IV新段階～V古段階のものとみられる。4は須恵器

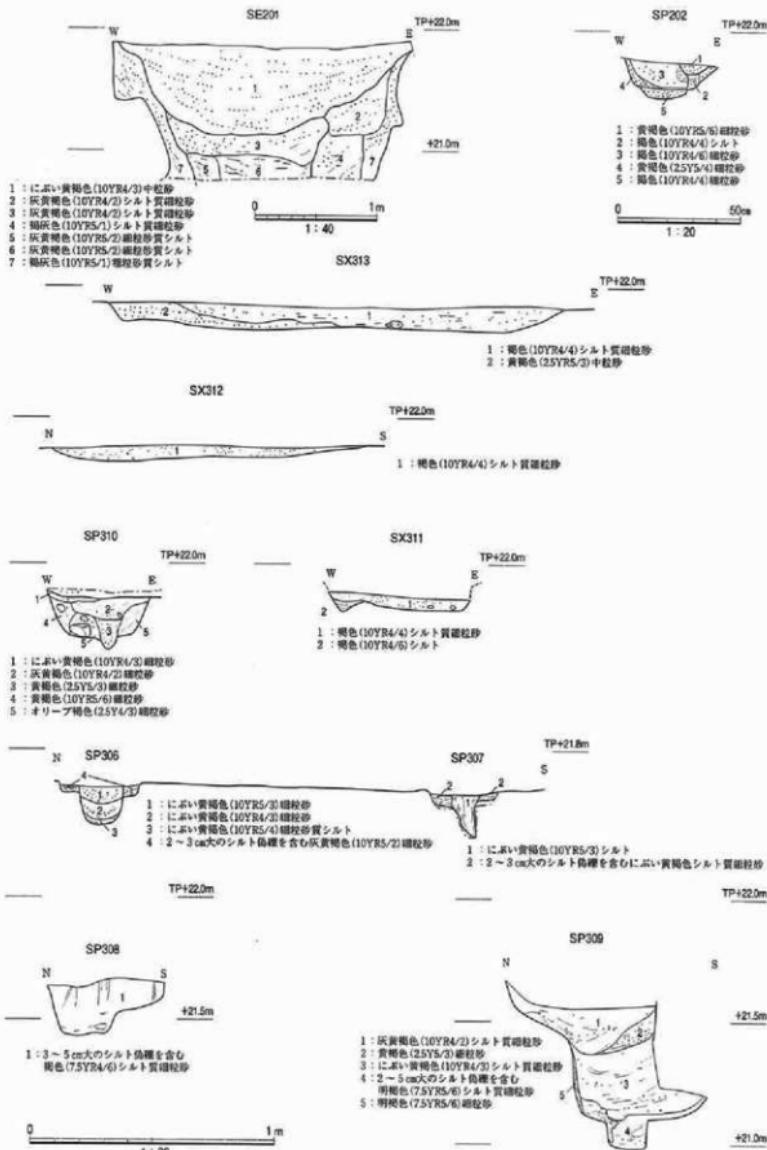


図11 遺構断面図

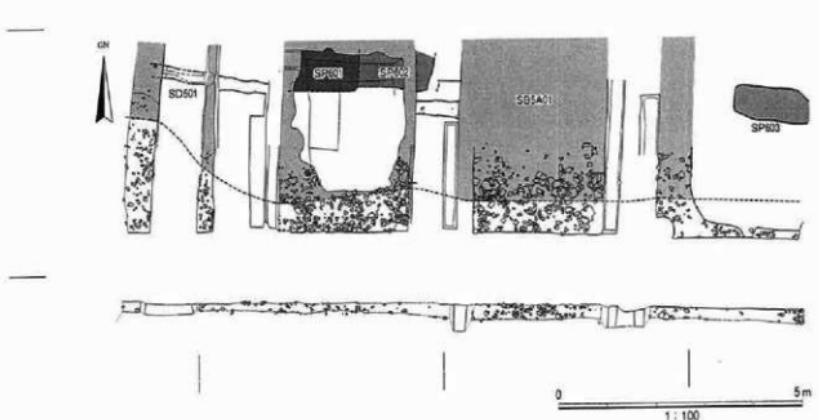
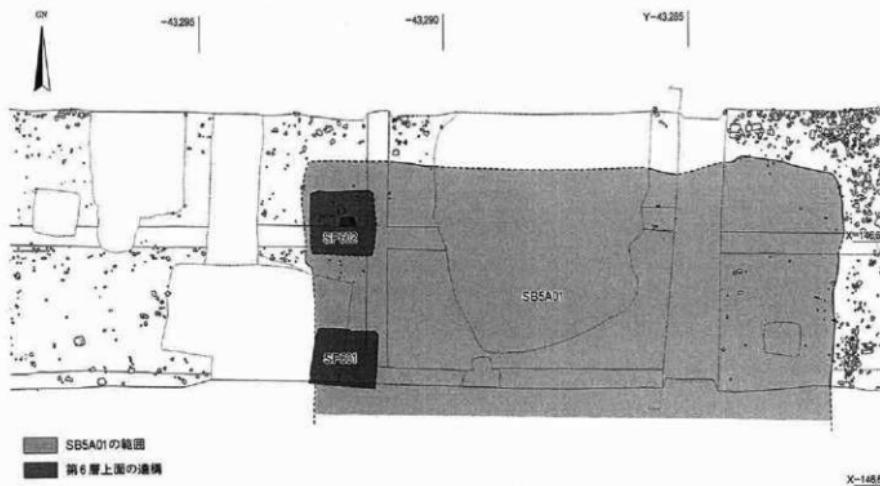


図12 NW09-2次調査地と今回の調査地との関係図

杯身である。細片であるが、口縁部が比較的直線的に立ち上がっていることから、難波IV新段階～V古段階に属する。

6は重圓文軒丸瓦、8は重圓文軒平瓦である。6は直径17.8cmに復元され、胎土には赤色のシャモットが多く含まれている。9は丸瓦、10・11は平瓦である。9は外面が磨滅しており調整は不明であるが、内面に布目と紐の痕跡が認められる。10は内面に糸切痕と布目痕が認められ、外面のタタキは長側辺に平行に施されている。11は凹面に横骨痕と布目痕が認められ、外面には10と同様に、タタキが長側辺に平行に施されている。

5・7は重圓文軒丸瓦である。5は直径18.0cm、7は19.0cmに復元される。

#### 〈まとめ〉

##### a. 前期難波宮期

NW09-2次調査地で検出されたSP601・602は、NW85-34・86-12次調査で検出された堀SA701[大阪市文化財協会2004]と一直線上に並ぶことから、一連の堀を構成する柱穴と想定されている。今回の調査地で見つかったSP601はこの列の中に位置づけられるため、堀とする想定を補強するものとみられる。

またそれ以外にもSP602、SP603が検出され、堀の東側に何らかの構造物が存在していた可能性が指摘される。

##### b. 後期難波宮期

後期難波宮期の土壇状遺構を検出した。しかしNW09-2次調査のSB5A01の延長として想定された西辺ラインが確認できず、さらに西に土壇状遺構が拡がる状況が認められた。今回の土壇状遺構とNW09-2次建物基壇SB5A01との関係については本調査地では明らかにしえない。

##### c. 中世から近世

耕作溝を検出したことから中世は畠として土地利用されていたことがうかがえる。NW09-2・NW10-4調査地においても中世の作土層が検出されており、付近一帯が農地であったとみられる。また、作土層を切って柱穴が設けられており耕作地のち居住域へ変化したとみられる。

豊臣期大坂城期の遺構は周辺で堀、柵列などが検出されているが、今回の調査地では当該期の遺構は認められなかった。

近世において、昨年度の調査地と同様に水溜状遺構や穴蔵、畠などを検出した。近世末期の絵図では当地は同心屋敷地とされており、建物の礎石などが見つかることが予想されたが、建物区画ではなく農地として土地利用されていたとみられる。

調査区を設定した目的である後期難波宮期の基壇建物を究明するところまでは至らなかったが、本調査区においても土壇状遺構が存在していることが判明した。これらの盛土遺構の分布と形状を確定するための調査を行う必要があろう。

## 参考文献

- 大阪市文化財協会2004、『難波宮跡の研究』第十二
- 大阪市文化財協会2009、『難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW08-1)報告書』
- 佐藤 隆2000、「古代難波地域の土器様相とその歴史的背景」：『難波宮跡の研究』第十一 大阪市文化財協会、pp.253-265
- 高橋 工2008、「第IV章第2節 後期難波宮殿東方地域の概観」：『難波宮跡の研究』第十五 大阪市文化財協会、pp.76-86

SP601(南東から)



SB5A01(北から)



SB5A01(東から)



中央区南船場二丁目における建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査(OJ10-1)報告書

調査個所 大阪市中央区南船場2丁目34-1  
調査面積 25m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年6月28日～7月1日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は堺筋の西側で、長堀通より3ブロック北に位置する(図1)。周辺の発掘調査は少ないが、調査地から南東200mのOJ07-5次調査では、豊臣期船場城下町の推定南限を越えて豊臣後期の遺構が検出されており[大阪市文化財協会2008]、城下町の拡がりを考える上で注目される地域である。

調査区は、既存建物の基礎で壊されずに島状に残った約6m×6m内に設定した(図2)。調査は、試掘の結果を受けて17世紀代に遡ると推定される地表下2m強の地層から開始し、自然堆積の砂層上面で完了した。本報告で使用した方位は座標北と磁北を基準とし、標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4・6)

第1a層：黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂質シルト層で、最大層厚17cmである。調査区西辺のみに分布し、南北の溝に関係するかもしれない。肥前磁器染付碗8が出土した。

第1b層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト～細粒砂層で、層厚は5cmである。第3層上の繕りの良い整地層である。肥前磁器染付碗7が出土した。

第2層：黄褐色(10YR5/6)シルト質の焼土層で、層厚は10cmである。調査区南辺のみに分布する。

第3層：黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトの盛土で、最大層厚35cmである。肥前陶器向付2、同碗5、中国製青花皿3・4、肥前磁器染付碗6が出土した。第3層は17世紀中頃と推定される。

第4層：にぼい黄色(2.5Y6/4)中粒砂層で、最大層厚65cmである。西北寄りの調査区の約半分に分



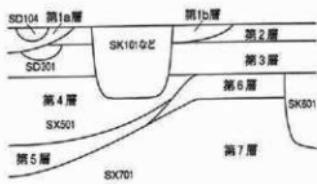


図3 地層と遺構の関係図

布し、この盛土により第7層上面の凹凸はほぼ平らになる。

第5層：暗黄褐色(2.5Y4/2)中粒砂質シルト層で、最大層厚33cmである。SX701などの凹みを最初に埋める地層で、一部に水漬きのところがある。丹波焼大平鉢1が出土した。出土遺物は少ないが、遺物からは豊臣後期～徳川初期に遡る可能性もある。

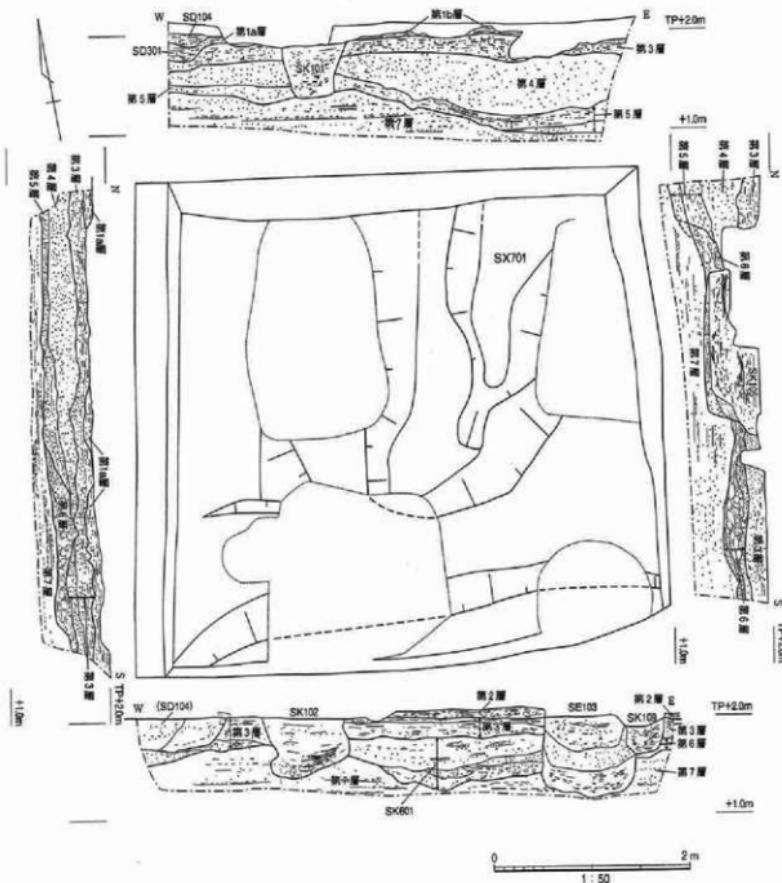
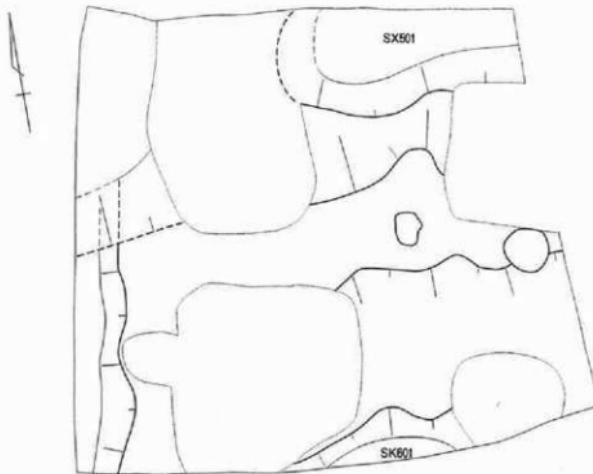


図4 地層断面図および第7層上面遺構平面図

第6・5層上面



第1層上面

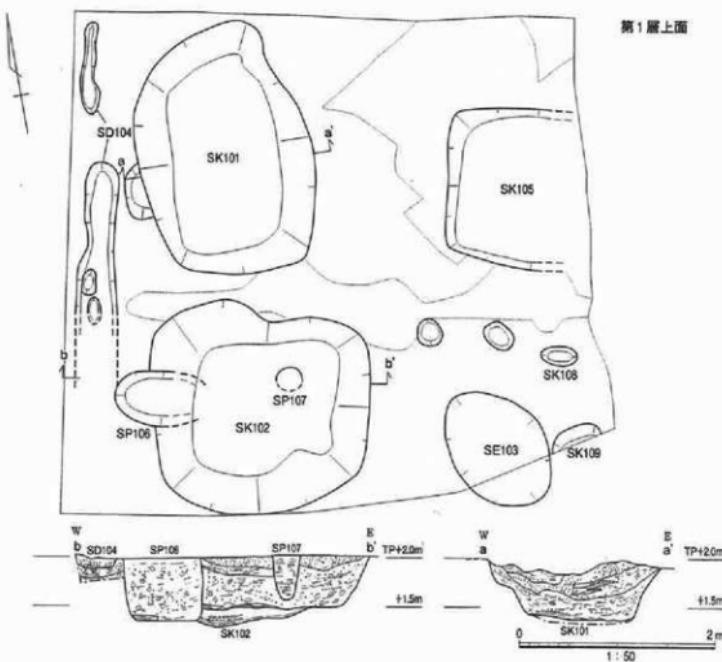


図5 第6・5層上面造構平面図、第1層上面造構平面図・断面図

第6層：灰色(5Y6/1)粘土偽礫の盛土で、最大層厚25cmである。調査区の西北を除く部分にある。偽礫は当地域の地層にはない土である。遺物が出土せず、時期はわからないが、敷地の凹凸を整えるための近世の盛土である。

第7層：にぶい黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂の自然堆積層で、層厚は50cm以上である。直径4cm以下の亜円礫が入る。

#### ii) 遺構と遺物

##### a. 第7層上面の遺構(図4)

第7層上面では自然の凹凸が目立つ。もっとも顕著なのは北東へ深くなるSX701で、調査区南端とは0.75mとの高低差がある。今次の調査だけでは成因はわからないが、北浜から長堀通の砂堆では様々な要因による起伏があった[趙哲濱2004]。

##### b. 第6・5層上面の遺構(図5)

第6・5層の形成後も第7層上面由來の凹みが北半に残り(SX501)、南半はかなり平らになる。SK601はおもに南壁にかかる土壌で、東西2m以上、深さ0.55mある。時期はよくわからないが、最下層に第6層と同じ粘土偽礫が混じり、第6層形成後の遺構と推定される。遺構番号は付していないが、調査区西辺には溝状に続く凹みがあり、第3層で埋る。上層では、この位置にSD301(北壁断面図参照)・SD104と重複して溝があり、この段階より南北の溝があったのかもしれない。

##### c. 第1層上面の遺構と遺物(図5・6・7)

おもな遺構を記すと、まずSK101・102・105はゴミ穴である。SK101は南北2.55m、東西1.75m、深さ0.60m、SK102は南北2.15m、東西2.25m、深さ0.70m、SK105は南北1.65m、東西1.1m以上、深さ0.55mである。SK101からは「天下一」以下の刻印がある土師器焼塙壺10、同皿11・12、同焰塔14、肥前磁器白磁皿13、同染付鉢16、肥前陶器鉢15、軒平瓦17が出土した。15はSE103・SP106の破片と接合した。SK102からは肥前磁器染付小杯18、同碗19・20、肥前陶器碗21、軒丸瓦22、軒平瓦23が出土した。またSK105からは肥前磁器染付碗9が出土した。

SE103は長さ1.35m、幅1.00m、深さ0.90mである。壁が垂直で円形に近いことから井戸としたが、浅く、ゴミ穴かもしれない。SE103からは肥前磁器白磁碗24・25、同染付碗26、同白磁皿27、同青磁鉢28、肥前陶器碗29・30、同鉢31、同火入32が出土した。24・27はSK101、28はSK101・SP106の破片と接合した。

以上の遺構群は出土遺物から17世紀後半と推定される。

この他にSK101を切ってSP106・107がある。SP106は長さ約0.8m、幅0.60m、深さ0.65mの柱穴で、底に平らな石を敷いている。SP107は直径0.25m、深さ0.45mである。SD104は敷地境などにある南北の排水溝であろうが、平面形をよく把握できなかった。

#### 3)まとめ

調査地点が17世紀のどの段階から城下町として開発されたのかは明確でない。調査区は敷地のもっとも奥に当るが、ある程度の密度で存在する17世紀後半のゴミ穴と、敷地奥まで第6層のような丁寧



図6 出土遺物実測図

第5層(1)、第3層(2~6)、第1b層(7)、第1a層(8)、SK105(9)、SK101(10~17)

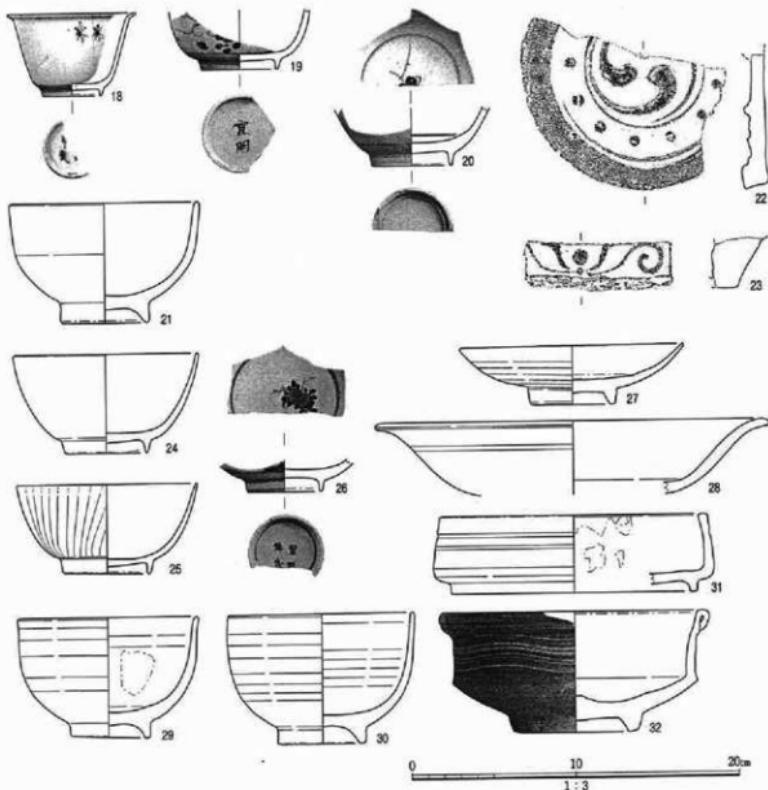


図7 出土遺物実測図  
SK102(18~23)、SE103(24~32)

な盛土があることから、17世紀前半に町場化した可能性があると思われる。豊臣期城下町の拡大のようすは、推定範囲の外縁部での発掘調査を積み重ねて明らかにしていかなければならない。

#### 参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「中央区南船場二丁目における埋蔵文化財発掘調査(OJ07-5)報告書」:  
「平成19年度大阪市内埋蔵文化財埋蔵地発掘調査報告書」、pp.37-40
- 趙哲済2004、「第Ⅰ章第1節 地形と地質」・「第VI章第1節 大坂城下町跡の自然地理的背景について」: 大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.1-7・347-350

第7層上面全景  
(南西から)



第7層上面全景  
(北から)



第6・5層上面全景  
(北から)





第1層上面全景(北から)



SP106(南から)



東壁南半  
第3・6・7層と  
SK105





大坂城下町跡発掘調査(OJ10-2)報告書

調査個所 大阪市中央区道修町1丁目11-4・11-5  
調査面積 約20m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年12月6日～12月10日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、杉本厚典

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、堺筋と東横堀川の間で、地下鉄北浜駅の南東に位置する(図1)。周辺は、1598(慶長3)年、大坂城三ノ丸の建設に連動して城下町として開発された船場地域の中心部に当り、発掘調査で数多くの成果が上がっている地域である。

交差点を挟んだ西南のOJ92-18・OJ91-11次調査では、中世の集落を想定できる豊富な遺物が出土し、豊臣前期の鍛冶屋から後期の高級茶陶を有する豊かな商家への変化が、詳細な屋敷地の変遷とともに明らかにされた。また、同じ街区の北東50mのOS86-20次調査は船場地域の画期となった発掘で、中世の集落→豊臣前期の鍛物師→後期の魚市場→冬ノ陣で被災した埋廃遺構を有する商家という変遷が捉えられた。西南50mのOJ91-2次調査では、中世の井戸や貝塚、大溝などが検出され、道修町と平野町に跨がる豊臣期の屋敷地の変遷が明らかにされた[大阪市文化財協会2004]。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘と調整の結果、現地表より約2mの深さから、大坂冬ノ陣の遺構面までの約80cmの間で行った。調査区は、事業者側で周りを工事深度まで掘り下げ、島状に残された敷地東北の南北6m、東西5mの中に設定した(図2)。

本報告では、方位は図1が座標北、それ以外は磁北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：調査開始面の第2層上面より上位の地層を一括して第1層と呼称した。



図1 調査地位置図

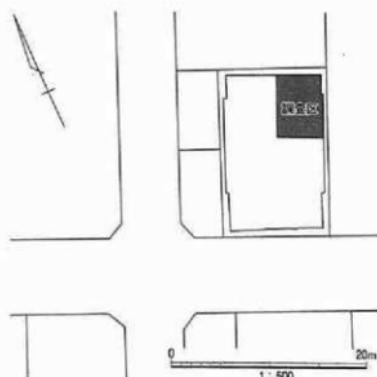


図2 調査区位置図

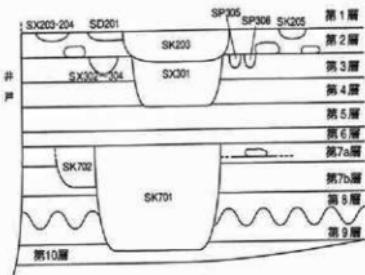


図3 地層と遺構の関係図

70cmである。焼土が混り、第5層と近い時期と推定される。粗製の中国産青花皿15が出土した。

第5層：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂や粗粒砂の偽縛を含む盛土で、最大層厚40cmである。焼土が混り、大坂冬ノ陣(1614年)後の最初の盛土である。ベトナム産長胴瓶口縁部14、金箔押菊文軒丸瓦38(図8)が出土した。

第6層：焼土層と、焼土・炭混りの暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂層で、最大層厚13cmである。後者は被災面を整地することによって形成されたものである。大坂冬ノ陣の地層である。瀬戸美濃焼志野鉢13(図6)が出土した。

第7a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂層で、層厚は18cmである。豊臣後期の整地層である。

第7b層：炭混りの灰オリーブ色(5Y5/3)粗粒砂質シルトなどから成り、層厚は約45cmである。豊臣後期の整地層で、上面は生活面になる。

第7層からは瀬戸美濃焼ソギ皿5、肥前陶器碗6、輪花の中国製白磁皿7、土師器羽釜8、備前焼擂鉢9が出土した(図6)。

第8層：細縛混り灰白色(5Y7/2)粗粒～極粗粒砂で構成される氾濫堆積層である。最大層厚40cmであった。城下町開発の直前と推定される。下面が激しく凹凸するのは、作土と推定される第9層の跡を洪水砂である第8層が覆った後、地震により変形をうけたためとみられる。

第9層：黒褐色(2.5Y3/1)シルト質中粒砂層で、層厚は5～45cmである。畠の作土と推定され、上面に畠の跡を検出した。城下町開発に近い時期であろう。

第10層：黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂層からなる水成層で、層厚は15cmである。時期はよくわからない。

第11層：灰白色(2.5Y8/2)細粒砂層からなる水成層で、層厚は25cm以上である。土師器杯1(図6)が出土した。他の地層から出土した須恵器杯身2、棒状土錐3・4も本来、本層以下の地層に伴うものであろう。

## ii) 遺構と遺物

### a. 豊臣後期の遺構と遺物(図4・6)

大坂冬ノ陣で被災した遺構とその直前の時期のものがある。

第2層：にぶい黄橙色(10YR6/4)粗粒砂の盛土で、最大層厚35cmである。肥前陶器染付碗19(図7)が出土した。

第3層：明黄褐色(10YR6/8)シルト質中粒砂層で、層厚は3～23cmである。本層上面に礎石建物があった。李朝白磁碗16(図6)が出土した。本層上面でSX301を検出した。SX301の出土遺物から、17世紀後半以前の地層である。

第4層：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂の盛土で、シルトの偽縛を含む。北に向けて厚く、最大層厚

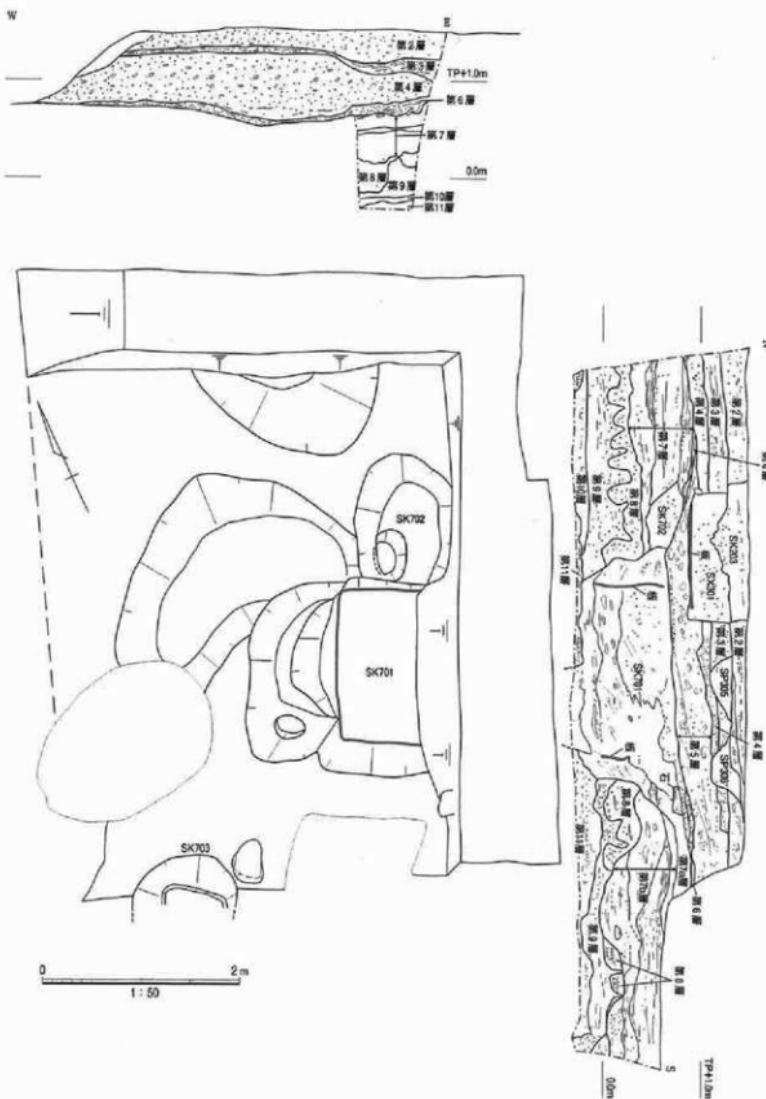


図4 地層断面図および第7層造構平面図

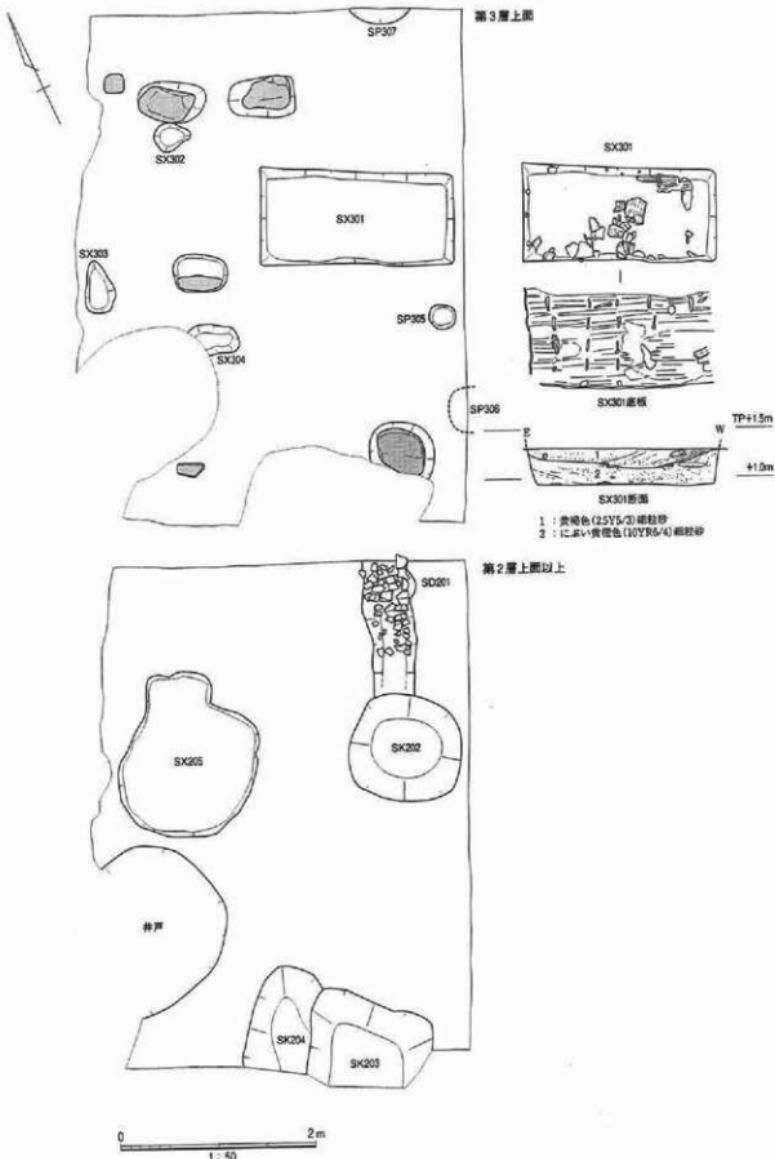


図5 第3・2層造構平面図およびSX301実測図

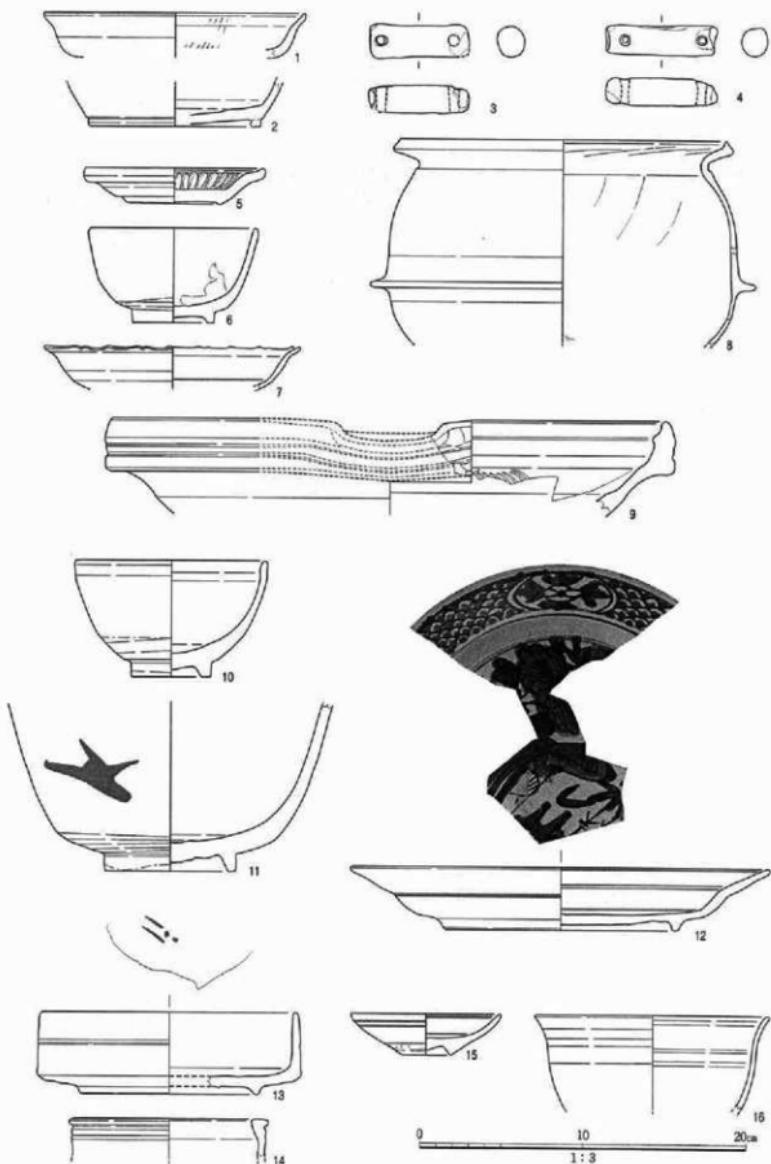


図6 出土遺物実測図(1)

第11層以下(1)、第7層(5~9)、SX701(10~12)、第6層(2・13)、第5層(3・4・14)、第4層(15)、第3層(16)

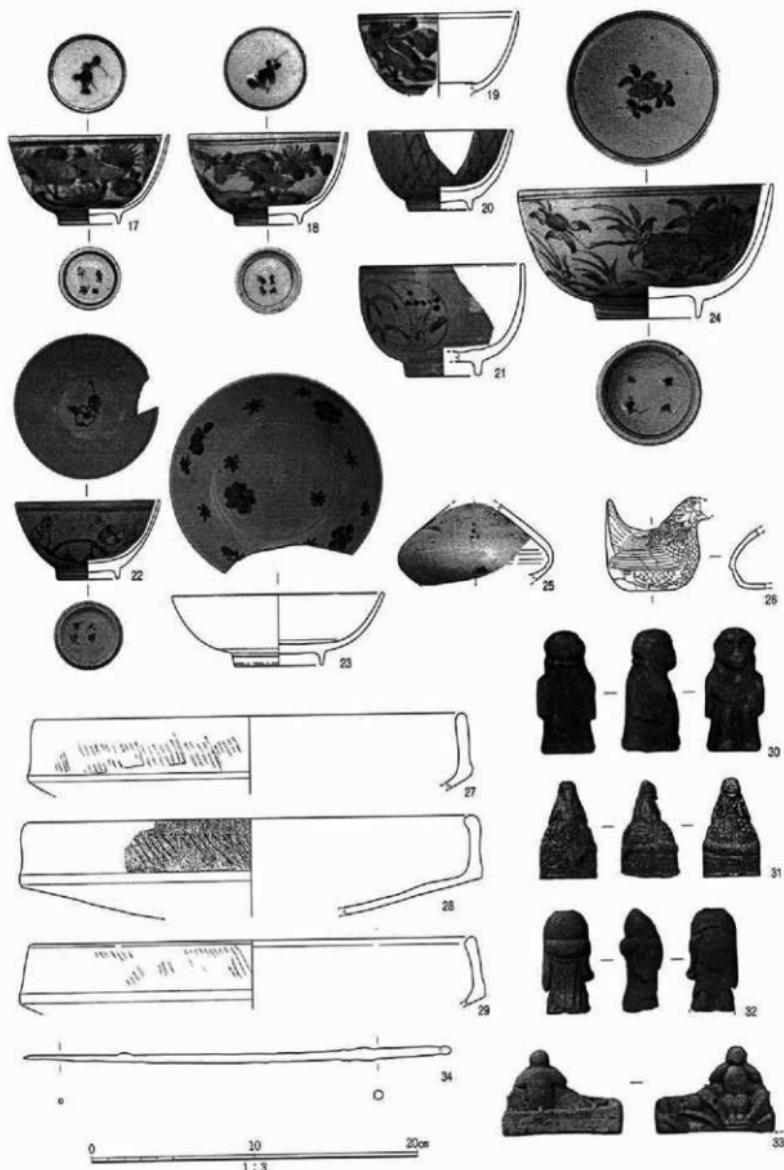


图7 出土遗物实测图(2)  
SX301(17·18·20~34)、第2层(19)

第7a層上面で検出したSK701は壁を板で作った穴蔵である。板の内法で、南北1.57m、東西1m以上である。深さは0.90mで、東壁の観察からは一段深くなるところがある。掘形は南北2.00mで、西側は掘形が拡がっている。階段状に傾斜し、入口と関係があるかもしれない。SK701からは、肥前陶器碗10、鉄鉢のある同鉢11、粗製の中国産青花大皿12が出土した(図6)。

SK701に切られてSK702がある。南北1.35m以上、東西1m以上、深さ0.6mである。

南端には、焼土塊や炭で埋まるSK703がある。東西1.05m、深さ0.40mである。SK703の横には礎石が据わっていた。同様の石は約2m離れた東壁にあったが、他はない。SK701の北西や北にある不定形の縦やかな凹みは第7a層の遺構ではなく、下位層の大きな凹みの名残りである。

b. 17世紀後半の遺構と遺物(図5～8)

第3層上面で礎石建物、穴蔵、土壙、第2層上面で溝、土塹などを検出した。

第3層上面の礎石建物は、調査区北側の4個、南側の2個の礎石で構成されている。調査面積が限られておりプランはよくわからなかった。

SX301は第3層上面で検出した長方形の遺構である。壁・底とも板を組んでおり、板は釘と錐で繋いでいる(図5の右図参照)。東西1.97m、南北0.98m、深さ0.45m以上である。小規模な穴蔵のような、

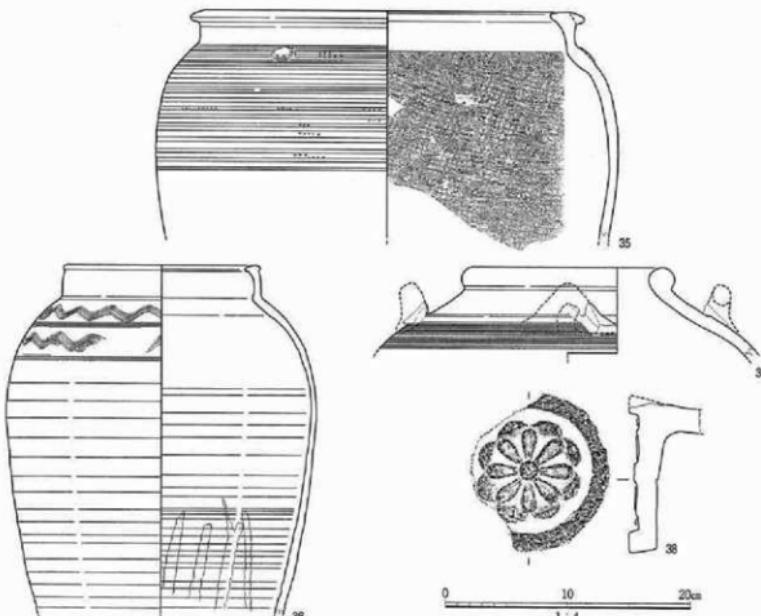


図8 出土遺物実測図(3)  
SX301(35・36)、第5層(38)、擾乱(37)

屋内地下の収納施設と推定される。

SX301からは17・18、20～36の遺物が出土した。17・18と20～26は肥前磁器である。17・18・20～22は染付碗、23は同皿、24は同鉢である。17・18・24は文様が鮮明な上等な一群で、中国窯の可能性もある。25は色絵瓶、26は鳥形の白磁水滴である。26は2枚合わせで、背に小孔がある。27～29は焰烙で、いずれも口縁部外面を搔き上げた難波編年のC類に当たる〔難波洋三1992〕。30～33は土人形で、30は猿、31は下半身蛇の鬼面人物が釣鐘を巻いている。30は瓦質で、下面に穴がある。31は施釉されている。32は西行、33は猿で、33の下面には2個の穴がある。35は肥前陶器窯、36はベトナム産長胴瓶である。34は火箸のような青銅製品で、上端がくびれている。

SX301は、出土遺物から17世紀後半～末と推定される。

図5下図には第2層上面より上の層の遺構を図示した。

SD201は、長さ1.4m以上、幅0.50mの焼けた瓦を敷いた浅い溝である。

また、西南にある新しい時期の井戸から37が出土した。37はタイ産四耳壺である。口縁部は円く肥厚し、肩部に沈線を巡らす。

### 3)まとめ

・道修町通に面する敷地奥での、大坂冬ノ陣墳から17世紀後半までの遺構の変遷を層位にしたがって確認した。地層の観察から、敷地内での豈臣期の遺構は良好に残存していると推定された。本調査地は中世後期頃に畠作地として土地利用されており、それが洪水で埋没した後、整地されて城下町へと変遷したことがうかがえる。冬ノ陣で被災後も、徳川期には城下町の一角として礎石建物が設けられたことが明らかになった。

・ベトナム・タイ・朝鮮半島の輸入陶磁器が一定程度出土しており、OJ06-2・OS86-20次などの周辺の調査と共通する。

### 参考文献

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町』II、pp.42-236

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九

第7層全景  
(北から)



第3層上面の礫石  
(北から)



SX301底板  
(南から)



中央区高麗橋二丁目における建設工事に伴う  
大坂城下町跡発掘調査(OJ10-3)報告書

調査個所 大阪市中央区高麗橋2丁目29-1  
調査面積 約40m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年12月2日～12月8日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は船場地域の北部に位置し、地下鉄北浜駅の西で、高麗橋通と浮世小路に挟まれた一画にある(図1・2)。安政3(1856)年の水帳によれば、南の高麗橋通と北の今橋通に面した敷地が浮世小路まで達している。この敷地割が豊臣期まで遡れば、当時、浮世小路は、高麗橋通や今橋通を表(オモテ)とする屋敷の裏(ウラ)となる。

周辺の調査では、南東約100mのOJ92-1次調査において、16世紀前半頃の水田→豊臣前期の大溝・礎石建物・井戸→豊臣後期の7つの屋敷地に区分される建物群→徳川初期の6つの屋敷地に区分される遺構群、という変遷が捉えられた[大阪市文化財協会2004]。[松尾信裕2004]によれば、高麗橋より北は、東横堀より東の島町・石町の奥行きの短い街区との共通性から、船場城下町の最初に開発され、豊臣前期まで遡るという。

本調査は、大坂冬ノ陣と推定される地層まで事業者側で掘り下げ、そこから城下町開発の前までの約1mの間で行った。最終調査面の第7層上面は、中央の東西アゼ以南のみを発掘した。

本報告では、方位は図1が座標北、それ以外は磁北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：最大層厚10cmの焼土層で、北半部のみに分布する。肥前陶器皿22、中国製青花皿23が出土した(図7)。大坂冬ノ陣によると考えられる。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

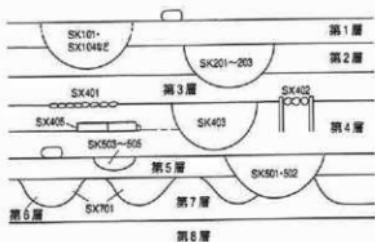


図3 地層と遺構の関係図

で、層厚は20~53cmである。土師器皿14・15が出土した。SX401・402は本層の上面、SX405は本層中で検出した。

第2層：暗褐色(10YR3/3)シルト質中粒砂層と灰色(2.5Y8/2)中粒砂層からなる盛土で、層厚は18~27cmである。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト偽礫などからなる盛土で、最大層厚30cmである。南半部のみに分布する。中国製青花碗16・17、同皿18が出土した(図6)。

第4層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト偽礫などからなる盛土

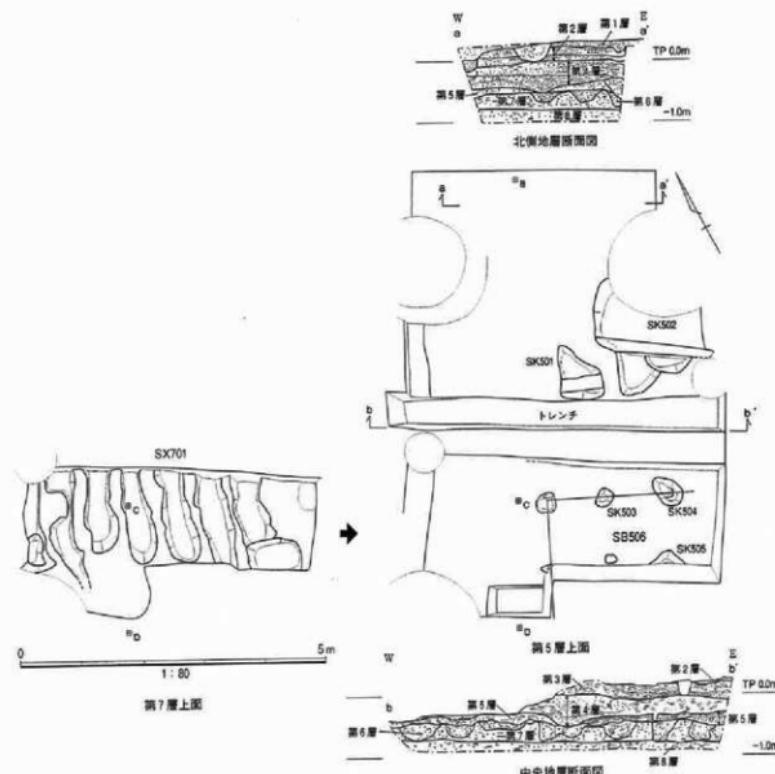


図4 第7層・第5層遺構平面図および地層断面図

第5層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂層の盛土で、層厚は6～20cmである。土師器皿7、瀬戸美濃焼鉢8、常滑焼甕9が出土した。調査地点における城下町開発の最初の盛土で、上面で礎石建物SB506、SK502などを検出した。上面の遺構から、豊臣後期と推定される。

第6層：灰オリーブ(5Y4/2)粗粒砂の水成層で、直径2～3cmの円窓を含む。最大層厚45cmである。土師器皿4・5、瓦器椀3、東播系須恵器鉢6が出土した。

第7層：褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で、最大層厚38cmである。畠の作土で、甕SX701がある。第7層上面は、第6層堆積時の水流によって浸食されたか、あるいは第6層堆積後の荷重によって変形している。

第8層：黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層で、層厚は25cm以上である。同安窯系青磁碗2、須恵器杯1は、本層以下の地層に伴う。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第7層上面の遺構(図4)

SX701は7条の平行する高まりと溝で、畠の畠と畠間と考えられる。方向は北でやや西に振り、OJ92-1次調査の第8層上面の水田畦畔と溝に類似する。第6層出土の土師器皿から、豊臣前期頃に埋ったと推測される。OJ92-1次調査の第8層の遺構は、洪水砂(第7層)で埋っており、OJ92-1次調査の第8・7層が、本調査地点の第7・6層と対応する可能性が高い。OJ92-1次調査の第8層は16世紀前半、第7層は豊臣前期と推定されている。

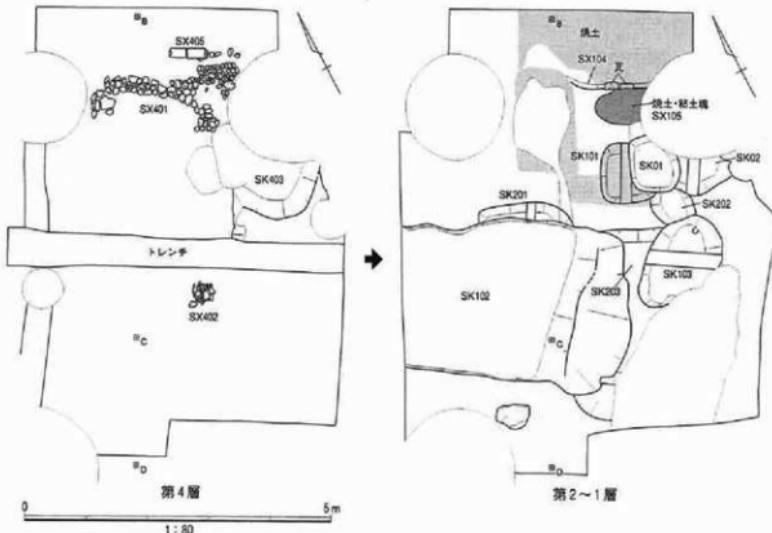


図5 第4・2～1層遺構平面図

b. 第5層上面の遺構と遺物(図4・6)

調査区南にSB506がある。礎石3個と、礎石を抜いた可能性のある窪みSK503~505があるが、平面形は明確でない。SK502は複数のゴミ穴が重なっており、深さは0.7m以上ある。SK502からは土師器土釜10、瀬戸美濃焼ソギ皿11・同志野丸皿13、軟質施釉陶器碗12が出土した。豊臣後期の遺構である。SK501は深さ0.25mの浅い土壌である。

c. 第4層の遺構と遺物(図5・7)

SX405は第4層中、SX401・402とSK403は第4層上面の遺構である。SX405は完形の丸瓦を縦に2枚並べたもので、用途はよくわからない。図7に瓦の実測図を示した(28・29)。

SX401は小石を敷き詰めており、東西2.4m以上、南北1.35mある。通路などの敷石と推測されるが、詳しく述べてはわからない。SX402は平瓦を立てて、間に石を詰めた排水施設である。直径0.45mあった。SK403は深さ0.45mの土壌である。

d. 第2~1層の遺構と遺物(図5~7)

第2層の遺構(遺構番号200番台)、第1層の遺構(同100番台)、それより上の遺構(同二桁)を一括して図5右に示した。

第2層上面にはSK201~203の土壌がある。深さのみ記すと、SK201は0.40m、SK202は0.18m、SK203は0.10mである。SK203からは肥前陶器碗19、中国製青花碗20・21が出土した。

第1層の遺構にはSK101~103とSX104~105がある。SK102は穴蔵と推定される遺構で、東西3.7m以上、南北2.65m、深さ0.50mである。東壁の傾斜が緩やかである。SK102からは土師器皿24、瀬戸美濃焼志野向付25が出土した。SK101は南北1.00m、東西0.90m、深さ0.20mである。またSK103は、長さ1.70m、幅1.10m、深さ0.20mである。SK103からは肥前陶器碗26、中国製青花碗27が出土した。SX104は、割った平瓦を縦に立てた浅い段で、北が約10cm低い。SX105は焼土混りの粘土を貼った遺構で、竈などに関係するかもしれない。また、南端に長さ0.5m以上の礎石があったが、組合う石は調査区内にない。

以上の遺構に比べ、SK01・02はかなり新しい土壌で、SK01には棟瓦を含む瓦が廃棄されていた。

### 3)まとめ

本調査では、船場城下町の開発の前の段階から、大坂冬ノ陣の間の遺構の変遷を層位的に捉えることができた。冒頭に記したように、高麗橋以北は、船場開発の第1段階という推定があり、これが西へどこまで拡がるのか、今回の調査地周辺から西の発掘で明らかにできると考えられる。また耕作地→洪水砂→最初の城下町開発の盛土などの層序は、OJ92-1次調査と対応でき、周辺の調査の手懸りになる。

### 参考文献

大阪市文化財協会2004、「大坂城下町跡」Ⅱ、pp.237-262

松尾信裕2004、「大坂城下町の町割」：大阪市文化財協会編「大坂城下町跡」Ⅱ、pp.357-364

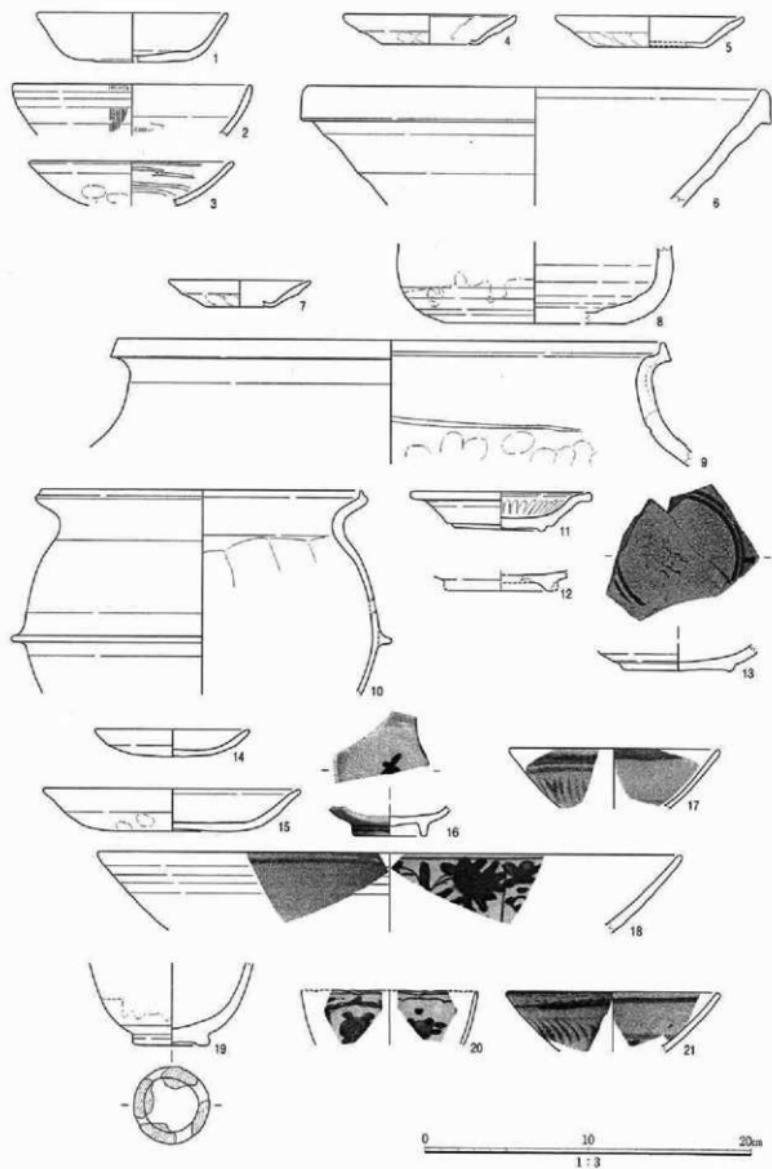


図6 出土遺物実測図(1)

第8層以下(1・2)、第6層(3~6)、第5層(7~9)、SK502(10~13)、第4層(14~15)、第3層(16~18)、SK203(19~21)

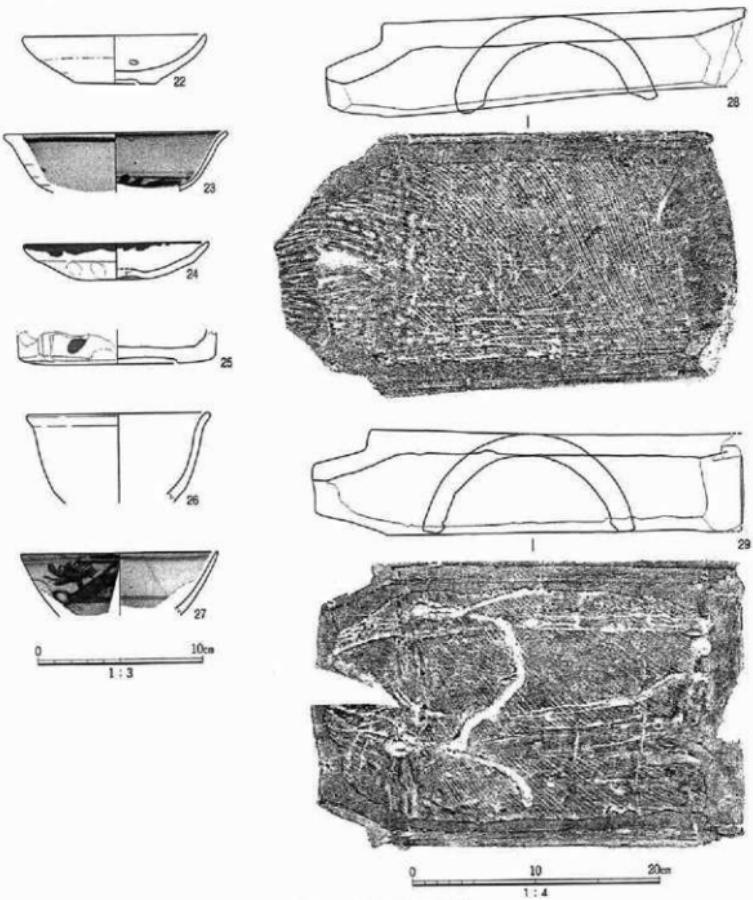


図7 出土遺物実測図(2)

第1層(22・23)、SK102(24・25)、SK103(26・27)、SX405(28・29)

SX701(西から)



第5層上面全景  
(北から)



SX401(北から)



大坂城跡発掘調査(OS10-1)報告書

調査個所 大阪市中央区島町2丁目26  
調査面積 30m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年4月15日～4月23日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、趙哲済

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城惣構内の西北部に位置し、これまでに周辺で行った発掘調査では、豊臣期の大名屋敷跡や徳川期の遺構・遺物のほか、古代に遡る遺構も見つかっている。調査地に北隣するOS87-26次調査地では、大坂本願寺期のものとみられる3条の溝や、豊臣前期の溝や土壙、豊臣後期の土壙や礎石、徳川期の土壙や穴藏などが見つかっている。西隣のOS89-76次調査地では、1724(享保9)年の妙知焼によるものと想定される焼土で埋る土壙が報告されている。また、交差点を挟んで南東にあるOS87-29次調査地では、豊臣後期~徳川期の整地層が残り、奈良三彩をはじめとする古代遺物を出土した井戸も見つかっている[大阪市文化財協会2003] (図1)。

表題の原因に伴って、当該地で平成22年3月19日に大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下0.5m以下で中世から江戸時代までの複数の遺構面が検出された。そこで、遺構や遺物の年代と分布状況を明らかにして、この地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的として、本調査を実施することになった。

調査は平成22年4月15日に北側敷地境と平行に東西10m、南北3mの調査区を設定して開始した。地表下0.5mまでを重機掘削で行い、それより下、地表下1.6mまでを人力により調査した。季節外れの雨天に悩まされたが、実働5.5日の中で4面の遺構面を確認し、各面で実測図の作成や写真撮影、遺物の取上げを行い、4月23日午後に埋め戻して調査を終了した。

本調査の水準値は東京湾平均海面(TP)値を用い、図中ではTPと表記した。また、平面図の方位は、現場で磁北を基準にして記録したが、これを室内で大阪市道路現況平面図(縮尺500分の1)と合成して国土平面直角座標を求め、さらに世界測地系座標に変換して示している。

## 2) 調査の結果

### i) 層序

調査地は上町台地の北端西側にあり、調査地の東側道路は北へ、南側道路は西へ傾斜する標高TP+12.1~12.3mの地点である。現代盛土層を第1層として、基盤層の上町層(第4層)までを区分した(図2・3)。

第1層は瓦・土管・礎・粘土偽疊・砂質シルトが混在する近世後半~現代盛土層で、層厚は50cm前後であった。中位には大阪空襲時の被災面とみられる焼土面があった。また、層中には近世の大型の石臼が含まれていた。



図1 調査地位置図

地層と遺構		地層の年代
第1層		1BC中頃～現代
第2a層	SK02-04～07-09 SK03-SK08 SE01	1BC前半
第2b層 上部 下部	SK11-13-15 SD12 石器	17C
第2c層	SK16～19-22 SD20 SD21	16C末～17C初頭 (豊臣期)
第3層	SK27～29-31～33 SP30	～16C後半 (中世)
第4層	▲▲ (上町層)	O <sup>o</sup> ステージ5

図2 地層と遺構の関係図

部盛土層の頂部に、層厚1cmの暗灰黄～オリーブ灰色(3.75YR4/2)砂質シルト薄層を載せている(註1)。本層の上面では、土壌や溝などの17世紀～18世紀初め頃の遺構が見つかった。また、第2b層からは肥前磁器や丹波焼・備前焼などの17世紀代の日用雑器が多数出土している。

第2c層はにぶい黄褐色(10YR5/3)を基調とし、上部の粘土偽礫や炭層を挟み、砂質シルトの細互層からなる最頻層厚15cmの整地層と、下部の砂質泥からなる最大層厚30cmの盛土層とからなる。上部整地層はSD20・21などの溝埋土へ連続している。第2c層上部上面では土壌や石組が、第2c層下部上面では土壌や溝が見つかった。また、第2c層からは中国製青花や丹波焼・瀬戸美濃焼・備前焼などの豊臣期の日用雑器が多数出土している。遺構出土遺物および包含遺物の時期は、いずれも16世紀末～17世紀初頭の豊臣期のもので、その前期に属するものが多い。

第3層は褐色砂質シルトからなる比較的規模の大きいSD34・35の埋土層である。本層上面には、腐植質シルトが埋める土壌や溝など豊臣期の遺構が見つかった。また、本層からは豊臣期以前の中世遺物が少量出土している。

第4層は更新統上町層の海成砂層の一部である。浅黄色(5Y7/3)中～細礫を含む極粗粒～中粒砂層であり、平板型斜交ラミナが認められる。ラミナの走向傾斜はN25°～30° E・40°～45°北落ちであった。また、砂層中には甲殻類のものとみられる直径1.5～3.0cmの巣穴が多数分布していた。

#### ii) 遺構と遺物(註2)

##### a. 中世以前(図4)

SD34・35は第4層上面を北東～南西に延びる2条の溝である。SD34は西肩の一部を、SD35は東肩の一部を検出したのみで、規模の詳細は明らかでないが、SD34は幅1.4m以上、深さ0.6m以上で、SD35は推定幅3.3m、深さ0.6m以上である。SD34からは土師器皿や陶器片など中世以前とみられる遺物が出土している。これらの溝は、北接するOS87-26次調査で大坂本願寺期の遺構かと推定された溝SD502・503に連続するものと考えられる。

第2層は近世の盛土層や整地層で、岩相の特徴から3層に細分した。

第2a層はにぶい黄褐色(10YR4/3)を基調とする下部の砂質シルト偽礫と上部のシルト質中粒砂からなる盛土層で、炭層や焼土偽礫層を挟んでいた。層厚は10～20cmであった。本層の上面では、井戸や土壌などの18世紀前半以降の遺構が見つかった。また、本層には丹波焼や肥前磁器などの18世紀前半までの日用雑器が出土している。

第2b層は上部の暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混り砂質シルトで最大層厚30cmの盛土層と、下部の黄褐色(10YR5/6)粘土偽礫と小・中礫～細礫が混在する最大層厚50cmの盛土層とからなる。下

b. 豊臣前期(図4・9)

調査区西部の第3層上面のSK27~29・31~33、SP30は輪羽口や鉢底が特徴的に出土した遺構である。また、東部のSK24~26の埋土は幾分腐植質である共通性がある。

SK24は東西0.90m、南北0.92mのはば円形で底の平らな土壤であり、最大深さ0.29mである。機能的には水が濁っていたよう、埋土は下底面上に層厚数cmの黒色砂質シルト層、黄灰色粘土偽礫質粗粒砂層が重なり、その上位を暗褐色のやや腐植質の砂質泥が埋めていた。瀬戸美濃焼・備前焼・土師器・瓦・輪羽口・鉢底が出土している。6は瀬戸美濃焼で、灰釉を施す丸碗である。豊臣前期に属する。

SK25は南北0.54m、東西0.23mの土壤で、深さは0.11mの長円の土壤である。埋土はやや腐植質の暗褐色砂質シルトである。備前焼壺が出土している。

SK26は東西0.17m、南北0.25m、深さ0.03mの浅い土壤である。埋土は暗黄色シルト質砂と砂質シルトが混在する。

SK27は東西0.65m以上、南北0.53m以上、深さ0.15mの土壤の一部である。埋土は黄褐色(10YR3/8)粘土偽礫と細礫~粗粒砂が混在する。土師器皿や瓦などが出土している。

SK28は東西0.77m以上、南北0.78m、深さ0.35mの隅九方形の土壤である。埋土は暗褐色(10YR3/3)細礫混り砂質シルトであり、黄褐色粘土偽礫・焼土・炭を多数含んでいた。土師器・瓦・輪羽口・鉢底などが出土した。1は土師器皿で、灯明皿として使用されている。口縁端部は丸く收め、口縁部と底部との境は明瞭に屈曲する。豊臣期に多い形態である。

SK29は底面の砂が赤褐色に焼けている東西0.64m以上、南北0.56m以上、深さ0.18mの土壤の一部である。埋土は黒褐色砂質シルトで、炭・焼土・輪羽口・鉢底などを含んでいる。炉であった可能性がある。

SK31は東西0.27m、南北0.70m、深さ0.06mの溝状の土壤であり、埋土は暗灰色細礫混り砂質シルトで、炭や赤褐色の焼土が含まれている。

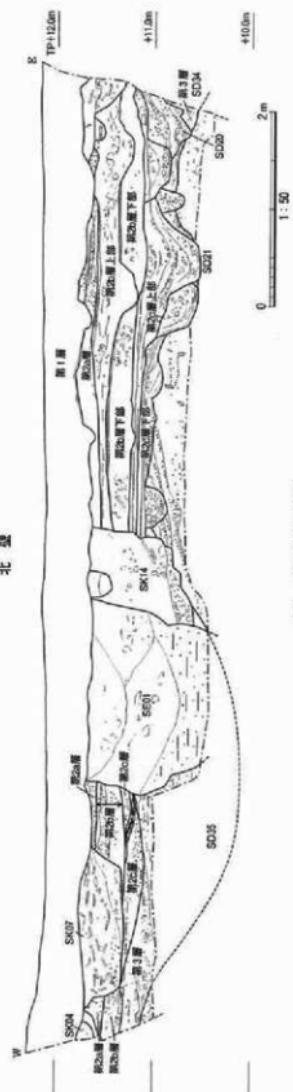
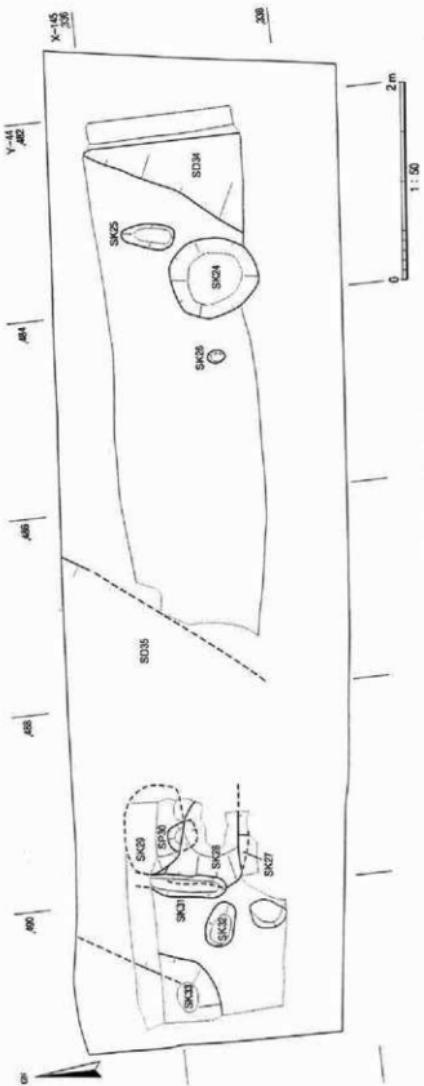


図3 北側地層断面図



SK32は東西0.48m、南北0.28m、深さ0.11mの橢円形の土壌であり、埋土は灰褐色～灰色粘土偽縛と暗灰色砂質シルトが混在している。鉱滓のほか、焼壁の一部らしい焼土も含まれている。

SP30は東西0.38m以上、南北0.35m、深さ0.30m以上のビットであり、埋土は炭を含む黒褐色(10YR2/2)細縛混り砂質シルト偽縛からなる。鉱滓が出土している。

#### c. 豊臣期(前・後期未詳)(図6・9)

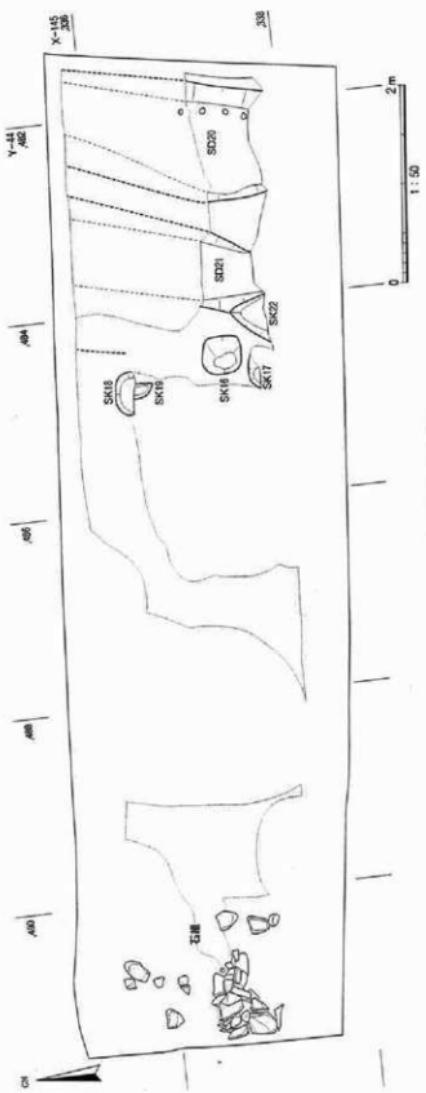
調査区東部の第2c層下部上面のSD21、第2c層上部上面のSK16～19・22、これらの土壌に削られたSD20、及び西部の第2c層上面の石組遺構がある。

SD20・21はともに北東～南西方向に延びる溝であり、埋土は第2c層上部からなる。偽縛を含むとともに、底付近には粗粒砂のラミナも観察され、一時的にせよ流れがあったことがわかる。古流向は南から北へとみられる。ともに上位の土壌に削られて本来の規模は不明だが、断面から推測すると、SD20は幅1.3m程度、深さ0.3m以上、SD21は幅約2m、深さ0.7m程度である。SD20の東側斜面基底付近に13、15、18cm間隔で直径約7cmの杭が4本見つかっている。SD20からは、中国製白磁・青磁・瀬戸美濃焼・備前焼・瓦質土器・土師器・軒丸瓦・銅製品が出土している。中国製品では白磁皿および青磁碗がある。2は端反りの白磁皿で、体部下半は無釉である。3は青磁碗の底部である。高台内は無釉で、墨付の釉は搔きとっている。瀬戸美濃焼は丸皿・天目碗がある。4は灰釉の丸皿で、高台内には輸トチンの痕跡が残る。5は天目碗で、内面には金属に由来する緑青色の付着物が

図4 第3層上面・第4層上面断面平面図



図5 調査地周辺遺構分布図



ある。7は備前焼壺である。これらは豊臣前期に属する。

SK16は東西0.63m、南北0.58mの隅丸方形の土壙で、深さは0.60mで上半部が開いている。埋土下部は焼土を含む黒色炭質砂質シルトが占め、埋土上部を暗灰色粗粒砂質シルトや暗灰黄色粗粒砂質シルト、暗黄褐色砂質シルトが不定形な偽礫密集帯となつて埋めている。土師器皿のほか、瓦・アカガイが出土している。8は灯明皿として使用された土師器皿で、口縁部をつまんで外反させ、端部は丸く收める。口縁部と底部の境は屈曲が緩い。豊臣後期に属するものであろう。

SK17は東西0.25m、南北0.30m以上の土壙の一部であり、埋土は基底から上に褐色シルト層、シルト質粗粒砂層、黒褐色腐植質シルト層を2層挟む粗粒砂質シルト・シルト偽礫層が順次埋めている。土師器・鉢滓・貝殻が出土した。

SK18は東西0.32m、南北0.22m以上の隅丸方形かとみられる遺構の一部であり、深さは0.20mである。埋土は底から約5cmが暗灰色砂質シルト層でその上位が黒褐色炭混り腐植質シルト層である。未詳ながら、魚骨鱗・種子などが出土している。

SK19は東西0.19m、南北0.33m、深さ0.05mの隅丸長方形気味の土壙で、埋土は灰色細礫混り粗粒砂質シルトである。瓦や礫が出土した。

SK22は東西0.48m以上、南北0.34m以上、深さ0.16m以上の土壙の一部であり、埋土は粗粒砂主体で黒色炭質粗粒～中粒砂薄層を挟んでいた。肥前磁器青磁碗・土師器皿・輪羽口・鉢滓などが出土している。

図6 第2c層上面・新2c層内遺構平面図

石組と呼んだ遺構は、調査区西部で検出した長径40~10cmの巨~大砾の比較的扁平な割石が約30cmの高さで積み重ねられたものである。後世に擾乱されて、割石が東西1.3m、南北1.5mの範囲に散乱して検出されたが、一部に北側敷地境方向と並行に割り石の縁をそろえて面を作り出した様子が認められた。石組み溝の一部の可能性がある。

d. 徳川期前半(17世紀後半~18世紀初頭)  
(図7)

第2b層上面のSK11・13・15、SD12がある。埋土はいずれも第2a層と類似する暗灰色疊混り砂質シルトである。

SD12は敷地境界に斜交して、北西~南東方向に延びる幅0.4m、深さ0.2mの溝である。17世紀中葉以降の肥前磁器や備前焼が出土している。

SK15は東西0.65m、南北0.50m以上のほぼ円形の土壠で、深さは0.1m足らずで、底中央が径0.22mの範囲が浅く窪んでいる。埋土は黄灰色疊混り粗粒砂質シルト偽疊と灰色砂質シルトからなる。

SK11からは17世紀代の肥前磁器、SK13からは17世紀後半~18世紀初頭の肥前磁器や肥前陶器・丹波焼などが出土している。

e. 徳川期後半(18世紀前半以降) (図8・9)  
第2a層上面の遺構群である。

SK14は東西0.8m以上、南北0.8m以上、深さ1.1mの土壠の一部で、SE01に削られている。埋土は暗褐色疊混り砂質シルトで、肥前磁器・肥前陶器・関西系陶器・瀬戸美濃焼・瓦が多量に出土した。10は肥前陶器刷毛目碗で、高台疊付および底部内面に砂が付着する。11は瀬戸美濃焼壺である。これらは18世紀前半のものであろう。

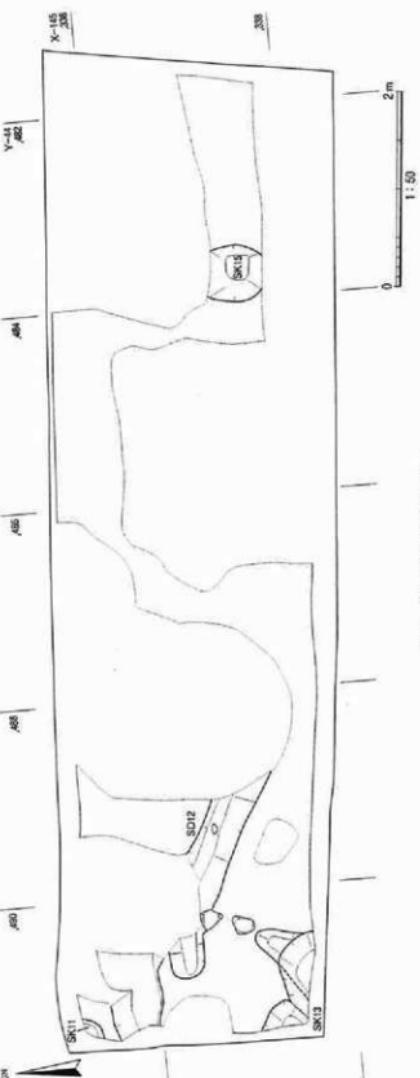
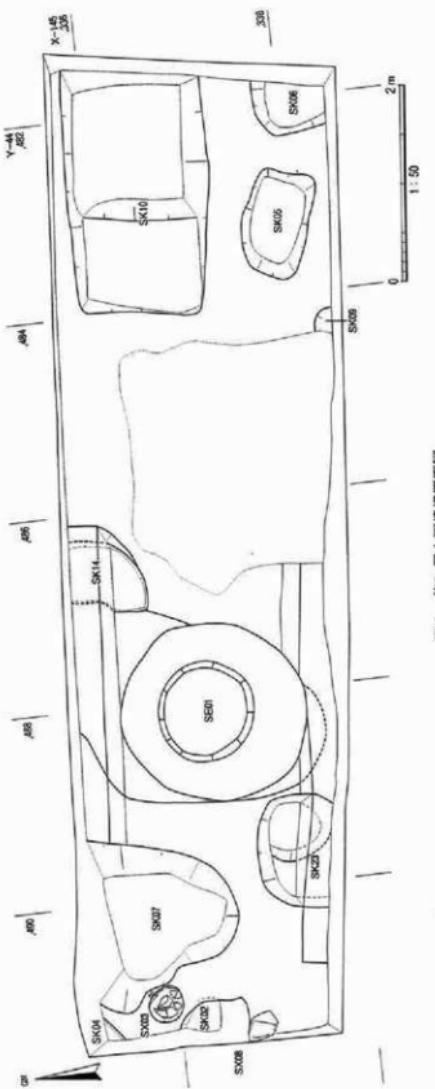


図7 第2b層上面遺構平面図



SK23は東西1.2m、南北0.8m以上、深さ0.9mの土壤の一部である。埋土は暗灰褐色疊混り砂質シルトで、肥前磁器・丹波焼・備前焼・土師器・平瓦・金属・貝が出土している。9は肥前磁器染付碗である。外面に一重網目文を施す。17世紀後半に属する。

SK07は東西1.7m、南北1.5mの亞な円形の瓦廃棄土壤の一部で、深さは0.4mである。瓦の隙間を暗灰褐色の疊混り砂質シルトが埋めている。瓦のほか、中国製青花・ペトナム陶器・肥前磁器・肥前陶器・丹波焼・備前焼・土師器・アカガイが出土している。12は中国製青花皿で、高台疊付には砂が付着する。13~15は肥前磁器である。13・14は染付碗で、13の外面にはコンニャク印判による文様が施される。15は染付蓋である。16は肥前陶器で、内野山系の皿である。胎土は精良で、灰白色を呈する。これらは12が17世紀前半、他は18世紀前半に属する。

SK03は丹波焼甕17の底部を打ち欠いて用いた水琴窟である。掘形は甕より一回り広い直径0.5mであり、裏込めには瓦も詰めている。甕の下には大疊サイズの円盤やその割石を並べている。甕内部は砂質シルトで埋っているが、底部に穿かれた穴の下方は中疊が多い。音を反響させるために、穴から中疊を少しづつ落とし入れたのかもしれない。18世紀前半に属する。

SK10は東西2.45m、南北1.25m、深さ0.75mの直方体形の土壤で、埋土は底から瓦疊まり(基質は暗灰色砂質シルト、層厚18cm)、瓦を多量に含む黄灰色泥層(層厚30cm)、炭層(層厚2~3cm)、瓦を多量に含む黄灰色砂質シルト層(層厚25cm)が概ね水平に積まれている。肥前磁器・肥前陶器・中国製白

図8 第2号上面遺構平面図

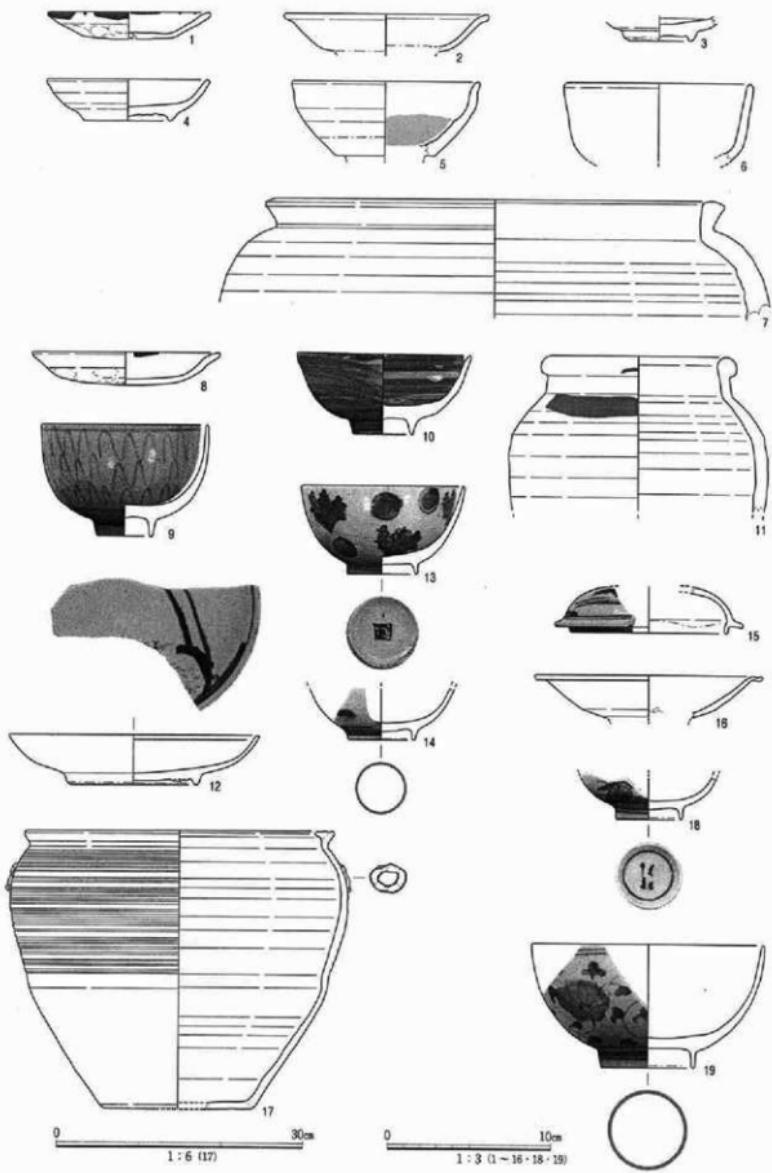


図9 出土遺物実測図(1)

SK28(1)、SD20(2~5・7)、SK24(6)、SK16(8)、SK14(10~11)、SK23(9)、SK07(12~16)、SX03(17)、SE01(18・19)

磁・丹波焼・堺鉢・土師器・瓦・貝・銅製品・錢・鉱滓が出土している。20は肥前器染付碗で(図10)、見込みを蛇の目釉剥ぎする。21は肥前器染付蓋である。手描きとコンニャク印判を組み合わせた文様を施す。22は堺鉢である。片口部に扇形の刻印を施す。23は丹波焼甕である。口縁部は上方が平坦で、端部は内側へ強く屈曲する。これらは18世紀前半から中葉にかけてのものである。

SE01は1周10枚の井戸瓦を6段以上積んだ井戸である。井戸瓦は1枚が25cm四方で厚さ4.5cmの規格品である。瓦は漆喰で接合している。井戸の内径は0.85m、瓦の外周も厚さ1.5~2cmの漆喰で固めている。掘形は直径1.8mのほぼ円形である。掘形の埋土は褐色(10YR4/5)小・細縞混りシルト質極粗粒~細粒砂で、外周の一部は8~20cm厚の漆喰で補強されている。掘形の外にも掘形に沿うように不整形な凹みがある。SE01に先行する井戸の掘形か、掘形掘削中に基盤の砂層が崩れた跡を埋め

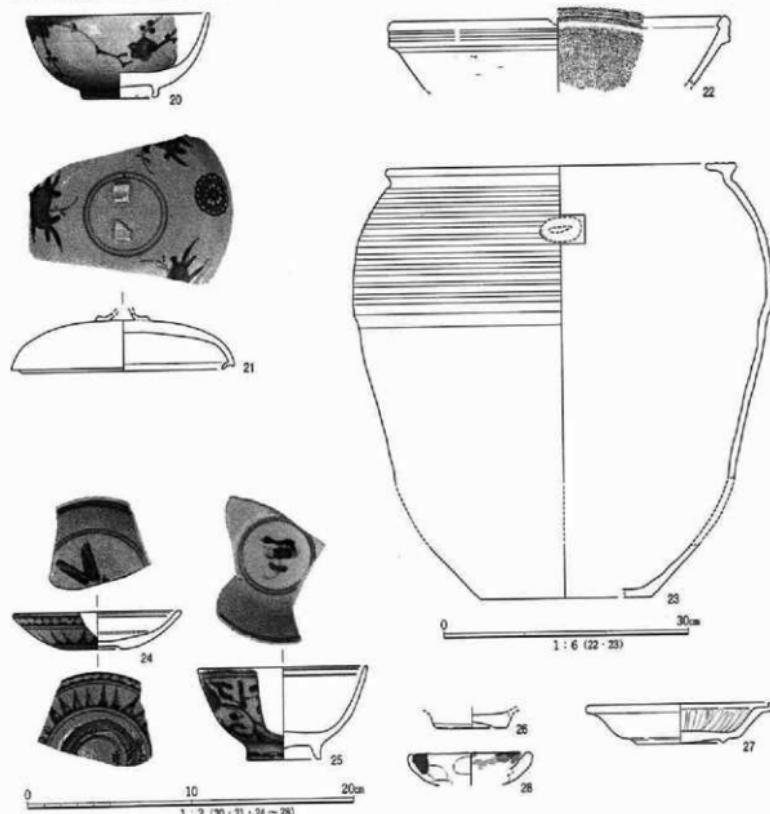


図10 出土遺物実測図(2)  
SK10(20~23)、第2c層下部(24)、第2c層(25~28)

たものと思われる。掘形から肥前磁器・肥前陶器・備前焼・丹波焼・瓦が出土した。18・19は肥前磁器染付碗である。18の高台内には「大明年製」の銘がある。17世紀後葉～18世紀初頭のものであろう。井戸は昭和前期まで使用されたらしく、井戸埋土からは大阪空襲で焼けたとみられる焼土やガラスも出土している。

#### f. 地層出土遺物(図10)

24～28は第2c層から出土した。24は第2c層下部から出土した中国製青花皿である。底部は葵筋底で、墨付を釉剥ぎしている。25は中国製青花碗である。高台内には砂が付着する。26は瀬戸美濃焼天目碗の底部である。27は瀬戸美濃焼で、灰釉の折縁ソギ皿である。これらの遺物は24が大坂本願寺期、26・27が豊臣前期、25が豊臣後期のものである。28は口径約8cmの小型の堀塙である。OS88-121次調査の豊臣前期のSK501で出土例がある[大阪市文化財協会2002]。

### 3)まとめ

- 本調査では、OS87-26次調査などの成果を引き継いで、次の諸点を明らかにし、また追認した。
- ・大坂本願寺期かそれ以前の中世遺構が残っていることを追認し、図5に示すようにOS87-26次調査地のSD502・503が本調査地のSD35・34に連続することを明らかにした。
  - ・調査地には豊臣期の遺構面と遺物が良好に残っていることを追認した。
  - ・豊臣前期の遺構からは輪羽口や鉢津などの鍛冶工房に係わる遺物が多く出土し、また、底が焼けている土壙(SK29)があることなどから、調査地やその近隣で鍛冶が行われていた可能性を指摘できる。
  - ・徳川期の遺構面が3面以上あることを明らかにした。
- また、次の点が明らかにならず、今後に課題を残した。
- ・OS87-26次調査地で確認したという大坂夏ノ陣(1615年)の焼土層を確認できなかった。
  - ・OS89-76次調査地で確認したという妙知焼(1724年)の焼土層を確認できなかった。
  - ・当該地域の土地利用の変遷が、社会体制の変化とどのように係わり合って形成されたのか、まだよく分かっていない。

### 註

- 1) 第2b層下部上面も遺構面であるが、調査時間の都合で遺構検出は行っていない。
- 2) 遺物の観察と記載は、大阪文化財研究所調査課学芸員の小田木富慈美による。

### 文献

- 大阪市文化財協会2002、「大坂城跡」VI, pp.127-131.  
大阪市文化財協会2003、「大坂城跡」VII, pp.17-26, pp.105-128.

調査地近景  
(奥は北大江公園、  
第2a層上面、  
西から)



地層断面  
(北壁)



第3層上面の遺構検出状況  
(奥の石組は第2c層上面、  
東から)



第2c 層上面・層内の遺構  
(調査区東部、北から)



SK22遺物出土状況  
(北から)



水琴窟(SX03)断面  
(東から)



大坂城跡発掘調査(OS10-5)報告書

調査個所 大阪市中央区南新町2丁目16-3  
調査面積 70m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年6月7日～6月12日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は本町通の北、松屋町筋の東の豊臣期大坂城築構西辺に位置する(図1)。上町台地の西斜面に当るとともに、推定「釣鐘谷」に近く、南隣りの敷地が1段低くなる。周辺では、南西約50mのOS89-41・89-149・91-53次調査で豊臣前期の南北の石垣と井戸、豊臣後期の建物が[大阪市文化財協会2003]、その東のOS07-14次調査で南北の段差が検出されており、石垣と段差からは、豊臣期の屋敷地造成のようすが推定された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。

調査区は、敷地西側中央に南北10m、東西7mに設定した(図2)。発掘は地表下約1.3mの焼土層(第1層)より開始し、大きく捉えると、第1層上面、第2層上面、第3層上面、第5層上面の各面の調査を行って終了した。使用した方位は座標北と磁北を基準とし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±0mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4、写真3頁中)

第1層より上の地層では、南壁において少なくとも2面の徳川後期の生活面が観察された。

第1層：褐色(7.5YR4/3)シルト質細粒砂混りの焼土層で、層厚は10~30cmである。時期は特定できないが、下位層の遺構の出土遺物から18世紀前半頃と推定される。

第2層：淡黄色(2.5Y8/3)極細粒砂のきれいな整地層で、層厚は25cmである。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂層で、最大層厚45cmである。南西方向への傾斜を埋める整地層で、調査区南西に分布する。肥前器青磁碗7・8、同染付皿10、同青磁皿11、ミニチュ

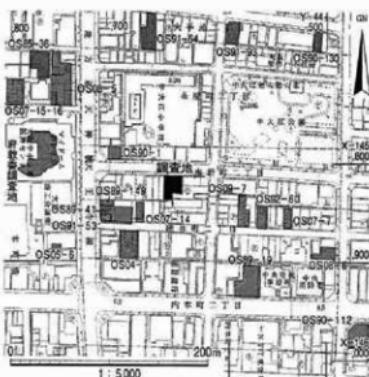


図1 調査地位置図

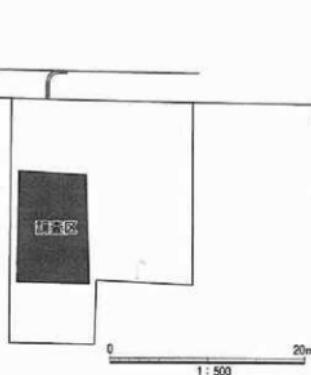


図2 調査区位置図

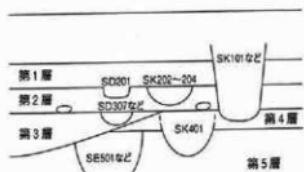


図3 地層と遺構の関係図

ア土製品羽釜12、肥前陶器碗13、同鉢14、丹波焼鉢15が出土した(図6)。17世紀後半と推定される。

第4層：褐色(10YR4/6)粗粒砂質シルト層などからなる整地層で、最大層厚42cmである。調査区北西におもに分布するが、第3層との関係が良好に把握できる場所がない。第3層と近い時期と推定される。肥前陶器皿1が出土した(図6)。

第5層：明黄褐色(2.5Y6/8)粗粒砂～極粗粒砂層の、当地のいわゆる地山層である。現状の上端で、南西隅は南東隅より55cm、北西隅より40cm低くなる。

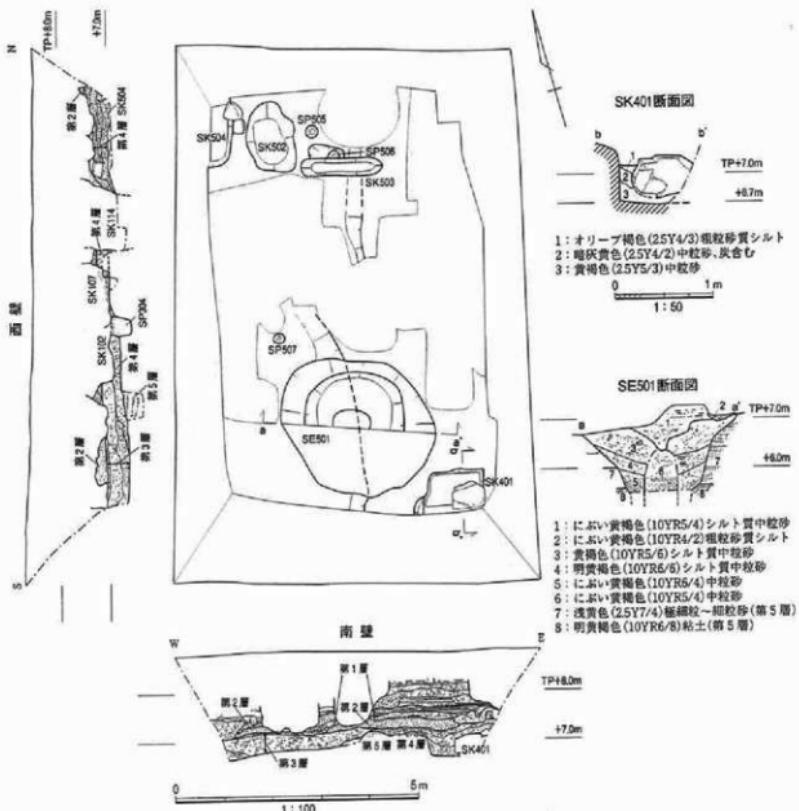


図4 第5・4層上面遺構平面図・断面図、西・南壁地層断面図

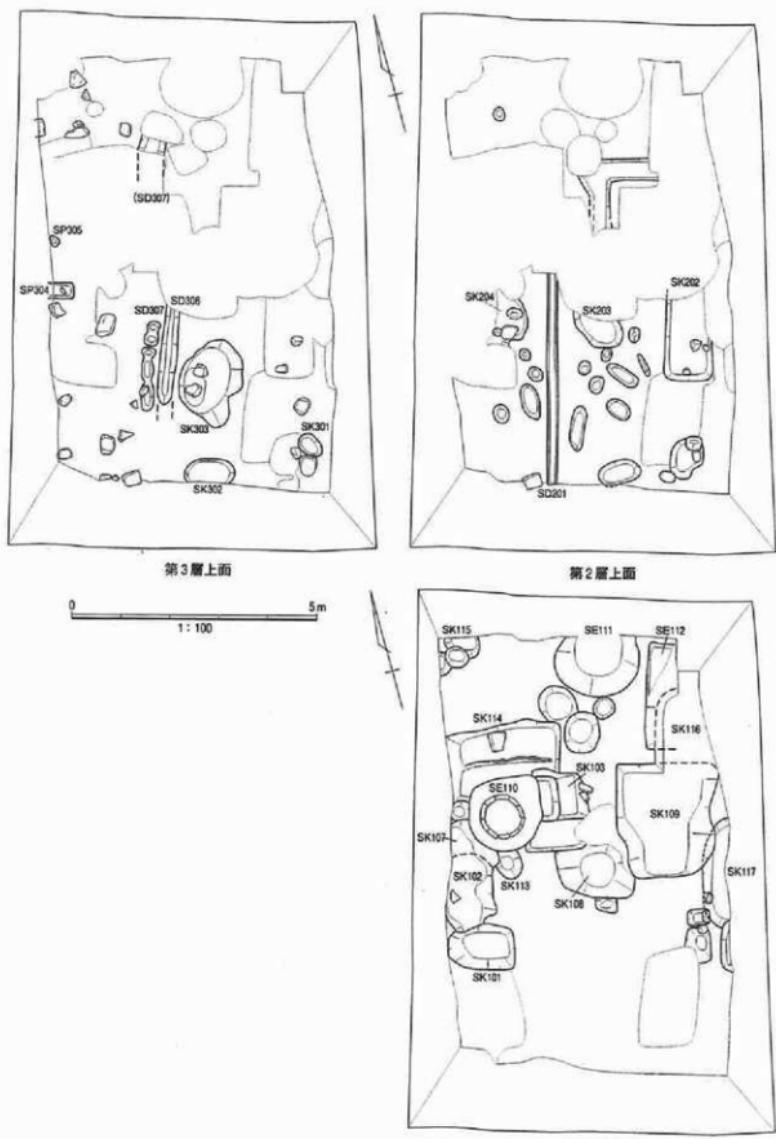


图5 第3層上面—第1層上面造構平面圖

## ii) 遺構と遺物

### a. 第5・4層上面の遺構と遺物(図4・6、写真1頁上)

第5層上面では地形を反映し、南西に向けて緩やかに低くなっている。SE501、SK502~504、SP505~507を検出した。SE501は南北2.65m、東西3.10mで、深さ1.55m以上あり、直径約0.8mの円形の木製井戸側痕跡が残る(写真1頁中)。出土遺物は瓦しかなく、時期はよくわからないが、豊臣期の可能性もある。

SK502はゴミ穴で、南北1.30m、東西0.95m、深さ0.63mあり、肥前磁器5・6が出土した。5は染付の碗、6は赤絵の蓋で、内面中央に褪色した「九口」の文字がある。SK503は東西1.65m、南北0.35m、深さ0.60mの細長い土壇で、SK504は深さ約0.2mの浅い凹みである。SP505~507は深さ0.10~0.24mで、柱穴かどうかは不明である。

第4層上面の遺構にはSK401があった(写真1頁下)。東西1.30m以上、南北0.85m以上、深さ0.55mの穴に、長さ0.65m以上、厚さ0.43mの大きな石を据えている。石の上面は比較的平らである。調査区外の東南に拡がる蔵のような建物の礎石かもしれない。SK401からは、瓦質土器火入2、肥前磁器染付碗3、丹波焼擂鉢4が出土した。2・4は第3層の破片と接合した。

### b. 第3層上面の遺構と遺物(図5・6、写真2頁上)

第3層上面には建物の礎石が分布するが、プランは復元できない。第2層上面の遺構との比較からSD306・307付近が敷地境で、それを境に別の敷地に建てられた建物と推定される。以下、主な遺構のみ記述する。

SD306は長さ2m以上、幅0.27~0.33mのごく浅い溝である。また平行するSD307も同様の浅い溝で、攪乱を越えて北に続けば長さ5.6m以上となる。敷地境の排水溝で、南の背割下水まで続いていた可能性がある。SK303は南北1.75m、東西1.30m、深さ0.55mの土壇で、肥前磁器染付碗9が出土した。

第3層上面の遺構は、総体として17世紀後半と推定される。

### c. 第2層上面の遺構と遺物(図5・7、写真2頁中・下)

第2層上面の遺構には、第1層の焼土層を埋土とする遺構と、焼土を含まず、それより古い遺構の2種がある。後者はSK202~204で、前者は、それらを除くSD201他のすべての小さな凹みである。

SD201は長さ4.3m以上、幅0.28m、深さ0.12mの直線的な溝で、木枠を使用していたと推定される。敷地境の排水溝で背割下水まで続いていたのである。先述のように焼土層で埋っており、肥前磁器染付小杯16、肥前陶器の京焼風平碗17が出土した。第2層上面の遺構は18世紀初め頃まで下ると推定される。

SK202~204の深さのみ記すと、SK202(0.25m)、SK203(0.20m)、SK204(0.33m)であった。

### d. 第1層上面の遺構と遺物(図5・7、写真3頁上)

第1層上面より上位層のすべての深い遺構が混在しており、18世紀中頃~19世紀中頃の時期である。井戸2基、穴蔵1基(SK114)などがあるが、とくに特徴的な2種の遺構を報告する。

ひとつは羽口やスラグが捨てられている土壇で、壁が垂直に掘られ深い。調査区東北のSK109・112・116がこれに当り(SK112→SK116)、検出面より約1.5m掘っても底が出ない。SK109からは肥

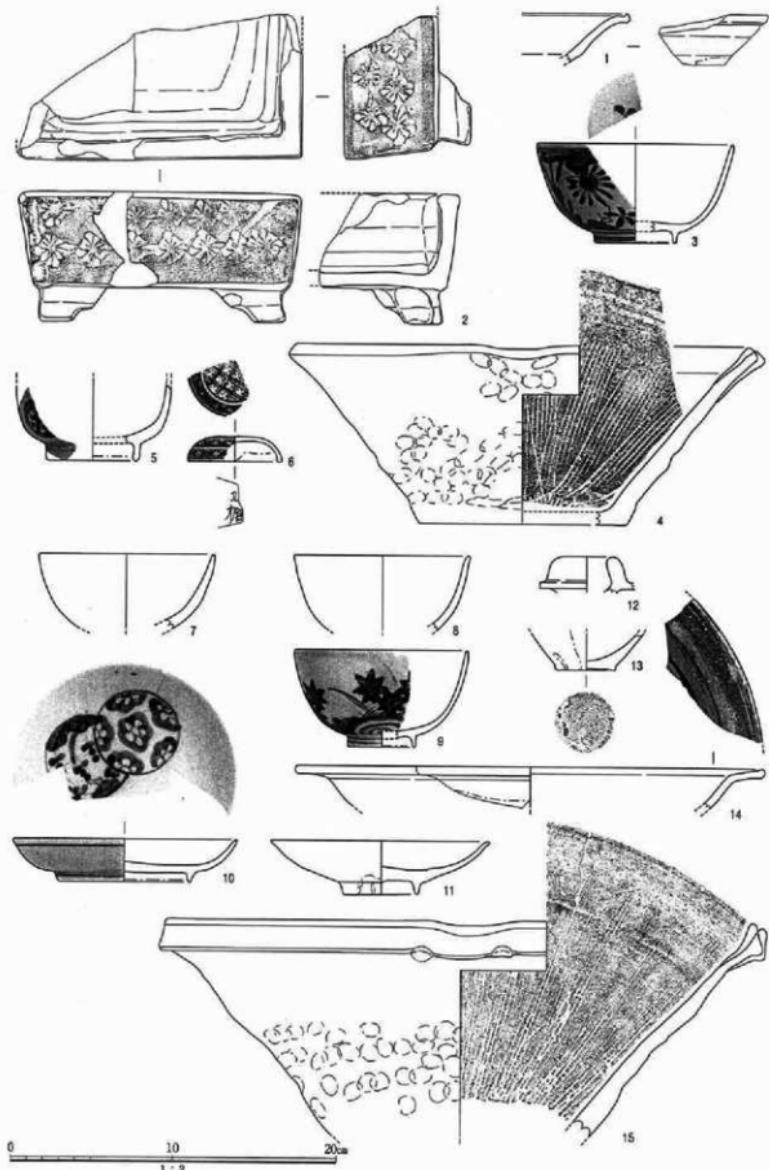


図6 出土遺物実測図

第4層(1)、SK401(2~4)、SK502(5~6)、第3層(7~8・10~15)、SK303(9)

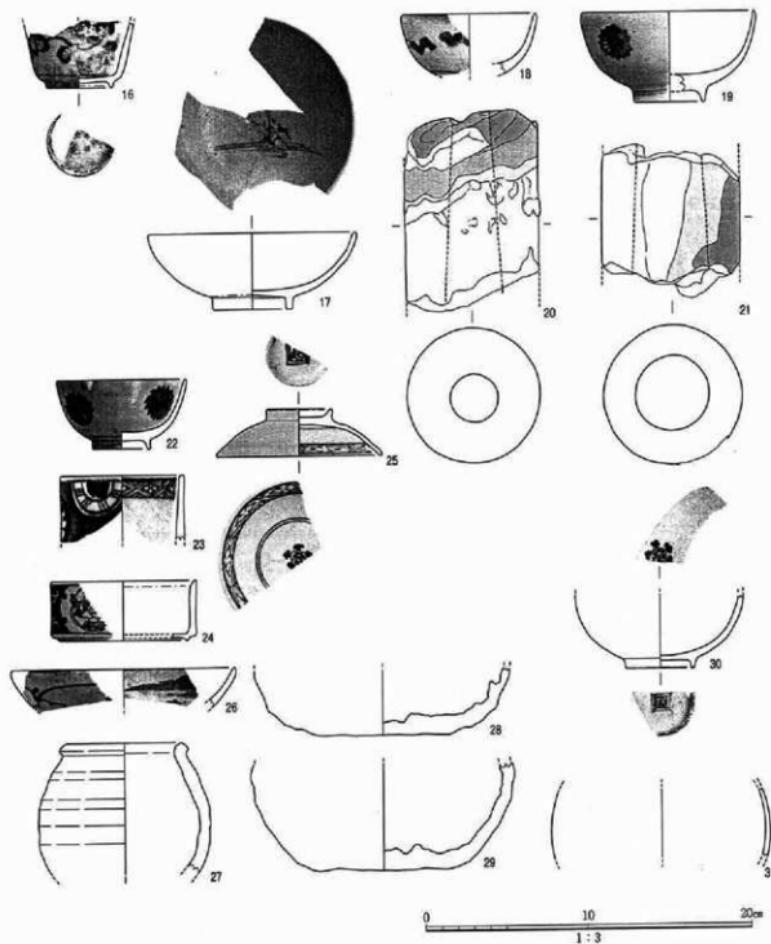


図7 出土遺物実測図

SD201(16・17)、SK101(18~21)、SK109(22~25)、SK113(26~29)、SK103(30・31)

前磁器染付碗22・23、同色絵段重24、同青磁染付盞25が出土した。SK109とSK116は切合いが不明だが、埋土がよく似ている。18世紀後半~19世紀初めの遺構群と推定される。鍛冶か鋳造に関係する長方形の深い廐棄土壙は、大坂城跡で他でも見つかっている。

二つ目は、28・29のような袋状(俵状)の土製品がぎっしりとつまっている土壙である。SK101・107・113などがこれに当る。件の袋状土製品は、これまでの大坂城跡・城下町跡の調査でも集中して出土した地点がある。すべて割れており、口縁部に当るものがまったくないことから、何かを包み込

んで焼いたのであろうが、用途がわからない。内面には何かを縛った藁状の痕跡が残り、外面は相当に火を受け、軽い(写真3頁下)。SK101・107では羽口20・21も出土しており、関係があるのかもしれない。SK101からは肥前磁器染付碗18・19が、SK113からは同皿26、丹波焼壺27が出土した。これらからSK101・113は18世後半と推定される。

この他に特徴的な遺構・遺物には以下のものがある。穴蔵SK114は足台のように石を置き、段を作るために平瓦4枚を立て並べていた。SK114を切るSK103では、表面が銀化した江戸時代のガラスボトル破片31が出土した。図の傾きと直径は不確かである。同種の輸入品が、ワインなどを空にした後、容器として流通していたことが知られている。共伴した肥前磁器青磁染付碗30から、18世紀後半頃のものと推定される。

### 3)まとめ

今回の調査では、地形を少しずつ克服しつつ屋敷地を造成したようすを、18世紀初め頃まで段階的に辿ることができたことが大きな成果である。豊臣期の建物なども存在した可能性が十分あるが、遺構面は削られて残っておらず、SE501が当該期の可能性がある。

その他、18世紀後半以降の徳川期の遺構・遺物で、鍛冶あるいは鋳造関係の廃棄土礫、用途不明の袋状土製品の集積、ガラスボトル片などを検出した。

### 参考文献

大阪市文化財協会2003、「大阪城跡」Ⅶ、pp.291-298

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「大阪城跡発掘調査(OS07-14)報告書」;「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)」、pp.161-166

第1層上面全景(南から)



南壁断面東半



袋状土製品  
上段は溶着した破片



第3層上面全景(南から)



第2層上面全景(南から)



第2層上面全景(北から)



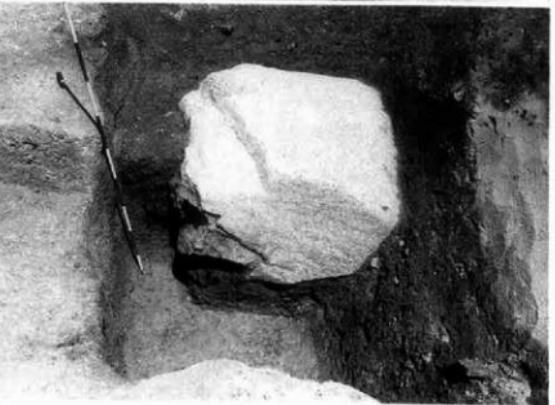
第5層上面全景(北から)



SE501(北東から)



SK401(西から)



中央区糸屋町一丁目における建設工事に伴う

大坂城跡発掘調査(OS10-6)報告書

調査個所 大阪市中央区糸屋町1丁目6ほか  
調査面積 約324m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年12月6日～平成23年1月7日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、京嶋覺

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城築構内の西部に位置する。調査地東側ではOS91-32・98-55・04-2次調査で古代の東西溝や柱穴が検出されているほか、中世・豊臣期の溝などの遺構が確認されている[大阪市文化財協会2001・2003b、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005b]。また、道路を挟んだ南側のOS03-13次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a]では豊臣期の遺構のほか、7世紀後半の遺物が一括で出土した谷頭部分が検出されている(図1)。のことから、今回の調査地でも各時期の遺構・遺物が検出される可能性が高いと考えられた。

調査区は敷地北部の東西36m×南北7mの範囲である(図2)。12月6日から重機による表土掘削を開始し、東部では現地表下0.7~1.0mで地山層と思われる砂礫層が確認されたため、概ね1m前後までを掘削しつつ、現代の擾乱や近代まで下る遺構の掘削を進めていった。最下部の整地層(第3層)上面の遺構を調査したのち、さらに掘り下げて地山層上面の遺構を調査した。年を越した1月7日に東南隅の中世以前と思われる遺構の掘削と記録作業を終え、現場での作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、平面図は座標北を基準に作成し、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：近代～現代の盛土および擾乱の埋土である。

第2層：明黄褐色(10YR3/2)細粒～粗粒砂層や黒褐色(7.5YR3/2)細粒～中粒砂質シルト層など、



図1 調査地位置図

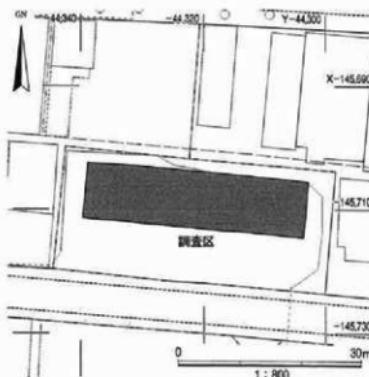


図2 調査区位置図

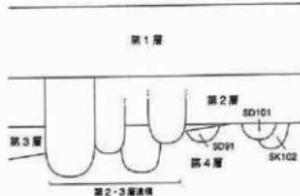


図3 地層と遺構の関係図

調査区全体に分布する幾層かの整地層を総称する。全体的に上位から多数の擾乱や大型土壌が重複して掘られていたため、部分的に残されるのみであったが、厚いところでは約50cmを測る。

第3層：暗オリーブ褐色(5Y4/3)粗粒砂質シルト層で、層厚が5~50cmの整地層である。西半部の第4層の地山層上で確認された地層である。調査区東端部では地山層が高いため本層は遺存しておらず、北西へ向かうほど厚くなっている。出土遺物には土師器・瓦質土器のほか、肥前陶磁器や青花が目立ち、大坂夏ノ陣後の17世紀代の整地層と考えられる。

第4層：黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂～細緻ないしオリーブ黄色(5Y6/3)シルト～細粒砂の地山層であ

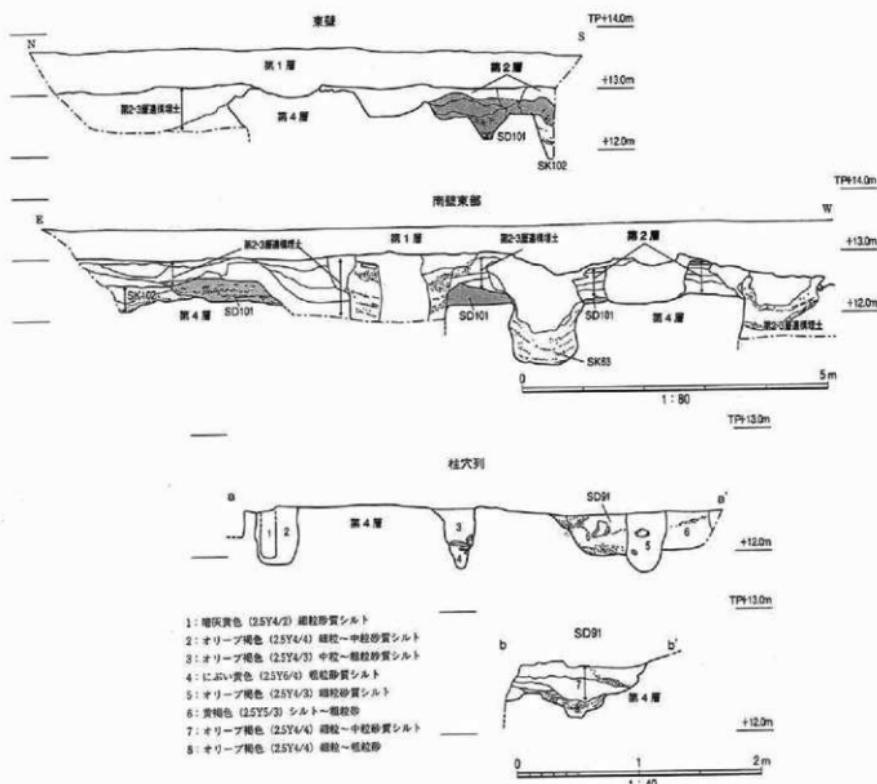


図4 地層断面図(上：東壁、下：南壁東部)および遺構断面図

る。色調は地点ごとに異なるが、全体的に砂礫質である。上面の標高は調査区東端が最も高くTP+約13mで、西に向かって低くなり、西端ではTP+12.4mとなる。

## ii) 遺構と遺物(図5～7)

遺構は検出された層準から、第2層中および上面、第3層上面、第4層上面に区分される。しかし、第3層上面の遺構には第2層上面や層中からの遺構の掘り残しが含まれると思われ、両者の遺構を厳密に区分することができなかった。したがって、以下には第4層上面の遺構と第2・3層層準の遺構とに分けて記述する。

### 古代～中世：第4層上面(図5下)

SK102 調査区東南隅で検出された土壠である。南北0.4m以上×東西3.0m以上で、北辺は直線的であるが、全体の形状は不明である。深さは約1mで、直に掘り込まれている。溝の可能性も考えられる。埋土は上部が灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトで下部はオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂～シルトの水成層である。遺物は土師器杯A1、須恵器杯・壺の細片が少量出土したのみで、切り合い関係では一番古い遺構である。遺構の方向は正東西方向を示す。

後述するSD101より正方位に近く、OS98-55次調査[大阪市文化財協会2001]で検出された古代のSD301に近い方位であるが、SD301中心軸の西延長線より約3m北に位置する(図8)。

SD101 調査区東南隅でSK102を切って検出された東西溝である。幅2m以上であるが、0.7mの幅でより深くなった部分があり、深さ0.7mを測る。下部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～粗粒砂、上部は暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルトの水成層で埋まっている。出土遺物には土師器細片のほか、中世須恵器の鉢細片が出土しており、中世の溝であろう。

OS98-55次調査で検出されている中世の東西溝SD201と位置関係からみて連続する溝と考えられ、西で南に約1°傾れる方位をなす幅2.5mの溝と復元できる(図8)。

SD91 調査区中央部から西端までの南壁際で検出された東西溝である。幅1.5m、深さ0.3～0.4mで、底部の北寄りに幅0.4mの最深部があり、オリーブ褐色(2.5Y4/4～4/6)細粒～粗粒砂の水成層が堆積していた。方向は現在の街区方向に平行しており、中央部で南に直角に曲がる。出土遺物には古代・中世の遺物も少量含むが、肥前陶器皿3や青花皿片も出土しており、豊臣後期まで下る遺構である。

この溝が南に直角に曲がった延長線上には、南側道路を挟んだOS03-13次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a]で検出されている豊臣後期の南北溝SD301があり、関連する可能性がある(図8)。谷町筋から西側の上町の町割はこれ以前に廻ると思われる。

SK92 調査区東南部のSD101北側で検出された長方形の土壠で、長軸方向はSD101と直交している。東西0.8m、南北1.4m、深さ0.5mである。埋土は下部0.3mが暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂質シルトで地山偽礫を含み、上部は炭化物の薄層を介在するオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～中粒砂質シルトである。出土遺物には古代の土師器杯A2や中世の瓦質土器・白磁片が含まれ、中世の遺構の可能性がある。

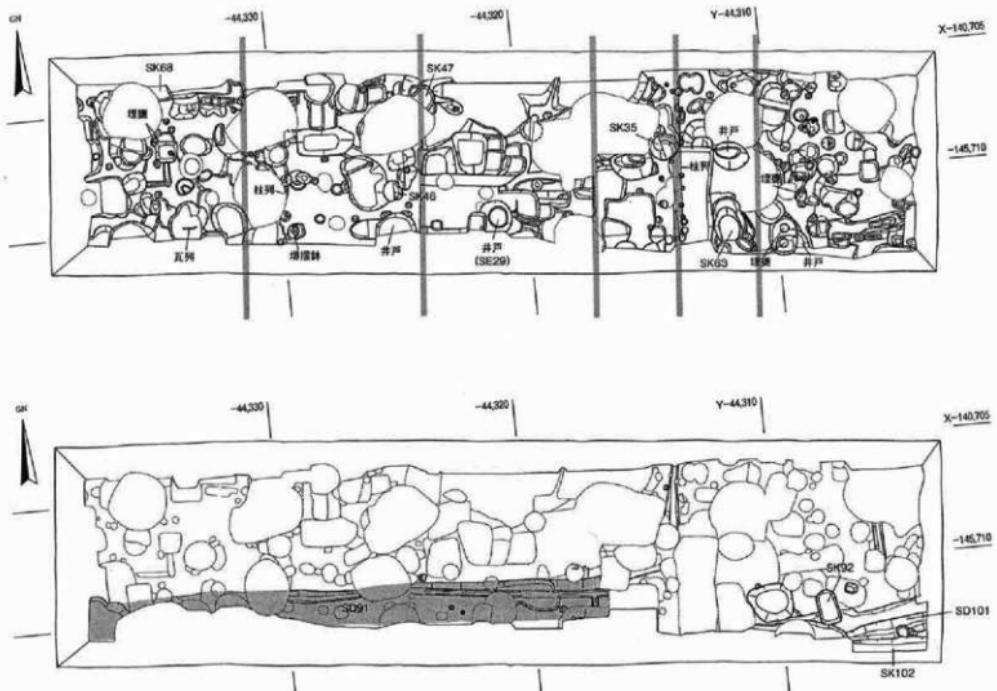


図5 造構平面図

上：第2・3層層半造構(網掛け線は推定敷地境)、下：第4層上面造構(網掛けはSD91)

0 5 10m  
1:200

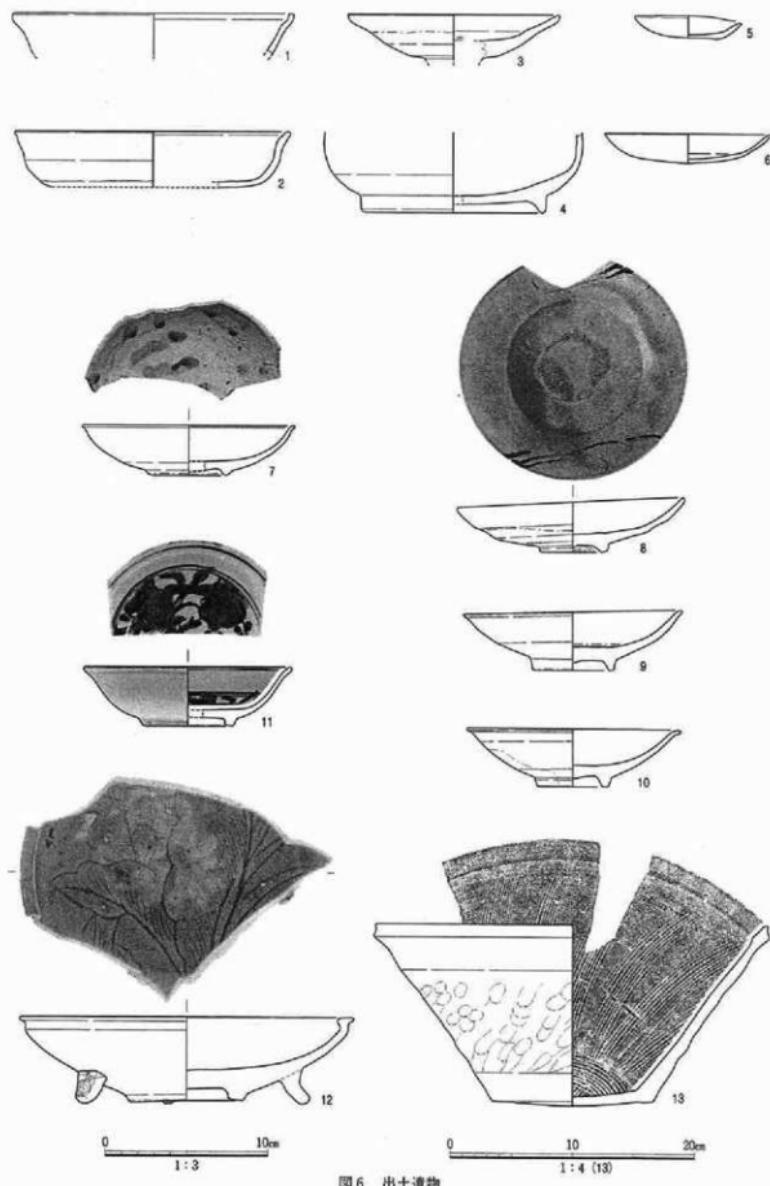


図6 出土遺物

SK102(1)、SD91(3)、SK92(2)、SK35(5・6・9・10)、SK46(4・7)、SK47(12)、SK68(8)、SK63(11・13)

赤誠  
 是平月之望多雨  
 將君子歸、元使子過貨  
 究之歌、蕭蕭既晚、木葉蕭蕭  
 人影在地、伊見月明、蕭蕭而葉  
 之行歌相和已而風清、如  
 氣酒、有酒無氣、月白風清、如  
 此良夜何、  
 曰：今夜得君、  
 舉樽待魚、  
 口曰細葛、狀如松  
 江之鱸、願安所待君、  
 謂君子不時之謂、於是攝  
 失以待子不時之謂、是攝之久  
 酒貫魚、復遊於赤壁下、江  
 小水空石出、晝日月之獨何、  
 而江上不可復矣、子乃擇  
 衣而上、履破屐、脫屨、  
 虎豹登孔隙、攀援而上、危巢、  
 倚傍夷之廟、  
 然長嘯、草木動、山唯谷  
 風起水涌、予水情而  
 (6)雨而感、灑其不可留  
 也、反而登舟、方中流、聽其  
 所止而休焉、時有舟、(四顧有聲、惟有孤鳥、橫江東來、細如車輪、  
 支張羅衣、自然長鳴、接子舟而西也、須臾客去予本就夢、)夢  
 三十、羽衣歌、漫歌之  
 下、惟子而當曰、赤壁之詩、  
 美乎、固其然也、慨而不苦、嗚呼、感乎、我知之矣、曉昔之夜、飛雲而過、  
 我者、非子也、歌、子之曲也、予亦驚、聞、因口視之、不  
 見其處。

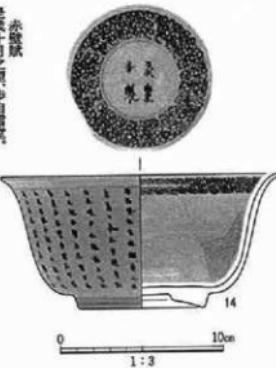


図7 SK 63出土遺物

薄文字は欠損部分の文字、[]は脱落文および脱字

### 近世：第2・3層層準(図5上)

土壤・井戸・柱穴列・埋壺・瓦列などの遺構が検出された。特に不整形の土壤が多く、焼瓦が多量に含まれるもの、鉢底やフイゴ羽口を多く含むものもある。井戸は確実なものは18世紀以降の4基のみであり、そのうち井戸瓦を用いたもの(SE29)が1基ある。掘立柱の柱列は南北方向のものが2箇所確認できた。このうち調査区西部の3基の柱穴は深く掘られて根石をもっていたが、建物を復元するには至らなかった。丹波焼壺を用いた埋壺が4基、底部中央に穿孔した堺搗鉢を伏せて埋めている遺構が1基検出された。瓦列は丸瓦を縦に並べて埋め込んだ遺構が東西0.5mの長さ検出された。

礎石建物は検出されておらず、母屋となる建物は調査区外の南側にあったと推定される。また、部分的に遺存している第2層について中央部の2箇所において、東西で土質が異なる境界線が直線的に確認でき、遺構の分布傾向も考慮すると東西約7m(4間)の間口を基調とする敷地割を想定することができる(図5)。これは船場地域のOJ91-2次調査[大阪市文化財協会2004]で指摘されている豊臣期～徳川期の間口(5m未満から7m未満)に共通するようである。

出土遺物にはおむね17世紀中葉から19世紀後葉までの土師器・瓦質土器・肥前陶磁器・瀬戸美濃焼・青花・丹波焼・備前焼・信楽焼・堺搗鉢・三田青磁・関西系陶器・土人形・瓦・焼壺・フイゴ羽口・金属製品などがある。

このうち図6・7に17世紀代の資料を図化した。

SK63の出土遺物には土師器皿・焰焰・青花皿11・鉢14・肥前陶磁器碗・皿・瀬戸美濃焼天目碗・丹波焼搗鉢13がある。中でも中国製と考えた青花鉢14は全体に薄く作られた深い端反りの鉢で、丁寧に削り出された露胎の蛇ノ目高台である。外面に「後赤壁賦」の漢詩文と船遊びする絵柄があり、内面見込みには「永樂年製」の銘がある(図7)。漢詩文は29行にわたり、後半の17・18・21・23・26行目に文章の脱落や脱字があり、特に23行目には38文字分の脱落がある。類似にはOJ91-2次調査[大阪市文化財協会2004]の徳川初期の土壤SK401出土の漳州窯産の鉢や、OJ08-4次調査[大阪市教育委

員会・大阪市文化財協会2010]の17世紀中～後葉のSD401出土青花鉢がある。いずれも「後赤壁賦」の漢詩文が書かれている。また、OS87-40次調査[大阪市文化財協会2003a]の1724(享保9)年の妙知焼の焼土層からは肥前磁器の染付鉢が出土しているが、章匠が若干異なり蓮池も「前赤壁賦」である。

この他、SK35の出土遺物には土師器皿5・6、見込みと疊付に砂目が残る肥前陶器碗・皿10、蛇ノ目釉剥ぎの肥前青磁皿9がある。また、SK46からは土師器皿・焰格、瓦質土器、肥前磁器染付皿7、瀬戸美濃焼の可能性がある鉢4、備前焼、信楽焼などが、SK68からは見込みに砂目があり、疊付から高台内に目土がこびり付いた肥前陶器皿8、青花碗・皿、丹波焼壺・播鉢、SK47から三足の付く肥前青磁皿12、肥前陶器、フイゴ羽口などが出土している。

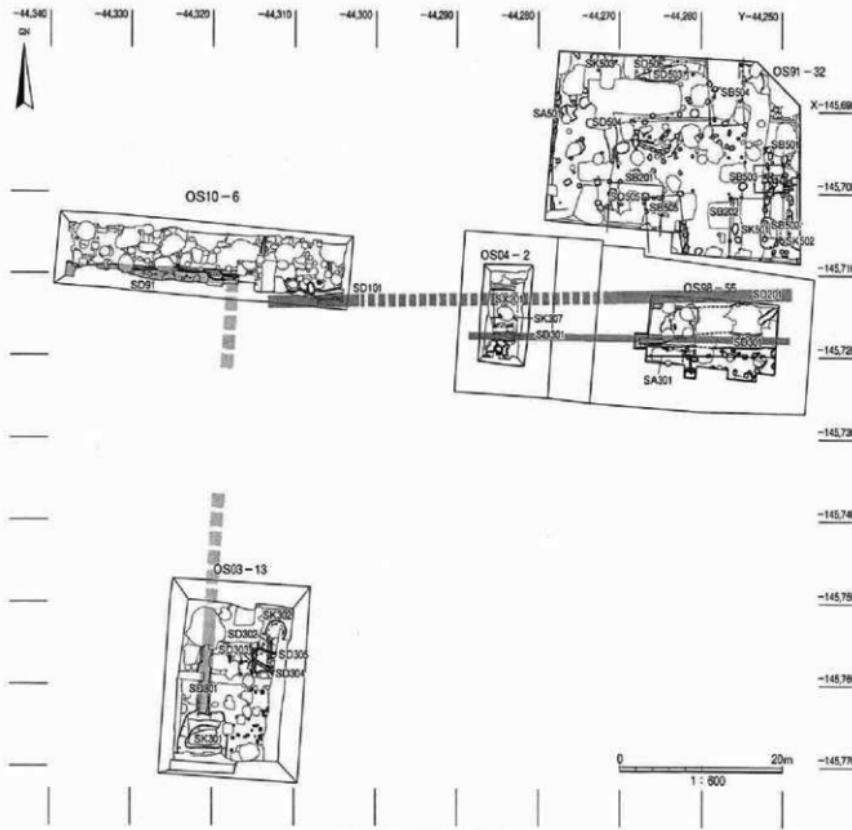


図8 周辺遺構との関係図

### 3)まとめ

今回の調査では古代・中世および豊臣期の溝を検出したほか、徳川期については多くの遺構を検出することができた。

古代・中世のうち、特に中世のSD101はOS98-55次調査で検出されていたSD201と繋がり、60m以上続くことが明らかになった。OS98-55次調査ではこの溝の南3mの位置に正方位に近い古代の溝SD301が検出されており、ここから北側ではOS91-32次調査や、さらに東側の谷町地下駐車場でのOS97-1次調査[大阪市文化財協会1999]でも古代の建物群が検出されている。古代から中世にかけて、この位置が東西方向の重要な境界線をなしていた可能性が考えられる。

豊臣期の遺構についてはSD91があげられるのみだが、方位は現在の街区方向と同じく西で北にやや振っており、この時期にはすでに現在の町割が採用されていたことが明らかになった。

さらに徳川期の土壤群は、南側に想定される母屋の裏に当る位置に掘られた廐棄土壌などと思われ、整地土の違いなどから、船場地区と同様の間口4間を基本とする町割があったのではないかと推定された。

以上の成果は古代難波京の復元や豊臣期以降の町割の変遷などを考える上で、新たな資料を提供するものであったといえよう。

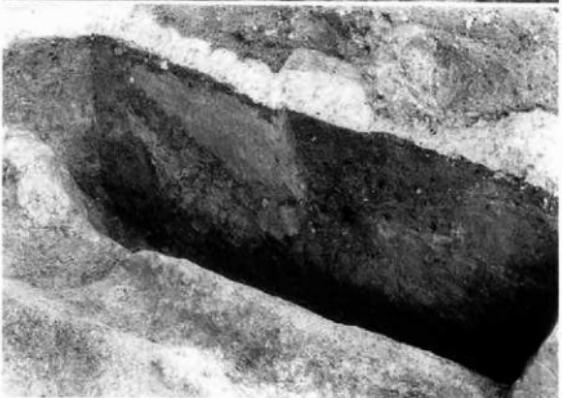
### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a、「大坂城跡発掘調査(OS03-13)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.69-102  
2005b、「大坂城跡発掘調査(OS04-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.115-125  
2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08-4)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.115-132
- 大阪市文化財協会1999、「大坂城跡」IV  
2001、「OS98-55次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1998年度-』、pp.69-74  
2003a、「OS86-22次およびその周辺の調査」：『大坂城跡』Ⅶ、pp.66-97  
2003b、「OS90-130次および91-32次調査」：『大坂城跡』Ⅷ、pp.211-222  
2004、「OJ91-2次および92-20・92-37次の調査」：『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.113-169

第4層上面全景  
(西から)



東南隅SK102  
(北西から)



東南隅SD101  
(西から)



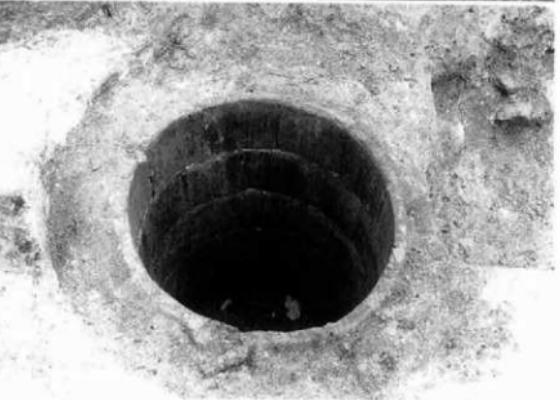
SD91  
(東から)



第3層上面全景  
(西から)



SE29(北から)



中央区上本町西一丁目における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS10-7)報告書

調査個所 大阪市中央区上本町西1丁目1-7・1-17・13-1・  
13-3・13-5  
調査面積 約40m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年12月15日～12月17日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮の南西、豊臣氏大坂城懇構の南にあり、上町筋と長堀通の交差点から南へ約120mに位置する(図1・2)。周辺は稠密に調査が行われている地域で、上町筋の東側では、難波宮跡や難波宮跡下層期の多くの建物跡が調査されている。もっとも至近の調査成果を紹介すると、北約30mのOS99-83次調査では、7世紀前半と推定される2棟の掘立柱建物があった。南東約40mのOS00-25次調査では、古代と推定される土壙や、豊臣後期の井戸や土壙を検出した。南約60mのOS00-54次調査では、多量の焼落を捨てた18世紀代の土壙が検出されており、時期・焼落の容量などに本調査のSK01と共通点がある[大阪市教育委員会ほか2002]。また、18世紀後半~19世紀の5基の炉があった。OS00-54次調査と接するOS06-10・08-4次調査では、7世紀の柱穴などが検出されている。

今次の調査地は周辺に比べてかなり深くまで削平されており、いわゆる地山上面で近世の土壤を検出した。土置き場の確保から、調査区は計画より西側を縮めた。

本報告では、方位は図1が座標北、それ以外は磁北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：黄色(2.5Y8/6)粗粒砂～細砾層で、上面の標高はTP+19.0～19.2mである。当地域のいわゆる地山である。

#### ii) 遺構と遺物(図4・5)



图 1 调查地位图

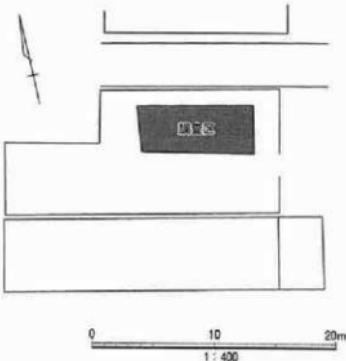


図2 調査区位置図

表 土



図3 地層と遺構の関係図

本調査地は近代以降にかなり削られており、2基の土壙SK01・02のみを検出した。

SK01 東西1.7m以上、南北1.3m以上、深さ1.70mの土壙である。壁が垂直に近く掘られており、西壁が崩落しているが、本来はきれいな方形の土壙と推測される。埋土は特徴があり、灰を主体とするにぶい褐色(7.5YR5/4)極細粒砂質シルト層と、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細粒砂層が互層に堆積している。分層した同一層内にも細かい単位があり、少しずつ埋められたことがわかる。

SK01からはコンテナバット2箱の焰烙が出土した。出土遺物のほとんどは焰烙で占められ、その形態・調整などが近似していることから、SK01の使用期間は短いと考えられる。焰烙の大きさは、口径が31~32cmの1種類のみである(図5の1~5)。煤はほとんど付いていないが、使用はされている。口径が限定されること、埋土の灰との関係など、何かの生業に関係するのは間違いないと考えられる。肉眼ではベンガラのような付着物は認められない。SK01からは土師器の拒塙火容れ6、肥前磁器碗7・8が出土した。火容れ6の平面は正方形である。SK01は、肥前磁器碗8と焰烙から18世紀前半と推定される。

SK02 長さ2.5m以上、幅約2.4m、深さ0.80mの長円形の土壙である。SK01に切られる。埋土は、水成の灰黄褐色(10YR4/2)粘土層と、埋め土のにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒→粗粒砂層などから成る。SK02からは土師器皿9・10と、釘抜文の軒丸瓦11が出土した。17世紀前半の遺構と推

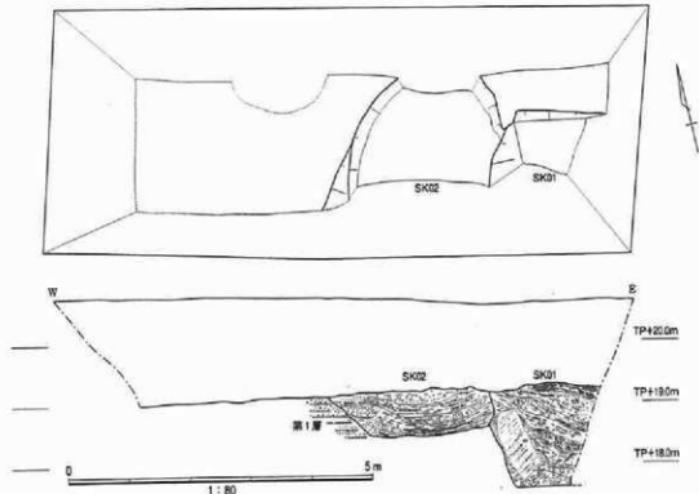


図4 南壁地層断面図および遺構平面図

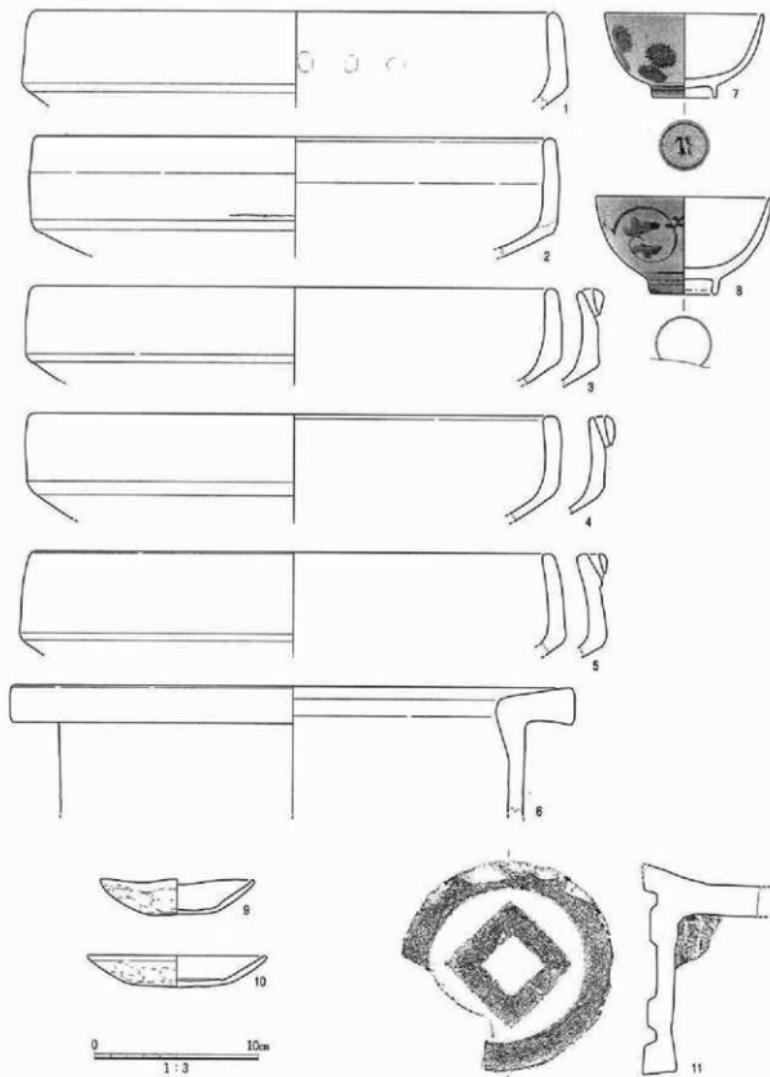


図5 出土遺物実測図  
SK01(1~8), SK02(9~11)

定される。

### 3)まとめ

本調査では、焰烙が多量に出土した18世紀前半のSK01が注目される。近隣のOS00-54次調査地でも共通の遺構が検出されており、同様の生業を営んでいた可能性がある。近世の大坂城下町にはじつに様々な産業があったことが発掘調査で明らかになりつつあり、この方面での今後の考古学的調査の役割は大きい。

### 参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「細田慎平氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS00-54)報告書」:『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

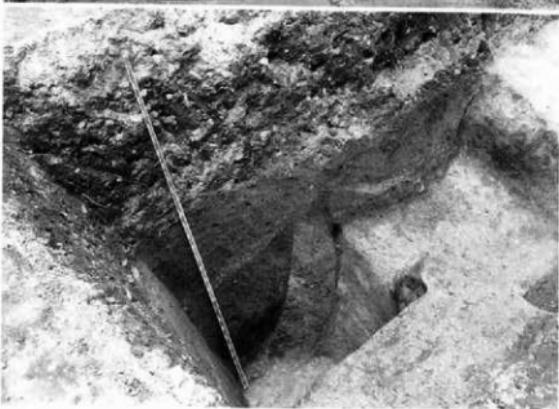
調査区全景  
(東から)



調査区全景  
(西から)



SK01・02  
(北東から)



中央区十二軒町における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS10-8)報告書

調査個所 大阪市中央区十二軒町3-1・3-2  
調査面積 80m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年10月13日～10月19日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城惣構の西南部に当り、難波宮跡からも近い(図1)。谷町筋のすぐ西で、谷町五丁目と六丁目の間に位置する。北隣のOS93-6次調査では、試掘により敷地中央部に谷状の窪みがあることが想定され、大阪市教育委員会による本調査では古代の地層を検出した[大阪市文化財協会2003]。

調査区は敷地北側の東西20m、南北4mである(図2)。表土掘削を始めると、明治時代に下る、スラグなどが多量に廃棄された土壤が重なって見つかった。これらを重機で掘り上げると、東端を除き、いわゆる地山が露出した状態となった。検出遺構は、すべて江戸時代以降である。また、OS93-6次調査で想定された谷状の窪みは、今回調査の敷地に及んでいなかった。

開始5日目の10月19日に調査を完了し、埋め戻した。GPS測量を行ったが、良好な観測データが得られなかっただため、本報告の方位は図1を除き磁北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

厚さ50~100cmの現代の地層下を第1~3層とした。

第1層：黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂層で、層厚は20~75cmである。調査区東辺のみに分布する。江戸時代末~明治時代と推測される。SK01~10は第1層より新しい。



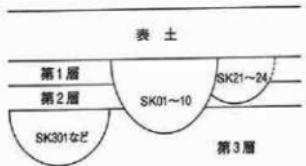


図3 地層と遺構の関係図

#### ii) 遺構と遺物(図4~6)

遺構番号10番までは明治時代に下り、20番台は江戸時代末と推定される遺構である。SK01~10の土壌群は、埋土にスラグ、焼土・炭などを多量に含むのが特徴で、羽口が出土している。

300番代は第3層上面で検出された遺構である。埋土の類似から、遺物が出土していないものも、後述のSK301・303などと近い時期と推測される。以下、300番代の遺構について報告する。

調査区東端のSK301は東西1.8m以上、深さ0.8mである。埋土の下部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層でラミナを挟在し、上部は第2層である。図5の1~10が出土した。2は焼塙灰、3は培塗である。4は瀬戸美濃焼碗で、鉄軸を掛ける。5~8は肥前磁器染付の碗と皿で、6・8は粗製である。9は肥前陶器の刷毛目大皿で、白泥と緑釉で文様を描く。内面に5個の砂目がある。10も肥前陶器の振鉢で、口縁部に鉄軸を掛ける。1は土師器の杯で、口径10.0cm、高さ4.4cmである。口縁部は歪んでおり、内外面ともナデ調整である。口縁部に煤が付着している。精巧な作りではないが、古代の土師器の可能性がある。

以上のうち、6のみは埋土上部の出土である。以上からSK301は17世紀末~18世紀初めと推定される。

SK301に切られてSK304がある。SK304は直径1.25m、深さ1.1m以上ある。埋土は灰オリーブ色(5Y5/2)極粗粒砂層で、ラミナを挟在する。図5の11の土師器臺の口縁部が出土した。

SK303は直径0.95m、深さ0.60mである。埋土上部は褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層、下部は炭を含む黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂層であった。図6の12~16が出土した。12は肥前陶器の京焼風碗で、底部外面に刻印がある。13・14は肥前磁器白磁で、14の鉢は菊花状の細かい凹凸がある。15は丹波焼振鉢、16は培塗である。SK303はSK301・304よりやや新しく、18世紀前半であろう。

SK303に切られてSK302がある。SK302は長さ約2.1m、幅0.60m、深さ0.16mである。17~19の培塗が出土しており、SK303と同じ時期である。近接するSP305は、直径0.25m、深さ0.60mである。

調査区東には、SK302と似たSK306・307が並んでいる。SK306は長さ1.9m以上、幅0.80m、深さ0.75m、SK307は長さ2.2m以上、幅0.45~0.75m、一段深くなるところで深さ0.50mである。時期を判別できるような遺物は出土していない。

以上の遺構は絶じて17世紀末~18世紀前半と推定される。調査地点の現況はほぼ平らであるが、本来、西から東へ低くなり、谷町筋沿いの谷へ緩く傾斜地であった。調査区全体で豊臣期以前の地層は削られていた。

第2層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質中粒砂層で、最大層厚40cmである。調査区東辺のみに分布する。江戸時代中期と推定される作土である。

第3層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粗粒砂層で、いわゆる地山に当る。

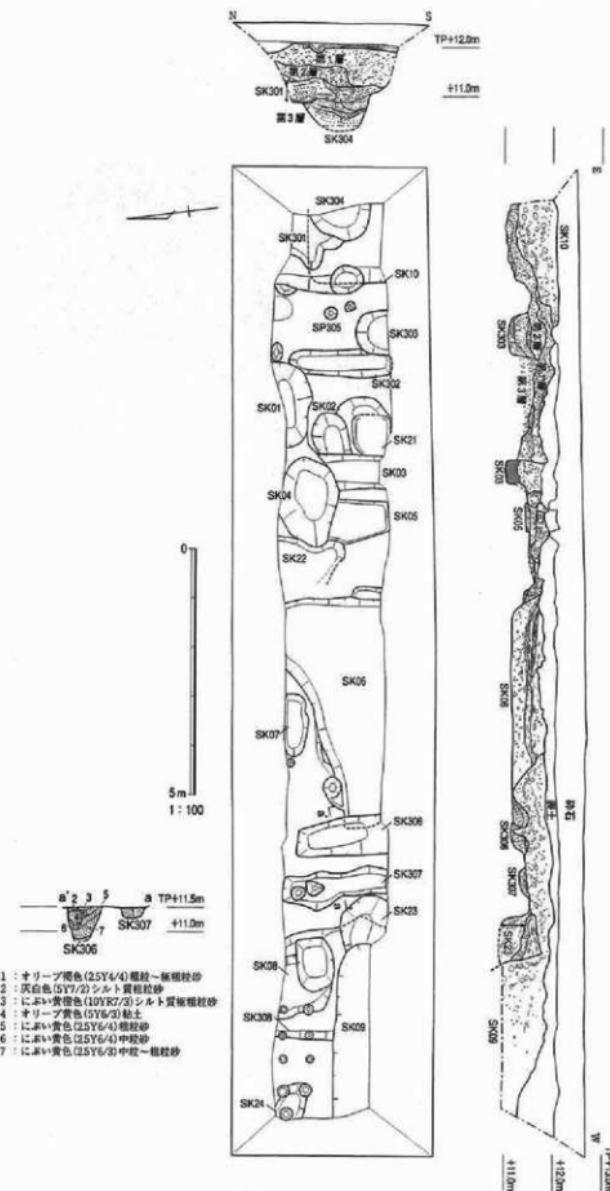


図4 遺構平面図および地層断面図

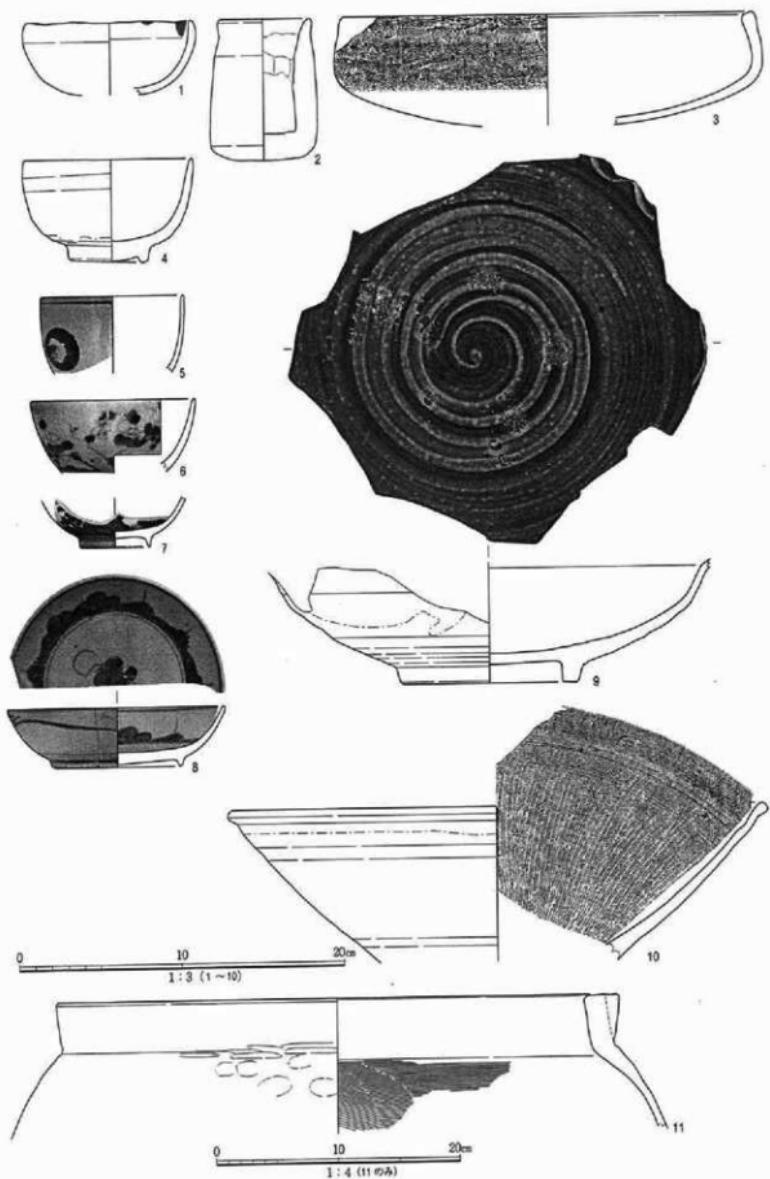


図5 出土遺物実測図(1)  
SK301(1~10)、SK304(11)

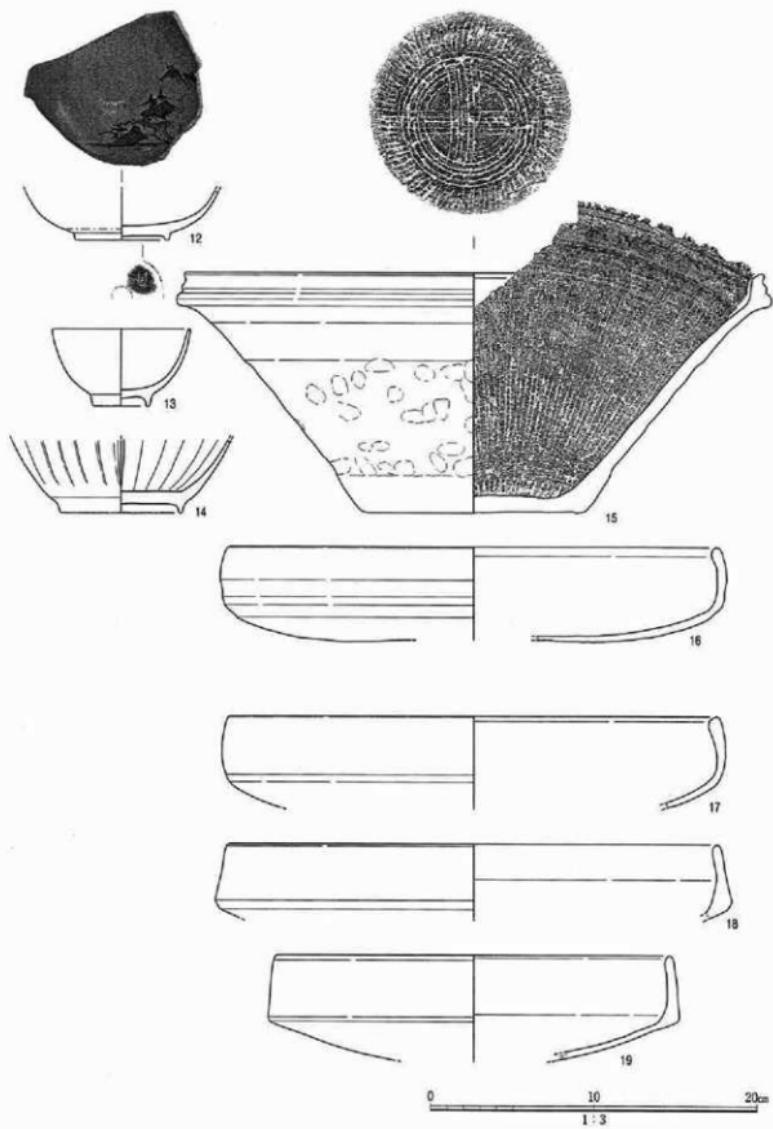


図6 出土遺物実測図(2)  
SK303(12~16)、SK302(17~19)

### 3)まとめ

今回の調査では17世紀末を遡る遺構は検出されていない。しかし、周辺の地形などから推定して、本来存在していた、それ以前の地層や遺構は、江戸時代前期の造成によって削られて失われた可能性が高いと考えられる。

### 参考文献

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ、pp.321-324

調査区全景  
(東から)



調査区全景  
(西から)



SK306・307  
(北から)



中央区玉造一丁目540-1ほか12筆における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS10-9次)報告書

調査個所 大阪市中央区玉造1丁目540-1・540-3・540-4・  
542・543・544・545-1・545-2・546-1・546-2・  
547・549-5・550-1  
調査面積 900m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年11月4日～平成23年1月25日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、趙哲済

## 1) 調査の経緯と経過

調査地は上町台地の北部東縁を南北に走る玉造筋の東に面しており、大坂城惣構の東縁を限る猫間川よりは西の河内低地縁辺部に位置している(図1)。周辺地域では多数の調査が行われており、豊臣期や徳川期の遺構・遺物が見つかっているほか、森の宮遺跡に関係すると思われる弥生時代の遺構・遺物も見つかっている[大阪市文化財協会2002]。

平成22年7月29日に当該地で大阪市教育委員会による試掘調査が実施され、地表下1.5~3mに弥生時代~近世の複数の遺物包含層と遺構面が検出された。そこで、遺構と遺物の遺存状況を記録し、当該地域の歴史変遷を復元する資料を得ることを目的として、本調査を実施することになった。事前協議では、調査範囲は30m四方とし、深さ1.5mまでを重機掘削し、その下位の第2層以下を約3mまでを人力により掘下げることとした(図2)。ただし、旧建物の地下通路部分(東西30m×南北5m×深さ3m)は重機掘削に含め、人力による掘下げは750m<sup>2</sup>とすることとした。また、作業時間を節約するため、第3層の掘下げには重機も併用した。

調査区は10m区画の9グリッドに分け、東から西へE・C・W列、北から南へ1・2・3行に分けて、東北区画をE1区、中央区画をC2区、西南区画をW3区などと呼称した(図2)。調査では近代~弥生時代に至る6遺構面を検出した。検出状況の写真撮影、遺構の掘下げ、掘下げ後の遺構写真撮影、調査区の平面図・断面図の作成を順次行い、1月25日に深所の確認掘りを実施して、現場調査を終了した。

本書で用いた方位は座標北を基準としている。また、水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、TP+○mと略記する。

なお、出土遺物の記述は当研究所の小田木富慈美が行った。また、本調査で出土した動物遺体を報



図1 調査地位置図

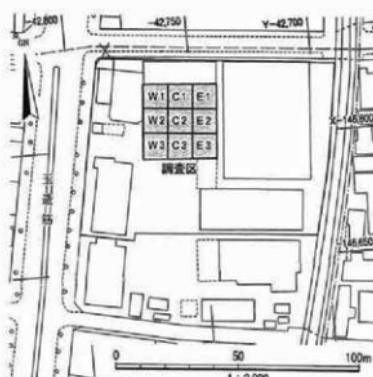


図2 調査区位置図

告するにあたって、奈良文化財研究所の丸山真史氏と京都大学大学院の小舟みなみ氏から本報告書3) - ii)に玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。

## 2) 調査の結果

### 1) 層序

調査地の標高はTP+3.3~3.5mであり、現代盛土層以下を10層に区分した(図3~6)。

第0層は現代盛土層および擾乱埋土で、盛土層の層厚は1.1~1.4mであった。

第1層は幕末~近代の盛土・整地層である。焼土・炭を多く含む黒褐色細粒中疊~細疊混り砂質泥からなる。W1・2区の一部とE~W3区に分布し、他は擾乱されて残っていなかった。層厚は最大で35cmあった。

第2層は徳川期後半(註1)の人为層である。E2区とC2区を結ぶ北東~南西方向より南東側では、上部と下部に区分できた。上部は暗オリーブ~灰オリーブを基調とする中疊~細疊混り砂質シルトを主体とする作土層と盛土層である。C列中程を境に東側に作土層が分布する。層厚は盛土層側で30~

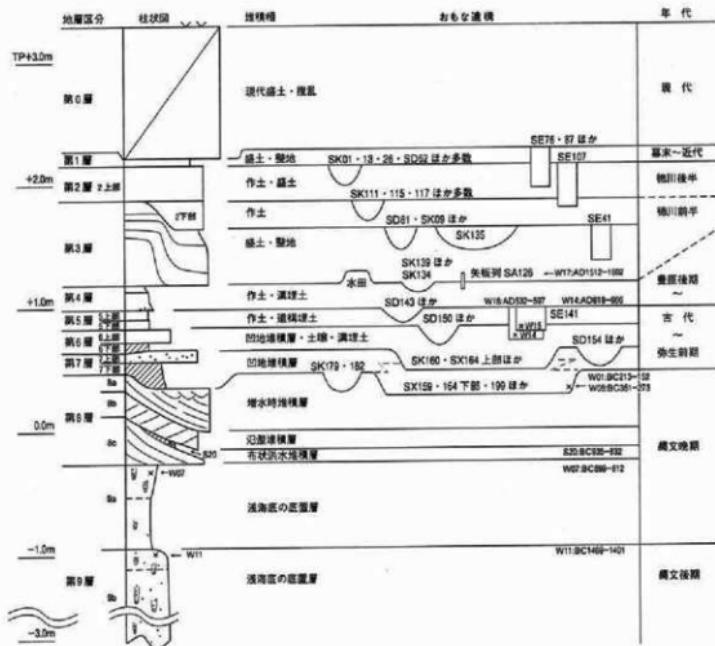


図3 模式柱状図と地層と遺構の関係図

40cm、作土層側で45cm以上ある。下部は細粒中礫～細礫質粗粒砂質シルトの盛土であり、層厚は25～30cmであった。調査では一括して扱ったが、作土層は複数層に細分できる。E1区では下面で畠畝間の加工痕を確認した。また、W2区の一部とE～W3区で、土壤や溝などの上面の遺構群を検出した。

第3層は徳川期前半の盛土層である。北西側では、暗褐色砂質シルト偽礫と粗粒砂、黒褐色～灰オリーブ色大礫主体の粘土偽礫と粗粒砂、淡褐色大～中礫主体の粘土偽礫などが、盛土単位ごとにまとまりをもって搬入され(盛土工法については後述する)、最大層厚は80cmであった。南東側では、細粒中礫～細礫質粗粒～細粒砂薄層を挟む砂質泥が主体となり、層厚は40cm前後であった。本層上面には土壤や水溜、井戸など多数の遺構が分布した。

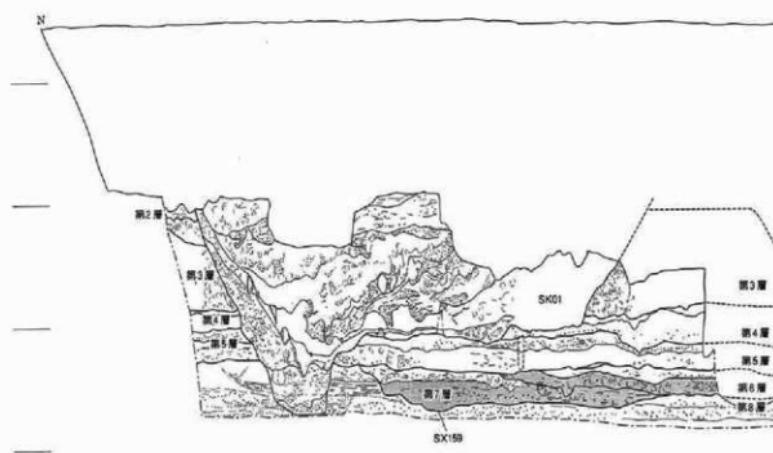
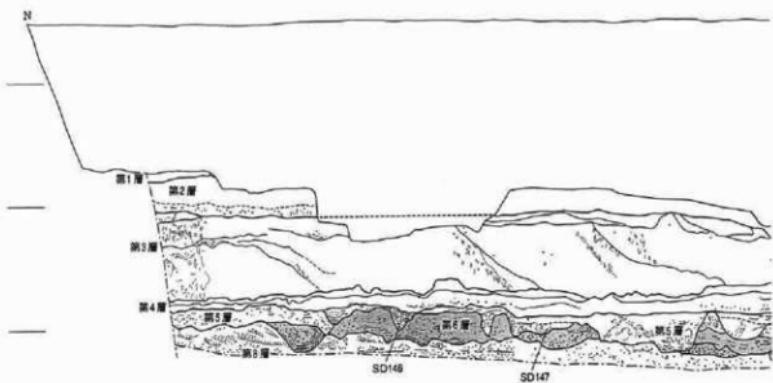
第4層は中世～豊臣後期に耕されていたとみられる水田の作土層である。暗灰黄色砂質粘土からなり、下部に砂を多く含む。上部数cmが脱色して明るい灰色である。層厚は15～30cm、E列で厚く40cm近くなり、2層に細分できる。上面には畦畔のほか、畦畔を壊して掘られた土壤やイスの埋葬墓も見つかっている。

第5層は古代の作土層・土壤・遺構埋土である。2層に区分され、上部はオリーブ黒色細礫混り粗粒砂質シルトであり、層厚は10cm前後で、C列の東側を中心に、多くは遺構埋土として断続的に分布した。下部は上部よりやや礫が多く、かつ泥質の灰色細礫混り粗粒砂質泥からなり、層厚は10～20cmでほぼ全域に分布した。本層下部上面および上部上面には井戸と多数の溝が分布した。E1区からC3区にかけて北北東～南南西走向で東落ちの段がある。

第6層は古代に堆積した氾濫堆積層・土壤・遺構埋土である。2層に区分され、上部は灰色細礫混りシルト質極粗粒砂～粗粒砂質シルトからなり、層厚は10cm前後であった。下部はわずかに黒褐色細礫混り粗粒砂質泥からなり、層厚は10～20cmで断続的にほぼ全域に分布した。本層は第8層上面の凹地や遺構埋土の上部層準として分布した。

第7層は弥生～古墳時代の氾濫堆積層である。2層に区分され、上部はオリーブ黒色の部分的にシルト質の細礫質粗粒～粗粒砂からなり、下部を層厚15cm前後で被覆してやや広く分布した。下部は黒褐色泥炭質シルト混り細礫質砂～泥炭質細礫混り粗粒砂質シルトからなり、第8層上面の深さ10～50cmの凹地の下部を充填して分布した。

第8層は縄文時代晩期に堆積した自然堆積層である。上から8a・8b・8cの3層に区分した。第8a層は増水時の不規則な流れによる堆積層とみられ、層厚は70cm以上である。大小のトラフ型斜交葉理がつくる細粒中礫以下の礫～中粒砂からなり、各セッット高は数～20cmで総じて正級化成層している。上部付近での古流向は、概ね北から南向き(S33° E・12° E・8° E・7° W)であった。第8b層は8a層にオンラップする河川の氾濫堆積層である。層厚は70cm以上で、東北東～西南西走行で北北西(N14～24° W)へ傾斜(13～17° W)し、ブランナー型斜交葉理～極浅いトラフ型斜交葉理をつくる細礫～細粒砂のセッットからなり、各セッット高は10cm前後で総じて正級化成層している。第8c層は台地末端部の緩い斜面に堆積した扇状地性の布状洪水堆積層である。層厚は80cm以上で、北東～南西走向で南東から東南東へ傾斜し、浅いトラフ型斜交葉理～低角のブランナー型斜交葉理をつくる細粒中礫～細礫質の粗粒～中粒砂からややシルト質の粗粒～中粒砂からなり、全体として上方細粒化している。しば



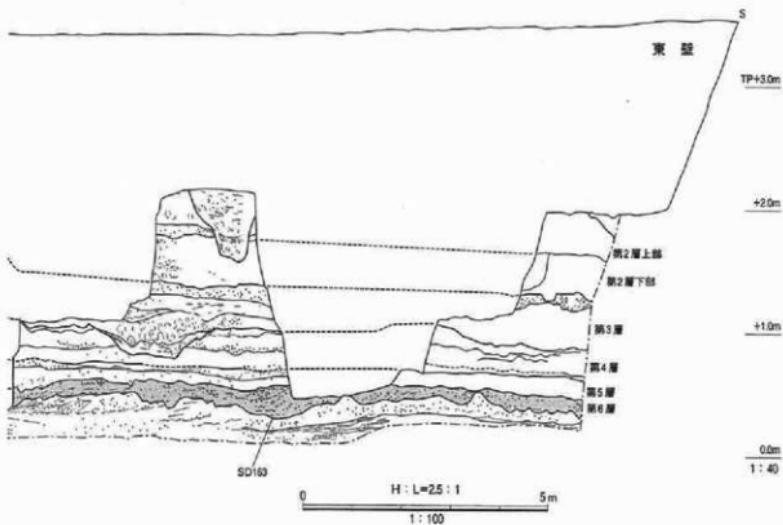
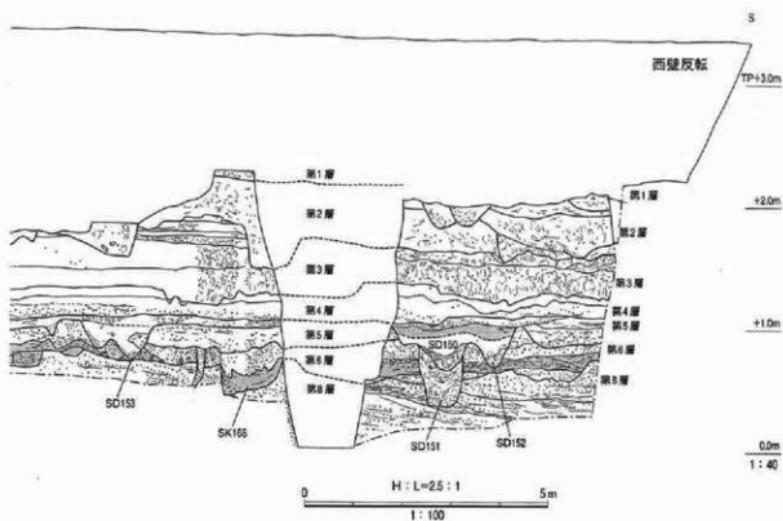
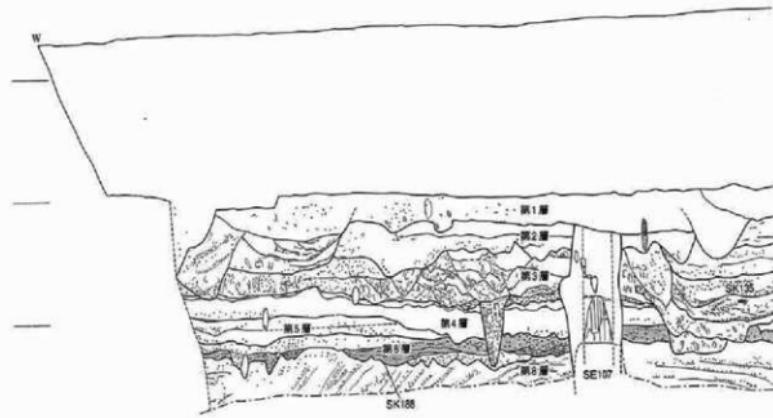
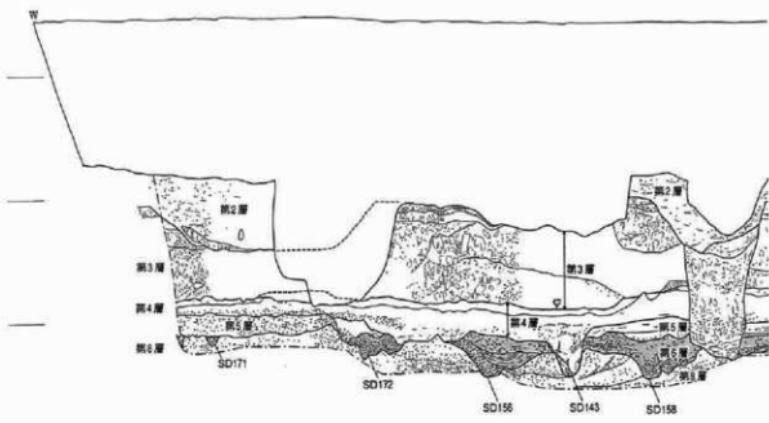


図4 西壁・東壁地層断面図



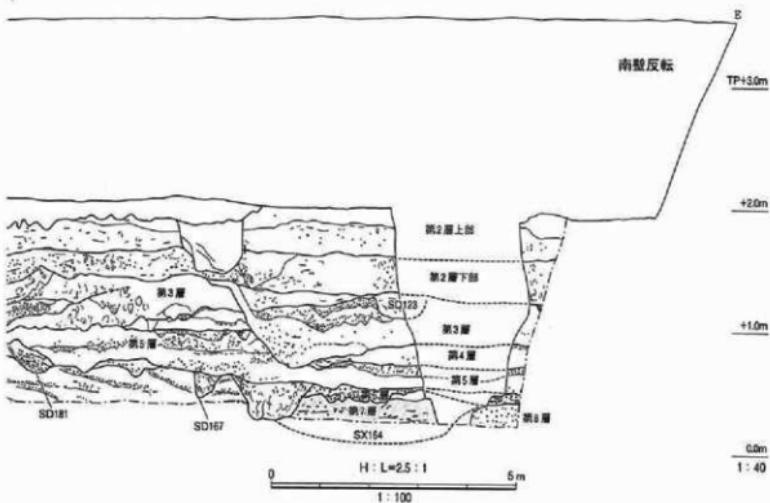
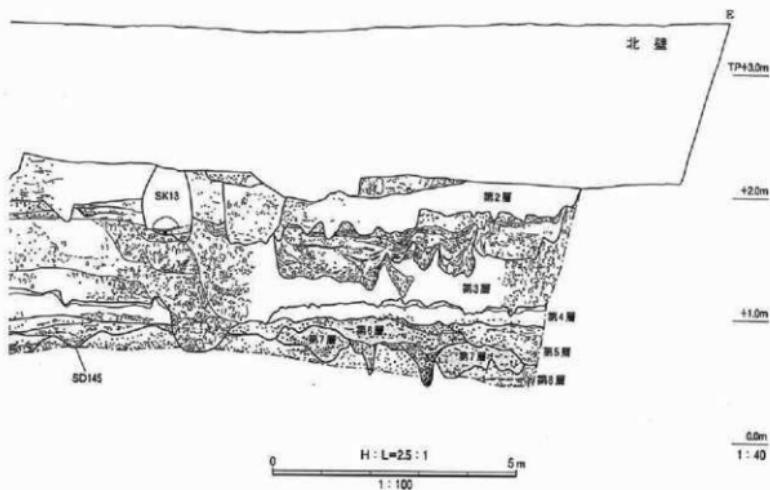
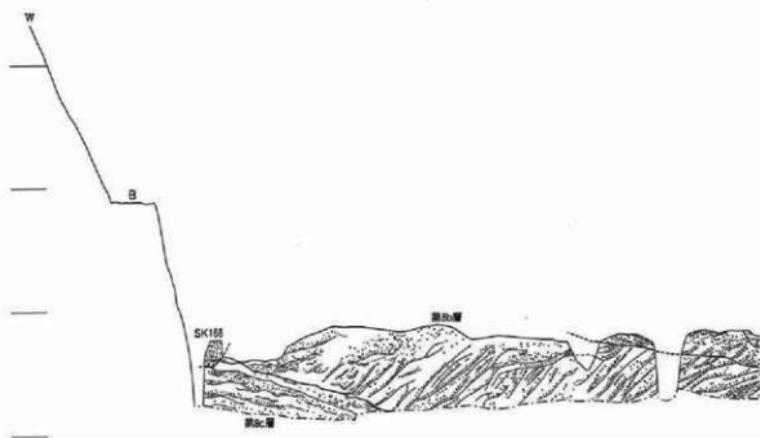
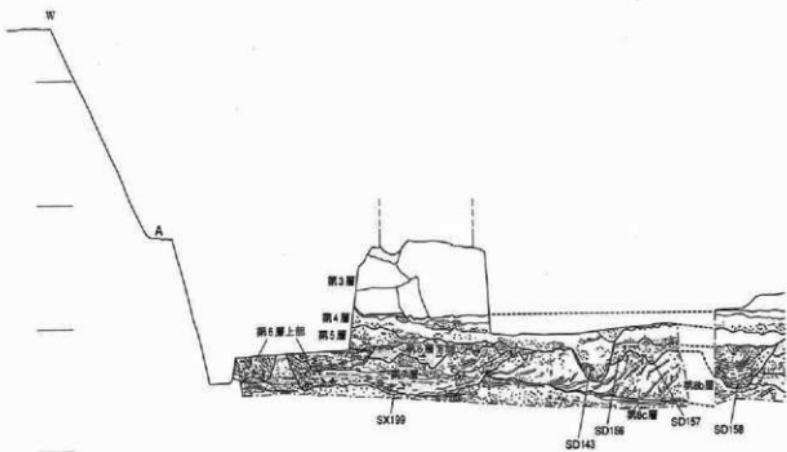
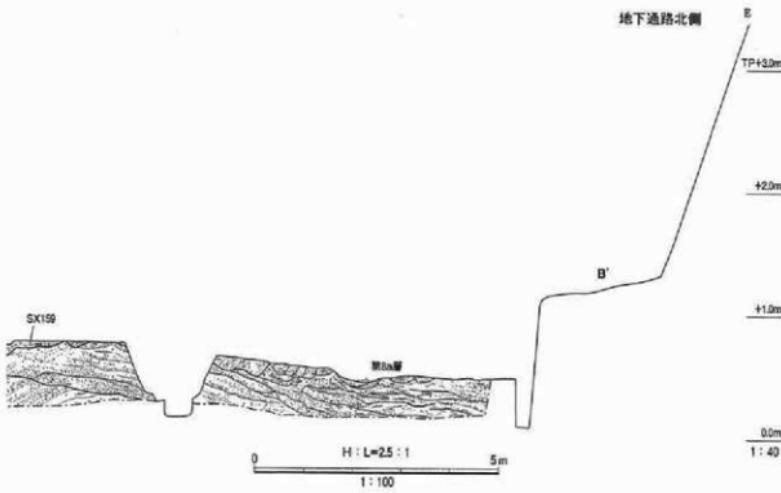
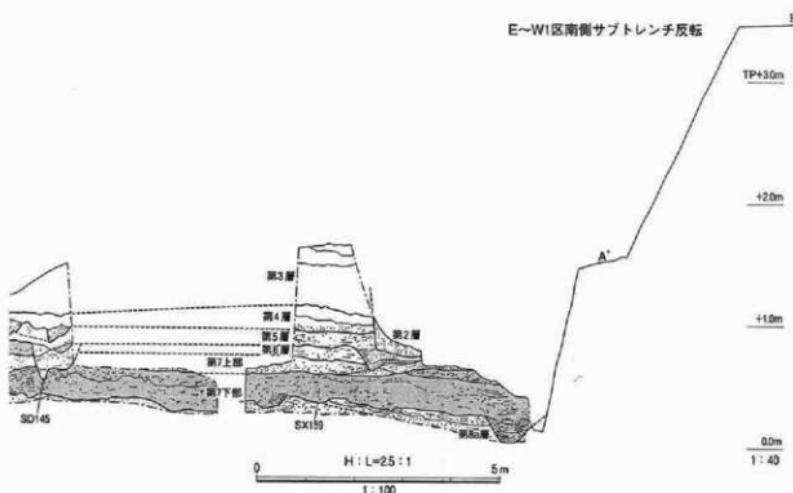


図5 北壁・南壁地層断面図





\*断面位置は図7(第8層平面図)

図6 調査区内東西E～W1区南側サブレンチ・地下通路北側調査区内東西地帯断面図

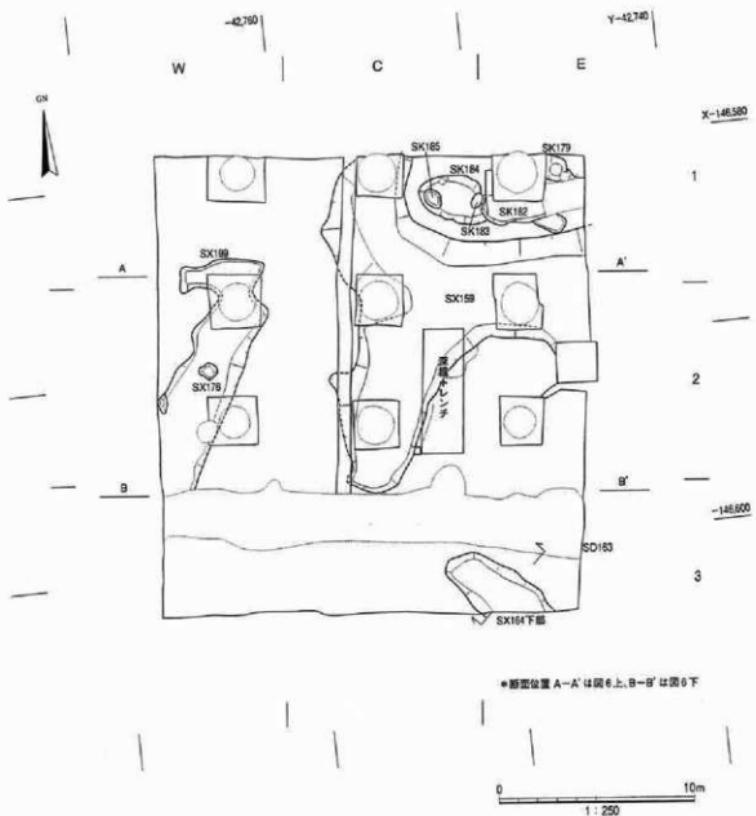


図7 第8層上面遺構平面図

しば固く締まった植物遺体薄層を挟んでいる。本層からは遺物は出土していない。

第9層は深掘トレンチで確認した浅海成の泥層である。三角州の底置層にあたる。上部の第9a層は上半部が上方粗粒化する灰色粘土～粘土質シルト層で、層厚は25cmであった。下部の第9b層は灰色細粒砂質シルト層で、TP-3.0mまで確認した(図3)。

## ii) 遺構と遺物

### a. 弥生時代～古代

#### a-1. 第8層上面の遺構とその遺物(図7～10)

SX159・164・176・199は第7～6層で埋まる第8層上面の凹地である。いずれも画一的な形状はもたない不均整な形状であり、流路の一部か流路が重なった自然の浸食地形とみられる。最大のものはEC1～2区のSX159で、幅約5mの流路端が2又に分かれたような形状をしており、最深部は東

端の0.8mである。最小のものはW1区のSX199で、長辺約4m、短辺2m、深さは0.4~0.5mである。全般に各凹地の下部(第7層)は泥炭質であり、凹地の形成後は甚だしい氾濫を受け、水棲植物が繁茂する湿地であったと

考えられる。後述するように、凹地の形成時期は、第8c層から出土した材の放射性炭素年代が縄文時代晩期末を示していることから、晩期末か弥生時代はじめとみられるが、C3区のSX164下部から出土した材の放射性炭素年代も紀元前200年を前後する年代であり、泥炭質シルト層の緩慢な堆積が弥生時代中期まで継続したことを示唆する(註2)。

1~3はSX164の下部(第7層)から出土した。1は壺で、口縁部はごく短く屈曲し、体部外面および口縁部内面をハケ調整する。2は直口の鉢で、底部を焼成後に穿孔する。外面にはハケ調整のちヘラミガキ調整を施す。3は壺の体部である(図9)。頭部および体部中位より上方の外面には、備描直線文を施す。最大径は体部の下半にある。畿内第I様式新段階~第II様式古段階のものであろう。このほかに壺・砂岩製敲石・サヌカイト剥片が出土している。SX159の下部(第7層)からは、縄文土器14・弥生土器15・木製品16が出土した。14は縄文土器深鉢の口縁部片である。口縁端部の外面上に沈線を有し、内傾する口縁部と胴部との境は明瞭に屈曲する。口縁部外面上の調整は横方向の丁寧なナデで、胴部外面はヘラケズリする。縄文時代晩期前半のものであろう。SX164などの凹地の形成以前に当該地に運搬されたと考えられる。15は弥生土器壺である。口縁部は短く外反するもので、無文である。畿内第I様式新段階~第II様式古段階のものであろう。16は一本を割り抜いて製作した柄杓状の木製品で、柄の部分から背にかけて装飾を有する。また、SX159の上部(第6層)からは須恵器・円筒埴輪のほか、ウマの臼歯が出土した。須恵器杯蓋19は器高が高く、天井部の約3分の2をヘラケズリしている。天井部と口縁部との境には緩やかな稜が巡る。TK47型式に属し、5世紀末のものであろう。SX176から出土した大型の弥生土器鉢4は口縁部が短く外反する。把手の有無は不明である。畿内第I様式新段階~第II様式古段階のものであろう。このほかに壺および壺の破片が出土している。SK179・182~185はE~C1・2区に分布した第7~6層で埋まる土器である。

SK179は東西1.2m以上、南北1.2mの平面が隅丸方形の土器であり、検出面からの深さは0.5m余りである。弥生土器壺・鉢・壺などが出土した。5は壺の口縁部で、体部にかけての屈曲が弱く、口縁端部はわずかに外側へつまんでいる。6は鉢である。外面には沈線を11条以上施す。口縁端部上面はヘラ状の工具で平らに整えている。これらは畿内第I様式新段階~第II様式古段階のものであろう。このほかに、SK179の埋土上部(第6層)からは、円筒埴輪片が出土している。

SK182は東西3m以上、南北1.2m以上の土器であり、深さは0.7mである。壺・壺などが出土した。7・8は壺である。7は口縁部が比較的長く緩やかに外反し、体部からの屈曲が弱い。8は壺の底部であろう。外面には煤が付着する。これらは畿内第I様式新段階~第II様式古段階のものであろう。この

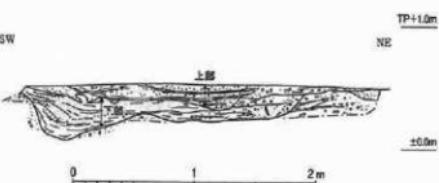


図8 SX164断面図

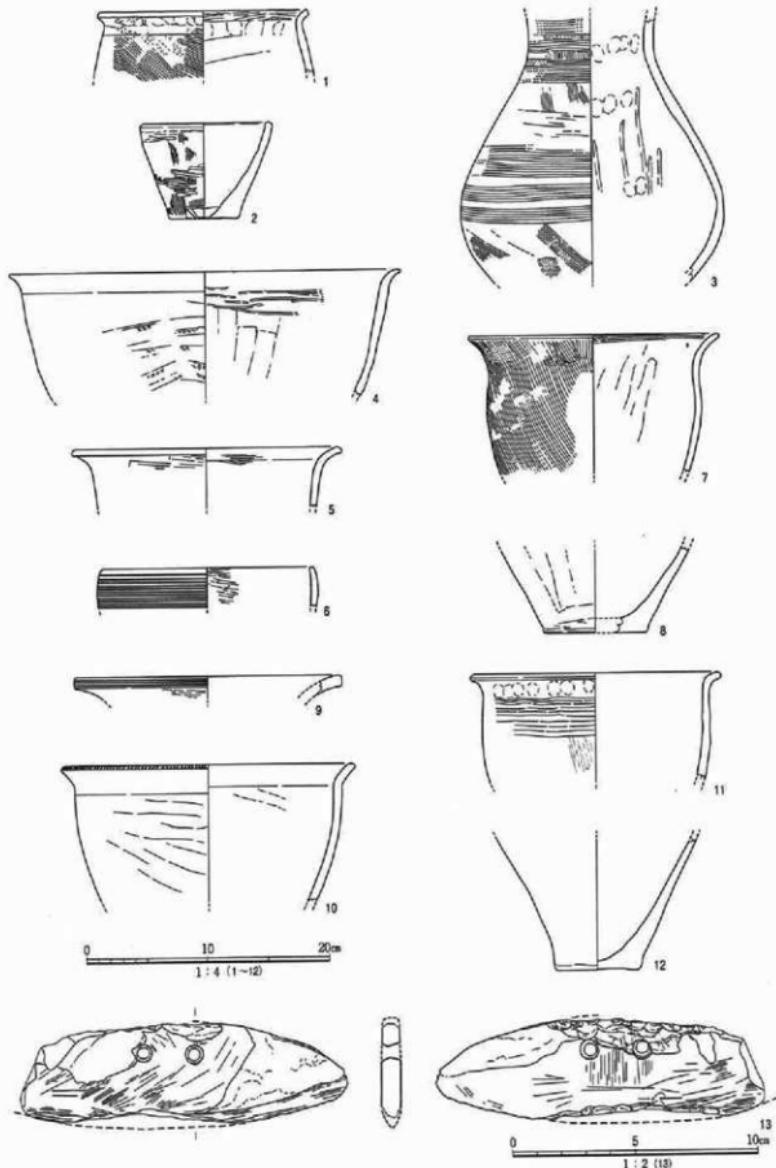


图9 遗物出土实物图(1)

SX164(1~3)、SK176(4)、SX179(5·6)、SK182(7·8)、SK184(9~13)

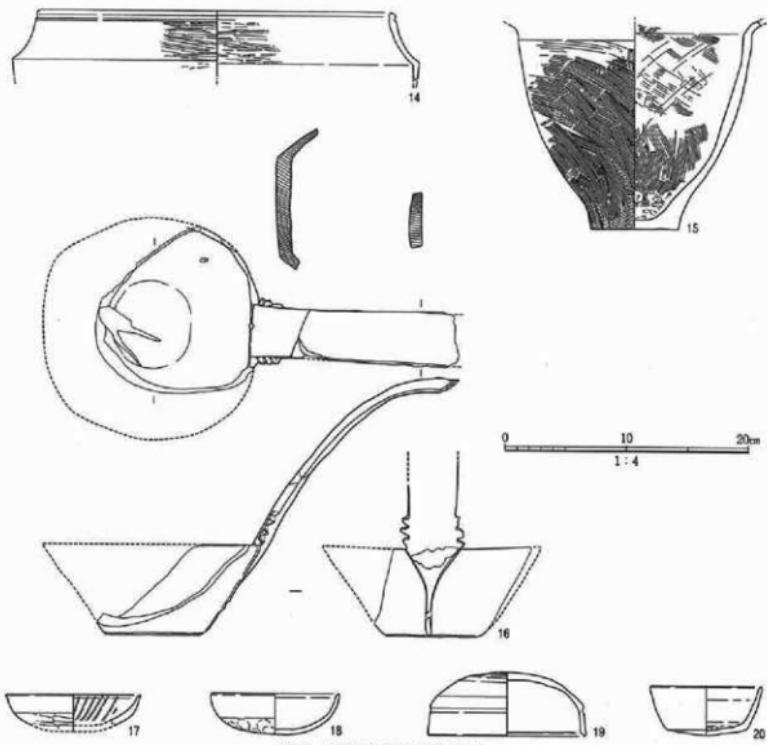


図10 遺構出土遺物実測図(2)

SX159(14~16(下部)・19(上部))、SD157(20)、SD160(17)、SD163(18)

ほかに砂岩およびサスカイト製の楔形石器が認められた。また、上部(第6層)からは、須恵器片が出土している。

SK184は長軸約4m、短軸2.4mの平面が梢円形の土壌であり、検出面からの深さは0.4mである。弥生土器や石庖丁などが出土した。9は壺の口縁部で、端部外面には3~4条を1単位とする横直線文を巡らす。10・11は壺である。10は口縁部が短く屈曲し、端部を刻んでいる。口縁部外面は横方向のナデ、体部上半は斜め方向のナデを施す。11は口縁端部を折り曲げるよう屈曲させ、体部との境には指頭圧痕が明瞭に残る。体部と口縁部との境には、植物が原体と思われる横描様の条線帯を巡らす。これより下位は縦方向のハケ調整が認められる。内外面ともに煤が付着する。12は壺の底部と思われ、外面には煤が付着する。13は粘板岩製の磨製石庖丁である。これらは畿内第I様式新段階~第II様式古段階のものであろう。

a - 2. 第6層層準の遺構とその遺物(図10・11)

下位層準から存続したSX159・164・176・199のほか、SK160・168・179・182・184、SD144・

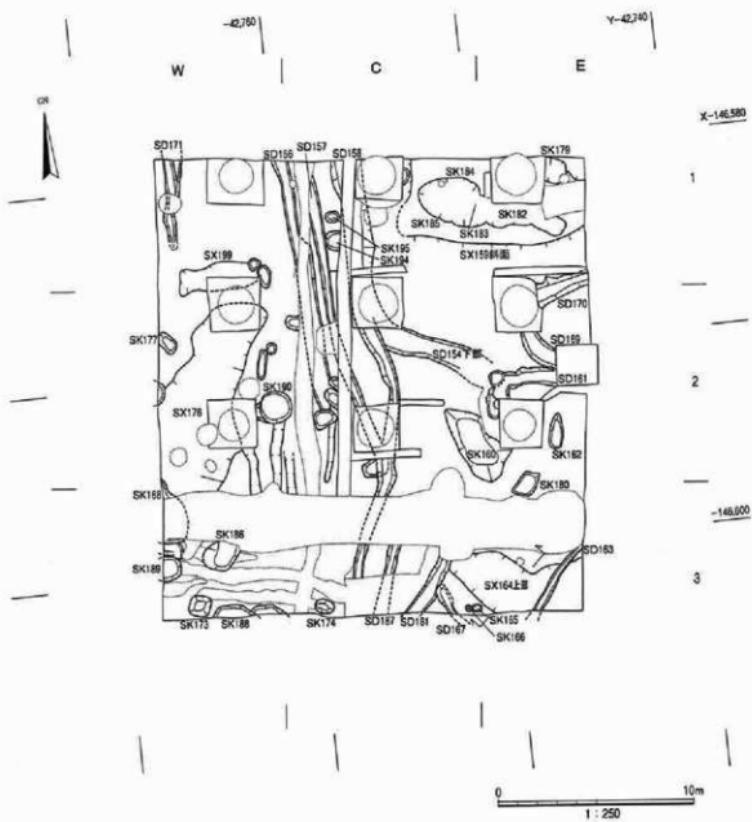


図11 第6層層準の遺構平面図

154・156～158・161・163・169～171などが第7層上面～第6層上面付近で確認した遺構群である。ただし、精度の高い検出ができなかったため、遺構の所属層準の厳密さを欠くものがある。この内、6層層準の溝群は検出面での幅が0.6～1.4m程度、深さが0.2～0.4m程度で南北方向が優位であるが、E・C2・3区では東西に振れたり、緩く曲流したりしている。

SK160はEC2区に分布した長軸4.4m、短軸2.4m以上の歪な土壙であり、検出面からの深さは0.2mである。第6層を埋土とする。土師器・須恵器・円筒埴輪・弥生土器などが出土した。17は土師器杯Cで、口縁端部を外側へつまんでいる。内面には斜放射状暗文を施す。難波Ⅲ中～新段階の7世紀中～後葉に属するものであろう[佐藤隆2000]。

SD157はC1～2区を南北に緩く蛇行して延びる溝であり、C2区南部でSD158と重なって延びが分からなくなる。須恵器杯・瓦などが出土した。20は須恵器杯Gである。口径は9.0cmで難波Ⅲ中～新段

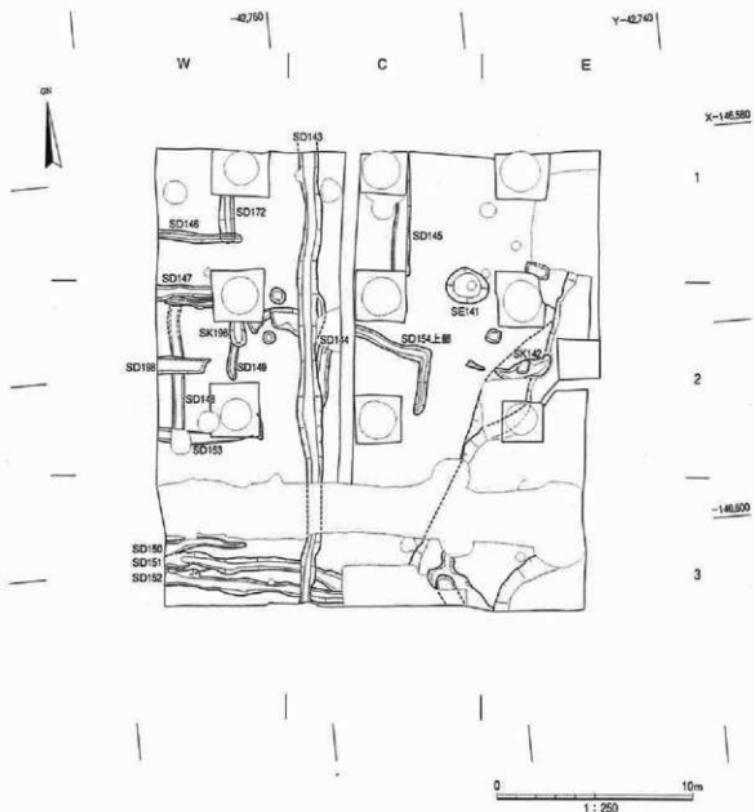


図12 第5層層準の造構平面図

階の7世紀中～後葉に属するものであろう。

SD163はE3区を北東一南西方向に緩く蛇行して延びる小規模の溝である。土師器や弥生土器などが出土した。18は土師器杯Cで、口縁端部内面に面を持つ。難波III中～新段階の7世紀中～後葉に属するものであろう。

#### b. 古代

##### b-1. 第5層層準の造構とその遺物(図12～14)

第5層下部上面には、第5層上部を埋土とするSK142・196、SD145～147・150～153・172・198などが、第5層上部上面にはSD143、SE141などが分布した。SD143は幅1.0～1.4m、深さ0.3～0.4mで第4層の最下部層準を埋土とし、C列に延びる南北溝であり、この層準の造構の中では最も新しい。

溝群は前層準のものに比べて直線的になり、SD154などの若干の例外を除いて直交性が顕著となる。

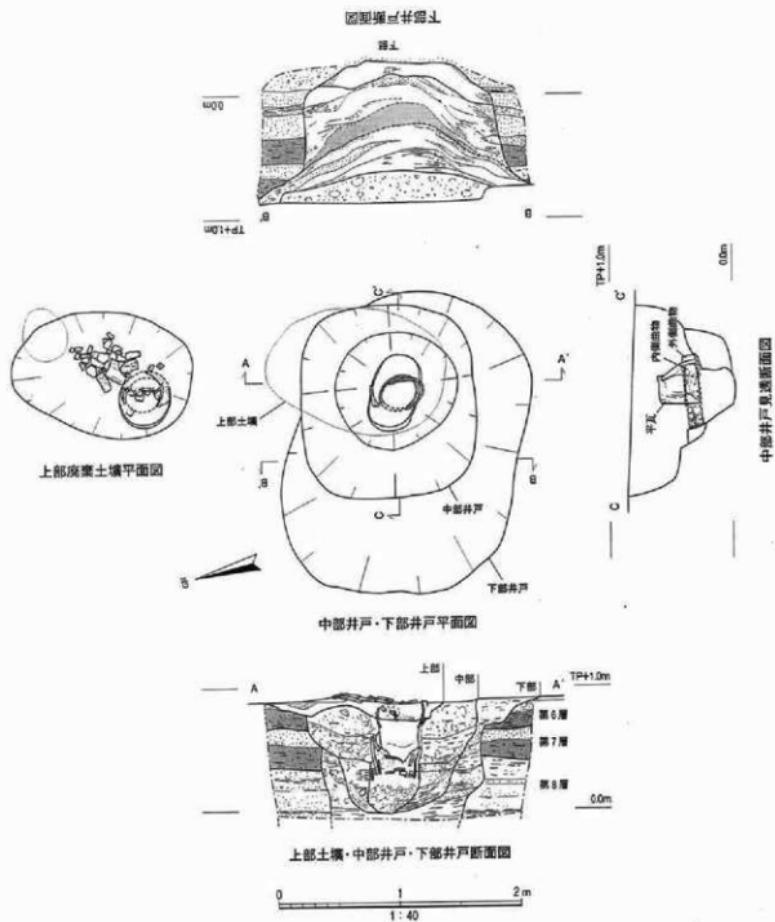


図13 SE141平面・断面図

ただし、東西・南北方向とも北で東に、東で南にそれぞれ5°前後振れている。この振れは当該地付近における現在の街区の方向と調和的であり、古代に現在の街区の基礎が作られたことを暗示している(ただし、JR環状線に沿って近代に建設された玉造筋は北で東に約10°振っている)。しかし、層序の項で述べたように、第5層上面にはE1区からC3区にかけて検出した北北東-南南西走向で東落ちの段がある。段の東側には奈良時代の須恵器広口壺を出土した溝状の土壌(SK142)が見つかった程度であるから、段から東では区画を設けた開発は行われていなかった可能性もある。

SE141はC2区にあり、2期の井戸(SE141下部・中部)と、井戸廃絶時の土壌(SE141上部)が重なっ

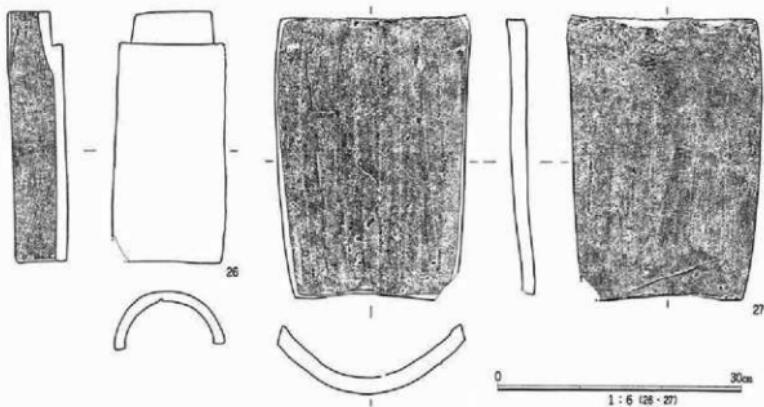
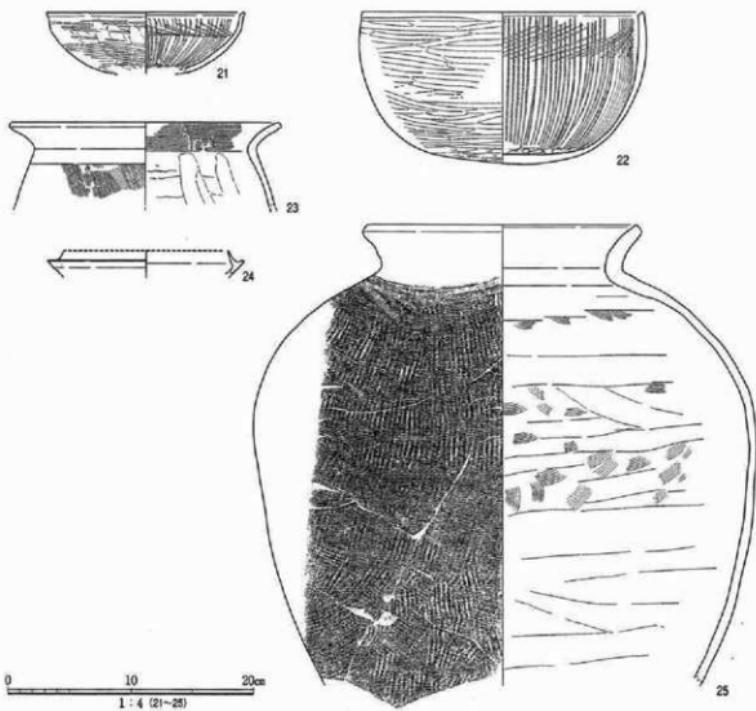


図14 遺構出土遺物実測図(3)  
SE141(21~27)

ている(註3)。下部の素掘り井戸は、平面が南北2.5m、東西1.9mの楕円形で深さは1.2mあり、第8c層にまで達している。壁面の一部がオーバーハングしている。機能時の埋土は泥主体の砂泥で、外周から断続的に流入した状況を示しているが、中央部に暗色帯があり、堆積速度が緩慢になった時期があったことを示唆する。最上部0.3mは搬入土による埋立てである。機能時層中からは、土師器壺・鉢、須恵器壺・杯、円筒埴輪、凝灰岩切石片、柄杓に使用された可能性のあるヒヨウタンなどが出土している。22は深い椀形の土師器鉢で、口縁端部が内傾し、内面には2段の放射状暗文、底部内面には螺旋状暗文を施す。外面には丁寧なヘラミガキを施す。難波Ⅲ古段階の7世紀前葉に属するものであろう。

SE141の中部は、下部の井戸を埋め立てた後に再度掘下げた井戸で、掘形は東西1.4m、南北1.6mの楕円形である。一旦深さ0.9mまで掘られた後、底から0.4mが埋め戻され、再び直径約0.4mの豊穴が0.4mの深さまで掘られている。その後、曲物、瓦、須恵器壺を用いて井戸側が作られている。井戸側は、最初、直径54cm程度の大型の曲物を長径65cm・短径38cmに変形させ、豊穴の上、上側掘形の底に固定し、その内側に須恵質の平瓦5枚を立てている。さらにその中に小型の曲物を径30~35cmに変形させて押し込んでいる。井戸側の最上部は底を抜いた須恵器の壺25が使われている。25と下位の平瓦との隙間が8~14cmあり、もう1段分の井戸側があった状況が断面からも読み取れるが、瓦片や土器片が井戸内から少なからず出土したことからみて、これらの一部が機能時に井戸側に使用され、廃棄までの間に井戸内に落ちたのであろう。

中部の掘形埋土からは、土師器杯・高杯・瓶・壺、須恵器杯・壺・壺のほか、弥生土器が出土している。21は土師器杯Cで、高杯の可能性もある。口縁端部は外側へつまんでおり、内面には2段の放射状暗文、底部内面には螺旋状暗文を施す。23は土師器壺で、口縁部は外反し、端部に面を持つ。24は須恵器杯Hで、口径は13.5cm程度と思われる。以上の遺物は難波Ⅲ古段階の7世紀前葉に属するもので、下部の素掘り井戸に伴う遺物が中部の井戸掘削時に混入したものとみられる。井戸側の部材の最上部に用いられた25は、口縁部は短く外反し、端部はわずかに内側へつまんでいる。体部外面には擬格子タタキを施し、内面は細かな同心円文当具の痕跡をナデでスリ消している。同様の壺は8世紀前~中葉とされる上本町遺跡小宮谷下層の出土遺物で確認されており、25もこれと同時期であろう[大阪文化財研究所2010]。27は25の下位に使用された平瓦のうちの一枚である。凸面は縦目タタキの後、ナデを施さない。1枚作りであり、焼け歪みが著しい。奈良時代のものである。なお、井戸側内の埋土からは須恵器壺・杯、土師器片なども出土している。

SE141の上部は、中部の井戸廃棄時の土壤であり、規模は南北1.5m、東西1.0m、深さ0.2m弱であり、埋土は砂シルト質粘土である。飛鳥~奈良時代の土師器・須恵器・瓦のほか、被熱した人頭大の花崗岩などが出土している。26は須恵質の丸瓦で焼成は悪い。凸面や端面の調整は比較的丁寧である。

なお、下部の井戸の底から出土したヒヨウタンの放射性炭素年代は飛鳥時代中頃を、中部の井戸側に用いられた大型の曲物のそれは古墳時代後期~末をそれぞれ指している。下部の瓢箪と中部の大型曲物の年代が逆転しているが、当時の人びとは曲物を大切に使用し続けたのであろうか(図3、註1)。

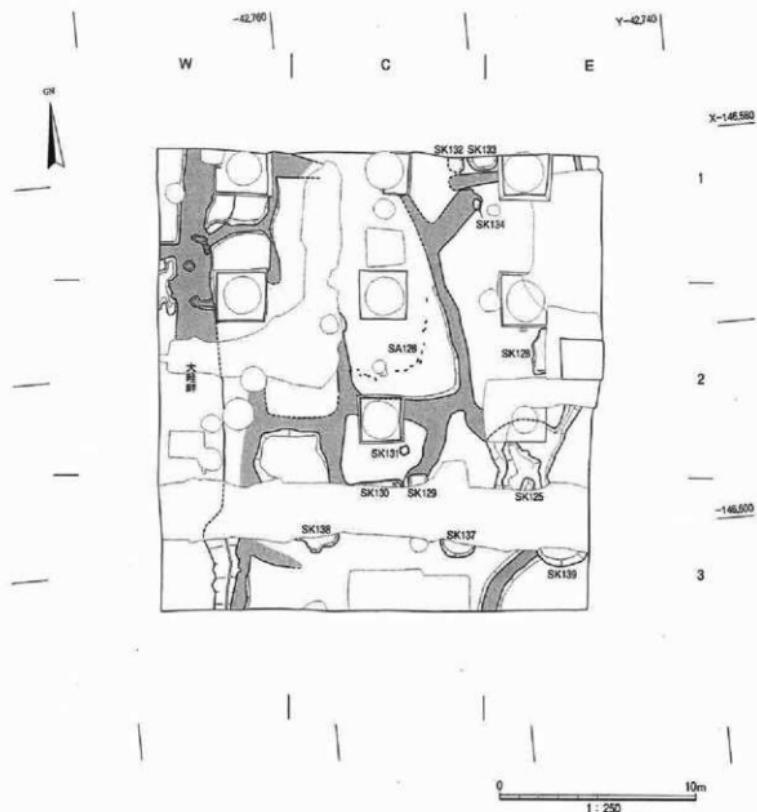


図15 第4層上面の遺構平面図

c - 1. 第4層上面の遺構とその遺物(図15・16・23)

第4層上面の水田は、概ね方形に近いが一辺数~10数mの整然としない田筆が並んでいる。W1~3区の南北畦畔は幅が1.2~1.8m、高さが0.1m弱あり、大畦畔のひとつとみられる。この畦畔の東側の田面は斜面や段を挟んで0.1~0.2m低く、東端のE1~3区とは0.3mほどの高低差がある。畦畔の残りは悪く、第4層上面の色調の違い(畦畔を掘り過ぎることにより畦畔部分に脱色帯の下位が露出することによる)で確認できるものがほとんどであった。水田の耕作時期は、第4層の出土遺物から、中世~豊臣後期と考えておく。

田面や畦畔上には、SK125・128~134・137~139などの土壤が分布する。SK134を除く土壤は、遺物の種類や出土状況からゴミ穴とみられる。作土である第4層の上部数cmが脱色していたことを考え合わせると、水田は長期間、休耕しており、その間に土壤が掘られたと考えられる。これらの土壤

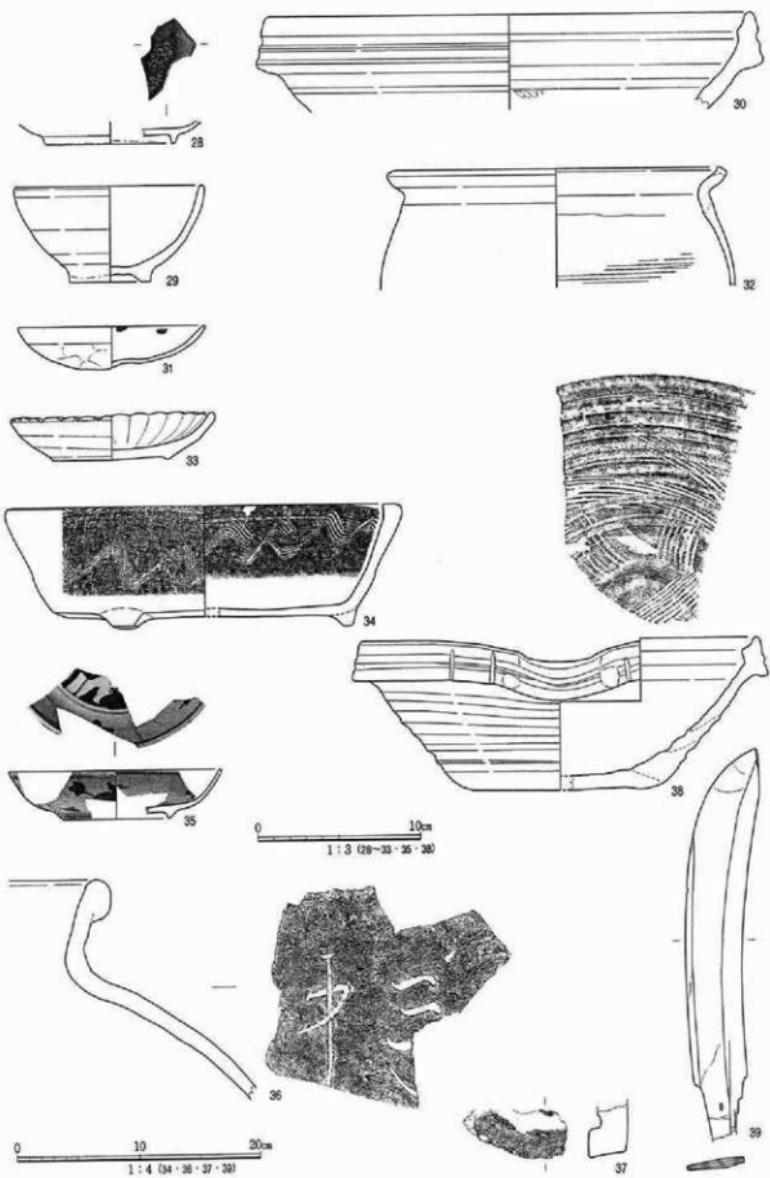


图16 遗址出土遗物实测图(4)

SK135(28~32)、SK125(33~34·37)、SK117·119(35~36)、SK139(38~39)

の掘削年代は出土遺物の年代から、ひとまず、豊臣後期から徳川期前半までの中と考えておく。

E2～3区のSK125はこの層準の最大の土壙で、長径が4.2m以上で深さが0.5mある。小溝が取り付く水溜状の土壤が、後にゴミ穴として利用されたと考えられる。中国産青花・肥前陶器・瀬戸美濃焼・丹波焼・備前焼・瓦質土器・土師器・瓦、木製品が出土し、33・34・37を図示した。33は瀬戸美濃焼志野の菊皿である。高台は低い。34は瓦質土器の火舟である。内外面および口縁部端面に波状文を巡らす。37は金箔押軒丸瓦で、外縁部のみが認められる。主文様は桐の可能性がある。金箔の下には黒漆を塗布する。以上の遺物は17世紀前葉に属するものであろう。

SK139はE3区にあるゴミ穴のひとつで、東西2.6m強、南北1m以上、深さは0.3mである。備前焼、土師器、瓦、木製品が出土した。38は備前焼擂鉢である。器高が低く、摺目は斜めおよび縦方向に施される。口縁端部内面には明瞭な段を有する。39は薙刀形の木製品である。これらは17世紀前葉に属するものであろう。

C1区のSK134はイヌ埋葬墓である(図23)。墓壇は南北0.51m、東西0.28mの平面が梢円形で、皿状に浅く深さは0.05mであった。埋葬されたイヌは1個体である。藁が並んで骨の上を覆っていたことにより、席で覆われていたと考えられる。ただし、骨の下に藁を確認できていないので、席で巻かれていたかどうか、藁の上に土饅頭があったかどうかはわからない(出土骨の詳細は後述する)。

#### c - 2. 第3層盛土の造成工法(図15・18)

第4層上面のC2区のSA126は桶の側板15枚を0.1～0.9m間隔で打ち並べた矢板列である。南東側に丸みのある角をもつL字に並んでいる。側板は幅4～10cm、幅は1.2cm前後で、最長40cmのものが使用されていた。この矢板列は、次に述べる第3層の盛土造成の一環の遺構と考えている。

第3層の造成には計画性がある。W1区の西北隅側から土砂が撤入されている。造成土の大半を占める下部は盛土であり、盛土の一時的な堆積面は傾斜している。一方、造成土の上部は整地層であり、薄く水平に近く積まれている。すなわち、撤入した土砂で盛土面を整形しつつ整地を行い、盛土面の上端で斜面に土砂を客土して盛土坡を括げていったことがわかる。

さらに、この盛土法は区画性がある。図18に示した2点鎖線は、盛土面に現われた客土物質の違いによる境界線であり、盛土作業の途中段階における工程単位を示していると考えられる。境界線は南北方向と東西方向の2方向が認められ、南北方向の境界線が顕著である。断面における客土の撤入方向を考え合わせると、W1区から南・東両側に土砂が供給され、方形に順次拡幅していくと考えられる。客土物質の相違は工程時間の差を示すものであろうから、明瞭な境界が目立つ南北境界は、時間差が大きいと考えられる。したがって、おそらく、盛土は南側への拡幅を先に行い、東側の拡幅はこれに次いだのであろう。第3層を掘り上げつつ矢板列を検出したので、矢板と盛土の直接の関係は観察していないが、旧建物基礎の周囲に残した地層断面からも、矢板列に向かって北から南、西から東の2方向に傾斜する盛土斜面が認められることから、矢板列の付近でも区画性のある拡幅が行われていたことがわかる。そして、拡幅の際、盛土範囲の目印にしたのが、上述の矢板列ではなかったかと考えている。矢板列で南東隅を明示することによって、拡幅範囲を固定したのであろう(註4)。

SK135は第3層造成中の一時期に掘られた水溜で、ゴミ穴としても利用されていたようであり、遺

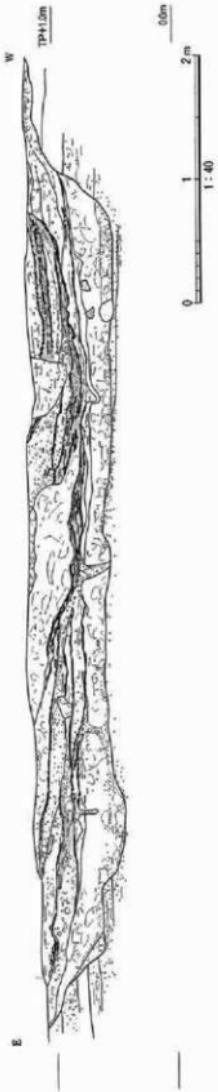


図17 SK135地層断面図

物量が多い。平面が方形で、南北7.5m、東西3m以上、深さは0.8m、断面は逆台形である。下部約30cmは粘土の偽礫客土で防水している。中部は機能的に粗粒～細粒砂薄層を挟むシルト質腐植が平行ラミナを成して厚く堆積したが、造成の進行とともに徐々に埋め立てられ、上部の水域が消滅した(図17)。中国産青花・肥前陶器・備前焼・土師器・瓦、石製品、木製品、金属製品、貝、魚骨などが出土し、28～32を図示した。28・30・31は上部、32は中部、29は下部から出土した。28は青花皿である。高台内はカンナ削り痕が認められる。29は肥前陶器碗である。30は備前焼擂鉢で、擂目は口縁部内面の下方から斜め方向に認められる。31は土師器皿である。薄手で内面には煤が付着し、灯明として使用されている。32は土師器の大和型土釜である。外面には煤が付着する。以上は17世紀前葉に属するものとみられる。

#### d. 徳川期前半

d-1. 第3層上面・第2層下部上面の遺構とその遺物(図18・19)

第3層上面ではゴミ穴とみられる多くの土壤と、溝1条、井戸1基を検出した。また、E～W3区では第2層下部上面でも多くの土壤を検出した。なお、第2層下部が分布しない範囲の第3層上面の遺構は、第2層下部上面の遺構と併存する可能性がある。

SK09はC1区第3層上面の小土壤である。長径0.8m、短径0.5mの平面楕円形で平底、深さは0.2mである。肥前陶器・備前焼・土師器・瓦が出土している。42は肥前陶器壺である。口縁部および体部の外面には白泥を流し掛ける。内面には当具の痕跡が明瞭に残る。17世紀後半のものであろう。

SK117はC3区第2層下部上面の土壤である。直径1.5mのほぼ円形と推定され、すり鉢状で深さは0.7mである。中国産青花、土師器のほか、備前焼大甕が出土している。このうち、中国産青花皿および備前焼大甕を図示した。35は中国産青花皿で、内外面には草花の文様を描く。高台内はカンナ削り痕が見られ、高台には砂が付着する。36は備前焼大甕で、肩部には「三□口」と判読される銘がある。以上は17世紀初頭～前半のものであろう。

SK114はE3区第2層下部上面の土壤である。長径1.3m、短径0.8mの平面楕円形で平底、深さは0.2mである。肥前磁器・肥前陶器・土師器・瓦、土製品が出土した。45は肥前磁器碗で、外面にはコン

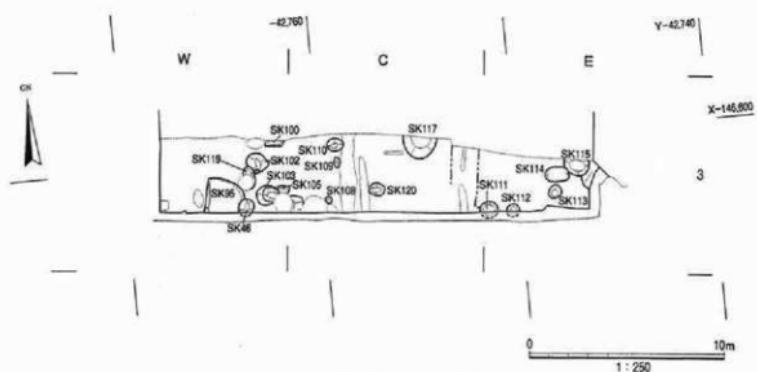
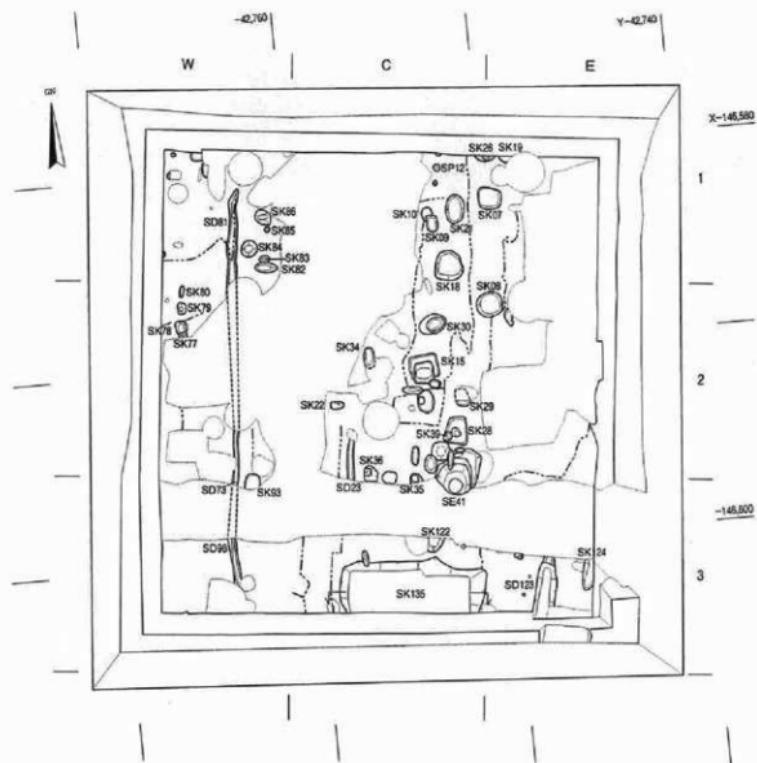


図18 第3層上面(上)・第2層下部上面(下)遺構平面図

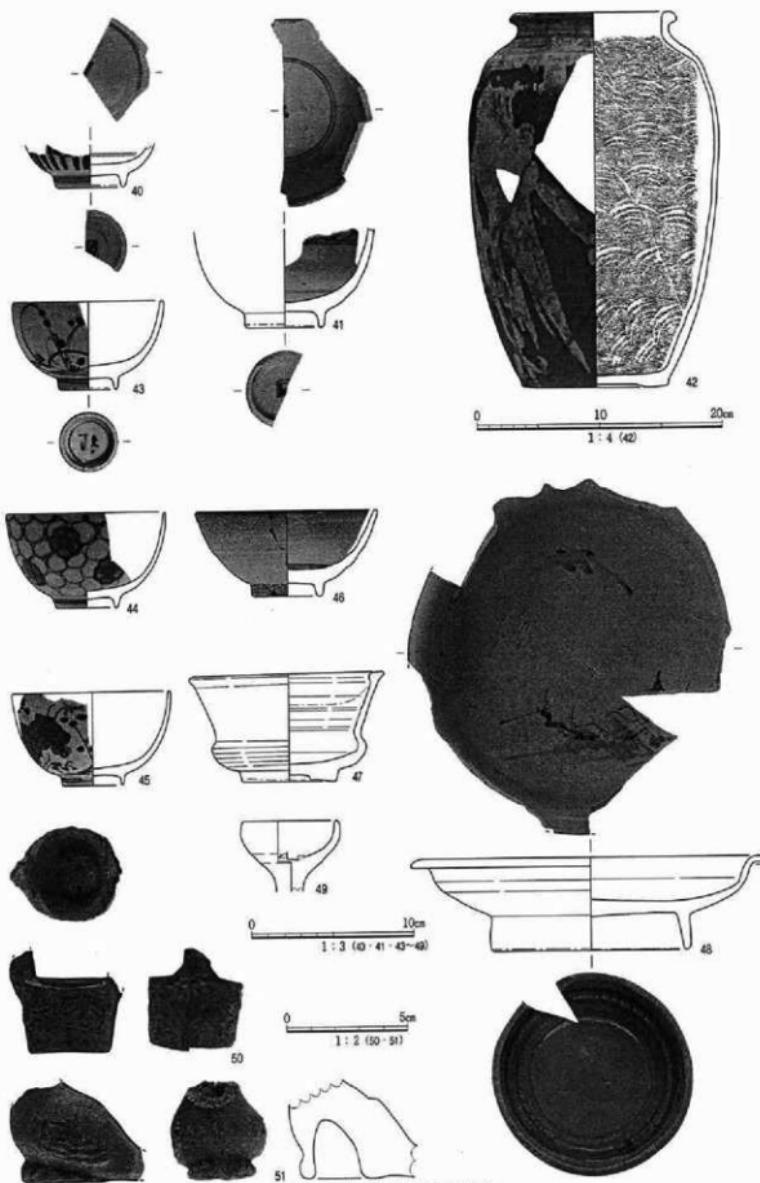


圖19 遺擣出土遺物測量圖(5)

SD62(40·41)、SK09(42)、SK111(43·44·46~49·51)、SK114(45·48·50)

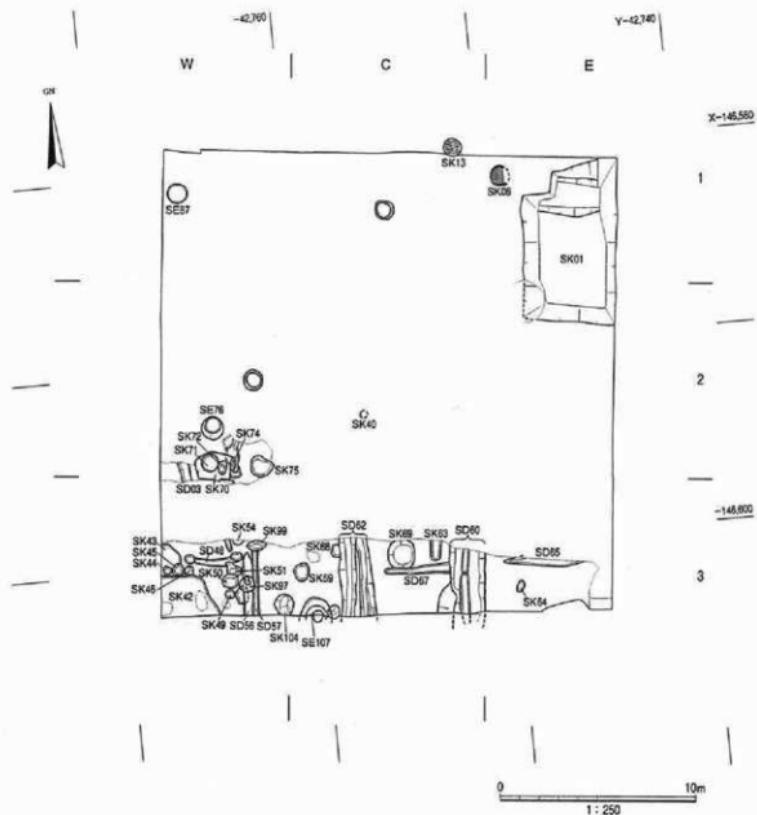


図20 第2層上面の遺構平面図

ニヤク印判と手書きを組み合わせた文様が見られる。48は肥前陶器鉢である。高台内は蛇の目釉剥ぎし、鉄鏽を塗布する。SK111出土品と接合している。50は飯事道具を模したミニチュア土製品である。以上は17世紀末～18世紀前葉のものであろう。

SK111はC3区第2層上面の土壌である。直径0.9mと推定され、凹凸のある底を持ち、深さは0.3mである。肥前磁器・肥前陶器・軟質施釉陶器・土師器・瓦、土人形、金属製品が出土した。43・44は肥前磁器碗である。43は高台内に崩れた「大明年製」銘を有する。44は外面にコンニャク印判と手書きを組み合わせた文様を描く。46～48は肥前陶器である。46は刷毛目碗である。見込みを蛇の目釉剥ぎする。47は鉄釉を施す火入れである。48は鉢で、SK114出土遺物と接合した。49は軟質施釉陶器の灯明台である。緑色釉を施釉している。51は燒とみられる土人形である。底部には穴を設ける。以上は17世紀末～18世紀前葉のものであろう。

e. 徳川期後半

e - 1. 第2層上面の遺構とその遺物(図19・20)

第2層上面はE～W3区とW2区に残っており、ゴミ穴とみられる多くの土壙、溝、井戸などを検出した。それ以外の地区は擾乱されており、井戸や水溜などの深い遺構のみを検出した。SK06・13は直径0.9m、深さ0.4m以上の桶を埋めたものであり、肥溜であろう。

SD62はC3区にある南北溝で、2筋の小溝が重なっている。上位の東溝は幅1.0mで深さ0.2m強、下位の西溝は幅0.9m以上で深さ0.3mである。中国産青花・肥前磁器・関西系陶器・軟質施釉陶器・坪搗鉢・瓦が出土した。40は中国産青花碗の底部である。外面および見込みには文字を崩した文様を施す。高台内には判読不能の銘と、焼継による刻印が認められる。41は肥前磁器で、青磁染付碗である。口縁部内面には四方櫛文、見込みには五弁花文が見られる。高台内には「潤福」銘がある。以上は焼継痕跡であることから、18世紀末～19世紀初頭に降るものであろう。

f. 包含層出土遺物および避難資料(図21・22)

f - 1. 第7層出土遺物

52は弥生土器甕である。口縁部は緩やかに外反する。畿内第I様式新段階のものであろう。62は中部から出土したサヌカイト製石槍である。上半部を折れによって失う。

f - 2. 第6層出土遺物

54・55は土師器杯Cである。いずれも内面には斜放射状暗文を施す。難波Ⅲ中～新段階の7世紀中～後葉に属するものであろう。53は第7層最上部から出土したとされる土師器杯Cであるが、第6層からの出土と考えられるのでここで述べる。内面には斜放射状暗文を施す。難波Ⅲ中～新段階の7世紀中～後葉に属するものであろう。60・61は砂岩製の磨製石斧である。60は折れた後に敲打痕が認められることから、敲石に転用したものであろう。61は不整形であるが、図の下端および左図左側辺を刃部とみて石斧として考えておく。

f - 3. 第5層出土遺物

57は土師器高杯である。杯部はやや浅く、内面には放射状暗文を施す。58は須恵器杯G蓋である。以上は難波IV古～新段階の7世紀後葉～末に属するものであろう。

f - 4. 第3・4層出土遺物

64は第4層出土の肥前陶器碗である。高台は低く薬灰釉を施す。豈臣後期で17世紀初頭のものであろう。66は第3層基底部出土の木製の下駄である。65は第3層から出土した肥前磁器の染付碗である。17世紀後半のものであろう。これが第3層の造成年代を示すものと考えられるが、先述の造成中の遺構であるSK135とは年代に若干の時間差があり、今後の課題である。

f - 5. 第1層出土遺物

68はオランダ製硬質陶器鉢で、コバルト顔料を用いた銅版転写技法による絵付けを行っている。口縁部は大きく外反するものとみられ、本来蓋の付く器形である。外面の絵柄は「GLEANER」(落ち穂拾い)である。口縁部内面には葉をモチーフとした文様帯がある。高台内には「MAASTRICHT」「PETRUS. REGOUT.」とあり、マーストリヒトのベトゥス・レグウー窯製であることが知られる。

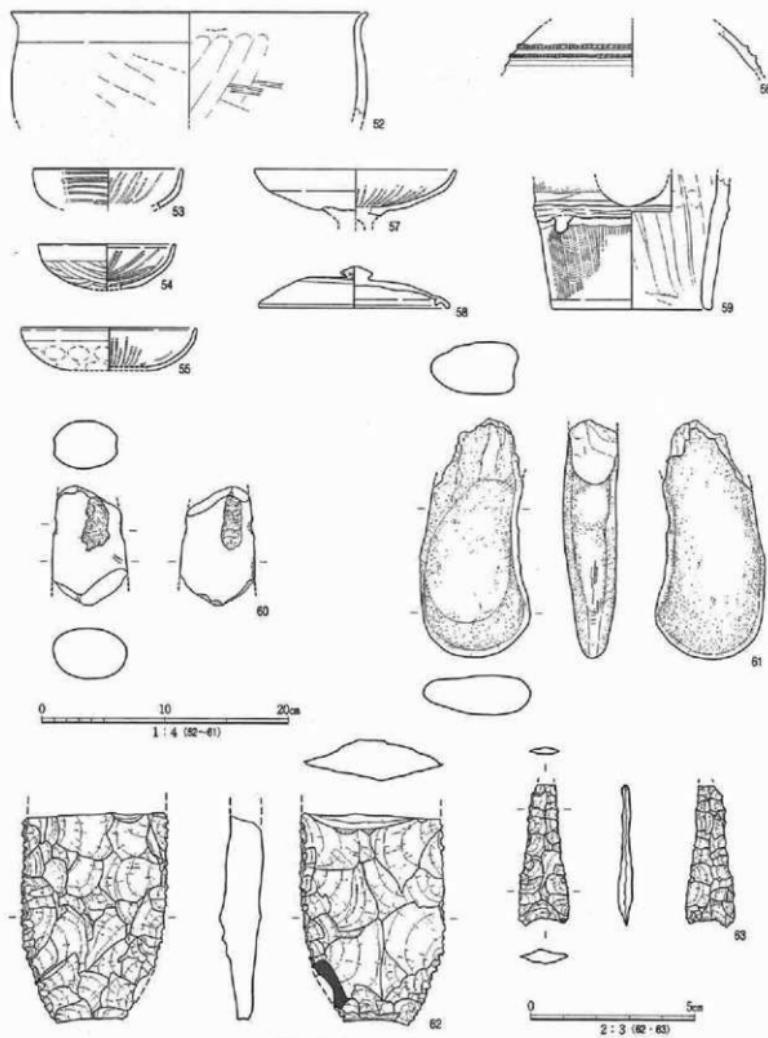


図21 包含層出土遺物実測図(1)

第7層(52・53・62)、第6層(54・55・60・61)、第5層(56~59・63)

19世紀第3四半期のものである。

#### f - 6. 遊離資料

59は円筒埴輪である。タガは低く、外面はタテハケのみの調整である。川西宏幸氏による編年のV

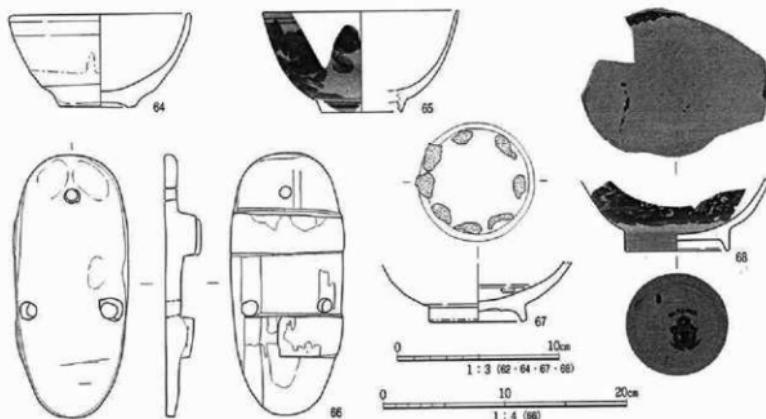


図22 包含層出土遺物実測図(2)  
第4層(64)、第3層(65・66)、第2層(67)、第1層(68)

期に属し、古墳時代後期のものであろう。63はサスカイト製の凹基式石鎌である。平面形は細長い二等辺三角形を呈する。抉りは浅い。弥生時代前期のものとみられる。56は弥生土器壺の肩部である。2条の貼り付け突帯には刻み目を入れている。畿内第I様式新段階のものであろう。以上は第5層から出土した。

67は第2層から出土した李朝白磁碗の底部である。胎土は陶器質に近い。見込み内には8個の目跡が見られ、これより上に沈線状の段を有する。17世紀前葉のものである。

### 3) 遺構と遺物の検討

#### 1) 環境と人間活動の変遷

当該地の堆積環境と人間活動の変遷の概要を層序に沿って述べる。

森の宮遺跡で貝塚ができるつあった縄文時代後期は、当該地は泥が堆積する浅い海底であった(第9層の堆積)。縄文時代晩期末か弥生時代はじめの極短期間に陸化し、台地斜面から洪水砂が布状に堆積した(第8c層の堆積)。海が急激に後退し、扇状地末端域になったのである。直後には猫間川の前身が調査地の東側を流れ出していたようで、自然堤防を決壊したとみられる大規模の氾濫が押し寄せている(第8b層の堆積)。その後もしばしば河川の氾濫を受けているが、前段階のような強力な流れではなく、増水時に自然堤防を溢流したか、遠くで破堤して到達した不規則な流れであったと考えられる。古流向は北から南を向いており、自然堤防の背後を清水谷方面に通じる浅谷ができていたのであろう(第8a層の堆積)。

侵食基準面の低下に伴って浅い不規則な侵食凹地が形成された後、凹地は水棲植物が繁茂する湿地になった。小規模の氾濫堆積物が湿地を覆うことはあったが、弥生時代から古墳時代にかけて、湿地が長く維持された(第7層の堆積)。人々はしばしばこの湿地を訪れていたようだ。出土した柄杓は水

汲みに使われたのだろう。その湿地もやがて干上がって、古墳時代後半～古代にはしだいに土壤が形成されていった(第6層の形成)。

古代には干上がった後背湿地に土壤や井戸が掘られ、溝が引かれている。溝は何度か掘り直されている。当初の南北方向に加えて、後には東西方向にも掘られている。耕作痕跡こそ見つかっていないが、第5層の層相から、耕作が行われたと考えられる。SE141は飛鳥時代の素掘り井戸の埋積が早かつたためか、一度埋め立てられた後、奈良時代に井戸側のある井戸として掘り直されたように思われる。それとも2時期の井戸がたまたま重なったのであろうか。

SD143が掘られた直後の古代の終わりか中世の初めに、当該地は水没して沼の一部になり、第4層の泥が堆積した。中世のある段階になって、沼は干上がり、泥層は耕起されて水田がつくられた。緩い斜面地ではあったが、田筆の規模は小さくかつ区画性に乏しく、この時期の水田としてはたいそう貧弱である。水田は豊臣後期か徳川初期前半までは田面の形状をとどめていたが、乾燥による脱色やゴミの腐敗などからは、長期間休耕していたと考えられる。

徳川期前半に大規模な盛土造成が行われた。徳川氏大坂城の造成に係わるものであろう(註5)。盛土と整地を一連の客土により行い、区画性のある盛土工法が用いられたと考えられる(第3層の造成)。造成土の上は屋敷地として利用されたであろうが、溝や水溜のほかは多数のゴミ穴が残るのみであり、屋敷地の裏側やはざれに当たるのであろう。その後、徳川期後半にかけて当該地は再び耕作地として利用された(第2層の耕作)。

ところで、調査区の南東側は各層準で低い状況が続いている。第5層上面にはE1区からC3区にかけて検出した北北東～南南西走向で東落ちの段があり、第4層の田面は南東側に低くなり、第3層は南東側で薄くかつ低くなり、第2層はE2区とC2区を結ぶ北東～南西方向より南東側で上部の下に下部の盛土が行われている。この状況は当該地の旧地形を反映したものと考えられ、猫間川までの地域は、徳川期後半まで積極的な開発は行われていなかった可能性がある。

## ii) 大坂城跡(OS10-9次)から出土した動物遺存体

丸山真史(奈良文化財研究所・客員研究員)

小舟みなみ(京都大学大学院人間・環境学研究科)

### (1)概要

報告する動物遺存体は、古墳時代から幕末までの遺構あるいは遺物包含層から出土したものである。これらは発掘調査中に肉眼で確認して採集したものであり、破片数にして100点を数える。その内訳は、イヌが同一個体分の88点、その他の哺乳類が9点、魚類が3点出土している(表1)。これらの動物遺存体は、水分が豊富な湿地環境で保存されたと考えられる。(丸山)

### (2)種類別の特徴

#### a. 魚類

SK120(徳川期前半)からサメ類の椎骨、SK135(徳川期前半)からブリ属の椎骨が1点ずつ、SK01

表1 種名表

軟骨魚綱 Chondrichthyes
板鰓亞綱の一種 Elasmobranchii fam. gen. et sp. indet.
硬骨魚綱 Osteichthyes
スズキ目 Percidae
アジ科 Carangidae
ブリ属の一種 <i>Seriola</i> sp.
タイ科 Sparidae
マダイ <i>Pagrus major</i>
哺乳綱 Mammalia
食肉目 Carnivora
イヌ科 Canidae
イヌ <i>Canis familiaris</i>
奇蹄目 Perissodactyla
ウマ科 Equidae
ウマ <i>Equus caballus</i>
偶蹄目 Artiodactyla
ウシ科 Bovidae
ウシ <i>Bos Taurus</i>
シカ科 Cervidae
ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>

(徳川期後半～幕末)からマダイの擬鎖骨(左)が1点、計3点が出土している。サメ類の椎骨は、椎体横径22.1mmを測る大型の種類である。ブリ属の椎骨は椎体の後部が輪切り状に切断され、マダイの擬鎖骨は肩甲骨との関節部を含む後位が切断されている。

これらの切断痕は、解体、調理の際にいた庖丁傷と考えられる。現生標本との比較では、ブリ属が体長80cm以上、マダイは30～40cmに相当する。

b. 哺乳類

第6層(古墳時代～古代)からニホンジカの指骨(基節骨)1点、SD156～158から種を特定できない椎骨(胸椎/腰椎)が1点出土している。この椎骨は、イノシシやニホンジカ程度の大きさである。第4層～第6層(古墳～中世)からウシの指骨(基節骨)が1点出土している。SD154(古墳～飛鳥時代)からウマの臼歯4点が出土している。これらの臼歯はエナメル質だけが保存され、2点は破片となっており部分を特定できない。他の2点は、左側上顎の第3前臼歯から第2後臼歯のいずれかである。それらのうち1点は歯冠高63.2mm、もう1点は57.3mm以上を測り、それぞれの死亡年齢は3～5歳、6歳以下と推定される。第3層(豊臣後期～徳川期前半)からニホンジカの尺骨(左)が1点出土しており、近位部にはイヌの咬痕が見られる。SK01(徳川期後半～幕末)からウシの中足骨(右)近位が1点出土している。この中足骨は鋸で切断されており、最大近位端幅(Bp)48.3mmを測り、体高100～105cmと推定される[西中川駿編1991]。遺跡の近辺で骨細工が行われたと考えられるが、専門的な職人によるものか明らかではない。SK134(徳川期前半)からイヌのほぼ全身骨格が解剖学的位置を保持した交連状態で出土しており、次項にその出土状況や形態的特徴などを記述する。(丸山)

(3)イヌについて

a. イヌの出土状況と特徴

SK134から交連状態で出土したイヌの姿勢は、側臥で四肢を強く曲げており、ほぼ水平な場所に頭部を南、尾部を北に向いている。骨格の上には植物纖維を確認しており、イヌの埋葬に伴ってムシロで覆ったと考えられる(図版4～上段、図23)。

出土部位は、頭蓋骨(左上顎骨・右頸骨などの破片)・下顎骨・頸椎(第1～6・7?)・肋骨・肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨・手根骨・中手・指骨・脛骨・距骨・足根骨・中足骨・趾骨で、計88点を数える(表2)。このイヌは接骨・肋骨の大部分、大腿骨・寛骨などの部位が出土していないのは、もとは全身骨格が揃っており、土中で腐朽した、調査中に取り上げが困難であったなどの要因が考えられる。したがって、陰茎骨を同定していないが、メスと即断することはできない。四肢骨の骨端部はいずれも癒合し

ており、上顎切歯や下顎第4前臼歯などの咬耗が進行している。これら四肢骨の骨端の癒合状況と歯牙の萌出、咬耗状況(註6)から、壮齢から老齢の個体と推測される。保存状態の良い部位を計測し(註7・表3)、得られた計測値は[長谷部哲人1952]が中級とするイヌの大きさに相当する。[西中川駿ほか2008]による各部位からの体高推定式に基づくと、体高42.0~49.2cm、平均43.9cmという値が得られた(註8)。また、上腕骨・桡骨・尺骨・脛骨といった長管骨の最大長から推定される体高が約44.0cmであり、平均値とほぼ一致する。さらに、下顎骨全長(id-cm)から推定される体高は42.5cmであり、頭部と四肢から推定される体高はほぼ一致する。(丸山)

#### b. 大坂におけるイヌの出土

大坂城跡(豊臣後期)や住友銅吹所跡(17~18世紀)では、解体され四肢がなく、頭部から胴部が交連状態のイヌが出土している[久保和士1998、安部みき子2002]。堂島廻屋敷跡(18世紀初)では、散乱状態で全身骨格がほぼ揃った老齢のイヌが出土しており、解体痕があることから食用と考えられている[久保1999]。大坂城下町跡OJ04-1次調査地(17世紀中頃)や難波宮跡NW82-24次調査地(豊臣期)では、15点前後が散乱状態で出土しており、NW82-24次では四肢骨に切傷があることから食用になったことが指摘されている[宮路淳子・松井章2004]。一方、OJ04-1次では、鷹狩り用のワシ・タカ類の餌となったと考えられる鳥類が出土しており、それとともに出土したイヌも人間の食用以外に、鷹餌になった可能性がある[丸山真史・池田研・宮本康治2010]。大坂城跡の堀でもまとまった量のイヌが出土しているが、大坂城下町跡では数点ほどが散乱状態で出土するのが一般的である。大坂

城下町関連遺跡の従来の調査では、当遺跡のようにイヌの全身骨格が交連状態で出土することは稀であり、当資料は確実に埋葬された個体として初見となる。(丸山)

#### c. 江戸におけるイヌの出土

江戸ではイヌが散乱状態で出土することが一般的であるが、大坂と比べると交連状態で出土する個体が多いことも特徴的である。江戸では、交連状態で出土したイヌの大部分は土壤に埋納されており、港区芝神明

表2 犬の部位別集計表

部位	左	右	-	計
頸蓋骨	1	1		2
下顎骨	1	1		2
遊離歯		1		1
椎骨		8		8
肋骨	5	2		7
胸骨		1		1
肩甲骨	1	1		2
上腕骨	1	1		2
桡骨	1	1		2
尺骨	1	1		2
手根骨	1	2		3
中手骨	5	4		9
指骨	4	5	5	14
脛骨	1			1
踵骨	1			1
距骨		1		1
足根骨	3	4		7
中足骨	4	4		8
趾骨	15			15
計	38	34	16	88

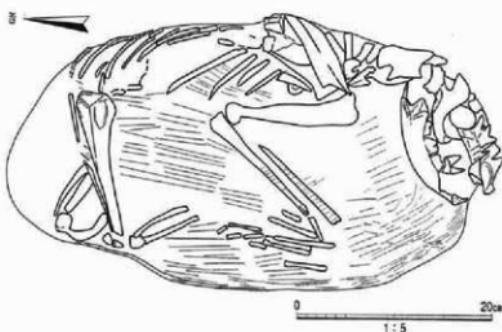


図23 SK134イヌ骨出土状況

表3 イヌの計測値

下顎骨	計測点	測定No.	左	右	項目 部分	上顎		下顎	
						長	幅	長	幅
全長(1)	id-goc	1	132.5	-	M3	-	-	-	-
全長(2)	id-cm	2	131.4	-	M2	6.3	8.9	8.6	6.0
枝高	kr-gov	7	-	-	M1	11.3	13.5	18.7	7.9
枝幅	Minimum	11	30.8	-	P4	16.9	8.6	10.0	5.1
体高(1)	M2後部	16	23.1	23.3	P3	10.6	4.37	9.8	4.5
体高(2)	M1中央	17	22.5	23.3	P2	8.7	4.2	-	-
体高(3)	P4M1間	18	22.0	22.0	P1	5.4	3.7	-	-
体厚	M1中央下方	25	12.4	12.6	P1	-	-	-	-
咬筋窪深			7.1	7.4	P2	-	-	7.6	3.5
					P3	-	-	9.5	4.2
					右 P4	16.5	8.4+	10.5	5.2
					M1	-	-	19.0	8.0
					M2	-	-	8.4	6.0
					M3	-	-	-	-

	左	右	推定体高		左	右	推定体高
肩甲骨				脛骨			
GLP	27.4	27.5		GL		155.0	43.5
SLC	25.3	24.2		SD		12.2	
BG	15.2	15.9+		Bd		19.3	
上腕骨				Dd		14.1	
GL	145.0+	144.3	44.7	第1中足骨			
Bp	26.3	27.2+		GL	54.6	55.0	42.6
Dp	36.2	36.0		第3中足骨			
SD	12.1	12.0		GL	61.0	60.9	43.1
Bd	-	29.3		第4中足骨			
BT	-	19.7		GL	62.9	63.7	42.9
掩骨				第5中足骨			
GL	139.7	140.2	44.1	GL	57.1	57.6	43.9
Bp	14.8	15.8					
SD	11.9	12.3					
Bd	20.9	21.1					
尺骨							
GL		167.0	44.2				
DPA	23.5	24.3					
SDO	19.1	19.8					
第1中手骨							
GL	18.0						
第2中手骨							
GL	47.6	47.0					
第3中手骨							
GL	48.9	55.6	42.2				
第4中手骨							
GL	55.5	55	42.6				
第5中手骨							
GL	55	49.5	49.6				

町田屋遺跡3号犬(18世紀後~19世紀初)のように土壇に伴わない個体もある[山根洋子2004]。また、港区白金館址遺跡285号遺構(18世紀後~19世紀前)のように胴部に六道錢を置いたもの[茂原信生1988]、文京区真砂町遺跡第6地点第162号遺構(19世紀初~19世紀中・後)のように瓦や土器を敷いて丁寧に埋葬されたイヌがある[芝田英行2005]。埋葬姿勢は、伏臥、仰臥、側臥が見られ、そのなかで側臥が一般的である。新宿区三栄町遺跡(G.H-5.6.18世紀)や行元寺跡(17世紀末~18世紀前)では伏臥の姿勢である[金子浩昌1991、2003]。新宿区市谷薬王寺遺

跡第53号遺構(18世紀中～19世紀代)では仰臥の姿勢で、さらに縄で前後の足を縛られた状態で出土している[金子1998]。このように縄で前後の足を縛った状態のイヌは、台東区豊住町遺跡第25号遺構(註9)(19世紀第2四半期)[加藤久雄2010]、同区下谷同朋町遺跡(18世紀中・後)[茂原2010]で見られる。これらの両遺跡のイヌは側臥の姿勢で、胸部をまるめ、四肢が足首(手根骨・足根骨)の辺りで交差している。

新宿区南山伏町遺跡では、イヌが埋葬された第270号遺構(18世紀第4四半期)の規模が小さいことから、イヌの胴や足を強く曲げて埋納したことが指摘されている[金子1997]。また、品川区仙台坂遺跡第3号犬(近世)は、仙台藩下屋敷の堀から出土しており、遺構の規模は大きいが、四肢の関節部を強く曲げた状態であり、ムシロなどに包んで埋葬した可能性が指摘される[金子2004]。当遺跡のイヌは、遺構に埋納されていないにもかかわらず、四肢を強く曲げており、仙台坂遺跡のイヌの姿勢と類似することから、当遺跡のイヌがムシロに巻かれていた可能性がある。(小舟)

#### d. 中・近世のイヌの利用

鎌倉などの中世遺跡から出土したイヌの骨には解体痕が見られ、食用となっていたことが指摘されている[金子1988]。広島県草戸千軒町遺跡ではイヌが散乱状態で出土し、なおかつ解体痕が見られることから、犬食が人々の生活に深く根付いていたことが明らかにされている[松井1994]。このような中世の犬食風習は、兵庫県大物遺跡、福岡県博多遺跡などの各地で指摘されている[丸山・藤澤珠織・松井2005、富岡直人・墨山洋2008]。犬食の風習が近世に引き継がれたことは、上述した大阪で解体痕が見られる食用となったイヌが出土していることから明らかである。江戸でもイヌを食用としたことが指摘され[西本豊弘2008]、地方都市の兵庫県明石城下町[松井・内山純蔵1992]、岡山県岡山城跡[富岡1998]などの武家屋敷跡から食用となったイヌが出土している。また、イヌは人間の食用だけでなく、鷹狩り用のワシ・タカ類の餌になったことが、東京都葛西城址の調査で指摘されている[金子1975]。前述した大坂城下町跡OJ04-1次調査地から出土したイヌは鷹餌の可能性があり、各地でイヌが鷹餌に利用された可能性がある。

人間の食用、鷹餌としてのイヌは中世から近世を通じて多く出土しているが、埋葬されたイヌは中世に少なく、近世に多い。中世鎌倉の由比ヶ浜南遺跡では夥しい数のイヌが出土しており、遺構からイヌが単独で出土することから埋葬された可能性が指摘されるが、全身骨骼が交連状態で出土した例はない[西本ほか2001]。最近では、材木座遺跡で埋葬された生後3ヶ月程度の幼犬が出土している[金子2009]。近世では、埋葬されたイヌは江戸に集中しており、大坂城下町関連の遺跡では当資料が初見となる。江戸では銭を副葬したり、土壤の底部に瓦や土器を敷くなど丁重に葬った個体がある。また、伊皿子貝塚では江戸時代のイヌの墓石が出土している[日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会1981]。それに対して、当遺跡のものを含めてムシロに巻かれたり、覆われたりした状態のイヌは簡素な埋葬方法であったと言えよう。(丸山・小舟)

#### (4)動物遺体のまとめ

今回の報告では、古墳時代から幕末まで長期間にわたる動物遺存体が出土しており、いずれの時代も資料数が少ないが、当地における動物利用の一端に迫る貴重な資料である。特に、徳川期前半のイ

スは特筆される。このイヌは、体高44cm程度の壮齢から老齢の個体である。従来の大坂城下町関連の遺跡の調査では、イヌは散乱状態で出土するのが一般的である。それに対して、当遺跡のイヌはほぼ全身の骨格部位が交差状態で出土し、埋葬されたものである。埋葬姿勢は、四肢を強く曲げた状態であり、ムシロに巻かれたり、覆われたりした状態である。出土したイヌが、飼い犬であったのか、野良犬であったのかは定かではないが、大坂城下町でイヌの埋葬の様子を物語る貴重な資料と言えよう。(丸山)

#### 4)まとめ

本報告で述べた諸点をまとめておく。

- ・縄文時代から幕末までの地層と遺構・遺物を調査し、海底から扇状地、湿地、耕地、沼地、耕地、造成地を経て、再び耕地に至る当該地の変遷を明らかにした。
  - ・特に、古代の井戸の構造と、豊臣後期～徳川期前半の盛土工法について詳しく検討した。
  - ・徳川期前半のイヌの埋葬墓を記載し、イヌの埋葬に係わる新知見を得た。
  - ・また、次の問題を残した。
  - ・層位掘りが徹底できず、遺構面や遺物の出土層準の認定が曖昧になった。そのため、第7～5層の詳細年代や、第3層の造成時期を絞り込むことができなかった。
- 今後、周辺地域で詳細な調査の実施が望まれる。

#### 註)

- 1)この報告では、豊臣後期の後の17世紀～18世紀前葉を徳川期前半、18中葉～19世紀中葉を徳川期後半と仮に呼ぶことにする。
- 2)平成22年度科学研究補助金「上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－」の一部を使用した自然科学分析結果による。
- 3)SEは井戸を指す遺構記号であり、廐棄土壤にはSKを用いるのが慣例ではあるが、ひとつの遺構の盛衰を概観するにあたって遺構記号が異なるのは不自然であるので、ここではSEを踏襲して用いる。
- 4)このような徳川期前半の区画は、OS92-74次調査地[大阪市文化財協会1992]でも観察されている。
- 5)第3層の造成工事の時期が豊臣後期である可能性を完全に否定することはできない。今後の課題である。
- 6)四肢骨の骨端部の癒合状況、歯牙の萌出・咬耗状況による齢査定は[Conwall1956]を参照した。
- 7) [Driesch1976]、[斎藤弘吉1963]、[茂原信生・松井翠1995]、[宮崎泰史2008]を参照した。
- 8)体高推定に用いた計測値および体高推定式は、最大長を計測できたもので、[西中川ほか2008]の式で相関係数が0.9以上を示しているものに限った。
- 9)報告書の写真17では、第15号遺構のイヌになっている。しかし、第15号遺構からイヌの出土はなく、埋葬姿勢が本文と一致するため第25号遺構のイヌと思われる。

#### 引用文献

大阪市文化財協会1992、「大阪市交通局による地下鉄7号線森ノ宮駅舎工事に伴う大坂城跡・森の宮遺跡発掘調査

- (OS92-74)略報』、11ps.
- 2002、「大阪城跡VI」、260ps.
- 2010、「上本町遺跡発掘調査報告Ⅰ」、85ps.
- 加藤久雄2010、「第2章 台東区豊住町遺跡出土の哺乳類について」：『豊住町遺跡 下谷一丁目5番地點』 台東区文化財調査会、pp.63-69
- 金子浩昌1975、「V-12 葛西城址IV・V区漆出土の動物遺体」：『青戸・葛西城址調査報告III』 葛西城址調査会、pp.197-260
- 1988、「中世遺跡における動物遺体」：『考古学と関連科学』 錦木義昌先生古稀記念論文集刊行会、pp.407-436
- 1991、「第5節 哺乳類」：『三栄町遺跡・骨角貝製品・動物遺存体編』 東京都新宿区教育委員会、pp.83-103
- 1997、「新宿区南山伏町遺跡出土の動物遺体」：『南山伏町遺跡』、pp.337-395
- 1998、「第3章 市谷薬王寺町遺跡出土の動物遺体」：『市谷薬王寺遺跡II』東京都住宅供給公社・東京都新宿区市谷薬王寺町遺跡調査会、pp.283-310
- 2003、「2. 行元寺跡出土の脊椎動物遺体」：『行元寺跡』 財団法人新宿生涯学習財團、pp.233-241
- 2004、「仙台坂出土の埋葬犬と江戸のイヌたち」：『品川区歴史雑記要』第19号 品川区立品川歴史館、pp.5-12
- 2009、「材木座町屋遺跡の動物遺体」：『材木座町屋遺跡(N261)-材木座6丁目653-1外-発掘調査報告書』 玉川文化財研究所、pp.22-28
- 久保和士1998、「住友銅吹所跡出土の動物遺体」：『住友銅吹所跡発掘調査報告』 大阪市文化財協会、pp.339-377
- 1999、「動物遺体」：『堂島藏屋敷』 大阪市文化財協会、pp.52-56
- 斎藤弘吉1963、「犬科動物骨格計測法」
- 佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：『難波宮跡の研究』第十一 大阪市文化財協会 pp.253-265
- 茂原信生1988、「(4)285号遺構出土のイヌ」：『白金館跡遺跡I』 白金館跡(特別養護老人ホーム建設用地)遺跡調査会、pp.194-196
- 2010、「下谷向明町遺跡 上野三丁目26番地點」 東京電力株式会社・株式会社竹中工務店・加藤建設株式会社、pp.35-38
- 茂原信生・松井章1995、「草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨」：『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、pp.289-312
- 芝田英行2005、「第3章 動物遺体」：『真砂町遺跡第6地点』 三井不動産株式会社・加藤建設株式会社、pp.81-91
- 富岡直人1998、「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」：『岡山城二の丸跡』 中國電力内山下変電所建設事業組合文化財調査委員会、pp.136-163
- 富岡直人・堀山洋2008、「人と動物の間わりを博多遺跡群に探る」：『市史研究ふくおか』第3号 福岡市博物館市史編さん室、pp.151(8)-132(27)
- 西中川駿輔1991、「古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告
- 西中川駿・福島晶・谷山教・池田省吾・土岐学司・小山田和央・松本光春2008、「イヌの骨針測定値から骨長並びに体

- 高の推定法」：『動物考古学』第25号 動物考古学研究会、pp.1-11
- 西本豊弘・鶴澤和宏・太田敦子・柿崎智子・橋泉岳二2001、「由比ヶ浜南遺跡出土の動物遺体」：『由比ヶ浜南遺跡』 第2分冊・分析編1 由比ヶ浜南遺跡発掘調査団、pp.241-394
- 西本豊弘2008、「イヌと日本人」動物の考古学、西本豊弘編 吉川弘文館、pp.180-191
- 日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会1981、「伊皿子貝塚遺跡」本文編 日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会、pp.132-135
- 長谷部曾人1952、「犬骨」：『吉胡貝塚』 文化庁、pp.146-150
- 松井章1994、「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物遺存体」：『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編、pp.343-346
- 松井章・内山純蔵1992、「明石城武家屋敷跡出土の動物遺存体」：『明石城武家屋敷跡』 兵庫県教育委員会、pp.132-140
- 丸山真史・池田研・宮本康治2010、「大坂城下町跡出土の動物遺存体－中央区高麗橋3丁目の調査から－」：『大阪歴史博物館研究紀要』第8号 大阪歴史博物館、pp.37-50
- 丸山真史・藤澤珠穂・松井章2005、「大物遺跡出土の人骨および動物遺存体について」：『尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成7年度(6)』 尼崎市教育委員会、pp.31-59
- 宮崎泰史2008、「勒島遺跡C地区埋葬犬骨と包含層出土の犬骨」：『酒川勒島CⅡ』古蹟調査報告書第39冊 東至大学校博物館、pp.623-693(pp.233-600)
- 安部みき子2002、「大坂城跡出土の人骨・歯骨」：『大坂城址Ⅱ』本文編 (財)大阪文化財調査研究センター、pp.306-348
- 宮路淳子・松井章2004、「大坂城下町跡出土の動物遺存体の分析」：『大坂城下町跡Ⅱ』 大阪市文化財協会、pp.419-451
- 山根洋子2004、「芝神明町可麗遺跡出土のイヌ」：『研究紀要8』 港区立港郷土資料館、pp.19-28
- Conwall, I. W. 1956. Bones for the Archaeologist J. M. Dent & Sons
- Driesch, Angela von den 1976. A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES Peabody Museum of archaeology and Ethnology Harvard University

地層の断面  
(西壁: 北東から)



弥生時代前期の門地  
(第8層上面のSX159:  
北から)



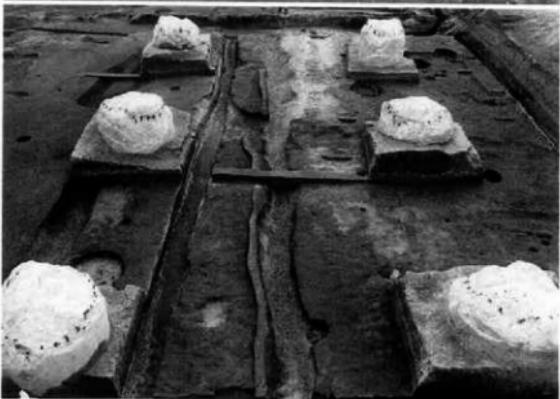
SK179の弥生土器出土状況  
(第8層上面: 東から)



弥生～古代の遺構検出状況  
(第6層基準：南から)



古代の溝群  
(第5層基準：北から)



古代の井戸SE141  
(第5層上面：北西から)



中世末～徳川期前半の水田  
(第3層上面；西から)

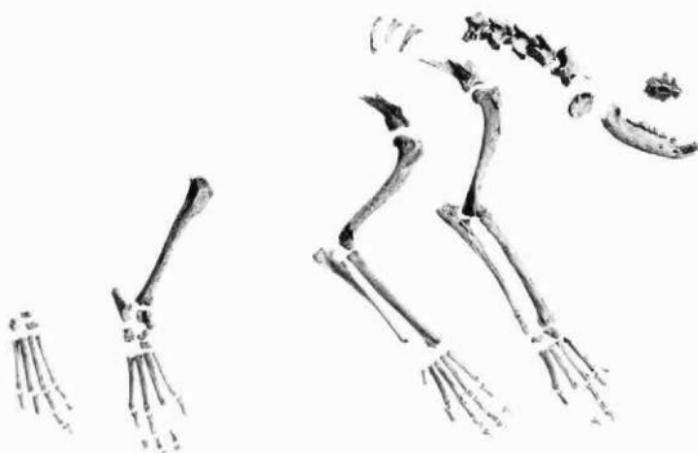


徳川期前半の盛土直前に  
打たれた矢板列  
(第4層上面；東から)



徳川期前半の土壤SK117内  
大糞出土状況  
(第2層下部上面；南から)





イスの骨格



イスの主要部位

- 1.上顎骨(左) 2.上顎骨(左) 3.下顎骨(左) 4.下顎骨(右) 5.環椎 6.軸椎 7.第3頭椎 8.第4頭椎  
9.第5頭椎 10.第6頭椎 11.肩甲骨(左) 12.肩甲骨(右) 13.上腕骨(左) 14.尺骨(左) 15.橈骨(左) 16.上腕骨(右)  
17.尺骨(右) 18.橈骨(右) 19.脛骨(右)

中央区南新町二丁目における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS10-10)報告書

調査個所 大阪市中央区南新町2丁目16番7  
調査面積 35m<sup>2</sup>  
調査期間 平成23年2月9日～2月16日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西縁辺部に近い豊臣氏大坂城跡構内に位置する。周辺の調査では豊臣・篤川期の遺構・遺物のみならず、古代瓦が頻繁に出土している。北西150mのOS08-5次調査では蓮華文軒丸瓦や重圓文軒平瓦とともに連珠を巡らす奈良時代の鬼瓦[大阪市文化財協会2008]が、東方300mのOS86-35次調査、同250mのOS92-6次調査では、鎌倉時代の遺構から奈良時代の重圓文軒瓦や飛鳥～平安時代初頭頃の蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦が見つかっている[大阪市文化財協会2003](図2)。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、現地表下-1.6mで江戸時代初頭とみられる焼土層が検出されたことから、本調査を行うこととなった。調査は事業者側が工事用の土留め、および杭打ち工事を終え、現地表下-1.6mまで重機による掘削を終了した時点で着手することとし、東西7m×南北5mの調査区を人力掘削で調査した(図1)。調査終了後、2月16日に器材を搬出して全ての調査を終えた。

本報告の図に示す標高は、TP値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記した。平面図の図2は座標北を、それ以外は磁北を基準に作成した。

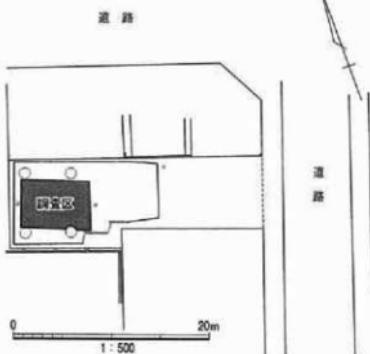


図1 調査区位置図



図2 調査位置図

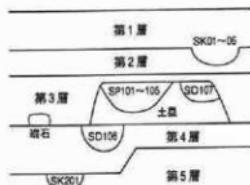


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：層厚20~80cmの盛土層で、にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土偽礫や明黄褐色シルト質粗粒砂などからなる。北東側から投入されていた。古代~豊臣期までの瓦が多く含む。

第2層：層厚10cmの灰黄色(2.5Y6/2)粘土質粗粒砂からなる盛土で、上面でSK01-06の土壌を検出した。これらの土壌は第1層で埋まる。

第3層：層厚10~30cmの黄灰色(2.5Y5/1)粘土質粗粒砂の盛土層で土壌を伴う堀(後述)の南に北側から投入され、豊臣前期の瓦を多く含む。第1~3層は堀を伴う墨敷を撤去した後、地盤の嵩上げを目的に北から投入された盛土である。

第4層：層厚10~30cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層で、調査地中央を東西方向にはしる段の南側では厚く堆積する。焼焼の瓦片が出土した。上面にSD106や土壌を伴う堀と、礎石建物SB101・102がある。

第5層：層厚60cm以上の褐色(7.5YR4/4)粗粒砂質シルトの自然堆積層で、須恵器杯身など古代の遺物を含む。



(測定位置は図3参照)

0 2m  
1: にぶい黄褐色(10YR5/2)シルト質粗粒砂  
2: 灰黄色(2.5Y5/1)シルト質粗粒砂  
3: 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂  
4: 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粗粒砂  
5: にぶい黄褐色(2.5Y5/3)粘土質粗粒砂  
6: 暗灰褐色(2.5Y5/2)粘土質粗粒砂  
7: 黄褐色(10YR5/6)粘土質粗粒砂  
8: 褐色(2.5Y5/1)粘土質粗粒砂

図4 地層断面図

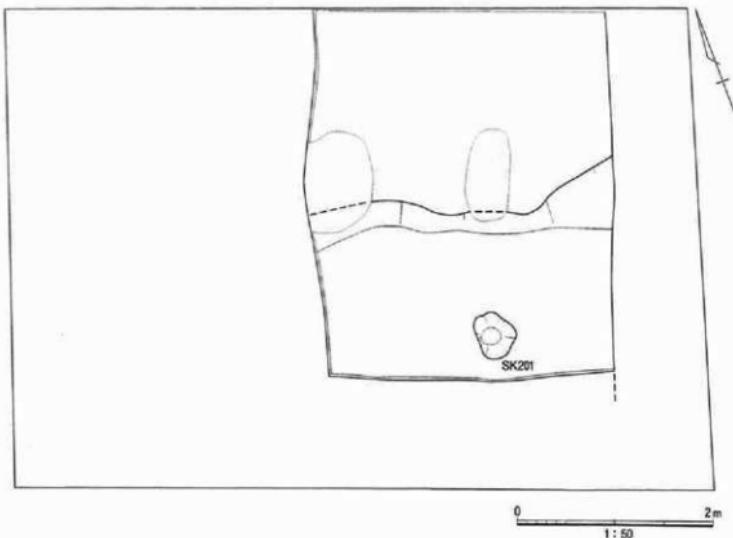


図5 第5層上面平面図

## ii) 遺構と出土遺物(図4～8)

### 中世の遺構(第5層上面)

上面は北から南に低く傾斜し、調査地中央を東西方向に段がはしり、段の南で小土壙SK201を検出した。

SK201 直径0.5m、深さ0.2mの不整形の土壙で、暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルトを埋土とする。  
近世の遺構(第4層上面)

塙で囲われた屋敷地の北端を検出した。塙に接するように礫石建物2棟がある。

SD106 次で見る塙に切られる溝で、長さ1.5m以上、幅1.2m、深さ0.5mである。図4上図のように半ば埋没した後も、幅0.6m、深さ0.2mの溝として機能していたようで、黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂にはラミナが見られる。SB102にも先行する。

塙 带状に上幅1.5m、下幅2.4m、高さ0.3mの土星を築造し、土星の南肩に長径1.1～1.3m、短径0.6～0.8m、深さ0.6～0.9mの梢円形の掘形SP101～105を掘り、直径0.3mの柱を立てた壇臣前期の塙である。芯ヶ間は1.3～1.7mとばらつきを見せているが、5～6尺に計画されたものと思われる(図4)。SP105は柱抜取りのため、上面で直径0.9m、深さ0.6mのスリ鉢状に掘られている。いずれの柱穴も柱当りが0.1～0.2m深く掘り込まれ、掘形は北側の勾配が急なのに対して、南側は平坦もしくは緩い。これは柱を埋める際、南側から柱を挿入したためと考えられる。土星本体から瀬戸美濃焼天目茶碗5が出土した。梢円形の掘形をもつ塙として、大阪歴史博物館敷地の壇臣前期のSA503が知られている[大阪市文化財協会1992]。しかし、SA503の掘形が梢円形を呈するのは、隅丸長方形の掘形に塙造替

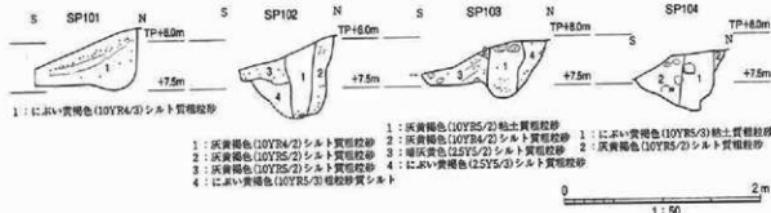
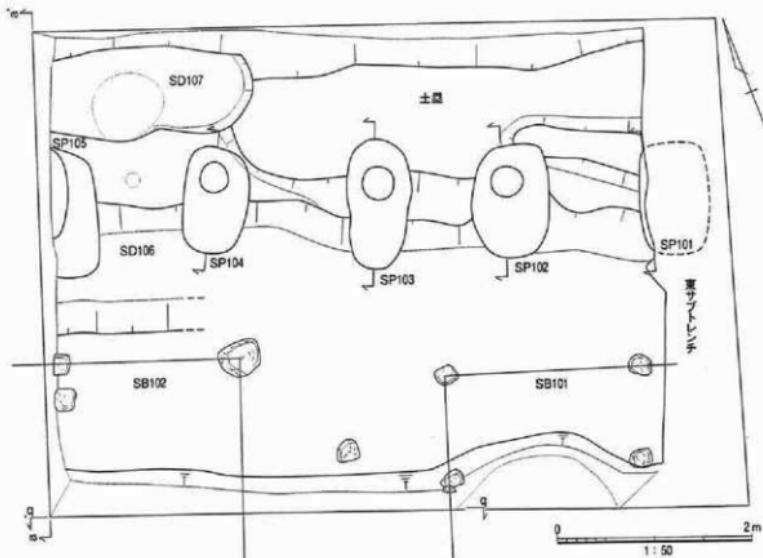


図6 第4層上面平面図および遺構断面図

時の掘形が掘り加えられたためであり、柱痕跡も2つずつあるから、今回のSP101～105とは原因を異にしている。またSA503の芯々間は1.8m(6尺)等間で、今回の堀と規格が近い。今回調査地の北西140mの大坂府教育委員会調査地で、東西方向の堀が検出され、担当者は懸構堀掘削時(1594年)の建設を想定している[佐久間貴士ほか1989]。

SD107 土壌北肩で検出した長さ2.1m以上、幅0.9m、深さ0.3mの東西溝で、粘土質粗粒砂偽疊などで埋まっている。

SB101 豊臣前期の東西棟の礎石建物で桁側の芯々間が2.0m、梁側の芯々間が1.0mに復元した。

SB102 豊臣前期の礎石建物で東西の芯々間が1.9mに復元した。

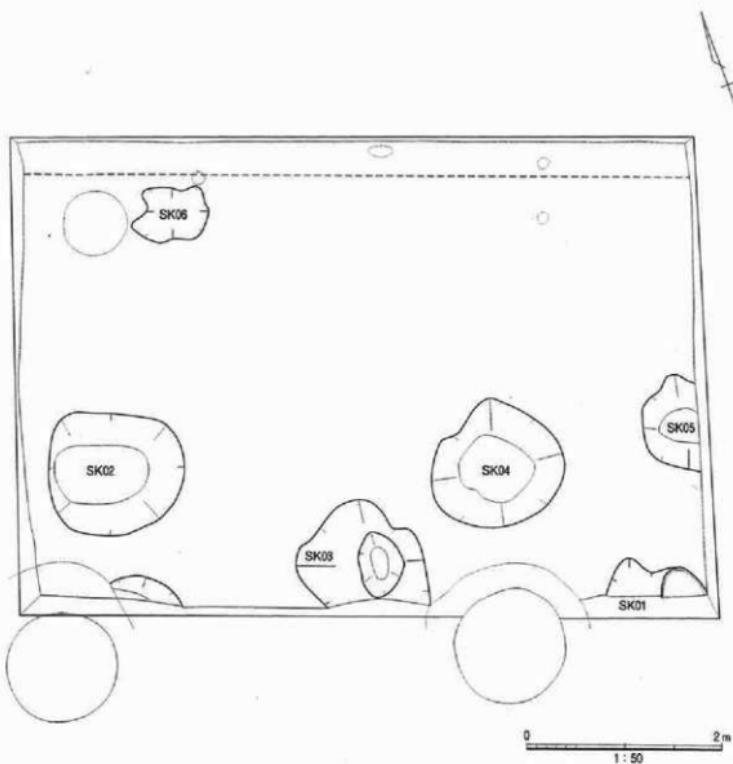


図7 第2層上面平面図

#### 近世の遺構(第2層上面)

SK01～06 直径0.6～1.3m、深さ0.2～0.3mの不整形の土壙で、第1層で埋まる。SK02から古代の平瓦11・12が出土した。11は桶巻き作りで、側面をヘラ削りで調整し、凸面に格子文タタキとカキメのようなヨコ方向の回転ハケメ調整が見られる。12も凸面に格子文タタキの痕跡がある。いずれも厚さ1.4cmと薄い。

#### iii) 地層出土遺物(図8・9)

##### 第5層出土遺物

須恵器杯身2は体部直下に高台が付く。奈良時代の土器である。

##### 第4層出土遺物

土師器甕8は口縁部直下でやや肩が張るタイプで、16世紀前半と考えられる。素焼である。

##### 第3層出土遺物

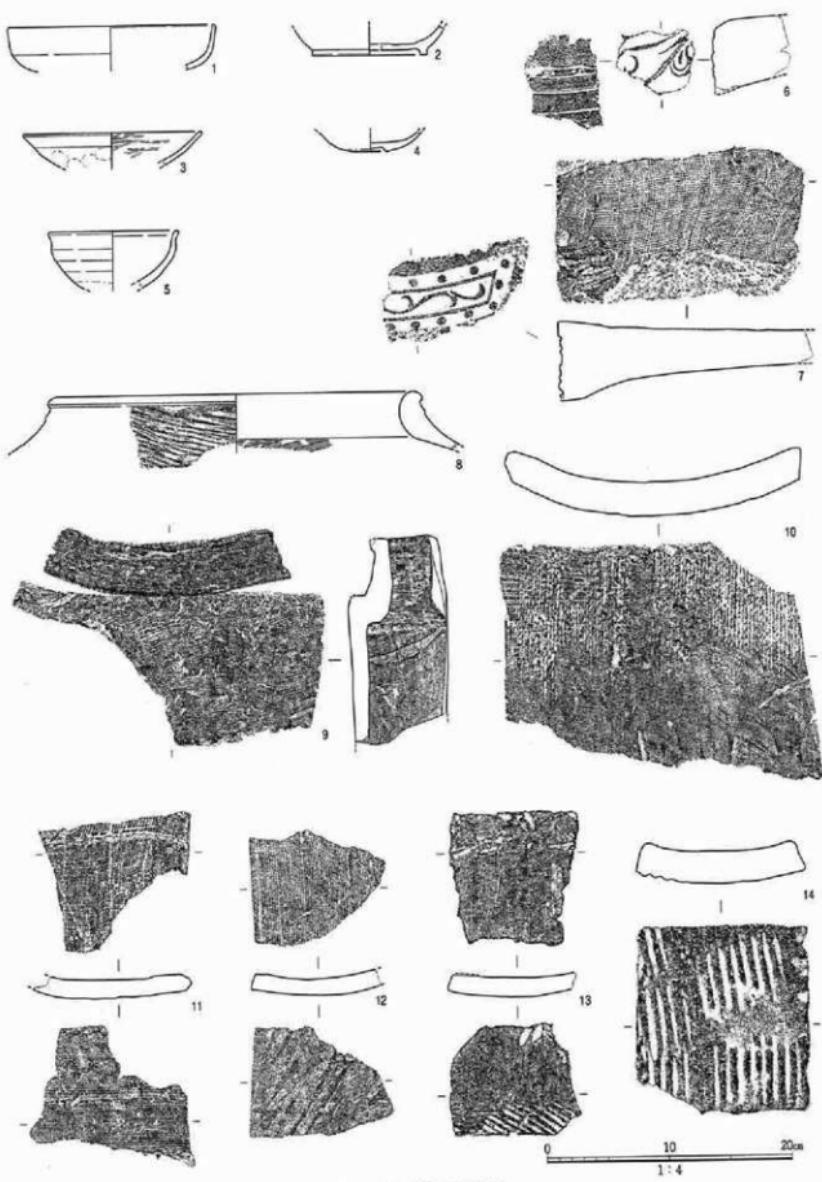


图 8 出土遗物实测图(1)

土层(5)、SK02(11·12)、第4层(2)、第1层(8)、第1层(1·3·4·6·7·9·10·13·14)

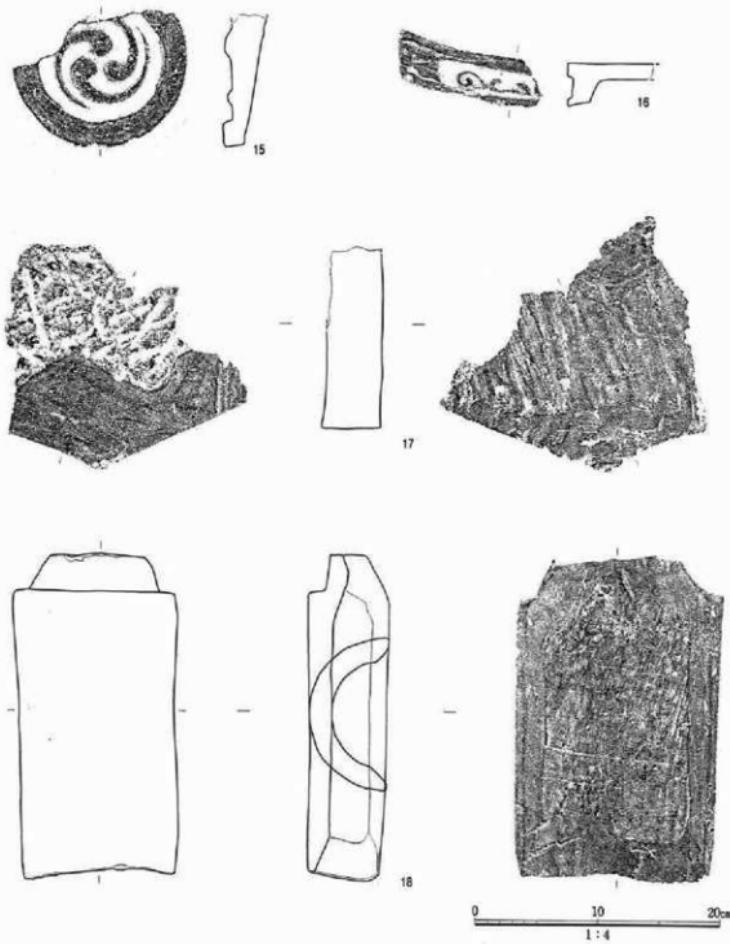


図9 出土遺物実測図(2)

第3層(15・16・18)、第1層(17)

無珠文の左巻き三巴文軒丸瓦15は上部にいくほど瓦当厚が肥厚する。本層から3個体出土した。三葉唐草文軒平瓦16は、上外縁を面取りしない。18と組合って使われた可能性が高い。丸瓦18は全長26.8cmで、凹面にややナナメ方向のコビキBをもつ。秀吉晩年の大坂町中屋敷替え(1598年)時の盛土直下から出土する瓦と共通する特徴をもつ。

#### 第1層出土遺物

土師器杯1、瓦器碗3、中国白磁碗4、忍冬唐草文軒平瓦6、唐草文軒平瓦7、丸瓦9、平瓦10・

13・14、桐文隅鬼瓦17が出土した。3は尾上実編年[尾上1983]のⅢ-3期に当り、13世紀中葉の実年代を与える。4は基筒底をもつ。6は法隆寺西院創建瓦と同范で、胎土・調整手法・焼成とも酷似し、法隆寺と同じ工房の作と考えられる(註)。7は東方のOS86-35・92-6次調査地で同范瓦が出土している。圓線内中央にタテの界線を置くもので、曲線頭をもつ。9は成形道具が大小の円筒を2段積んだ形をしている。10は凸面模目タタキ、13・14は条線文タタキで、13は桶巻き作り、14は側面が両方とも生きていることから道具瓦と考えられる。17は表面に貼り付けた桐葉の形象は失われているが、線刻した際の中央・右の桐葉のヘラ描きが残る。中央葉の真下は股割りである。中央葉の裏面に把手のための半球形の削取りがある。豊臣前期の鬼瓦である。本層は飛鳥時代後期から豊臣前期に至る遺物を多く含む。

### 3)まとめ

豊臣前期の堀に囲まれた礎石建物をもつ屋敷地の北端を検出した。また1598(慶長3)年の大阪町中屋敷替え時の盛土と限定できる客土から、飛鳥時代後期から豊臣後期に至る遺物、特に瓦を採集することができた。東方250~300mのOS86-35・92-6次調査地で18世紀代まで続いたと思われる古代の瓦葺き建物に伴う瓦が嵩上げのための客土とともに当地にもってこられた可能性がある。また西方のOS80-5次調査地の古代瓦との関係も考慮に入れるべきかもしれない。

周辺の調査が進展すれば、古代の当地の状況がより明らかになるものと考えられる。

### 註

法隆寺西院創建瓦との同范確認に当っては、奈良文化財研究所考古第3研究室の今井見樹氏のご協力を得た。

### 参考文献

- 大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九  
大阪市文化財協会2003、『大阪城跡』Ⅵ  
大阪市文化財協会2008、『中央区本町橋における大阪城跡発掘調査(OS80-5)報告書』  
尾上実1983、「南河内の瓦器碗」：藤澤一夫先生古稀記念「古文化談叢」、古代を考える会、pp.689-705  
佐久間貴士ほか1989、「よみがえる中世2 本願寺から天下一へ 大坂」平凡社

第5層上面検出遺構  
(深掘り部分、北東から)



第4層上面検出遺構  
(東から)



第4層上面検出遺構  
(南西から)



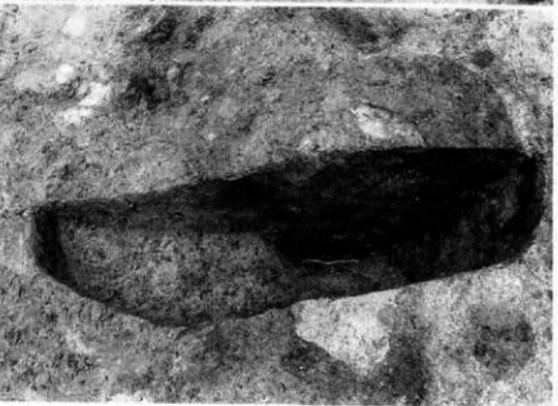
第2層上面検出遺構  
(南東から)



SP105とSD106  
(東から)



SP103(東から)



大坂城跡発掘調査(OS10-11)報告書

調査個所 大阪市中央区本町橋22-2  
調査面積 56m<sup>2</sup>  
調査期間 平成23年1月12日～1月14日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、岡村勝行

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の西縁、豊臣期大坂城惣構内の西端に位置する。これまで周辺では、東100mのOS91-20次調査で豊臣後期の溝・土壤、北140mのOS05-6次調査で豊臣前期の建物・南北溝などが検出されている(図1)。

当地において大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、現地表下1.9m以下で、豊臣期から徳川期にかけての可能性がある遺構面が検出され、本調査を実施することになった。

敷地は、調査開始前に事業者によって、現地表下1.9mまでの地層が掘削、除去されており、その西部に東西8m、南北7mの調査区を設定した(図2)。既設の工事基礎を避け、地耐力の無い砂地のために十分な法面を確保したところ、最終的な調査面は一辺約4mの方形となり、平面で現地表下3.4m(第4層上面)まで、サブトレンチで4.3mまでの調査を行った。

本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中では、TP+○mと表記する。方位は図1が座標北、図2は磁北を基準とした。

### 2) 調査の結果

#### i) 層序(図3・4)

大きく8層に分けられ、このうち、第2～7層は南西方向に10～15度傾斜して堆積している。第2および最下層の8層からは、18世紀後半以降の陶磁器が出土しており、これらは徳川期の盛土層あるいは整地層である。各地層の特徴はつぎのとおりである。

第1層：コンクリート片を含む近現代の盛土層で、層厚は10cmである。



図1 調査地位置図

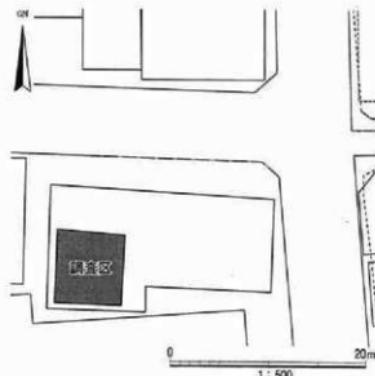


図2 調査区位置図

第1層	第2層：におい黄橙色(10YR7/4)粗粒砂からなる盛土層で、層厚は90~150cmである。
第2層	第3層：シルト偽礫を多く含む、黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は20~50cmである。
第3層 SK01	第4層：灰オリーブ(5Y4/2)細粒砂～細粒砂質シルトからなる整地層で、最上部は土壤化しており、上面で18世紀後半頃の陶磁器を含む土壌が検出された。層厚は20~30cmである。
第4層	第5層：オリーブ黒色(5Y2/2)細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は5cmである。18世紀後半の陶磁器のほか、木片や生活残滓を含む。
第5層	第6層：オリーブ黒色(5Y3/1)極細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は15~20cmである。
第6層	第7層：オリーブ黒色(5Y2/2)極細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は10cmである。
第7層	第8層：シルト偽礫を多く含む、黒色(5Y2/1)細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は40cm以上である。18世紀後半の陶磁器・瓦のほか、木製品や生活残滓を多く含む。

#### ii) 遺構と遺物(図4・5)

第4層上面で長辺0.8m、短辺0.6m、深さ0.5mの土壌SK01が検出され、18世紀後半頃の陶磁器が出土した。第4層上面はSK01のすぐ南西からやや傾斜が強くなっている。このことは当該期の生活空間の西端がSK01近くにあることを示唆するのかも知れない。

調査地から出土した遺物には肥前陶磁器・関西系陶器・瓦などがある。1は肥前磁器青磁型碗である。2は肥前磁器染付蓋である。外面に松竹梅文、内面中央にコンニャク印判で五弁花を施している。

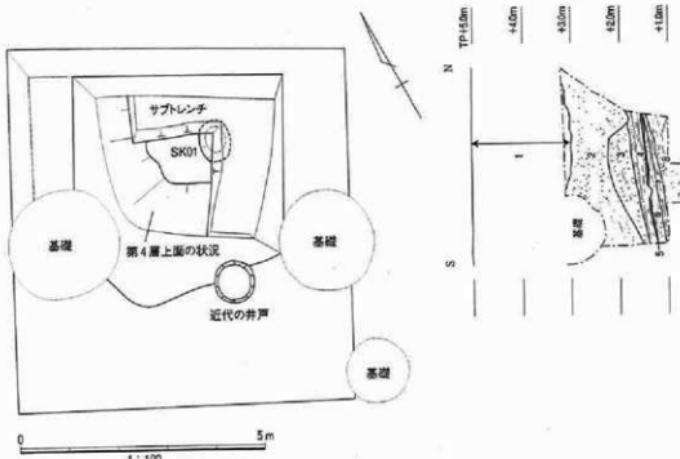


図4 検出遺構平面図および東壁地層断面図

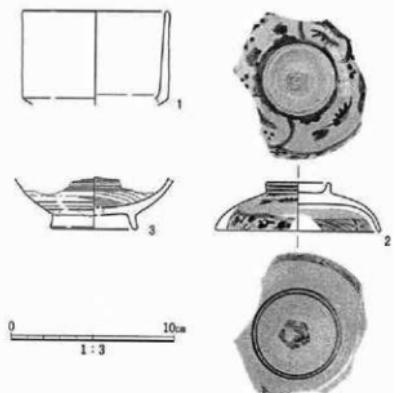


図5 第8層出土遺物実測図

る。3は肥前陶器刷毛目碗である。高台が高く、器壁の薄いものである。いずれも第8層から出土し、18世紀後半に位置づけられる。

### 3)まとめ

調査地は、上町台地西縁の急斜面、現在の松屋町筋に併行する海蝕崖のすぐ東に位置する。また、台地から南西方向に延びる谷斜面にも当っており、今回の調査で、豊臣期以前の旧地表面はかなり深く、現地表下4.3m以上(TP+0.6m以下)にあることが判明した。

調査地全景  
(西から)



東壁地層断面  
(北西から)



SK01検出状況  
(東から)



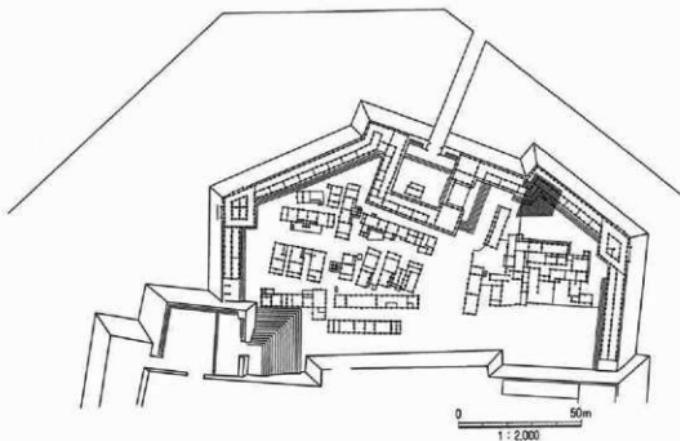


図2 幕末頃の大坂城山里丸建物配置図([松岡利朗1988]をトレース、トーンは今回調査地)

場割之図]によれば、山里丸の丁場の担当は松平筑前守(加賀前田利常)である。

これまで大坂城の山里丸では、石垣の保存修理作業の一環で、平成17・20・21年度に調査が行われている(図1)。今回も徳川氏大坂城築造当時の状況を明らかにし、雁木の修復を含めた今後の史跡整備に際しての資料を得ることを目的に調査を実施した。とりわけ、調査区から東方の雁木の現況は、明治期以前の絵図と大きく異なっており[松岡1988]、その実態の解明に重点を置いた。

調査区は、山里丸東半の北縁部で多間櫓の跡から雁木を含む、南北11~20m、東西13.5mに設定した(図5、以下、多間櫓跡、雁木部分を上段、雁木より下の平坦部を下段と呼ぶ)。下段は現地表面から60cmまでを重機により除去し、それ以下を人力によって掘削した。上段についてはすべて人力で掘削を行った。下段の徳川期の造構面、雁木および多間櫓の礎石の検出状況を空中写真測量によって記録した。また、旧雁木の東方への遺存状況を調べるために、小さなトレンチを2箇所設けた(図6)。現場公開を3月5日に行い、約1,500名の参加者を得た。7日に遺跡調査を終え、埋戻し・撤収作業を11日に完了した。

調査および本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中では、TP+○mと表記する。方位は座標北を基準とした。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序

下段において、現地表面下5mまでの地層を第1~4層に区分した(図3・4)。

第1層：現代盛土層で、層厚は10cmである。

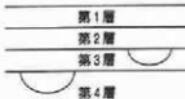


図3 地層と遺構の関係図

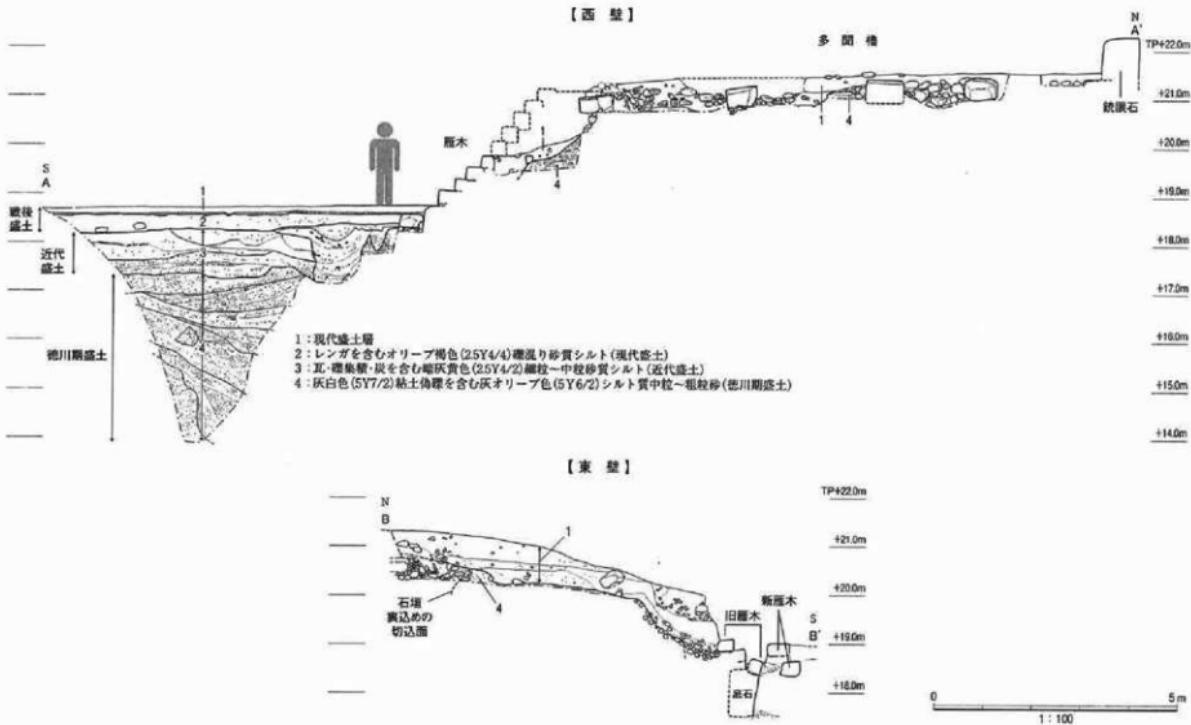


図4 調査区断面図

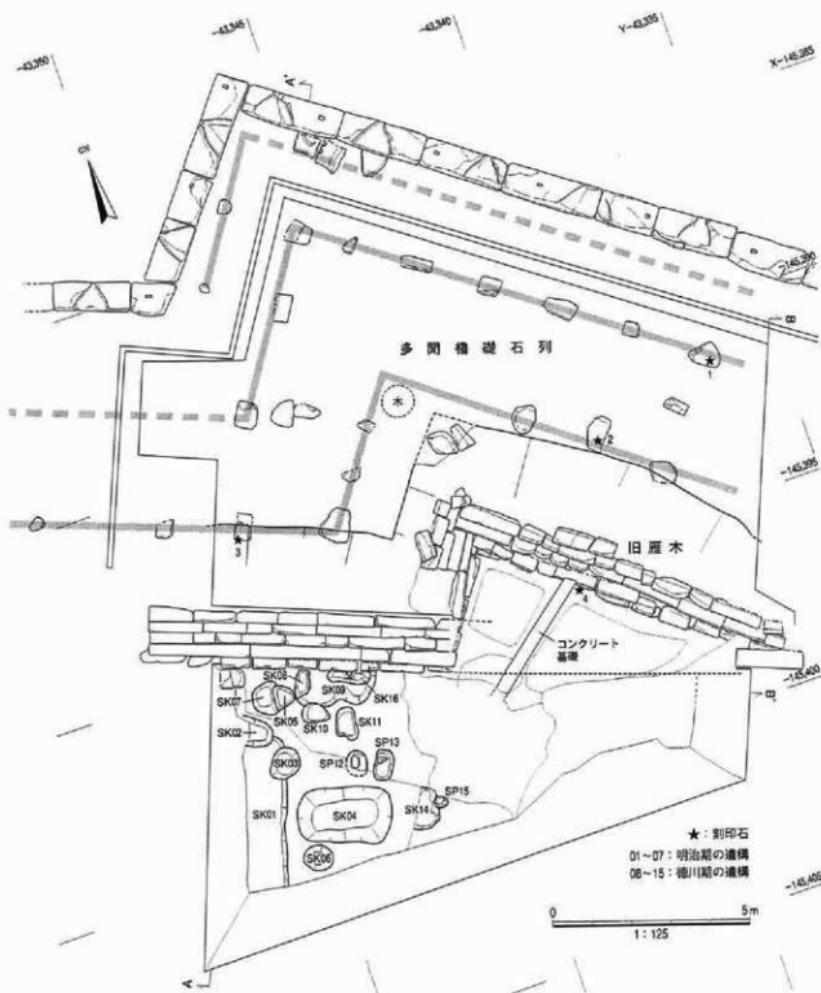


図5 調査区平面図

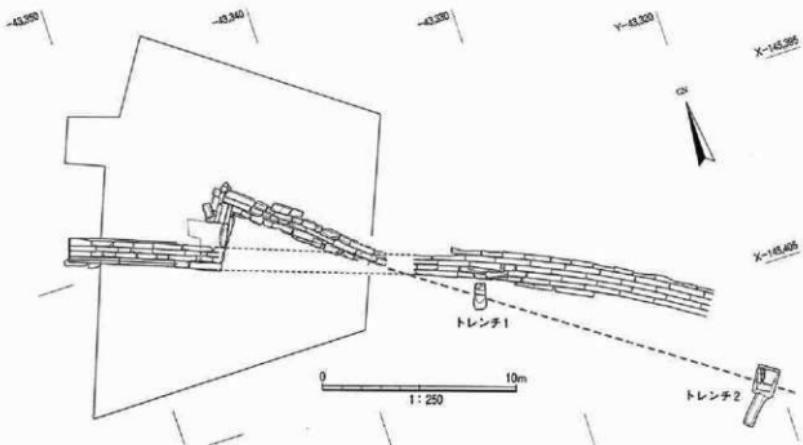


図6 東方トレンチの配置図

第2層：第二次大戦後の盛土層で、層厚は30~40cmである。

第3層：近代の盛土層で、層厚は90cmである。瓦・礫の集積と焼土を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～中粒砂質シルトが互層で堆積しており、1868(明治元)年の戊辰戦争後の戦災処理に伴うものとみられる。第3層上面では、1945年の大阪大空襲の際のものとみられる焼土や煉瓦・コンクリート・瓦片を多く含む土壤や、土管、コンクリート基礎を検出した。

第4層：徳川期山里丸築造の際の盛土層で、灰白色(5Y7/2)粘土偽礫を多く含む灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質中粒～粗粒砂からなる。上面で明治期・徳川期の遺構を検出した。層厚は300cm以上であり、TP+14.0mまで確認した(写真2枚目下)。OS09-10次調査では、TP+15.2mで豊臣後期の地表面を検出しているが、今回の調査区では徳川期の盛土は、TP+16.6m付近から北側に向けて、30度以上の斜度で堆積しており、下位に豊臣期大坂城の堀が存在した可能性がある。

なお、上段では多聞櫓跡・雁木を覆う地層はすべて現代の盛土層であった。

## 2. 遺構および遺物

### i) 徳川期の遺構

上段の現地表面下10~30cmで、礫石20個分および栗石を検出した(図5)。礫石は多聞櫓の東西6間分(約1.5m間隔)、南北2間分(北列約1.5m、南列約2.5m間隔)に当る。調査区全体は焼土混りの黒褐色中粒砂質シルトで覆われており、ここからは焼けた瓦片や19世紀代の陶磁器類・鉄釘などが出土した。これは写真・絵図などから、1868(明治元)年の戊辰戦争の際の火災に伴うものと考えられる。ただし、調査区東端は近代盛土に直接覆われ、その直下に1945年の大阪大空襲によると思われる焼土が

認められた。礎石は長さ40~80cmで、亜円錐、角錐と多様である。小型の礎石は戦中・戦後の鉄筋コンクリート基礎施設や埋設管の敷設、樹木の根による持ち上げにより、原位置から若干動いている可能性もある。

多聞櫓跡より下位を掘削したところ、調査区中央から東で、築造当初の雁木(以下、これを「旧雁木」、再設置されたものを「新雁木」と呼ぶ)、栗石および基底石を検出した。旧雁木は一番残りのよい個所で4段分あったが、東半分の2段目がずれ落ち、基底石が迫り出すなど全体に崩壊が著しく、割れ、欠けの損傷も顕著であった(写真2枚目上)。雁木の石は高さ(約25cm)、踏幅(30cm弱)は新雁木のものとはほぼ同じであるが、長さは一番長いものでも150cmと全体に小型である。なかでも小型の雁木が多い中央部では、雁木と裏込め石の間に近代の黒褐色土が一部入り込んでおり、基底石以外は徳川期当初の状態ではなく、積み直された可能性が高い。裏込め石に残る雁木の跡や、多聞櫓の礎石の高さとの関係から、本来は9段であったと復元できる。裏込めの栗石は、20~30cm大の川原石を主とし、2ないし3重に設置されていた。調査区西部では栗石中から一石五輪塔13が出土した(図8)。基底石は調査区全体で20個分検出した。高さ60~90cm、幅40~110cm、奥行70cmで、大きさにばらつきがあるが、高さは栗石の量によって調整されている。地面に隠れる下端部は未加工なものが多い。調査区の東方6mと21mに2箇所のトレーニングをもうけ、基底石は連続して地中に保存されていることを確認した(写真3枚目)。

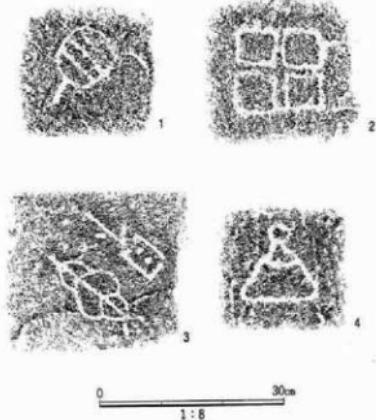


図7 刻印拓影

なお、調査地では4箇所(多聞櫓礎石3箇所、雁木の基底石1箇所)で刻印石が検出された(図7)。1は越前福井松平の丁場に多く、2はいわゆる「四つ目結」(若狭京極)、3は「柏」(土佐山内)、4は「扇」(加賀前田)である[村川2002]。2・3は丁場と直接関係なく、元和元(1620)年に始まる一期工事の残石利用の可能性がある。

下段では、東半分は戦後以降の大きな搅乱で遺構面は削平されていたが、西半分では、18世紀前半の磁器を含むSK09など、8基の土壙、柱穴を検出した。このうち、SP12・13・15には礎石が認められたが、建物を復元することはできなかった。これらの遺構の規模、特徴は表1のとおりである。

## ii) 明治期以降の遺構

調査前から存在した現在の雁木は、旧雁木を埋めて、再設置したものである。裏込め石はなく、レンガやガラスを含む近代の土で充填されていた。基底石を設げず、45cmと幅広の雁木を一段目に

表1 遺構の規模と特徴

遺構記号	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	時期	特徴
SK01	3.95+	1.05+	0.19	明治期	埋土に炭混じる、瀬戸美濃磁器含む
SK02	0.78	0.60+	0.27	明治期	埋土に炭混じる、焼けた丸瓦含む
SK03	0.82	0.71	0.11	明治期	埋土に炭混じる
SK04	2.42	1.42	0.72	明治期	埋土に炭混じる
SK05	0.60	0.65	0.30	明治期	埋土に炭混じる
SK06	0.74	0.65	0.15	明治期	埋土に炭混じる、19世紀代京焼風陶器含む
SK07	0.87	0.54+	0.44	明治期	埋土に炭混じる、19世紀代培洛含む
SK08	0.80	0.40	0.35	徳川期	17世紀後半代肥前系磁器含む
SK09	2.40	1.33	0.57	徳川期	第文瓦、18世紀前半代肥前系磁器含む
SK10	0.70	0.48	0.17	徳川期	18世紀後半代肥前系磁器含む
SK11	0.82	0.50	0.45	徳川期	18世紀前半代肥前系磁器含む
SP12	0.65	0.58	0.39	徳川期	礎石あり、18世紀前半代肥前系磁器含む
SP13	0.78	0.45	0.51	徳川期	礎石あり、18世紀前半代肥前系磁器含む
SK14	1.08	0.68+	0.16	徳川期	平瓦(溶融)含む
SP15	0.35	0.28	0.10	徳川期	礎石あり
SK16	1.14	0.40+	0.30	徳川期	丸瓦含む

註:「数字+」は、その数字より大きいことを示す

使っており、全体に簡単な作りであった。新雁木は昭和20年以前にこの地にあった陸軍に関係すると思われるコンクリート建物基礎の上に築かれており、設置の時期は昭和33・34年に実施された大規模な石垣修復の際である可能性が高い[大阪市2003]。また、西側の雁木についても、同様に本来の裏込めを切り込み、土と栗石を乱雑に充填して積み直されており、調査前の雁木全体が同時期に積み替えられていることが判明した。調査区東端の削平が大きく、以東の銅眼石が昭和33・34年の石垣修復の際に新調されていることを考え合わせると、今回の調査区以東(麥槽を含む)の形状変更は、大きな損壊(大阪大空襲によるか)に対応したものと考えられる。

下段では、戊辰戦争(1868年)の戦災処理と考えられる土壙(SK01~07)を検出した。いずれも下部に炭を多く含み、SK01~04では焼瓦、礎の集積が顕著であった。

その他、旧雁木に接して検出された鉄筋コンクリート基礎は、陸軍関係の建物と思われる。この建物の廃棄後、基礎の東西にゴミ廃棄土壙が検出され、中からは茶碗・インク瓶・化粧瓶・歯ブラシなど多量の日常生活品が出土した。これらはこの地にあった陸軍宿営施設で用いられたものと考えられる。

### Ⅲ) 出土遺物

豊臣期以前の遺物は、第4層から肥前陶器、備前窯の小片が出土したのみで、そのほかは徳川期以降のものである。図示した瓦はすべて多聞跡から出土した。5は肥前窯器の輪花皿である。型打ちされており、18世紀前半に属する。6は瀬戸美濃磁器の端反碗の底部である。19世紀に属する。7は

鳥文瓦で、左巻き三巴文、復元珠文数は16個である。8は唐草文軒平瓦、9・10は菊丸瓦で、前者は32弁、後者は16弁の二重菊文である。11は棟込瓦である。これらの寛永期の創建瓦と思われる。9・11は火を受けた跡が明瞭である。12は軒丸瓦で、左巻き三巴文、珠文数は16個である。19世紀に属し、檜再建時のものと考えられる。13は一石五輪塔で、空輪、風輪、火輪を残す。表面の残存状況が悪く、梵字の形態、有無について判別できない。

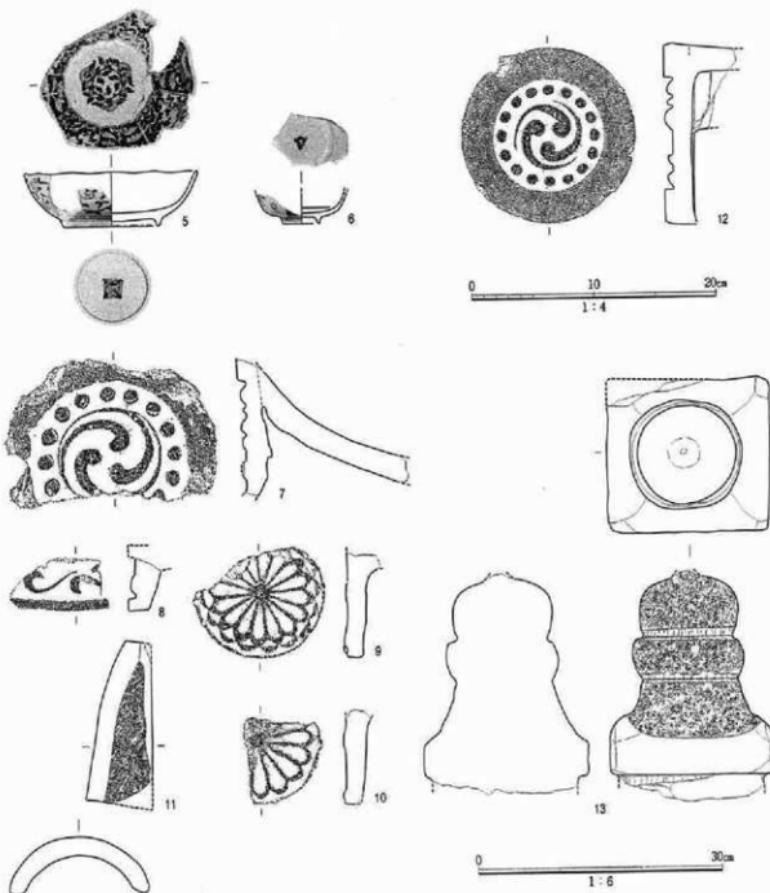


図8 出土遺物実測図  
SK09(5)、SK01(6)、多間椎跡(7~13)

### 〈まとめ〉

調査前から古い絵図に描かれた徳川期当初の雁木について、何らかの痕跡が確認できるものと期待されていたが、その全体が良好に保存されていたことは予想外であった。また、その東方、菱櫓までの基底石についても、地中に保存されていることが判明し、新たに検出された多間櫓の礎石列と合わせ、今後の復元に重要な成果が得ることができた。

### 参考文献

- 大阪市2003、「特別史跡大坂城跡石垣調査 報告書」
- 大阪市建設局2000、「特別史跡 大坂城跡石垣修復工事施工報告書(桜門石垣修復工事 山里曲輪石垣修復工事)」
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「平成20年度特別史跡大坂城跡整備事業に伴う大坂城跡発掘調査(OS08-13)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」(2008)、pp.249-256
- 大阪市文化財協会2010、「平成21年度特別史跡大坂城跡整備事業に伴う大坂城跡発掘調査(OS09-10)報告書」
- 新修大阪市史編纂委員会1989、「新修 大阪市史」第3巻
- 松岡利朗1988、「大坂城の歴史と構造」、名著出版
- 村川行広2002、「大坂城の謎」学生社

調査当初の状況  
(南から)



新旧雁木検出状況  
(南から)



軍関係建物基礎  
検出状況  
(南から)



調査区全景



多聞櫓基礎検出状況  
(東から)



盛土状況  
(東から)



旧雁木の方向  
(西から)



雁木基底石検出状況  
(トレンチ1、南から)



雁木基底石検出状況  
(トレンチ2、南から)



中央区松屋町における建設工事に伴う  
大坂城跡発掘調査(OS10-13)報告書

調査個所 大阪市中央区松屋町49-2  
調査面積 60m<sup>2</sup>  
調査期間 平成23年2月15日～2月19日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、趙哲済

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の西縁に沿って南北に走る松屋町筋の西に面し、長堀通の南120m、東横堀川の東60mの沖積面に位置する。豊臣期には大坂城惣構の西南隅付近に当っていた(図1)。周辺ではこれまでいくつかの調査が行われている。調査地の北西150mを中心とする街区では、住友銅吹所跡が発掘され、徳川期に日本で最大規模を誇った銅精錬所の実像に迫る成果を上げている[大阪市文化財協会1998]。一方、上町台地の西斜面では、調査地の南東260mのWR08-1次調査地で、瓦や瓦缶、窯道具などの徳川期の瓦生産に係わると推定される多くの遺物が出土した[大阪市文化財協会2009]。

当該地で大阪市教育委員会によって行われた試掘調査では、地表下3.2m以深で豊臣期と考えられる客土が検出された。そこで、豊臣期の地層や下位層の状況と、遺構および遺物の有無を明らかにして、この地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的として、本調査を実施することになった。

調査区は作業高台の下に当初10m × 6 mの範囲に設定する予定であったが、高台の支柱が支障となつたため、面積を変えずに形状を12m × 5 mに変更して設定した(図2)。

本体工事により地表下3.2mまでの計画で重機掘削された後、2月15日から人力による掘下げ調査に入った。遺構検出、検出状況の写真撮影、遺構の掘下げ、掘下げ後の遺構写真撮影、調査区の平面図・断面図の作成、遺構断面の写真撮影・遺構断面図の作成などを順次行い、2月19日に発掘作業を終了



図1 調査位置図



図2 調査区位置図

した。

本書で用いた方位は座標北を基準としている。また、水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、 $TP \pm 0m$ と略記する。

## 2) 調査の結果

### i) 層序

調査地の標高は、東の松屋町筋沿いでTP4.5~4.7m、西の道路沿いで3.5~3.8mあり、東西で約1mの標高差がある。現代盛土・擾乱層の重機掘削は事業者側で実施され、東側で地表下3.2m、西側で2.5mまで掘削されていた。精査すると、調査区の範囲では豊臣期よりはるかに古い自然堆積層(後述の第6層以下)しか残っていないことが明らかとなった。幸い、重機掘削が及ばなかった調査区外の南北2箇所で、豊臣期の遺物包含層や弥生~古墳時代の遺構を確認できたので、両地点で観察した地層も含めて記述することにする。以下、上位から下位へ、第1・2層は調査区外南地点で、第3層は調査区外南北両地点で、第4~5層は調査区外北地点で、第6~11層は調査区内でそれぞれ観察した地層である(図3・4・5)。

第1層は上下2層に区分できる。第1層上部は暗黃灰色シルト質粗粒~中粒砂ないし砂質シルト層で、層厚は13cm以上であった。作土層とみられる。第1層下部は灰黃色シルト質砂層であった。層厚は7cmであった。作土層か整地層とみられる。

第2層は河川成の細礫質粗粒~中粒砂層で層厚は65cmであった。下半部は灰色や黄色の泥偽礫を含み、幅数10cm・深さ10cm前後のトラフ型斜交葉理・層理が発達する。古流向は東から西である。上半部は上方細粒化するとともにシルト薄層を不規則に挟む砂泥互層となる。下半部から瓦、土師器などの豊臣期の遺物が出土した。上面で土壤を検出した。土壤は幅0.60m、深さ0.45mで、灰色粘土偽礫を含む極粗粒~粗粒砂で埋まっていた。豊臣期とみられる土師器や瓦片が出土した。

第3層は調査区外南地点では土石流とこれを覆う植物遺体層、および土石流再堆積層からなる。土

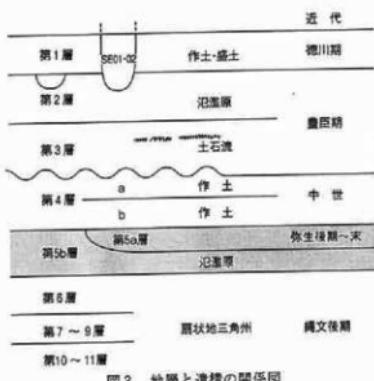


図3 地層と遺構の関係図

石流は基質支持であり、粘土偽礫とシルト質粗粒砂からなる。層厚は65cm以上で下限は未確認である。植物遺体層は土石流上面の幅約2m・深さ0.2mの溝状凹地(チャネル)に堆積した層厚2~5cmの砂質の薄層である。土石流再堆積層は直下のチャネルを埋める灰色粘土偽礫とシルト質粗粒砂からなり、最大層厚は20cmであった。偽礫は下部に多く含まれ、砂には東から西への流下を示す斜交葉理が認められる。調査区外北地点の第3層は、下部に径15cm程度の暗灰~灰色シルト偽礫が密に分布し、上部はわずかに細礫質粗粒~粗粒砂の不規則な葉理が認められる。

層厚は30cm以上であった。須恵器片が出土した。

第4層は2枚に分けられた。上部の第4a層は暗灰色砂質シルトからなる作土層で、4~14cmの層厚で3枚に区分できる。最下層はやや粗粒砂が多い。下部の第4b層は暗灰色砂質シルトからなる作土層で、27~28cmの層厚で2枚に区分できる。下限には耕作時の加工痕とみられる凹凸が認められた。土師器や瓦の破片が出土した。

第5層は2枚に分けられた。上部の5a層は土壤(後述)の埋土である。下部の第5b層は黒色腐植質シルトからなる古土壤で、層厚は7cmであった。

第6層は灰色わずかに細礫混り中粒~細粒砂層である。下部1/3はややシルト質であり、材片のラミナを挟んでいた。層厚は最大45cmであった。

第7層はやや暗い灰色の上方細粒化するシルト質粗粒~細粒砂ないし砂質シルト層である。最大層厚は15cmであった。根痕による擾乱が顕著に認められた。

第8層は灰色のわずかに細礫混りシルト質粗粒~細粒砂層であり、層厚は最大12cmであった。上半部が極淡く暗色を帯びていた。

第9層は灰色のわずかに中礫混り極粗粒~粗粒砂層である。最大層厚は60cmであった。幅20~70cm、深さ10cm以下で東北東から西南西へ流れたトラフ型斜交葉理が、南南東へ押しあがるように累重した。

第10層は上方細粒化する灰色細粒砂~細粒砂質シルト層であり、下半部に生物擾乱が顕著に認められた。材を含んでいた。最下部には層厚2cm以下で連続のよい暗褐色シルト薄層を伴っていた。この薄層の下限で下位層と区分したが、薄層が尖滅した東壁付近では曖昧である。

第11層は上方細粒化する粗粒~中粒砂ないし細粒砂層であり、層厚は60cm以上であった。下部で幅100cm前後、深さ10cm前後、上部で幅30~60cmで深さ7cm以下のトラフ型斜交葉理が発達した。古流向は東北東から西南西である。中粒中礫サイズの粘土偽礫を極少量含んでいた。

## ii) 遺構と遺物

### a. 弥生時代末~古墳時代初頭頃の遺構

調査区外北地点の第5b層上面で土壤の一部を検出した。長径は1m以上、深さは0.1m以上あるが、重機掘削により削られたために全容は不明である。埋土は黒褐色砂質シルトである。素焼きの土器片が少量出土したが、その中に生駒西麓産の胎土で、タクキメらしい痕跡のある土器片があり、弥生時代後期の土器と思われる。

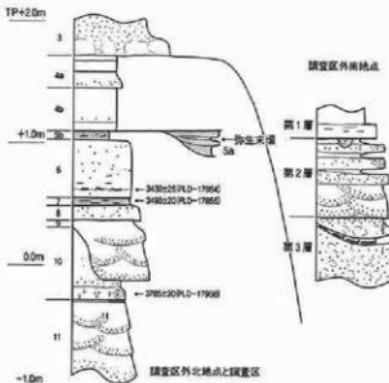


図4 模式柱状図

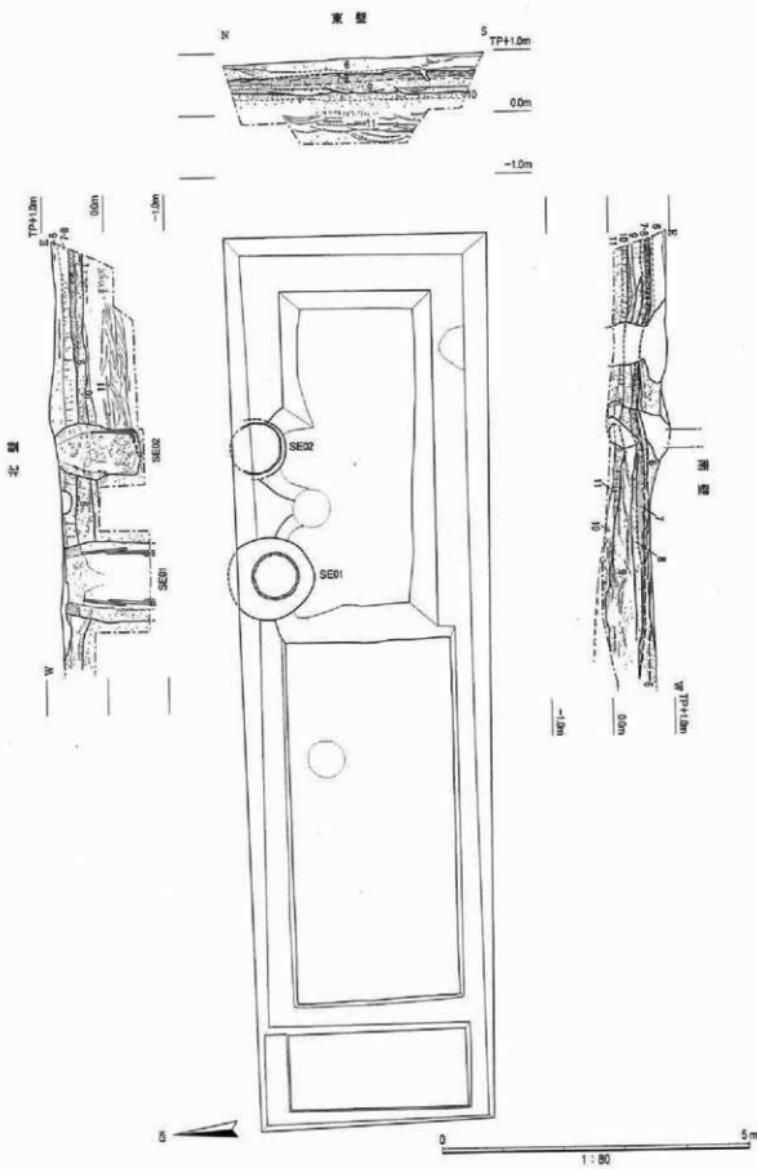


図5 遺構平面図・地層断面図

### b. 近世後期～近代の遺構

調査区の現代盛土・擾乱層の基底面で、江戸時代後期～近代の井戸2基を検出した(図5)。

西側のSE01は、掘形内に井戸瓦と組板の井戸側のある井戸である。掘形の直径は1.3mで、掘形埋土は分級の悪い砂である。井戸側の直径は検出した井戸瓦上端で0.8m、井戸側内埋土は分級の悪い疊質砂である。

井戸側の上部構造である井戸瓦は、縦25.5cm、横25.5cm、最大幅4.5cmの規格品を使用し、1周に10枚使用されていた。井戸側内埋土には同規格の瓦のほか完成品が18枚、割れた破片が24片埋もれていたので、これらすべてが井戸側に使用されていたとすると、40枚以上の瓦が使用されていた勘定になる。したがって、瓦は4周以上あり、高さは検出面より少なくとも77cm以上高かったことになる。

井戸側下部構造の組板としたものは、底のない桶を逆さに3段以上重ねたものであり、1段目が長さ66cm、2段目が長さ82cmで、幅16～18cm、厚さ3cmの板材14枚をそれぞれ竹の籠で縛っている。ただし、板材内面に桶の底が作られた痕跡はない。桶作りの技法を用いて、もともと底のない桶状の組板を井戸側としたものと考えられる。

井戸瓦と組板を積み上げると、深さは3.3m以上になる。掘形埋土からは土師器焼物や肥前磁器などの近世後半の遺物が含まれ、井戸側内の埋土からは関西系陶器や備前磁器などの近世末の遺物のほか、煉瓦、磚子などの近代遺物が含まれる。煉瓦は一面に薬掛けされたいわゆる鼻黒煉瓦で「Mark」の刻印があり、明治後半～大正期に普及したものである。堅固な建物の腰壁に用いられたり、耐火煉瓦として用いられたりした可能性がある。以上のことから、SE01は近世末か近代初頭に掘られ、近代のある時期に埋め立てられたものと推定される。

東側のSE02は、掘形内に組板の井戸側が作られた井戸である。掘形の直径は0.8mで、掘形埋土は分級の悪い砂である。井戸側の直径は検出した井戸瓦上端で0.7m弱、井戸側内埋土は粘土偽疊主體で基質が分級の悪い砂である。井戸側の組板はSE01のものと同様で、長さ80cm、幅15～17cm、厚さ2cmの板が17枚程度組合わされた桶状の側である。また、基底には疊敷があり、疊の多くは長径4～6cmで棒状～円板状円疊であった。

### 3) 堆積環境の変遷について

第6・7・10層の3層準から採取した材を用いて、放射炭素測定を実施したところ、いずれの層準も縄文時代後期の年代を示した。また、珪藻分析では、検出数が統計処理に有効な数に達していないものの海産種が少なからずカウントされている(図4、註1)。堆積相をみると、第11～10層は比較的分級がよく、台地側からの流れが相対的に大きなトラフ型斜交葉理を構成しつつ海側に前進して累重している。第9～7層の分級は悪く、下位を浅く削削して相対的に小さなトラフ型斜交葉理を構成しつつ南西側にシフトして累重している。その後、安定した緩斜面を構成している。その緩斜面上を第6層はシート状に広がって、上方に累重している。これらの状況からみて、第11～6層は台地から海に直接流入した河川が扇状地三角州を構成していると推定される。形成時期は縄文時代後期である。第11～10層は沈水域のデルタフロント、第9～7層は河川が流れるデルタ面、第6層はデルタ面上の

局地的なロープ状堆積層と推定される。第6層の堆積で完全に離水した地面では土壌(第5b層)が生成されはじめ、弥生時代後期になって、氾濫性の第5a層が土壌に堆積したものと考えられる。

古墳時代～古代のようすはよくわからないが、堆積量がさほど多くなく、住友銅吹所の地下地質[大阪市文化財協会1998]からみて、比較的安定していたのではないかと考えられる。

第4層は作土層とみられることから、中世の当該地は耕地であったと思われる。

第3～2層は、出土遺物から豊臣期に属すると考えられる。当該地の東の台地上にある瓦屋町遺跡では、地すべりによる斜面崩壊が起きている。その時期は定かではなく、16世紀末か17世紀後半～18世紀初頭と考えられている。この斜面崩壊の末端部分が当該地の付近に推定できる[大阪市文化財協会2009]。したがって、第3層の土石流は斜面崩壊の押し出しによって発生した可能性が指摘ができる。そうなると、発生年代は16世紀末で、誘発原因は1596年の慶長伏見地震の可能性が高いということになる。

第2層は土石流に引き続いて間欠的に堆積した氾濫堆積層であろう。下位層とは整合があるので、堆積年代は引き続く徳川初期と推定する。

#### 4)まとめ

上町台地西側の沖積平野にある調査地において、弥生時代末頃の遺構を確認した。また、当該地が縄文時代後期に扇状地三角州であり、弥生時代後期までに離水して人間活動が始まり、中世に耕地となり、豊臣期に地すべりに伴う土石流が発生し、徳川期に氾濫原となっていた過程を推定した。このように、当該地は上町台地と西側平野の歴史的変遷を考える上で情報豊かな地域であることが明らかとなった。今後の調査が注目される。

#### (註)

- 1) 平成22年度科学技術研究補助金「上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－」の一部を使用した自然科学分析結果による。

#### 文献

- 大阪市文化財協会1998、「大阪市中央区住友銅吹所跡発掘調査報告」、680ps.  
大阪市文化財協会2009、「大阪市中央区瓦屋町遺跡発掘調査報告」、70ps.

調査区近景  
(南東から)



調査区全景  
(東から)



SE01(井戸瓦除去後、南から)



SE02(南から)

調査区東側地層断面  
(西から)



調査区外北地点地層断面  
(南西から)



調査区外南地点地層断面  
(北西から)



西区土佐堀一丁目における建設工事に伴う  
土佐堀1丁目所在遺跡発掘調査(TL10-1)報告書

調査個所 大阪市西区土佐堀1丁目12-10  
調査面積 60m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年9月13日～9月18日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、清水和明

### 1) 調査に至る経緯と経過

本遺跡は中之島と土佐堀川を挟んだ南側に当り、西は「常安橋」につながる常安橋筋(現なにわ筋)に、南は土佐堀通に画された土佐堀一丁目的一角に位置する(図1)。中之島を挟む堂島川および土佐堀川の沿岸には、江戸時代の各藩が蔵屋敷を置き、領内各種産物の貯蔵、販売や物資・資金の調達などを行った。当該地は、1691(元禄4)年『新撰増補大坂大絵図』など江戸時代の絵図には長州萩藩の蔵屋敷として記されている。ただし、これらの大雑把な大坂図では、常安橋筋に面した敷地西側の境界は南北を直線で表現しており、詳細な地割が反映されていない。そのため、本遺跡の調査地点と萩藩蔵屋敷との関係を議論するには、より詳細な検討が必要となる。森下徹氏の研究によれば、大阪に4箇所存在した萩藩蔵屋敷のうち本遺跡と重なる本屋敷の敷地は、1660(万治3)年に初めて設置されて以降、江戸時代を通じて順次買添えにより拡大し続けたという[森下徹2001]。また、最終的に最も拡大した1770(明和7)年時点でも、敷地西南部は常安橋筋から大きく東側に凹んでいる(図10)。これまでに本屋敷内においてはHA00-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]、TL09-1次調査[大阪市文化財協会2009]が行われ、今回が3件目となるが、それぞれで確認された遺構については、その位置と年代から萩藩蔵屋敷との関係を論ずる必要があり、最後に触れることとする。

調査地は2010年4月19日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、現地表面下約220cmで近世とみられる整地層が見つかった。そのため、9月13日から開始した本調査では、整地層の上位までを重機で掘削し、整地層上面で近世の遺構を検出し、図面・写真などを記録した。またその下位で近世の地層を2層準確認したが、湧水のため十分な遺構検出は行えず、9月18日に現地における作業を終了した。

以下、本書に使用した方位は、図1が座標北、ほかは磁北を基準としている。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用い、TP±○mと表記した。



図1 調査地位置図

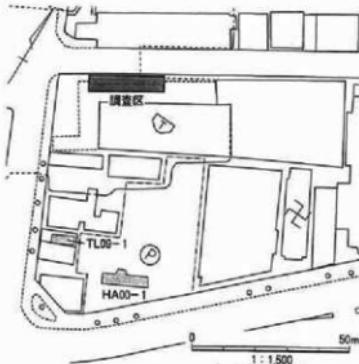


図2 調査区位置図

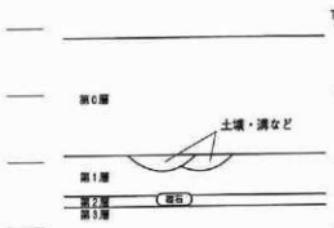


図3 地層と遺構の関係図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図5)

第0層：コンクリート片・鉄管などを多く含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒砂層で、近現代の整地層である。層厚は180～220cm程度で、調査区全体に堆積している。

第1層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒～粗粒砂層で、細～中礫を多く含む。層厚は80cm程度の近世の整地層である。上面で近代～近世の擾乱や遺構が検出された。

第2層：にじみ褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂層で、層厚10cm以下の近世の整地層である。

第3層：暗オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質中粒砂層で、焼土・炭の偽礫を多く含む。上面を確認したのみで、層厚は不明である。

### ii) 遺構と遺物

確認できた最も下位の第3層では、遺物は出土しなかった。その上位の第2層から出土した遺物には肥前磁器染付鉢6、輪花皿7・8、備前焼擂鉢5、中国製青花皿9などがあり(図8)、擂鉢5が17世紀後半に降る資料とみられることから、第2層の年代をおおよそその頃に求められよう。従って、第3層はそれ以前の年代が考えられる。焼土・炭の偽礫を多く含むことから、火災などの罹災後の片付けによる整地層の可能性があるが、調査した範囲ではそれ以上の詳細は不明である。

第2層では調査区中央より東側の3箇所で礎石とみられる板石を確認した(図4)。掘形ではなく、整地する過程で石を据えているものと考えられる。うち2箇所はほぼ南北に並んでいるため、建物など組合う柱の礎石である可能性もある。第2層の年代から、17世紀後半頃の遺構となろう。

第1層からは出土した遺物は少量であるが、肥前磁器染付碗11や肥前陶器刷毛目碗14がある。18世紀初頭頃のものであろう。

第1層上面で多数の遺構を検出した。調査区東端付近で南北に延びる石組暗渠が埋設されていたは

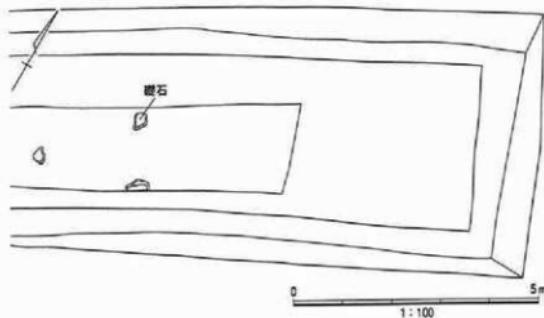
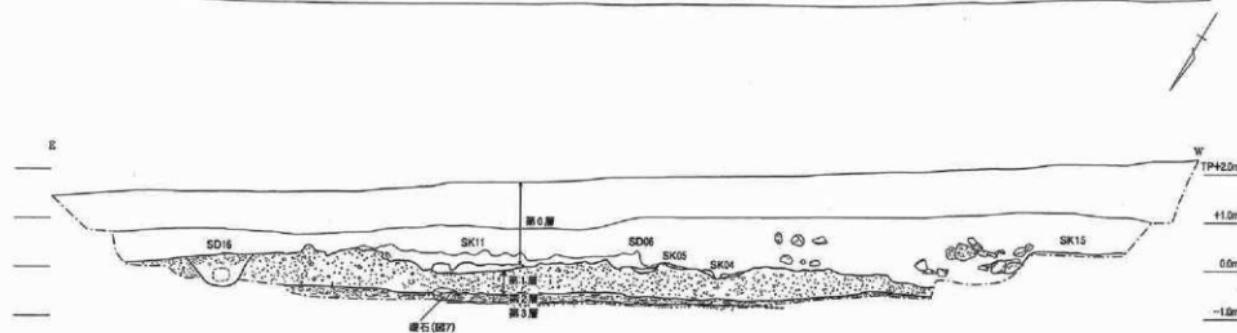
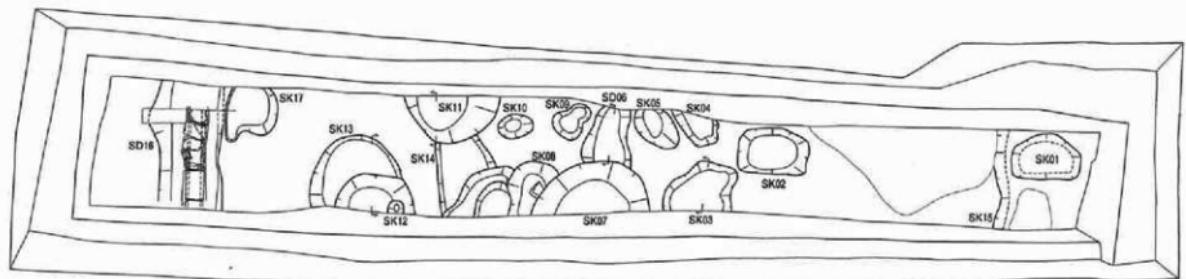


図4 第2層内の礎石出土位置図



第0層：オリーブ褐色 (25Y4/3) 施工粒砂 (鉄管・コンクリート片などを含む近現代壁層)  
 第1層：オリーブ褐色 (25Y4/4) 中粒～粗粒砂で、細～中粒を多く含む  
 第2層：にじみ褐色 (10YR5/4) シルト質細粒砂  
 第3層：暗オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト質中粒砂で、焼土、灰の偽層を多く含む

0 1 : 100 5m

図5 第1層上面の造構平面図および南壁地層断面図

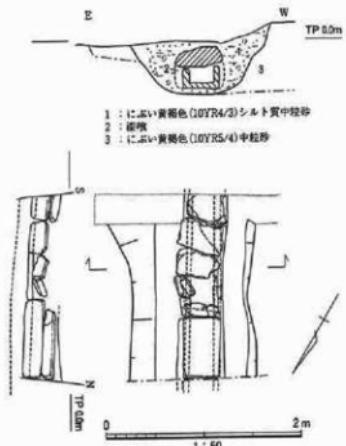


図6 SD16(暗渠)平面・立面図

一方、その他の遺構には19世紀代に降るものが多い。SK03・07・08・11からは19世紀初頭の肥前磁器染付碗や瀬戸美濃焼磁器皿、碗、飛びカンナで飾った関西系陶器土瓶などが出土している(SK08: 図8-12)。これらの遺構はいずれも浅く(図7)、本来の生活面はより上位にあったものとみられる。周囲にある同様の遺構も同時期に降るものであろう。これらはゴミ捨て用の土壌と考えられる。

### 3) 萩藩蔵屋敷との係わり

冒頭に述べたとおり、以上の遺構の性格を考えるには、萩藩蔵屋敷との関係を踏まえる必要がある。[森下2001]によれば、1660(万治3)年の購入から始まる萩藩の上方本屋敷は、1770(明和7)年に

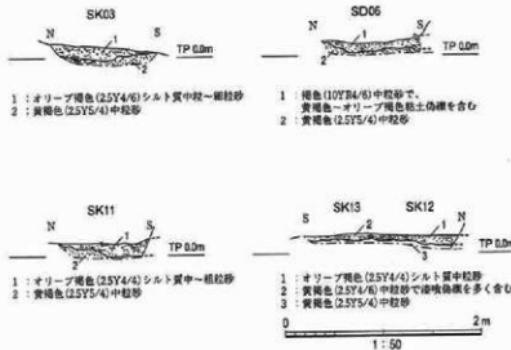


図7 そのほかの第1層上面の遺構

か、その西側には大小の土壌が認められた(図5)。暗渠(SD16)は、内幅0.25mの断面「凹」字型に割り抜いた砂砾岩を直列して溝を作り、板状の石材ないし割石を蓋石に、石と石の隙間に漆喰を分厚く目張りしたものである(図6)。北に向かってわずかに低くなっている。掘形の埋土から17世紀前半の肥前陶器碗13が出土したが、第1層が18世紀初頭のため、SD16の設置時期はそれ以降である。溝内から出土した肥前磁器染付仏具10が18世紀前半のものであり、設置時期はそれを大きく過らないであろう。13は遺構の時期を示すものではないが、今回の調査では年代の古い資料であり、当該地の開発を考える際の参考になる。また、SK17から18世紀中葉の肥前磁器染付碗が出土しており、SD16と近い時期と考えられる。

至るまで、おもに当初敷地の西側と南側へ拡張を続けたといふ(図9)。それによれば、西部が追加されたのは1770年ということになる。また、西北および南に飛び地があることもわかる。西北部は土佐堀通を隔て土佐堀川に北面する長さ約14間の浜地の一画にあたり、19世紀半ばの毛利家文庫絵図には「土佐堀通御貸家」と記されている。南部は江戸

堀通を隔て江戸堀川に南面する長さ約36間半の浜地の一画となり、やはり貸家に利用されていたと想定されている。また、西部には蔵屋敷の本体と地続きであるが、常安橋通に面した南北約32間を渡柵で囲って「西横町御貸家」としていたことが同じ繪図に記されており、このような蔵屋敷の本体部分を囲む北・南・西側を貸家にあてていたと考えられている。

このような森下氏の研究による各敷地の位置関係から、18世紀末に近い頃の蔵屋敷の範囲はおおよそ図10のようく想定される。調査区は1770年購入地の西北部に含まれるとみてよいだろう。したがつて、調査区で確認された遺構のうち、18世紀末以前のものは、萩藩購入以前の所有者によるということになる。第1層以前の礎石や整地、第1層上面で見つかったSD16(石組暗渠)やSK17などが該当す

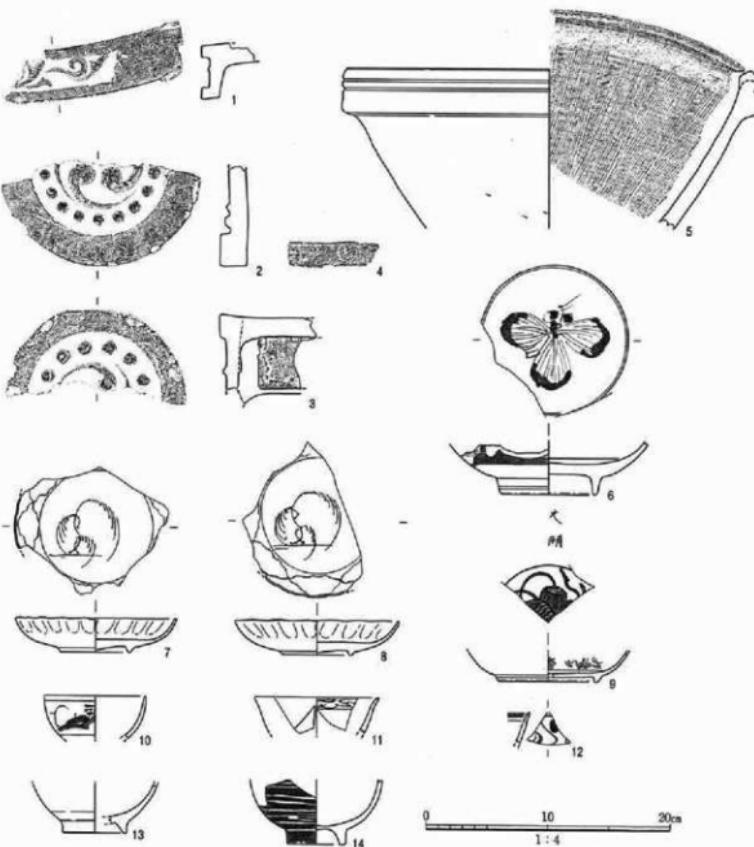


図8 出土遺物実測図

SK03(1)、SK08(12)、SK15(2~4)、SD16(掘形:13、溝埋土:10)、第1層(11·14)、第2層(5~9)

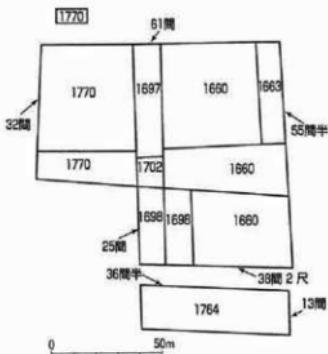


図9 蔵屋敷の拡大経緯

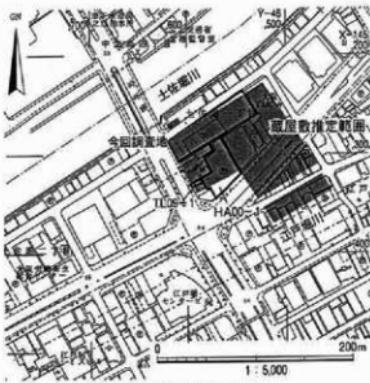


図10 蔵屋敷の推定範囲

る。一方、第1層上面の遺構でも19世紀に降るものについては、萩藩購入後の遺構とみられる。先の森下氏の研究によれば、19世紀半ばの絵図ではこの付近は土佐堀通に面した蔵が東西に並ぶ一画に該当する。調査では当該期の建物に係わる遺構を確認できておらず、ゴミ捨て用とみられる土壙や小穴群は建物外に掘られたものである可能性が考えられる。

近隣の従来の調査成果をみると、HA00-1次調査地で見つかった東西の石垣には18世紀前半と後半の新古2段階があり、新しい方が萩藩による築造と想定している。この場所は図10で推定した屋敷地の南辺に近く、蔵屋敷地の内外を画していたもの可能性がある。TL09-1次調査地では萩藩の時期に該当する顕著な遺構はなく、おもに17世紀後半～18世紀以前であることから、萩藩以前の所有者に帰属するものであろう。1770年に萩藩が購入した2筆の所有者は、藩の御用達銀主筆頭の上田三郎左衛門であり、これらの遺構は上田屋によるものであった可能性がある。

#### 4)まとめ

18世紀末頃に萩藩蔵屋敷に編入された敷地の一画で発掘調査を行い、17世紀後半～19世紀の遺構・遺物を確認した。18世紀中葉以前の遺構は蔵屋敷編入以前のものと考えられる。19世紀に降る土壙などの遺構群は蔵屋敷に関係するものとみられ、江戸時代の毛利家文庫絵図にある土蔵群との関係は明らかにできなかったが、萩藩本屋敷の具体的な構造解明に寄与する資料となった。

#### 引用・参考文献

- 大阪市文化財協会・大阪市文化財協会2002、「株式会社日商エスティムによる建設工事に伴う萩藩蔵屋敷発掘調査 (HA00-1)報告書」：『平成12年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪市文化財協会2009、「西区土佐堀一丁目における建設工事に伴う土佐堀1丁目所在遺跡発掘調査 (TL09-1)報告書」
- 森下 徹2001、「萩藩蔵屋敷と大阪市中」：塙田孝・吉田伸之編『近世大阪の都市空間と社会構造』 山川出版社、pp.66

第1層上面の遺構  
(東から)



第2層上面検出状況  
(中央部分のみ  
東から)



調査区南壁地層断面および  
第2層上面の礎石出土状況  
(北から)



難波京朱雀大路跡発掘調査(NS10-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区筆ヶ崎町64-1・65-1・65-2・65-5  
調査面積 42m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年4月13日～平成22年4月15日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、高橋工

## 1) 調査に至る経緯と経過

難波京朱雀大路は、難波京城で宮の中軸線上に敷設されたと想定されている古代の道路である。宮の中軸線に合致する現行の道路や、1886年の『大阪実測図』から読み取れる条坊状の土地区画から京の中心大路が存在したとする考え方にはまだ支配的である[岸俊男1970]。上町台地の南北軸は北でやや東に振るため、大路推定線は徐々に台地の東縁辺部を通るようになる。今回の調査地はまさにそうした地形環境下にあって、台地の東斜面で、西へ入り込む五谷谷の北側に当る(図1)。周辺における既往の調査は多く、細工谷に面する筆ヶ崎突出部の南側では、飛鳥～奈良時代の建物群や「百済尼寺」に関する墨書き土器、和同開珎の枝鏡などが出土している[大阪市文化財協会1999]。同じく北側で五谷谷に面する調査地では、谷内から古墳～奈良時代の遺構・遺物が発見されている[大阪市文化財協会2007]。

今回の調査地では、大阪市教育委員会による試掘調査の結果に基づいて本調査が行われることとなった。調査区は敷地の北西に設定し、舗装を撤去した後に、重機を用いて近世の地層である第3層の途中までを掘削した(図2)。それ以下は人力によって地層・遺構を掘り下げ、適宜に写真撮影・実測図作成の記録作業を行った。本報告書で用いた水準値はTP値(東京湾平均水面値)で、図中ではTPと省略した。また、図1は座標北、図2・3は磁北を基準とする。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3)

第1層：近代以降の整地層である。2層に分かれ、上位の第1a層は現代の整地層および舗装のアス



ファルト層である。第1b層は鉱滓や貝釦製作過程の廃棄物を含み、近代の地層である。

第2層：整地層で、2層に分かれる。上位の第2a層はオリーブ褐色粗粒砂～小礫混り細粒砂からなり、層厚は約20cmである。下位の第2b層はオリーブ褐色粗粒砂～小礫混り細粒～中粒砂からなり、層厚は約40cmである。ともに遺物は出土せず、時期は不明である。

第3層：黄灰色偽礫質中粒～粗粒砂からなる整地層である。SX1を卓越し、平面的に拡がる。層厚はSX1の中で最大の80cmを測り、平面的に拡がる部分では約15cmである。18世紀後半の遺物を含み、近世後半の地層である。

第4層：明黄褐色シルト～明灰白色細粒砂からなる地山層である。調査区内では顕著な傾斜はなく、標高はTP+13.8mほどであった。上方に細粒化するが、褐色でやや暗色を帯びるいわゆる地山上部の岩相は見られず、上部は削平されているものとみられた。サンドパイプが顕著に見られた。

#### ii) 遺構と遺物(図3・4)

第4層上面で土壤状の遺構や不整形な落込みを検出した。

SX1 西北部で検出した土壤状の遺構で、平面形は小判状を呈し、南北5.8m、東西3.0mを検出したが、北・西部は調査区外にあるため全体の大きさは不明である。深さは1.1mで、下半部は暗灰黄色

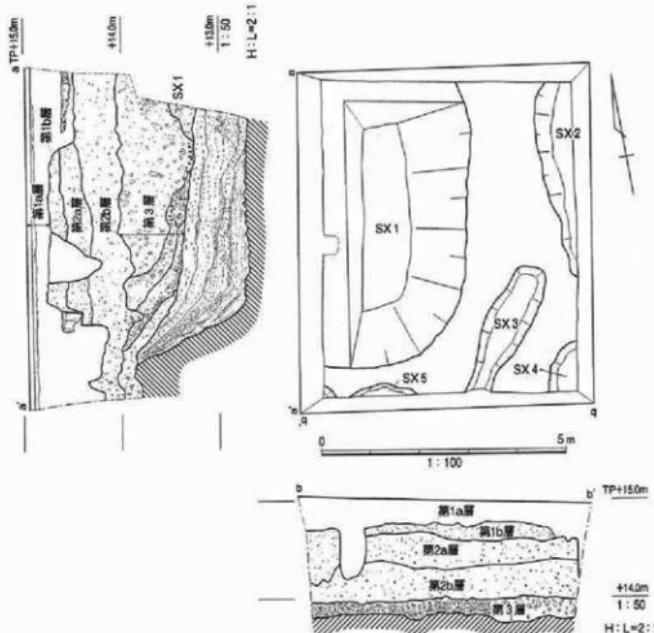


図3 地層と検出遺構

～黄褐色シルト質粘土～粗粒砂からなる薄層が、各々上方細粒化しながら繰り返し堆積していた。降雨などの度に遺構内に水が流れ込んで堆積したものである。上半部は第3層によって埋立てられ、周囲が整地されるのに伴って埋没していた。遺構内の埋土には明黄褐色シルトや褐色粘土質シルトなど地山の上部を構成する堆積物の偽礫は見られたが、周囲の地山を主に構成する灰白色細粒砂がほとんど見られず、掘削後にこの土のみが撤出されたものと考えられた。このことから、本遺構は灰白色細粒砂を採掘するために掘削された土採り穴と考えられる。採掘後すぐには埋められずに放置され、埋土下半部の堆積が起ったのであろう。

遺構内の第3層からは土師器・肥前磁器・肥前陶器・瓦などが出土した。そのうち肥前磁器1は簡碗で外面に草花文を描く。同2は碗で外面に草花文を描き、見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。ともに18世紀後半の遺物で、遺構が埋没した時期を示している。

SX2～5 調査区の東～南側で検出した不整形な落込みである、深さは0.1～0.4mで、いずれも第3層で埋められており、自然に堆積した状況はなかった。SD06-2調査でもこれに類似する近世後半の遺構が発見されており、土採り穴と推定されているので、SX2～5にも同様な性格が考えられる〔大阪市文化財協会2007〕。

### 3)まとめ

今回の調査では近世後半の土採り穴が検出された。この時期の土採り穴は四天王寺から近鉄上本町駅周辺にかけての、特に台地東半部で多く検出されている。これらは建築の壁土を採取するためのものとみられ、江戸時代に「天王寺土」として特に好まれた壁土の産地がこのあたりであることを示している。

調査区内では、難波京朱雀大路の存在を積極的に支持する道路側溝などの遺構は発見されなかった。大路の存在については、今後の調査成果のさらなる蓄積に基づいて決すべきであろう。

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、「椎谷遺跡発掘調査報告」I

2007、「椎谷遺跡発掘調査報告」II

岸後男1970、「難波－大和古道略考」：『小糸田淳教授退官記念論文集』、pp.81～92

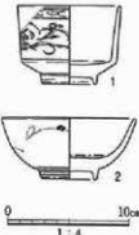


図4 SX 1出土遺物

調査地全景  
(南から)



層序  
(東から)



検出遺構  
(南東から)



天王寺区夕陽丘町における建設工事に伴う  
伶人町遺跡発掘調査(RJ10-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区夕陽丘町3-13  
調査面積 約18m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年7月26日～7月29日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄 京嶋覚

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は南北に長い上町台地中央部の西部に当り、谷町筋を挟んだ東には四天王寺旧境内遺跡があり、四天王寺西部に抜ける古代から中世に発達した集落域内に位置する(図1)。調査地南側の星光学院敷地では古代から中世の多数の遺構・遺物が検出されており、今回の調査地でも当該期の成果が期待された。

調査区は敷地内の旧建物範囲を避けた南西部の東西15m×南北3mの範囲で計画されていたが、旧建物の地下室が南に続いていたため、計画された調査範囲を敷地内で確保することができず、南北幅を約1.2mに縮小することになった(図2)。地山層が確認される現地表から1.0~1.5mまでを重機により掘削し、その後、人力による掘削と記録作業を進めた。7月28日に記録作業を終えて機材の撤収を行い、翌29日に埋戻しを完了して現場での作業を終えた。

以下にその結果を報告する。なお、図1の方位は座標北を、それ以外は磁北を基準にし、水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：現代の盛土および搅乱の埋土である。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層の整地層で、西端部のみに存在する。

第3層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)～黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト層からなる整地層で、層厚は最大で40cm、細礫を含む。

第4層：にぶい黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層で、中央部のみで確認された。層厚20cmの整地



層である。

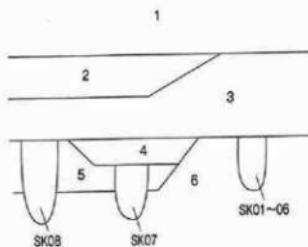


図3 地層と遺構の関係図

第5層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層で、細礫・炭粒を含む整地層である。西部のみに存在し、上面でSK07・08を検出した。地山層の第6層上に整地されており、古い地層が削平された後に整地されたものと思われる。

第6層：明黄褐色(10YR6/6)細粒砂質シルト～中粒砂層の地山層であり、下位ほど砂粒の粒径が大きくなる。

#### ii) 遺構と遺物(図4～6)

18～19世紀代の遺物を出土する8基の土壙を検出した。

SK07・08が第5層上面から掘削されていることが確認できたほかは、第6層の地山層上面で検出した遺構である。

SK01は平面形が東西1.6mの方形と推定され、深さは0.4mである。埋土は上部がにぶい黄褐色

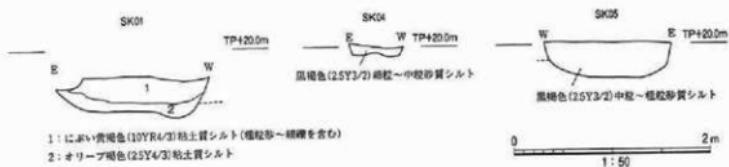
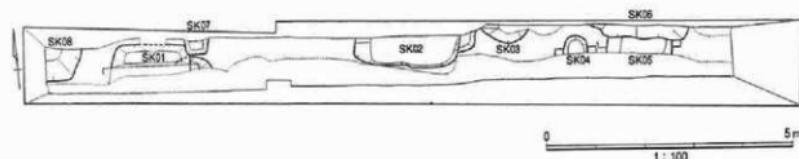
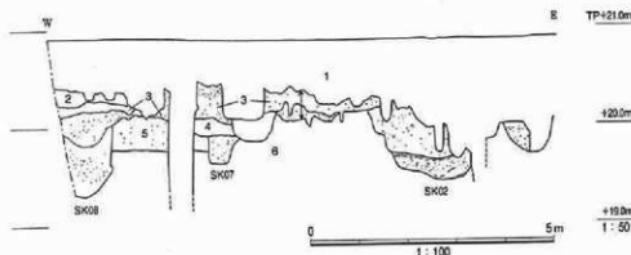


図4 北壁地層断面図、遺構平面図および遺構断面図

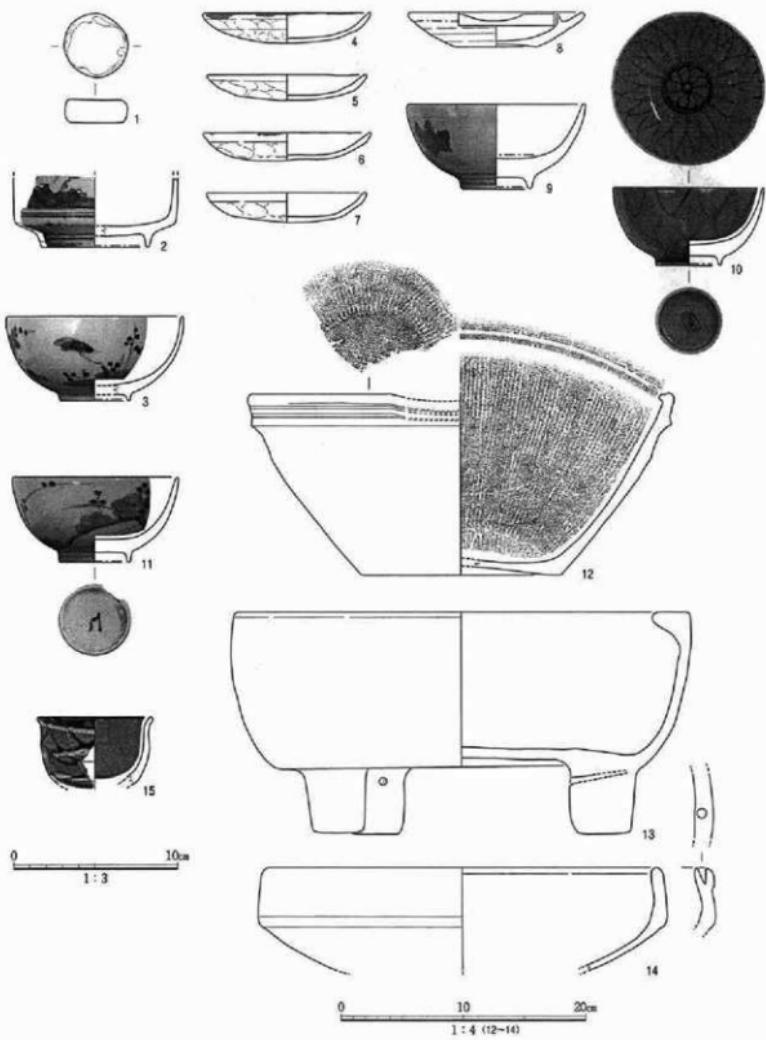


図5 出土遺物実測図(1)  
SK01(1~3)、SK02(4~14)、SK05(15)

(10YR4/3)を呈する粗粒砂～細礫を含む粘土質シルトの埋め土で、下部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルトの機能時堆積層である。

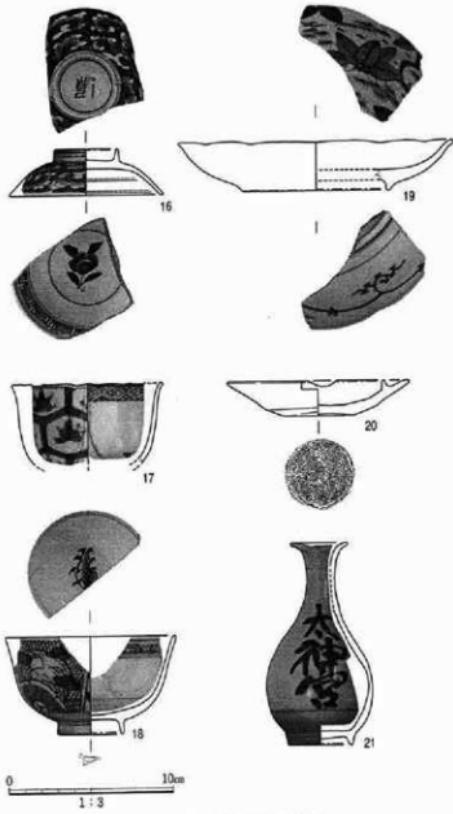


図6 出土遺物実測図(2)  
SK06(16~18)、SK07(19)、SK08(20・21)

の他、土師器灯明皿、丸・平瓦などがある。

SK06はSK05を壊して掘られた東西0.8m以上の土壌である。肥前磁器染付輪花碗17・染付碗18・蓋16などが出土した。

SK07は東西0.5mの方形を呈する土壌で、深さ0.3mである。暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質シルトで埋められており、肥前磁器染付輪花皿19、関西系陶器、瀬戸美濃陶器などが出土した。

SK08は西端で検出された東西1.0m以上、深さ0.8mの方形と推定される土壌である。上部が暗褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトで、下部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～中粒砂質シルトで埋められていた。肥前磁器染付徳利21、軟質施釉陶器灯明皿20などが出土した。

出土遺物には肥前磁器染付碗2・3、丹波焼片、瓦製円板1などがある。

SK02は平面形が東西2.4mの方形と推定され、深さ0.8mの土壌である。上部0.5mが黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂質シルト、下部0.3mは暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～中粒砂質シルトで埋められている。

出土遺物は土師器灯明皿4～7、肥前磁器染付碗9～11、関西系陶器灯明受皿8、堺焼鉢12、土師器火鉢13・焰塔14、土人形などがある。

SK03は東西1.0m以上の円形と推定される土壌である。深さは0.3mで黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂質シルトで埋められている。近世の平・丸瓦などが出土した。

SK04は直径0.5mの円形と推定される土壌で、深さは0.1mである。黒褐色(2.5Y3/2)細粒～中粒砂質シルトで埋められており、遺物は出土しなかった。

SK05は東西1.3mであるが、平面の形状は不明である。深さは0.4mで黒褐色(中粒～粗粒砂質シルト)で埋められていた。出土遺物に萩焼小碗15

### 3)まとめ

今回の調査地は狭小な範囲しか地層が遺存していなかったことから、期待された中世以前の遺構・遺物は出土せず、18～19世紀の土壤とその出土遺物についての資料を得るにとどまった。これは近世の整地層の堆積状況から古代・中世の地層が削平されていたためと思われ、中世以前の遺構の存在を否定するものではない。今後、地層の遺存状況によっては、当該地周辺でも古代・中世の四天王寺西部に拡がる都市的集落の一端が検出される可能性は高いと思われる。

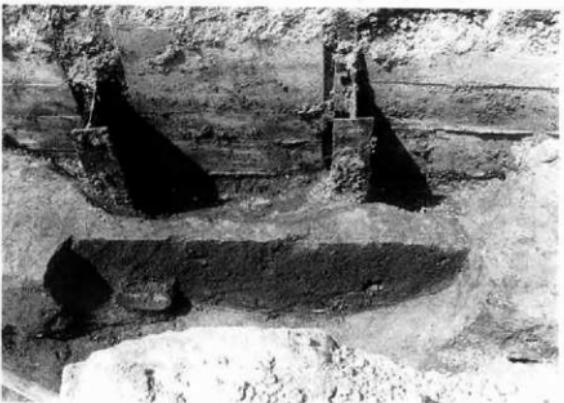
第6層上面全景  
(西から)



SK02遺物出土状況  
(南から)



SK05・06  
(南から)



天王寺区上汐六丁目における建設工事に伴う  
上本町遺跡発掘調査(UH10-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区上汐6丁目3-5・3-6・3-7  
調査面積 約60m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年7月12日～7月15日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、京嶋覚

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地中央部に位置し、弥生時代～近世の集落遺跡である上本町遺跡の南半部に当る。南には四天王寺旧境内遺跡、東には難波京朱雀大路跡の推定ラインがあり、周辺の調査でも古代から中世にかけての遺構・遺物が多く発掘されている(図1)。特に東隣の敷地で行われたUS04-1次調査では15世紀代の東西大溝SD01が検出されており、その西延長部が検出される可能性があった。

調査区は敷地東側の東西10m×南北6mの範囲である(図2)。掘削は7月12日 начиная с, 東部は地山層と思われる地層が確認された現地表から1.5mまでを、西部は約2mまでを重機により掘削し、それ以下を人力により掘削・遺構検出を行って記録作業を進めた。7月15日に記録作業を終え、埋戻し・機材撤収を終えて現場での作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均水位値)で、図中ではTPと省略した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：現代の盛土および擾乱の埋土である。

第2層：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルト層で、層厚が最大で約50cmの整地層である。

第3層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト層で、層厚が20～40cmの整地層である。上記2層と本層は調査区東半のみで確認された。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫混り細粒～中粒砂質シルト層で、層厚20～50cmの整地層であ



図1 調査地位置図

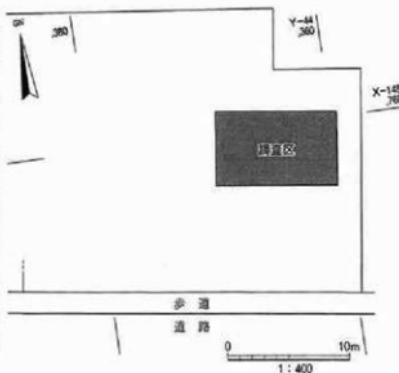


図2 調査区位置図

る。調査区西半のみで確認された。17世紀後半の遺物を含む。

第5層:灰白色(2.5Y3/2)細粒砂層で、地山層である。

#### ii) 遺構と遺物(図4・5)

調査区の中央に近代まで下る南北の石組溝が存在し、これが土地境界になっていたと思われ、その東と西で整地土が異なっていた(第2・3層と第4層)。

調査区西部の第5層上面で土壌SK01を検出した。南

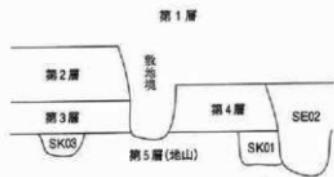


図3 地層と遺構の関係図

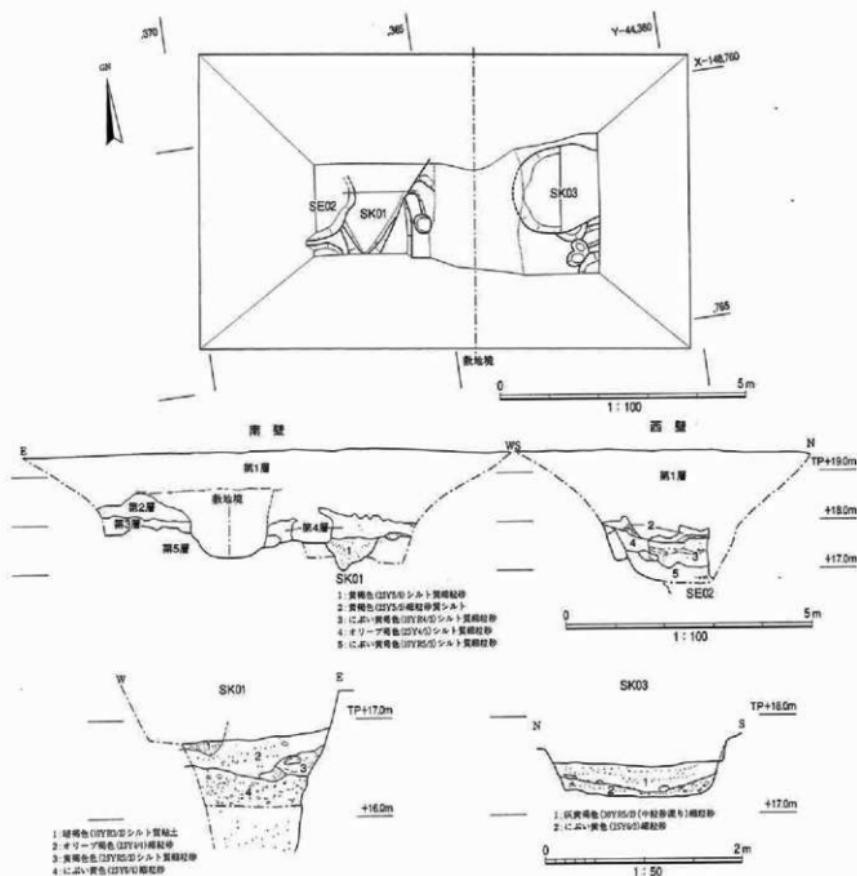


図4 地層断面図および遺構平面・断面図

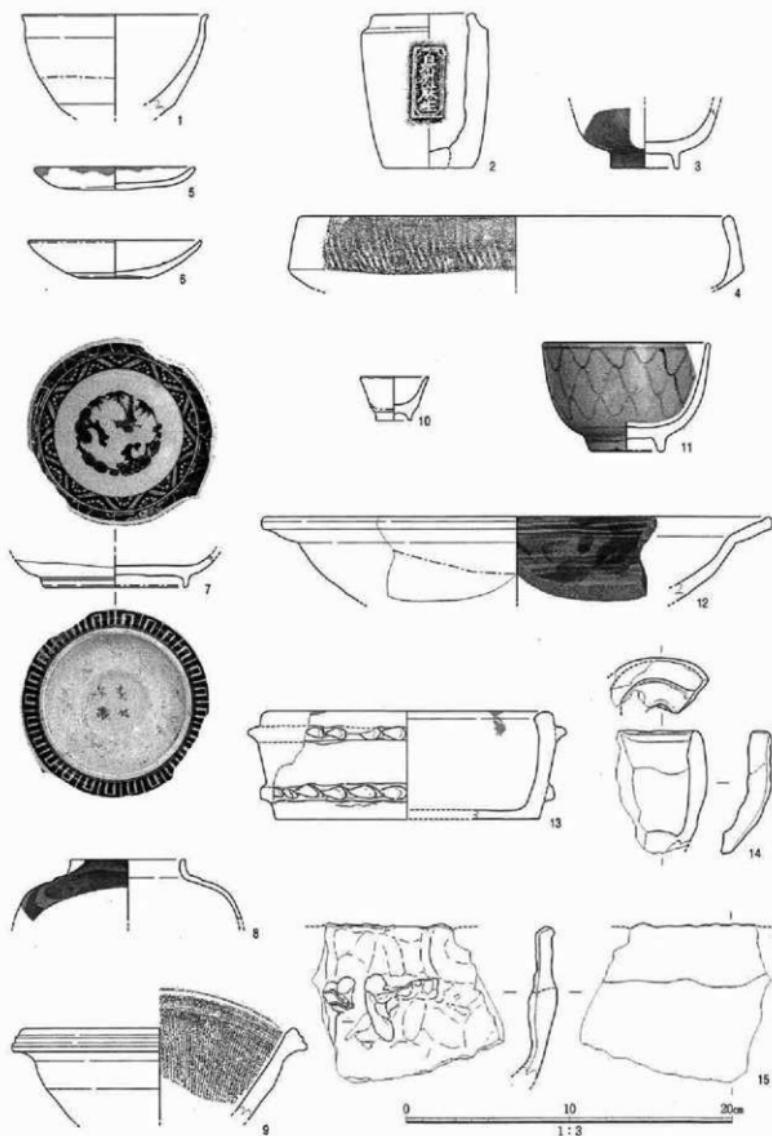


图5 出土遗物实测图

SK01(1)、表接(2)、第2层(3·4)、SK03(5~9)、SE02(10~15)

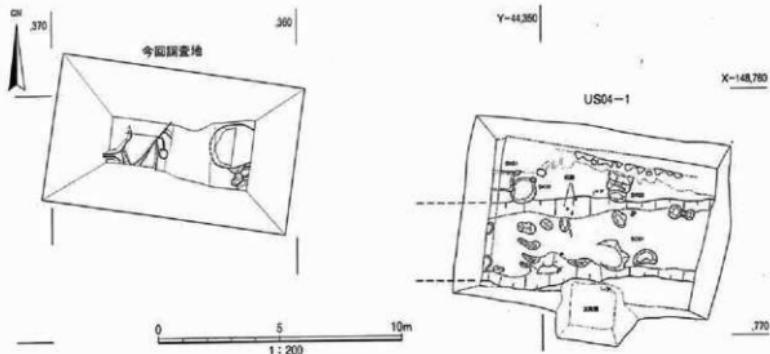


図6 遺構関係図

北2m以上、東西2m以上の規模で、方形と推定される土壙で、深さは1.2m以上である。埋土は上部がオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂で、下部はにぶい黄褐色(2.5Y6/4)細粒砂でシルトの偽縛を多く含み、土採り穴の様相を呈する。肥前陶器碗1、備前焼壺、土師器焼烙、須恵器などが出土しており、豊臣期に遡る可能性がある。

SE02は調査区西部で検出された土壙で、SK01を壙して掘られている。直径1m以上の円形を呈すると推定される。深さは1.2m以上である。埋土の上部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)～にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂で炭粒を多く含み、下部はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂である。肥前磁器染付碗11・ミニチュア小杯10、肥前陶器二彩手鉢12、土師器火入れ13の他、鋳造関係遺物14・15が出土した。17世紀後半頃と思われる。

SK03は調査区東部で検出された土壙である。平面形は直径1.8mの円形を呈し、深さは0.6mである。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)(中粒砂混り)細粒砂～にぶい黄褐色(2.5Y6/3)細粒砂である。肥前磁器染付皿7、関西系陶器灯明皿6・土瓶8、丹波焼擂鉢9、土師器灯明皿5など18世紀後半から19世紀初頭の遺物が出土した。

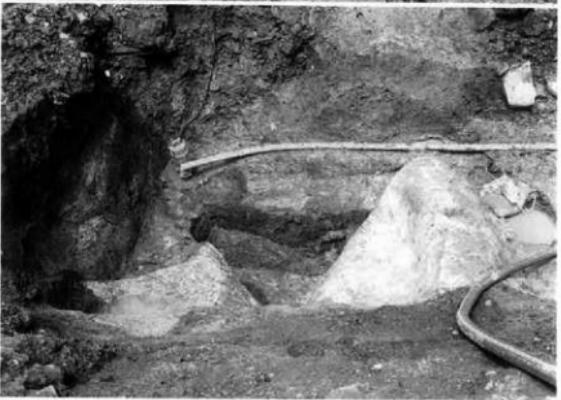
### 3)まとめ

今回の調査地では豊臣期に遡る土採り穴の可能性のある遺構や徳川期の井戸が検出され、豊臣期から徳川期にかけての様相を知る手がかりが得られた。一方、東隣で検出された中世の東西溝は、調査区が北にややずれていたと思われ、溝が連続することを確認することはできなかった。しかし、遺存する地山層の標高からみて、調査区周辺で中世以前の遺構が遺存する可能性は十分に考えられ、今後の調査に期待したい。

第5層上面全景  
(北から)



SK01・SE02  
(南から)



SK03(西から)



天王寺区上汐三丁目における建設工事に伴う  
上本町遺跡発掘調査(UH10-3)報告書

調査個所 大阪市天王寺区上汐3丁目4-6  
調査面積 60m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年8月3日～平成22年8月8日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、高橋工

### 1) 調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は難波宮・大坂城跡と四天王寺旧境内遺跡の間の上町台地の大部分にかかり、東に宰相山・細工谷遺跡、難波京朱雀大路跡に接し、飛鳥・奈良時代の難波京や、近世に豊臣秀吉によって開かれた平野町を復元する上で重要な位置を占めている。調査地は上本町遺跡のほぼ中央部、台地の脊梁部に立地し、近鉄大阪上本町駅南西の市街地中に当る。

周辺で行われた発掘調査は、南側ではUS04-2・06-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005・2008]、西側ではUH08-11次調査[大阪市文化財協会2009]がある(図1)。US04-2次調査では正東西の方位をもつ奈良時代の溝が発見されており、難波京の条坊との関係が指摘されている。US06-1次調査では奈良～平安時代初頭の掘立柱建物群と井戸・土壙が発見され、京内の屋敷地と考えられる。UH08-11次調査では近世後半の土探し穴が発見された。

調査地においては、大阪市教育委員会による試掘調査で地表下約1mで地山層が確認され、近世の遺物包含層も遺存することがわかったため、それらを対象に本調査が行われることとなった。調査区は敷地西北部に設定し(図2)、近代の地層(第3層)までを重機によって除去した後、以下、地山層までの地層を人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。本報告書で用いた水準値はT.P.値で、図中ではTPと省略した。また、図1は世界測地系の座標北を基準に、それ以外の平面図は磁北を基準に作成した。



図1 調査位置図

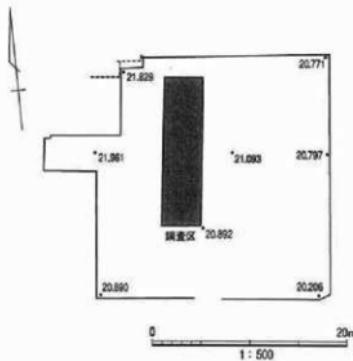


図2 調査区位置図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3左)

第1層：暗灰色細粒砂などからなる現代の盛土層である。層厚は70cmほどである。本層上面の標高は、敷地北東部でTP+21.9m前後と最も高く、碎石などの客土の結果最も低い西南部とは約1.6mの比高がある。

第2層：黒褐色シルト～細粒砂からなる盛土層で層厚は約20cmである。レンガ片を含むので近代以前の地層である。

第3層：暗オリーブ褐色細粒砂からなる盛土層で、層厚は約30cmである。軟質施釉陶器蓋1や肥前磁器染付碗2などが出土しており、19世紀の地層である(図4)。

第4層：灰オリーブ色地山層の偽縞質細粒砂からなる盛土層で、層厚は約20cmである。調査区北部にのみ分布し、地山層上面の土採り穴を埋積していた。固化できなかったが、コンニャク印判の五弁花をもつ肥前磁器染付片が出土しており、18世紀頃の地層である。

第5層：暗灰色中粒砂～にぶい黄色細粒砂質シルトからなる地山層である。上方に細粒化していた。

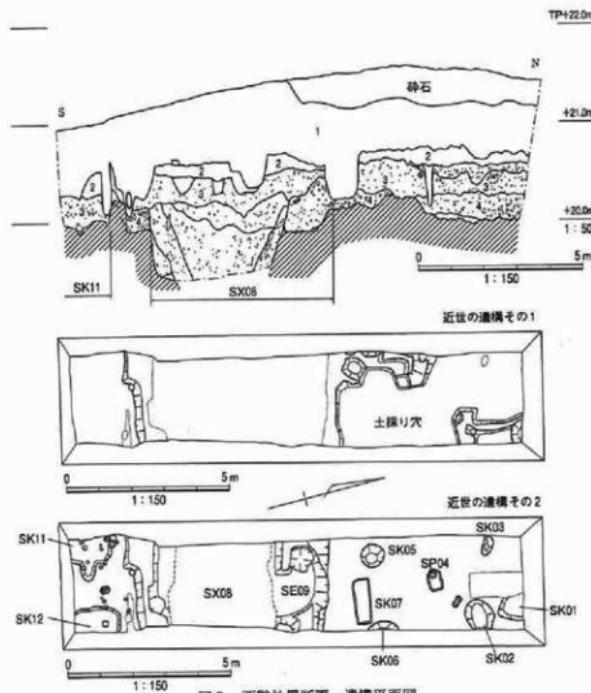


図3 西壁地層断面・遺構平面図

ii) 遺構と遺物(図3～5)

a. 近世の遺構(その1)

第5層(地山層)の上面で検出された遺構である  
(図3中)。

土探し穴 調査区の北半部で検出された不整形の落込みで、深さは最大で20cmほどであった。障壁状に地山が掘り残されている部分があり、こうした特徴から土探し穴と判断した。埋土は第4層で、前述の肥前磁器片から考えて18世紀代の遺構である。

b. 近世の遺構(その2)

第3層の除去後、第4・5層の上面で検出された遺構である(図3右)。

SK01 深さ0.2mほどの土壠で、第3層で埋められていた。

SK02 東西1.0m以上、南北0.8m、深さ0.1mの土壠で、第3層で埋められていた。

SK03 東西0.6m、南北0.3m、深さ0.2mの土壠で、第3層で埋められていた。

SP04 東西0.6m、南北0.4m、深さ0.2mの柱穴で、柱掘形は地山と灰色粘土質シルトの偽縛で埋められていた。西に偏って直径0.15mの柱痕跡がみとめられた。これに組み合う柱穴は発見できなかった。

SK05・06 深さ0.1m未満の円形の落込みである。

SK07 東西1.4m、南北0.5m、深さ0.2mの土壠である。埋土は暗灰色砂質粘土で埋められており、日用雑器や有機物が出土したことからゴミ穴と判断した。土師器、瀬戸美濃焼陶器・同磁器、肥前磁器、関西系陶器、土製品、魚骨などが出土した。

土師器5・15、瀬戸美濃焼陶器16、同磁器8、肥前磁器9・10・11、関西系陶器6・12~14、土製品7を図5に示す。5は土師器皿で糸切り底をもつ。15は土師器涼炉(煎茶焜炉)である。16は瀬戸美濃焼水甕である。8は瀬戸美濃焼磁器小壺で、外面には渦文を、底部内面には寿字文を描く。9は肥前磁器染付碗で、外面には山水文を、底部内面には寿字文を描く。10は同染付御神酒德利で、外面には一筆描きの蜻唐草文を描く。11は同染付水滴である。6は関西系陶器灯明皿、13は同行平鍋で外面上部にトビカンナと鉄釉を施し、12はその蓋で、14は同土瓶である。7は土師質の土製品で、筆先を象ったものであろう。同様な土製品には文房具を模したものも出土している。これらの遺物はその形態・組成からみて19世紀のもので、当該期の良好な一括資料である。また、遺構の時期を示すものではないが、須恵器高杯の脚部4が出土している(図4)。6~7世紀の製品で、混入品とみるべきであるが、周辺にこの時期の遺構があった可能性を示す。

SX08 調査地中央を東西に横切る堀状の遺構である。幅約6mを測る。深さは検出面から0.8mま

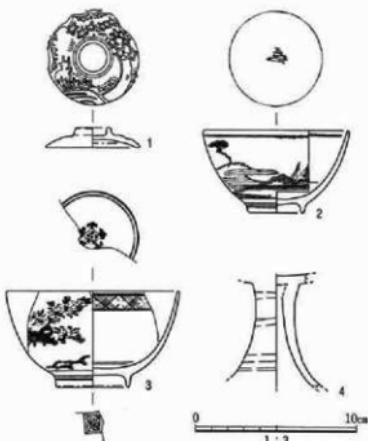


図4 出土遺物  
第3層(1・2)、SX08(3)、SK07(4)

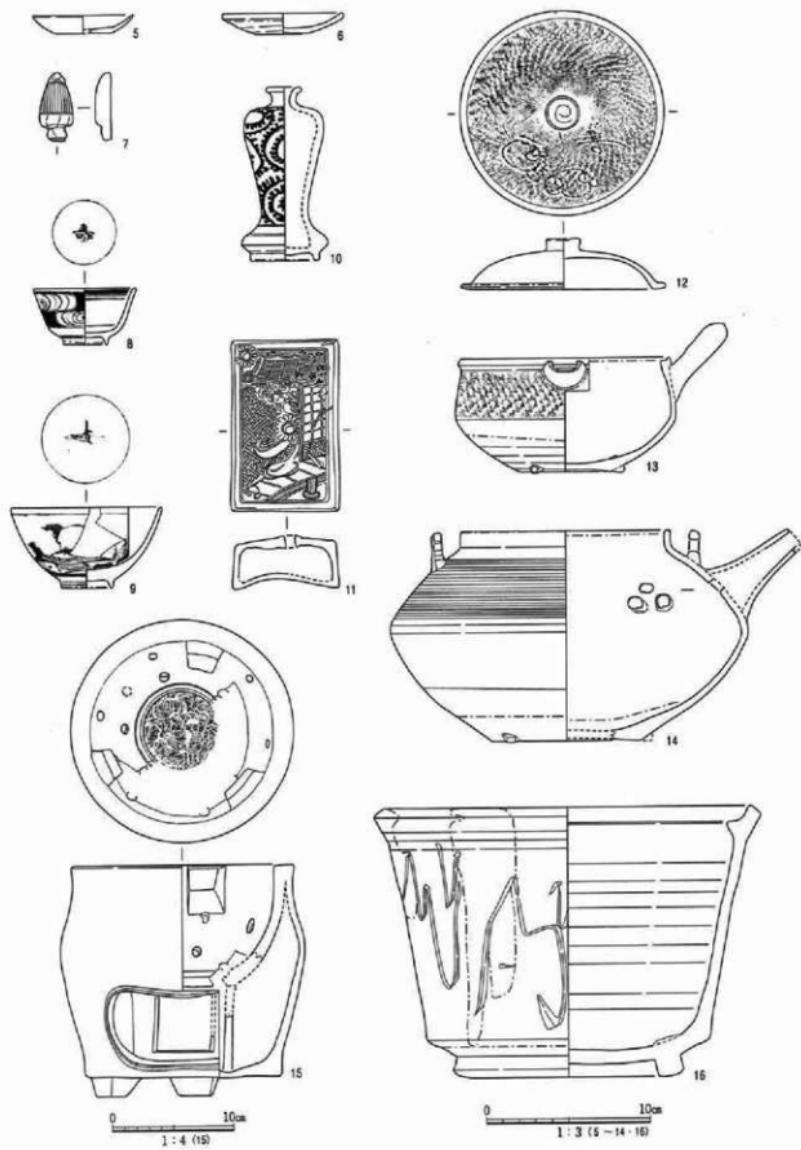


図5 SK07出土遺物

で掘削したが、底に至っていない。埋土は、地山層の偽礫や中疊質シルト～粗粒砂などで人為的に埋められていた。肥前磁器染付碗3が出土しており、18世紀の遺構である(図4)。

SE09 SX08に切られる井戸で、直径は0.7mである。深さは1.0m以上であるが、底は確認していない。

SK11 東西0.7m以上、南北1.4m以上、深さ0.1mの土壤である。第3層で埋められていた。

SK12 東西0.7m以上、南北1.3m以上、深さ0.1m未満の土壤である。第3層で埋められていた。

以上の遺構は、建物跡は発見されなかったものの、井戸・ごみ穴などの存在からみて町屋の一部と考えられる。

### 3)まとめ

今回の調査では、18世紀の土採り穴と19世紀の町屋の跡が検出された。土採りが行われた土地を整地して町屋の造成を行ったとみられた。生玉神社参道の南で光正寺の西の街区に当る本調査地周辺は、複数の絵図でも一貫して町屋として利用された地域にあったことが看取され、弘化2(1845)年の絵図では「北平ノ丁 七丁メハ丁メ」と記された街路の東の街区として確認できる(図6上)。しかし、今回調査結果からは、このような町屋の中にあっても、土地利用のあり方に変化があったことがわかる。

また、壠状の遺構SX08は街区内外敷地間を区画した遺構である可能性があり、文政8(1825)年の絵図に見える東西方向の敷地境のようなものに相当するのかもしれない(図6下)。

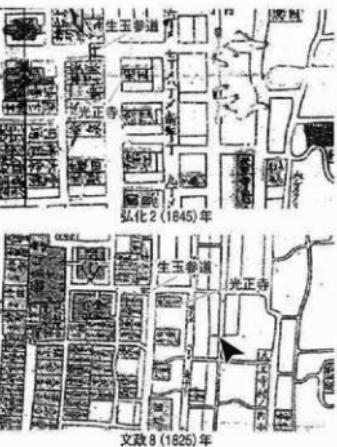


図6 江戸時代の絵図の調査地周辺

### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「上本町南遺跡発掘調査(US04-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包装地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.191-201  
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「上本町南遺跡発掘調査(US06-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包装地発掘調査報告書(2006)』、pp.251-260  
大阪市文化財協会2009、「天王寺区上本町六丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH08-11)報告書』

第5層上面遺構  
(南から)



第5層上面遺構  
(南西から)



SK07と土採り穴  
(南東から)



淀川区西中島五丁目における建設工事に伴う  
西中島遺跡C地点発掘調査(WN10-1)報告書

調査個所 大阪市淀川区西中島5丁目(新大阪駅構内)  
調査面積 約60m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年11月16日～11月18日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、京嶋覚

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、東500mに弥生時代～中世の集落遺跡である崇福寺遺跡があり、北200mには中世の宮原庄の遺跡である宮原遺跡があるなど、弥生時代から古代・中世を通じて開発が進められてきた地域に位置している(図1)。また、東100mで行ったNJ10-1次調査では東西方向の砂堆上面で中世の溝状遺構が検出されている[大阪文化財研究所2010]。

事前の試掘調査では、現地表下約0.5mで中世～近世の作土層が確認され、それ以下に中世以前の遺構・遺物が検出される可能性があった。そこで、当該地層が確認された試掘地点付近で南北10m、東西6mの調査区を設けて、現地表下1.5mまで発掘調査を行うことになった(図2)。

現地表下0.5mまでの表土が掘削された後、11月16日から機材の搬入、人力掘削を開始し、まず表土掘削後の残土を除去した。翌17日から人力掘削を開始したが、試掘所見と異なり、調査区全域にわたり現代盛土が厚く存在することが判明したため、教育委員会と協議して調査区の南北2箇所で予定深度までの深掘りを行い、記録を取って終了することとした。しかし、現代盛土にはコンクリート塊や木・鉄材の建築廃材などが多く含まれていたため、人力による深掘りは難航し、調査位置や地層などの記録作業を終えるのに18日までかかり、この日のうちに機材撤収を終えて現場での作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は座標北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。



図1 調査位置図

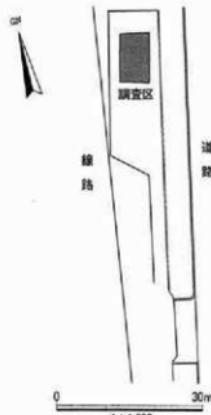


図2 調査区位置図

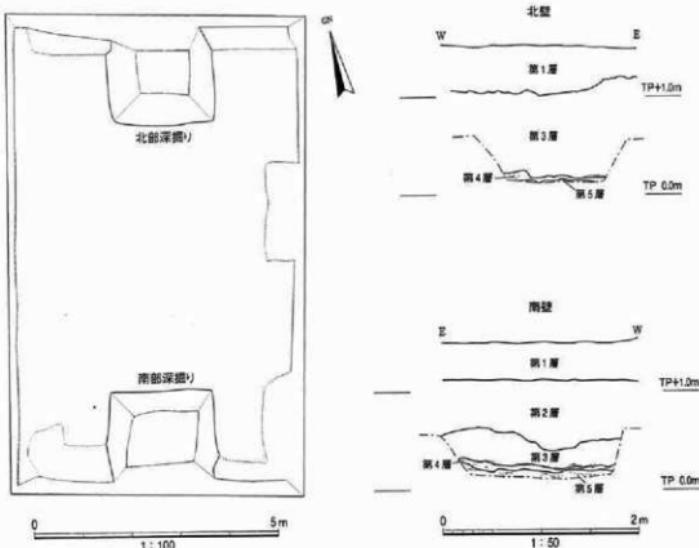


図3 調査地平面図および北壁・南壁地層断面図

## 2)調査の結果

調査区の北壁・南壁際中央の2箇所で行った深掘り部分での地層の調査所見を記述する(図3)。

第1層：暗灰黄色(2.5Y2/2)シルト質細粒～中粒砂層で現代の盛土である。層厚は40cmで、コンクリート塊が多く含まれる。

第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質細粒～中粒砂層の現代盛土である。層厚は50～70cmで、コンクリートやアスファルトのガラが多く含まれる。おもに西南部に厚く分布する。

第3層：黒色(5Y2/1)シルト質細粒～中粒砂層の現代盛土である。層厚は20～90cmで、コンクリート塊やビニールなどを含む。

第4層：黄灰色(2.5Y4/1)～暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土層で、植物遺体を多く含む。層厚10cm前後の湿地堆積層である。

第5層：オリーブ黒色(2Y2/2)～黒色(7.5Y2/1)シルト質細粒～中粒砂層で、層厚20cm以上の湿地堆積層である。植物遺体を多く含み、細粒砂のラミナがごく薄く介在する。

## 3)地層から見た古環境の推定

以上の各地層の所見からみて、現代に第3層が盛土された際にはこの地点が湿地環境にあったことが判明した。湿地堆積層である第4層上面の標高はTP+0.3mであり、東100mのNJ10-1次調査で中世の遺構・遺物が検出された砂堆上面の標高とほぼ一致する。また、宮原遺跡南部で検出されている砂堆上面はTP+0.5m以上である。これら周辺の調査所見からみて、今回の調査地点は中世以前に

形成された後背湿地としての環境が現代まで維持されていたか、あるいは現代になって湿地環境に改变されたものと推定される。しかし、昭和4年の大阪都市地図には湿地と思われる部分が見られず、このような環境の成因を特定することはできなかった。

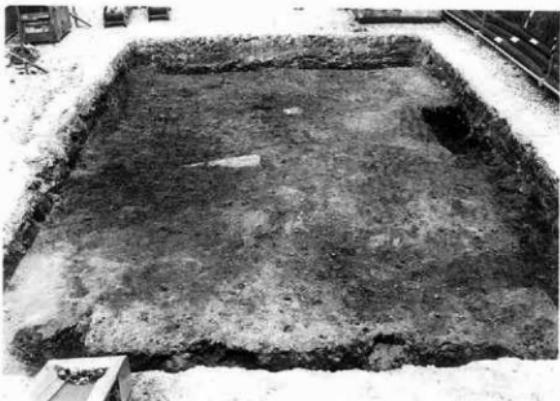
#### 4)まとめ

今回の調査では、北側に位置する作土層が検出された試掘地点との間に土地利用の違いがあり、約1m低くなった湿地環境が現代まで続いていることが判明した。この地域の歴史解明のための一資料として、今後の調査研究に寄与するものといえよう。

#### 引用・参考文献

大阪文化財研究所2010、『東淀川区東中島一丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(NJ10-1)報告書』

第2・3層上面全景  
(南から)



北壁断面



南壁断面



東淀川区柴島二丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(KN10-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区柴島2丁目65-1  
調査面積 60m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年8月9日～8月16日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、絹川一徳

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は淀川下流域に形成されたデルタ上に位置する(図1)。調査地の南側は淀川河岸に近接し、北東方向から流れてきた淀川はこの付近で南流する大川と新淀川に分岐している。今回調査を行った柴島遺跡の周辺には、北東に接して古代の寺院跡である摂津国分尼寺跡、北側に柴島城跡伝承地、南側に薬師堂廃寺があり、さらに北方へ800mほど離れた地点には弥生～古墳時代の集落跡として知られる崇禪寺遺跡が存在する。隣接する摂津国分尼寺跡では、これまで幾次にもわたって小規模な発掘調査が実施されており、中世～近世を中心とする遺構・遺物が認められている(図1)。特にKN00-2次調査では、鎌倉時代後半～室町時代の瓦や五輪塔台座とみられる石製品が出土しており、摂津国分尼寺との関係とともに周辺に中世寺院が存在したことを示す資料として注目される[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]。

今回、2010年7月に大阪市教育委員会による試掘調査が実施され、その結果、中世の遺物を含む小穴などの遺構が確認されたため、本格的な発掘調査を実施することとなった。調査区は遺構が確認された調査地南半に南北3m×東西20mで60m<sup>2</sup>の規模で設定することになった(図2)。

発掘調査は2010年8月9日から開始した。現代盛土を重機で除去したのち、それ以下を人力で掘削した。中世の遺物包含層の確認とともに遺構検出作業、実測・写真撮影などの記録作業を併せて実施した。8月14日に埋戻し作業を行い、8月16日に復旧作業を完了して撤収した。なお、本報告書で用いた水準基準はTP値(東京湾平均海面値)で、挿図中ではTP+○mと記した。また、方位は座標北を基準としている。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

調査地の現地表はほぼ平坦で、標高はTP+3.2m前後であった。調査区の全域で現代盛土が80~120cmの厚さで堆積していた。現代盛土層以下では次の地層が確認できた。

第1a層は暗褐色(10YR3/4)のシルト質中粒砂層で層厚は約20cmであった。旧表土であるが、大きく削平を受けており、調査区の西半で僅かに認められた。

第1b層は暗褐色(10YR3/3)のシルト質中粒砂層で層厚は10~20cmであった。近代以降の作土層であり、第1a層と同様に削平を受けており、調査区の西半で部分的に残されていた。

第2a層は暗褐色(7.5YR3/3)のシルト質細粒~中粒砂層で層厚は5~10cmであった。調査区の全域で認められ、上位層との境界はやや明瞭である。作土層である。

第2b層は褐色(7.5YR4/4)の粘土混りシルト質細粒~中粒砂層で層厚は約10cmであった。作土層で、調査区の全域で認められた。近世後期の磁器片が出土した。

第3層は褐色(7.5YR4/3)の泥質細粒砂層で層厚は約10cmであった。炭粒を多く含む作土層で、調査区の全域で認められた。近世の地層とみられる。

第4a層は暗褐色(7.5YR3/3)の泥質細粒砂層で層厚は10~15cmであった。上位層との境界は明瞭である。炭・焼土粒を多く含む作土層で、調査区の全域に安定して堆積していた。中世の地層で、土師器・瓦器・瓦などが出土した。

第4b層は黒褐色(10YR3/2)の泥質細粒砂層で層厚は10~15cmであった。炭粒・焼土粒を多く含む作土層で、調査区の全域で認められた。土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土した。中世の地層である。

第5層は褐色(10YR4/6)のシルト質細粒~中粒砂層で層厚は5~10cmであった。上位・下位層との境界は明瞭である。炭粒・焼土粒を多く含む。中世の地層で土師器・須恵器・瓦器などが出土した。調査区中央において本層下面で南北方向の溝を検出した。

第6a層は褐色(10YR4/4)のシルト質細粒砂層で、数cm径から拳大ほどの粘土質シルトの偽縫を含む。層厚は約10cmで炭粒・焼土粒を包含する。整地層とみられ、調査区のほぼ全域で認められた。本層の上面で小穴・土壙・溝などの遺構を検出した。

第6b層は(7.5YR4/3)のシルト質細粒砂層で、粘土質シルトの偽縫を含む。調査区の東端・西端で10~15cmの層厚で堆積していた。第6a層と同様に整地層とみられる。中世の地層である。

第7a層は黒褐色(7.5YR3/2)の細粒砂質シルト層で、層厚は10~20cmであった。上位層との境界は極めて明瞭であった。調査区の全域で認められた作土層で、炭粒・焼土粒を多く含む。土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器などが出土した。

第7b層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)の細粒~中粒砂質シルト層で、層厚は10~15cmであった。作土

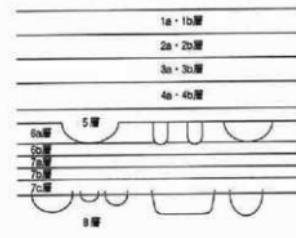


図3 地層と遺構の関係図

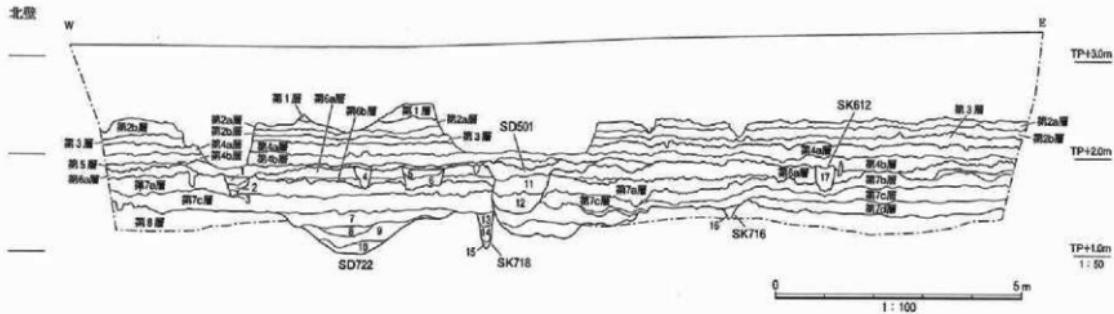
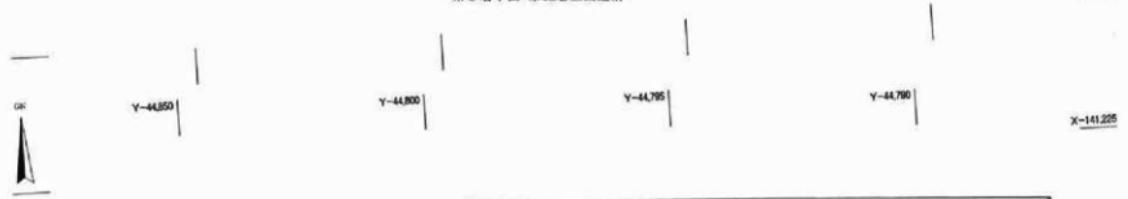


図4 調査区北・西壁地層断面図



第5層下面-第6a層上面遺構

X-141,230



第7c層内遺構

X-141,230



図5 遺構平面図

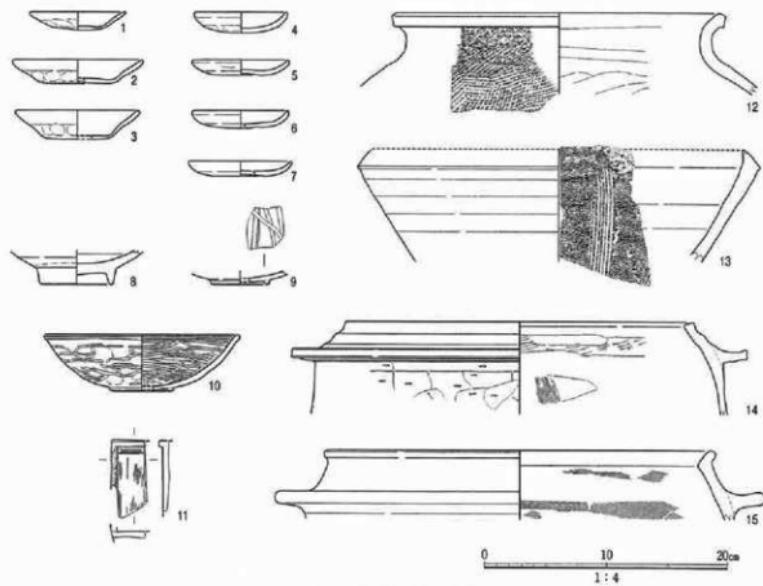


図6 出土遺物実測図

SK610(1)、SK613(2)、SK616(3)、第6a層(8・12)、SD722(5～7・15)、第7a層(13・14)、第7c層(4・9～11)

層で調査区の東側で認められた。中世の地層である。

第7c層は黒褐色(7.5YR3/1)のシルト質細粒～中粒砂層で、層厚は10～20cmであった。調査区の全域で認められ、西側では炭粒・焼土粒が多く含まれていた。おもに本層を埋土とする柱穴・土壙・溝などが第8層上面で検出され、土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土した。

第7d層は黒褐色(7.5YR3/1)のシルト質中粒砂層で調査区の西端部で部分的に認められた作土層である。

第8層は褐色(7.5YR4/3)の中粒砂層で、層厚は20cm以上ある。上位層との境界は漸移的でやや不明瞭である。自然堆積層で砂堆の構成層である。

#### ii) 遺構と遺物(図5・6)

##### a. 第7層の遺構と遺物

調査区の全域で、第8層上面においておもに第7c層を埋土とする第7c層内遺構の土壙SK711～713・716～720、小穴・柱穴SP702～707・709・710・714・715・721・723・725・726、溝SD722・724、方形の土壙状遺構SX701、掘立柱建物SB708を検出した(図5)。土壙・小穴は深さが10cm程度で埋土が褐色またはよい黄褐色のシルト質細粒砂のものが大半である。

SD722は南北方向の溝で幅2～3m、深さ0.4mで、埋土はオリーブ褐色または暗オリーブ褐色のシルト質細粒砂～細粒砂質シルトである。SD724は幅0.5m、深さ0.2mの東西方向の溝でSD722によっ

て切られている。SX701は方形の土壙状遺構で南北1.5m以上、東西1.0m、深さ0.15mの規模である。掘立柱建物SB708は東西4.0m以上、南北1.5m以上、深さ0.15mの規模で方形に掘り込まれた土壙の周縁に沿って柱穴SP704～706・709・710・714が配置されたもので、方形状に掘り込まれた部分には粘土混り細粒砂質シルトを埋土として充填していた。床面を改良するために貼床として敷かれたものと思われる。SP709・710・714には根石が残されていた。本来の床面は上位層により削平を受けたため、出土遺物は僅少であった。

第7層の出土遺物は図6に示した。備前焼擂鉢13と瓦質土器羽釜14は第7a層から出土した。13は14世紀、14は15世紀のものであろう。

土師器小皿5～7、土師器羽釜15はSD722から出土した。土師器小皿5～7は内外面をナデで調整しており、底面にユビオサエ痕を残す。4～7・15ともに13世紀のものとみられる。

土師器小皿4、瓦器碗9・10と石製硯11は第7c層から出土した。9・10はいずれも和泉型で、10は内外面にヘラミガミが施されている。いずれも12世紀後半のものとみられる。石製硯11は頁岩製である。

#### b. 第6層の遺構と遺物

調査区の東端部と西半で第6a層上面遺構として土壙SK601・602・605・608～613・616、小穴SP603・604・606・607・614・615を検出した(図5)。いずれも深さ10～20cmほどで、埋土は暗灰黄色またはオリーブ褐色のシルト質細粒砂～細粒砂質シルトである。

第6層の出土遺物は図6に示した。1は土師器小皿でSK610から、2・3は土師器皿でSK613・SK616から出土した。いずれも内面と口縁部はナデ、体部外面下半はユビオサエが施されている。15～16世紀のものとみられる。8は中国産白磁碗、12は須恵器甕でいずれも第6a層から出土した。

#### c. 第5層の遺構

調査区の中央で、第6a層上面において第5層を最終的な埋土とするSD501を検出した(図5)。SD501は幅0.8～1.1m、深さ0.5mの南北方向の溝である。埋土は暗褐色シルト質細粒砂～細粒砂質シルトで遺物は出土しなかった。溝幅が不規則であることから自然流路の可能性もある。

### 3)まとめ

今回の調査では、第6a層上面と第8層上面で中世の遺構を検出することができた。出土遺物から第6a層上面遺構は15～16世紀、第7c層内遺構は13世紀の年代によよそ比定することができる。調査地は砂堆上に立地しており、堆積層はいずれも砂層をベースとしているものの、堆積は厚く安定している。今回、第7c層内遺構で掘立柱建物SB708が認められ、瓦・白磁・硯などの遺物も出土した。こうした遺構・遺物の存在から調査地の周辺に中世集落が存在した可能性が高い。調査地の北東で行われた摂津国分尼寺跡の発掘調査では、鎌倉時代後半から室町時代にかけての遺物が多く出土しており、五輪塔台座とみられる石製品も認められたことから、周辺に中世寺院などが存在したことが指摘されている。今回の調査でも同時期の遺構・遺物が見つかったことから、中世において一帯では集落形成を伴った大がかりな開発が行われていたことが分かる。

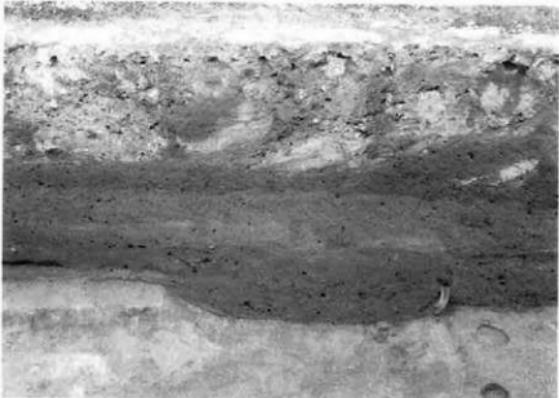
## 参考文献

東淀川区役所1956、『東淀川区史』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「柴島中学校建設工事に伴う摂津国分尼寺跡発掘調査(KN00-2)報告書」:「平成13年度大阪市内埋蔵文化財包藏地発掘調査報告書」

大阪市文化財協会2010、「東淀川区柴島二丁目における柴島遺跡発掘調査(KN09-1)完了報告書」

北壁西半および  
SD722断面  
(南から)



第6a 層上面遺構  
完掘状況  
(北西から)



第7c 層内上面遺構  
完掘状況  
(南東から)



東淀川区東中島一丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(NJ10-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区東中島1丁目18-22  
調査面積 80m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年8月23日～8月27日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

### 1) 調査に至る経緯と経過

当調査地は淀川と神崎川に挟まれた沖積地のほぼ中央に位置し、弥生時代末～古墳時代前期の崇禪寺遺跡の西方70m、昭和2(1927)年に弥生土器が出土し、山口遺跡と命名された中島惣社境内[平凡社1986]からは200mの至近距離にある(図1)。当地は中世においては北方村と称し、寛正2(1461)年12月の中島崇禪寺領目録(崇禪寺文書)「中島所々年貢茶目録」に柴島北方の名がみえ、崇禪寺に年貢茶を納めていた。また奈良時代～中世の寺院跡である摂津國分尼寺跡・薬師堂廃寺などもあり、古代から近世にかけて継続的に集落が営まれてきた地域である。

大阪市教育委員会が8月5日に試掘調査を行ったところ、現地表下1.0～1.5mの深さで中世の遺物包含層と遺構面を確認したことから、本調査を行うことになった。調査区は南北4m×東西20mで設定した(図2)。現地表下0.9mの現代作土層下面まで機械掘削した後、人力により遺構検出を行いながら地層を掘削した。調査終了後は埋め戻して旧に復した。なお、本報告書では水準値はT.P.値(東京湾



図1 調査位置図

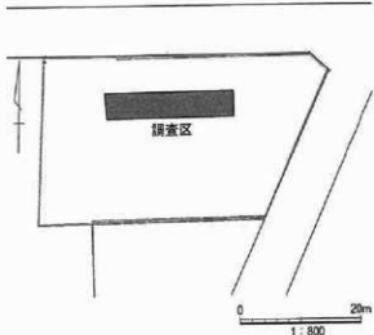


図2 調査区位置図

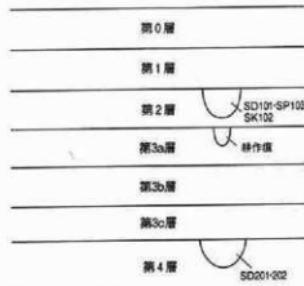


図3 地層と遺構の関係図

平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと示した。また平面図は、図1が座標化を基準とし、図2・5は磁北を基準として作成した。

## 2)調査の結果

### i)層序(図3・4・6)

第0層：層厚80~90cmの現代盛土層である。

第1層：層厚5~20cmの黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルトの現代作土層である。

第2層：層厚10~20cmの灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトの作土層で、東播系須恵器鉢12、中国製白磁碗13、土師器皿14・甕15など中世土器を多く含む。上面で溝SD101ほかの遺構を検出した。また下面に耕作痕がある。

第3a層：層厚10~30cmの黄灰色(2.5Y4/1)シルトの水成層で、瓦器鉢5・6、中国製青磁皿7、軟質施釉陶器皿8、土師器鉢9・羽釜10など中世土器を多く含む。

第3b層：南部中央の凹地に堆積した、層厚10~30cmの黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂質シルトの水成層である。

第3c層：層厚5~20cmの黒褐色(2.5Y3/2)細礫混り粗粒砂質シルトの水成層で、瓦質土器の羽釜4が出土した。

第4層：層厚5~15cmのオリーブ褐色(7.5Y5/1)粗粒砂層で、東半の上部20cmは生痕化石で擾乱されている。上面でSD201・202を検出した。

### ii)遺構と遺物

#### a. 中世の遺構と遺物(図5・6)

第4層上面で東西方向の帯状の砂の高まりとその北の凹地を検出し、西側の砂の高まりから東の低地に流れ込む東西溝SD201と、SD201を切る南北溝SD202が見つかった。

SD201 第4層上面で検出した東西溝で、西側の高まりから東へ流れ込む。幅0.8m、長さ11.0m、

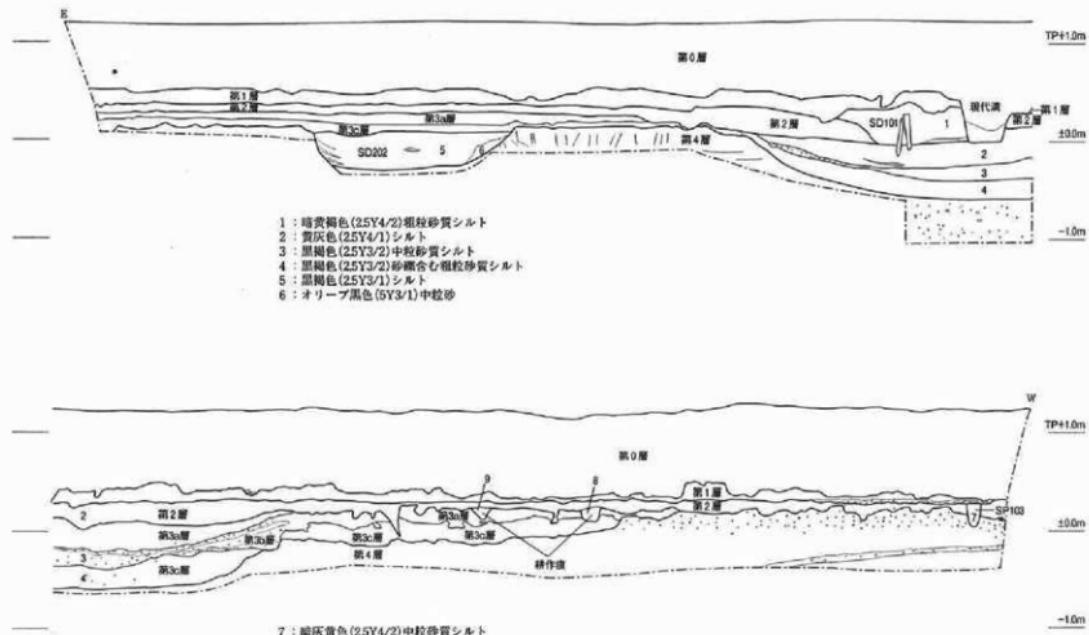


図4 南畿地層断面図

0 2m  
1:50

底面の高低差は0.9mで、東端では深さ0.3mを測る。西端の高まりは開削され、幅2.7mの凹地を呈する。土師器皿1・2と瓦器柄3が見つかった。1・2は小森後寛徳年[小森2005]の京VII期新(12世紀後半)で、3は尾上実徳年[尾上1983]のIII-3期に当り、13世紀前葉[森島康雄1992]のものと考えられる。

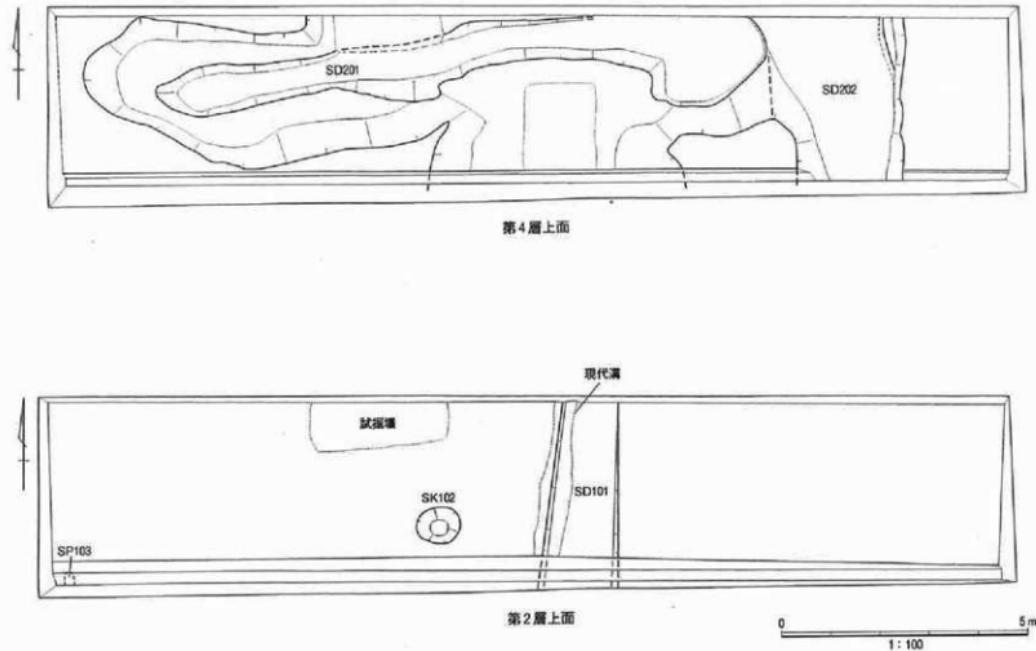


図5 遺構平面図

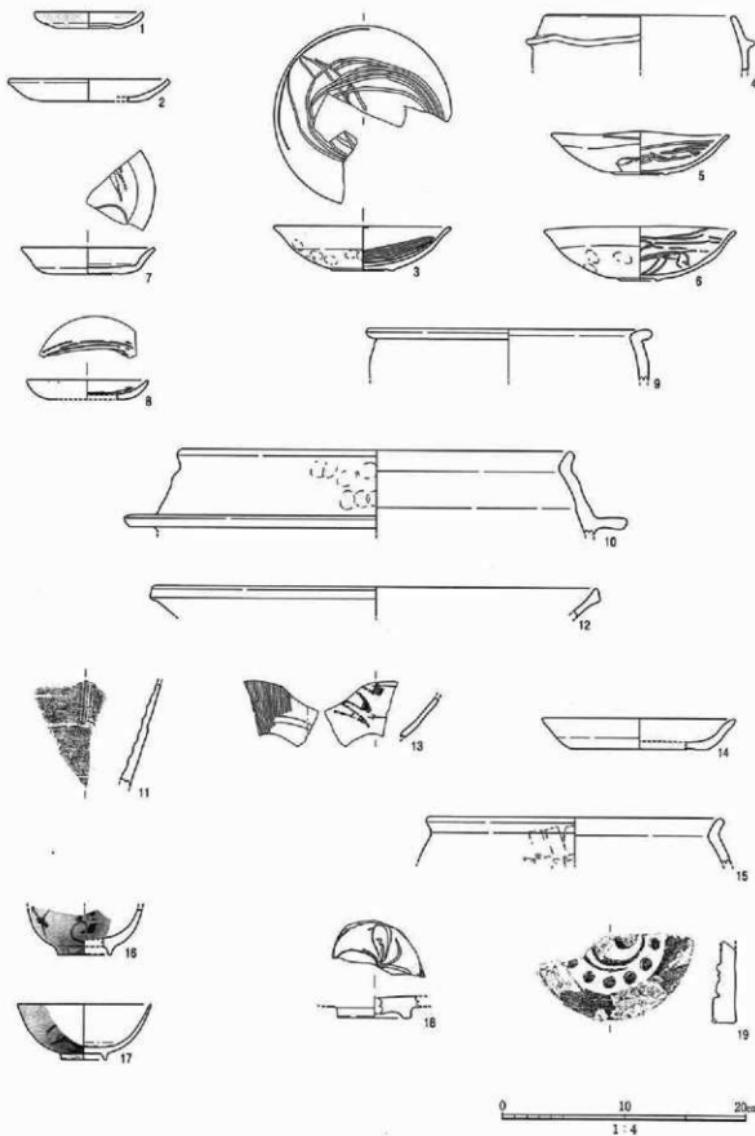


图6 出土遗物实测图

SD201(1~3)、第3c层(4)、第3a层(5~10)、SD202(11)、第2层(12~15)、SD101(16~19)

る。13世紀代の埋没と推定される。

SD202 第4層とSD201の埋土を切る形で検出した南北溝である。上端幅2.2~2.8m、下端幅1.3~2.2m、長さ4.0m以上、深さ0.4mを測り、埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルトなどで、瀬戸美濃焼の瓶11が出土した。

b. 中世土器包含層(第2~3c層)の遺物

第3c層からは鈎の短い瓦質土器羽釜4が、第3a層からは瓦器碗5・6、中国製青磁皿7、軟質施釉陶器皿8、土師器鉢9・羽釜10が出土したが、5・6は尾上編年のⅢ~Ⅳ期に当り、SD201埋土とはとんどかわらない暦年代を与える。7は見込みに櫛描きの草花文をもち、底部は無釉、8は内面に櫛描き沈線をもつ灯明皿である。

第2層の東播系須恵器鉢12、中国製白磁碗13、土師器皿14・15の内、12は第Ⅱ期第2段階(12世紀末~13世紀初頭)[中世土器研究会1995]のもので、13は内面に櫛描きの草花文、外面はタテハケの後、体部上半に施釉する。14は口径が15.6cmと大きく、小森編年の京Ⅵ期古(12世紀末~13世紀初頭)頃である。15は外面にハケメ調整を加える。

c. 近世の遺構(図5・6)

いずれも第2層上面で検出した。

SD101 幅1.2~1.6m、長さ4.0m以上、深さ0.4m、埋土が暗黄褐色(2.5Y4/2)シルトの南北溝である。肥前磁器碗16・17、中国製青磁碗18、左巻き三巴文軒丸瓦19が出土した。17は見込みが蛇の目釉剥ぎで、18は見込みに割花文を印刻する。19は復元珠文数14個である。18世紀後半の溝である。

SK102 直径0.9m、深さ0.1mの土壙で、暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトを埋土とする。

SP103 南壁西端検出の直径0.15m、深さ0.25mのビットで、暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトを埋土とする。杭の跡とみられる。

### 3)まとめ

淀川と神崎川に挟まれた沖積地のはば中央にある当調査地で、東西方向の帯状の砂堆と後背湿地状の凹地を検出した。第2~3c層やSD201は13世紀代の遺物を多く含むことから、鎌倉時代においての人の営みが近辺に展開していたと考えられる。

淀川と神崎川の交わる江口(当調査地の北東5km、現、東淀川区南江口など)や、神崎川沿いの淀川区加島(蟹島)や尼崎市長洲・神崎は、交通の要衝として非常に栄えた。特に平安時代中期以降、貴族の紀州熊野・高野山や住吉・四天王寺などへの社寺参詣や庄園制の発達による人々の交流・輸送は、加島と江口の中間にあら当地をも繁榮させたと考えられる。今回の調査はそれを裏付ける資料である。

### 参考文献

尾上実1983、「南河内の瓦器坑」:藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会編『古文化論叢』、pp.689~705

小森俊寛2005、「京から出土する土器の暦年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7~19世紀」、京都権集工房  
中世土器研究会1995、「解説 中世の土器・陶磁器」

平凡社1986、「大阪府の地名(日本歴史地名大系第28巻)」

森島康雄1992、「畿内産瓦器焼の併行関係と曆年代」：大和古中近研究会編『大和の中世土器』II、pp.113-127

第4層上面  
(西から)



第4層上面  
(東から)



南壁断面  
(部分)



東淀川区大隅二丁目における建設工事に伴う  
三宝寺跡伝承地発掘調査(SP10-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区大隅2丁目2-8  
調査面積 75m<sup>2</sup>  
調査期間 平成23年1月31日～2月4日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、大庭重信

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、淀川低地と大阪海岸低地とに挟まれた淀川右岸の吹田砂堆に立地し、三宝寺跡伝承地のほぼ中央に位置する(図1)。三宝寺は平安時代末の文治年間(1185~89年)に禅僧の大日房能忍によって建立され、最盛期には七堂伽藍のほか僧坊48房を有していたとされる大寺院で、室町時代末の永禄年間(1558~69年)に兵火によって焼失したと伝えられている[西成郡役所1915、井上正雄1922]。

過去の調査では、寺院の存在をうかがわせる一石五輪塔や唐草文軒平瓦が出土したSP96-1次調査[大阪市教育委員会ほか1998]をはじめ、各所で中世の遺構・遺物が見つかっている。また、今回の調査地北隣で行われたSP02-1次調査では、縄文時代中期末~後期前半の土器がまとまって出土しており、周辺の陸化が早くから進んでいたことが明らかになっている[大阪市文化財協会2003]。

建物建設工事に先立って大阪市教育委員会が実施した試掘調査の結果、現地表下1.4m以下に中~近世の遺物包含層および遺構面の存在が確認されたことから、南北36m、東西6mの範囲を対象に調査を実施することになった(図2)。まず、試掘調査の結果をもとに、事前に事業者側が現地表下1.4mまでを機械で除去し、その後調査に着手した。結果、中世の遺構面は現地表下0.7mにあり、確認した遺構は井戸や溝などの深く掘り込まれたものに限られたが、これらの平面・断面記録、および東壁面地層の記録を行い、調査を完了した。

なお、本報告書の平面図のうち、図1・2は座標北、図4は磁北を基準にし、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP+○mと表記した。



図1 調査位置図

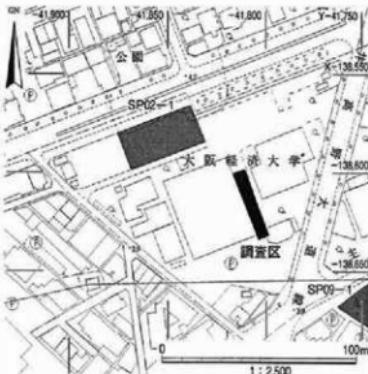


図2 調査区位置図

## 2) 調査の結果

### i) 層序

現代の擾乱および盛土である第0層以下、第1～3層に区分した(図3・4)。

第1層：褐灰色シルト質細粒～中粒砂からなる作土層で、層厚は10～15cmある。調査区東南部の壁面で確認した。遺物は出土していないが、時期は近世の可能性がある。

第2層：黄灰色シルト質細粒～中粒砂からなる古土壤で、下限の層界は不明瞭で生物擾乱が顕著であった。層厚は15～20cmで、中世の土師器が出土した。本層内から中世の井戸・溝が掘られていた。擾乱を免れた調査区全域に分布すると推測される。

第3層：吹田砂堆を構成する砂層で、第3-1層と第3-2層に区分した。

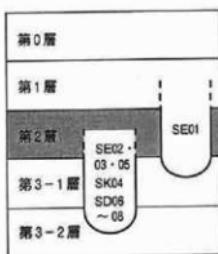


図3 層序と遺構の関係  
遺構は、本来の遺構面から約0.7m下がった第3-1層の途中で検出したもので、中世と近世の2時期に分かれる(図4)。

#### a. 中世

井戸3基(SE02・03・05)、土壙1基(SK04)、溝3条(SD06～08)を検出した。

SE02 調査区南部の東壁際で検出した井戸で、SD08を切っている。深さは1.9mあり、底の高さはTP+1.5mである。底に直径60cmの井戸側を据えており、木質は高さ60cm遺存していた。井戸の上部からは井戸瓦が円形に組まれたまま井戸内にずり落ちた状態で検出され、内部から宝篋印塔の蓮花座が出土した。また、井戸側内および埋土の上部から大量の瓦が出土した。

遺物は備前焼鉢12、唐草文軒平瓦13、平瓦14～19、瓦質20、宝篋印塔21を同化した(図5・6、写真1)。13は五葉の中心飾りの両側に退化した唐草文を配するもので、[山崎信二2000]の中世Ⅶ期(1490～1575年)に位置づけられている長岡市勝龍寺城出土の瓦と類似する。平瓦14～19は凹面にナデ、凸面に格子状のタタキ目が残り、外面には離れ砂が付着している。16～18は葉脈状の綾杉文のスタンプが凸面に付けられている。20は厚さ3.6cmあり、片面には糸切り痕が残り、同一の面に離れ砂が付着している。18・19は被熱痕が見られる。21は宝篋印塔の蓮花座部分で、四面に複弁の蓮華文を刻む。石材は花崗岩である。

SE03 調査区南部で検出した井戸で、直径約4.0mの桶鉢状の掘形の中心を2段に掘り下げていた。最下段の直径は0.6mで、底の高さはTP+1.2mである。井筒は確認できなかった。2段目付近に廃絶後に堆積したシルトの薄層が見られ、その上は人為的に埋め戻されていた。遺物は土師器皿1・2が

出土した(図5)。

SE05 調査区北端で検出した井戸で、SD06に切られている。直径3.5m以上の擂鉢状の掘形の底を、直径約1.0mの範囲で再度掘り下げており、深さは1.5mである。底の高さはTP+1.8mである。底に直径50cmの井筒の痕跡が残っていた。遺物は土師器皿3～5、瓦器碗7、東播系須恵器擂鉢11が出土した(図5)。

SK04 調査区中央東壁際で検出した。北側は現代の搅乱により遺存しないが、深さは1.2mまで確認し、北側へさらに深くなることから、井戸の可能性もある。

遺物は瓦質土器羽釜8・9、東播系須恵器10が出土した(図5)。

SD06 調査区北部で検出した南西～北東方向の溝で、SE05を切っている。深さ10cm遺存していたのみであるが、本来の深さは約0.6mと推測される。遺物は出土していない。

SD07 調査区中央で検出した南東～北西方向の溝である。東壁面で確認できる規模は、幅1.5m、深さ1.1mある。第3層に由来する細粒～中粒砂で埋没し、中位がやや暗色化している。水流の痕は認められなかつた。遺物は瓦器碗6が出土した(図5)。

SD08 調査区南部で検出した南西～北東方向の溝で、SE02に切られている。深さは0.1mしか遺存しなかつたが、本来は約0.8mと推測される。また、検出面での幅は0.9

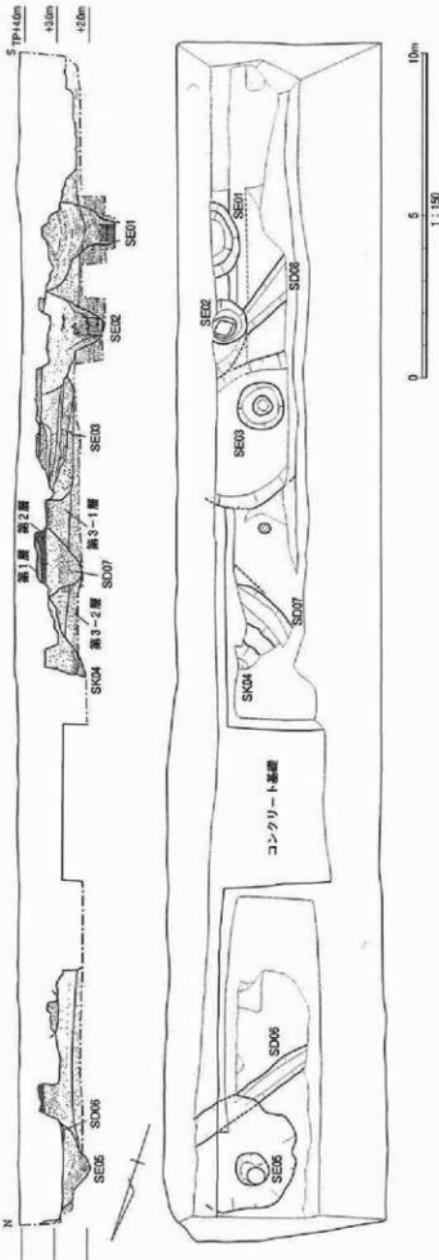


図4 検出遺構平面図および実際断面図

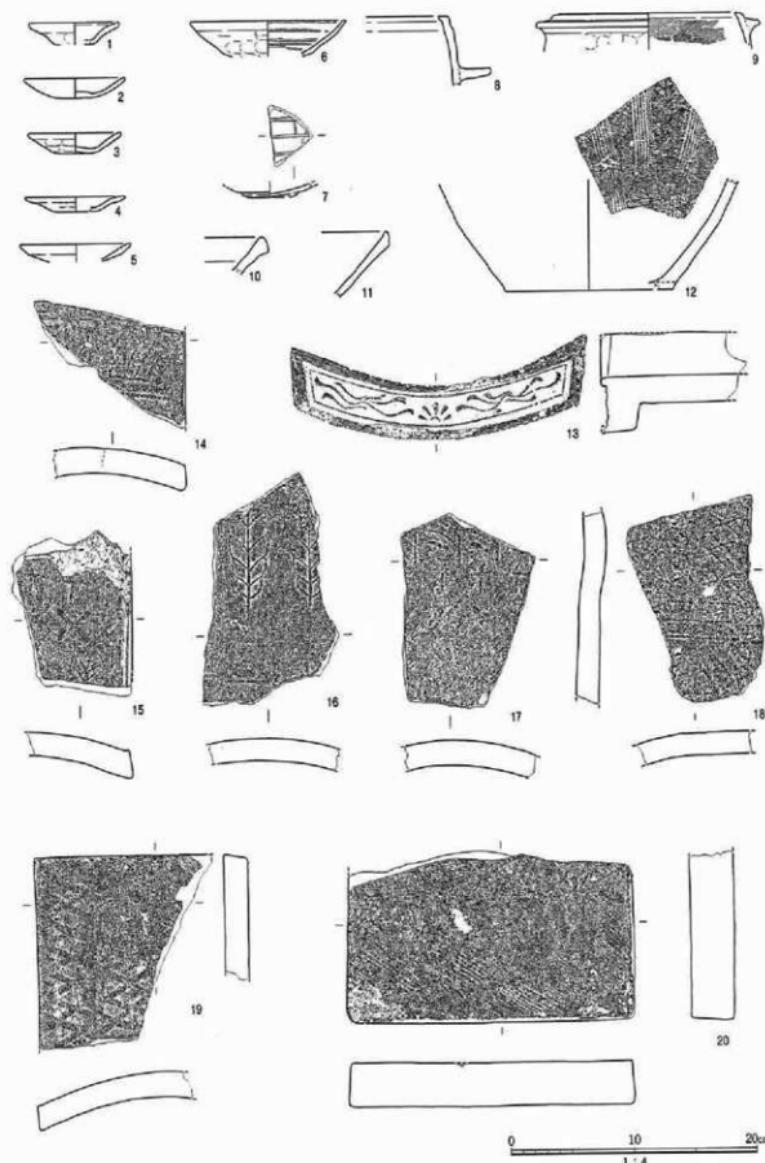


図5 出土遺物実測図(1)

SE02(12~20)、SE03(1・2)、SE05(3~5・7・11)、SK04(8~10)、SD07(6)

mあった。遺物は出土していない。

#### b. 近世

調査区南部の東壁際で井戸SE01を検出した。深さは2.2mまで確認し、下半に木板を組んだ直径50cmの井戸側が残っていた。井戸側内は人為的に埋められており、上半はシルト～細粒砂で徐々に埋没していた。大量の瓦とともに、18世紀代の土師器・備前焼・肥前磁器が出土した。

#### iii) 遺構と遺物の検討

今回検出した中世の遺構のうち、SE02からは大量の瓦とともに塼や宝篋印塔といった寺院に関わる遺物が出土し、調査地が三宝寺の寺域内にあったことを示唆する。そこで、検出した遺構の時期や性格について、若干の整理を行う。

まず、遺構の時期であるが、出土土器類は13～16世紀までと幅があり、小片かつ数が少ないとから遺構の時期を確定させることが難しい。このなかで、底部が小さい小皿1～5は、15世紀後半～16世紀前半までのものと考えられ、今回出土した遺物全体の中でも相対的に新しいことから、これらがまとまって出土したSE03・05の時期を示すものと考えられる。そして、重複関係からSE02はSE03より新しく、出土した唐草文軒平瓦13の年代観とも矛盾しない。したがって、SE02は検出した中世の遺構の中で最も新しく、出土した大量の瓦や宝篋印塔も、16世紀後半頃とされる三宝寺の廃絶に伴って投棄された可能性がある。

次に、検出した溝のうち、SD06・08は南西～北東方向であるが平行せず、南東～北西方向のSD07はSD08とほぼ直交する。遺構の重複関係や位置関係からも、SD07・08はL字に屈曲する一連の溝の可能性があり、SD07から出土した瓦器碗6の年代観から、この溝が13世紀後半に遡る可能性もある。調査地北側のSP02-1次、南東側のSP09-1次調査では、これと同一方向の中世の溝が検出されており、三宝寺の施設群がこの方向の地割に則っていたと考えられる。

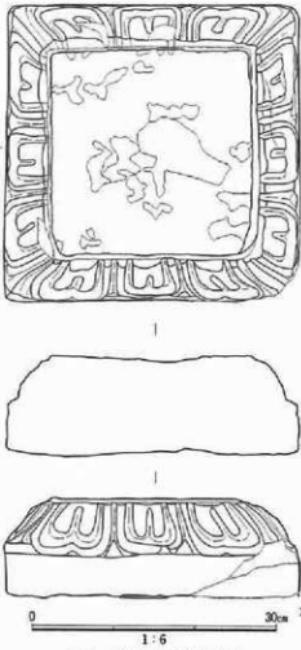


図6 出土遺物実測図(2)  
SE02(21)



写真1 宝篋印塔21

### 3)まとめ

今回の調査では、近世の井戸1基、中世の井戸3基、土壙1基、溝3条を検出した。特に、SE02からは、唐草文軒平瓦、綾杉文のスタンプのある平瓦、博、宝瓶印塔の還花座などが出土し、調査地が三宝寺の寺域内にあったことを示す重要な資料が得られた。また、これらの遺物は、16世紀後半とされる三宝寺の廃絶に伴って廃棄された可能性が示唆される。

### 引用・参考文献

井上正雅1922、「大阪府全史」卷三、p.399

西成都役所1915、「西成都史」、pp.316

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「大阪経済大学による建設工事に伴う発掘調査(SP96-1)」：「平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.3-9

大阪市文化財協会2003、「三宝寺跡伝承地の調査」：「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－」、  
pp.127-136

山崎信二2000、「奈良国立文化財研究所学報第59冊 中世瓦の研究」、奈良国立文化財研究所、pp.149

調査区遺構検出状況  
(南から)



調査区東壁地層断面  
(南西から)



SE02井戸瓦・  
宝鏡印塔出土状況  
(東から)



調査個所 大阪市東淀川区大隅2丁目15-1・15-2  
調査面積 72m<sup>2</sup>  
調査期間 平成23年3月16日～3月24日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

### 1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は三宝寺跡伝承地として周知された範囲のほぼ中央に位置し、SP96-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]の東隣である(図1)。また自然地理学的には、淀川低地と大阪海岸低地とに挟まれた淀川右岸の吹田砂堆に位置し[建設省国土地理院1983]、SP02-1次[大阪市文化財協会2003]・08-2次[大阪市文化財協会2009]調査で、縄文時代中期末～後期前半の縄文土器が出土するなど、早くから陸化が進んだ微高地で、周辺では平安時代に味原牧が設置され、放牧地として利用されていたことが知られている。遺跡名の三宝寺であるが、日本中世の禪宗の祖・達磨宗の大日房能忍(平安時代末、12世紀後半頃に活躍)の創建とされ、達磨から慧能までの禪宗6祖の舍利を奉じた舍利信仰の寺として、室町時代後期まで栄えた[原田正俊1998]。伝承では永禄年間(1558～69年)に兵火にあって焼失した[西成郡役所1915]というが、京都府八幡市正法寺に古文書や什物は伝えられている。最近のSP10-1次調査[大阪文化財研究所2011]で、中世の井戸3基、溝3条などを検出し、寺院に関わると思われる遺物も出土し、SP96-1次調査でも唐草文軒平瓦・一石五輪塔・輸入青磁碗などが出土しているから、大阪経済大学構内に三宝寺かその塔頭が存在した可能性は高いと思われる。

工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下0.7m以下に中世の遺物包含層を確認したことから、地層の年代や遭撲・遺物の分布状況を探り、この地域の歴史的変遷を復元するための基礎資料を得ることを目的に、本調査を行うことになった。調査は平成23年3月16日から開始した。図2のように大学敷地東辺にほぼ平行に調査区を設定したが、調査区中央に埋設管があるため、北区・南区に分けて調査することになった。ちなみに大学敷地東辺は座標北に対して西に約22°振っている。近代作土層下面の地表下0.6mまでの地層を重機により除去し、以下、砂堆構成層までの間を、



図1 調査位置図

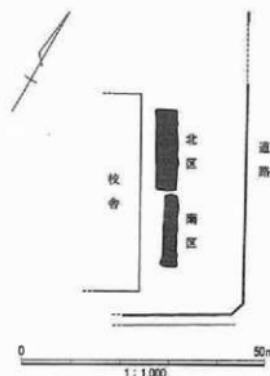


図2 調査区位置図

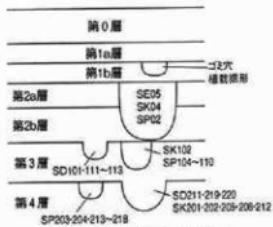
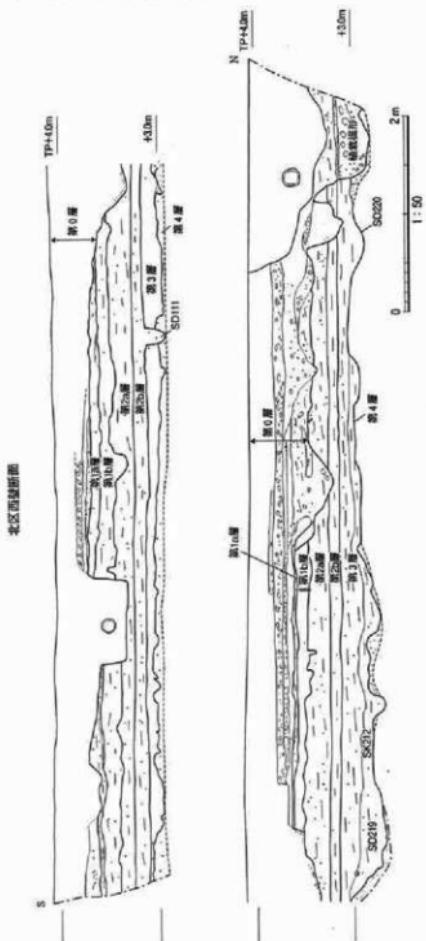


図3 地層と遺構の関係図

遺構・遺物の有無を確認しながら人力によって掘り下げ、実測図や写真などの記録を取った。3月24日に機材の撤収を含め、現地におけるすべての調査を完了した。

なお、図中の方位は、図1・11が座標北である以外は磁北を基準にし、水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、図中ではTP+○mと省略した。



## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3～5)

第0層：層厚30～60cmの現代盛土層と現代擾乱である。北区・南区と共にGL-0.2m以下に層厚10～15cmの碎石(パラス)層があるが、大学構内の仮舗装に伴うものと見られる。

第1a層：層厚5～15cmの黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂の旧表土層で、南区南側の第1b層上面で植栽掘形を切るゴミ穴を検出した。ゴミ穴はプリント地の磁器やコンクリート・スレート片を含むことから第二次大戦後のものと思われ、本層はそれ以降である。

第1b層：層厚10～20cmの灰黄褐色(10Y4/2)シルト質中粒砂の作土層で、瓦器・土器器など古い遺物を含む。本層上面から植栽掘形が掘り込まれている。

第2層はa・bの2層に細分されるが、南区の北側2/3では層理面は不明である。

第2a層：層厚10～30cmのにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質中粒砂の作土層で、堀端鉢の小片が出土した。

第2b層：層厚10～15cmの褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂の作土層

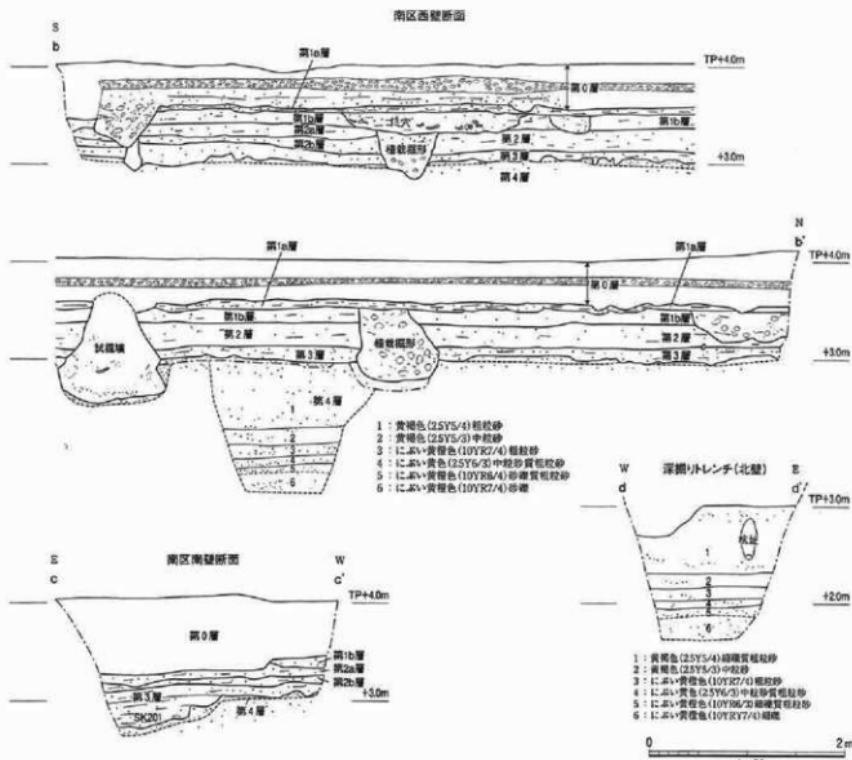


図5 南区西壁・南壁地層断面図

で、土師器皿10、青磁碗11、白磁皿12などの輸入磁器のほか、須恵器・瓦器の細片を含む。下面でSD101・111~113の鋸溝を検出した。

第3層：層厚10~50cmのオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂の古土壤で、瓦器碗7や東播系須恵器鉢8・9など13世紀の遺物を含む。上面で土器SK102・小穴SP104~110を検出した。第4層上面のSD211・219・220、SK201・202・205・206・212などの遺構を最終的に埋める。

第4層：層厚70cmの黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂層で、表面近くは擾乱され、上方粗粒化が見られる。南区南半の本層中(TP+2.9m)からローリングで丸くなった土師器片が出土した。

## ii) 遺構と遺物

### a. 錦倉時代(第4層上面遺構) (図6・7・9)

SD211 北区の長さ6.5m以上、幅0.7~1.0m、深さ0.2mの座標北に対して西へ約50°振る溝で、に赤い黄褐色(10YR5/4)中粒砂で埋没する。SD220が西から合流する。

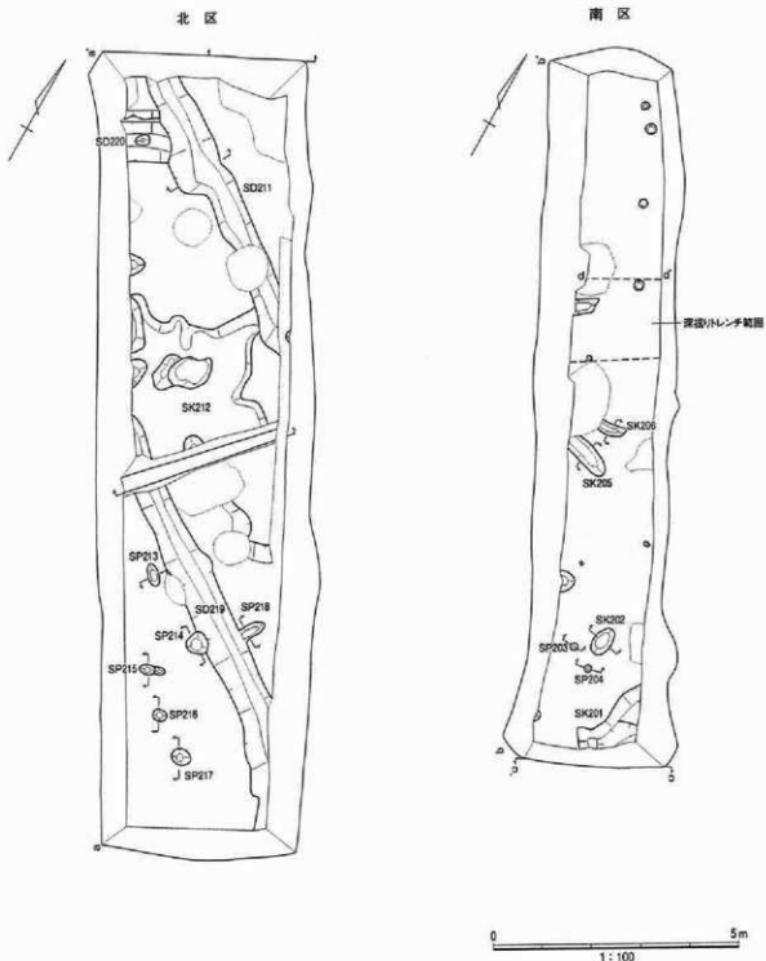


図6 第4層上面造構平面図

SD219 北区の長さ9.0m以上、幅0.7m、深さ0.4mの座標北に対して西へ約50°振る溝で、下部は  
にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂、上部はSK212の埋土と同じにぶい黄褐色(10YR5/4)中粒  
砂質細粒砂で埋没する。

SD220 北区でSD211に合流する溝で、長さ1.0m以上、幅0.8m、深さ0.2mで、第3層のオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂で埋まる。

SK201 南区南端の長さ1.8m以上、深さ0.3m、第3層土のオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒

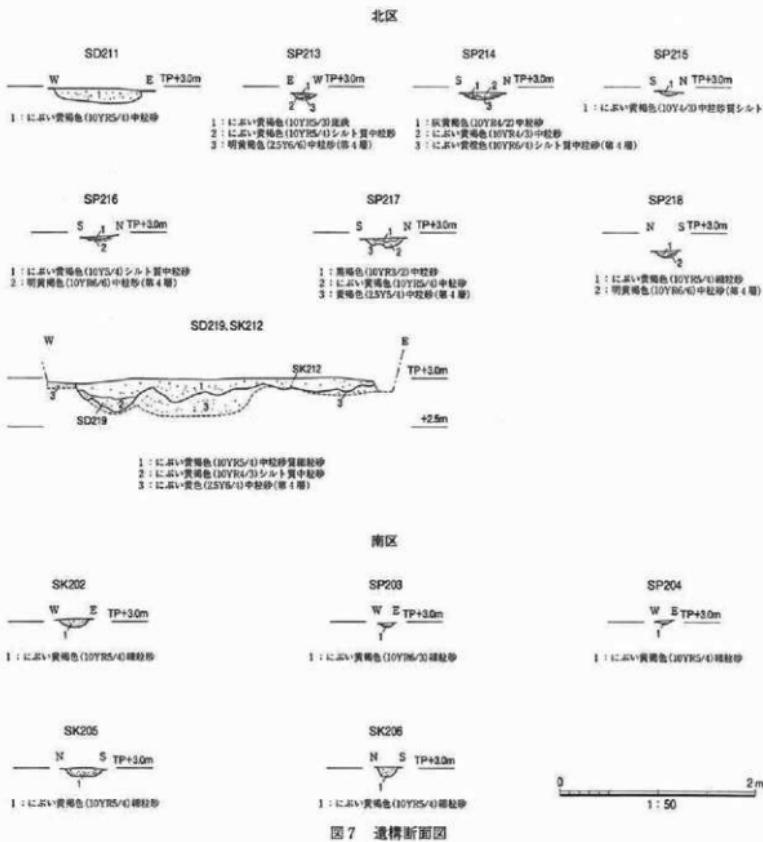


図7 遺構断面図

砂で埋まる不整形の土壌で、13世紀後半と思われる土師器皿1が出土した。

SK202 南区の長さ0.6m、幅0.3m、深さ0.1mの楕円形を呈する土壌で、にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂で埋まる。

SK205 南区の長さ1.0m以上、幅0.3m、深さ0.1mの土壌で、にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂で埋没する。

SK212 北区の長さ3.0m、幅2.5m、深さ0.2mの不整形の土壌で、SD219の東肩を切り、にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂質細粒砂で埋没する。底面に土壤状の凹凸が見られる。土師器皿2・瓦器碗3が出土した。2は13世紀前半、3は和泉型で、尾上編年[尾上実1983]IV-2期、13世紀後半のものと

見られる。

このほか南区に直径0.1m、深さ0.1mの円形を呈する小穴SP203・204、北区に直径0.2~0.4m、深さ0.1mの円形、もしくは梢円形を呈する小穴SP213~218がある。いずれも、にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂などで埋まる。

b. 室町時代前業(第3層上面遺構)(図8・9)

SK102 北区の長径1.0m、短径0.8m、深さ0.4mの

土壌で、にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂などで埋まる。 SK201(1)、SK212(2・3)、SD112(4)、SE05(5・6)

SP104~110 北区北端で検出した直径0.2m、深さ0.1mの小穴である。

c. 室町時代中業(第2b層下面遺構)(図8・9)

SD101 北区の長さ4.5m、幅0.2m、深さ0.1mの鉢溝で、座標北に対して西に約50°振る。

SD111~113 北区の長さ2.0~3.5m、幅0.2m、深さ0.1~0.2mの鉢溝で、座標北に対して西に約50°振る。 SD112から土師器脚台付杯4が出土した。

d. 江戸時代(第2a層上面遺構)(図8・9)

SE05 北区北端で検出した井戸で、掘形は上端直径1.6m、下端直径0.5m、深さ2.3mを測り、板を円形に組んだ井戸側は直径0.7mあった。埋土上部から中世の平瓦や体部外面に片影蓮弁文をもつ青磁碗5、下部から猿の土人形6が出土した。

SE04 SE05と接するように掘られた直径1.7m、深さ0.5mの土壌で、にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂を埋土とする。

このほか、南区南半にSP02のような直径0.1~0.2m、深さ0.1~0.2m、暗褐色(10YR3/4)中粒砂を埋土とする小穴がある。

e. 包含層出土遺物(図10)

第3層 瓦器楕7、東播系須恵器鉢8・9が出土した。7は尾上編年III-3期の13世紀前半、8・9は13世紀のものと見られる。

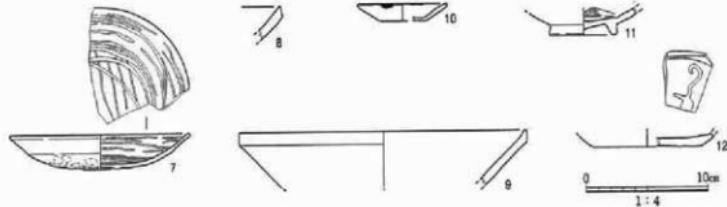


図9 遺構出土遺物実測図

第3層(7~9)、第2b層(10~12)

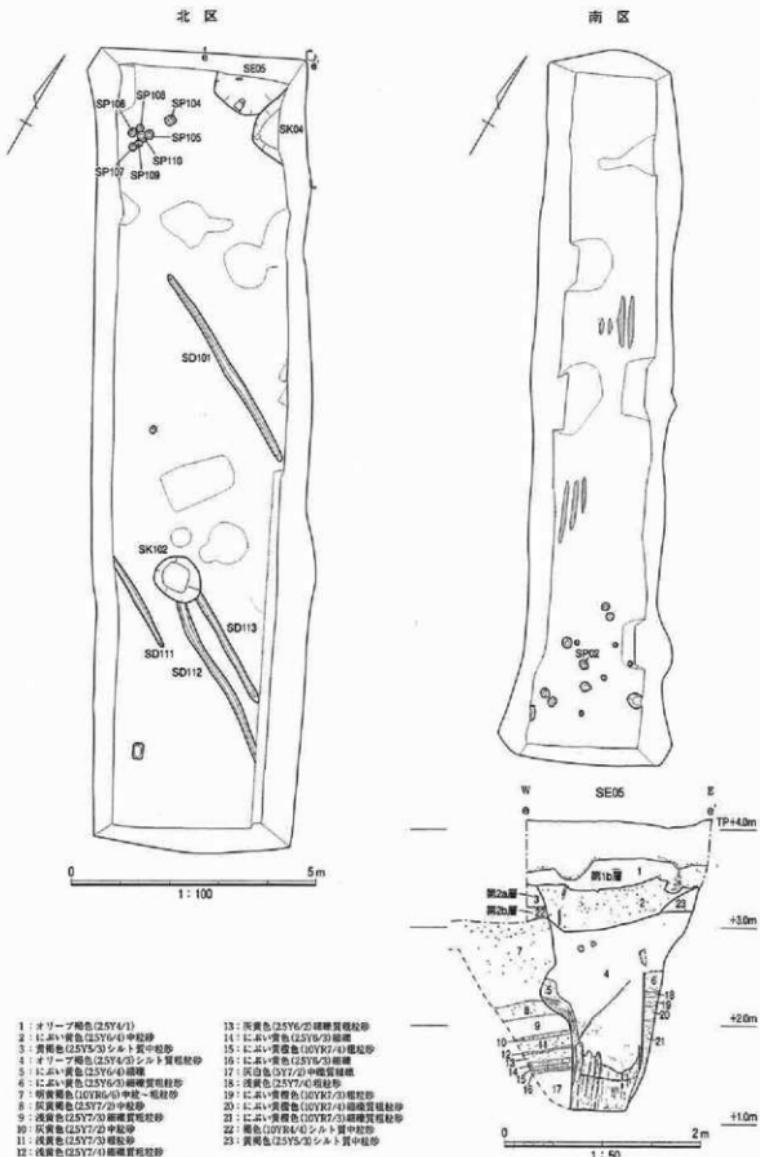


図8 第2a層上面・第2b層下面・第3層上面過構平面図およびSE05断面図

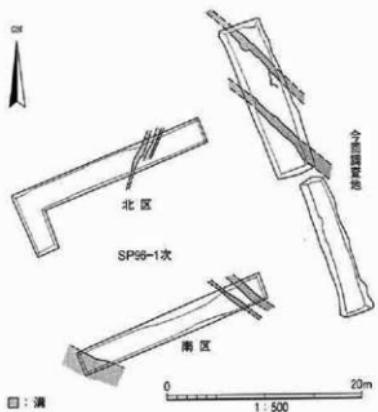


図11 錦倉時代の溝と鋤溝

第2b層 土師器皿10、青磁碗11、白磁皿12が見つかった。10は内底面端に産んだ圓線があり、5世紀のものと思われ、11・12は輸入磁器で、11は内面に御描文があり、12は内面に蔓状の彫刻を見せ、いずれも13世紀のものと思われる。

### 3) 遺構の検討(図11)

西隣のSP96-1次調査も含めて、砂堆構成層(今回調査の第4層)上面の様相から、当地の鎌倉時代の土地利用を検討しておきたい。今回の砂堆構成層上面はTP+3.0~3.1mで、SP96-1次南区より0.1mほど低いが、北区とはほぼ同じである。SP96-1次南区西端でも砂堆構成層上面

で、座標北に対して西に約50°振る溝をもち、その直上層下面で同方位もしくはそれに直交する鋤溝を検出している。すなわち当地は鎌倉時代において耕作地であったと思われる。これに対して中世の井戸などの遺構を検出したSP10-1次調査は、当調査地から西へ180m離れているのみだが、砂堆構成層上面はTP+3.4mと高い。その北西30mの繩文土器が出土したSP02-1次調査では、砂堆構成層上面はTP+3.5mとさらに高くなっている。ここでは幅5.0m、深さ1.0mで、断面逆台形の北北東-南南西方向の溝が、18mにわたって検出されている。

当調査地南方80mのSP09-1次調査地の北東に位置するB区は、砂堆構成層上面はTP+2.8mと低く、14世紀の幅3.0m、深さ0.6mの水成の堆積物で埋没する北東-南西方向の溝と、やはり14世紀の幅2.7m、深さ0.9mの北西-南東方向の溝が検出され、発掘担当者は区画溝の可能性を考えている。

当調査地北方100mのSP08-2次調査では、西部調査区の砂堆構成層上面はTP+2.9~3.0mと高いのに対して、東部調査区はそれから45mしか離れていないにもかかわらず、砂堆構成層上面はTP0.9~2.2mと、東に急に下がっていく。

SP10-1次調査で、中世の井戸3基、溝3条などを検出し、井戸1基からは唐草文軒平瓦、綾杉文のスタンプのある平瓦、埴、宝篋印塔の蓮花座などが出土し、SP96-1次調査でも唐草文軒平瓦・一石五輪塔・輸入青磁碗などとが出土しており、寺院の中心部ないしは周辺部と考えられることから、砂堆構成層の高いところを寺域として、周辺のやや低い場所を耕作地としていたと思われる。

### 4) まとめ

今回の調査では周辺の調査成果と同様、中世の遺構・遺物を検出することができた。砂堆構成層上面で鎌倉時代の耕作に伴う溝を検出し、西隣のSP96-1次調査と同方位であることを確認した。この北東-南西方向、ないしは北西-南東方向が、中世の当地の地割方向であった可能性が高い。

三宝寺跡伝承地の調査も、大阪経済大学構内で行ったSP10-1次調査を契機にいよいよ核心に近づきつつあるが、今後の調査によるデータの蓄積で、各時期の寺域の建物配置や周辺の耕作地の状況を明らかにしていきたい。

#### 引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「大阪経済大学による建設工事に伴う発掘調査(SP96-1)」:『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-9
- 大阪市文化財協会2003、「三宝寺跡伝承地の調査」「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-2001・2002年度-」、pp.127-136
- 大阪市文化財協会2009、「大阪市都市整備局による瑞光第2住宅増築工事に伴う三宝寺跡伝承地発掘調査(SP08-2)報告書」
- 大阪文化財研究所2011、「東淀川区大隅二丁目における建設工事に伴う三宝寺跡伝承地発掘調査(SP10-1)報告書」
- 尾上寅1983、「南河内の瓦器椀」:『古文化談叢』 稲澤一夫先生古稀記念論集刊行会、pp.689-705
- 建設省国土地理院1983、「土地条件調査報告書(大阪地区)」
- 西成郡役所1915、「西成郡史」、p.316
- 原田正俊1998、「達磨宗と攝津国三宝寺」:『日本中世の禅宗と社会』 吉川弘文館、pp.55-71



北区 第4層上面(北から)



南区 第4層上面(南から)



北区 SD219とSK212(東から)



北区 第3層上面・第2b層下面(北から)



北区 SE05断面(南から)



南区 南壁断面

旭区太子橋一丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(TH10-1)報告書

調査個所 大阪市旭区太子橋1丁目229  
調査面積 49m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年12月21日～12月25日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、高橋工

## 1) 調査に至る経緯と経過

旭区太子橋町は淀川南岸で豊里大橋の西側に位置する(図1)。北東に約1kmの淀川河川敷には中世の遺物が散布する橋寺廃寺がある。太子橋町では、過去に発掘調査は行われていないものの、周辺には同様な遺跡が存在することが想定された。

当地において建設工事が計画されたため、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表下0.3mで中世～近世のものとみられる遺物包含層が発見されたため本調査が行われることとなった。

調査区は敷地東南部に設定した(図2)。当初、100m<sup>2</sup>を調査する予定であったが、並行する建物解体工事のための進入路を確保するため、教育委員会と協議の上、標記調査面積とした。現代の地層である第1層の大部分を重機によって除去した後、以下、地山層(第2層)までの地層を人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。本報告書で用いた水準値はTP値で、図中ではTPと省略した。また、図1は座標北を基準に、それ以外の平面図は磁北を基準に作成した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3)

現代のグランド整地層(第0層)の下位で2層を確認した。

第1層：現代の盛土層で、層厚は約50cmあり、以下の3層に細分された。

第1-1層：オリーブ褐色シルト質細粒砂からなり、西方に厚く堆積していた。

第1-2層：褐色細粒砂からなり、調査区西北部にのみ分布していた。コンクリート殻を含む。

第1-3層：黄褐色偽礫質シルトからなり、東方に厚く堆積していた。層中から土師器・瓦器の細



図1 調査位置図

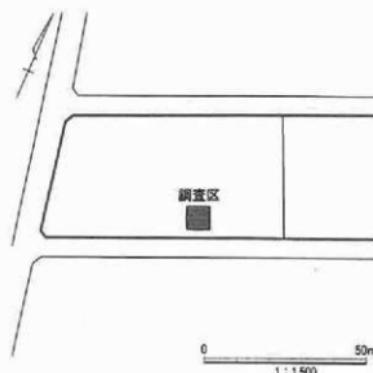


図2 調査区位図

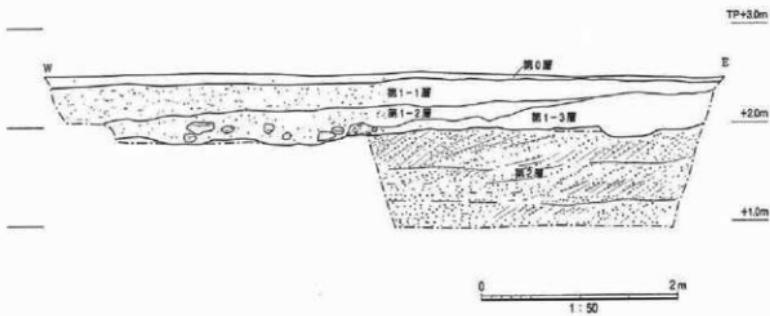


図3 北堀地層断面図

片が出土したが、混入品で、本層の時期を示すものではない。

第2層：黄褐色細礫～中粒砂からなる淀川の氾濫堆積層で、層厚は100cm以上あり、下限は確認できていない。西へ傾斜するフォアセッテ葉理が顕著に観察され、東→西への水流による堆積が反復されたものとみられた(写真中)。

#### ii) 遺構と遺物(図4)

第2層上面で10個の小穴を検出した。これらは直径0.15～0.40mの円形で、深さは0.03～0.30m、褐色シルト～中粒砂で埋まっていた。柱痕跡が確認されたものはなく、性格は不明である。出土遺物はなく、詳細な時期も不明であるが、中世の遺物が出土した第1～3層が近隣から客土されたものであれば、これらの遺構の年代も中世に求められる可能性がある。

#### 3)まとめ

今回の調査では、中世の遺物と時期は不明ながら10個の小穴群を発見した。橋寺廃寺の周辺に展開した集落の一部である可能性があり、今後もその実態把握に努めなければならない。また、淀川の古流向に関する情報を得たことも重要である。

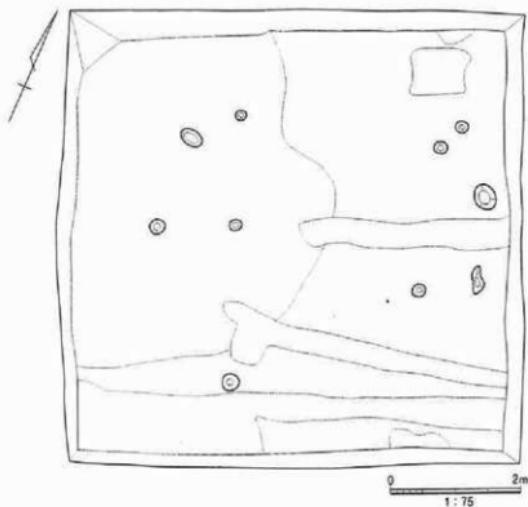


図4 遺構平面図

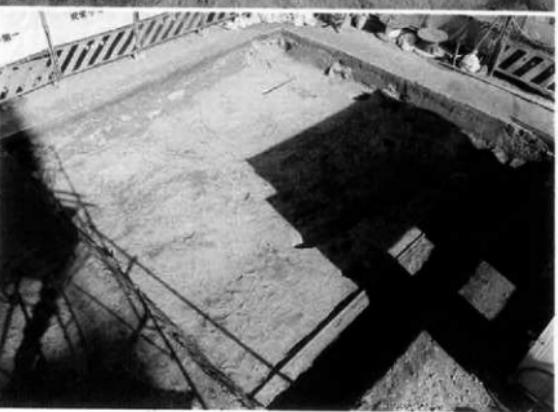
調査状況  
(東から)



北壁地層断面



第4層上面  
(南東から)



鶴見区放出東二丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(HA10-1)報告書

調査個所 大阪市鶴見区放出東2丁目20-19  
調査面積 80m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年10月20日～10月26日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、京崎覺

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は弥生時代には河内湖の中に位置しているが、古代以降は寝屋川や旧大和川の流路が合流してさらに淀川に向かう位置に当る(図1)。東成郡の「放出村」の文献記録は平安時代に初見され、調査地の南200mには式内社の阿速連雄神社が鎮座することから、この周辺が陸地化したのは平安時代後期まで遡ると推定される。

事前の試掘調査では、現地表から1.3m以下に中世の包含層や遺構面が検出されたため、敷地内の2箇所に10m×4mの調査区(北区・南区)を設定し、発掘調査を行うことになった(図2)。包含層が確認された深度まで重機により掘削したが、北区は東2/3が搅乱および地盤改良剤による土壤硬化により調査できず、西1/3のみを対象に2.0mまで人力で掘削して調査を行った。また、南区も搅乱が多く全体の1/3程度が調査対象になった。10月25日に記録作業を終えて機材の撤収を行い、翌26日に埋戻しを完了して現場での作業を終えた。

以下にその結果を報告する。なお、図1は座標北を、それ以外は磁北を基準に作図し、水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：現代の盛土および搅乱の埋土である。

第2層：オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土ないし暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルトからなる作土層である。層厚10cmで、土師器・瓦質土器・肥前磁器染付・関西系陶器の細片が出土した。

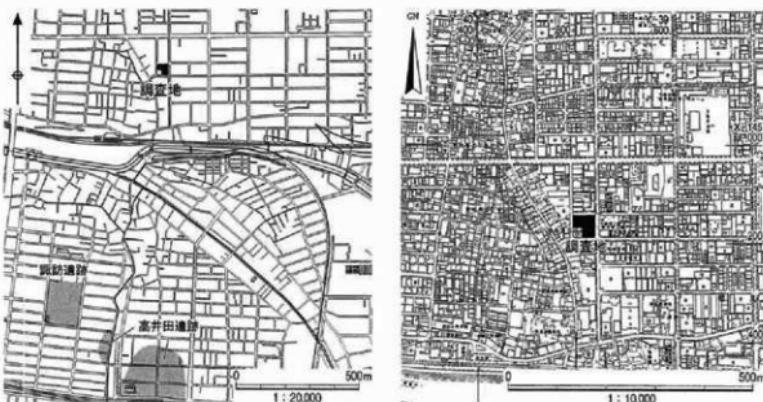


図1 調査地位置図

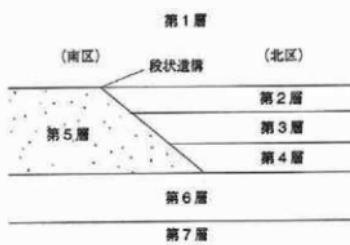
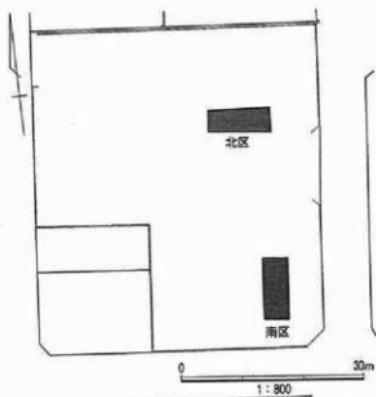


図2 調査区位置図

図3 地層と造構の関係図

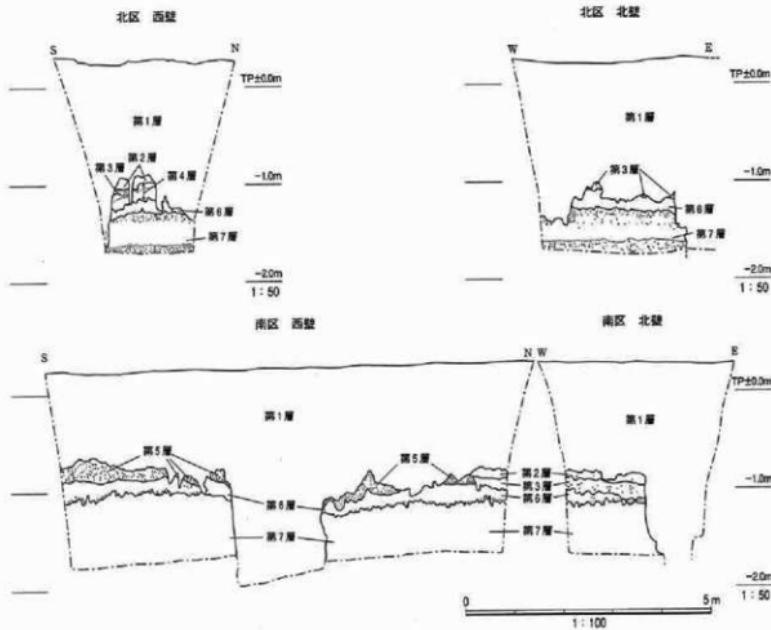


図4 地層断面図

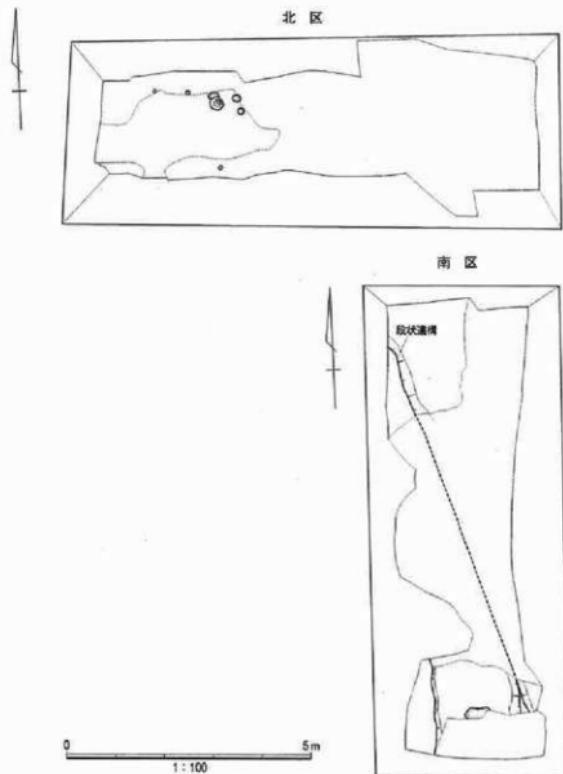


図5 第5層上面遺構平面図

第3層：第2層直下に認められる暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層の整地層で、層厚は10~15cmである。

第4層：黒褐色(2.5Y3/1)シルト層で、細粒砂の偽礫を含む整地層である。北区のみに存在する。土師器皿の細片が出土した。

第5層：黄褐色(2.5YR5/3)細粒~粗粒砂層で、河川氾濫により堆積した水成層である。層厚は最大で20cmであり、南区のみに遺存する。土師器皿の細片が少量出土した。

第6層：灰色(5Y4/1)~黒褐色(2.5Y3/1)粘土層である。層厚は約20cmで、作土層であろう。土師器皿・瓦器碗の細片が出土した。

第7層：黒褐色(2.5Y3/1)~オリーブ黒色(5Y3/1)粘土~粘土質シルト層で植物遺体を多く含み、湿地における自然堆積層である。土師器・須恵器・瓦器碗の細片が出土した。

## ii) 遺構と遺物(図5)

南区の第1層を除去すると西壁際では第5層が検出されたが、その際に、東に低くなる南北方向の直線的な段状遺構が確認できた。この段より東には第2層の作土と第3層の整地層が存在しており、第2層の作土に伴う土地境界をなす段であったと推定される。

出土遺物には第2層からの遺物に関西系陶器片があるため、この段状遺構を伴う耕作地は江戸時代後半期以降のものと思われる。

一方、第5層以下の地層からは土師器・須恵器・瓦器など中世の遺物が少量出土しており、中世に遡る地層と考えられるが、第6・7層から出土した土師器・須恵器・瓦器柄などの細片には平安時代後期に遡るもののが含まれ、この地域周辺の開発時期の一点を示していると思われる。

## 3)まとめ

今回の調査では、周辺地域が耕作地として開発されたのが平安時代後期以降であることを示唆する資料を得ることができた。文献記録と合致する所見ではあるが、出土した遺物は細片かつ少量であり、明瞭な遺構も確認することができなかったため、開発時期の確定にはさらなる資料の蓄積が必要であるといえる。今後の周辺調査の進展により、河内平野の地形変化や開発過程の具体的姿が明らかになるであろう。

北区全景(西から)



南区全景(北から)



南区北壁地層断面



阿倍野区阿倍野筋三丁目における建設工事に伴う  
阿倍野筋北遺跡B地点発掘調査(AS10-3)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区阿倍野筋3丁目50-3  
調査面積 120m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年12月9日～12月17日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、高橋工

## 1) 調査に至る経緯と経過

阿倍野筋北遺跡は上町台地上に立地しており、東は阿倍寺跡に接し、南には阪神高速道路松原線を挟んで阿倍野筋南遺跡がある。阿倍寺は7世紀後半創建とされる古代寺院で、AB98-6次調査では寺域の北辺を画する防御用とみられる中世の溝が発見されており、この時期まで存続したものと考えられている。阿倍寺跡北西のAS06-3・AB06-1次調査では江戸時代の溝・土取り穴などが見つかっているが、出土遺物には7世紀代の瓦も含まれ、阿倍寺の創建年代を示している。阿倍野筋西側ではAS06-4次調査が行われており、西南西方向へ開く谷底の川から15世紀の辛塔婆が多量に出土して注目された。阿倍野筋南遺跡では弥生時代末～古墳時代前期を中心とする集落遺構が発見されている。今回の調査地は阿倍寺の推定寺域の西200mに当る(図1)。

当地において建設工事が計画されたため、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表下0.5m付近で地山層が検出され、それを掘り込んだ遺構も発見されたため本調査が行われることになった。

調査区は敷地中央やや北東側に設定した(図2)。現代の地層である第1層を重機によって除去した後、地山層までの地層を人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。本報告書で用いた水準値はTP値で、図中ではTPと省略した。また、図1は座標北を基準に、それ以外の平面図は磁北を基準に作成した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3)



図1 調査位置図



図2 調査区配置図

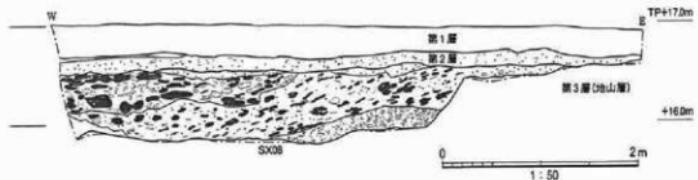


図3 北壁地層断面図

表土を含め、3層を確認した。

第1層：碎石や地山層の偽礫からなる現代の盛土層で、層厚は約30cmである。

第2層：にぶい黄褐色細礫質シルトからなる作土層で、層厚は15cmである。本層からは肥前磁器瓶3や肥前磁器青磁染付蓋4が出土した(図6)。19世紀の地層である。

第3層：黄褐色粘土質シルト～細粒砂からなり、上方に細粒化していた。上町台地を構成する地山層である。以下に報告する遺構はすべて本層上面で検出された。

#### ii) 遺構と遺物(図4～6)

検出された遺構は、主に暗褐色シルトからなる埋立て土(仮にA類と呼ぶ；以下同様)を埋土とする直径約1m以下のもの(SX10・15～17・19)と、黒色シルト偽礫・地山層偽礫・褐色細粒砂からなる埋立て土(仮にB類と呼ぶ；以下同様)を埋土とし、溝状ないし不整形の平面形をもつ比較的大規模なもの(SX01～08)の2者があった。

SX10 SX07の基底で検出した土壌状の遺構で、東西0.6m、南北0.8m、現存する深さは0.2mである。

SX15～17 SX06の北側に3個まとめて検出された小穴である。直径は0.2～0.4m程度で、深さは0.2～0.5mほどである。建造物を構成する柱穴の一部である可能性はあるが、その復元はできなかつた。

SX19 SX07の南辺で検出された小穴で、直径は0.2m、深さは0.2mである。

以上の遺構は共通した埋土(A類)をもち、近い時期に築かれた遺構とみられる。遺物が出土しなかつたため詳細な時期は不明であるが、A類の遺構埋土は阿倍野筋南跡地で検出された弥生時代末～古墳時代前期の集落遺構の埋土に類似しており、この時期の遺構である可能性がある。

SX01 調査区南端付近で検出された平面形が不整形な遺構で、東西6.3m以上、南北2.7m、深さは0.6mである。

SX02 調査区南部で検出された平面形が不整形な遺構で、東西4.9m以上、南北2.9m以上、深さは0.4mである。本遺構からは土師器皿1・瓦器碗2・肥前磁器染付蓋5が出土した。遺構の年代を示す遺物は肥前磁器5で、18世紀のものである。土師器1・瓦器2は中世のもので、混入品である。

SX03 調査区東辺部で検出された平面形が不整形な遺構で、東西1.4m以上、南北2.7m以上、深さは0.2mである。

SX04・05 調査区中央部で検出した土壌状の遺構で、長辺は1.5～2.0m、深さは0.2～0.3mほどである。

SX06 調査区中央で検出された東西方向にのびる平面形が溝状の遺構である。幅は最大で2.4m、

深さは0.4mである。埋土は上述の埋戻し土で、水流や滯水の痕跡がある埋土は見られず、溝ではないと判断した。

SX07 調査区北部で検出した平面形が不整形の遺構で、東西6.0m以上、南北5.2m、深さ0.5mであった。

SX08 調査区北端部で検出した平面形が不整形な遺構で、東西4.0m以上、南北1.0m以上、深さは0.7mであった。SX07との境は障壁状に掘り残されていた。本遺構からは関西系陶器鍋6が出土した。19世紀のものである。

以上の遺構は共通した埋土(B類)をもち、近接した時期に埋められたものとみられる。その時期は、出土した遺物の年代観から18世紀後半から19世紀ごろとみてよい。これらの遺構は、不整形な平面形や、遺構間の壁を障壁状に掘り残すこと、埋土の状況から判断して壁土を探掘した土採り穴であろう。

### 3)まとめ

今回の調査で検出された遺構のうち、B類の埋土をもつ遺構は近世後半の土採り穴であると考えられた。この時期の土採り穴は四天王寺を中心に、北は近鉄上本町駅周辺から南は阿倍野地域までの広い範囲で発見されており、本調査地はその南限に近い。これらの土採り穴は江戸時代に「天王寺土」などと呼ばれて好まれた壁土の採掘跡であり、19世紀代に掘られたものが多いことから、近世大阪の大火である「妙智焼け」や「大塩焼け」の復興にその原因を求める重要な指摘もある[大阪市文化財協会2007]。今後の課題としては、その分布範囲の把握や遺構形態の分類、掘削時期の確定などがあり、その作業を通じて近世大阪南部域の土地利用・市街地形成の過程の一端が明らかになると考えられるのである。

また、A類の埋土をもつ遺構については、弥生時代末～古墳時代前期の集落遺構の埋土に類似し、この時期の遺構である可能性を指摘した。このことは阿倍野筋南連路の同時期集落の分布範囲に関係

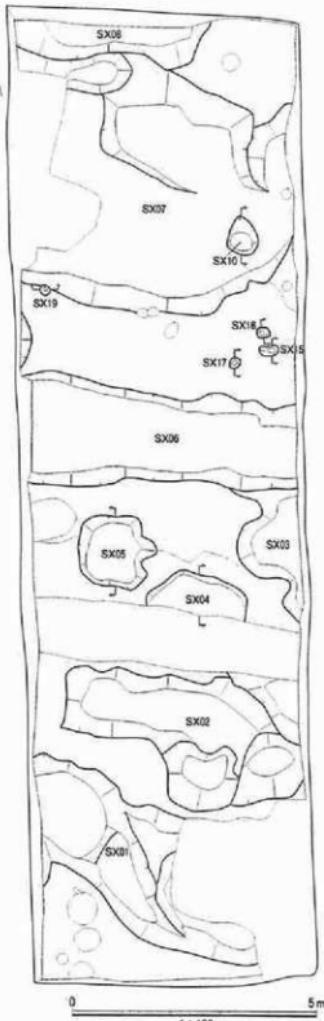


図4 遺構平面図

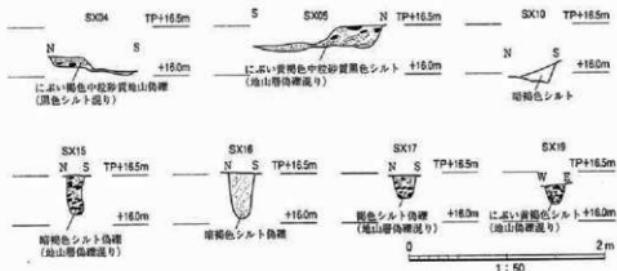


図5 造構断面図

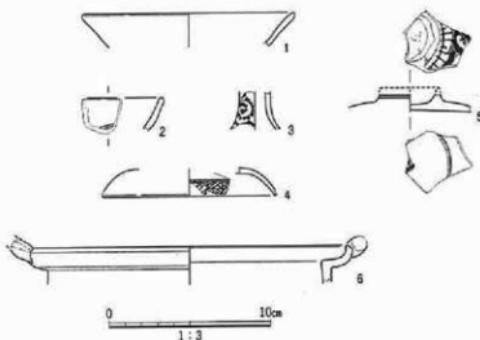


図6 出土遺物実測図  
SX02(1・2・5)、第2層(3・4)、SX08(6)

しており、今後この地域でも注意を継続していかなければならぬ。

#### 引用文献

大阪市文化財協会2007、【株式会社近鉄百貨店による建設工事に伴う阿倍野筋北遺跡発掘調査(AS06-3)報告書】

地山層上面全景  
(南から)



南部地山層上面  
(北西から)



北部地山層上面  
(南西から)



阿倍野区王子町四丁目における建設工事に伴う  
王子町4丁目所在遺跡発掘調査(OZ10-1)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区王子町4丁目1  
調査面積 1,450m<sup>2</sup>  
調査期間 平成23年1月17日～3月29日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、岩本正二、尾上実、平井和

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地東南部、南西に緩やかに傾斜する台地上に立地し、中世の集落跡である王子町4丁目所在遺跡に当る(図1)。これまでの発掘調査(OZ07-1次調査)では、中世の溝や土壙が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]。調査地の北西側約600mの阿倍野元町所在遺跡は古墳時代から中世にかけての集落跡であり、西側約350mには熊野街道が、すぐ西側には近世の阿倍野街道が南北に通っている。また、調査地の北側約200mでは近年の発掘調査(OZ09-1次調査、北畠公園遺跡)で弥生時代後期の大溝が確認されており[大阪文化財研究所2011]、調査地の一帯では中世ばかりでなく弥生～古墳時代の集落や墓が存在していたと想定できる。

当該地で大阪市教育委員会が8箇所で試掘調査を行ったところ、現地表下0.6m以下のところで中世の遺物包含層・遺構面を検出した。今回の調査はこうした地層の年代や遺構・遺物の状況を明らかにし、この地域の歴史的変遷を明らかにする基礎資料を得ることを目的として実施した。

調査にあたっては、調査区を2箇所設定し(図2)、北側をA区(50×21m、1050m<sup>2</sup>)、南側をB区(40×10m、400m<sup>2</sup>)とし、両調査区とも、機械により現代の盛土・攪乱を削除した。その後は、人力によつて掘り進め、遺構の検出や遺物の取り上げを行い、基盤層まで掘り下げ、実測図を作成し、写真撮影を行つた。なお、本報告書の図中の方位は図1は真北を基準にした以外は座標北を基準にしている。水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、図・文中ではTP+○mと記している。

## 2) 調査の結果

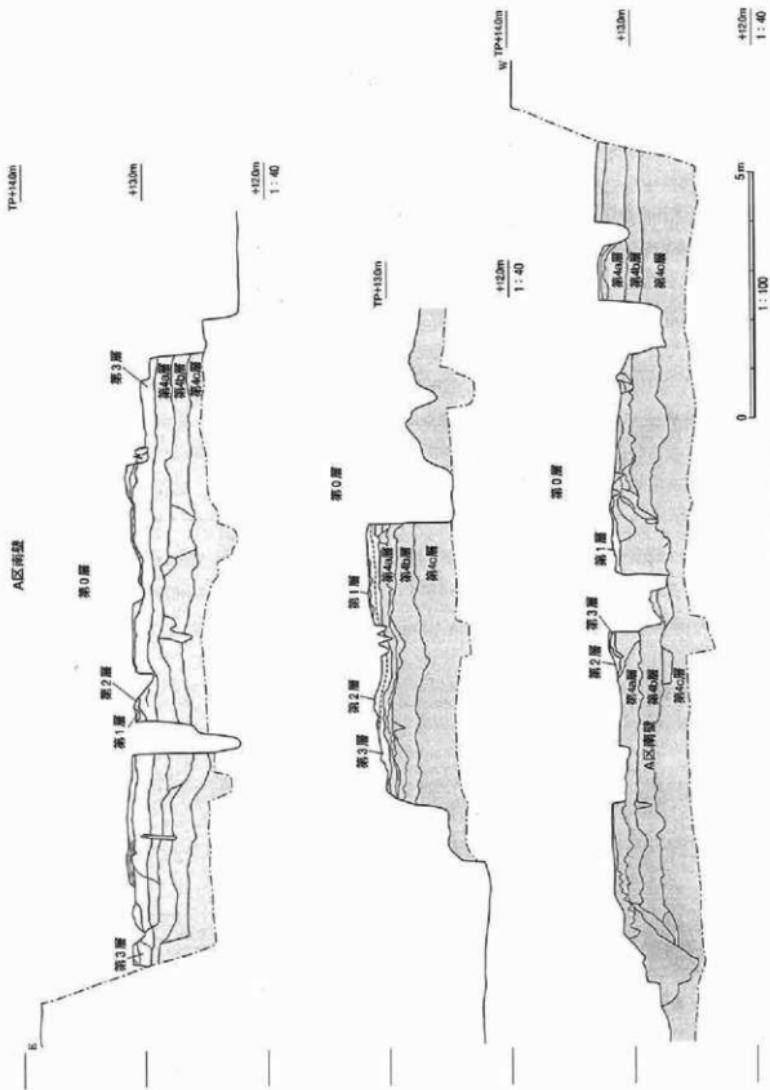
### i) A区



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図



a. A区の層序(図3・4)

第0層は近・現代の盛土・擾乱層である。日本住宅公団阪南団地建設(1961年建設)以後の盛土および擾乱層で、層厚は60~190cmである。一部には、旧制大阪高等学校(1922年開校)時代の整地層であ

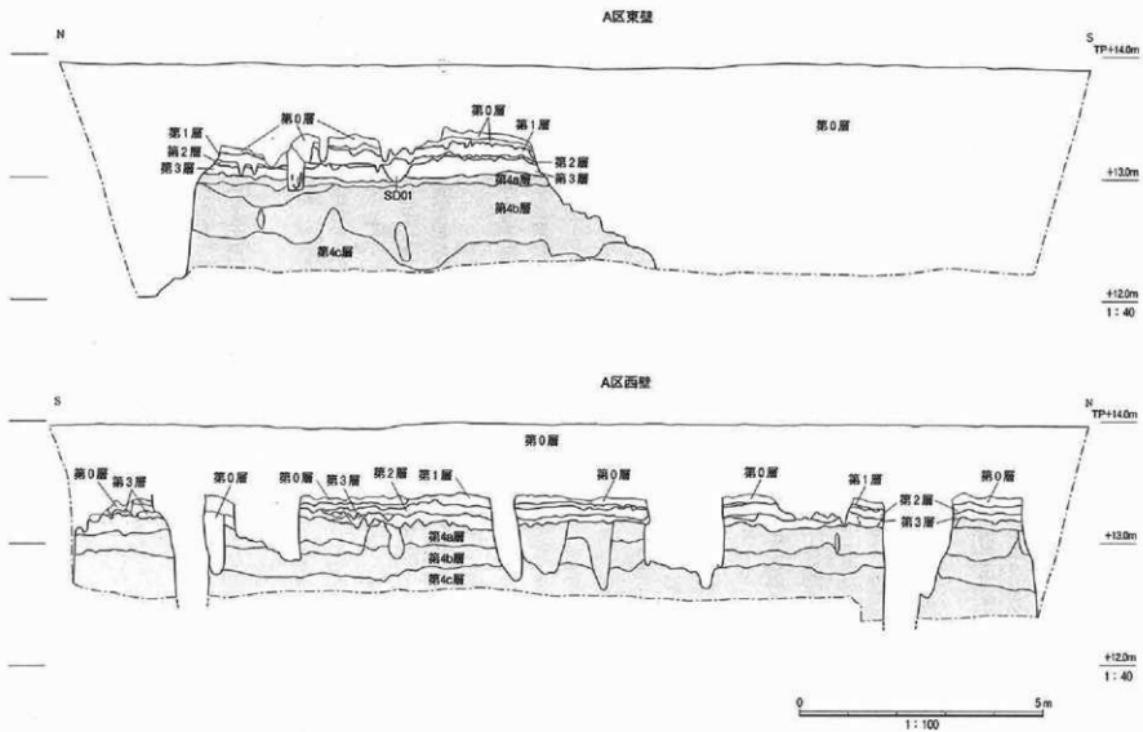


図4 A区地層断面図(東壁・西壁)

る灰白色のたたき(三和土)層が残る箇所がある。

第1層は灰黄褐色(10YR4/2)～にぶい黄橙色(10YR6/4)の細粒～粗粒砂質シルトである。層厚は5～10cmで、近代後半の作土層である。弥生時代～近代の遺物が出土した。

第2層は褐色(10YR4/4)～にぶい黄褐色(10YR5/4)の中・細礫～粗粒砂質シルトで、層厚は3～7cm、近世～近代前半の作土層である。弥生時代～近代の遺物を含み、明治30年以降の瀬戸美濃焼磁器が出土した。

第3層はオリーブ褐色(2.5Y4/6)～暗褐色(10YR3/4)の粘土質シルト～粗粒砂質シルトで、層厚は3～15cm、中世の作土層である。土師器(15～16世紀)・東播系須恵器・瓦器・常滑焼・備前焼・青磁(15世紀)・白磁・瓦などが出土した。

第4層は自然堆積層であり、当該地の基盤層である上町層の上部にあたる。ところどころに、風倒木の痕跡と見られる箇所がある。第4層はa・b・cの3層に分けた。第4a層は、にぶい黄褐色(10YR5/4)～褐色(7.5YR4/3)の粘土質シルトである。第4b層は明黄褐色(10YR6/6)の粗粒砂混り粘土質シルトである。第4c層は黄褐色(10YR5/8)～浅黄色(2.5Y7/4)のシルト質細粒砂～粘土質シルトで、巣穴の化石を含む。

#### b. 鎌倉～室町時代の遺構と遺物(図5・9)

第4層上面で小溝、溝、土壤を確認した。中・東部は擾乱が激しく遺構は残っていなかった。

小溝群 A区南西部を除き、A区全域で検出した。そのうち、SD03～05・07・10～13・22は幅0.05～0.40m、深さ0.02m前後の浅い溝で、埋土は第3層であるオリーブ褐色～暗褐色の粘土質シルト～粗粒砂質シルトである。いずれの溝も東西溝で、北で西に74°～75°振る。南北方向の溝はない。小溝はおそらく掘溝であろう。小溝から土師器皿、瓦器碗が出土した。

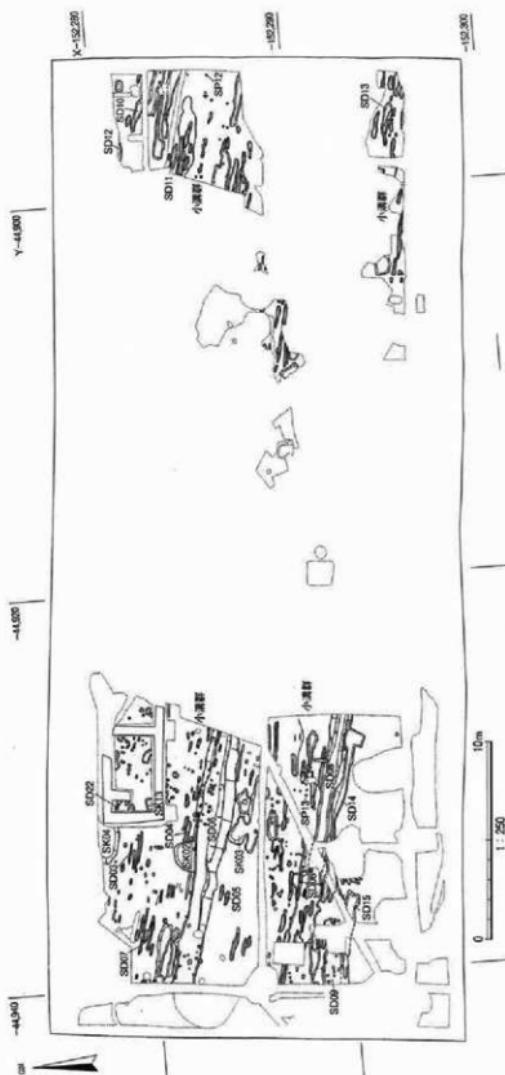
SD06・09・15 SD06は東西溝で、幅0.70～1.90m、深さ0.02～0.05mの規模であり、埋土は褐色の粘土質シルトである。断面は浅い皿状を呈し、出土遺物は細かく碎けており、用・排水路のような溝ではなく、小溝が重複したものであろう。SD06からは、土師器・瓦器・瓦質土器・瓦が出土した。4は15世紀の瓦質土器羽釜で、色調は灰色である。5は15～16世紀の土師器皿で、色調はにぶい橙色、復元口径13.6cm、口縁部付近はヨコナデ、外面下部はユビオサエである。SD09から土師器、SD15から土師器、瓦器が出土した。

SD08・14 SD08は幅0.80～1.00m、深さ0.06m、SD14は幅0.20～0.50m、深さ0.10mの規模があり、埋土は暗褐色の粗粒砂質シルトである。SD08・14は掘溝ではなく、溝として機能していた可能性がある。SD08から土師器、東播系須恵器・瓦器・常滑焼が出土した。3は12～13世紀頃の常滑焼壺で、体部外面はオリーブ褐色の自然釉がかかり、下脚部外面に押印文が残る。SD14から土師器、瓦器が出土した。

SK02・04 SK02・04は規模が小さく、深さ約0.03～0.06mと浅く、出土遺物が細かく碎けており、第3層下面の遺構であろう。SK04から土師器、瀬戸美濃焼陶器が出土した。1は16～17世紀の瀬戸美濃焼陶器の天目碗で、内外面に黒釉をかけている。2は15～16世紀の土師器皿で、色調はにぶい黄橙色、口縁部付近はヨコナデ、外面下部はユビオサエである。

SK03 SK03は不整形な形で、明確な溝の形態ではないが、小溝が切り合ったものと考えられる。

第3層(図9)からは1~2cm前後に細分化した土器器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・常滑焼・備前焼・青磁・白磁・瓦・石錠などが出土した。11は12~13世紀の中国産青白磁合子蓋で、蓋上部復元径4.4cm、明綠灰色の釉薬が内外面にかかるが、身と合わさる内面の部分は無釉である。外面に花文を陽出している。12は12~13世紀の中国産白磁碗で、白磁碗V類[太宰府市教育委員会2000]に当る。13は15世紀の中国産青磁碗で、オリーブ灰色釉、鎌運弁文である。14は15世紀頃の瀬戸美濃焼陶器端反碗で、オリーブ黄色釉である。15は国产陶器の壺あるいは鉢の底部で、外面は暗赤褐色、内面は褐色である。常滑焼かと思われるが丹波焼の可能性もある。16は東播系須恵器鉢で、第2期第2段階[森田稔1986]にあたり、12世紀末から13世紀初頭頃である。17は円板状土製品で、瓦(内面に布目痕跡が残る)を打ち割り一部を磨って円形に仕上げ、転用品として使用している。中世の時期と思われる。23は15世



紀の瓦質土器羽釜で、色調は  
にぶい黄橙色、口縁部は内傾  
し端部はやや丸くおさめ、頭  
部に3段をめぐらす。24は縄  
文時代の石鏡である。

#### c. 江戸時代～明治時代末 の遺構と遺物(図6・9)

第2層下面で溝・小溝・足  
跡を検出した。また、3層  
が削平をうけたため4層上面  
で検出した土壙SK01、井戸  
SE01がある。溝・小溝・足  
跡の埋土は第2層の褐色～に  
ぶい黄褐色の中・細綈～粗粒  
砂質シルトである。

小溝群 A区の西南部を除  
いて、第3層が残存する地  
域全域で小溝を多数検出し  
た。SD02・20・21は東西溝  
で、溝幅が0.20～0.50m、深  
さ0.02m前後の浅い溝であ  
る。小溝は掘溝と推定され  
る。また、SK11・12は溝  
状を呈しており、小溝であ  
ろう。SD02から土師器が、  
SD20・21から土師器・瓦器、  
SK11・12から土師器・瓦器  
が出土した。

SD01 A区北東部にある  
東西溝(北で西に約75°振る)  
で、幅0.50～0.70m、深さ0.20  
m、南北両岸に径約6cmの  
木杭(SP08・09)を打ち並べ  
ている。またSD01の2.50m  
北にSP11のような木杭列が

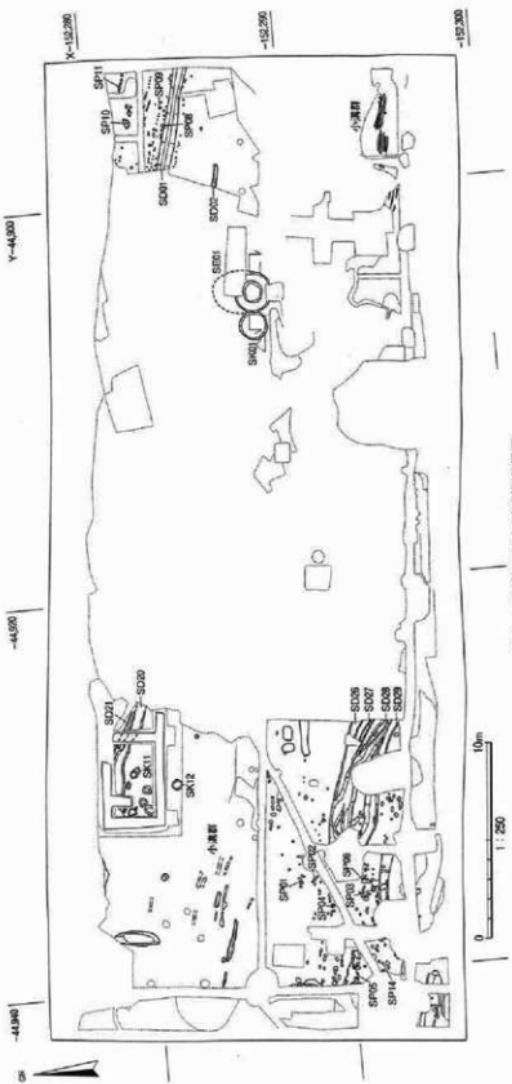


図6 A区第3層上面遺構記載図

ある。SD01の埋土は褐色粗粒砂質シルトで、用・排水路などの溝として機能したと考えられる。SD01から土師器・軟質施釉陶器・関西系陶器・肥前磁器が出土した。SP08・09・11から瓦器・軟質施釉陶器柿釉皿・関西系陶器土鍋・肥前陶器皿・肥前磁器皿が出土した。

SD26~29 SD26~29はA区西南部にある東西溝で、幅0.5~1.0m、深さ0.1~0.2mの規模があり、埋土にはぶい黄褐色の中疊~粗粒砂質シルトである。溝は切り合っているが、攪乱を受けており、新旧を明らかにすることはできなかった。

足跡 A区西南部で多数の足跡を検出した。特に、SD26~29の西側に集中している。SP01~06は、長径0.12m前後、短径0.08m前後、深さ0.02m程度の浅い窟みである。人や動物の足跡であろう。SP14は長径0.12m、短径0.08m、深さ0.01mで、窟みは2股に分かれている。おそらく牛の足跡と思われる。これらの足跡は、おもに東西方向に動いている。SP01~02・05~06から土師器・瓦器・瓦質土器、SP04から19世紀中頃の肥前磁器碗が出土した。

SK01 SK01は4層上面で検出したが、後述するSE01(江戸時代末期構築)の掘形に切られており、本来は第3層上面に存在したと思われる。SK01は径1.4m、深さ0.3mの円形土壤で、壁はほぼ垂直に落ち、底面は平坦である。桶などの痕跡は確認していない。埋土は明黄褐色の粘土質シルトである。遺構の性格は不明で、湧水層には達しておらず、井戸にはならない。SK01から肥前磁器が出土した。20は17世紀後半の肥前磁器染付碗で、碗部外面に若松文様があり、圍線を高台裏に1条、高台外面に2条、碗部外面底に1条めぐらし、疊付は露胎である。21は17世紀後半の肥前磁器染付碗で、碗部外面に草花文様があり、圍線を口縁部外面に1条、内面すぐには2条めぐらす。22は17世紀中・後半の肥前磁器染付碗で、碗部外面に網目文がある。

SE01 SE01はA区東部にあり、井戸側が漆喰の井戸である。井戸側は長径1.1m、短径1.0mの梢円形で、井戸上部で深さ約0.5m分が残っていた。それより下部は素掘りで、深さは井戸掘形上部から約4.3mである。井戸下部は壁面が時々崩落したらしく、フラスコ状の形態になっていた。井戸側塗喰部については、径2.0m、深さ0.5mの円形掘形があり、井戸側を構築している。出土遺物から見て、近世末期に掘られ、以後補修しながら使用し、大阪高等学校建設時に廃棄されたものであろう。掘形から土師器・丹波焼鉢・関西系陶器・瀬戸美濃焼磁器(19世紀第2四半期以降)・肥前磁器・三田青磁・瓦が出土した。井戸内埋土の最上層から土師器・肥前陶器・関西系陶器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器(明治時代中期以降)・土人形・ガラス・焼けた木・礫・漆喰の残骸が出土した。上層から備前焼・軟質施釉陶器・関西系陶器・肥前磁器(19世紀中頃以降)・棟瓦・金属が、下層から井戸瓦が出土した。

第2層からは1~2cm前後に細片化した遺物が出土した。土師器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器、備前焼・丹波焼・関西系陶器(19世紀初以降)、関西系陶器(19世紀中頃以降)、軟質施釉陶器・肥前陶

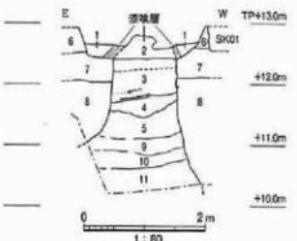


図7 SE01断面図  
 1:ぶい黄褐色(10YR4/3)浮遊リシリート(井戸底層)  
 2:沃黃色(25Y7/2)漆喰井戸側  
 3:泥褐色(25Y3/2)漆多量含り、漆喰混り混合土(井戸底土最上層)  
 4:褐色(10YR4/4)粗粒砂(井戸底土上層)  
 5:泥褐色(10YR3/2)粗粒~細粒砂混りシルト(井戸底土上層)  
 6:泥褐色(10YR3/2)粗粒砂(井戸底土上層)  
 7:青褐色(10Y5/6)シルト質粗粒砂~粒状質シルト(基盤帶)  
 8:にじむ青褐色(10Y5/4)細粒土・粗粒砂質土(基盤帶)  
 9:黒色(10YR2/1)粗粒砂混りシルト(井戸底土下層)  
 10:褐色(10YR4/4)粗粒砂混りシルト(井戸底土下層)  
 11:黒色(10YR2/1)粗粒砂混りシルト(井戸底土下層)

図7 SE01断面図

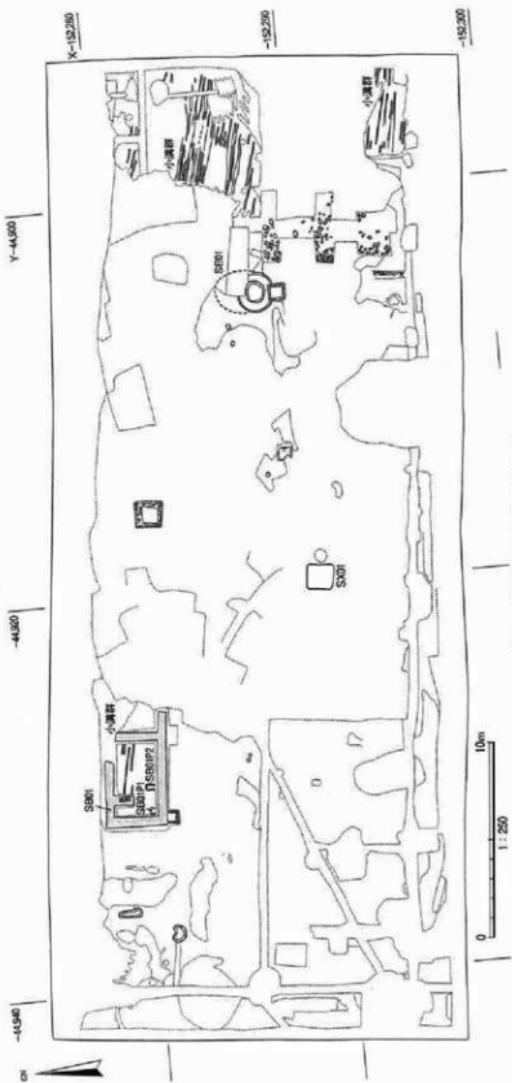
器、瀬戸美濃焼陶器、瀬戸美濃焼磁器、白磁・青磁、軒丸瓦、丸・平瓦、キセル、ガラス小玉、石硯、火打石、サヌカイト剥片などが出土し、弥生時代～近代の遺物を含む。

6は15世紀頃の中国産青磁碗で、オリーブ灰色の釉がかかり、雷文帯がある。7は12～13世紀の中国産白磁碗で、灰オリーブ色の釉が掛かり、白磁碗IV類[太宰府市教育委員会2000]に当る。8は明治30年以降の瀬戸美濃焼磁器碗で、明青灰色の釉薬(酸化コバルト)で文様を手描きしている。9は明治20年以降の瀬戸美濃焼磁器蓋で、明青灰色の釉薬(酸化コバルト)で文様を型紙摺・手描きしている。10は中世前半頃の巴文軒丸瓦である。

d. 明治時代末以降の遺構と遺物(図8)

第2層上面で小溝を検出した。

小溝群 A区東部と旧制大阪高等学校温室基礎(SB01)で残った遺構面で小溝を多数検出した。これより以外の地点では、第2層上面の遺構面は削平されており、本来は小溝がA区全域(南西部を除く)で存在したと思われる。小溝は幅0.05～0.20m、深さ0.01



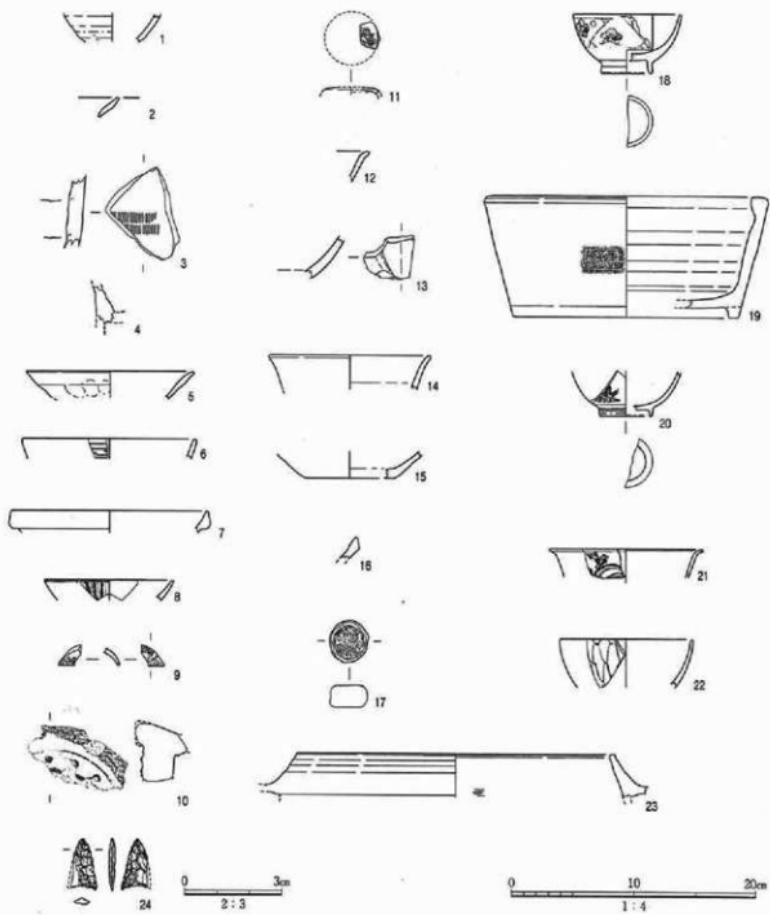


図9 A区出土遺物

SD06(4-5)、SD08(3)、SK01(20-22)、SK04(1-2)、SK01(18-19)、第3層(11-17・23-24)、第2層(6-10)

mで、埋土は第1層の灰黄褐色の細粒～粗粒砂質シルトである。いずれの溝も東西方向で、北で西に約75°振る。小溝は鋤溝であろう。これら鋤溝群は、旧制大阪高等学校建設(1922・大正11年開校)以前の耕作痕跡である。

第1層からは1~2cm前後に細片化した近代の遺物が出土している。土師器、瓦器、陶器(近代、明治時代初・中、明治20年以降)、磁器(近代、明治時代初・中、明治20年以降)、瓦、土人形、泥メシコ、火打石、ろう石、スレート、ガラス、ガラス小玉などが出土した。そのほか、サヌカイト刷片、



写真1 SB01全景(北から)

東西0.6m、南北0.4mの煉瓦を積み上げた方形の付属構築物がある。建物は基礎に栗石を入れコンクリートを敷きその上に煉瓦の短辺を建物の外側に揃えて1段敷き並べている。建物は規模・構造、大阪高等学校施設配置図(昭和13年8月)【大阪高等学校七十周年記念祭・事業委員会2001】、当時の学校の空中写真から見て、温室の基礎と考えられる。建物基礎に使用した煉瓦には六稜星(住友銅吹所煉瓦刻印B17Bと同じ)【大阪市文化財協会1998】を2個刻印したもの、付属構築物の煉瓦には五徳形(住友銅吹所煉瓦刻印B18Bと同じ)を刻印したものがある。

SX01(図8・9) SX01は井戸状の遺構で、平面は東西1.22m、南北1.34mの方形である。素掘りで壁は垂直に落ち、深さは3m以上ある。遺構の埋土は黒褐色粘土と淡灰青色細・中粒砂が入り混つておらず、短期間に埋めている。掘削時期は特定できないが、古くとも大阪高等学校時代以後であり、遺構の性格は不明である。日本住宅公団阪南団地建設時(1961年建設)に埋めたものであろう。埋土上部から瓦質土器、瀬戸美濃焼磁器、煉瓦、土管などが出土した。18は20世紀以降の瀬戸美濃焼磁器の染付碗で、外面に梅の文様があり、圍線が碗部外面下部に2条、高台外面上部に1条めぐる。疊付は露胎で、高台裏面に「堂」鉢がある。19は瓦質土器の火鉢で、外面に「水島製・日日印」のスタンプがあり、明治時代後半以降のものである。

## ii) B区

### a. B区の層序(図10・11)

第0層は近現代の盛土・整地層及び擾乱層である。日本住宅公団阪南団地建設(1961年建設)以後の盛土・整地層、擾乱層で、層厚は40~120cmである。

第1層は黒褐色(10YR3/2)~灰黄褐色(10YR4/2)の粗粒砂質シルトである。層厚は5~10cmで、近代後半の作土層である。中世~近代の遺物を含む。

第2層は褐色(10YR4/4)~暗褐色(10YR3/4)の粗粒砂質シルトで、層厚は3~7cm、近世~近代前半の作土層である。中世~近世の遺物を含む。

第3層はにぶい黄褐色(10YR4/3)~黒褐色(10YR2/2)の粗粒砂質シルト~砂質シルトで、層厚は3~15cm、中世の作土層である。土師器・東播系須恵器・瓦器・常滑焼・白磁・丸瓦など中世の遺物を含む。

須恵器甕・杯蓋(古墳時代末~飛鳥時代)などがある。

e. その他の遺構と遺物(図8・9、写真1)

その他、建物SB01、井戸状遺構SX01がある。

SB01(図8・写真1) SB01は旧制大阪高等学校(1922年開校)の建物基礎である。東西5.0m以上、南北3.1mで、東側が破壊されている。南西隅に

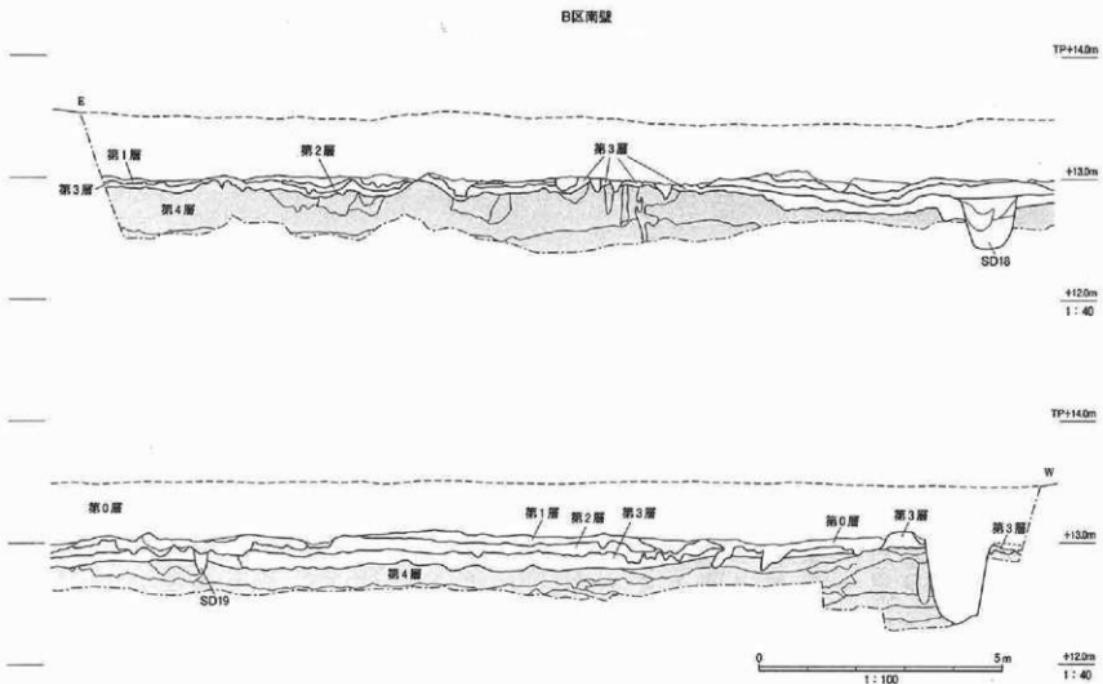


图10 B区地层断面图(南壁)

第4層は明褐色(7.5YR5/6)～黄褐色(10YR5/8)の粘土質シルトである。自然堆積層であり、当該地の基盤層である上町層の上部にある。

b. 鎌倉～室町時代の遺構と遺物(図12・13)

第4層上面で溝を確認した。削平・攪乱が激しく、部分的にしか確認できなかった。

SD16(図12) SD16は斜行溝で、幅0.4m、深さ0.05mである。長さ2.4m分確認した。埋土は第3層である。

SD17 SD17は東西溝で、幅0.3m以上、深さ0.05mである。埋土は第3層である。長さ2.5m分確認した。

SD25 SD25は東西溝で、幅0.5m、深さ0.04mの規模があり、北で西に約74°振れる。長さ4.2m分確認した。埋土は第3層である。SD25から土師器・東播系須恵器鉢・瓦器・瓦質土器などが出土した。30は瓦器碗で、復元口径11.2cm、口縁端部は丸く收めている。和泉型IV期後半[森島康雄1992]にあたり、14世紀頃と考えられる。31は15～16世紀の土師器皿で、色調はにぶい黄橙色、復元口径10.0cm、体部外面下部はユビオサエである。32は15世紀頃の瓦質土器羽釜である。33は15～16世紀の土師器皿で、色調はにぶい黄橙色、復元口径9.4cm、体部外面下部はユビオサエである。

SD16・17・25の溝は規模等から見て、耕作に間違する溝と考えられる。

第3層から土師器・東播系須恵器・瓦器・常滑焼壺・白磁・丸瓦などが出土した。35は15～16世紀の土師器皿で、色調は橙色、復元口径9.8cm、体部外面下部はユビオサエである。36は15～16世紀の土師器皿で、色調はにぶい黄橙色、復元口径7.2cm、体部外面下部はユビオサエである。37は13世紀頃の瓦器碗で、和泉型III期[森島1992]にあたり。

c. 江戸時代～明治時代末の遺構と遺物(図12・13)

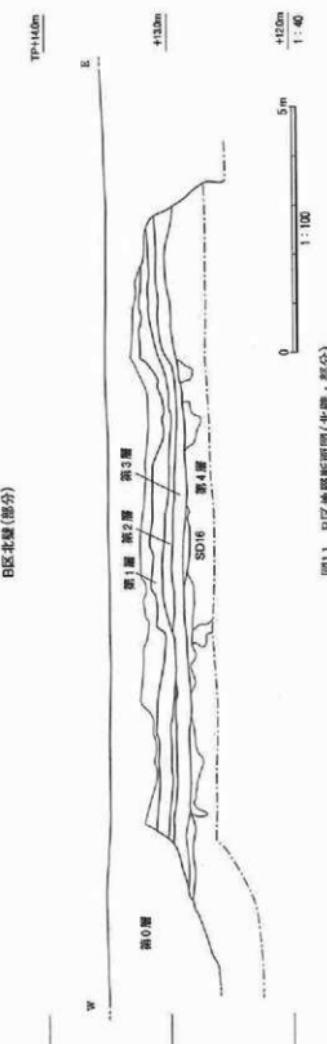


図11 B区北壁断面図(北壁・部分)

SD18から土師器皿・甕・焼鉢C類[難波洋三1992]、瓦質土器羽釜・備前焼壺・肥前陶器碗・肥前磁器皿・碗・染付碗・瓶・瓦、土錘・土人形などが出土した。27は18世紀頃の肥前磁器碗で、高台疊付以外は灰白色の釉をかけている。28は18世紀前半の肥前磁器染付碗で、菊花文の印判がある。29は17世紀後半の土師器焼鉢C類で、色調は赤褐色、復元口径28.6cm、口縁部は内外面ともヨコナデしている。SD23から備前焼壺・肥前陶器碗・丸・平瓦が出土した。25は丸瓦で、凸面はナデ、凹面に布目痕がある。26は丸瓦の広端部で、凸面は繩たたき、凹面にコビキAの痕跡が残る。SK09からは土師器皿・焼鉢・甕(近世漢焼大甕)・東播系須恵器鉢・瓦器・瓦質土器・備前焼鉢・常滑焼甕・肥前陶器・肥前磁器碗・瀬戸美濃焼碗・軒丸瓦(巴文)・平瓦・丸瓦・石錐などが出土地。34は19世紀2四半期以降の肥前磁器の染付碗で、口縁部外面に青色の図線を1本めぐらしている。復元口径6.6cmの小碗である。40は繩文時代後・晚期頃の石錐である。

SD19・24 SD19・24は南北溝で、幅0.25m、深さ0.15~20m、埋土は暗褐色の粗粒砂質シルトである。2つの溝を合わせて長さ4.1m分確認した。SD19から土師器・肥前陶器の刷毛目皿が出土した。SD24からは土師器・瀬戸美濃焼陶器が出土した。

SK06~08・10 SK06~08・10はB区南西部にある土壌で、不整形で溝状の形態である。SK06は東西1.1m、南北0.8m、深さ0.08mの不整形で、埋土は第2層である。SK06からは土師器・瓦質土器が出土した。SK07からは土師器・瓦器・瓦質土器・軟質施釉陶器・関西系陶器凹凸碗・19世紀以降の肥前磁器・スラグ、SK08から土師器・須恵器・瓦器・肥前磁器筒碗・丹波徳利・金属破片・SK10から土師器皿・肥前磁器・泥メンコが出土した。SK06~08・10は規模、形態、方向、出土遺物から見て、耕作に関連する遺構と考えられる。

第2層から1~2cm前後に細片化した遺物が出土した。土師器・瓦器・丹波焼・備前焼・関西系陶器・軟質施釉陶器・瀬戸美濃焼陶器・瀬戸美濃焼磁器蓋(明治初年以降)・肥前磁器・土人形・瓦などが出土した。

#### d. 明治時代末以降の遺構と遺物(図13)

A区のような耕作に関連する遺構は、擾乱が激しく検出できなかった。

第1層(図13)から1~2cm前後に細片化した遺物が出土した。土師器・東播系須恵器・環平焼・関西系陶器・軟質施釉陶器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・瀬戸美濃焼磁器(明治初年以降)・瀬戸美濃焼磁器小杯・日本硬質陶器皿(明治44年以降)・肥前磁器・青磁・白磁・泥メンコ・火打石・ガラス・ガラス製かんざし・瓦・タイル・金属破片などが出土した。38は軒丸瓦で、左巻三巴文である。中世末頃の時期であろう。

第0層(図13)から39の日本硬質陶器(高台裏面に「日陶製」銘のプリント)が出土した。これは日本陶器製で、旧制大阪高等学校寮食堂食器として使用されたものである。

### 3)まとめ

今回の調査では、A・B区において、中世から旧制大阪高等学校建設時(1922年開校)まで連続として耕作地であったことを確認した。擾乱を考慮すると、A・B区全域が耕作地であったと考えられる。

第3層上面で溝、土壤を確認した。第3層についても削平・擾乱が激しく、部分的にしか確認できなかった。

SD18・SD23・SK09 SD18・SD23・SK09は斜行溝で、検出時は別の遺構としたが、埋土や遺物が類似しており、一連の溝であろう。SD18は幅1.1m、深さ0.4m、埋土は暗褐色砂質シルトである。SD23は幅2.6m、深さ0.3m、埋土は暗褐～黄褐色砂質シルトである。SK09は幅1.0m以上、深さ0.3m以上、埋土は黒褐～暗褐色砂質シルトである。これらが一連の溝だとすると、長さ10m分検出したことになる。溝底の高さが一定せず、幅も広・狭があり不揃いなので、土壤状の掘り込みが連続した状況を示している。溝の方向は、北で西に約25°振り、掘溝とは異なる方位を示す。

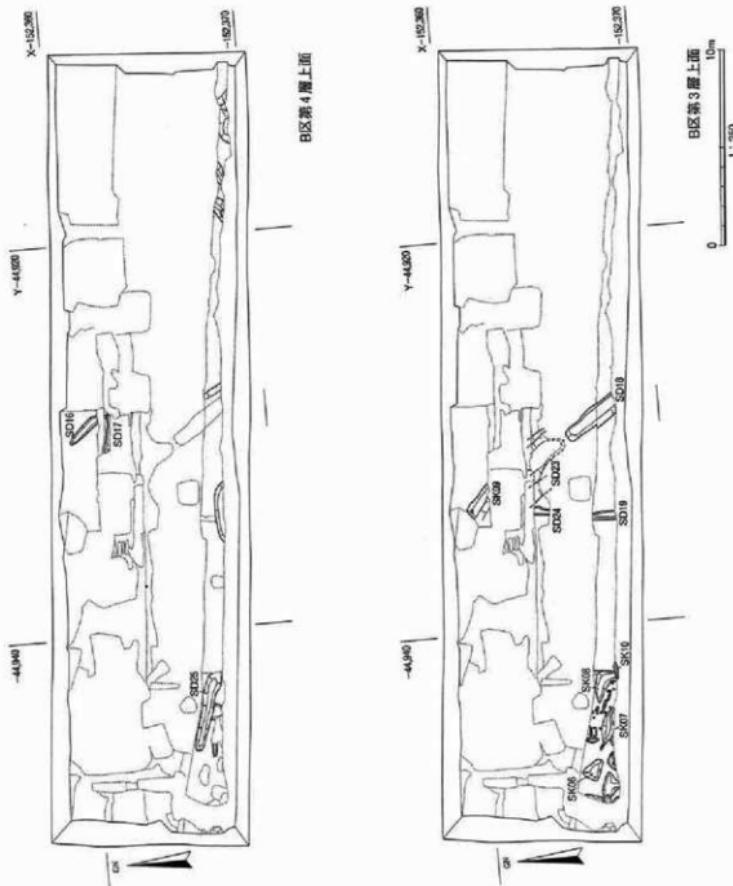


図12 BI区第4層上面・第3層上面遺構配置図

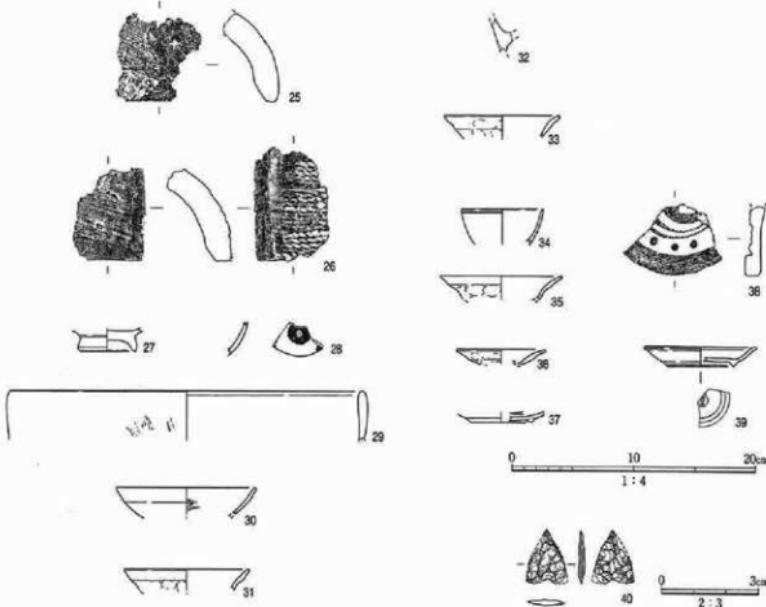


図13 B区出土遺物

SD18(27~29)、SD23(25・26)、SD25(30~33)、SK09(34・40)、第3層(35~37)、第1層(38)、第0層(39)

中世以降、水田ないしは畠として開発され、大規模な洪水などの痕跡もないので、安定的に耕作地として利用されたのだろう。耕作の開始時期について特定することは困難であるが、瓦器が広範囲に出土する時期が13~14世紀頃であり、およそその頃と思われる。耕作地の境界・区画については畦畔などを確認できなかったので明確ではないが、A地区東北部の東西溝SD01・井戸SE01、A区南西部の東西溝SD26~29、B区中央部の斜行溝SD18・SD23・SK09は、区画を示している可能性がある。溝、堀溝はほとんどが東西方向(北で西に75°~74°振っている)を示している。これは土地が南西に向かって緩やかに低くなっていることと関連するのであろう。また、出土遺物はほとんどが細片であり、これは、耕作地における状況だと考えられる。出土遺物は、土師器、瓦器、瓦質土器、中世~近代の陶磁器、中・近世の瓦以外に、縄文時代の石錐、弥生時代頃のサスカイト剥片、飛鳥時代の須恵器がある。周辺には、各時期の遺構があり、また、中世以後は近接地に各時期の集落が存在したと推定できる。

#### 引用・参考文献

- 大阪高等学校七十周年記念誌・事業委員会2001、『旧制大阪高等学校史』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「埋蔵文化財発掘調査(OZ07-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』
- 大阪市文化財協会1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘報告Ⅰ』
- 大阪市文化財協会1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』
- 大阪文化財研究所2011、『北畠公園遺跡発掘調査報告』
- 太宰府市教育委員会2000、『太宰府条坊15 陶磁器分類図』
- 中世土器研究会編1995、『概説 中世の土器・陶磁器』
- 難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」:『難波宮址の研究』第九、pp.373-400
- 森島康雄1992、「畿内窯瓦器窯の併行関係と層年代」:『大和の中世土器Ⅱ』
- 森田稔1986、「東播系須恵器生産の成立と展開」:『神戸市立博物館紀要3』

A区全景  
第4層上面・中世  
(西から)



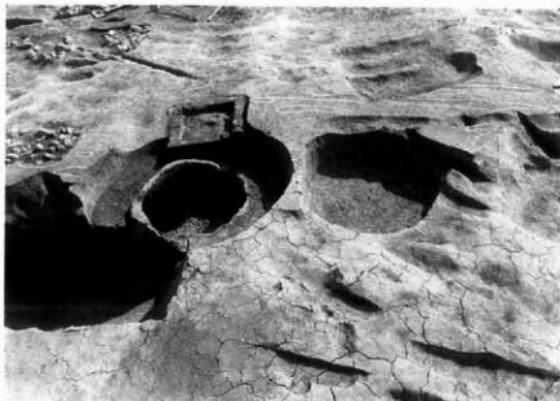
A区北東部  
第3層上面・近世～近代前半  
(東から)



A区南西部  
第3層上面・近世～近代前半  
足跡(西から)



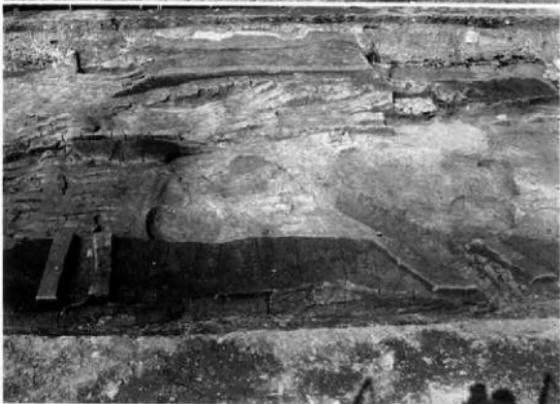
A区北東部  
SK01・SE01  
(北西から)



B区全景  
第4層上面・中世  
(西から)



B区中部  
第3層上面・近世～近代前半  
SD18・23、SK09、  
SD19・24(南から)



阿倍野区天王寺町南三丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(TG10-1)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区天王寺町南3丁目74-1  
調査面積 80m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年7月2日～7月9日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、京嶋覚

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は南北に長い上町台地中央の東部に位置する。調査地の西1.5kmには弥生時代終末から古墳時代前期の集落遺跡である阿倍野筋南遺跡があり、北には平安時代の建物群が見つかっている生野区林守遺跡、東南には弥生時代中期の集落や古墳および古代の建物群が存在する東住吉区桑津遺跡が隣接しているなど、各時代の遺跡が分布する地域にある(図1)。

調査区は敷地中央の東西20m×南北4mの範囲であり(図2)、現地表から0.4~0.6mまでを重機により掘削し、それ以下を人力により掘削を進め、記録作業を行なった。7月8日に記録作業を終えて機材の撤収を行い、翌9日に埋戻しを完了して現場での作業を終えた。

以下にその結果を報告する。なお、図1・2の方針は座標北を、それ以外は磁北を基準にし、水準値はT.P.値(東京湾平均水面値)で、図中ではTPと省略した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

第1層：現代の盛土および擾乱層の埴土である。

第2層：黄褐色(10YR5/6)シルト質粘土層で、近世以降の整地層である。層厚は約10cmで、調査区西端のみに遺存する。

第3層：上半部の約1mは浅黄色(2.5Y7/4)細粒砂層で、下半部はシルト質となる地山層である。

### ii) 遺構と遺物(図4・5)

調査区では西端のごく一部で第2層の整地層が検出されたが、遺構は第3層の地山層上面で検出さ



図1 調査地位置図

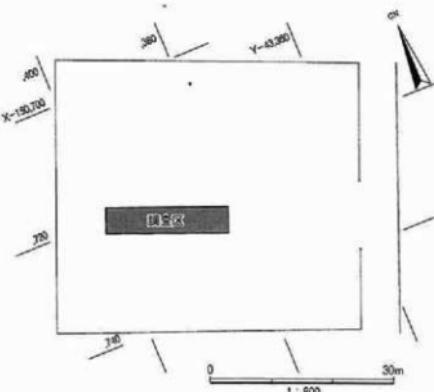


図2 調査区位置図

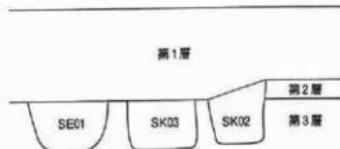


図3 地層と造構の関係図

れた。

SE01は調査区中央で検出された井戸である。平面形は東西3.5m、南北3.5m以上の楕円形を呈し、深さは湧水が激しく約1mまでの掘削に留めた。埋土は明褐色(7.5YR5/6)粘土質極細粒砂～シルトベースに、細粒～中粒砂の薄層を挟むが、北部の南北1.5mの範囲に

はシルトの偽礫を含む黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂の堆積に切られているよう、この部分が井筒の抜き取り穴か、掘り直された部分の可能性がある。

肥前磁器染付碗1・皿2、土師器のはか関西系陶器片も出土しており、18世紀代の遺物が出土している。

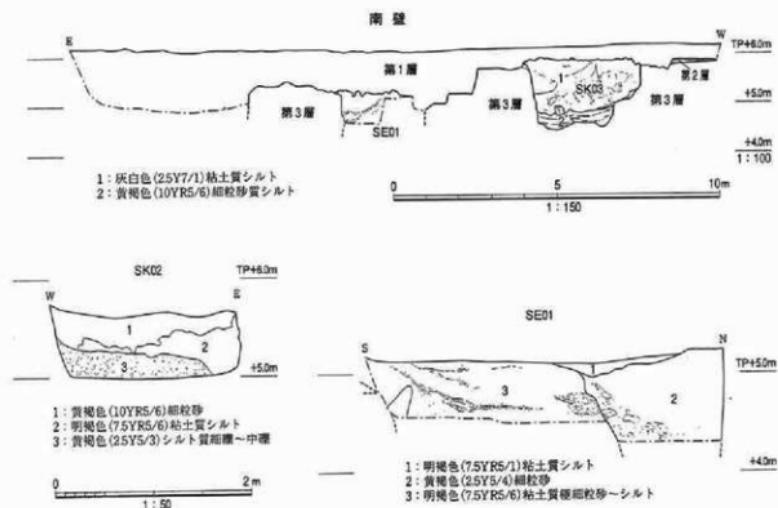
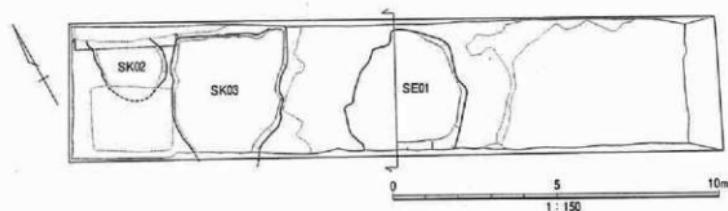


図4 造構平面・断面図および南壁地層断面図

SK02は調査区西端で検出された東西2.0m、南北1.5m以上、深さ0.7mの楕円形の土壙である。底は平坦で埋土は上部が黄褐色(10YR5/6)細粒砂、中部が明褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト、下部が黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細礫～中礫である。プラスチックや銅線が出土しており、近現代の遺構である。

SK03は調査区西部で検出された大型の土壙で、東西3.5m、南北4.0m以上、深さ約2mの規模である。一部段をなしてほぼ垂直に掘られており、北側では東半が、南側では西半が突出する形状をなすと推定される。埋土は最下部の約0.5mは黄褐色(10YR5/6)細粒砂質シルトで、それ以上の1.0mは、周辺に分布していた地山層と推定される灰白色(2.5Y7/1)粘土質シルトで埋められている。この埋土には中世頃の作土と推測される灰褐色シルトの小偽礫が含まれていた。

ガラス瓶・煉瓦・土師器焼炉をはじめとする近現代の遺物が底面付近から出土しており、戦時中の防空壕である可能性が高い。

### 3)まとめ

今回の調査地は古い地層や遺構がかなり削平されていると考えられ、井戸・土壙などの深い遺構のみが検出された。近世の井戸のみが古い遺構であり、当該期の土地利用の一端を示すとともに、大きく削平されるだけ高い地形にあったことをも示している。したがって、高所に立地することの多い集落や古墳などが周辺に存在する可能性はまだ残されているといえよう。

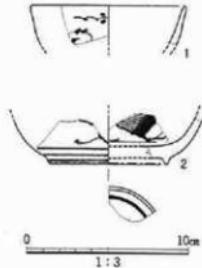
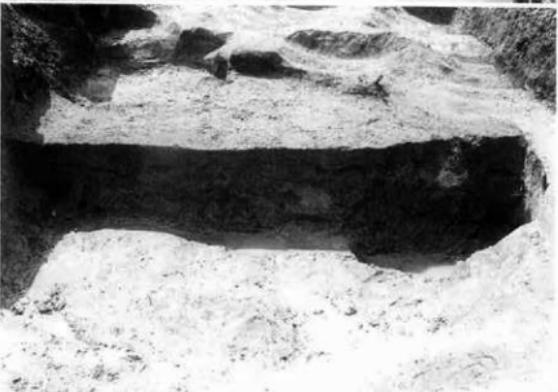


図5 SE01出土遺物実測図

第3層上面全景  
(西から)



SE01(東から)



SK03(北から)



住吉区殿辻一丁目における建設工事に伴う

南住吉遺跡発掘調査(MN10-2)報告書

調査個所 大阪市住吉区殿辻1丁目17  
調査面積 75m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年9月9日～9月14日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、平田洋司

### 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である南住吉遺跡の西南部に位置し、西方には古代の集落跡である殿辻遺跡がある。近隣ではこれまで試掘調査を含め数多くの調査が行われている(図1)。主要なものをあげると、今回調査地の北約150mで行われたMN02-6次調査では、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物群のほか古代以前に遡る自然流路が確認されている[大阪市文化財協会2004]。また、北北東約500mで行われたMN85-37次調査では16棟以上の飛鳥時代の掘立柱建物群が検出され、「住吉津」に関連した有力氏族の居宅と考えられている。また、同調査では平安時代、10世紀には埋没する正方位の溝から鉢具が出土しており、律令官人層が同地に存在したと推定されている[大阪市文化財協会1998]。

今回調査地では、事前に行われた試掘調査(MN08-3)[大阪市文化財協会2008]の結果、土師器・須恵器を含む作土層と溝が確認されたことから、建設工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査は平成22年9月9日より開始した。なお、調査地内には土壤汚染を受けた範囲があることが判明しており、これらを避けて旧建物の基礎で囲まれた範囲に調査区を設定したため、調査区は基礎の壁によって3分割されることになった。後述の第4層上面までを重複により除去し、ほかは人力による掘削で調査を進めた。遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、同年9月14日に埋戻しを含む現地におけるすべての作業を完了した。

調査および本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP+○mと表記する。方位は座標北を基準とした。



図1 調査地位置図

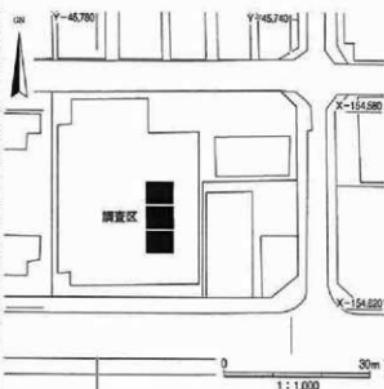


図2 調査区配置図

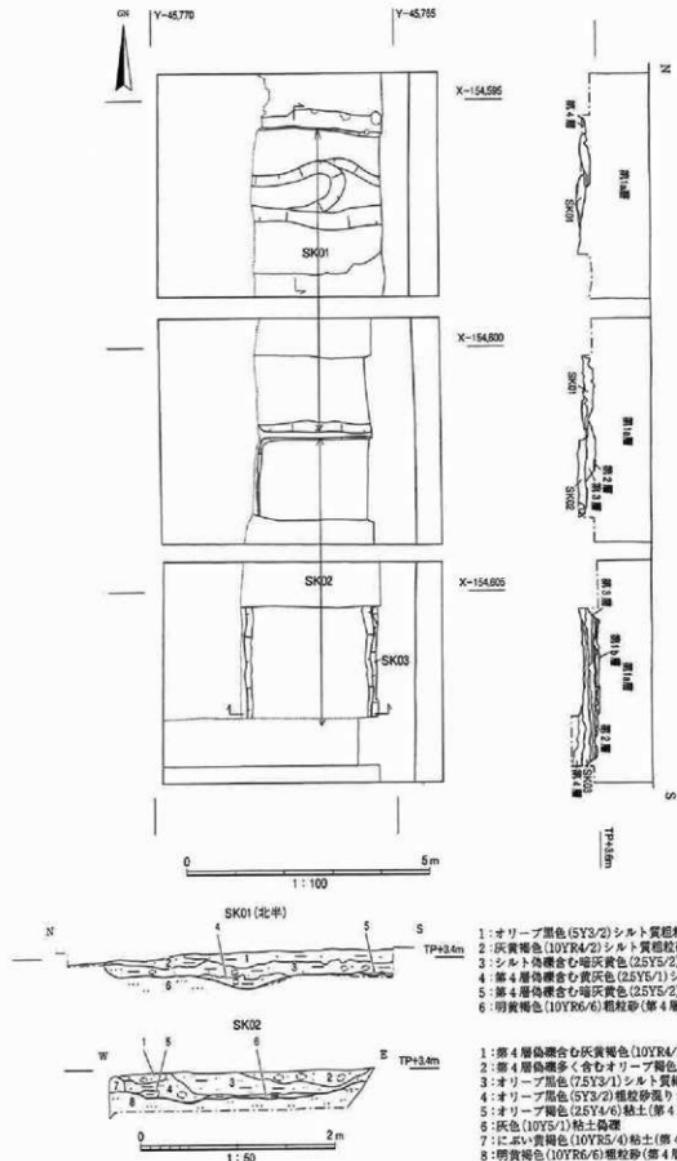


図3 地層断面図および造構平面・断面図

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地表面から1.7mまでの地層を第1～4層まで区分した。東壁の状況を図3に示す。布振り状に設置された基礎に近いことから、第1b層以下の残存状況は悪い。比較的残りのよい中央部付近の状況をもとに記す。

第1層 旧建物に係わる整地層の第1a層とそれ以前の現代整地層の第1b層からなる。第1a層は層厚は平均90cmで、基礎に当たる部分では130cm以上ある。第1b層は層厚は平均30cmである。

第2層 黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂質シルトからなる現代作土層で、層厚は10cm未満である。

第3層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂混り細粒砂質シルトなどからなる作土層で、層厚は20cm未満である。2層程度に細分可能である。遺物は出土しなかったが、第4層上面検出遺構の年代観から19世紀以降に相当する。

第4層 上部約20cmがにぶい黄褐色粘土、それ以深は明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂からなる段丘構成層である。本層の上面にて遺構を確認した。

### ii) 遺構と遺物(図3・5)

第3層上面でSK01～03を検出した。これらは近接しつつも大きな重複がなく掘削され、ベースの土がおむね粘土から粗粒砂に変化する部分で掘削を停止していることから、粘土を対象とした土採り穴と考えられる。

SK01 南北6.2m、東西2.7m以上ある。検出面からの深さは平均0.3mで、北側では溝状にさらに0.1～0.2m深くなる部分がある。埋土は埋戻し土である。関西系陶器鉢1、丹波焼鉢2が出土した。1には外面に緑色釉、内面に白色釉が掛る。

SK02 南北5.7m以上、東西2.5mで、検出面からの深さは0.3mである。埋土は埋戻し土である。関西系陶器碗3、瀬戸美濃焼磁器碗4、產地不明陶器鍋5、須恵器鉢6が出土した。このうち6は中世に遡るものであろう。

SK03 SK02の東に位置する。一部を検出したのみであり、規模は不明である。埋土は埋戻し土である。

これらの土採り穴の時期は出土遺物から19世紀前半に位置づけられるであろう。

### 3)まとめ

今回の調査では、19世紀代の土採り穴を検出した。南住吉遺跡周辺ではこれまでの調査でも江戸時代以降の土採り穴が

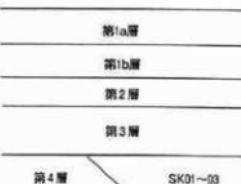


図4 地層と遺構の関係図



図5 出土遺物実測図  
SK01(1・2)、SK02(3～6)

多く検出されており、当地もそのひとつの地点であったと考えられる。地山層が比較的浅くに位置し、良好な粘土層がたやすく得られることが理由のひとつとしてあげられよう。

古代に遡る遺構は確認することができなかったが、土探し穴あるいは後世の作土層によって当時の遺構面は削平を受けていると考えられ、本来の有無は不明である。今後の周辺の調査で確認していく必要があろう。

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会1998.『南住吉遺跡発掘調査報告』

2004.『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅲ

2008.『住吉区殿辻一丁目(旧住吉区健康福祉センター分館・区民ホール)における南住吉遺跡試掘調査(MN08-3)報告書』

調査区全景(南から)



SK01(西から)



SK01・02(西から)



平野区加美南一丁目における建設工事に伴う  
加美遺跡発掘調査(KM10-1)報告書

調査個所 大阪市平野区加美南1丁目50-9  
調査面積 100m<sup>2</sup>  
調査期間 平成22年6月9日～6月16日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、田中清美

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は弥生時代中期中葉から中世にかけての複合遺跡である加美遺跡の南部に位置している(図1)。当地の北側約150mにあるKM01-4次調査地では弥生時代後期の土壙や柱穴および古墳時代前期の小溝群・溝・柱穴・土壙・土器集積などをはじめ、古墳時代後期の水田跡などが検出されたほか[大阪市文化財協会2003]、南約120mにあるKM05-1次調査地では、飛鳥時代の柱穴・小穴・溝などの集落に關わる遺構が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では現地表面下約0.7mで、中・近世の遺物を含む地層が確認されたため、本調査を実施した。

調査は6月9日から大阪市教育委員会の指示に基づき東西25m、南北4mの調査区を設定した後(図2)、現地表面下約0.7mの第3層の上面まで重機で掘削し、引き続いて各層の調査を実施した。6月14日から第4層上面の鏟溝および偶蹄目の足跡群の調査を行った後、6月16日には第7層の基底面で検出した飛鳥時代の遺構の調査を行い、埋戻しを含む現地でのすべての調査を完了した。

本報告で使った水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+○mとし、方位は座標北を基準とする。

## 2) 調査の結果

### i) 層序

今回の調査では現地表面以下約1.9mまでの地層を観察した(図3)。

第0層：現代の整地層で、層厚は30～80cmある。上面の標高はTP+6.5m前後あり、ほぼ平坦な面



図1 調査地位置図

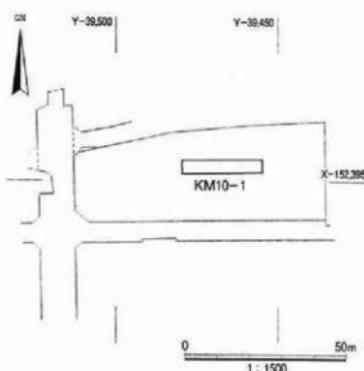


図2 調査区配置図

TP+6.0m	第0層：現代整地層
	第1層：現代作土層
	第2層：江戸時代の作土層
	第3層：水成層
	第4層：室町時代以前の作土層
	第5層：水成層
	第6層：作土層
	第7層：水成層 SK701 小穴
TP+5.5m	第8層：水成層
	第9層：水成層
	第10層：水成層
	第11層：水成層

図3 地層と遺構の関係図

をなしている。

第1層：黄灰色小礫混りシルト質細粒砂からなる層厚10~15cmの現代の作土層で、調査区の東部では本層下に層厚約5cmのにぶい黄褐色シルト質細粒砂層が見られた。本層の上面では南北方向の上幅約50cmの歓を確認した。

第2層：作土層であり、上部と下部に細分された。上部層は灰黄褐色シルト質細粒砂層で、層厚は20cm前後ある。下部層は灰黄褐色小礫混り細粒砂質シルト層で、層厚は5~15cmある。上部層から14世紀代の瓦器碗、15世紀代の瓦質土器鉢および平瓦、18世紀初頭の肥前磁器染付皿2、18世紀代の瀬戸美濃焼碗、19世紀初頭の堺摺鉢の細片が出土した(図7)。

第3層：褐色板細粒砂質シルト～シルト質細粒砂・暗オリーブ黒色小礫混り細粒砂質シルト層からなる水成層で、上部は酸化鉄を多量に含む。層厚は5~30cmある。

第4層：暗灰黄色細粒～中粒砂混り粘土質シルトからなる作土層で、層厚は10~40cmある。調査区の中央部から東部にかけて暗灰黄色極細粒砂質シルト～小礫混りシルト質細粒砂からなる高まりがあり、南北方向の畦畔SR401を検出した。本層の上面では調査区のはば全面に渡って耕作に伴う南北方向の浅い溝を検出したほか、耕跡および偶蹄目の足跡が集中する場所を3箇所で確認した。飛鳥時代の土師器鍋の把手・須恵器杯蓋をはじめ、室町時代の瓦器碗3・4および平瓦6の細片(図7)が出土したこと、層準からみて江戸時代以前の水田の作土層と考える。

第5層：オリーブ褐色板細粒砂～シルト質板細粒砂からなる水成層で、層厚は6~40cmあり、調査区の中央部以西で層厚を増す。本層の岩相は、調査区の東部は細粒砂～シルト質板細粒砂層であるが、中央部以西は褐色極細粒砂質シルト～シルト質細粒砂層に岩相変化していた。

第6層：オリーブ褐色板細粒砂質シルト～小礫混りシルト質板細粒砂からなる作土層で、層厚は10~20cmある。調査区の東部に位置する南北方向のSD601から以西では耕作に伴う偶蹄目の足跡が観察された。飛鳥～平安時代の須恵器・土師器・壇の細片が出土した。

第7層：暗赤褐色細粒砂および暗灰黄色細粒～中粒砂混り粘土質シルトからなる水成層で、層厚は5~20cmあり、調査区の東部から西部に向かって層厚を増していた。上面の標高はTP+5.0~5.6mあり、調査地の東部は西部に比べて0.5mほど高い。また、調査区の東部では本層の上面から飛鳥時代のSK701や小穴を検出した。

第8層：にぶい黄褐色板細粒砂質シルト・褐色シルト質板細粒砂・黄灰色粘土質シルトからなる水成層で、層厚は40cm前後ある。調査区の東壁では南から北に向かって傾斜したラミナが観察された。部分的に酸化鉄を多量に含む。遺物は出土しなかった。

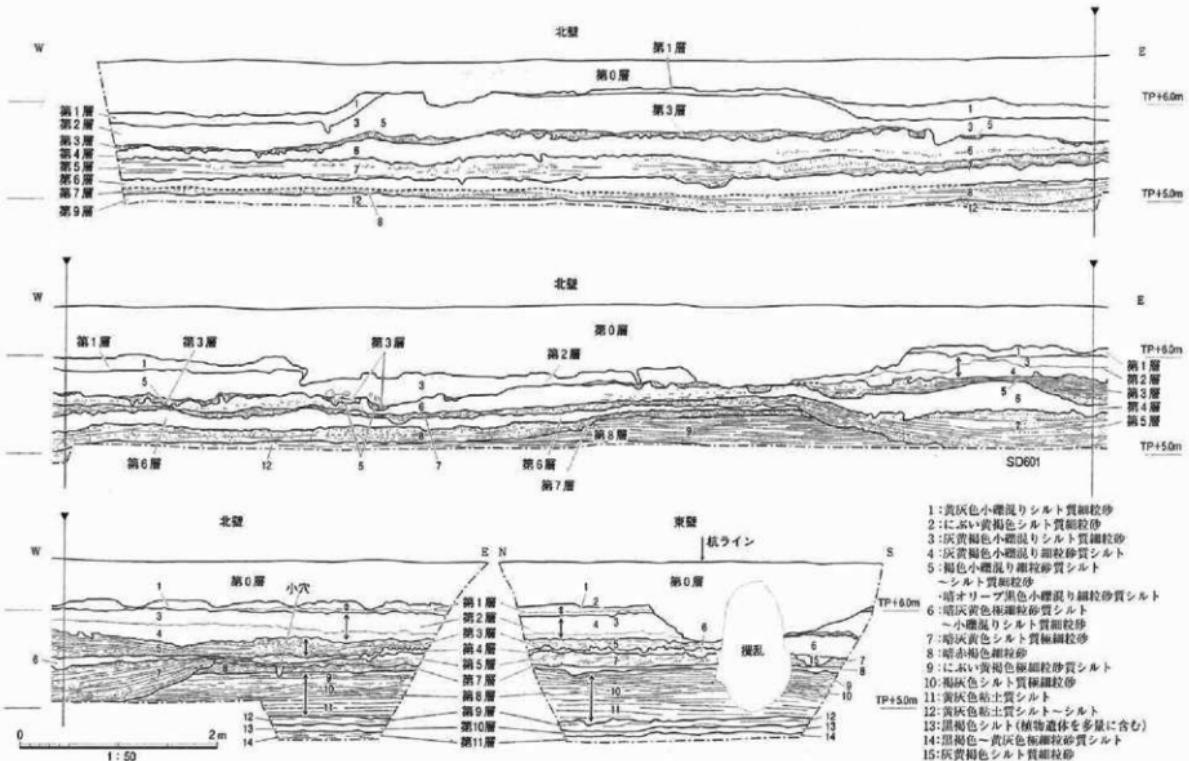


図4 北壁・東壁断面実測図

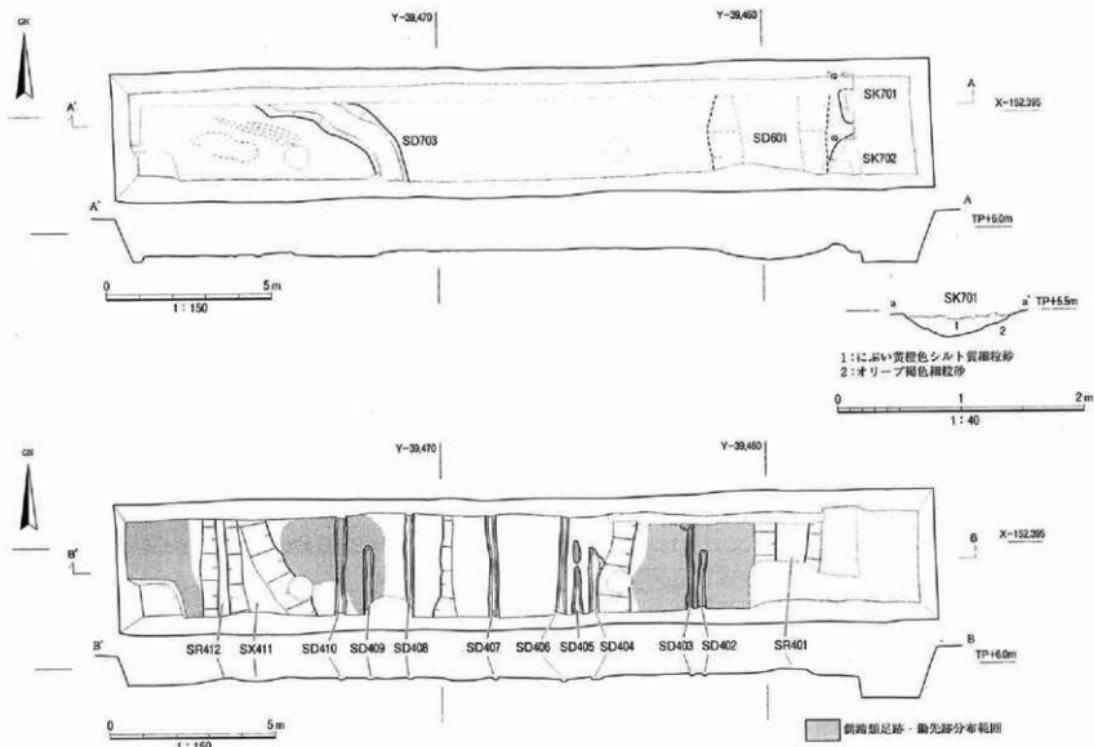


図5 第7層上面遺構平面・SK701断面(上)および第4層上面遺構平面(下)実測図

第9層：黄灰色粘土質シルト～シルトからなる水成層で、層厚は30cm前後ある。

第10層：黒褐色シルト層で、層厚は約10cmある。落葉樹の葉や植物遺体を多量に含む。暗色化しているが、水つきの地層である。上面の標高はTP+4.9m前後で、ほぼ水平に堆積している。

第11層：黒褐色～黄灰色極細粒砂質シルト層で、層厚は10cm以上ある。やや暗色化しており、上面の標高はTP+4.8m前後ある。

## ii) 遺構と遺物

### a. 第7層上面の遺構

調査区の東部で土壌・溝・小穴を検出した(図5)。

SK701 調査区の東部に位置する東西0.5m以上、南北0.8m以上、深さは検出面から0.3mの土壌である。遺構の東および北側を攪乱されており、平面形態は明らかでない(図5)。埋土は第7層の偽礫を多く含むにぶい黄橙色シルト質細粒砂で、飛鳥時代の土師器1が出土した。

1は口径12.6cm、器高約3cmの土師器杯Cである。器体の内面には正放射暗文が施されており、色調はにぶい橙色で、焼きはややあまい(図6)。

7世紀中葉に属するものであろう。

SK702 SK701の南側に位置する深さ0.3m前後の土壌で、埋土は第7層の偽礫を含む暗赤褐色細粒砂である。平面形は遺構の西側をSD601に切られており明らかでない。遺物は出土しなかった。

SD703 調査区西部に位置する幅2m前後、深さ0.1～0.2mの浅い溝で、南から西に屈曲している(図5)。溝内には黄褐～オリーブ褐色極細粒砂質シルトが堆積しており、水の流れはラミナの方向からみて南から西方向と考えられる。小さな流木が出土した以外に遺物は見られなかった。

小穴 調査区の東部、北壁際で検出した径0.1m、深さ0.2mの小穴である。埋土は暗褐色シルト質極細粒砂で、柱痕跡は確認されなかった。大きさからみて、杭の跡かもしれない(図4)。

### b. 第4層上面の遺構

調査区のはば全域で耕作に関わる溝SD402～410や、畦畔SR401・412を検出した(図5)。

SR401 調査区の東部に位置する上幅0.6m、下幅1.3m、高さ0.2mの南北方向の畦畔である。方位が座標北に近いことや規模からみて、基幹になる畦畔と考えられる。当畦畔と西方にある畦畔SR412間の距離は17.5mある。

SR412 調査区の西部に位置する上幅0.3m、下幅1.2m、高さ0.1m前後の南北方向の畦畔である。当畦畔を境に西側の水田面の標高は東側の水田面より幾分低くなる。

SD403 幅0.2m前後、深さ0.1m前後の南北方向の浅い溝である。溝内には酸化鉄を多量に含む褐色細粒砂が堆積していた。本溝の東および西側には溝と同方位の鉄跡や偶蹄目の足跡群があった。

SD406 SD403の西側1.8m地点から西側約6m間は浅く窪んでおり、ここに位置する幅0.2mの南北方向の浅い溝である。埋土はSD403と変わらない。

SD408 幅0.3m、深さ0.1m前後の南北方向の溝である。溝内には酸化鉄を多く含む褐色シルト質

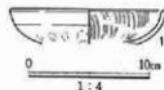


図6 出土遺物実測図  
SK701(1)

極細粒砂が堆積していた。本溝の西側にあるSD409・410も規模や埋土が良く似た溝であり、この周辺には南北方向の鉄跡や偶蹄目足跡群があった。

以上の溝は深さや埋土および一部の溝底で確認された鉄跡からみて、第4層を作土とする耕作に伴う溝と考えられた。遺物は特に出土しなかった。

SX411 SR412の東側にある南北方向の深さ0.1mの浅い溝状の落ち込みである。埋土は上述した南北方向の溝と変わらない。

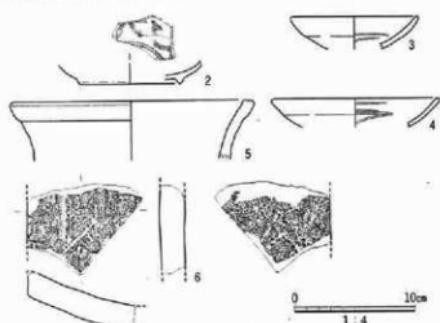


図7 出土遺物実面図  
第2層(2)、第4層(3・4・6)、第6層(5)

#### c. 各層出土遺物

2は第2層から出土した肥前磁器染付皿である。内底面に2条の輪線と草花文を描く。18世紀前半頃に属するものである(図7)。3・4・6は第4層から出土した遺物である。3は口径約10cmの瓦器碗で、内底面に暗文がある。4は口径13.7cmの瓦器碗で、内面にはやや粗い暗文が施されている。6は平瓦の破片で、凹面はヘラによるナデ調整、凸面には難れ砂が見られる。色調は二次的な火を受けたにぶい橙色を呈している。瓦器碗2・

3とともに室町時代に属するものである。5は第6層から出土した須恵器壺の口頭部である。わずかに開く口縁部の上端が浅く凹む。色調は灰色で、焼成はやや甘い。平安時代に属するものであろう。

### 3)まとめ

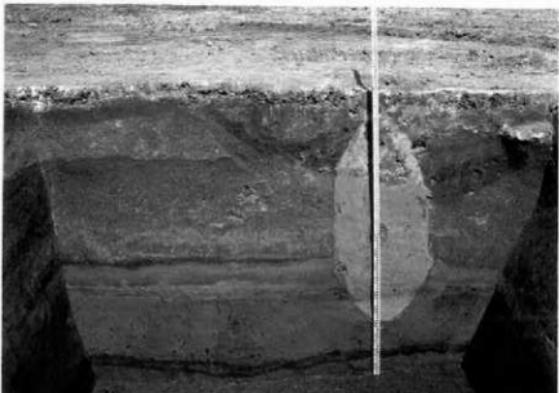
今回の調査では飛鳥時代の遺構および室町～江戸時代の水田跡を検出することができた。なかでも飛鳥時代の遺構は古墳時代以前と推定される河成層の上に當まれており、上層水田跡の作土中からも飛鳥時代の土器片が出土したことから、調査地周辺にも当該期の遺構が拡がっているものと予想される。調査地の南約120mに位置する加美南部小学校の校庭で実施されたKM05-1次調査でも飛鳥時代の柱穴群や土器埋納小穴などが検出されており、ここから調査地にかけて飛鳥時代の居住域が拡がっている可能性が高い。今後周辺での調査が進めば飛鳥時代の居住域の具体的な状況をはじめ、田園地帯になる中世以降の景観についても明らかになるものと思われる。

### 参考文献

大阪市文化財協会2003、「加美遺跡発掘調査報告」I

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「加美遺跡発掘調査(KM05-1)報告書」「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」(2005)

東壁断面  
(西から)



第4層上面(水田面)の  
検出状況  
(西から)



第4層上面(水田面)の  
鉗先および偶蹄目足跡  
(南から)



調査区東北部北壁断面  
および第7層上面の  
遺構検出状況  
(西南から)



第7層上面  
検出遺構全景  
(東から)



第7層上面検出土壙  
SK701西壁断面  
(東から)



---

平成 22 年度 大阪市内埋蔵文化財  
包 蔽 地 発 掘 調 査 報 告 書

発行日 平成 24 年 3 月 31 日

発 行 大阪市教育委員会  
(財大阪市博物館協会大阪文化財研究所)

編 集 大阪市教育委員会文化財保護担当  
(大阪市北区中之島 1-3-20)

印 刷 株式会社 京阪工技社

---